

---

# フェアリーテイル～虹の滅竜魔導士～

冒険ファンタジー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェアリーテイル〜虹の滅竜魔導士〜

### 【Nコード】

N2434R

### 【作者名】

冒険ファンタジー

### 【あらすじ】

死んだ少女ロココ愛好家の青年がフェアリーテイルの世界に飛ばされて、滅竜魔法とフラグメントと悪魔の実の力で大暴れ！する物語です。駄文です。

## オリ主紹介（前書き）

能力は本編が進むにつれて、追記して行きます。  
後、ニードレスを見てたら思い付いた。

## オリ主紹介

名前

ギアセルシア・ニードレス

愛称

ギアス

年齢

?歳(年齢不詳)

好きな物

仲間、ギルド、聖書、女の子(主に幼女)、男の娘

嫌いな物

女の子(主に幼女と男の娘)を傷付ける者、悪党、外道

容姿

ニードレスのアダム・ブレイド(髪は腰辺りまで伸ばしている)  
額に白毫、サングラス着用、首はチョーカーが無く、十字架のペン  
ダントを付けている

服装

黒いコートと黒ズボン

二つ名

フェアリージャッジメント  
妖精審判者

トドメがいつも「判決・・・死刑!!」と言っているから。

フェアリーテイルのマーク

左腕の前腕部分。（ルフィ達がアラバスタでマークを付けた場所と同じ）  
色は灰色。

強さ

ニードレスのブレイド、ワンピースのルフィとゾロ。

能力

虹の滅竜魔法

分かりやすく例えると

赤、火属性

橙、土属性

黄、雷属性

緑、風属性

青、水属性

藍、鉄属性

紫、闇属性

全部、光属性

虹竜剣、簡単に言えば、光属性で創った剣（天叢雲剣あまのむらくもみたいな光の剣）。

虹竜の剣角、全身に各属性を纏い、勢いをつけて体当たりを繰り返す。相手を打ち上げて吹き飛ばす事も可能。

虹竜の聖拳、拳に光属性を纏って殴りつける。遠距離攻撃用は、ナツの火竜の煌炎っぱくなる。

虹竜鉄棍、ガジルの鉄竜棍の様な感じで攻撃する。

虹竜の鉤爪、各属性を脚に纏って攻撃する。

閃光虹竜拳、簡単に言えば、拳に光を纏ったゴムゴムの暴風雨ストームで、トドメがゴムゴムの回転銃ライフル。

ドラゴンフォース

## 滅竜奥義

閃光玫天劍、虹竜剣をゾロの阿修羅状態で光速（フラグメント、速<sup>スピード</sup>で）移動をして、相手を切り刻む。

“極光型”閃光零虹爆、アークライトのビックバンを右腕に溜めた後、相手を殴り上げ、急いで殴り上げた相手を飛んで追い抜いた後、虹の滅竜魔法とビックバンを合わせ、相手に殴り付けた後、地面に向けて突進し、地面に激突した瞬間、ビックバンと同格の爆発を引き起こす。

閃光巨人拳、ギアスが思い付きで発動した技。ただ単にギア？で膨らました腕で虹竜の聖拳を行っただけ。

## フラグメント

天使からの特典で、ニードレスの能力全て使える（本編に登場するニードレスキャラの能力は使えない）

ZERO、相手の能力や魔法を見たり、自身の額にある白毫で直接相手の額に付ける事によって、相手の能力や魔法を覚える。（めだかボツクスの完成並<sup>ジエンド</sup>）

ヘルスイヤ<sup>ヘルスイヤ</sup>、遠くの物音を鮮明に聞き取ることができる。

変身、全身と服を変化させて、有機無機問わず様々なものに変身できる。傷口を変化させて塞ぐ事も可能。ただしカロリーを多く消費する為、回数は限られている。

重力作成、自在に重力を操作することが可能。ただし隙が大きい。

特殊磁界、自身を中心とした半径100m以内のあらゆる認識物を自在に吸い寄せ・反発させる事が出来る。能力の原理は実際の磁力と同一だが、本来磁力が通用しない物質にも適用できる。

技術過剰、プロの技師以上の機械工学に長けており、ガラクタから自分の想像した物を溶接無しで製造できる。

岩石崩、砕かれても瞬時に再生する岩石の鎧を身にまとう。換装として使用。

透視、壁の奥まで見通すことが出来る。見えない何かを見る事が出

来る（オリジナル）。気配を消しても・透明になっても・擬態しても直ぐに見分ける様になる（オリジナル）。

第二の視覚、見えざる者を支配する力があり、亡霊などを操ることで目に見えない攻撃を行う。舌に目があり、そこから霊体を吸収する（オリジナル）。周りから見たら霊体を食べていると思われる（オリジナル）。

扉を開く者、無制限に死者を呼び出すことができる。

分析、敵の能力や身体データを見抜く事が出来る。

風、空気の流れを操り、風を起こす。

気功方士、体内から蓮の華を出すことで気を操る。怪我の治療は気の力による副産物。魔力が切れたらこっちを使用。

後から覚えたフラグメント（フェアリーテイルの世界にいるニードレスキャラのフラグメント（魔法だが、フラグメント扱いなので、魔力が無くても発動可能））

鋼鉄斬糸、糸を自由に操る事が出来る。用途に応じて太さ、硬さ等を調節する事も可能。

加速時は反射神経も加速度相応のものになるらしく、音速を超越しながらも極めて精密な動作が可能。

香、敵の脳や神経を麻痺させる香りを出すことができる。香りは体内ホルモンの調合・調節で無限定に調整可能。

炎、空気中の燃素を自在に操り炎を起こすことができる。

第四波動、周囲の熱エネルギーを吸収し、増幅して放出する能力。その気になれば、第五波動を撃つ事も可能。

バミューダアスポート、生命体以外の物体を透明にする能力。

圧力、空気に圧力を加え、操る能力。空気を圧縮して放つことで相手を吹き飛ばしたり、空気の壁を作ることができる。最大まで空気を圧縮すれば、爆弾レベルの風圧を生み出すことができる。周囲に

異常気圧を加えることで、周囲の人間に高山病や潜水病のような症状を引き起こさせることも可能。

レインメイカー  
雨乞い、周辺の気象を雨にするほか、大気中の水分を集めて好きな形に固形化させて攻撃、防御、身体の洗浄などの用途に使用できる能力を持つ。水分を粘性にしたの相手の束縛や、足元に練成した水の上を滑走することによる高速移動も可能。魔力が切れたらこつちを使用。

アグニッシュウツタス マイクローエーブ  
炎神の息吹、超分子振動を発生させる能力。

ボジティブフィゼスバック  
PF・ZERO、自分の受けた技や能力を増幅して返すことが可能。ZEROを遥かに上回る威力を発揮する。

サイコネシス  
念動力、全ての物体（人間も含む）を動かしたり、浮遊させる事が出来る。

後から覚えた魔法

ラクサスの雷の滅竜魔法

ミラジエーンテイクオーバーの接收・サタンソウル

エルザの換装

ナツの火の滅竜魔法

ハッピーエーラの翼

グレイの造形魔法

リサーナの接收・アニマルソウル

フェアリーテイルモブキャラの魔法

ルーシイの星霊魔法

エリゴールの風魔法

カゲヤマの魔法・解除魔法

マスター・マカロフの魔法・巨人化

シエリーにんぎょつげきの人形撃

ユウカの波動

ザルティ（ウルティア）の時のアーク

ガジルの鉄の滅竜魔法



エレメント4の魔法

マスター・ジヨゼの魔法

エルフマンの接収・ビーストソウル

ミリアーナの魔法

斑鳩の剣術

ジェラールの天体魔法

サテンの熱気眼

ヒートアイズ  
フラッシュコアイズ

ウテンの閃光眼

レーザーの体感時間低下魔法

ウエンディの天の滅竜魔法

コブラの毒の滅竜魔法と心を聴く魔法

悪魔の実（パラミシアのみ）

天使からの特典で、どんな能力でも十個までなら付けられる。海に落ちてでも大丈夫。

ゴムゴムの実、ゴム人間、全身がゴムになる。その気になれば、ギア2とギア3が出せる。

カベカベの実、オリジナル、壁人間（勝手に命名）、あらゆる壁を作り出したり、心に壁を作って心を読ませない様にする事も可能。バクバクの実、大食人間（勝手に命名）、いかなる物もおいしく食べることができる。食べた物を自分の体の一部にしたり、変形・融合させて取り出すことも可能。

ドアドアの実、ドア人間、触れた場所をドアにする事が出来る。

ホルホルの実、ホルモン人間、ホルモンを操り、生体ホルモンを指先から注入し、対象の生物を変化させることができる。性別・色素・体温・成長・テンション・治癒力などを自在に変えられる。自身自身に投与することも可能。一部のホルモンには強烈な副作用やリスクがある。

ノロノロの実、ノロマ人間、ビームに触れたもの全て30秒間遅くなる。

ミラミラの実、オリジナル、鏡人間（勝手に命名）、鏡の壁を作ったり、全身鏡になって、敵の魔法（主に光線的な魔法は効果的）を全て跳ね返す。

タメタメの実、オリジナル、蓄え人間（勝手に命名）、あらゆる力やエネルギーを溜める事が出来る。

トシトシの実、オリジナル、年齢人間（勝手に命名）、自分、敵味方問わず、年齢を操れる。（ジュエリー・ボニーの様な能力）

カエカエの実、オリジナル、変更人間（勝手に命名）、魔力を込めれば何でも変えたり、変更したりできる能力。

#### 決め台詞

「判決・・・死刑!!」（敵を半殺し以上全殺し未満）

その際、腕を大きく十字に振る（聖職者がよく指で胸元に十字を描く様に）。

「判決」で横線、「死刑」で縦線に振り、十字にする。

他にも「成敗!!」（気絶以上半殺し以下）と「ケンカ両成敗!!」（気絶）等がある。

ちなみに「極刑」は、相手が全殺し又は消滅した時に使用。

ギアスの相棒の猫

名前

ルシア

年齢

6歳

好きな物

ギアス、野菜

嫌いな物

ギアスのロリコン癖、悪党

容姿

簡単に言えば、赤いハッピー

フェアリーテイルのマーク

背中

能力

ハッピーと同じく翼<sup>エーラ</sup>

口癖

返事は「らう!」「

驚いてる時は「ぬあー!?!」

## オリ主紹介（後書き）

技名では、ニードレスとワンピースのはそのまま出しますが、一部オリジナルを使います。

## プロローグ（前書き）

新たな冒険が、今始まる。

てか、出だしが他のシリーズと変わらない気がしてきた。

## プロローグ

「あれ？ここどこだ？」

俺は今、何も無い空間に居た。

「ああ、この手の展開は死んだ後の展開だな」

「物分かりが良いんですね君は」

「ん、誰だ？……はっ!？」

そこに立っていたのは、12歳くらいの羽を生やした可愛らしい少女が浮かんでいた。

正直、この少女に心惹かれてしまった。

「はぁ〜い、初めまして。私は天使の「ドストラー……」  
「イク!!!」ええっ!？」

その青年は今、目がハートになってて、口から大量のコインが出るほど興奮していた。

「なっなんて美人なんだ。こんな、この世のモノとは思えない程の美人な人がいたなんて、最っこ……です!」

「びっ美人だなんて、言われたの初めてです。へう〜」

くう〜その仕草、ドキユ〜〜〜ン。

鼻血を出しながら悶える青年。

「どどどど、どうしたんですか!？」

「なっ何でもない」

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫」

「なら良いんですけど。ではまず、何故君がここに居るのかと言うと…君は死んじやったからなの！」

「やっぱな」

うすうす気付いていたけどね。

「随分冷静ですね？普通だったら発狂しちゃうかもしれないのに」

「別にもう死んじやったからとやかく言ってもしょうがないしな」

「それが、私の所為で死んじやったとしても？」

「そうなのか？美女に殺されるなら、俺も本望かな」

「えっ、そう返すの！？だって私のミスで、君を殺しちゃったんだよ！？なんでそんなに冷静なの！？」

「言つたる。君みたいな美女に殺されるなら、俺も本望だと」

「君ってもしかしくなくても、ロリコンでしょ」

「ロリコンじゃない。年下っぽくて、背も胸も小さい子が好みだ！」

ロリコンではなく、あくまで年下の低めの少女が好みだと主張する青年。

「そうゆうのを、一般的にロリコンと呼ぶんだよ」

「……………」

なんとなく黙ってしまった。

「話を戻すよ？君は私のミスで早くに死んじやったから、別の世界で生きて貰う事にしたんだよ」

「別の世界？」

これはまたお約束な展開。

「では…はい。この矢を、あの回転している的に投げてね」  
「ダーツ…かこれ??」

そして、ヒュンと投げて回転している的に当たった。

「はい、決まりました」

「FT?」

「え〜と…妖精の尻尾フェアリーテイルに決まりました!」

フェアリーテイル?確か滅竜魔法とか使っているファンタジーアドベンチャー物だった様な。

「能力は二種類他の作品から選べます。どうぞ」

またダーツかい。

また投げると、今度はNLとOPが出た。

「はい、ニードレスとワンピースに決まりました

「ワンピースはともかく、ニードレスって?」

「ニードレスは、アダム・ブレイドの容姿と、フラグメントという特殊な能力一部使える様にしてあげるね」

「一部なのか?」

「まあ、どうせならニードレスキャラも出しておくから、そこから覚えればいいよ」

「覚える?」

「アダム・ブレイドのフラグメント、ZERO(覚える)で相手の魔法を覚えられるよ」



「分かった。それでワンピースは？」

「ワンピースは、ルフィの戦闘力とゾロの剣術と悪魔の実（超人系）を十個程付けとくね」

「そりやすげえな。でも、何で悪魔の実が十個までなんだ？」

「フラグメントがある分、制限付けました。後、泳げるようにしたから」

「それは良かった」

泳げなかったら意味無いしな。

「悪魔の実は今決めなきゃいけないのか？」

「いいえ、状況に応じて、これがいいなと思ったら心の中で思ってくださいね。当然、君のオリジナルの悪魔の実でも良いよ」

オリジナルか。後で考えるなら好都合だ。

「だったらまず、ゴム人間にしてくれ！」

「はい分かりました」

体が光った後、腕を伸ばしてみたら本当に伸びた。

「それでは、見た目をアダム・ブレイドにしてっつと」

「だったら、長髪にしてくれるか？」

「別に構いませんけど？なんで？」

「だって、長髪キャラがかっこいいもん」

「…まあ良いですけど」

見た目がアダム・ブレイド（長髪版）になった。  
しかも14歳の少年サイズ。

「つておい！？なんで子供なんだ！？」

「原作から6年程前からスタートですので」

「なるほどね」

くそう…この姿じゃ、目の前の美女が普通に見えちまう。

「つてそうだ。武器とかはどうすんだ？」

「換装が使える様になったら、武器屋に行って買って来たり、自分で作ったりしてね。ちなみに、ワンピースとニードレスの武器が手に入ります様にしました」

「至れり尽くせりだな」

さて、そろそろかな。あつそうだ、この事も聞いておこう。

「フェアリーテイルの能力はあるのか？」

「はいもちろん。虹の滅竜ドラゴンスレイヤー魔導士です」

「ドラゴンスレイヤーだって！？いいのかそこまでして！？」

「はい。ちなみに、虹の属性は火・土・雷・風・水・鉄・闇・光の八種類です」

「ほとんど全部じゃん。本当にいいのか、こんなに能力持つて？」

「構いませんよ」

「…分かった」

「後、おまけとしてこの子もプレゼントします」

すると、羽の生えた赤い猫が現れた。まだ赤ん坊みたいだ。

「これってまさか！？」

「はい、ハッピーと同じ存在です」

「まあいいや」

「それから、物語を省略して、ギルド・フェアリーテイルの前に立

つ様にするね」

「おいおい、ドラゴンスレイヤーなら、ドラゴンに育てられなくちゃ駄目なんじゃ？」

「ご安心を、その時の記憶を植え付けときますので、自然にドラゴンに育てられたと言えるよ」

なんだそのご都合主義は…虹の竜の事も聞いておこう。

「なあ、俺の育ての親になる虹の竜について教えてくれないか？」

「虹竜、プリズレイヤー！」

プリズレイヤーか…

「それでは、もうよろしいでしょうか？」

「ああ、あっそうだ！新しい俺の名前、付けてくれないか？」

「新しい名前ですか？そうですね…この中から選んでください」

すると、細かく名前がびっしりと書かれたボードが現れた。

「うーん、色々あるなあ。んっ！？決めた。これにする」

「……ギアセルシア、ですね」

「ああ、今から俺は、ギアセルシア・ニードレスだ！」

「ニードレス？」

「だって、今の俺の体、ニードレスキャラだろ？」

「なるほど」

「そしてこいつは、俺の名を取って、ルシアだ！」

羽の生えた赤い猫は、ルシアと命名。

「それじゃあギアセルシアさん、名残惜しいけど、お別れです。最

後に原作のフェアリーテイルの情報を入れて置きますね」

「何から何までありがとな。お礼として、抱きしめt「不可！」あれ……!!?」

抱きしめようとしたら、目の前に不可と出され、強制的に飛ばされた。

さあ、無敵の能力を持ったロリコン魔導士がフェアリーテイルの世界で大暴れ。

「だからロリコンじゃない！年下で背が低めの……」

次回に続く。

「ておい！まだ最後まで言い終わっ……t」

## プロローグ（後書き）

ブレイドにするんなら、ロリコンにしないとな。（作者の勝手な意見）

入った後いきなり決闘（前書き）

フェアリーテイルの世界に着いたばかりのギアスです。

## 入った後いきなり決闘

マグノリア、ギルド前

「ここがフェアリーテイルか…」

見た目14歳くらいの少年が、ギルド・フェアリーテイルの前に居た。

あの美女（幼女）の記憶操作によると、一年ほど前までは虹竜プリズレイヤーに育てられていたが、突然行方不明になってしまい、しばらく途方に暮れていたが、旅の神父に拾われて、ある教会で半年程に住んでいた。

だが、買い出しの帰りに、教会は倒壊していた。他の孤児達も神父も全員殺されていた。どうやら賊が襲ってきたらしく、死んだ孤児達を踏み付けて笑っていた奴らを前にして、激しく怒った。

そして、ドラゴンスレイヤーとフラグメントとゴムの能力で賊を一掃し、決め台詞「判決・・・死刑！！」と叫んだ。

亡くなった皆を埋葬した後、神父様のコートを羽織って、あての無い旅をする事となった。

途中、賊退治とか人助け等をしていた。そんな時、でかい卵を見つけて育ててみたら、ルシアが誕生した。

しばらく経ってマグノリアに着いた後、仕事探しをしようと聞いてみたら、「だったら、フェアリーテイルに入ってみたら？」と勧められて、今フェアリーテイルの前に立っている。

「なるほど」

「どうしたのギアス？」

「ん？ああ、なんでもないよルシア」

「だったら良いんだけどね」

今俺の肩に居る猫、ルシアに心配をかけちゃったな。

えっギアス？ああ、ルシアが俺の名前少し長いからって愛称を付けてくれた。

「今日からここで仕事をするから、少し緊張してんのかな？」

「ギアスにそんな普通な部分があったんだ？」

「悪かったな」

そんなこんなで、フェアリーテイルの扉を開いた。

がやがやと賑やかな雰囲気だったのが第一印象だった。

すると周りから「ん？見ねえ顔だな」「今度はまともそくな奴が来たか？」「肩に乗っている猫かわいい」等が聞こえた。

奥に居る老人に声をかけるギアス。

まあ、マカロフだろうけど。

「すみません、ここはフェアリーテイルですか？」

「そうじゃが、お前さんは？」

「俺ギアセルシアっていいいます、ギアスと呼んでください。貴方は？」

「ワシはこのギルドのマスター、マカロフじゃ」

「マスターでしたか！？」

知ってるけどね。

「ギアス…とか言ったな。うちのギルドに何の様じゃ？」

「面接場所はどこですか？俺、ここに入りたいんですが？」

「なんじゃ入りたかったんか。だったら面接は必要ないぞ。入りた



いとゆう意思があるんなら、拒まんぞ」

「あっありがとうございます」

「で、ギアス：お前さんはどんな魔法を使っんじゃ？」

「はい、虹の滅竜魔法です」

すると、周りが騒然としていた。

「何じゃと！？」

「あいつもドラゴンスレイヤーって事か！？」

「へへ、少しは出来そうだな」

「あの猫かわいいな」

騒がしくなったな。

「虹のと言っておったが、具体的にどうゆう魔法なんじゃ？」

「えっと、こんな感じですよ」

俺は、火・水・土・風を出した後、腕を鉄化して、雷を出し、闇を出し、そして七種類の魔法を混ぜて光を出した。

「なんと！？数種類の魔法を扱えるとは、お主一体：「お前すげな！」「

「うわっ！？何だ？」

そこに現れたのは、桜色の髪をしたわんぱく少年だった。こいつ、ナツか。

「お前もドラゴンスレイヤーか。俺以外で使える奴初めてだ」

「もって事は、君もか？」

「ああ。俺ナツ。ナツ・ドラグニル。お前は？」

「俺、ギアセルシア・ニードレス。ギアスって呼んでくれ」

「ギアスカ。よし、俺と勝負しろ！」

「えっ!？」

いきなり勝負を挑まれたよ。

「まてナツ。折角の新入りなんだ、そうゆうのは後にしろ」

後ろからナツを注意して来たのは、赤い髪の少女エルザだった。  
チクシヨウ、子供のエルザってやつは普通に見える。

「いいじゃねえかエルザ。折角のドラゴンスレイヤーなんだし」  
「いや、意味わかんねえよナツ」

今突っ込んだのは、半裸の少年グレイ。  
やっぱパンツ一丁なんだな。

「なんだとグレイ、俺が馬鹿みてえな言い方だな！」

「なんだ気付いてなかったのか、そう言ったつもりだったんだがな」

「何だとグレイ！」

「やんのかナツ！」

うわ、始まつちゃったよ、しょうもないケンカ。

しょうがない、止めるか。

「やめ「やめんか二人とも!」あっ」

止めようとしたら、エルザが先に止めた。

「マスター、あの三人って、いつもああなんですか？」

「恥ずかしい限りじゃ」

ふと三人の方を見ると、二人は既にエルザによって、沈められていた。

するとそこに、

「エルザ！この前の続きしよ！ぜ、かかってきな！」

白髪でポニーテールの臍をだした女の子が、声をあげてエルザに食いついてきた。

子供のころのミラか、くそつやつぱ普通に見える。

「ミラか、上等だ！」

するんかい！？

「ガチガチ女が！」

「臍出し女が！」

「ブスブス女！」

「ガリガリ女！」

「デブ！」

「ガリガリ！」

レベル低くっ！ナツとグレイがムカつきながら呆れていた。

誰も止める様子が無い所、あの子達が一番強いって事か。しゃーない、今度こそ止めるか。

「ちよつと二人とも、ケンカはやm」「邪魔だ！」「ブフォア！？」

ミラとエルザにぶっ飛ばされるギアス。

「……あーあ……」

周りの連中は、吹っ飛ばされたギアスを見て、いつもの結果だなと思っている。

しかし、ギアスは立ち上がり、

「いい加減にしろ……」

ギアスは、瞬時に二人の所まで行き、強烈なアッパーを繰り出した。

「オメーラアアアアアアツ！！」

「べふっ！？」

二人は、ギアスのアッパーで吹っ飛んだ。それを見ていた周りが啞然としていた。

「判決……ケンカ両成敗！！」

言い放った直後に、二人はテーブルへと落ちた。

「何すんだテメー！」

「何をする貴様！」

復活すんの早っ！

「やかましい！ケンカを止めた後で自分達がケンカしてんじゃねー！」

ギアスが正論を言ったら、周りが「……おお」「……」と言

っていた。

「つか、誰一人として止めようとは思わないのか？」

「うるせー、新入り風情が調子に乗ってんじゃねー！」

「た、確かに、ナツとグレイを止めた後に自分が争っては、何も言えないな」

「っておいエルザ!？」

ミラの方は納得いかない感じだが、エルザの方は反省してるみたいだな。

「ギアス、お前に勝負を挑む！」

「……………へっ!？」

「そりゃいいね。こいつをぶっ飛ばしてから改めて勝負だ、エルザ!」

なんか、雲行が怪しくなってきたな。

「楽しそうだな」

ふと声が聞こえてそっちの方を見たら、金髪でイヤホンを付けて右目に傷がある男がいた。

「俺も混ぜるよ」

「……ラ、ラクサス!?!？」

「お前もか!？」

周りが騒然として、ナツとグレイも驚いていた。

「ラクサス、お前がしゃしゃり出てくるなんて珍しいのう」

「こいつにちょっと興味が湧いてな」

よりによってラクサスも参戦かよ。

「それに、ミラとエルザじゃ物足りなさそうだったしなこいつ」

「「なんだとー!!」」

「えっ!?!」

煽んなよラクサス…

「「勝負だー!!」」

結局こうなるのか…

フェアリーテイル、裏庭、湖のほとり

それで、フェアリーテイルの裏の湖のほとりで勝負する事になった。  
暇なギルドメンバーは、三対一の状況を見ていた。

「てか、三対一かよ」

「あんっ、このぐらい余裕なんだろ」

「正直、お前の实力を知りたいいい機会だからな」

「まっ、俺には勝てねえけどよ」

ミラ、エルザ、ラクサスの順で隙に言ってくれちゃって。

「こうなったら、腹あ決めるか!」

「始めえいつ!?!」

マスターが開始の合図をした。

つか、マスターが率先して合図をしているのか。

「行くぞ!!」

ミラとエルザが挑んで来た。

「ハアアアアアアッ!」

ミラは全身<sup>テイクオーバー</sup>接收でサタンソウルとなり、背中には羽が生えている。

「換装!」

エルザは光に包まれて、光が消えて姿は黒い鎧に羽が生えたような鎧、一撃の威力を増加させる魔法の鎧、黒羽<sup>くれば</sup>の鎧に換装していた。うわー、二人共本気だ。でも、俺だってなあ。

「接收と換装か…へっ、上等!」

手に炎を溜め、突進した。

「せいっ!」

「なんの!」

「ハアアッ!」

「ひょいっ」と

エルザが斬りかかり、ミラがダークネス・ストリームを出して来たが、難なく避けるギアス。

「やるな」

「でも逃げてばかりじゃ勝てねーぞ！」

ギアスは避けながつら、よく観察していた。

「よし、もう少しだ」

「くっ、ちょこまかと、換装！」

エルザはまた光に包まれて、黒羽の鎧から、同時にいくつもの武器を操ることができる鎧、天輪てんりんの鎧に換装していた。

「ハアアッ！」

「うわっ！」

エルザは循環サイクルの剣ソードを繰り出して来た。

ギアスは、身体に当たりそうな所を鉄に変えて、軽傷で済ました。

「隙あり、喰らええ！デモンブラスト！」

ミラは、デモンブラストを放って来た。

「ぐっ！」

デモンブラストを受け止めるギアス。

まあ、闇は効かないけどね。

「トドメだ！」

「！？」

ラクサスの事を忘れていた！？



「レイジングボルト!!」

ギアスの頭上に、強烈な雷が降り注いだ。誰もギアスの負けだと思った。だが、ギアスは立ち上がった。

「（ゴム人間だから雷なんて効かねーよ。でもま、都合がよかったな。おかげで…）」

その時、ギアスの額にある白毫しろごみが光った。

「・・・覚えた!」

「な、立ちやがった!？」

覚えたぜ、三人の能力を。

「行くぜ・・・」

ギアスの体がバチバチし始めた。

「な、まさか!？」

「レイジングボルト!!」

「グアアアアアー!!」

ラクサスの頭上に、強烈な雷が降り注いだ。

「おい、あれってラクサスの魔法だよな!？」

「何でラクサスの魔法を使ったんだ、あの新入り!？」

「ラクサスがやられるなんて、あの新入りすげー!」

ギャラリーが騒いでいた。

「そんじゃ、次行くぜ！」

そういつて、二人の方に向いた。  
そしてギアスは、

「ハアアアツ！」

「何!？」

「まさか!？」

ミラとエルザは驚愕した。

そのはず、ギアスは全身テイクオーバー、サタンソウルになったからだ。

「サタンソウル!？」

「あたしの魔法まで!？」

「それだけじゃないぜ！」

「えっ!？」

「まさか、今度は私の!？」

ギアスの両手から、光っている剣が出て来た。

えっ、換装覚えたばかりだからって、この剣は俺の魔法で精製した剣だ。

簡単に言えば、天叢雲剣あまのむらぐせみたいな光の剣を、ちゃんとした形にした剣だ。

「ホントに、換装した!？」

「どうなってんだ!？あいつの魔法は!？」

「さーらっしやー、鷹波！」  
「「きやあああ!?!」」

斬撃の波を発生させて、二人を吹き飛ばした。ゾロの二刀流の技だ。さて、そろそろ決めるか。

「判決・・・成敗!!」

ギアスは、光の剣を十字に切りながら言った。

周りが「「「「「「オオオオオツ!!」「」「」「」と叫んだ。

「エルザとミラを、倒しやがった!?!」

「姉ちゃんが負けた!?!」

「嘘だろ、あの新入り強えーぞ!?!」

「すごいなギアス、俺と勝負しろー!」

「やめとけナツ、あの三人が挑んで負けたんだ。お前が勝てる訳ないだろ」

「んだと!やってみなきゃわかんねーだろーが!」

周りが段々うるさくなってきたな。

「ま、まいりました」

エルザは降参し始めた。ミラの方は気絶してるな(変身は解けてる)。

「まだまだ…俺はまだ…戦える…」

「ラクサス、まだ立つのか!?!」

「やめとけよ。その状態じゃ無理だ」

「るせえ、俺は最強なんだ。新入りに、なめられて…たまるかアー」



新しい世界で、こんなに暖かい思いをしたのは初めてだなと思った。

## 入った後いきなり決闘（後書き）

初登場の悪魔の実

ゴムゴムの実

覚えた魔法

ラクサスの雷の滅竜魔法

ミラジエーンレイクオーバーの接收・サタンソウル

エルザの換装

ちょっと伝わりづらいと思いますが、出来れば気にしないで下さい。  
今回は、一気に原作に進もうと思います。

あと、ニードレスの最初の相手が出てきます。

## それから原作へ（前書き）

原作が始まって、とある闇ギルド討伐に向かったギアス。これから向かう闇ギルドのリーダーがニードレスキャラになります。

それから原作へ

闇ギルド前

あれから6年が経った。

色々あったが、まあ今の俺は原作ニードレスのアダム・ブレイドにそっくりな姿に（髪は長いけど）成長した。

そして俺は今じゃS級魔導士になって、フェアリーテイル最強（の男）候補になる程の実力者になった。

そしてなにより、ようやく少女達が美人に見える様になって来た、長かった。

今回のクエストは、闇ギルドの蜘蛛達の網スパイダース ネットの討伐。そして今、奴等の根城の前に立っている。

「ここだね。スパイダースネットのアジトは」

「ああ、その筈だ」

今いるのは俺の相棒、猫のルシアだ。

まあ紹介はこれくらいにしと「酷いよ!?!」、目の前の問題を片付かねえとな。

「んじゃ、いつちよ、おっ始めつか。虹竜にじりゅうの咆哮ほろい!」

滅竜魔法、ドラゴンのブレスを放った。

「「「「うわーーーーー!?!」」」」

スパイダースネットの兵達を吹き飛ばした。



「な、何者だ!？」

「フェアリーテイルだ!」

「フェアリーテイルだとお!？」

闇ギルド内が騒然としていた。  
すると奥から、誰か出て来た。

「フッフッフツ、イキの良い侵入者だ。そうゆう奴ほど、切り刻みがいがあるもんだ!」

おいおい、ニードレス最初のやられキャラの…

「俺の名はカフカ、斬糸のカフカ様だ!」

やっぱりカフカか。しかし、

「自分に様付けしてる奴程、雑魚いもんは無いな」

「……! ほほう、このカフカ様を挑発しているのか?」

「無駄に耐えるより、吠えた方が扱いやすいんだがな」

「面白い、貴様を切り刻んでやる!」

「御託はもういい、さあ…お前の能力を見せてみる!」

「なによっ!？」

カフカは、袖から多くの糸を出した。

「喰らえ、カンダタストリンゲ鋼鉄斬糸!」

ギアスの体に纏わり付き、締め付けられた瞬間、血が噴き出した。



グウ！」

ギアス目掛けて迫ってくる糸。  
だが、ギアスには届かなかった。  
いや、届く直前で切れたからだ。

「また切った！」

「な、何故だ！？絶対に切れない筈の私の糸を、またしても！？」  
「糸を切る時はなあ、同じ糸を何本か絡めて引っ張ればいいんだよ  
！」

「（くうっ、私の糸同士絡ませて、切断したとでも言うつもりか！  
？こいつ、操作系の魔法の使い手か？）いいだろう。ならば！」

突然カフカは高く飛び、

「これだけの糸を見切ってみるがいい！喰らえ、テンペスト・スレ  
ツド！！！」

カフカの背中から無数の糸を放ち、ギアスの方へと向かって行った。  
そしてギアスに当たり、壁に激突するまで吹っ飛んだ。

「ギアスー！？」

「ハハハハッ、どうだ。それだけの斬糸を喰らって生きていられる  
かあ！」

煙がまっついている中、うつすらと立っている者がいた。

「ギアス！」

「チッ、しぶとい奴だ」

すると、ギアスの額にある白毫が光った。

「・・・覚えた！」

「なっ？」

「ギアスの勝ちだね！」

そしてギアスは高く飛び上がった。

「こっつか？」

ギアスの背中から無数の糸が放たれ、カフカの方へと向かって行った。

「！！？まさか…そんな事が！？貴様はまさか、私の魔法を…！？」

「その通りだぁー！」

「それがギアスの魔法、敵の魔法・能力を覚える魔法、すなわち、<sup>ロスト</sup>失われた魔法のコピー魔法！」

ZEROのフラグメントの事を、ロストマジックだと思っているので、その方が都合が良かったからそうゆう事にした。そして、今まさに決着が付く瞬間だった。

「テンペスト・スレッド！！」

「ぐああああああああっっ！！？」

無数の糸がカフカを襲い、吹っ飛んだ。

「（そうか…こいつは、私の糸を操作したのではない！？私の技に同じ技をぶつけ、相殺していたのだ！？ロストマジックの、コピー魔法。こいつは、一体…）」



三日後、マグノリア

「やっと帰って来たね。ギアス」

「ああ、とつとと帰って、新しい武器とか聖書とか少女とか幼女とかねえか見てえしな」

「後半ふしだらだけどね」

冷めた目で見ないでくれルシア。

「おやつ、神父様じゃないか。こんにちは」

「ああ、お婆さんこんにちは」

何故俺が神父と呼ばれるのは、カルディア大聖堂に住んでいて、たまにそこで、街の人を懺悔室で相談に乗ったりしている事からそう呼ばれるようになったらしい。

「ギルドのお仕事って大変でしょうに」

「それ程でも無いですよ」

「また相談に乗って貰うよ」

「はいはい、それじゃお婆さんまた」

「らう！」

お婆さんと別れた俺達はギルドの方に戻った。

その途中、偶然デロドロンドリンクがあったので大量に買い溜めして、別空間にストックした。

そんな時、デカイ角を持った鎧の女性が見えた。

そうか、もう原作か。

「ねえギアス、あれエルザじゃない？」  
「ああ、そうだな」

昔のエルザの方が可愛かったな。

「エルザ」

「ん？ああるシア、それにギアスじゃないか。久しぶりだな、約一月ぶりか」

「そんなくらいか、んで…なんだそのデカイ角は？」

「討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと飾りを施してな」  
「そうか」

さすがは、妖精女王<sup>テイターニア</sup>、フェアリーテイル最強の女は伊達じゃないな。

「それよりギアス！」

「何だエルザ？」

「お前この間、闇ギルドを討伐する際、山ごと吹き飛ばしたとか？」

「あいつら、俺らの悪口を言ってきたからムシャクシャしてやったからな」

「お前な、少しは加減しろ」

そんなこんなで、ギルドの方に戻っていく俺達。

あれ？ロキが一瞬いた様な？

それから原作へ（後書き）

初登場の悪魔の実

カベカベの実

覚えたフラグメント

カンダタストリング  
鋼鉄斬糸

いよ初登場の滅竜魔法

虹竜の咆哮ほうこう

いよ次回は原作、鉄の森、アイゼンヴァルト編、スタートです。



## 鎧の魔導士（前書き）

これからは原作の題名を使っていきます（オリジナルな題名以外）。

## 鎧の魔導士

フェアリーテイル、ルーシィサイド

私ルーシィ、フェアリーテイルには入ったばかりの新人です。

こう見えて、星霊魔導士よ。

自己紹介はこれくらいにして、今月の家賃危ないから仕事探さない  
と。

すぐそこで、<sup>サラマンドラ</sup>火竜と呼ばれてるナツとパンツ一丁になってるグレイ

が、いつもの様にケンカしてます。

その時、

「大変だぁー！！」

急にロキが戻って来て慌てていた。

「エルザとギアスが、帰って来た！」

「……………ええええええー！！？」

「……………」

「……………げえっ！！？」

ギルド内が騒然としていたわ。

ナツとグレイも、さっきまでケンカしてたのに、なんかまずいって顔してるわね。

あれ、確か？

「エルザさんとギアセルシアさんて、前にナツが言ってた？」

「今のフェアリーテイルでは、最強の女魔導士と最強の男候補の魔

導士と言っていていいと思うわ」

前にナツとグレイが言った最強の魔導士コンビって言われてるらしいけど、周りがこんなに怖がるなんて、よっぽど怖い人達なのか？

すると、

ドシッドシッドシッドシッ

なんか、随分物騒な足音が聞こえるんですけど。

「エルザだ……」

「エルザの足音だ……」

「エルザが戻ってきてやがった……」

「このリアクション、やっぱりエルザさんで、やっぱりすごい魔導士なんだ！」

すると、私の想像の中で、巨人のイメージが出てしまっていた。

「怖っ！？ってあれ？」

私はふと思った。皆はエルザさんの方を怖がっているけど、ギアセルシアさんの方はあんまり怖がっていないみたいね。

すると、大きな角を持った赤い髪で鎧を着た綺麗な女性と、その後ろから白い長髪の黒コートの怖い男性が来た。

サイドアウト

久々に帰って来たな。

何で皆、俺とエルザが帰ってくるとシーンとしちまうんだ？

「今戻った。マスターは居られるか？」

「き、綺麗！」

「お帰り。マスターは定例会よ」

「そうか」

周りを見渡してみると、ナツとグレイが肩組んでいるな。

この二人、昔っからケンカしてるけど、俺とエルザが来る度、ああやって仲良しアピールしてるよな？

あつ、ルーシイとミラだ。

ルーシイは最近入ったばかりだから、面識無い振りをしないとね。

それにミラ、昔は魔人と恐れられたけど、2年前の事件で、妹のりサーナが亡くなって以来、性格と服装も一変したから驚いた。

凶暴な性格から天然系看板娘になったもんだから尚驚いた。

すると、

「エルザさん…その馬鹿でかいのは何すか？」

「討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと飾りを施してくれてな

…迷惑か？」

「……いえ、滅相ありません！」

相変わらず皆は、エルザが苦手なんだな。

ん？

「ハコベ山の件、もうばれてんじゃない？」

「や、やべ…殺されるかも…」

俺は、ヘルズイヤー地獄耳で大酒呑みのカナと子持ちのマカオの話盗み聞きした。

カナが、マカオが仕事にバルカンにテイクオーバーされた事言ってきた、内心ドキドキしていた。

つかマカオの後ろにいるナブ、お前ドキドキし過ぎ。

「なんか、想像してたのと違う」

あれ、そういえば俺、空気になってない？

「お前達！」

エルザの一言で皆がドキーン！としてしまった。

「旅の途中で噂を聞いた。フェアリーテイルが、また問題ばかり起こしているとな！マスターが許しても、私は許さんぞ！」

ここでいつもの、エルザの説教が始まった。

「カナ、「ぶっ！？」なんという恰好で飲んでいる！ビジター、「はいっ！？」踊りなら外でやれ！ワカバ、「ギクッ！？」吸殻が落ちているぞ！ナブ、「うっ！？」相変わらずリクエストボードの前をうろつろしているだけか？仕事をしろ！マカオ、「んおっ！？」……ふう「何か言えよ！？」」

相変わらずバツサリと言うな、エルザは。

「まったく世話が焼けるな。今日の所は何も言わずにおいてやるっ」  
むちゃくちゃ言ってたんだけどなあ。

「ナツとグレイはいるか？」

「あい」

ハッピーが指を差した方向には、ナツとグレイが肩を組んでいた。

「や…やあエルザ、オレ達…今日も仲よく…やってる…ぜい」

「あゝいゝ」

「ナツがハッピーみたいになった!？」

汗だくで仲良しアピールしなくてもなあ、無理してるのが丸解りだよ。

つか何でいつもナツは、返事をする時って、ハッピーみたいになるんだろう？

てかルーシィ、キレのいいツツコミをするなあ。

「そうか。親友なら時にはケンカもするだろうが、しかし私はそうやって仲良くしている所を見るのが好きだぞ」

「いや、親友って訳じゃ…（小声で言っている）」

「あゝいゝ」

「こんなナツ見た事無いわ!？」

ルーシィがキモツって思うのは多分しょうがない。  
つてミラ、いちいち<sup>ヒカリペン</sup>光筆で宙に描かかなくてもいいって。

「ナツは昔、エルザにケンカをいどんで、ボコボコにされちゃったのよ」

「あのナツが!？」

あれは瞬殺だったな。

「グレイは裸で歩いているところを見つかって、ボッコボコに」

「ロキはエルザを口説こうとして、やっぱりボッコボコ。自業自得だね」

「やっぱそーゆー人…」

その後景、今でも思い出す。

「ちなみに、エルザが居ない時の場合は、二人がケンカしている時に、ギアスが二人をボッコボコにしてたな」

「えっ、あの人も!？」

「そんでもってギアスは、エルザに勝った事もあるから、二人とも頭が上がらなかつたわね」

「そ、そんなに強いんだ、ギアセルシアさんて(やっぱ怖い人…)」

まあそんな事もあつたな。

そしてエルザは、ようやく原作に向けての話を切り出した。

「ナツ、グレイ、それからギアス。頼みたい事がある」

「「えっ!?!」」

「ん?」

「仕事先でやつかいな話を耳にした。本来ならマスターの判断を仰ぐところだが、早期解決が望ましいと私は判断した。三人の力を貸してほしい。付いて来てくれるな?」

「「……」」

ナツとグレイは、顔を合わせた。

「俺は問題ねーぜ!」

俺は、バシツと気合を入れた。

「「どづいう事?」」

「あのエルザがギアス以外を誘うなんて…」

「何事なんだ？」

周りがざわついた。

「出発は明日だ。準備をしておけ」

何故かナツとグレイは睨み合ってた。

そんな時ミラは、

「エルザとギアスとナツとグレイ、今まで想像した事無かったけど

……」

「えっ？」

「これって……フェアリーテイル、最強のチームかも……」

ミラがそう呟いてたのを聞いた。

「よし、そうと決まれば、早速準備しねえとな！」

「らっっ！」

俺とルシアは、準備の為にギルドを後にした。

翌日、マグノリア駅

「さあナツ、今日も元気に頑張るぞ〜」

「あゝいゝ〜」

また二人はこんな状態、エルザがないのに何で二人はこうなんだろっ？



「二人が大人しいから楽でいいわ」

ルーシイは笑顔でご機嫌だった。

つか、抱き抱えてんのって、星霊のニコラ（ルーシイはプルーと名付けている）だよな？あんな微妙な生き物の何処が可愛いんだろうか？

「なんでルーシイが居るの？」

「それはミラさんが、（「あの二人、絶対エルザとギアスが見てない所でケンカするから、止めてあげてね」「げっ、私が！？」）って」

「ギアスがいるからケンカ出来ないもんね」

「ぷっ」

人を抑止力かなんかと思っっているんかい。  
すると、

「すまない、待たせたか？」

やっとエルザが来たよ。

二人とも、更にびくつくくなよ。

「あ、エルザさ…うっ！？」

ずつつつつしりが似合う程の大量の荷物。  
毎回あんなに荷物持っていく必要があるのか？

「荷物多っ！？」

ルーシイって、ニードレスのクルスポジション（突っ込み）だよな。リアクションも似てるし。」

「今日も仲良く行ってみよ〜」

「あゝいゝさ〜」

「ふむ。仲の良い事が一番だ。で君は？」

エルザがようやくルーシイに気付いたので、俺も紹介しとくか。

「そっぴや君、昨日フェアリーテイルに居たよね？」

「し、新人のルーシイです。ミラさんに頼まれて同行する事になりました。よろしくお願いします」

やや緊張気味のルーシイ。

後ろで睨み合っているナツとグレイ。

「私はエルザだ。よろしくな」

「俺はギアセルシアだ。ギアスって呼んでくれ」

「僕はルシアだよ。よろしくね」

「ハッピーみたいのがいる!？」

そこは驚く所なのか？

「そうか、君がルーシイか？（チラッ）」「あゝいゝさ〜」「傭兵

ゴリラを小指一本で倒したというのは君の事か。」「はあっ!？」

「エルザ、違うだろ。知性のあるゴリラをお得意の星霊魔法で倒したんだろ？」

「（補正ありがとうございますけど、倒したのナツだし）」

「あと、貴族の屋敷に潜入捜査した時に、セクハラされて屋敷ごと倒壊させたっていうし」「えっ!？」」「」

「それ程とは、力になってくれるならありがたい。よろしく頼む）  
チラツ（「「あゝいゝさ」）」「  
「こゝ、こちらこそ…」（それ色々と誤解だし!？）」「

俺はふざけ半分で、エバルーの事を曲解しました。  
ルーシィとの挨拶はこのくらいにしてっつと。

「エルザ！付き合ってもいいが条件がある!」

「おい!？」

「何だ？言ってみる」

「帰ってきたら、オレと勝負しろ!」

「「「ええっ!？」」「」

ルーシィとハッピーとルシアが驚いた。

「おい早まるな、死ぬ気か!？」

「前にやりあったときとは違う!今の俺なら…お前に勝てる!それ  
とお前もだ、ギアス!今度こそお前に勝ってみせる!」

俺もかよ。

「ふっ、…確かにお前は成長した。私はいささか自信がないが…良  
いだろう、受けて立つ!だろ、ギアス」

「やれやれ、俺は別にいいぜ。ついでに 그레이 もやるか?」

「いや、俺はいい。まだエルザとギアスに勝てる気が全然しねえか  
らな」

さすがに 그레이 は遠慮したみたいだ。

「うお〜!!燃えてきた〜!!」



「楽しんでる」

「あゝいゝ…」

ドカツ！

「グエツ！？」

エルザはナツの腹を殴って、気絶させた。

「これで少しは楽になるだろう」

グレイは見えてないフリをした。

ルーシイはビクツてしていた。

相変わらず容赦ないなエルザ、と冷静な考えをしているギアス。

「エルザ、そろそろ教えてくれても良いだろ。俺たちは何をすればいいんだ？」

アイゼンヴァルト

鉄の森の事で簡単な説明をしたエルザ。

ララバイの事も話していた。ララバイの事は「どこかで聞いたな」くらいの事を言った。

そしてエリゴールの事も、

「不覚だった、あの時エリゴールの名に気付いていれば、全員血祭りにして、何をするか白状させたものを！」

エルザの手がナツの頭に力が入ってしまい、また気絶した。  
ルーシイも「怖っ！」って怯えていた。

「なるほど。アイゼンヴァルトはそのララバイで何かしようとしてる。どうせろくでもねえ事だろうから食い止めたいと?」

「そうだ。ギルド一つを丸ごと相手する以上、私一人では心許無い、だからお前達の力を借りたい。…アイゼンヴァルトに乗り込むぞ!」

「面白そうだな!」

「あい!」

「久々に骨のある仕事だな!」

「らう!」

グレイ、ハッピー、俺、ルシアは気合充分に返事した。

「来るんじゃないかった…」

ルーシイはなんか後悔してるみたいだ。つかブルーがすごい事になってないか?青ざめて萎れてるし。

途中の駅で、駅弁を買った。ルーシイが色仕掛けで値切ろうとしたが、200Jしか値切れなかった。

ルシアはベジタリアンだから、野菜を頼張ってた。

「所で、エルザさんとギアスさんはどんな魔法を使うんですか?」

「エルザでいい」

「俺もギアスでいい」

ルーシイが、俺とエルザにどんな魔法を使うのかを聞いてきた。ハッピーが答えた。

「エルザの魔法は綺麗だよ。血がいっぱい出るんだ、相手の」

「綺麗なの?それ…」

「ちなみにギアスの魔法はすごいんだよ。誰も出来ない事を平気で出来るんだ、色々」

「誰も出来ない事って、何なのよ…」

ルーシィ…俺がとんでもない魔法をバンバン使いまくるタイプだと思っっているのか？

エルザがショートケーキを食べながら、グレイの魔法の事を言った。つかナツをテーブル代わりにするなよ。

「私はグレイの魔法の方が綺麗だと思っぞ？」

「確かにな」

「そうか？」

グレイが手を合わせると、そこに冷気が収束していく。手を開けば、そこにはフェアリーテイルのマークが氷で形作られていた。

「わあ！」

「氷の魔法さ」

「ああ、あんた達それで仲悪いの？ナツが炎、グレイが氷を使うから？」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろ」

オニバス駅

「アイゼンヴァルトの奴らは、まだこの町にいるのか？」

「わからない…それをこれから調べる」

「雲を掴むような話だけ…」

ナツの事ほったらかしにしちゃったけど、誰かが気付くだろ。

「あれ、ナツは？」

「「「「あつ！？」」「」」

ハッピーが気付いた様だ。

しかも列車は、もう遠くなくなった。

グレイとルーシィは啞然としていた。

「話に夢中で忘れていた。何という事だ、あいつは乗り物に弱いというのに、私の過失だ。取り合えず私を殴ってくれないか！」

エルザって結構、変な方向で真面目だよな？

そしてエルザは、オニバス駅の緊急停車のレバー引いて電車を止めさせた。ほんと、やる事が一直線だなエルザは。

「仲間の為だ。解ってほしい」

「無茶言わないで下さい」

「私達の荷物をホテルまで頼む！」

「いや、なんで私が！？」

見知らぬ他人に荷物預けてどうすんだエルザ。

「フェアリーテイルの人達って、やっぱりこうゆう感じなのね…」

否定したくても出来ねえ。

「俺は違うぞ」

グレイ…半裸のままでも説得力無いって。「だから服は！？」  
ほらな。



急いで俺達は、魔道四輪に乗って、列車を追いかけた。つえ、何処にあっただって、お約束としか言えない。

「エルザ、飛ばしすぎじゃない？」

「大丈夫だ」

「疲れたら交代してやろうか？」

「まだ大丈夫だ」

「そっか」

「おい、列車が見えて来たぞ！」

グレイが屋根に張り付きながら言った。つか何で屋根にいったグレイ？

「ナツー！」

ルーシイが叫んだ直後に、窓からナツが飛び出して来た。そしてそのまま、屋根に張り付いていたグレイに直撃した。ゴチンと。

「ナツ、無事か!？」

「……あゝいゝ」

ナツの無事(?)を確認した。

「痛えだろボケ！」

「るっせえ！よくも置いて行きやがったな！」

「済まねえ」

「だが、怪我は無い様だな。なによりだった」

エルザはナツを自分に引き寄せた。

「ごっつ、硬え!?!」

鎧してるから当然、ゴチンと音がした。鎧が無ければ良いお姉さん  
なんだけどな。

「たくよ無事なもんか!列車で変なやつにからまれたんだ!」

「変な奴?」

「なんつったけなそいつら…」

「おいナツ、まさかそいつ、アイゼンヴァルトとか言ってたなかった  
か?」

「ああ、確かそう言ってたようん「バカモノー!」ブフオツ  
!?!」

うわあ、エルザの強烈な平手打ちヒンタを直撃だよ。

二人とも啞然としちゃってるよ。

「アイゼンヴァルトは私たちの追っている者だ!何故みすみす見逃  
した?」

「そんな話始めて聞いたぞ?」

「さっき説明したろ!人の話をちゃんと聞け!」

まるでコントのようだ。

「いやエルザが気絶させたからだろ」

俺は冷静に突っ込んだ。

「そうだった…すまんナツ」

「ておい、俺殴られ損じゃねーか！」

さてと、コントしてる場合じゃねーな。ん？

「ギアスつて、よくエルザに突っ込めるわね。私は出来ないわ」

「エルザに突っ込みを入れられるのはギアスだけだからな」

「それがギアスです」

お前らな…。

「そついやナツ、列車に乗ってた奴、どんな奴だった？」

「あまり特徴なかったなあ。あそうだ、そついやドクロっばい笛持  
つてた。三つ目のあるドクロだ」

「三つ目のドクロ？」

さてそろそろ思い出したフリをしようかな。

「そつだ！思い出した！」

「どうしたギアス！？」

「ララバイと聞いてなんか引っかけたんだけど、思い出したんだ  
よ！あれは死の魔法、呪歌の道具だ！」

「なに！？」

「その話、私も知ってる！」

「それはどうゆう物なんだギアス？」

「禁忌魔法の一つ、呪殺とゆうのがあるんだけど、ララバイはもっ  
と恐ろしい呪殺をする道具なんだ！」

「もつと恐ろしい？」

「ララバイは、その笛の音を聞くだけで死ぬと言われている」

「「「「なっ！？」「」「」」」

「付いた名が、集団呪殺魔法ララバイ！」

危機迫る様な言い方をするギアス。

「集団……」

「呪殺魔法……」

「おい、それが町の中で吹いちゃったら……」

「確実に聞いた者が死ぬだろうな」

「冗談ではない！アイゼンヴァルトの奴等そんなモノ持ち出したら、何をするか解らん！直ぐに乗れ、追いかけるぞ！」

俺は解るけどね。

## 錯の魔導士（後書き）

基本的にアニメ版を参考にやっています。

妖精たちは風の中（前書き）

ギアスが居る分、ちょっと原作いじってます。

## 妖精たちは風の中

クローバーの町、定例会会場、マカロフサイド

「マカロフちゅわ〜ん。アンタんとこの魔道士ちゃんは、元気があつていいわあ〜」

いささか妙な声と格好でフェアリーテイルのマスター・マカロフに話しかけているのは青い天馬のマスター・ボブである。マスター・ボブの服に何故羽が生えているのかは本人しか知らない事であろう。そして名前から容易に想像できるが“男”である。

「聞いたわよ〜。どっかの権力者コテンパンにしちゃったとか？」  
「おお、新入りのルーシーじゃな？あいつはええぞあ、モチモチッポヨヨ〜ンじゃ〜!!」  
「きゃ〜、エッチ〜」

マカロフのセクハラ発言に恥ずかしがるボブ。

「笑ってる場合かあ、マカロフよあ」  
「ん？」

トゲのついた帽子を被った冷静な声が切り込んできた。声の主は正規ギルドの一つ、四つ首クラトロの番犬ケルベロスのマスター・ゴールドマインである。

「元気があるのはいいが、テメエんとはやりすぎなんだよ。評議員の中には、いつかフェアリーテイルが町一個潰すんじゃないかって、心配している奴もいるらしいぞ」





ゴールドマインが、ミラジェーンの事を褒めていた。

『実はマスターがいない間に、とつてもステキな事がありました』  
「ほう」

この後、ミラが笑顔でとんでもない事を言ってきた。

『なんと、エルザとギアスが、あのナツとグレイがチームを組んだんです。これって、フェアリーテイル最強チームかと思うんです。一応、ご報告しておこうと思って、お手紙しました』

「……………なっ、なっ、なっ!?!?」  
『それでは』

笑顔とともにそれだけを言って、ミラの幻は消えていった。

「あらら〜」

「心配が現実になりそうだなあ、オイ」

バタツと倒れるマカロフ。

「（なんて事じゃ、奴らなら本当に町一つ潰しかねん。定例会は今日終わるし、明日には帰れるが、それまで何事も起こらずにいてくれえっ!頼むう!?!）」

マカロフの心の叫びが轟いた。

サイドエンド

クヌギ駅、崖の上

クヌギ駅で騒ぎがあった。どうやら列車が奴等に乗っ取られたらしい。

「馬車や船なら解るけど、列車に乗っ取るなんて……」

「あい、レールの上しか走れないし、あんまりメリット無いよね」

「だが、スピードはある」

「列車に乗っ取るほどだ、何か急いでるみたいだな」

「俺もそう思うな」

俺の意見に同意のグレイ、つか「何故脱ぐ!?!」…俺が言おうとした事を先に言わないでくれルーシィ。

「でもまあ、もう軍隊も動いてるし、捕まるのは時間の問題じゃない?」

「だといいんだがな……」

そう言っつて、次の駅に向かった。

ナツは終始気持ち悪がった。

眠くなってきたから寝ました。

オシバナ駅前

エルザに叩き起こされました。

駅前が騒がしかった。

聞いた所、脱線事故と言っているが、実際は占拠されたいらしい。

すると、エルザが駅員の人に訪ねていた。

「君、駅内なかの様子は？」

「ん？なんだね君h「ガンツ！」「グアツ！？」」

埒が明かないと判断したのか、駅員に頭突きをするエルザ。

「即答できる人しかいらないうって事なのね……」

「エルザらしいっていうか……」

「エルザがどうゆう奴か解ってきたら？」

グレイ、まて「何故脱ぐ！？」……もう俺は突っ込まんぞ。

「アイゼンヴァルトは中だ、行くぞ！」

「おう！」

「うし！」

「てかこれってあたしの役！？」

ナツの事はスルーしました。

俺達は、オシバナ駅内へと進んで行った。

「軍の一個小隊が突入したが、まだ戻っていないらしい。おそらく、アイゼンヴァルトとの戦闘が行われているんだろっ」

「でも一個小隊だけじゃ、闇ギルドにはきついんじゃないのか？」

エルザの後ろについて走っているギアスが問いかけた。

「ええっ！？、軍の小隊でもやばいってどんだけなのよっ」

いまだ反応がない状態のナツを背負ったまま、ルーシィが言う。

「普通の軍隊じゃまず無理だと思うな。評議員直属の部隊とかなら話は別なんだろうけど」

しばらく走ってたら、たくさんの兵達が倒れていた。

「あっ!?!」

「全滅してるよ!」

「ひどい、重症だ」

「相手はギルド丸ごと一つ、つまり全員魔導士だ。軍隊の小隊じゃ話にならんか…」

エルザの視線の先をみると全滅している小隊達が倒れていた。そして、

「ふふふ、やはり来たな。フェアリーテイルのハエ共」

アイゼンヴァルトが待ち受けていた。

「な、何?この数?」

ルーシイはかなり、というか完全に顔面蒼白と言う感じだ。まあギルド一つが集まったのならこんなもんだろ。

「貴様!貴様がエリゴールか?」

久々だぜ。この緊張感。でも、後ろでナツを起こそうとしているルーシイ、空気読もうよ。

「妖精<sup>ハエ</sup>があ!お前らの所為で、俺はエリゴールさんに…」

「（ん、この声…）」

「貴様等の目的は何だ？ララバイで何をしようとしている！」

分かるけどね。

「分かんねえのか？駅には何がある？」

そういつて、エリゴールは空中に飛んだ。

「飛んだ！？」

「風の魔法だ！」

そしてエリゴールは、スピーカーの上而降りた。

「ララバイを放送するつもりか！？」

「ふははははっ、この駅の周辺には、何千人と野次馬が集まってる。いや、音量上げれば町中に響くだろ。死のメロディーがな」

これはブラフだ。本当の狙いは次の駅の所だ。

「何の罪も無い人達に、ララバイの笛の音を聴かせる気つもりか！？」

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者達の存在を知らずに権利をかがげ、生活を保全している愚かな者どもへのな。この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。よって、死神が罰を与えに来た！！」

「そんな事したって、権利なんか戻ってこないのよ！てゆうか、あんた達が連盟から追い出されたのは、悪い事ばっかしてたからでしょ！」

「ここまで来たら欲しいのは権利じゃねえ、権力だ！権力があれば全ての過去を流し、未来を支配する事も出来る！！」

「あんだバツカじゃないの!？」

さてと、そろそろ疑問を言うべきかな。

「残念だな妖精共、闇の時代を見る事なくあの世行きとは！」

カゲヤマの影が襲ってきたが、復活したナツが防いだ。

「てめえ!？」

「その声…やつぱりお前か」

「ナイス復活！」

「おーおー、なんかいつぱいいるじゃねーか！」

「敵よ敵、みーんな敵！」

「へっ、面白そーじゃねーか！」

ナツが戦闘態勢に入った。

「(かかったなフェアリーテイル…全ては俺様の予定通り。笛の音を聴かせなきゃならない奴がいる。必ず報復しなくちゃならねえ奴がいるんだ!)」

「なあ、エリゴールつつたか？」

「あん？」

「ララバイを放送するんなら、何故てめーの部下達を非難させないんだ？」

ギクツ!？」

エリゴール達が焦った顔をしていた。

「どうゆう事だギアス？」

グレイが疑問に思ったのか、聞いてきた。

「だってそうだろ。駅の中にスピーカーがあるのに逃げようともしないし、ララバイが放送しちまったら例え町中に聴こえたとしても生き残るのはエリゴールだけだぞ！」

「……あつ！」

「？」

ナツだけ解ってない様だ。

「それなのに奴等は平気な顔をしている、これはどういう事かな？」

「（な、なんだこいつは！？俺の目的がこの町じゃねえ事に気付きやがったのか！？）」

ギアスの推測に、エリゴールは驚いていた。

「（このままではバレル可能性が……、こいつを先に片付けねえと！）」

そう思ったエリゴールは、ギアスに暴風閃ストームシュレツ下を放った。

「うわっ、くそー何か解りそうだったのに！」

難なく避けるギアス。

「ギアスの推測で奴等は慌てたと言う事は、狙いはこの町だけではないと言う事か！」

「ええいテメー等、殺れえ！」

「……オオ……」

「こっちはフェアリーテイル最強チームよ。覚悟しなさい！」

そう言うんだったら、ルーシィもなんかやれよな。

「後は任せたぞ！闇ギルドの力を思い知らせてやれ！」

エリゴールは、半ば逃げる様に消えた。

「ナツ、グレイ…二人で奴を追うんだ！」

ナツとグレイは嫌そうだ。

「お前達が力を合わせれば、死神エリゴールにだって、負ける筈が無い！」

ナツとグレイは睨み合っていた。

「聞いているのか！（お前達！・テメー等！）」

俺とエルザが注意了。

「「あいさー」「」

二人でハッピー化すんな。

「あ、逃げた」

「エリゴールさんを追う気だ」

「任せる！このレイユール様が仕留めてくれる！」

「俺も行く！あの野郎だけは許せねえ！」

アイゼンヴァルトの幹部、カゲヤマとレイユールは、ナツとグレイ



を追いかけた。

「こいつ等を片付けたら、私達もすぐに追っぞ！」

「おし！」

「ちよつと、あの数を三人で！？」

「さて、野郎はとつと片付けて、小娘達と遊ぼうかね」

こいつらは典型的のチンピラだな。

「妖精<sup>ハエ</sup>共め、羽根をむしり取ってやるぜ！へへへ」

アイゼンヴァルトの幹部、ビードが言った。

「可愛すぎるのも、困りものね」

「ルーシイ帰って来て」

「ルーシイが遠くに行っちゃった」

ルーシイ：酔い痴れてないで戦う準備しろよ。

「下劣な、これ以上フェアリーテイルを侮辱してみろ！貴様等の明日は保障出来んぞ！」

エルザは、何も無い所から剣を出した。

「剣が出て来た！？魔法剣！？」

「珍しくもねえ！」

「こつちだつて魔法剣士はぞろぞろ居るぜ！」

あーあ、抵抗せずに降参した方が身の為だと言つのに。  
案の定、あっさりエルザに吹っ飛ばされた。

「ハアアッ！」

「すごい」

「くそ、遠距離攻撃でも喰らえ！」

「エルザ！」

俺は前に出て、一蹴りで相手の魔法弾を蹴り返した。

「蹴り返したあー！？」

そして俺はそのまま敵陣に突っ込み、徒手空拳だけで叩きのめしていく。

「嘘、魔法も使わずに……」

「ギアスは基本的に、雑魚い相手は素手で倒す方だし」

ルシアはギアスの事を言った。

そうこうしてる内に、エルザは槍・双剣・斧と、次々換装していった。

「二人とも、すごいなあ」

「でもね、エルザとギアスのすごいトコはここからだよ」

「エルザ？ギアス？」

アイゼンヴァルトの幹部、カラツカが疑問に思った。

「よし、あたしだって！」

「「えー！？これからエルザとギアスの見せ場なのに」」

ハッピーとルシアが突っ込んだ。

「（これから星霊を呼ぶのか？）」  
「開け、巨蟹宮きょがいきみやうの扉！キャンサー！」

星霊界の扉が開き、美容師風の男が現れた。

「（……覚えた！）」  
「今回も戦闘か、エビ！」  
「ビシツと決めちゃって」

そう言つてキャンサーは敵陣に突っ込み、すれ違いざまに頭と武器を切り刻んだ。そしてすれ違った奴等は見事にてっぺんがツルピカになった。そして思わず「ブツ」と笑つてしまった。

「ナイスカット、エビ」  
「やるじゃないか」  
「星霊魔導士か、なかなかだぞ」  
「そ、それ程でも。（やつたーあたしの好感度アップ！）」  
「それが狙いだつたの！？」

よし、ダメ出しトークに入ろうか。

「でもよ、巨蟹宮つて蟹座だよな？なんで語尾がエビなんだ？」  
「それは私も気になっていた。エビはさすがにありえんだろ、せめてチヨキとかにならんのか？」  
「ダメ出し〜！？」  
「エビ……チヨキ……」

心底落ち込んでしまったルーシイでした。

「しかし、まだこんなにいるのか…面倒だ、一掃する！」  
「エルザ、半分は残しといてくれよ」  
「分かった。換装！」

エルザの体が光り輝き、鎧が分解されていく。

「おおつ、なんか鎧が剥がれてく！」

飢えたケダモノがお前らは…

「魔法剣士は通常、武器を換装しながら戦う」

「だけどエルザは、自分の能力を高める魔法の鎧も換装しながら戦う事が出来るんだ！」

「それがエルザの魔法…」

「その名は…」

「ザ・ナイト騎士…！」

ルシアとハッピーが交互に説明していき、エルザは魔法の鎧、天輪の鎧に換装した。

「わあ！」

「「「「おおつ！」」」」

「舞え、剣達よ！」

エルザの周りに、多くの剣が現れた。

「エルザあ！？こいつまさか！？」

「サイクルソード循環の剣！」

回転する多数の剣にて吹き飛ばされるアイゼンヴァルト。

「すごっ!?!一撃で半分も全滅!?!…でもちよっと惚れそう!」  
「後は任せる」

「あいよ!」

エルザは、元の鎧に戻った後、ギアスにバトンタッチした。

「この野郎オー!」

「よくもやりやがったなー!」

「さて雑魚共、判決の時だ!」

「判決…!?!まさかこいつ!?!」

またカラツカが気付いた。

「まずは…」

「セリヤアー!」

「危ない!?!」

その時、ギアスの体から炎が噴き出した。  
そして、その炎で敵は吹っ飛んだ。

「炎!?!ギアスは炎の魔導士なの!?!」

「違うよルーシィ」

「えっ、でも」

炎が消えると、そこに立っていたのは、

「ええっ!?!ナツ!?!」

ギアスじゃなく、ナツが立っていた。

そう、ギアスは炎の中で、トッヘルゲンガー変身でナツに変身していたのだ。

「ちょっとナツ、あんたエリゴール探しに言ってたんじゃないの！？」

「違うよルーシイ、あれはナツじゃなくてギアスだよ」

「ええっ！？でも、どう見たってナツだし！？」

「それがギアスの魔法だからだ」

ルシアとハッピーとエルザが説明しても何が何だか解っていないル  
ーシイでした。

そして、ナツ（ギアス）は大きく息を吸い、

「火竜の咆哮！」

「くくくくわあーーーー！？」「くくく」

火を吐いた。敵の半数を吹き飛ばした。

そして吹き終わった後、体が凍りついていった。

「今度はなに！？」

氷が砕けると、そこには、上半身裸のグレイが居た。

「今度はグレイ！？」

そしてグレイ（ギアス）は手を合わせると、冷気が集まってきた。

「アイスメイク…ランス槍騎兵！」

「くくくわあーーーー！？」「くく」

無数の氷を放った。敵を5〜6人ほど突き刺した。

そして今度は、グレイ（ギアス）は光り出した。

「ナツにグレイって事は！？次に来るのって！？」

察しの通り。光が収まると、天輪の鎧を着たエルザになっていた。

「やっぱりエルザ！？」

「毎回思うのだが、自分の技を客観的に見るのは複雑な気分だな」

「て事は、あたしにもなっちゃうんですか！？」

「いや、君はまだ知り合ったばかりだからな。君の姿で戦う事になるのは、もう少し先になるだろう。ギアスの変身でその姿と同じ魔法を使うのは、その人の事をよく知らないといけないからな」

「そうなんですか…」

エルザとルーシィが雑談してるなかエルザ（ギアス）は、

「サークルソード！」

先程のエルザの技を繰り返していた。

「「「ギヤあー！ー！？」」「」

「どうなってるんだよこいつ！？」」

「ハエの仲間になったら、そいつらと同じ魔法を使って来るなんて！？」」

「すごいー！」

「これがギアスのロストマジック、コピーの魔法だよ」

「ロストマジック！？」

そしてエルザ（ギアス）は、光り出し、元の姿になった。

「くそ、オレ様が相手じゃあぁー！」

ビードは突っ込んで来た。

「間違いねえ！こいつ等フェアリーテイル最強のコンビ！…！」

説明してるとこ悪いけど、

カンダタストリング  
「鋼鉄斬系！」

袖から出てくる斬系で、ビードを斬り、吹っ飛ばした。そして、

「判決・・・死刑！！」

「ぐほっ！？」

いつもの様に腕を十字に振り、ビードが床へと落ちた。

テイクーニア  
「妖精女王のエルザと、フェアリージャッジメント妖精審判者のギアセルシアだっ！！」

「すごーい！」

「あ、相手が悪過ぎるー！」

カラツカは一目散に逃げて行った。

「エリゴールの所に向かうかもしれん、ギアス、ルーシィ、追っ  
くれ」

「分かった」

「あたしが！？」

「頼む（ギロツ）！」

「はっはいいい！行ってまいりまあーす！」



わざわざ脅さなくてもいいのに。

さてと、適当な場所でルーシィと別れて、外に出るかね。

「分かれ道か、俺達は左側を、ルーシィ達は右側に行ってくれ」

「ええっ、別れるんですか!？」

「こつゆう時は固まっているより、バラバラに探した方が効率的だ。分かってくれ」

「はい、分かりました」

さてと、外の方に行かないと。

その前に、さっきのドツペルゲンガーで腹減ってきたから、その辺の物をバクバクの実の力で食って、カロリー補給をした。

「よくその辺のモノとか食べられるよね」

「うるへっ」

外に出てみると、魔風壁が出来ていた。

ちっ、少し遅かったか。

「ギアス、何だろっこの風?」

「分からねえが、いやな予感はあるなあ」

そして、エルザが出て来た。

「エルザか?どうしたんだこの風は!」

「ギアスカ!エリゴールはこの風の外だ!」

「何!？」

そして突き進もうとしたら、弾かれた。

「無駄だよ神父さんよお、お前らとは一度殺り合いたかったんだがな」

「これは一体何の真似だ!？」

「テムエ等のせいでだいぶ時間を無駄にしちまったあ。これで失礼させてもらつよ」

「待て！」

つか何でエリゴールの奴、何で俺が神父って呼ばれてる事を知ってるんだ？

「エリゴールの奴め、何処へ向かうつもりだ？標的はこの駅ではない、そうゆう事が」

そろそろ暴露しとこうか？

「ギアス、どうしたの？」

「…ルシア、オシバナ駅の次の駅って、何て名前だっけ？」

「えっ？」

「ん？」

「確か……クローバー駅だったような？」

「何!？」

「やはりな」

「おいギアス!？クローバー駅といえば……」

「マスター達のいる定例会の会場がある所だ。奴等の真の狙いは、ギルドマスターだ！」

「くっ、そういう事か！」

「まずいよ、このままじゃマスター達が殺されちゃうよ!？」

「何とかしなくちゃな。エルザ、ルシア、俺はこの魔風壁をなんとか突破してみせるから、エルザ達は皆にこの事を伝えて来てくれ！」

「分かった。エリゴールの事は任せる！」

「了解！」

「行くぞルシア！」

「らっつ！」

今頃グレイはレイユールを倒してる頃だろうな。さてと、俺もエリゴールを追いかけるか。

「<sup>エアドア</sup>空気開扉！」

大気の壁にドアを作り、空間を移動した。空間の中は魔風壁なんて無いから楽だよな。

ギアスは魔風壁の外に出て、<sup>エーラ</sup>翼で飛翔し、エリゴールを追いかけた。

## 妖精たちは風の中（後書き）

ストームシュレッド

暴風閃というのは勝手に決めちゃいました。

初登場の悪魔の実

バクバクの実

ドアドアの実

初登場の能力

ドッベルゲンガー  
変身

覚えた魔法

ルーシイの星霊魔法

今回はエリゴールと巨大怪物をボコります。

炎と風、最強チーム！（前書き）

フェアリーテイル無双の始まりです。

## 炎と風く最強チーム！

クローバー大峡谷、クローバーの町目前

「もう少しでクローバーの町だ。待っている、ギルドマスターのじい共！死神がばっ！追いついたああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」何い！！？」

エリゴールが咄嗟に後ろを向き、突進してきたギアスの頭突きを喰らった。エリゴールの額に。

「グハアツ！？」

「やっと追いついたぞ、オルゴール！」

「エリゴールだ！！！」

お約束をした後は、バトルパートと行きますか！

「貴様あ、何故ここに？」

「お前を止める為だコノヤロー！」

両手に炎を溜めて戦闘態勢をとった。

「魔風壁から飛び出したか、なんて邪魔なハ工共だ。そこを通させて貰う。消えろ！」

エリゴールが手をかざすと、突風が来た。

ギアスは、脚に炎を噴出して、高くジャンプした。

そしてエリゴールの前に降り立ち、両手に炎を纏って攻撃した。

「（なににい！？炎で跳躍して、炎で殴るのか！？それにこの威力、魔導士の拳とは思えねえ！？）」

「ちっ、空中にいんじゃねえよ！」

「調子に乗るなよ、八工が！」

強力な風魔法が来た。

ストームブリンガー

「暴風波！！！」

「ぐっ！」

なんとか耐えたギアス。

「なっ、これを耐えるのか！？」

「お前なあ、風ばっか起こしやがって。つか半裸じゃ寒いだろ、暖めてやるよ！」

「お前も似たよーなもんじゃねーか！？」

「これで吹き飛びな！虹竜の咆哮！」

ギアスの口から火を噴いた。

ストームウォール

「暴風壁！」

風の壁で防ぐエリゴール。

「（なんて野郎だ。やる事全部データラメじゃねーか！これが、フェアリーテイルの魔導士か！？）」

少し真剣になったエリゴール。

「貴様の力、少々侮っていたようだ。ここからは本気で行くか！  
お互いにな」

「上等だ！」

ストームメール  
「暴風衣！」

エリゴールの体に風の鎧を纏った。

「行くぞ！」

「来い！」

突進してくるエリゴールと迎え撃つギアス。

「ぐっ！？」

「どうした？そんなもんか？」

「なんだこの風は？近づいても吹き飛ばされる！？」

「ストームメールは常に外に向かって風が吹いている。解るか？炎は向かい風には逆らえねえ！炎は風には勝てねえんだ！！」

うわゝ、某使い魔の風先生みたいな発言だな。

「もはや炎は届かん！」

また突風が来た。

「喰らえ、ストームシュレッド！」

またカマイタチ見たいのが来た。だがそれは、

「そんなもん！セリヤリヤリヤー！」



ギアスは、ストームシュレッドを全て叩き落した。

「ほう。全て防いだか」

「（そろそろ倒そうかな？）」

「これで終わらせる！」

「ん？」

「全てを切り刻む鳳翔魔法、エメラ・バラム翠緑迅！！」

げっ！？特大の風が来るな。仕方ない、グラビトン重力作成で足場を固定して、来る直前に体を鋼鉄化するしかないな。

「散るがいい！クソ神父ウ！！」

特大の風がギアスに襲い掛かった。

俺に襲い掛かってくる部分は食ってやったけど、ね。風が収まると、そこにはギアスの無事な姿だった。

「な、エメラ・バラムを耐え切っただと！？」

「さして、今度はこっちの番だ！」

「だ・だが、このストームメールがある限り、俺には届かん！」

エリゴールは、鉄壁の守りでもある風があるから負けないと信じている様だ。

「それはどうかな？ウオオオオオオオオオオ！！」

自分の周りに巨大な火柱を上げた。

「炎戒・火柱！」



したエリゴール。  
終わったから休憩してたら、魔道四輪が来た。

「ギアス！無事か？」

「ん？ああお前ら、結構早かったな」

「エリゴールはどうした？」

「あそこでぶっ倒れてるぜ」

「さすがだな！」

「すごっ！？てかギアスって、ほとんど無傷じゃない！？」

そう、今の服装は、服が少し切れてるだけで、体は無傷なのだ。  
つかエルザとナツ、ぐったりしてるな。

「（そ、そんな、エリゴールさんが負けるなんて…）ん？」

カゲは、足元にあるララバイを見ていた。

「ともかく見事だギアス。これで、マスター達は守られた」

ルーシィ達は、うん！と頷いた。

「ついでだ。定例会の会場に行き、事件の報告と笛の処分について、  
マスターに指示を仰ごう」

「クローバーは直ぐそこだもんね」

「らっつー！」

その時、カゲは魔道四輪に乗り、しかもララバイを奪って行った。

「ララバイは貰ったー！油断したなハエ共！」

そのままクローバーの町まで行ってしまった。  
その場にいた全員は啞然としてしまった。

「あんのヤロー!?!」

「何なのよ助けてあげたのにー!?!」

「追っぞ!」

俺達は、エリゴールは放っておいて、カゲを追いかけた。

えっ、エリゴールの魔法は覚えなくていいのかって?

冒頭に「エリゴールが咄嗟に後ろを向き、突進してきたギアスの頭突きを喰らった。エリゴールの額に」と表しています。

なに?それだけじゃ解らん?俺の額には白毫がある。それでエリゴールの額に付けければ、奴の魔法は無条件で覚えられるのだ。

て説明してる場合じゃなかった、追いかけないと!

クローバーの町、定例会会場のはずれ

カゲを探していたら、マスターと笛を吹こうとしているカゲを発見した。

「いたぞ!」

「じつちゃん!」

「マスター!」

その時、

「し」

「どわっ!?!」

突然現れたオカマに止められて、気持ちがるナツとグレイとルーシイ。

「今いいところなんだから、見てなさい。つてか、あんた達可愛いわね。超タイプ」

「ヒィ〜!?」

ナツ、グレイ、狙われているな。

ギアスとエルザとルーシイは既に離れていた。

「なにこの人!?!」

「マスター・ボブ」

「ブルーペガサスのマスターだ。見た目はアレだが」

「あらエルザちゃん、大きくなったわね。つてかギアスちゃん、しばらく見ない間にダンディーになったんじゃない?」

「はあ」

「この人が…あのブルーペガサスのマスター」

なんか幻滅しちゃってるみたいだね。

カゲが吹こうとした!

「!?!」

「いけない!」

「だーから黙ってるって、面白えーとこなんだからよ」

ゴールドマインまで…

「クワトロケルベロスの!」

「マスター・ゴールドマイン!」

つと、知らない間にマスターがカゲを説得していた。

「なにも変わらんよ」

「!？」

「弱い人間は、いつまで経っても弱いまま。しかし、その全てが悪では無い！元々人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある！仲間がいる！強く生きる為に寄り添い合って歩いていく、不器用の者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれない。しかし、明日を信じて踏み出せば、自ずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らずともな！」

このシーンについては、事前には知っているとはいえ、泣けるな。

「…まいりました」

さて出るか。

「マスター！」

「じっちゃん！」

「じーさん!!」

「んおおおおおお!?何故お主等がここに!？」

「さすがです！」

そしてエルザは、マスターに抱きついた。

「今の言葉、目頭が熱くなりました！」

鎧をしてるから当然、



「「なんか出た!?!」」

俺、ナツ、グレイ、エルザ、ルーシィ、マスターは驚き、ハッピーとルシアは呟いた。

『モウ我慢出来ン!ワシガ自ラ喰ラツテヤロウ!』

ララバイが、巨大な化け物へと正体を明かした。  
つかやっぱ、知っているのと実物を見るのとじゃ全然違うな。

『貴様ラノ、魂ヲナア!』

「デカ過ぎー!?!?!」

「そこ突っ込むの!?!」

どうでもいいだろそこは!

「何だこいつは!?!?こ、こんなの知らないぞ!?!」

「あゝら大変」

「こいつは、ゼレフ書の悪魔だ!」

会場にいたギルドマスター達は、非難して行った。

「なんで笛から怪物が!?!」

「あの怪物がララバイそのものなのさ!つまり、生きた魔法!それが、ゼレフの魔法!」

「生きた魔法?」

「ゼレフって、あの大昔の!?!」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士。何百年も前の負の遺産が、今になって姿を表すなんて!?!」



とか言ってる内に、怪物ララバイが近づいてきた。

『サッテ、ドイツノ魂カラ頂コウカナ〜?』

「なんだと〜!…なあ、魂つてうめえのか?」

「知るか!つか俺に聞くな!」

なんでその辺に食いつくのかなナツは。

「ナツ、グレイ、皆を遠くへ!」

「(偉そうに)」

「(命令すんじゃねえ)」

「頼んだ!」

「「あいさー」「」

一睨みで言う事聞かせちゃったよ。つかまたハッピー化してるし。  
ん?あれは…:ファイオーレ軍!?

『引ッ込メー!雑魚共オーーー!!』

怪物ララバイが、口から破壊光線を出した。

山が一つ消えました。

ておいファイオーレ軍、あっさり逃げんなーーー!

『サッテ、決メタゾ。貴様ヲ魔導士全員ノ魂ヲ頂ク!』

「それは決めたとは言わないぞ!」

「面白え、やれるもんならやってみやがれ!」

後ろで応援する各地のギルドマスター達。てかあんたらがその気になれば、こいつ殺れたんじゃね?

つかルーシィ、さぼんなよ。

『ウオオオオオオオオオオオツ!!』

怪物ララバイが、呪殺ララバイを使う為に、空中に魔方陣を展開させた。

「行くぞ!」

「『オウツ!!』」

怪物ララバイに向かっていく四人。

「換装!……ザ・ナイト!」

エルザが天輪の鎧に換装して、怪物ララバイに切り付けた。

「アイスメイク……ランス!」

グレイの氷の造形魔法で攻撃した。

「喰らいやがれ、テンペスト・スレッド!」

この前に覚えたカンダタストリングで攻撃した。

「何…たくさんの糸?」

「カンダタストリング!ギアスがつい最近、ある別の闇ギルドのリーダーの得意としていた魔法を覚えたやつだよ」

「ギアスは相手の魔法を覚えて、自分の魔法にする事が出来るんだ!」

「ちょ、そんなのあり!?!」

「でもね、ギアスのすごい所はそれじゃないよ!」

「えっ、まだあんの!?!」

色々言われてるが、スルーだ。

「これでも喰らえ、火竜の鉄拳!」

怪物ララバイの顔面に殴りつけた。

『ウゼーゾ! テメーラア!』

怪物ララバイは俺達に向けて殴りかかったが、全員避けた。

「ハアツ!」

「ウオオオツ!」

「もっ発喰らえ、火竜の翼撃!」

「喰らえ、虹竜の咆哮!」

俺達は、次々と連携攻撃を繰り出していた。

「ええっ!?! 吐いたあ!?!」

「そう、ギアスもドラゴンスレイヤーなんだよ」

「嘘っ!?! ギアスも!?!」

ルーシイは、ギアスがドラゴンスレイヤーだという事に驚いた。

「すげえ!?! こんな連携攻撃、見た事無い!」

「それに息ぴつたり!」

「あい!」

「らっ!」

その時、怪物ララバイは大きく息を吸った。

「何かやばそう!?!」

「ララバイ来るよ!?!」

怪物ララバイは、辺りの植物の生気を吸い出されて、みるみる枯れていった。

「緑が枯れていく!?!」

「ララバイに吸われているんだよ!?!」

『貴様ラノ魂頂ク、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!?!!』

確か、この後の事って、拍子抜けな展開になるんじゃない? その場に居た全員(ギアス以外)が、息を飲んだ。

ぷす~~~~~

ぷす~~~~~

ぷす~~~~~

ぷす~~~~~

ぷす~~~~~

『ンツ!?!?』

俺は思わずずっとこけてしまった。

「なにそれ~~~~~!?!?」

「すかしっぺ!?!?」

「てかハッピー、一人だけ耳栓してずるいよ」

皆が啞然としている中、ルシアはハッピーの耳栓の事をつっ込んだ。

『ナンジャアアコノ音ハア！？ワシノ自慢ノ音色ハ一体何処ニイー！？』

「そ、そうか、さっきの攻撃で…」

「たくさん穴空けたから、音がちゃんと出ないのね」

「まあ、元が笛だしね」

「さんざん引つ張るだけ引つ張つといて、このオチ！？」

「おいら、お腹空いちやった」

皆が（怪物ララバイも含めて）呆然としていた。

『ザケンナーー！！』

ぶす~~~~~

ぶす~~~~~

気が抜ける音を撒き散らしながら攻撃すんな！つか逆ギレすんな！

『ダー~~~~~！！』

怪物ララバイは、ギルドマスター達に向けて破壊光線を出した。  
やばっ！と思ったら、グレイが氷の造形魔法で防いでいた。

「（グレイの奴、いつの間にあんな早く造形魔法を！？）」

『オノレエ！……ンツ！？』

ギアスとナツは、破壊光線の余波で燃えてる炎を吸い出した。

「良しつと」

「食ったら力が湧いてきた！」

『コ、コノ、バケモンカ貴様等アー！？』





爆煙の中から姿を見せる四人。

「さすが最強チーム！超カツコイー！」

「あい！」

「らっ！」

「どっじゃー！すごいじゃる！」

マスター、自分の事みたいに自慢しないでくれ。  
それからルーシー達に来て、騒ぎまくった。

「へへっ、やっぱバカだあいつら、勝なわねえや……」

カゲが涙ぐんでいた。  
すると、

「ほーら、あんたはお医者さんに行かなきゃね〜」

カゲをじよりじよりと頼ずりながら言うボブ。

「まっ、経緯はよく分からんが、フェアリーテイルには、借りが出  
来ちまったな」

「ふむ……」

「しかし、これは……」

マスター達は口噤んでいた。

「あっ……！？」

「んっ、げっ！？」





ん？とヘルズイヤーで、カゲ達の話盗み聞きした。

「へっ、子は親に似るっつーか」

「現役時代を思い出すはね〜」

「ば、バカだ…」

「カゲちゃんもあたしの若い頃にそっくり〜」

「……………っえ、っ！！？？」

ぶっ！？と噴出しそうになった。

「あの頃は、楽しかったわ〜。皆でめちゃくちややって、評議員に怒られてばかりだったけどね〜」

ここから先は、アニメを参照。

ボブは、左から二番目のスーツを着たイケメンを指差した。

「あっあっあ〜、ちなみにこのイケメンが、私だぞ〜」

「別人だろ！？」

本当に別人だな。どうすればこんなイケメンがオカマになるんだか？

「ねっカゲちゃん、クリソツクリソツ〜」

「似てねーって！？」

ズドーンと落ち込むカゲ、同情するよ。

「まあ、なんにせよ、お前さんも少しは感じる所があるだろ？」

「ギルドは楽しいって」

カゲもマスターと同じく、白い何かが出た。

「何か出たぞ？」

「あら？」

「よし、俺が捕まえてやる！」

「……………お前は、捕まる側だあ……………」

「……………」

「え？あつそつか！」

マスター達総突っ込みだなナツ。

つかなんで、そんなポジティブなんだ？

こうして俺達は、他のギルドマスター達に追われながら帰る事にした。

炎と風〜最強チーム！（後書き）

覚えた魔法

エリゴールの風魔法

カゲヤマの影魔法・解除魔法

初登場のフラグメント

重力作成  
グラビトン

初登場の滅竜魔法

虹竜の剣角  
けんかく

虹竜の聖拳  
せいけん

次回は腹ペコ共の宴です。

ナツ、村を食う(前書き)

番外編に近いストーリーです。

## ナツ、村を食う

クローバー大峡谷、蜘蛛の巣谷

俺達は現在迷子中です。

クローバーの町の帰りに寄ったクローバー大峡谷の大自然の迷宮、通称蜘蛛の巣谷にて迷っています。

「あー、もう！ちょっとハッピー、あんたまた迷ったでしょ！歩いても歩いててもマグノリアの町に着かないじゃないの！この方向音痴ネコ！」

「またって失礼しちゃうな、こないだは迷わなかったよ。今回が初めてなんだ」

「初めてでも何でも、迷ったのには違いないじゃない！」

皆気落ちしちゃってます。

そこにKYな男、ナツが、

「は〜、腹減ったな〜」

と言ってきた。

「言うな！余計腹減るだろうが！」

「減ったモンは減ったんだ！」

「だから、減った減った言うんじゃないやねえ！」

「確かに、減ったの〜」

「「だーからー！」」

グレイが制したと思ったたら悪化した。  
マスターまで言い始めたからなあ、ムゲツ。

「よせ、（グ~~~~!）……」

エルザの腹からすごい音がした、アゲツ。

「今グ~~~~っていったぞ、グ~~~~って」

「鳴ってない、空耳だ!」

「すごい言い訳だ、おい」

確かに、言い訳するには無理があるな、モゲツ。  
すると突然ハッピーが叫んだ。

「あー、あ~~~~!」

「なに騒いでんだ?」

「ナツ、あれ見て!」

崖下を見ると、羽の生えた魚が舞っていた、ガリツ。

「幻の珍味、羽魚だ!あれむちゃくちゃおいしんだ」

ハッピーが羽魚を食べたい一心で騒いでる中、皆の目がキラリと光った、ムシャ。

「幻の珍味?」

「羽魚……」

「美味そうだな!」

「でかしたハッピー、よく見つけたの」

皆が羽魚に狙いを付けた。

そしてマスターは、ハッピーに泣きながら礼を言った、パクッ。

グ〜

グ〜

グ〜

グ〜

グ〜

グ〜

「皆お腹空き過ぎです。(グ〜)(…」

「おまえもな!」

「…あい…」

グレイに突っ込まれるとはなルーシィ、アムッ。

「よし、釣るぞ!」

しばらく釣りをしました。

「くそー、こいつら釣れそうで釣れねーな」

「おいら、頑張るぞー!」

「なんか、あんまり美味しそうに見えないんだけど…」

「黙って釣れ!この際食べればいい!」

「(そこまで減ってたのか?)」

「羽魚食べたいぞー!美味しいぞー!幻の珍味だぞおおおおお!

「!」

鬼気迫るハッピー。

しばらく釣りしてます、パクッ。



「飽きて来ました」  
「意思弱っ!?!」

諦めるの早いよハッピー、ガリツ。

「だって全然釣れないんだもん」  
「お腹空いてるんでしょ? だったら頑張ろうよ。諦めないで!」  
「……ルーシイの意地悪うー!」  
「えー!? 励ましたんですけどー!?!」

そんなこんなで、一匹しか釣れなかった、ムシャ。  
ナツが燃やして焼き魚にした。つかこの魚、変色したぞ…。

「ハッピー食べよ!」  
「でもおいら一人だけじゃ…」  
「そんなのちよびつとずつ分けて食ったら、余計腹減るだろうが!」  
「遠慮するなあ、食べ食べー!」  
「そう? じゃ頂きまーす!」

ナツとグレイとマスターが、やっぱり食いたかったーみたいな感じで悶えています。  
エルザは後ろを向いていた。多分見たらだめだと自分に言い聞かしてるのだろう。  
そして羽魚を美味しそうに食べるハッピー。

「こんな魚を美味しそうに食べられるなんて、あんた本当に幸せね」  
「マズッ!?!?!」  
「不味いんかい!?!」

……ま、こうなるわけになるな、パクツ。  
ん？さっきから何食べてんだって、それは…

「！？おいギアス、さっきから何を食べている！？」

エルザが気付いた様だ。

「何だよギアス一人だけ！？」

「一人だけ食いモン持ってたのかよ！」

「ずるいよギアス」

「何食べてんのよ！」

「ワシにも食わせんかい！」

「何かあるのー？」

「とつとと出せ！」

ナツ、グレイ、ルシア、ルーシィ、マスター、ハッピー、エルザの  
順で言ってきた。つかエルザ怖っ！  
で仕方なく見せたら、

「……………石？」

「クッキーみたいで美味しいよ？」

「……………」

そう、さっきから石を食べていたのだ。

「忘れていた、ギアスは八種類の属性を持つドラゴンスレイヤーだ  
つたのを…」

「……………は〜……………」

何故そこで深いため息をするんだ？

そんなこんなで、村が見えてきた。

「村だ！」

「家だ！」

「だったら！」

「食いモンだー！ー！」

村に入ってみたら、そこには誰も居なかった。

すると我慢出来なくなったのか、ナツとグレイは近くの民家に入っ  
てった。

不法侵入だろそれ！

だが、違和感を感じた。

さっきまで居た空気を感じてるのに、誰も居ないなんて…。

しばらく俺達は、別々に分かれた。

すると、パンを持ったマスターが食べようとしたのを発見し、頭突  
きをかました。

「フゲツ、何すんじゃギアス？」

「マスター…皆我慢してるんです…なのにマスターが率先して…食  
うんですか？」

「こ、これから、調べようと、してたんじゃい！？」

俺は若干、黒い笑顔で話した。

言い訳苦しいよマスター。

それから、マスターの魔法、覚えちゃいました。

そして、村の中心に集まった。

「どうでした？」

「こっちはだめだ」

「やはり誰もおらん、この村は廃村じゃ」

「とうとうよりは、つい最近まで人が住んでいた形跡が、ん？」

足元の亀裂に気付いた。

「この線は、何だ？」

「なんか、いやな予感」

ギアスは、空を飛んで村中を見た。

「何か見えるかー？」

「これは！？」

「ギアス？」

「二人とも、ナツ達を呼んで高い所に！」

「？分かった」

ナツ達を呼んで、崖の上に登った。

すると、村が光り出し、建物が怪物になった。

「やっぱりな。さっきのあれは魔方陣だったんだ！」

「……ええっ！？」「」

「なるほどな。そしてこの魔方陣は、かつて禁止された封印魔法、アライブを発動させる為のものじゃ！」

アライブ、無機物を生物に変える魔法。

そして、それを行ったのは、この村の住人、闇ギルドが行ったものだという。

しかも住人達は、生物化した怪物達の餌食となったようだ。

「じゃが、これぞ不幸中の幸い！やつらは生き物じゃ、だから大抵のものは…食べる！」

「……おおっ！」「……」  
「ええっ！？」

ルーシイ以外、ラッキーと思った。  
グ~~~~~と響いた。

「しゃー、食うかー！」

「わーい、ご飯の時間だー！」

「この際、味がどうのなんて言ってるからねー！」

その時、エルザが真つ先に駆け出した。

つかそんなに腹減ってたんだ。

それぞれが調理し始めた。

「俺は何するかな？ナツが蒸し焼き、グレイがシャーベット、エルザは刺身、俺は……そうだ。煮よう！」

空中に水の球を作り出し、火で熱して、怪物達を叩きのめした後、その中に入れてかき回した。

茹で上がった所を、一口サイズにして、食べやすい様にした。

「怪物の煮物？の出来上がりっ」と

さっそく試食タイム。

……！！！？

「……マズイッ！！！？」「……」

バクバクの実のおかげで大抵のものが食えるようになったけど、マズイ。

何でか知らないが気絶してしまった。

それで気が付くと、マスターは、闇ギルドの連中を説得していた。

「よく解らん結果になったな」

「それにしても…」

「『腹減ったー』」

## ナツ、村を食う（後書き）

覚えた魔法

マスター・マカロフの光魔法・巨人化

後半、手抜きになってしまいました。

次回は呪いの島の前振りです。

## ナツVSエルザ（前書き）

前はグダグダになってしまっで済みませんでした。  
そして今回もグダグダかもしれせん。



## ナツVSエルザ

マグノリア、ギルド前

今、ギルドの前で、ナツとエルザの戦いが始まるうとしていた。ちなみにエルザは、耐火能力のある鎧、炎帝の鎧になっていた。

「始めっ！」

マスターの開始の合図と同時に繰り出した。

「ダアアアッ！」

「フッ！」

「ウオッ！」

しばらく両者の攻防が続き、共に一撃を入れようとしたその時、パーーーーーンと音が響いた。

二人はピタッと動きが止まった。

音を出した張本人（張本蛙？）は前に出て名乗った。

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議員の使者である！」

「評議員！？」

「使者だつて！？」

「何でこんな所に？」

「あのビジュアルについてはスルーなのね……」

レヴィ達シャドウ・ギアが驚いた。

そして使者について突っ込むルーシィ。

「先日のアイゼンヴァルト事件において、器物損害罪他、十一件の罪の容疑で、エルザ・スカーレットを逮捕する！」

「えっ？」

「なっ！？なんだとー！？」

それからしばらくして、ギルド内ではシーンと静まっていた。

いや、カウンターの方でコップに閉じ込められて騒いでいるトカゲがいた。

「出せー！俺をここから出せー！」

この喋っているトカゲこそ、姿を変えられたナツである。

「何をしたんだアイツ？」

「ギアス、あなた何処にいたの？エルザが逮捕されちゃったのよ！？」

「見たいだな。聞いてるよ」

「ギアス、どうにか出来ないの？」

「無理だな。評議員のする事は、例えば白でも、あいつらが言えば黒くなってしまうんだよ」

「そんな…」

えっ、今まで何処に居たかって、もう少ししたら解るから。それからしばらくして…

「やっぱり放って置けない！証言をしに行きましょう！」

「まあ待て！」

「なに言ってるの！？これは不当逮捕よ！判決が出てからじゃ間に合わない！」

「今から急いでも判決には間に合わん！」

「でも…」

「出せー！俺を出せー！」本当に出しても良いのか？」「ドキッ！？」

「「「「？」」「」」」

トカゲナツの様子がおかしかった。

まあ、あれはナツじゃないしな。

「どうしたナツ？急に元気が無くなったな」

黙ってしまったトカゲナツ？に、マスターは魔法をぶつけた。  
煙が上がると、そこに居たのはマカオだった。

「マカオ！？」

「「ええっ！？」」

またしてもシャドウ・ギアが驚いた。

「「何でー！？」」

ルーシィと珍しくエルフマンが突っ込んだ。  
するとマカオは、

「すまねえ、ナツには借りがあつてよ。ナツに見せかける為に、自分からトカゲに変身したんだよ」

「じゃあ、本物のナツは！？」

「まさか、エルザを追つて…」

「ああ、多分…」

「洒落になんねーぞ！あいつなら、評議員すら殴りそうだ！」

「全員黙っておれ！」

皆がマスターの方に向いた。

「静かに結果を待てばよい！」

皆がシーンとなってしまうていた。

するとその時、リクエストボードの後ろにある樽から、物音がした。

「！？何だ！？」

皆が注目する中、グレイはその樽の中を調べたら、そこには、手足を縛られ、猿轡をしているナツが居た。

「ナツ！？」

「……………ええっ！？」「……………」

これはさすがに全員が驚いた。

裁判所に向かった筈のナツがここに居る事に。

「お前、裁判所に行つてたんじゃなかったのか？」

「ナツウ、せつかく俺がトカゲに化けてまでお前を行かせたのにい  
ー！？」

マカオが若干キャラが壊れてないか？

「何の話だよ？意味わかんねえ？」

「それはこっちのセリフだよ。テメエがなんでこん中にいたんだよ  
？」

すると、かすかに笑い声が聞こえた。

「ぷ…………ぷ…………ぷすつ……………」  
「……………」

全員が、ギアスの方向に向いた。

「まさか、ギアスお前か？」

「…ああ」

「えー！？じゃあギアスがナツを捕まえたの！？」

「ちよつと待て、俺がいつギアスに捕まったんだ？」

「……………はあ？」「……………」

「だつてお前、エルザと決闘して「俺はまだエルザと戦ってねーぞ？」「えっ！？」

話が噛み合っていない状況になっている様子。

その疑問を、ナツの一言で更に困惑する。

「俺が戦つたのはギアスだぞ」

「ええっ！？ギアスと！？」

そう言つてギアスの方向に向くルーシィ。

「ああ、先にナツと戦つてたんだ」

「でもギアス強えーよ。手も足も出せなかったからな！」

「じゃあ、どうして？」

「んで氣い失つて、今起きたんだけど」

「……………ええっ！？」「……………」

さっきまで氣絶してた奴が、さっきエルザと戦つてたナツはと皆が疑問に思った。

だが、その答えはギアスが答えた。

「さっき、エルザと決闘してたのって、実は俺なんだよ」

「……………えええ!?」「……………」

「てことはじゃあ、最初から入れ替わってたって事!？」

「そういう事になるな」

「やるのうギアス」

「暢気な事言ってる場合じゃないですよ。エルザはどうなるのよ!」

ルーシイは思いっきり突っ込んだ。

「大丈夫なんじゃない?」

「大丈夫なんじゃないって、薄情過ぎませんか!？」

「どうせ夕方になったら帰ってくるよ。マスターもそれが分かっているから待つてるんだろ?」

「そういう事じゃ」

「……………?」「……………」

夕方頃、エルザが戻ってきた。

魔法界の秩序の為、形だけの逮捕という形だったという。

「結局、形式だけの逮捕だったなんてね。心配して損しちゃった」

「そうか、カエルの使いだけに、すぐ「帰る」!」

「…さ…さすが…氷の魔導士…半端なく…寒い……………」

一瞬、時が止まりそうでした。

「んで、エルザと漢の勝負はどうなったんだよナツ!」

「(漢?)」



ミストガンが秒読みしていき、ミストガンの姿が見えなくなると、皆の目がパチツと開いた。ちなみにナツは寝たまま。

「この感じは…ミストガンか？」

「あんにやろ」

「相変わらず、強力な魔法だね」

レビイ達はそれぞれ言ったが、どこか眠そうな喋り方だ。まあ、寝起きだからな。

「ミストガン？」

「フェアリーテイル最強の男候補の一人だ」

「ふえっ!？」

「どういう訳か、誰にも姿を見られたくないらしくて、仕事を取る時は、いつもここうやって、全員を眠らせちゃうのさ」

「なにそれ!？怪し過ぎ!？」

「だからマスターとギアス以外、誰もミストガンの顔を知らねえんだ」

「えっ、ギアスも!？」

「まあな。俺はこういった魔法には強いからな」

「やっぱり最強候補だけに、すごいわね。それでどんな顔なの、そのミストガンって人は？」

「覆面してたからそこまで分かんないって」

「そうですか。マスターはともかく、ギアスだけしかミストガンって人を知らないなんて」

「いゝや、俺あは知ってんぞ!」

「「「「「!!!?」「」「」」」」」

二階から声がして、そっちの方を見たら、右目に傷を付けた男が居た。



「ラクサス!？」

「居たのか!？」

「珍しいな!？」

そう、ギアス、ミストガンに続くフェアリーテイル最強の男候補のラクサスだった。

「ミストガンはシャイなんだ。あんまり詮索してやるな」

そこで目を覚ますナツ。

「ラクサス!俺と勝負しろお!」

「さっきエルザとギアスに負けたばっかじゃねえか」

「そうそう、エルザやギアスごときに勝てねえようじゃ、俺には勝てねえよ」

「「どついう意味だ!」」

「おい…落ち着けよ二人とも…」

「俺が最強つて事さ!」

自信満々に言うラクサス。

「つか、昔散々ボコにした事忘れてんじゃねーかあいつ?」

「降りてこいコノヤロー!」

「お前が上がって来い!」

「上等だ!」

そう言って二階に行こうとするナツ。

あいつ、二階はダメなものな。仕方ない止めるか。

ギアスは弱めのグラビトン、シャイルグラビティションをナツにか

け、床にへばり付けた。

「ギャツ!?!」

「ナツ!二階へはまだ上がるな!」

「どうしたのナツ!?!何で起き上がらないんだろ?」

「ギアスの重力魔法だ。あれを喰らえば、自力じゃ起き上がれねえからな」

グレイの説明で啞然とするルーシィ。

「へへっ、怒られてやんの」

「グウウ!?!」

「ラクサス!お前もあんま煽んな!」

「フェアリーテイル最強の座は誰にも渡さねーよ!エルザにもミストガンにも、そしてギアスにもだ!」

そしてラクサスは、自分に指差して、

「俺が最強だ!」

と豪語した。

「フン、俺に散々ボコされてた奴が最強だと?」

「昔は昔さ。今は、俺が強え!」

話が長引きそうなので、飛ばします。

夜、ギルド内

俺はカウンターの所で一杯飲んでたら、ルーシイが来た。

「ねえギアス、さっき貴方が言ってた、二階には上がったちゃいけないって、どういう意味ですか？」

「ん？そうだな……」

「まだ、ルーシイには早い話だけどね」

「ミラさん！」

「ミラ、説明よろしく」

ギアスが説明しようとしたら、ミラが来たから丸投げした。

「二階のリクエストボードには、一階と比べ物にならない位難しい仕事が増っているの。S級のクエストよ」

「S級!？」

「一瞬の判断ミスが死を招く様な仕事よ。その分、報酬もいいけどね」

「へ〜」

「S級の仕事は、マスターに認められた魔導士しか受けられないの。資格があるのは、エルザ、ギアス、ラクサスを含めて、まだ6人しか居ないのよ」

「……………」

ルーシイは、ギアスの方を一瞬見てた。

「S級なんて目指すものじゃないわよ。本当に命がいくつあっても足りない仕事ばかりなんだから」

「みたいですね」

ミラ、そういう言い方だと自分もS級だって事言ってる様なもんだ

けど、ルーシイは気付いてないし…いいか。

「そうだミラ、俺が次にS級クエストに挑戦する時は、ナツとグレイ、ついでにルーシイもつれてっついていいか？」

「ええっ!?!?」

やっぱり啞然としてるな二人とも。

「いや無理ですよS級なんて!?!?」

「そうよギアス、ナツは喜びそうだけど」

「いや、いい機会だ。あいつらには、S級の厳しさって奴を知るには丁度良いからな」

「そうは言っても…」

「てゆうか、なんであたしまで!?!?」

「だって君は、ナツとチーム組んでんだろ?それにこの間のオシバナ駅での戦闘も素人とは思えないくらいの腕も見せてくれたし」

「(見せつけるんじゃ無かった…)」

サポートした事を後悔したルーシイでした。

「心配しなくても、俺が受ける仕事だからな。九割は自分がやるけど、残り一割は手伝ってもらう程度だから」

「うん…」

まだ悩んでるな。仕方が無い、この手でいくか。

「それにS級の中には、追加報酬として黄道十二門の鍵が貰える仕事があるしね」

「ええっ!?!?そうゆうのもあるんですか!?!?」

「ああ」

良し、かかった。

「分かりました。ギアス、あたしも手伝うね!」

「でも今はまだ、時期じゃないからまた今度つて事だから」

「そ、そうですか(なんだ、今からかと思つた)……」

「ギアスがほとんど終わらせるのなら問題はなさそうね」

「そうだな、さてと……じゃ二人とも、お休み!」

「「お休み」」

さて、明日は朝早くに仕事を受けて、あとから合流しないと。

翌日(夜明け頃)、ギルド内

「早くに目が覚めちゃったね」

「そうだな」

ルシアが早くに目覚めたの嬉しい誤算だったな。

「どれにしようかなつと、おっ盗賊退治の仕事があるな」

「じゃこれにしようか」

「なんじゃギアス、早いの〜」

「あっマスター、この仕事行って来るね」

「おお、行って来い」

さうして、これでガルナへの伏線が出来たな。

## ナツVSエルザ（後書き）

次回は、呪われた島ガルナ編です。

月の雫／ガルナ島、最終決戦（前書き）

原作をほとんど飛ばしています。

## 月の雫、ガルナ島、最終決戦

二日後の昼過ぎ、マグノリア、ギルド前

「あつという間だったんねギアス」

「そうだな、移動に時間かかっただけで、戦闘はほんの10分で片付いたからな」

多分ナツ達は今頃、島を散策中だと思うな。

「「ただいま」」

「ギアス！ やつと戻ってきおったか！」

「うわっ！？ どうしたんだマスター！？ そんなに慌てて！？」

「お願いギアス、ナツとグレイとルーシィを連れ戻して来て！」

「ミラも、一体どうしたんだ？」

やつぱ慌ててるな。

「エルザはさつき向かった。ギアスも直ぐに向かってくれ！」

エルザはもう行った後か。

「ナツ達はどこに行ったんだ？」

「呪われた島、ガルナよ！」

「はあっ！？ ガルナだって！？」

「あの呪いの島じゃないか、ナツ達何考えてんの！？」

「いや、多分何も考えてないと思うぞルシア」



その場に居た連中も、うん！と強く頷いた。

「ともかく、ガルナに行つてナツ達を連れ戻せばいいんだな？」

「頼むぞギアス！」

夜に近い夕方、ハルジオンの沖

現在、ルシアのエリアでガルナ島を探してたら、海賊船を発見した。よく見てみると、エルザが乗っていた。

「ルシア、あの海賊船に下りてくれ！」

「ええっ、海賊船に下りるなんて」「エルザが居るんだ」「ええっ！？分かった！」

そして、海賊船に下りた。

「おい、エルザー」

「！？何だ、ギアスカ」

うわー、すごい不機嫌だなエルザ。

「何だつて……」

「すまない、今回の事で気が立っていたんだ。お前達は何故ここに？」

「俺もマスターに頼まれて飛んで来たんだけど」

「そうだったのか」

「あのう、こちらの方は、姐さんの知り合いで……」

「「姐さん？」」

「気にするな」

明け方、ガルナ島

そんなこんなで辿り着いたガルナ島。

「お前達はここで待て」

「留守番頼むぞ〜」

「『『『『はい、姐さん！兄貴！』』』』」

いつの間にか兄貴呼ばわりされた。

海岸沿いを歩いていると、津波が見えたので駆け付けようとしたら、でかいネズミが飛び込んで来たもんだから、エルザが斬りかかり、俺は飛び蹴りかました。

すると、近くに居たのかルーシイが近寄って来た。

「ギアス、エルザ「ギロツ！！」さん……」

うわぁ、睨んだだけで丁寧語になったよこの娘。

「（そうだ、あたし達ギルドの掟破って、勝手にS級クエストにきちゃったんだ…）」

ズーン、て言葉がルーシイの頭に付いてる様だ。

「ルーシイ、私達が何故ここに居るか、解っているな？」

「…連れ戻しに……ですよね〜……」

ですよね〜の部分山彦風に響いた。

俺はふと崖の上を見たら、一瞬だったが仮面の男がいた。すぐにいなくなっただけ。

「ルーシィ〜、よかつたー、無事だつて…ハツ!？」

そして後から来たハッピーが、エルザに気付いて全速力で逃げるハッピーだったが、いつの間にかエルザに捕まっていた。

「ナツは何処だ!」

「ちよつと聞いて、勝手に来ちゃった事は謝るけど、今この島は大変な事になってるの、氷漬けの悪魔を復活させようとしてる奴等がいたり、村の人達はそいつらの魔力で苦しめられていたり、とにかく大変なの!あたし達、なんとかこの島救ってあげたいんだ!」

その言い分、今のエルザじゃ逆効果だぞ。

「興味が無いな!」

「!?!じゃあせめて、最後まで仕事w「チャキツ!」「ヒツ!?!」

エルザは、ルーシィに剣を突き付けた。

「違うぞルーシィ、貴様等はマスターを裏切った!ただで済むと思っなよ!」

めっちゃ怖ええよエルザ!ん?ルーシィが助けてって目で訴えているみたいだ。でもこの場は自分の命が大事です。

ギアスは、自分の胸の前に指で十字を切った。

「(そんな〜、てゆーか縁起でもない事しないで下さい!)」

そして俺は近くで気絶している、イタイ考えを持つシェリーの魔法を覚えた後、溶かされた村の方に行ったら、逆立てた青髪の太眉毛の男、波動のユウカが倒れてたので、ユウカの魔法を覚えた。バカ犬のトビーが居なかったのは、遺跡に戻ったからだと思う。まああいつのは覚えたくなかったから丁度いいや。それでハッピーが、少し離れた所に村の人達がいた事を確認した後、俺達はそっちの方に向かった。

昼過ぎ、資材置き場

村の人達に事情を話してテントを貸してもらい、グレイを待つ事にした。

エルザは玉座に座っている感じで座っていて、その左隣に縛られたルーシイとハッピーが泣いていた。ちなみにギアスとルシアは、エルザの右隣に立っていた。そして、グレイがやって来た。

「遅かったな、グレイ！」

「エルザ！？…ルーシイ、ハッピー！？…あつ後ギアスにルシア」

俺らだけ反応薄いよグレイ！

「だいたい事情はルーシイから聞いた。お前はナツ達を止める側ではなかったのか？呆れてものも言えんぞ」

「ナツは？」

「それは私が聞きたい」

「村で、零帝の手下と戦ってた筈なんだけど、行ってみたら居なか

ったの。ナツの事だから大丈夫だとは思うけど、それでとりあえず  
グレイの所に連れて行ってエルザに言われて」

「おいらが空から探したんだよ。そしたら、この資材置き場に人が  
集まっているのを見つけたんだ」

エルザがグレイに近寄った。

「グレイ、ナツを探しに行くぞ！見つけ次第ギルドに戻る！」

「な、何言ってるんだエルザ！？事情を聞いたんなら、今この島で何  
が起こってるか知ってるだろ！」

「それが何か？」

「なっ！？」

「私達はギルドの掟を破った者を連れ戻しに来た。それ以外に一切  
興味は無い！」

少しは手伝う気は無いのかな、相変わらず頑固だな。

「この島の人達の姿を見たんじゃないのかよ！」

「見たさ」

「それを放っておけと言うのか！？」

「依頼書は各ギルドに発行されている。正式に受理されたギルドの  
魔導士に任せるのが、筋では無いのか？」

「見損なっただぞエルザ！」

「なんだと！」

ここまで関わった者なら、最後まで面倒みたいと思うだろうけど、  
エルザはそうはいかないからな。

「エルザ様になんて事を！」

「様って…」

まあ、様付けしたくなるよな。

「お前までギルドの掟を破るつもりか！」

取り出した魔法剣をグレイに付き付けるエルザ。

「ただでは済まんぞ！」

そしてグレイは、付き付けた剣を掴んだ。

そして、互いに睨み合った。

ルーシィ達は怯えていた。

「勝手にしやがれ！これは俺が選んだ道だ！やらなきゃなんねえ事なんだ！」

そう言ったグレイは、その場から去ろうとしていた。

「最後までやらせてもらう。斬りたきゃ斬れよ！」

「ぐっ！」

グレイはテントから出ていった。

そしてエルザはルーシィ達の方に向いた。

「「ひっ！？」」

「ちよっ！？エルザ、落ち着いて！？」

「グレイは昔の友達に負けて気が立ってんだよ！？」

そしてエルザは切った、縄を。

「これでは話にならん！全ては仕事を片付けてからだ！」

「「エルザ！」」

「勘違いするなよ！罰は受けてもらうぞ！」

「「あい……」」

ガクツとしてるな二人とも。

てゆうか俺って、真剣マツで空気になってなかったか？

夕方頃、月の遺跡への道

俺達は走っていた。

道中グレイから、零帝リオンが厄災の悪魔、デリオラを復活させる目的を聞いた

「デリオラを倒す？それがあいつの目的なの！？」

「わざわざ氷漬けになっている奴をか？」

俺は知らないフリでグレイに聞いてみた。

「……リオンは昔から、ウルを超える事だけを目標にしてきた。だから、そのウルがいなくなったら今、ウルも倒せなかったデリオラを倒す事で、ウルを超えようとしている！」

「そっか！死んだ人を超えるには、その方法しか」

「あい」

「らっつ」

「いや、あいつは……リオンは知らないんだ！」

「えっ！？」

「確かにウルは、俺達の前から居なくなつた。でも、ウルはまだ……」

…生きている！」

「……えっ!?」「……」

「どうゆう事だ?」

さすがのエルザも驚いているな。

「十年前……」

長くなりそうだから端折ります。

デリオラの襲撃で壊滅した街の中にグレイだけが生き残り、ウルに拾われて弟子入りして、リオンと一緒に修行して（この時にグレイの脱ぎ癖が付いた。つかウル、修行するのに何で下着姿でやるんだよ）、デリオラの情報を聞いてウル達の制止も聞かずに一人で向かったグレイ、圧倒的な力を持つデリオラに恐怖したグレイ、そこにウルが駆け付けた、リオンが絶対氷結アイス・ド・シエルをかけようとしたがウルに止められた、ウルがアイス・ド・シエルを行い、ウルはデリオラを覆う氷となった。

大まかな説明はこれくらいにして、遺跡が見える所まで来た所、遺跡の様子がおかしかった。

「あれ?えくと、遺跡が…傾いてる?」

そう傾いているのだ。

「どうなってるの?」

「ナツだな」

「ナツだね」

「つかナツしかないだろ」

「ああ」

「どうやったか知らねえが、こんなデタラメな事するのはあいつし



かいねえ。狙ったのが偶然か、どちらにせよ、これで月の光はデリオラには当たらねえ」

「あちこち壊しちゃう癖が、こんなところで役に立つなんて」

「おいら知ってるよ、そーゆうのを伏線て言うんだよ」

すると、茂みの中から、多数の投剣が飛んで来た。

「危ない！」

ルーシイ達をどつき、避難させた。つか木にぶつかって痛がってるんですけど、

エルザとグレイは難なく避けて、ギアスは飛んで来たやつを食べた。

「何者！」

「見つけたぞ、フェアリーテイル！」

「零帝様の邪魔は許さん！」

「こいつら……」

「リオンの手下か？」

「囲まれちゃった!？」

「ここは私達に任せる！」

達っつー事は俺もか？

エルザは魔法剣を取り出した。

「行けグレイ、リオンとの決着を付けてこい！」

「……（頷いた）」

「大丈夫、あたし達も居るから、行って！」

「あい！」

「らっ！」

「お前ら……ふっ（あいつは、ウルが生きている事を知らねえ、止め

られるのは…俺だけだ！」

しばらく攻防が続いた。

「怯むなあ、零帝様の邪魔をする者を許してはならぬ！」

「……………おおー！」

その時、地震が起きた。

そっか、ザルティ（ウルティア）が時のアークで直したんだな。覚えてえ。

「なんの音だ？」

「さあ？」

とぼけてみました。

「あつ！？そんな！？」

「傾いてた遺跡が、元に戻ってるよ！？」

「嘘〜！？」

皆唖然としていた（ギアス以外は）。

「これでは、月の光がデリオラに当たっちゃうな」

「どうなってるのよ〜！？」

また攻防が続いた。

あつルーシィが蟹を召喚した。

「君は確か……」

「オシバナ駅の美容師の……」



「耳が痛いよ〜!?!」

「何だ!?!この音は!?!」

「まさか、デリオラが!?!」

とつとつ復活した厄災の悪魔、この時グレイはある決断をする。

月の雫／ガルナ島、最終決戦（後書き）

覚えた魔法

シエリーの人形撃にんぎょつけき

ユウカの波動

次回はガルナ島後編です。

**BURST**、届け、あの空に（前書き）

後半の方が少ない様な感じでした。



「なあエルザ、声はしてもムーンドリップは止まらないな？」  
「そうだな。つまり、デリオラの復活は、まだ完全ではないと言う事だ！」

「だったら話は早い、直ぐに止めれば、まだ間に合うかもしれん！エルザ達は上で儀式を止めてくれ！俺はもしもの為にデリオラと戦う！」

時のアーク覚えたいしな。

「ええー！？そんな無茶ですよー！？いくらギアスが規格外の超人だからって無茶ですって！？」

「ルーシイ……俺に対しての印象を暴露しなくてもいいんじゃない？」  
「あややだ、あたしったら……」

規格外の超人で、まあ、そうだよな。

「気にするなルーシイ、私もそう思っていたからな」  
「おまえもかよ！？」

ルーシイはともかく、エルザまでそう思われてたなんてな。普通にシヨックだ。

「とにかく、そっちは任せた！」  
「ちよっ、ギアス！」

俺はすぐさま地下に進んだ。

月の神殿、地下



「良し着いた。さて、ナツは「アークだかポークだか知らねえが、この島から出てけ!!!」マズイツもう終わっちまう!? 仕方が無い!」

俺は、ある決意をした。

「そっぴや俺にも時が操れるんだ! 未来だ! 1秒後にお前w「ウラアーツ!!! 敵は何処だアーーーーー!!!」ブベバアツ!!!?」

ナツに飛び蹴りをかましたギアス。

「おや!???」

「ん? なんか、蹴つ飛ばした様な?... ん、テメエ、零帝とやらの手先か!」

「それより良いんですか? あれを?」

そっぴってザルティ(ウルティア)は、痙攣してるナツを指差した。

「あつ、ナツ! テメエ、よくもナツを!!!」

「いや、貴方が蹴つ飛ばしし「許さねえ、俺の仲間をよくも、ゼツテエ許さねえ!!! (やや棒読み)」ええっ!?!」

そっ、ナツを蹴つ飛ばして知らんぷりする。これがさっき決意した事だ。

「オラア行くぞ!」

ギアスは、ザルティに向かって行った。

「やれやれ、人の話は聞くものですぞ」

水晶を飛ばして来た。

「そんなモン！」

水晶を壊したが、直った。

「なっ！？」

「私は物体の時を操れます。故に、水晶を壊れる前の時間に戻しました」

「マジか！？」

「さて、行きますぞ！」

直した水晶の他にも、たくさんの水晶が飛んで来た。

「ふっ、ノロノロビーム！」

ギアスは、右手を影絵のキツネみたいにしてビームを放った。ノロノロの実の効果で、水晶達の動きが遅くなった。

「なっ！？水晶達が遅くなった！？どういう事です！？私の制御が効きませんか！？」

「当たり前だ！これに触れたものは全て遅くなるんだからな！」

「まさか！？貴方も時を操れるのですか！？」

「いゝや、遅くするだけだ！」

「なんと！？」

「隙あり！ノロノロビームソード！」

「！？」

こんな時の為に用意しておいた柄だけの剣を使って、ザルティの両腕、両足を切った。

「ど、どういう事ですか！？腕が、足が動きませんか！？」  
「腕も足も遅くしちまったんだからな、動けねえだろ！」

いつの間にか、ザルティの前に現れたギアス。

「な！？」

「さして」

ギアスは、ザルティの顔を掴んだ。

「何を！？」

「ふふつ。フンぬ！」

ゴン！と頭突きをした。

「がはっ！？」

「もういっちょ！」

ゴン！とまた頭突きをした。

またゴン！

ゴン！

ゴン！

ゴン！

ゴン！

ゴン！

ゴン！









デリオラの右腕に突然亀裂が走った。

その亀裂は、右腕だけじゃなく、体全部に亀裂が走った。

「……!!???」「」

「(やつぱ、こうなつたか)」

「な、なんだ!?俺のでも、ギアスのもねーぞ?」

「ば、バカな!?そんな、まさか!?デリオラは…既に…死んで…!?!」

崩れて行く、デリオラだったものが…

「もしかして、氷漬けになってる間に、生命力を徐々に奪われてたのか?」

とりあえず知らないふりをした。

「では俺達は、その最後の瞬間を見ていると言うのか!?くっ、敵わん!俺には…ウルを…超えられない!」

リオンは泣きながら、自身の敗北を認めた。

「すげーな、お前の師匠!」

「ああ、そうだな。勝てなかったんじゃない、勝つのに時間がかかっただけだったんだな!」

そしてグレイは、泣きながらウルに最後の礼を言った。

「…ありがとうございます…ごいませ…師匠!」

「」  
「」  
「」



ガルナ島、海岸

「いやー、終わった終わったー！」

「あいさー！」

「ほんとー、一時はどうなるかと思ったよ。すごいねウルさんて！」

「これで俺たちも、S級クエスト達成だー！」

「やったー！」

「もしかしてあたし達、二階へ行けるのかなあ！」

「ふっ」

あーあ、騒いじゃって、これから起こる事、綺麗さっぱり忘れてるなこりゃ。

「おい、お前らー、何か大事な事忘れてねーか？」

「なんだギアス、忘れてる事って？」

その時、エルザが前に出た。

そして、ナツ、ハッピー、ルーシィ、グレイの四人は、忘れていた事を思い出した。

うわー、皆「「「ハッ！！」「」」て感じになってたな。

「そうだ！お仕置きが待ってたんだ！」

「その前にやる事があるだろ。悪魔にされた村人を救う事が、今回の仕事の本当の目的では無いのか？」

「それに、デリオラが死んでも、村人は悪魔のままだった。残る原因はムーンドリップによる影響しかない！だから、月を壊しに行くぞ！」

「「「（おいおい、無茶な事考えてるな）」「」」

「それがギアスです！」

色々あつて、資材置き場に向かったが、誰も居なかったが、村の一人が村に来てくれと言われて、村があつた所に向かった。

### 復活した村

ザルテイが直した村に来て、一回びつくりしてました。村長の頼みで、月を破壊してくれと迫ってきている。ギアスとエルザは、月を壊す事を考えていた。

「おい、とんでもない事をしれつと言ってるぞ」

「あい、それがエルザとギアスです」

エルザの疑問を言う為に、村中の人達を集めた。

それで、エルザの疑問を言いつづけてると、復活していた落とし穴に落ちた。

「キヤツ!?!」

「あつ!?!落とし穴まで復活してたの!?!」

「キヤ、キヤツて言った、ぞ!?!」

「か、可愛いな!?!」

「エルザにもそういう一面があつたんだな」

「お、怒られちゃうよ!?!」

「あたしの所為じゃない!?!あたしの所為じゃない!?!」

その後、何事も無かつた様に振舞つた。たくましいな!そして、いよいよ月を壊す事にしました。

エルザは、投擲力を上げる鎧、巨人の鎧きんじょうに換装し、破邪の槍を持つた。

「おおすげー！それをブン投げて、月を壊すのか！」

「……（いやいや、無理だから）」「……」

「しかし、それだけでは月までは届かんだろう。だから、ナツの火力でブーストさせて、ギアスは月目掛けて投げた槍を後押ししてくれ！」

「……ん!?」「……」

「ナツ、お前は私が槍を投げる時、石突の部分を、思いっきり殴るんだ！そしてギアスは、投げきった槍を遠距離攻撃用の魔法で押し出すんだ！巨人の鎧の投擲力と、ナツの火力と、ギアスの攻撃力を合わせて、月を壊す！」

あれ？確か、俺は必要無かったんじゃない？

「おーし、分かった！」

「オウ、了解！」

「行くぞ！」

エルザ、ギアス、ナツは高台の上に立った。

「あいつら、何であんなにノリノリなんだよ？」

「まさか本当に、月が壊れたりしないよね!？」

二人は気が気じゃない様子。

高台の上で準備が整い、エルザは月に狙いを定めた。

「ナツ！」

「うおらぁー！ー！ー！ー！」



割れた、

空が。

「……………ええっ!?!」「……………」

「月!?!」

「これは!?!」

紫の月が割れ、黄金色の月が姿を現した。

「割れたのは月じゃない!?!空が割れた!?!」

「どーなつてんだこりゃ!?!」

「この島は、邪気の膜で覆われていたんだ」

「膜?」

エルザは、ムーンドロップに発生したガスが結晶化して、ドーム状になつていた事を話した。

そして、村人達は光り出し、元の姿に……………戻らなかった。

いや、元に戻つたのは姿じゃなく、記憶が戻つた。

そう……………

「彼らは元々悪魔だつたんだ」

「えっ!?!」

「……………ええええええー!?!?!?!」「……………」

「(オーバーだな皆)」

「マ、マジ!?!」

「あ……………うん、言われてみれば……………まだちよいと、混乱してますが……………」

グレイは確認の為か、村人に聞いてみた。



「ボボが生きてたぞ！」

「やったー！」

「めでたいぞ！」

それを温かく見守るフェアリーテイル。

「ふっ、悪魔の島か」

「文字通り、悪魔達が住む島だな」

「でもよ、皆の顔見てっと、悪魔というより…天使みてえだな」

皆が微笑んだ。

「今宵は宴じゃー！悪魔の宴じゃー！ー！」

「悪魔の宴って、すごい響きね…」

「あい」

「らっ」

ほんと、すごい響き。

「ああ、ギアスが百人ぐらいいて、女の子が居たらまさに悪魔の宴になるな」

「「「「言えてる」「」「」

「？」

「……お前らな……俺をなんだと思ってるやがる」

「「「「別に……」「」「」

ルーシイだけが解っていないかった様だ。

そんなこんなで、宴が始まった。

ナツは松明の火を食べて、グレイは悪魔の女性にモテて、俺は悪魔の少女達とたわむ……もとい、お話してた。

するとそこに、ユウカとシェリーが来て、エルザが叩きのめしたが、実は詫びをしに来たらしい。なので宴に参加させた。そして翌日、

「な、なんと！？報酬は受け取れない…によ！？」

「ああ、気持ちだけで結構だ」

「…いや、しかし…」

「今回の件は、ギルド側で正式に受理された依頼ではない。一部のバカ共が先走って成功した仕事だ！」

エルザも固いな。

「お前らなあ、S級やりたかったんなら、少し待てば俺が連れてってやったのによ」

「…なにっ！？」

「もしかして、この間の事本気だったんですか！？」

「そうけど？」

「ちよつと待てルーシィ、この間の事って？」

「実は、時期が来たらギアスがS級やるから、その時に連れてってもらえるって事なんだけど、まさか本気だったなんて」

「じゃあ俺、損しちまったって事か！？」

「でもま、こつやつてS級に手を出して、生きて帰れるんだから大したもんだよ」

「そ、そうか？」

「でも、次に無断でやるようなら、こつちにも考えがあるからな！」

「…」「…」  
「気を付けます！？」「…」

話が終わった頃、丁度エルザが追加報酬の人馬宮の鍵を貰っていた。

「では、せめてハルジオンまで送りますよ」



「いや、船は用意出来ている」  
「えっ？」

ガルナ島、海岸

「海賊船!?!」  
「まさか、強奪したの!?!」  
「さすが!」  
「いや、そこまでしてないから」  
「エルザがちよつと脅しただけだよ」

ナツ、ハッピー、グレイ、ルーシィの四人はブルツとした。

「姐さ〜ん!兄貴〜!」  
「あ…姐さん!?!兄貴!?!」  
「なにやら気が合ってたな」  
「さすがエルザ様!ギアス様!」  
「だから様って…!」  
「舎弟の皆さんも、乗ってくださえ〜!」

どうやら四人は、俺とエルザの舎弟扱いみたいだな。  
そんなこんなで、ガルナ島を後にした。

「皆さん、ありがとうございます!」  
「元気でね〜!」

ちゃんと別れの挨拶もした。  
崖の上にいたりオン達をちらつとだけ確認した。

数日後、マゲノリア

「ん〜へへ、帰ってきたぞー！」

「たぞー！」

「しっかし、あれだけ苦労して鍵一個か…」

「折角のS級クエストなのにね」

「正式な仕事ではなかったんだ、これくらいが丁度いい」

「そうそう、文句言わないの」

「そりゃあ一番得したのはルーシイだけだからな」

「売ろうよそれ」

「何てこと言うドラネコかしら!？」

貴重な鍵を売ろうとするハッピーに嫌がる素振りをするルーシイ。

「で、今回貰った鍵は、どんなのなんだ？」

「人馬宮のサジタリウス！」

「人馬だと!？」

グレイは首から上が馬になってる人間風を想像した。

「いや、違うでしょそれ」

ルーシイは馬の首部分が人間の上半身のを想像した。

「いや、案外…馬の着包みを着た感じだったりして」

「さすがにそれは…」

ギアスは正解を言ったんだが、信じてもらえなかった。  
一方ナツは、人顔の花にタコのような足があるのを想像した。

「馬でも人でもないよ、それ…」

しかし、無情にも陽気な彼らに絶望が降りかかる事に気付いてなかった。

「のん気な事だな。まさか帰ったら処分が降るのを忘れたわけではあるまいな？」

「「えっ!?!」 処分!?!」

「ちよつと待つて!?!それつてもう、お咎め無しになったんじゃ!?!」

「バカを言つな!」

無情にも死刑宣告をするがごとく、四人に絶望が降りかかる。

「お前達の行動を認めたのは、あくまで私の現場判断だ!罰は罰として受けて貰わねばならん!」

「「「げっ!?!」 「そんな〜!?!」

少しは弁護してやろうかね。

「で、でもよエルザ、折角S級クエストを遣り遂げたんだし、少しくらいh「ギアス!」はっはい!?!」

「あんまり甘やかすな!それに、判断を下すのはマスターだ!私は弁護するつもりは無い!もちろんギアスもだ!そうゆうわけだから、それなりの覚悟しておけ!」

ギアスが助け船を出してくれて、四人は希望が来たって顔をしてい



まだ頭を抱えて震えるグレイとハッピー。

取り残されたルーシーとギアス。

そして置きっ放しの荷物。

ていうか、荷物の中に何で魚とヤシの木があるんだ？

## BURSTへ届け、あの空に（後書き）

月の破壊イベントについてはグダグダにしてしまった。

初登場の悪魔の実

ノロノロの実

覚えた魔法

ザルティ（ウルティア）の時のアーク

初登場の滅竜魔法

虹竜鉄棍

次回は番外編です。

## チェンジリング（前書き）

番外編です。

入れ替わりモノです。

尚、入れ替わるのは二人ずつじゃなく、全員バラバラに入れ替わります。

## チェンジリング

今回お見せするのは、とても不気味な魔法。このお話は、貴方の意識は貴方の体を離れ、その魔法の中へと、入って行くのです。

フェアリーテイル

ガルナ島の件で戻ってきた俺たちは、ギルドに帰ってきた。

「マスターは居られるか？」

「お帰りなさい。島はどうだった？ちよつとは海で泳げたりした？」

相変わらず天然発言をするミラ。

もうちよつと「ミラさん、空気読んで……」：さすがルーシィ。

「マスターは！」

「評議会の何たら会合？とか何とかがあるとかで、昨日から出かけてるぜ」

その何とかって何だよマカオ。

その時四人は、「……ほっ」「……」と安心していた。

「今んとこセーフ！」

「よし！じーさんが帰ってくるまで、アレは無えな！」

「良かったよ〜！おいら達、まだしばらく地獄を見なくて済むよ〜！」

「だからアレって何なのよ！？あゝ気になる！？あゝ怖い！？実態



「が分からないだけに尚更怖い!?!」

ナツとグレイは安心がった。

ハッピーは涙を流しながら喜んでた。

ルーシイは何が起きるのか混乱していた。

「静かにしている!」

「くくくヒイ~~~~!?!?」「くくく」

こうゆう時のエルザってホント怖いな。

ミラが言うには、そろそろ帰ってくるらしい。

「マスターが帰れば直ぐに判断を仰ぐ! S級クエストに勝手に手を出した罪は罪! 心の準備をしておけ!」

「くくくはっはい!?!?」「くく」

「だからどーゆー心の準備をすればいいのよ!?!?」

俺は無言で自分の胸の前に、指で十字を切った。

「だから、縁起でもないって!」

やっぱりルーシイに突っ込まれる俺。

「まつしよーがねーな。それにしてもよ、ナツとグレイはともかく、ルーシイちゃんがあんな目に遭っちゃうのか、気の毒になあ…!」

「気の毒って…!」

ワカバが雰囲気のあるように言った。

ワカバの一言で頭に来たのか、ナツとグレイが掴みかかった。

しばらくして、ナツがリクエストボードに張ってある物を見た。

「ん？何か変な依頼があるぞ？」

文字を読めれば50万Jの依頼。

その依頼書の周りには、ナツ、ルーシイ、グレイ、ハッピー、エルザ、ギアスのいつものメンバーで囲ってた。

ちなみにルシアは、カウンターでサラダを食べていた。

ナツは何気無く呼んでしまった。

「えつと、ウゴ…テル…ラス…チ…ボロ…カニア…だー全然わかんねー!？」

その時、依頼書が虹色に光った。

「……ん?」「……」

「なんだありゃ？」

「へへ、人間お仕置きの恐怖に耐えきれなくなると、虹まで出るのか」

「なんか、違っただろそれ……」

ワカバの一言に突っ込むマカオ。

そここうしてる内に、光が収まった。すると、

「熱いー!？」

ナツ?が急に熱がり始めた。

「?炎使いが何で熱いんだ？」

エルフマンが突っ込んだ。

「何これ〜!? 体の中が異常に熱い〜!?」

「「「「「はあ??」「「「「「」

その場に居たメンバーが不思議がってた。

「はっ、何か重てー!?!? 何か胸の辺りが非常に重てー!?!? こっ、腰に来る〜!」

ルーシイ?も様子がおかしかった。

「ど、どうしたルーシイ? 声のトーンがやけに低いぞ?」

「そ、そんな事n…: えー!ー!ー!ー!?!?」

ナツ?が答えようとして、ふと隣にいるルーシイ?を見て叫んだ。  
すると、

「ん?何か高えな?」

ギアス?が周りをキョロキョロ見てた。

「(まあ、私の身長はナツより高いからな。そう思うのも仕方が無いな。しかし、私はこうなっているとかな…: )」

エルザ?は心の中でそう思った。

「おいギアス、何キョロキョロして、てあれ?何だこの声!?!?」

ルーシイ?がギアス?に注意しようとしたが、自分の声に不思議が

つてた。

「な、なんか、いつもとパターンが違うが…？」

マカオは不思議がってた。

「一体何を騒いでいる！」

「……ん？」「……」

声が出た方向に向いたメンバー達、そこにいたのは偉そうな態度をとるハッピー？だった。

「あれ、ナツ！何か身体が寒いよ！？」

「ん？何言つてだグレイ？何でテメーが寒がつてんだ？つか視界が暗えな！？」

それはサングラスを付けているからだ。

グレイ？とギアス？の会話で、ますます啞然としているメンバー達。

「どうしたのだ、お前達？」

「はっ！？何故私がそこにいる！？それに何なんだこの猫型体型は！？というか、これは猫そのものだ！？私は換装した覚えは無いぞ！？」

とうとう周りが呆然としていた。

そうポーゼンと文字が見える位に。

「まだ気が付かんのか？私達の心と体が、入れ替わっている！」「……ええー！？」

エルザ？とハッピー？が謎を解いたかの言った。

「ど、どーいう事なんだよエルザ！？ハッピー！？」

「私がエルザだ！」

「私はギアスだが」

「ええ！？？」

「ハッピーはおいらだよー！ギアスひどいよー」

「ああ、うるさい！」

ギアス？がエルザ？とハッピー？に問い詰めた。  
そして後ろの方で愚痴を言ってるグレイ？

「と、言う事は…」

ナツ？がもしかしてって思った。  
そう、今の彼らは、

心 身体

ハッピー グレイ

グレイ ルーシィ

ルーシィ ナツ

ナツ ギアス

ギアス エルザ

エルザ ハッピー

という感じになっているのだ。

「……………ええー！？」

ギルド中が騒いだ。

その時、

「古代ウンペラー語の言語魔法、チェンジリングが発動したのじゃ！」

マスターが帰って来た。

「マスター！」

「じっちゃん！」

入れ替わった皆は、マスターの所に駆け寄った。

「あの依頼書が原因じゃ！ある呪文を読み上げると、その周囲にいた人々の人格が入れ替わってしまう！これぞ、チェンジリングじゃ！」

「チェンジリング？！」

グレイ（ルーシィ）は怯えた感じになった。

「お前、ナツなんだよな？テメー、なんて事しやがった！」

「知るか！依頼書ちよつと読んでみただけだろーが！っーか目の前暗えんだよ！」

サングラスを付けているからだ。

ギアス（ナツ）とルーシィ（グレイ）がまたケンカし始めた。

「やめんかルーシィ…いやグレイ！この呪文で入れ替わるのは人格だけではない！」

「……………えっ？」「……………」

「魔法も入れ替わるのじゃ」

「……………はあっ！？」「……………」

「なんと！？（棒読み）」

エルザ（ギアス）以外皆驚いた。

「最後にもう一つ！」

全員がゴクツと息を飲んだ。

「チェンジリングは、発動してから30分以内に呪文を解除しないと、未来永劫元に戻る事は無い！という言い伝えもある」

「……………はあっ！？」「……………」

「ミ、ミラ！？あれから、何分経った！？」

「16分。後14分ね」

いつの間にか、何故かブルーが「後、分」というプレートを持っているのだ？それに先程から、私の口調がエルザと似た様な喋り方だな？

「じっちゃん！？元に戻す魔法は！？」

「うーん、なんせ古代魔法じゃからな、そんな昔の事はよう、知らん！」

自信満々に言うなマスター！。

皆、ガーン！としてしまっているではないか。

「S級クエスト破りのお仕置きを楽しみにしてたんじゃがの、これではどうにもならんわい！ま、せいぜい頑張る事じゃ」

無責任だぞマスター。

「なんてこった！？ええいこうなったら…」

そう言っただけで脱ぎ始めるルーシィ（グレイ）。

「「オオ〜！！」「」

「いやー！！！？ちよつと、それだけはやめてー！！！？」

「脱ぎてー！！」

周りが興奮するなか、ナツ（ルーシィ）が必死にルーシィ（グレイ）を脱がせないようにした。

「そうか、中身がグレイだから、脱ぎ癖もそのままなんだね。あそつだ！おいらもやってみよーつと！…あいすめいく！」

グレイ（ハッピー）は試しに造形魔法をやってみた。  
そしたら、

「「ばらばらっ」「あれ？」

「なんで口から氷だしてんだグ…じゃなくてハッピー」

「あれーなんでだろうな？」

「分かった！確かに技は入れ替わるけど、中途半端になっちまうんだ！」



入れ替わった後の副作用に気が付いたギアス（ナツ）。

「おいギアス…じゃなくて、中の奴」

「中の奴とか言うな！なんだよ！？」

それはあんまりだぞワカバ。

「お前の魔法はどうなってんだよ？」

「そーいやそうだな、どんなふうになるんだ？見てえぞ」

ワカバの疑問に、エルフマンが同意した。

「よ、よし！火竜の…じゃなくて、虹竜の…咆哮！」

だら〜〜

ギアス（ナツ）が吐き出した炎は勢いが無く、そのまま下に流れ出る様な感じに出た。

「なんだその炎？」

「っーより涎だな」

「なんじゃこりゃ〜〜！？」

「確かにすごく中途半端ね」

ミラの意見に同意した。

というより、私の体が情けなく見えるぞ。

「おいナツ！私の体で変な風にするな！」

「ごめんなs…てギアスだよな？」

「そうだ！」

「なんでお前は、喋り方や態度がエルザに似てんだよ！」

「そついやそつだな。一瞬エルザだけ戻ったのかと思つたぐらいだしな」

「私が思うに、戦闘中たまに皆の姿で戦っている事が多いから、その分その姿になっている時は、その人に成りきってしまうのだと思つ」

「なるほど」

自分で言つといてなんだが、納得してしまつたな。

「じゃあギアス、お前はどんな風になつてんだ？」

「まつまでワカバ！」

「確かに、試してみよう！」

「お、おい、やめる!？」

「換装！」

エルザ（ギアス）の体が光り出し、換装を行った。

そして光が収まると、天輪の鎧を着たエルザ（ギアス）の姿だつた。

「あれ？普通に換装したな」

「ほつ」

メンバーがなんかつまらないなと思つていた。

ハッピー（エルザ）は、変な風に換装しなくて安心してゐるようだ。

よく見たらハッピー（エルザ）は、翼を生やして飛んでいた。

「おお、空を飛ぶとはこんな感じか。…などと感心している場合ではない！もう時間が無いぞ！」

「一体どうしたら、はあ」

ぼあ、とナツ（ルーシィ）の口から炎を出してた。

「ナセ…じゃなかったルーシィ、口から炎が…」

「!?キモイっ!?もうやだ…」

「ルーちゃん、私に任せて!」

全員が玄関の方に向いた。

そこにいたのは、シャドウ・ギアのレビィ、ドロイ、ジェットの三人だった。

「レビィちゃん!」

実はルーシィとレビィは仲良しさんで、ルーシィが密かに書いてる小説の事で気が合った様だ。

「レビィ…」

「俺達チーム、シャドウ・ギアが来たからには!必ず元に戻してやるぜ!」

「ああ、安心しな!という訳で…」

「頼むぜレビィ!」

レビィ任せかよ。

「つまり、レビィ一人でなんとかするのね」

「ははは…」

「ドロイ、ジェット、お前達二人がレビィの足を引っ張ってどうするんだ?もつとちゃんとしろ!」

「はっ、はいい!」

少し強めに言ってみた。

「マジでエルザみたいだったな、今のギアスって」  
「一瞬怖って思っちゃったぜ」

やはり、今のはエルザみたいだったようだな。

「で、どうすんだ?」

「私、古代文字ちょっと詳しいんだ!だから、まずは依頼書の文字を調べてみる!」

「時間が無え、間に合うのか?」

「とにかく、ここはレヴィに任せよう!っは!?何故私が魚を…」

ハッピー(エルザ)が魚をくわえていた自分に自己嫌悪した。

それからレヴィは、古代文字を調べていた。

残り時間、後10分

しばらくして、レヴィは本を閉じた。

「どう?レヴィちゃん」

「何か解ったか?」

そして、

「解んない…」

その瞬間、皆が絶望した。

「そうか、私はこれから先、妙な羽の生えた猫として、生きていくのか…。ギアス、これからはエルザとして、フェアリーテイルを支えてくれ」

「いや、諦めるなエルザ!?希望を捨てるな!?!」

「エルザひどいよ!おいらは妙じゃないよ!」

なんか諦めかけたハッピー（エルザ）を慰めるエルザ（ギアス）。そしてまた脱ごうとするルーシイ（グレイ）を止めるナツ（ルーシイ）。

「ちよつ皆落ち着いて！？もつともつと考えるから！」

「マカオ！時間は！？」

「後8分、そろそろ腹括った方がいいかもな…」

残り時間、後8分

「フレ、フレ、レビイ！！！！」

「…あいつら、ただの応援要員かよ…」

ドロイとジェットは、必死でレビイを応援していた。ワカバ、私もそう思っていた所だ。

それからまた調べ始めるレビイ。

そのころ、入れ替わった方々の様子は、

「もしずつとこのままだったら、どうするよ？」

「どうってなんだよ？」

「この先この状態のまま、仕事に行くつもりかよ？」

「そりゃあ、元に戻んなかったらそうするしか無いだろ？」

「おいらはそれでもいいと思うよ。だって黙ってれば見た目じゃ分かんない訳だからね」

「お、おい！？」

「そついうのはギアスだけだろうが！」

「？何故私何だ？」

「そりゃあ、お前だけまともに魔法を扱ってる訳だし」

うんづん、と頷く一同。

「そういう問題じゃないでしょ！私はそんなの絶対いや！はあ……」  
そう言っただけを吐き出すナツ（ルーシー）。

「おいナツ……じゃなくてルーシー、ナツの顔でそれはキモイぞ」  
「あたしだって、好きでこんなもん口から出してる訳じゃないわよ！……はっ！？」

「どうしたナツ……ではなくルーシー」

「これ大変よ！だって今のあたし達、ギアス以外みんな技が中途半端になっちゃってるでしょ！？そんなんじゃ仕事に行っちゃって、うまくいきっこないもん！」

皆が「……あっ！」「……」と気付いた様子。

「て事は……」

「今の……」

「私達は……」

「……「フェアリーテイル、最弱のチーム！」「……」

「確かにそれは、かっこ悪いな」

エルザ（ギアス）の何気無い一言で皆がさらに落ち込んだ。

「やばい！確かにそう言われりゃ、かなりやばい……！……！？」

「何故そんな単純な事に今の今まで気付かなかつたのだ！？やはり猫になってしまった所為か！？」

「ひどいよ！入れ替わってからのエルザは、いちいちトゲがあるよ！……うえ……ん！」

グレイ（ハッピー）は落ち込みながら、落ち込んでるハッピー（エルザ）にダイブした。

「…今何しようとしたんだグ…じゃなくてハッピー？」

「ひどい事言われたんで、こんなところ出てってやるって、飛んで行くこととしたんだ。そしたら羽が無くて、羽が無くて転んじやっただ！」

「わ…私が悪かった…頼むから…退いてく…れ…」

潰れていたハッピー（エルザ）はオチた。  
すると、

「あ！分かった！」

レビィが謎を解いたらしい。

レビィが言うには、永遠の幸せをもたらす、つまり、入れ替わった人は永遠に幸せに暮らすと言う事らしい。

……………あれ？

「ちょっと待てー！それじゃこのままでいろって意味じゃねーかー  
……………」

「依頼書の意味が解っただけだぜレビィ…」

「という事は、50万Jはレビィのモノか！」

「……………今はそんな事言ってる場合じゃないだろー  
……………」

まさかの全員突っ込みを喰らうとはな。

それから調べ直すレビィ。

そして、

「フレ〜、フレ〜、レビイ!!」

「…あの応援チーム、かえってウザくねーか?」

「いや、気合が入って良いと思うぜ!俺も参加してえぐらいだ!」

「はあ…」

エルフマン、応援団に入りました。

残り時間、後3分

周りがそろそろ騒がしくなってきたな。

そして、

「レビイ、まだか!?!」

「こりゃあマジでやべえ!1分切ったあ!」

「テメー!なんかさっきから楽しんでねーか、ああん!」

「そ、そんな事無いって…」

余裕が無くなってきたギアス(ナツ)。

残り時間、後1分

「もうちよつと、何となく分かりそうな気がして来てるんだけど…」

「頑張れ頑張れレビイ!くう〜燃える〜!」

「…あいつ、似合い過ぎだ…」

ウザさが増したな。

その時マスターがやって来た。

そして、役に立たないマスターだった。

「どれだけ正確か分からねえが、多分…後40秒!」

「多分て何だ、多分て!」

残り時間、約40秒



マスターが何か思い出した様だ。  
それは、2〜3人ずつじゃなきゃ無理という事だった。

「後30秒!…ぐらい」

残り時間、約30秒

「どいつが最初だ？」

「当然俺だろ！」

「何言つてんのよ!最初はあたしよ!」

「いや俺だ!」

「待て!私はずっとこのままだとフェアリーテイルはどうなる!最初は私だ!」

「おいらはどつちでもいいよ?」

「私も別にかまわんが?」

自分が先だと主張する入れ替わりチーム。

「醜い…」

「人間追い詰めると怖いよね」

ワカバにミラ、的を得た発言は控えてくれ。

「15秒切ったよ」

残り時間、約15秒

するとレヴィが、

「ああ、解ったあー!!」

「12・・・11・・・」

時間はどんどん進んで行く。

「レビイちゃん！」

「こつこついう事なの！つまり説明するとね……」

「9・・・はて、ウオリヤツ！」グヴァア！？」

カウントを続けるマカオがウザくなったのか、ギアス（ナツ）がぶつ飛ばした。

「レビイ！説明は後だ！早く！」

「分かった！行くわよ、……アルボラヤテスラルギゴウ、アルボラヤテスラルギゴウ、アルボラヤテスラルギゴウ、アルボラヤテスラルギゴウ……」

レビイが呪文を唱えた。

そして、依頼書が光り出した。

光は、ギルド中に広まった。

そして、光が収まって来た。

「あ！元に戻った！」

「俺もだ！」

ルーシイとグレイが元に戻った。

「やれやれ」「ばらばらっ」「ええっ！？」

「元に戻っても出んのかよ！？」

グレイの口から氷を出していた。

「レビイちゃん、ありがとう!」

「やったー!」

「おっしやー!」

「応援したかいがあったぜ!」

レビイが言うには、逆さ言葉を使って逆の意味を言ったという。

「そっか、ホントありがとね!」

「助かったぜ、レビイ!」

ルーシイとグレイは礼を言った。

「ルーちゃんの為だもん、へへっ」

だがしかし、

「と、解けて無え〜!?!?」

「ええっ!?!?」

「私もだ!?猫のままだぞ!?!?」

「私も変わって無いが…!」

「見て見てナツ〜、おいらナツになってるよ〜」

「えええええっ!?!?」

「わずかの差だな、残りの四人は制限時間に合わなかったって事だ」

マカオが状況説明をした。

しかし、ルーシイが先とは、友達想いからなのか、一番最初に来るとはさすがレビイだな。

「そんな〜!?!?ど、ど、どーすりゃいーんだよ!?!?レビイ!もっか

「いやってくれ！」

「あつあれ？なんか、微妙に間違っちゃった…かも！？」

「……………え……………！！？」

「じゃあ…俺達ずっと…このままかよー！？」

「悪夢だ！？悪夢以外の何物でも無い！？」

「おいらはどつちでもいいけど…」

「まあ、なってしまったからには仕方がないな！」

「なんでお前は、そんなに呑気なんだ！？」

若干、混沌カオスになっている入れ替えメンバー達。

「まあまあ、他にも何か方法があるじゃろ。ん？」

「なんだか、私背が縮んでない！？」

ミラ？がカウンターの上で、杖を持ちながらあぐらをかいていた。  
マスター？も様子がおかしかった。

「！？ま、まさかミラさん！？」

「じーさんとミラが入れ替わってるぞ！？」

そう、ミラ（マスター）とマスター（ミラ）が入れ替わっていたのだ。

「何とこのこのナイスバディー！うっはっはっは」

「いやー！？それだけはいやー！？」

ミラ（マスター）はまんざらでもなかった様にポーズをとった。

ポーズをとっているミラ（マスター）に対して、やめてと言うマスター（ミラ）。

「!?!?…も、もしや!?!?」

ハッピー（エルザ）が何か気付いた様だ。

「漢は諦めが肝心だぞナツ!?!?この異常に酒臭い体は何だ??!?ん、げっ!?!?」

「なっ、なによこれ!?!?何で私がエルフマン!?!?ああ、なんか急激に酔いが醒めて来た…きゃ!?!?」

漢を説くカナ（エルフマン）と樽酒を飲んで転倒したエルフマン（カナ）。

「おい、ドロイ…あっ!?!?」

「ん?何だよジェット…んお!?!?」

「俺達入れ替わってんぞ!?!?」

ドロイ（ジェット）とジェット（ドロイ）……この二人はあんま変わらないから次。「おい!?!?」

「お前達は入れ替わってもさして問題無いじゃろ。それにしても、

これはまた夢の様なナイスバデー!?!?」

「いやー、レビイ何とかしてー!?!?」

。グラビアのポーズをとるミラ（マスター）と嫌がるマスター（ミラ）

そして更に広がる混沌<sup>カオス</sup>空間。

「もう…私の手には…おえないです…」

もう諦めているレビイ。

「わーい！皆入れ替わったよ、面白ーい！」

「喜んでる場合じゃねー!？」

皆が入れ替わって喜んでるナツ（ハッピー）に対して怒るギアス（ナツ）。

皆さん、お楽しみ頂けたでしょうか？これは、皆さんの日常とはすぐ隣り合わせの話である。では次回に続く。

「元に戻せー!!?」

「投げっぱなしで終わりかい!？」

「あい（おちまい）」

「まあ、オチとしてはこんなものだろうな」

「「「「だから、何でお前はそんなに冷静なんだよ!!?」「「「「」

## チェンジリング（後書き）

アルボラヤテスラルギゴウと聞こえたので、入れました。

多分正解はアニカロボチスラルテゴウだと思う。

次回は全員元に戻っているので安心して下さい。

次回はまた番外編です

## ナツとドラゴンの卵（前書き）

二話続けての番外編です。

過去話編です。ハッピーの出生が分かります。



## ナツとドラゴンの卵

フェアリーテイル、書庫

「ごめんなさいね、手伝わちゃって」  
「いいさ、どうせ暇だったし」

俺は今、ミラと一緒に書庫の整理をしています。

「ギアス〜、こっちはこれで良い？」  
「ああ、んでこっちが、こっつと」  
「次は上の方をお願い」  
「分かった」

その時、ルーシイが来た。

「あ、ミラさん、ギアス〜、何してるんですか〜？」  
「古い資料の整理よ」  
「あたしも手伝います!」  
「助かるよ!」  
「じゃあ、お願いしていいかしら？」  
「はい!お安いご用です!」  
「ぶ。ぶ。」

それで、ブルーを入れて五名は、書庫の整理を始めた。  
上にいたルーシイが、ナツとハッピーがケンカしてた事で愚痴り始めた。

「ね？ナツつてばひどいと思いませんか？」

「あいつらまたか……」

「ご飯の時間がほとんどだもんね」

「ふふつ。でも、そうゆうところが可愛いのよね」

「そうかな？それに比べて、ギアスとルシアは仲良しね」

「そうか？昔はよくケンカしてた方だぞ？」

「最近はケンカもしなくなっただし」

というか、たまに一方的にルシアが怒る時があるから……。

「でも、ルーシイもナツの子供っぽい所、好きでしょ？」

「ええっ！？「ガタツ」えっあっきゃー！ー！？」

「フゲツ！ー！??」

丁度ルーシイの下にいたから、見事に下敷きになった。

「あらっ！？」

「あははは……」

「ぷー」

「大丈夫？」

「すいません……」

「俺は……大丈夫じゃ……ない……」

「あっ！？ごめんギアス！」

何とかかした時に、ふとルーシイは一枚の絵に気付いた。

「ん？何だろこの絵？」

「ああ、懐かしい！」

「わあ、あの頃の絵だ！」

「そっか、ミラ達が可愛かった頃か！」

「？」

「「ギアス…」」

「うおっほん!？」

咄嗟にごまかした。

「もしかして、子供の頃の皆ですか？」

「そうよ」

「この下着一丁のがグレイで、隣にいる子はカナ?って後ろにいるのって、マカオとワカバ!？若あゝ!？あつ、この真ん中のツンツン頭はナツね、全然変わらないんだ。その隣の白髪の男の子は…」

「ああ、それ俺だ」

「へえゝ！昔はこんなだったんだギアスって。ん、あれ?じゃあ、ナツが乗ってるのと、ギアスが背負っているこの小さなドラゴンは？」

「ハッピーとルシアよ」

「ええゝゝゝ!？」

やっぱひどく驚いてるなルーシィ。

「ははっ、リーダーが気を利かせてドラゴンにしてくれたんだよ」

「あつ、リーダーが描いたんだこれ…」

「でもなんで僕まで…」

「まあ良いじゃん！あれはいい思い出になったんだから！」

「?そういえば、ナツとハッピーに、ギアスとルシアの出会いってどんなだったんですか？」

「そうね…あれは私やギアスが、まだフェアリーテイルに入って直ぐの事だから、今から…6年くらい前ね」

「6年か…あれから随分経ったな…」

「だね」

過去編が始まります。

「あの頃のナツとグレイは、顔を会わせる度にケンカばかりしていたわ」

「今と変わらない気が…」

その気持ち、分かる。

「そして、二人のケンカを止めるのが…」

「やっぱエルザ…」

「昔はエルザが止めても挑んでいたが、結果は瞬殺！」

「あつという間だったしね」

「あらま…」

「そんなナツだったけど、ケンカ以外にはこれといってやる事がなくて、時折寂しそうな顔をしていたわ」

「ナツにとっては父親とも言えるイグニールが行方不明になっちゃってるから、親しい相手が居なかったみたいだしな」

「そう…なの…」

「そしてある日…」

ナツが東の森から、デカイ卵を拾った。

そして、卵を孵す為に頑張ろうとするナツ。

「つつわけでじっちゃん！ドラゴン誕生させてくれ！」

「なにを言うかバカもん！この世界に生命を冒瀆する魔法など無いわ！生命は愛より生まれるもの、どんな魔法もそれには及ばん」

「…何言ってるか全然ワカンネえ」

「…ガキには早すぎたか…」

「つまり孵化させたければ一生懸命自分の力でやってみるといふ事

だ！普段物を壊す事ばかりしかしてないから生命の誕生を学ぶには良い機会だ」

「エルザ！」

「い、いたのか…」

その時、

「エルザが帰って来たって〜！この前に続きやるよ！かかっておいで！」

「またケンカ〜…」

「ふっ、そう言えば決着がまだ着いてなかったな、ミラ！」

「へっ…！」

その時、ルーシィは固まった。

「ええ〜〜〜！！？そのミラって！？このミラさん！？」

「そうだけど？」

「今と全然違う！？それに、ミラさんがエルザにケンカ売るだなんて…」

「まあ、当時のミラはエルザと互角の力を持っていたからね」

「そうだな。2〜3年くらい前までは、魔人と恐れられていた程だからね」

「魔人！！！？？」

「知らなかった？ミラはこれでも元S級魔導士で、当時はエルザに並ぶフェアリーテイル最強の女魔導士候補だったんだよ」

「ええええええ〜〜〜！！！！？？？ミラさんがS級！！？最強候補お！！？」

「そんなに驚く事かしら？」

「驚きますって充分！！？」

むっちゃ驚いてるなルーシィ。

過去編に戻ります。

エルザとミラが周りを巻き込んでのケンカが勃発した。

「レベル低〜…」

「エルザの奴…あれで俺達にケンカすんなって言うんだから…頭来るよな…」

カナとグレイが呟いた。

その時、

「ケンカはやめんか〜!!」

ドカツ×2

「フゲツ!?!」

「まったく、お前らいつもいつも…」

「何しやがるんだよギアス!」

「邪魔するな!」

ドカンツ×2

「フゲツ!?!」

「判決・・・ケンカ両成敗!!」

ドカーン×2

腕を十字に振り、いつもの決めポーズをする。

二人は伸びていた。

「毎回思うけど、あの二人をここまでするギアスってすごいわね…」

「エルザとミラをここまでやる奴はあいつぐらいだしな…」

またルーシィは固まった。

「ギ、ギアスつて、その頃からすごかったんですね…」

「私より後に入った新人にあそこまでやられたのは初めてだったから」

「でも、あの時は驚いたもんよ、俺がフェアリーテイルに入った時なんか、エルザとミラ、おまけにラクサスと決闘した程だし…」

「ええ〜〜〜！！？ギアスつて、三対一で相手したんですか！！？」

「ええそうよ。結果は惨敗。ギアスの圧勝だったわ」

「ラクサスを含めた三人で圧勝！？どんだけすごくて規格外で超人なのギアス!？」

「やっぱりルーシィもそう思うでしょ!」

「ミラまで…」

「色んな人に言われてるねギアス」

「ほっとけ…」

ミラまで言われるとは…気にして何か、無いんだからね…。

詳しくは「入った後いきなり決闘」を参照。

過去編に戻ります。

「くそー、エルザもミラもギアスも、いつかまとめてぶっ倒してやる!」

「まったくも〜、強がりばかり言っていたら、女の子に嫌われちゃうよ!」

この子が、2年前に亡くなった(とされてる)リサーナである。

「うつせーんだよりサーナ！」  
「ねえナツ、そのタマゴあたしも一緒に育てていい？」  
「あつ！？手伝ってくれるのか！」  
「うん！なんか面白そうだし、卵育てるの！」  
「…育てるのって、なんか違うね？」  
「どうすれば孵るんだろ？」  
「温めればいいんだよ？」  
「温める！俺の得意分野じゃねーか！ウガア~~~~~！！！」

卵を直火するナツ。

「きや~~~~~！！？」  
「アホかお前は！！？」

グレイの手で救出された卵。

「もう、だめだよ！そんなに強くやったら焦げちゃうでしょ！」  
「そ、そうか？」

それ以前に、焼き卵になるから。  
そしてリサーナは、テイクオーバー 接收アニマルソウルで鳥になって、卵を温めようとしていた。  
それを見て羨ましがるエルフマン。

「へえ〜、これがエルフマン？可愛かったんだ」  
「あら？そんなに変わらないわよ？」  
「そりゃあ、姉のミラから見れば、弟のエルフマンは可愛らしく見えるよな？」  
「えっ！？ミラさんとエルフマンって、姉弟だったの！？」  
「ええ、知らなかった？」



「全然！」

過去編に戻ります。

それからナツとリサーナは、毎日卵を温め続けた。

「はあ？ドラゴンの卵お？んなもん居る訳ねーだろ」

「ナツの奴、ドラゴンに育てられたっつてたろ？」

「な訳ねーだろ」

「フカシだよフカシ。秘密基地みてえの作って、卵で遊んでんだよ？」

「良いね、ガキはよう」

「お熱いこって」

「…つまんねーの」

マカオとワカバとラクサスの話をして、ラクサスは興味なさそうに去った。

その瞬間、

ドカーン！

ミラがテーブルを叩き折った。

「何すんだミラジエーン！」

「相つ変わらず危ねえ奴だな！」

「…最近家に帰ってないと思ったら…ナツと一緒にいるだと……エルザ派の奴なんかと仲良くしゃがってー！ー！！」

「知らねーよそんなの…」

「何だよエルザ派って！？」

「マスター、仕事終わったよって、なんだミラの奴？」

「ほっほっほ、妹を取られて不機嫌な姉の心境なんじゃろうな」

仕事を終えたギアスは、ミラの様子をマスターから聞いた。

それからしばらく経った頃、事件は起きた。

「誰だ〜タマゴ盗んだの〜!」

ナツが大声で叫んでいる

「卵が消えた?」

「私じゃないよ?」

なんかタマゴが無くなったらしい。

「ラクサス!お前か!」

「興味ね〜よ」

「エルザ!吐き出せよ!」

「おい…少し飛んでないか…話が…」

「ギアス!知らねーか?」

「そういえばエルフマンが、なんかデカイモノ抱えていたな?」

「エルフマンが!?」

「エルフ兄が!?」

原作を知っているから、助言をした。

そして直ぐエルフマンが来て、誤解を解いた。

どうやら夜中は冷えるから、持ち出して温めてた様だ。

そして、卵にひびが入った。

「……………おおっ!!」「……………」

「…ん?」「…」

「おっ!?!」

「いよいよか!?!」

卵が割れて、中から、羽の生えた猫が飛び出した！

「猫!?」

「ってあれ？ルシアに似てる？」

「やっぱり、猫の卵だったのか！」

「知ってたのギアス!？」

「ルシアが生まれた時もこの卵と同じ模様だったから！」

「最初に言えよそれ！」

「普通猫が卵から生まれるなんて話信じねーだろ！」

「うっ…」

ふらふらと飛び続ける猫は、ナツの頭に着地した。

「あい！」

「か〜わいい〜！」

「~~~~~か〜わいい〜!~~~~~」

生まれたばかりの猫に囲まれて喜ぶナツとりサーナ。

「見てナツ、さっきまで皆カリカリしてたのに、あんなに嬉しそう

！幸せを呼ぶ青い鳥みたい！」

「幸せか…じゃあ、こいつの名前、<sup>ハッピー</sup>幸せだ！」

「あい！」

「ドラゴンのハッピーだ！」

「あい！」

「~~~~~いや、ドラゴンじゃねーだろ…」

「ルシアの兄弟が出来たな！」

「らっ！」

「へへっ、ドラゴンの絵にしちゃえ！」

リーダーは生まれたばかりのハッピーの姿をドラゴンにした。もちろぬルシアの分も。

「なるほど、でもなんか良い話ですね。それなのにあの二人…」

「仲が良いほど何とやらってね」

「そうゆう事さ！」

「時にはケンカもするだろうさ！」

その時マスターが、

「おお、いい、ミラ、ギアス、ちょっとこっちも手伝ってくれー！」

「はい！」

「わーった！」

俺とミラは、マスターの手伝いに向かった。

残ったルーシィは、リサーナが居ない事に疑問を感じた。

## ナツとドラゴンの卵（後書き）

次回はいよいよ幽鬼ファンタムの支配者ロード編です。

**幽鬼の支配者ル・シィ・ハートフィリア（前書き）**

いよいよファントムロード編スタートです。

ニードレスキャラの少女が出ます。

ギアスが壊れます。

## 幽鬼の支配者ル・シィ・ハートフィリア

マグノリア付近の峠

「いや〜良い仕事だった〜」

「依頼人も気前良かったしね」

「ま、俺が居たおかげで、とつと片付いたからな」

「あん！勝手に出しゃばって何言ってるやがる！」

「お前らじゃ荷が重い仕事だと思ったんでな！」

またケンカし始めるナツとグレイ。

「じゃれるな！服を着ろ！」

「うばー！？」

「ずるいよ、それおいらのリアクションだよ！」

「あの〜、お楽しみ中済みませんけど、この依頼もともとあたし一人で決めようと思ってたんですけど、何で皆来る訳？」

「んなの決まってるだろうが！」

「決まってるって？」

ル・シィはきよとんとした。

「俺ら、フェアリーテイル最強チームだからよ！」

「あい！」

「そーゆー事！」

「ふっ」

「らっ！」

「っー訳だ！」

「……ま、いつか！」

微笑んでるルーシィ。

「俺とハッピー、エルザとギアスとルシアとパンツなら、どんな仕事でもこなせそうだな！」

「パンツ言うな……」

「うむ、心強いものだな」

「むしろあつという間に仕事が終わりそうだな！」

「あい！」

「らう！」

「あたしは……！！？」

仲間外れにされて嘆くルーシィ。

「あはははは！冗談だって、泣くなよウーピィ」

「泣いてないし、ウーピィじゃないし！」

「はっ、済まない！私まで調子に乗ってしまった…仲間を傷付けてしまうとは…このままでは気が収まらない！取り合えず、殴ってこないか？」

「突っ込んでも良いものかしらこれ……」

「……止めとけ……」

その時、

「きゃーーーー！！誰か！助けてーーーー！！」

「……！！？」

「絹を引き裂く様な少女の悲鳴……！」

ギアスはいち早く駆け出した。



「ギアス早っ!？」

「あっそうだ、忘れてた…」

「ギアスの悪い癖が…」

「ギアスの悪い癖？」

グレイとエルザが俯きながら言った。

そして、叫び声が聞こえた場所に行った。

そこにいたのは、ぬいぐるみを持った可憐な少女とそこらにいるチンピラ三人だった。

ん?この少女どこかで見た様な…んなことより、早くお助けしないと!

「へへへ、もう逃げられねえよお嬢ちゃん」

「や、やめてよ…助けて…」

「誰も来ねえよ!」

少女を抑え付けるチンピラ。

「きゃあー!!」

「さあ、とつとつ」やめろっ!」「あん!？」

そこにさっそうと現れる男。

「だ、誰だ!？」

「…通りすがりの神父です!」

「神父が何の様だ!」

「神父様!、助けて〜!」

その瞬間、心惹かれてしまった。

目がハートになり、口から大量のコインが出るほど興奮していた。

「ギアスが壊れたー！ー！！??？」

「そう、これがギアスの悪い癖…」

「…少女が好みだと言う事だ！」

「少女が好みって、ひよつとしてギアスって…」

「ああ、少女<sup>ロリコン</sup>愛好家だ！」

駆け付けた皆は、ギアスの壊れっぷりに啞然としていた。

「セイバアアアアアアア！！！」

「やっちまえ！」

雑魚二名が向かって来たが、一瞬で踏み付け、壁にめり込ませた。

「女の子を泣かせた罪は重いぞ！」

「ま、待ってくれ…か、金ならいくらでもや」「人は金のみ生きるにあらず！」「…じゃ、じゃあ…なにを…」

「例えば！小女とか「ウゴオツ！？」！幼女とか「ブアツ！？」！あゝと特に「グアアー！？」妹系とかあー！ー！！！」

俺の欲しいものを言いながら、チンピラ達をぶっ飛ばした。

「弱点というより病気だあー！ー！ー！！??？」

ルーシィ、マジでクルスポジションだな。

そんなこんなで、

「わたしミオって言います。助けてくれて、ありがとございまして」

「ミオ？……ミオって、あの美しよ……少女部隊の未央か！て事は敵って可能性も、でも可愛いから許す！」

「ねえミオちゃん、君はどうしてあんな連中に追われていたの？」

「ミオ、誘拐されたの……」

「……誘拐!?」「……」

「ミオ、オークの町で誘拐されて、どこかに売られちゃうところだったの……それで何とか逃げ出して来たんだけど……ヒクツ……さっきの人達に……ヒクツ……捕まりそうだったの……うえ〜ん」

泣き出したミオたん。

「な、泣かないでミオちゃん!?もう大丈夫だから」

「しかし、オークの町だと、いろいろ厄介だぞ！」

「厄介？」

「あの町は、フェアリーテイルは入れないんだ」

「どうしてですか!？」

「別のギルドがあるからだ！」

「別のギルド？」

「幽鬼の支配者、ファントムロード！」

「あっそれ、ミオの町の代表のギルドの名前だよ」

いつの間にか泣き止んだミオたん。

「ファントムロード幽鬼の支配者ってあの……」

「でもあそこは、俺らと仲悪いからな、近づいたらケンカ売って来たど勘違いするほどだしな」

グレイが説明した。

「ミオ、オークに帰れないの…」

また泣き出しそうになるミオたん。

「お前ら！ミオたんを泣かしてんじゃねー！」

「そう言う訳ではない！」

「ええいもういい！お前らは先にギルドに帰ってる！」

「それで、ギアスはどうするんだ？」

「俺はあ、彼女を「これでもか」と言うぐらい介抱してえ、オークに送ったらあ、すぐに帰る！」

妖しい手つきでハアハア言いながらミオたんを抱こうとしたら、

「断固阻止！！！！」

「ちっ…」

「うわ…」

「？」

ルーシイとミオ以外、必死でギアスを止めた。

ナツは手に炎を溜めて、グレイは腕を氷の剣にして、ハッピーはデカイ魚を、ルシアはデカイ大根を、そしてエルザはいつの間にか煉獄れんごくの鎧よろいを着て、ギアスを威圧した。

結局ミオたんは、フェアリーテイルで保護する事になった。

その際ミオたんが、俺の事を「おにーちゃん」て呼んで、鼻血を吹き出しながら、

「君はあ、僕が守る！！」

「断固死守！！！！」

「ちっ…」

「僕って言っちゃったよ…」  
「？」

マグノリア、ギルド前

ギルドに戻ったら、ギルドの至る所に鉄柱が突き刺さっていた。

「これは!？」

「ど、どうゆう事だ!？」

「な、なに!？え!？」

「何だこの鉄柱!？」

そうだった。ガジルの襲撃があったと言う事は、ファントムロード編に突入したか!

「俺達の…俺達のギルドが!!？」

ナツが憤怒に満ちていた。

すると、後ろからミラの声がした。

「ファントム…」

「えっ!？」

「今、なんつった!？」

「ファントム、って言ったか？」

「悔しいけど、やられちゃったの…」

皆が地下酒場に行く時に、俺はギルドを直しとくって言ってギルドの前に立っています。

「さてと、始めますか！」

鉄柱は、マグネティックワールド特殊磁界で簡単に外して、周りに置いた。

鉄柱はおよそ20本程あったが、このまま捨てるのも勿体無いし…あそつだ！

俺はバクバク工場と技術過剰で、ファクトリーオーバーテクノロジーワンピースの武器やら、ガルナ島で集めた貝殻を改造して貝ダイヤルやら、新しく作った魔法の鎧とか何やらを作ってみた。

ちなみに新しく作った武器や鎧は、同じものをエルザ用にプレゼントした。

中にはフェルゼンアヴァランチ岩石崩の様な鎧もある。

ついでにビスカ用にガトリングガン（大・中・小）を作った。

それでも鉄柱は10本ぐらいあるしな。残りは武具の材料、もしくは食糧代わりとしてストックに入れた。

そして壊れたギルドは、時のアークで直した（傷一つない新築状態まで戻した）。直したと言ったら、皆びっくりしていた。

後でエルザやビスカにプレゼントしたら喜んでくれた。その際、アルザックから凄まじい目で見られた。

ルーシイの家

俺達は今、勝手にルーシイに家にお邪魔しています。

居るのは、ナツ、グレイ、エルザ、ハッピー、ルシア、そしてミオたんのいつもの面子がいます。

おっ、ルーシイが帰って来た。

「だって、フェアリーテイルh「お帰り！」「いい部屋だな！」」

うぱー！」「らうー！」「お邪魔してます！」「お姉ちゃんおかえり！」「さいごー！？多いつての！」「ブへボツ！？」

持ってた荷物をナツに投げ付けた。

何故ルーシイの家に泊まりに来たのかと言つと、ファントムの奴等は皆の住所を嗅ぎつけてると思ひ、皆でお泊りだったり、チームで寝泊まりとかで万全を取つた方がいいとミラの提案だと言つ。

ちなみにナツとグレイとハッピーは泊まるつもりで、エルザは三人を泊めるには気がひけたので一緒に泊まるらしい、俺は別に一人でも良かったが、ミオたんがルーシイの家に泊まりたいから一緒に来た訳だ。

「間違いが起きない為にも、同席したのだ」

何故俺を睨みながら言う？

俺達はルーシイの家をエンジョイしてた。

「それにしてもお前達、汗臭いな。同じ部屋で寝るんだ、風呂くらい入れ！」

「やーだよ、めんどくせつ」

「俺あ眠いんだよ…」

「仕方ないな、昔みたいと一緒に入つてやつてもいいが？」

「までエルザ！さすがに年頃の思春期共にそれはきついだろ？こいつらは俺と一緒に入つてやる！」

「あんたらどんな関係よ！？」

「最強チームだよ」

「別の意味で最強！？」

そして風呂に入るルーシイ・ミオ・プルー。んでもって部屋の隅で拘束されてるギアス。





因とも言えるって話だしな」

「（そして…あの男も…）」

エルザは咄嗟に、評議員のジークレインを思い浮かんだ。すると、ナツは勢いよく机を叩いた。

「ビビってんだよ！ファントムの奴等、数だけが多いからよ！」

「だから違ええだろ！マスターもミラちゃんも、二つのギルドが争えばどうなるか分かってっから、戦いを避けてんだ！魔法界全体の秩序の為にな！」

「そんなにすごい…ファントムって…」

「大した事はねえよ。あんなやつら」

「いや、実際争えば…潰し合いは必死、戦力は均衡している。マスター・マカロフと互角の力を持つと言われてる…聖十大魔導のマスター・ジョゼ、向こうでのS級魔導士にあたるエレメント4、最近新設されたと言う女だけの戦闘部隊…少女部隊」

「少女部隊!？」

「反応するなギアス」

いや、そうゆうつもりで反応した訳じゃないんだって、こっちにニードレスの少女部隊が居るとは思わなかったから。て事は、ミオたんはファントムの少女部隊にいる可能性は高い!…でも可愛いから見逃す。

「そして、一番厄介とされるのが鉄竜くろがねのガジル、今回のギルド強襲の犯人と思われる男…鉄のドラゴンスレイヤー！」

「ドラゴンスレイヤー!？ナツやギアス以外にもいたんだ!？じゃあそいつ…鉄とか…食べちゃうわけ？」

「俺も偶に食うけど…」

「!？?そういえば…そうだったね…」

「ふみゆう…ミオ…眠い…」

「この話はこのくらいにして、もう寝よう」

「そうだな。お休み」

この時、明日にはファントムロードとの戦争が始まる事は、ギアス以外の皆知る由も無かった。

マゲノリア、南口公園

ガジルに夜襲をかけられ、公園の中央の木に張り付けられたシヨドウ・ギアの三人。

それを見たいいつもの面子は、

「…レ、レビイちゃん!？」

「ジエット!?!ドロイ!?!」

「……ファントムか!」

俺は今、静かに怒りを表している。

実際、腹の底からファントムへの憎しみが疼いているぜ!

そこに、聖十大魔導士の正装を着たマスターが来た。

「マスター……」

「……ボロ酒場までなら我慢出来たんじゃがのう…ガキの血を見て黙っている親はいねえんだよ!!」

マスターは、いつも持つてる杖を握りつぶした。

その姿に驚くルーシィ。

そしてマスターは決断する。

「…戦争じゃ…！」

オーク、フロントムロード支部

フェアリーテイル総動員で（負傷したレヴィ達とルーシィ以外の皆）、オークまで辿り着いた。

一緒に連れて来たミオたんを町の入り口で別れて、そのままフロントムの支部に向かい、ナツと一緒に扉をブツ壊した。

今の俺は殺人すら構わねえと思う程、頭に来てんだコラー……！！

そしてマスターが高らかに叫んだ。

「フェアリーテイルじゃあぁ……！！」

「……………オオオオ……！！」「……………」

迎え撃つフロントム。

そしてそれをブチかますナツ。

「誰でもいい…！かかって来いやぁぁぁ……！！」

そして、フェアリーテイルとフロントムロードの戦争が勃発した。

「パープル・ネット…！ワカバ！」

「あいよ！スモークラッシュ！」

マカオの炎で敵を捕らえて、ワカバのパイプの煙で敵を殴打した。

「銃弾魔法、スパークショット！」

アルザックのガンズマジックで、敵を痺れさせた。

「!？」

「くたば」「ダンッ!」「アガッ!？」

「ナイスショット!ビスカ」

「爪が甘いよ、アル。ターゲット・ロックオン!…ホーミングシュート!」

ビスカの銃士で、敵だけを狙い撃った。

「カード魔法：ライトニング・リバースタワー・ラバーズ、落雷の運命!」

カナのカードマジックで、周囲の敵に電撃を浴びせた。

「リングマジック、ツイスター!」

ロキのリングマジックで、竜巻を起こした。

「絵画魔法、野生の暴走!」

リーダーのビクトマジックで、自分の腹に猪の絵を描き、その絵が飛び出して敵にぶつけた。

「木の造形魔法…恥らう恋のダム!」

「意味解んねえー!？」

ラキのウッドメイクで、大量の木造が飛び出した。…ラキのネーミ

ングセンスはホントに解らん。

「かぁー！ー！」

マスターは得意の魔法のジャイアントを使い巨大化して手で叩き潰す

「バ…バケモノ…!?!」

ファントム一人がそう言う

「貴様らはその、バケモノのガキに手えだしたんだ！人間の法律で、  
自分<sup>デメー</sup>を守る等と思うなよ！！」

どンドン押していくフェアリーテイル。

「ジョゼー！ー！…!!…!!出てこんかあ！！」

「はあああ！何処だ、ガジルとエレメント4は何処にいる！」

エルザは炎帝の鎧に換装した。

「…「これでも喰らいやがれー！…!!」」

色んな属性の魔法が飛んで来た。

しかし、炎はナツ、それ以外はギアスが全て平らげた。

「「食ったら力が湧いて来た！」」

「何だこいつら!?!」

「魔法を食ったぞ!?!」

「まさか、こいつらが!?!」

「「まとめて吹っ飛ばせ！」」

「火竜の咆哮！」  
「虹竜の咆哮！」

ナツとギアスの滅竜魔法で敵を蹴散らす。

「アイスメイク・・・ランス！」  
「ハアアツ！」

グレイが氷を飛ばし、エルザは黒羽の鎧に換装した。

「ウツドメイク・・・二人の恋はフォーエバー！」  
「やっぱ意味解んねえー!?」  
「ガンズマジック、マッドシヨット！」  
「換装：魔導散弾！ワイドシユート！」

アルザックとビスカのコンビネーションは抜群だが、ラキの攻撃は・・・なんか台無しだ。そしてマジで意味解らん。

フロントム支部、天井

「ギヒ：あれがティターニアのエルザ、それにフェアリージャツジメントのギアセルシアか、ラクサスとミストガンは参戦せずか：舐めやがって。しかし、これほどまでにマスター・ジヨゼの計画道りに事が進むとはな、せいぜい暴れまわれ：クズ共が！」

「ガジル様、私達の出番はありますか？」  
「一番厄介な奴が消えたら出番だ。オメエらも準備しておけ」  
「分かりました！」

『四階（×）・・・了解！』



「ギツヒヒヒヒヒヒ！」

天井に居た四人は、戦場へと降りた。  
ドシーン！

「コッコッくん!?」「」「」「」

「あいつは……」

「あいつが……」

「ギヒ！」

「鉄のドラゴンスレイヤー……鉄竜くろがねのガジル！」

エルザの一言で、周りが気を引き締めた。

「テメーが、レビイ達を……グハツ!?!」

ナブが殴りかかったが、ガジルの鉄竜棍てつりゅうこんで、ファントムの兵ごとぶっ飛ばした。

「ナブ!?!」

「あいつ!?自分の仲間を巻き添えにしやがった!?!」

「ギヒ、来いよクズ共!鉄のドラゴンスレイヤー……ガジル様が相手をしてや」「ウリヤアー!」「グハツ!?!」

ガジルが喋っているうちに、頭突きをかました。  
ガジルの滅竜魔法……覚えた!

「テメー、いきなりやってくれんじゃねーか!」

「そりゃこつちのセリフだ!よくも内のギルドやレビイ達w」「ガジルー……!?!」「グエツ!?!」



ギアスを踏み台にしたナツが、ガジルを殴りかかり、ガジルのぶつ飛ばした。

「ガジルが吹っ飛ばされた!?!」

「こんなトコ初めて見たぞ!?!」

周りのファントムが騒ぐ、そこにナツが大声で叫んだ

「俺がフェアリーテイルのドラゴンスレイヤーだあ!?!」

「おいナツ、人を踏み台にしゃがつてギアス、こいつ寄せ!」  
「ておい!」

その時、

「……どわあ……!?!」

「!?!」

突然味方が吹っ飛んだ。

いや、一人の少女が味方を吹っ飛ばしたからだ。

おいおい、あいつは…

「はあ、い、フェアリーテイルの皆さん。こんにちは」

「ちは」

青い髪の少女セツナと、金髪でスケッチブックで言葉を表現するくちなしの姿があった。

ニードレスの少女部隊の、セツナとクチナシじゃねーか!?!マジでいんのかよ。

て事は…



思わず突っ込むセツナ。

『それより、片付ける!』

「あっそうだったわね。あたしのスピードに、付いて来られるかしら?」

セツナはすごい速さでギアスに攻撃した。

「ブツフアーーーー!?」

ギアスは壁までぶっ飛んだ。

「ギアス!?!」

「ああ、まだ、大丈夫だ…皆手え出すな、この子達は…俺がやる!」  
「しかし…分かった、そっちは任せる!」

ここで、ギアスVS少女部隊と、ナツVSガジルの戦いが始まった。

「いくら頑丈でも、あたしのスピードで打ち砕いてやる!ディーン  
ドライブ…」

セツナが踏み込む動作をした瞬間。

フォウウスト

「FH!」

「ノロノロビーム!」

「!?!」

セツナの動きが遅くなった。それでも普通の動きだけど。

「な~~~~~に~~~~~を~~~~~し~~~~~た~~~~~」

「あつセツナちゃんの喋り方が遅くなってる!?!」

『動きも!?!』

「まずは頭突き!」

「ガ~~~~~ツ~~~~~!~~~~~?~~~~~」

「よし、覚えた!喰らえ、デインドライブ・フォックスハウンド

!(ゴムゴムの銃乱打風)  
ガトリック

「!~~~~~?~~~~~」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガッ!

「『ええつ!?!』」

「何でセツナ様と同じ能力を!?!」

「やつが使えるんだ!?!」

そして30秒がたった。

「うh r k c つお t y t d y k p . : キヤアアアアアアア!!

??!」

「判決・・・死刑!!!」

ドカーン!

30秒分の拳のツケが来て壁まで吹っ飛び、激突して気を失った。

「~~~~~うお~~~~~!~~~~~」

「少女部隊の一人を倒したか!」

いつもの様に腕を振った。

さて次は香のクチナシか、力のミオたんか?  
パワー

『行く!』

クチナシが動いたか!鼻の奥とのどに炎を展開してっと、

『メイデンリストリクシヨン!』

「なんだこりゃ!?体が…動かねえ!？」

「なんなんだよ、この匂いは!？」

『それが私の魔法、フレグランス香!』

「クチナシちゃん、さすが〜」

その匂いを嗅いだ味方は動けないでいる。  
ミオがクチナシを褒めた。

『えっへん』

気のせいか、鼻が高く見える。

でも、対策を取ってる俺には効かない!

「うりゃ!」

『!?!?!?!』

「クチナシちゃん!？」

『な…何故!?!』

いちいち書くのめんどくさいだろうに、

「知るか!効かねえモンは効かねえよ!」

『!?!?!』

取り合えず頭突きしました。



「!!!?…ブツフアー…!!!?」

すごく…重かったんだ…!!!?」

ギアスはすごい勢いで壁まで吹っ飛んだ。

「ミオ、こー見えて力持ちなんだよ」

全員が息を飲んだ。

ギアスを吹っ飛ばす程の怪力を持つ少女、ミオに恐れだした。

「あのガキ、出来るぞ!?!」

「ギアス、大丈夫か!?!」

そして、瓦礫に埋まっていたギアスは、鼻血を噴出しながら立ち上がった。

「さあて、次はこっちの番だ!」

「鼻血吹きながら言ってもな…」

「しまらないよな…」

好き勝手言いやがって、まあいい。

「行つくよ、ミオちゃん…ヒップアタック!」

ミオが高く飛び上がり、お尻を向けて落ちて来た。  
だが、

「グラビトン!」

「あれ? ゆっくりになった?」

「例え勢いよくぶつけてくる尻攻撃でも、ゆっくりにして威力を無くせば…」

ミオはゆっくりと、ギアスの顔に落ちた。

「ただの鼻血ブーだ!!」

ミオさんのパンツを間近で見ても、匂いを吸ったからなのか…鼻血を噴出してしまった。

「……………」

視線が気になってきたので、ミオさんを下ろした。

「ミオさん！もう悪さしないなら、これ以上は攻撃しない！でも、まだやるなら、お尻ぺんぺんしちゃうぞ！」

「うえ、お尻ぺんぺんは嫌あ…」

「……………」

ギアスは、ミオの額に付けながら説教した。  
ミオさんには悪いけど、力パワー、覚えました。  
後、何でか皆の視線が痛い。

「ミオの負けでいいよ……」

「いいのかい？」

「お尻ぺんぺんは嫌だから……」

「……………」（その辺まだガキだな）「……………」

皆がそう思った。





ルーシィを救いに行った様だ。

## 幽鬼の支配者〜ル・シィ・ハートフィリア（後書き）

初登場の能力

マグネティックワールド

特殊磁界

オーバーテクノロジー

技術過剰

フェルゼンアウァランテ

岩石崩

クレアボヤンス

透視

覚えたフラグメント

スピード

速

フレグランス

香

パワー

力

覚えた魔法

ガジルの鉄の滅竜魔法

次回はフロントム編中盤です。

## 少女部隊設定（前書き）

少女部隊の設定を出しました。

説明文は [Wikipedia](#) 参照。

## 少女部隊設定

所属

ファンタム ロード  
幽鬼の支配者

フェアリー テイル  
妖精の尻尾

チーム名

少女部隊

リーダー

セツナ

メンバー

名前

セツナ

魔法  
スピード  
速度

自らの速度を加速させる魔法。一瞬のうちに相手の懐に飛び込み攻撃する。最大マツハ9まで加速できる。加速時は反射神経も加速度相応のものになるらしく、音速を超越しながらも極めて精密な動作が可能。

設定

原作ニードレスのセツナ

最初はファンタムロードの主力の一つ、少女部隊のメンバー  
ガジルに好意を抱いている

名前

ミオ

魔法  
パワー  
力

自身の身体構造を遥かに超越した力を発揮することができる。また、肉体の耐久力もその力に耐えられる強さに強化されていると考えられる。その威力は片手で分厚い鉄壁を吹き飛ばせる程で、放つ攻撃の全てが「必殺」となりうる脅威の能力。

設定

原作ニードレスの未央

最初はファントムロードの主力の一つ、少女部隊のメンバー  
ギアスに気がある

名前

クチナシ

魔法  
フレグランス  
香

敵の脳や神経を麻痺させる香りを出すことができる。香りは体内ホルモンの調合・調節で無限定に調整可能。空気を伝うことで成立する能力であるため、炎や風によって遮断されるという弱点がある。

設定

原作ニードレスの梶

最初はファントムロードの主力の一つ、少女部隊のメンバー  
ほとんどの女子メンバーと男の娘が好物

## 少女部隊設定（後書き）

簡単な説明ですみませんでした。

15分、その涙を見ない為に（前書き）

ファントム中編です。



15分、その涙を見ない為に

フェアリーテイル

マスターは今、東の森に住むポーリュシカの所で治療中だ。  
そしてさっきナツとルーシイが戻ってきた。

ナツはルーシイを慰めている様だ。

そして俺はジユピター対策を模索中だ。

そして一つ思い浮かんだ。  
すると、

ドシューシューーン

「来たか！」

巨大な足音が聞こえた。

「外だーーーーー！」

全員裏口から出て、湖の方を見た。

フェアリーテイル裏庭、湖のほとり

六本の足の生えた城が歩いて来た。

「ハ…ハウルの動く城？」

「なんだそれ？」

「い、いや、なんでもない!?!」

まさか聞かれるとは思わなかった。

「…想定外だ…こんな方法で…攻めて来るとは…!?!」  
「いや、誰も思いつかないって、こんなやり方…!」

すると、城の一部が開き、砲台が出て来た。  
砲台から禍々しい波動が展開しつつあった。  
魔導集束砲ジュピターが発射態勢を取った。

「まずい!?!全員伏せろおー!?!」

エルザは駆け出した。

「エルザ!?!」

「どーする気だ!?!」

エルザは、金剛こんごうの鎧よろいに換装した。

「ギルドはやらせん!?!」

「金剛の鎧だ!」

「まさか受け止めるつもりじゃ!?!」

「いくら超防御力を誇るその鎧でも!?!」

「止せ、エルザ!?!死んじまうぞ!?!」

ジュピター発射態勢。

それと同時に駆け出すギアス。

「ギアス!?!」



『……ルーシイ・ハートフィリアを渡せ!』  
「……………」

……………はあ? 「……………」

「ジヨゼってアホか?」

「ジュピターが通用しないのに何故要求?」

「皆なにそれ? って顔してるよ。」

『渡さぬなら、更に特大のジュピターを喰らわせてやる! 装填までの15分! 恐怖の中で足掻け!』

「なあエルザ、向こう…ヤケになってないか?」

「余裕が無くなったんだろうな。ギアスのおかげで」

すると、城から黒い兵が出て来た。

シェイド  
幽兵が出て来たな。

『地獄を見る、ファリーテイル! 貴様らに残された選択肢は二つ! 我が兵に滅ぼされるか、ジュピターで消し飛ばすかだ!』

「ありえねえ!? 仲間ごとジュピターで消す気かよ!?!」

「お、脅しさ…撃つ筈ねえ…もし撃たれても、ギアスが防いでくれるし…」

「いや、撃つよ!」

「ええつ!?!」

「あれはジヨゼの魔法、シェイド! 人間じゃないのさ。ジヨゼの作り出した幽鬼の兵士!」

「何!? シェイドって…」

「お化け!?!」

おい!?!

確か、幽霊対策のニードレスがあったな。試してみるか!

「いくらギアスでも、魔力は無限じゃない。ジュピターみたいなモノを何発も撃たれてはいずれ魔力は尽きる！」

いやエルザ、これはどちらかと言うと体力的な問題の様な？

「ジュピターを、何とかしないとね……」

「俺がぶっ壊してくる！！」

ナツが言った。

「15分だろ？やってやる！ハッピー！」

「あいさー！」

ナツはハッピーに乗って先行した。

「エルザ、グレイ、エルフマン、お前達も行ってくれ！ここは俺たちで死守する！」

「分かった！行くぞ！」

「乗り込むぞ！」

「おっしやあー！」

「ジュピターの破壊に成功したら、すぐ駆け付けるからな！」

エルザ、グレイ、エルフマンは、ファントムの城へと乗り込んだ。

こっちに向かってくるシエイド。

ルーシィを連れて行くミラ。

「来やがれ幽霊共、食事の時間だあ！」

ギアスは、舌をダブルゲンガーで目を創り、セカンド第二の視覚でシエイ

ド達を操り、口の中に入ってしまった。実際はセカンドサイトに吸収してただけだが、周りは…

「ギアスの奴、幽霊まで食えんのかよ!？」

「ほんとに規格外だね…」

「これだけじゃねえぜ!暗黒冥穴!出でよ!異形王ジルジース!」

扉を開く者で、死神っぽいのが出て来た。

「おいおい!?なんだこのバケモノは!？」

「俺が作ったシェイドみたいなモンだ。さあジルジース、目の前の敵を粉碎しろ!」

そう言っただけでジルジースはシェイドを攻撃した。

「ギアスの方がどんどんバケモノじみて来てるのは、俺の気のせいかな?」

「安心しなマカオ、あたしもそう思っていた所さ…」

マカオとカナ…好き勝手言いやがって、

「ギアスがいると楽だな」

「でもギアスばかりに頼ってたら駄目だ!あたしたちのギルドは、あたしたちで守るんだ!」

「……オオ……!」「……」

勢いに乗って来たな皆。

……それから時間が過ぎ、

「そろそろ15分か、俺はジュピターを防ぐから、誰か俺を守って

くれ」

「…………分かった!」「……」

その時、ジュピターが爆発した。  
ナツが破壊に成功した様だ。

「あれ見て!砲台が!」

「やったぞ!ジュピターの破壊に成功したぞおおおお!!」

「……………………オオ……!!」「……………」

「やったな、ナツ!」

さてと、じゃ行きますk…ん?

すると、城が變形して、人型になっていった。

まじつぎょじん  
魔導巨人、ファントムMk-?となった。

『平伏すがいい、クソガキ共!そしてその身の程を知れ!絶望の中で己の最後をたっぷりと味わうがいい!』

歩いてくる巨人。

そして向かって来るシェイド。

「シェイドがまた来るぞ!」

「巨人と幽霊!?!どうしろっていうのよ!?!」

「あたしらはシェイドに集中!巨人は、ナツがきつと止めてくれる  
筈!」

「つつてもよう……」

「ナツは乗り物……」

「……………………ああ……………」

真っ白になる一同。

「…俺がすぐ行つて来る！！」

「あっ！？ギアスー！？」

「ルシア！行くぞ！」

「らー！ー！うー！ー！！」

ルシアが俺を抱えて行くと、氷漬けになった何かが飛んできた。あ、兎丸うさぎまるが吹っ飛ばされたみたいだ。

取り合えず受け止めて、頭部の部分を割って、額を付けた。

兎丸の魔法、覚えたからすぐに捨てた。

そして巨人の方をみたら、魔方阵を描こうとしていた。

禁忌魔法、煉獄碎波。アビスブレイク

もし発動したら、マグノリアが消滅するほどの威力を持つ魔法。

「やば、あれはアビスブレイクだ！？」

「ええっ、まずいよあれは！？」

「ギアスー！ルシアー！」

「あれは、ハッピーだ！」

ハッピーに連れられて、ナツ達と合流した。

ファントムMk-？、ジュピターの残骸

アビスブレイクの事を簡潔に説明した。

「…という事だ！」

「なんだそりゃー！？ありえねえ！？」

「手分けして、この巨人の動力源を探すしかねえな！」



「つたく、次から次へと…」  
「こうしては行かない！行くぞ！」  
「……オウ！」  
「そうはさせない！」  
「……!?」「……」

声が出た方を向くと、そこには倒した筈の少女部隊がいた。

「さつきは油断したが、今度はそうはいかないわ！」  
「おにーちゃん達ごめんね。マスターにきつく言われちゃったの…」  
『ここがお前達の墓場！』  
「だー、しつげーな！」  
「邪魔するな！」

立ち塞がる少女部隊。

そして何故かガスマスクを着けるセツナとミオ。  
て、まさか…

「クチナシ！いいよ！」  
『奥義！』

クチナシは、ゆっくりとジェットガントレットをギアス達に向けた。

「……リリス・テンプテーション！」  
「……喋ったあー!?」「……」

ナツ、グレイ、エルフマン、ハッピー、ルシアは、クチナシが喋った事に突っ込んだ。

匂いは着々と近づいて来た。

前回と同様、しっかり対策を取ってっつと。

そして、皆に匂いが届いてしまった。

「行ってらっしゃい。理想郷へ」  
パラダイス

「「「「「あああああわう！！！！？」」「」「」「」

ナツの光景

「はははは！とうとう俺は、エルザ、ギアス、ラクサスに勝ったぞ  
——！！！」

「さすがだナツ……」

「お前の勝ちだナツ……」

「フェアリーテイル最強はお前だ！」

「よっしゃー！」

『よくやったぞナツ！』

「その声は！？イグニール！？」

ナツは、エルザ、ギアス、ラクサスに勝ち、念願のイグニールに再開した。

그레이の光景

「グレイ！」

「誰だ！？」

「やーねえ、私を忘れたのかい？」

「！？そんな……なんで……ウルが！？」

「私は、ここにいますよ」

「（感触がある！？）どういう事だ！？あなたはアイス・ド・シエルで……」

「何の事だい？それより、早く帰って飯でも食お！」

「えっ！？あっ、ああ……」

グレイは、恩師ウルに再会した。

エルフマンの光景

「なんだこりゃ？」

「エルフ兄ちゃん！」

「！？この声は！？」

「やっと見つけた。エルフ兄ちゃん！」

「なっ！？リサーナ……！？」

「どうしたの、エルフ兄ちゃん？」

「どうしたのって、だっってお前……」

「あら？どうしたのエルフマン？」

「あれ！？なんで姉ちゃんもここに？」

「なんでって、リサーナと一緒にパーティするって約束でしょ？」

「エルフ兄ちゃん！早く行こ！」

「あっ！？ああ……！」

エルフマンは、死んだ筈のリサーナと再開して、ミラと三人でパーティをした。

エルザの光景

「ここは！？楽園の塔！？」

「エルザ……」

「！？お前は……！？」

「ごめん、エルザ……俺が間違ってたよ」

「！？」

「姉さん！」

「……エルザ……」

「！？シヨウ……シモン……ウォーリー……ミリアーナ……テルヤマ……！？」

エルザは、改心した男と昔の仲間と再会した。

ハッピー、ルシアの光景

「さかな……」

「サラダ……」

大量の魚と野菜に埋もれてるハッピーとルシア。

ファントムMk-？、ジュピターの残骸

「ふふふ、これがクチナシの奥義、リリース・テンプレーションよ！」

『この香りを嗅いだ者は、脳が麻痺し、自分が「最も望む幻覚」を見る！』

クチナシの能力で、幻覚を見せられたフェアリーテイルメンバー。

対策を取っていた俺は、その場で立ったままにした。

「さて、まずは…フェアリージャックシメント！あんたから先に始末してあげるわ！ディーンドライブ…」

ギアスの前に立ち、トドメをさそうとするセツナ。  
だが、

「フォック…フォックスハウンド！！」え！？

攻撃しようとしたセツナより先に、ギアスが攻撃した。

『！！！？』

「はにゃ！？」

「な…何故！？」

『嘘！？私たちが見えている！？』

「おにーちゃん…幻影まぼろし見えてないの！？」

不思議がる少女部隊。

「くつくつく、何故俺だけ効いてないかって…それは…」

三人は息を飲んだ。

「ミオたんが近くににいる限り、俺は常に理想郷パラダイス状態だぁー！！！！！！

「！！

「『……………は？』」

「うみゆ？」

取り合えず、俺に合いそうな言い分けを言った。



いろいろ言いたい事はあるが、全裸に靴下は最高だぞ？

「さてと、この巨人の動力源を探さないとな」

スキャン  
分析で、動力を探した。

つか、原作を知ってるけど、それらしい態度を取らないと。

「解ったぞ！でも、動いてる？」

「動いてる？」

「多分、誰かが持っているんだと思う」

「持っているだど！？」

「動力源で、いくつあるんだ？」

「全部で四つだったんだけど、今は三つになってる！」

「三つか」

「探さなくてはな、行くぞ！」

「「「オウ」「」」

皆は、別々に移動した。

## 15分〜その涙を見ない為に（後書き）

初登場の悪魔の実

ミラミラの実

初登場の能力

セカンド

第二の視覚

サイト

オイ

扉を開く者

フチ

スキャン

分析

覚えた魔法

エレメント4・兎兎丸の魔法

次回はファントム編後編です。



雨の中に咲く花〜フェアリーロウ（前書き）

いよいよ後編です。

## 雨の中に咲く花々フェアリーロウ

ファントムMk-2、回廊

ただいま迷子中です。

「ギアス〜……」

「言っちなルシア……」

「さっきから同じとこぐるぐる回ってない？」

「言っなって」

そう、わざと迷ってます。

他の皆と合わない様にして慎重に進んでいたのだ。すると、

「ん？ギアス…あそこに誰か倒れてるよ？」

「何？……こ、こいつは！？確かエレメント4のソル！？」

そこに居たのは、エルフマンが全身テイクオーバー・ビーストソウルによって、ボコボコにされた大地のソルの情けない姿だった。

丁度良かったので、ソルの魔法を覚えました。

ふと外を見ると、雨が降っていた。

今頃グレイと大海のジュビアと戦ってたんだな。

あっ晴れた。決着が付いた様だな。

取り合えず、巨人の左肩に居るグレイ達と合流する事にしたギアス達。

到着すると、そこには幸せそうに気絶していたジュビアだけだった。ちよっと遅かった様だ。んでジュビアの魔法覚えました。

「今度は大海のジュビアか、あいつら…いつの間に強くなってたんだな」

「暢気な事言ってる場合じゃないよギアス！」

「悪い悪い、ん？」

巨人の動きが遅くなってる事に気付いた。

「あれ？なんか巨人の動き、遅くなってねえか？」

「あつホントだ！？」

さてと、種明かししようと。

「…そうか！この巨人、エレメント4が動力だったんだ！」

「そうなの！？」

「今調べて解った！さっきは三つだったのに、今は残り一つになっているんだ！大火の兎兎丸、大地のソル、大海のジュビアが倒されて、残りは大空のアリアだけだ！」

「じゃあ、さっそく倒しに行かないとね！」

ギアス達は、アリアの居る所まで走った。

そして、巨人が急に揺れ出した。

「な、なに！？この揺れ！？」

「巨人が…止まった！？あいつら…エレメント4を、全員倒しちまったな！」

「でも今回、ギアスの出番無かったね…」

「…言っな…」

すると、どこからか放送が流れた。

ピンポンパンポーン  
懐かしいな、この音。

『フェアリーテイルの皆さん、この声をよくお聞きなさい』  
『ああーっ！』

「ルーシイの声だ!？」

「ええ!？」

『我々は、ルーシイを捕獲しました。そつ、一つ目の目的は達成されたのです。我々に残された目的は…あと一つ、それは貴様らの殲滅だ!クソガキ共!』

「こつしちやいらねえ!とつとと行くぞ!」

「らーっ!」

なんとか辿り着いた。そこにはエルザと、既にグレイ達が居た。

「おーい、皆あー!」

「おーい!」

「ギアス遅えーぞ!」

「悪い、つてなんでミラも居る訳?」

「ちよつと…捕まっちゃつてて…」

取り合えず側にアリアが倒れてたので覚えました。  
その時、強烈な殺気を感じた。

「!?!…何だ!?!」

「……!?!」

「これは!?!」

「死の気配!?!」

「震えが来た!?!」

「えっ何?」

皆には何かを感じ取った様だ。俺は感じなかったけど。

「何だ！？この感じは！？」

「ぬう、漢にあるまじき寒気が！？」

「邪気が漂っている！？」

「だから何が？」

「ギアス、お前は感じないのか！？この殺気を！？」

そこに拍手が聞こえてきた。

全員は振り向くと、そこに居たのは、

「いやいや見事でしたよ、フェアリーテイルの魔導士の皆さん。

まさかここまで楽しませてくれるとは、正直思っていませんでしたよ。ジュピターを破壊し、エレメント4を降して…我が魔道巨人を跪かせるとはねえ…」

「マスター・ジョゼ！」

「ええっ！？」

「こいつが！？」

「ファントムのマスターか！？」

「なんて邪悪な魔力なの！？向かい合ってるだけで吐き気がする！？」

ファントムロードのマスター、ジョゼ・ポーラだった。

「さて、楽しませてお礼をしませんとなあ…」

「エルフマン！」

「オウよ！」

「…たつぷりとねえ」

ゆっくりと手をかざすジヨゼ。

「アイスメイク！」

「ビーストアーム！」

「待て、早まるな！？」

「笑止！」

「まずい！？」

ギアスはスピードで、二人の前に出た。

「波動！」

その瞬間、ジヨゼの魔法が飛んで来たが、波動によって防がれた。

「！！？」

「お前達下がってる！太刀打ち出来る相手じゃない！」

ジヨゼは腕を振った瞬間、衝撃波が来て、グレイ、エルフマン、ミラ、ルシアを吹き飛ばした。

「ぐわーーーー！？」「

「きゃあーーーー！？」

「うわーーーー！？」

「グレイ、エルフマン！？」

「ミラ、ルシア！？」

ギアスとエルザは直ぐにジヨゼの方に向かった。

「ハアッ！」

応戦するジヨゼ。

避けながら黒羽の鎧に換装するエルザ。

「ハアアアアッ!!!」

攻撃する二人だが、難なくあしらうジヨゼ。

「ほう、やりますね。さすがはジュピターを防ぐだけではなく、跳ね返す程の魔力を持つフェアリージャッジメントのギアセルシアと、エレメント4のアリアさんを降したティターニアのエルザといいますね」

「そりゃ、どうも!」

その様子を見ていたグレイ達は、

「すげえ、エルザとギアス…」

「漢だぜ、エルザとギアス…」

「エルザは女だけどね…」

「今ジヨゼと戦えるのは、エルザとギアスのみ!ここは二人に任せましょう!」

そして、ギアス& amp ;エルザVSジヨゼの戦いが始まった。

それからしばらく戦い続けて、

「なかなかやりますね。でも残念、その程度では私を倒す事は出来ませんよ?」

「例え敵わなくとも、貴様に一矢報いてみせる!」

「そういう訳だぜオッサン!」

「威勢が良く、気丈な方達ですね。なんて壊しがいいあるんですよ!」





皆は驚いた。あのジヨゼに一発入った事が。

「な、何い!？」

「……どれだけの物を傷付ければ気が済むんだ…お前らは…」

ギアスの体から、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の入り混じったオーラが出ていた。

もう一度殴りかかるギアス。

「先程は油断しましたが、今度はそうハ「ブラックバード」  
「ディーンドライブ・BB」  
「ブフォアツ!？」

「「なっ!？」」

「ギアスの攻撃が!？」

「当たった!？」

マツハ3で殴り付けた。

「今までの借りを全部返してやる!フェアリーテイルに手を出した事を後悔させてやる!！」

激怒するギアス。

怒りのままに暴れてやるぜ!

「これ程の魔導士がマカロフのギルドに居たとは…気に食わん!」  
衝撃波を放つジヨゼ。  
それを弾くギアス。

「何故私がマカロフにトドメを刺さなかったか御分かりですか？」

「ああん！」  
「絶望！」

なおも衝撃波を放ち続けるジヨゼ。

「絶望を与える為です。目が覚めた時、愛するギルドと愛する仲間が全滅していたらどうでしょう？ふふふっ、悲しむでしょうね。あの男には絶望と悲しみを与えて滅ぼす！楽には逝かせぬ、苦しんで苦しんで、苦しみ抜きながら朽ちて逝くのだ！！」

「下劣な！」

「悪党め！」

「漢じゃねー！」

「そんな！？」

「マスターにそこまでするの！？」

「この、外道がアツ！」

再度殴りつけるが、ジヨゼはすぐ後ろに移動していた。

「フロントムロードは、ずっと一番のギルドだった。この国で一番の魔力と、一番の人材と、一番の金があった」

若干笑顔だったジヨゼは、段々険しい顔になっていった。

「だが、ここ数年でフェアリーテイルは急激に力を付けて来た。ギアセルシアやエルザ、ラクサスにミストガン、その名は我が町にまで届き、サラマンダーの噂は国中に広がった。いつしかフロントムロードとフェアリーテイルは、この国を代表する二つのギルドとなった。ふっ、気に入らんのだよ、元々クソみてえに弱っちいギルドだった癖に！」

「くだらねえな！んなくだんねえ事をいつまでも妬んでんじゃねえ

よ

心底呆れ風に言った。

「妬み？ははっ、違うな！我々はモノの優劣をはつきりさせたいのだよ！」

「だとしたら、益々くだらねえな！んなちっちゃい事気にしてたなんてなあ、アホ過ぎんだよ！」

また殴りかかるギアスだが、ジヨゼは避け続ける。

「前々から気に食わんギルドだったが、戦争の引き金は些細な事だった。ハートフィリア財閥のお嬢様を連れ戻してくれという依頼だな。この国有数の資産家の娘がフェアリーテイルにいるだと、貴様らは…どこまで大きくなれば気が済むのだ！」

ジヨゼが魔法を放つが、ギアスも避けた。

「ハートフィリアの金を貴様らが自由に使えたとしたら、間違いない。我々よりも強大な力を入れる、それだけは許しておけんだ！」

魔法がギアスに当たった。

「……ギアス……？」「……」

「ふっ。……なっ！？」

爆煙の中からギアスが見えてきた。

「……だからお前をアホだと言っただよ。一番だの何だのほざいて

おきながら、お前らの情報力の無さに呆れてものも言えないな」

「何だと…!？」

「ルーシイは家出して来たんだ!家の金など、一銭も使える訳ないだろ!家賃7万の家に住み、俺らと同じ様に仕事して、共に戦い、共に笑い、共に泣き、俺らとそう変わらない!そして、同じギルドの仲間だ!」

ゆっくりと立ち、オーラを湧き立たせる。

「戦争の引き金だあ、ハートフィリア家の娘だあ、子は親を選べられねえ!テメーなんかには、涙を流すルーシイの何が分かる!」

「グアツ!？」

さつきより速い速度で走ってジヨゼを殴り付けて、壁まで吹っ飛んだ。

そしてゆっくりと立ち上がるジヨゼ。

「これから知っていくさ。私があの子をタダで父親に引き渡すと思うか?金が無くなるまで飼いつけてやる。ハートフィリアの財産全ては私の手に渡すのだ!」

ブチッ

この時、ギアスの中の何かが切れた。

「…もう貴様は喋るな…貴様は…存在する価値は無え!」

「だったらどうs「ウオリヤッ!」ガハッ!？」

スピードでジヨゼに頭突きを食らわし、ジヨゼの魔法を覚えた。

「ハアアアアアアアアアア!」

ギアスの猛攻により、ジヨゼは喰らい続けた。

「おのれ、喰らえ！」

ジヨゼの魔法が来たが、ギアスはそれを食った。

「なっ!?!」

「俺がドラゴンスレイヤーだって事、忘れてるだろ?さて、覚悟はいいか?」

ギアスは一瞬でジヨゼに近づき、ボディブローをぶちかまし、左回し蹴りで吹っ飛ばし、それを追いかけてジヨゼの顔に腕を振り下ろした。

「お、おのれえ！」

懲りずに魔法を放つが、また食われてしまい、ジヨゼの足元まで近づいたギアス。

「はっ!?!」

「テメーは俺が、ブツ飛ばああああす!!」

ジヨゼを高く蹴り上げた。

天井すれすれまで飛ばされたジヨゼは、

「…このクソ共が、まとめて消えるがいい!!」

ジヨゼの手に闇が集まっていく。

するとギアスは、回転しながらジヨゼの方へと飛んで行った。



「そしてこれは……ブツ壊された、ギルドの分だぁー……」

そして回転したまま、ジョゼを打ち抜き、外までブツ飛ばした。

フアントムMk-?、腹部分、ルーシィサイド

サジタリウスの機転により、炎を食べてパワーアップしたナツは、鉄のドラゴンスレイヤーのガジルを圧倒した。

「ほんとに、やり過ぎなんだから」

「あい！それがナツです！」

「へへっ」

「(でも、ちょっとカッコ良かったよ)」

その時、さつきまでナツが戦ってた場所から何かが飛び出して来た。

「な、何!?!」

「あれは!?!」

「ん? 誰か吹っ飛ばされたのか?」

良く見てみると、飛んで来たのは、ジョゼだった。

「嘘、ジョゼ!?!」

「ジョゼが、何で!?!」

「あいつしかいねえだろ!」

「あいつ?」

ナツは、誰がジヨゼを倒したのか分かったみたい。

「こんなこと出来るのは、じっちゃんとギアスだけだ！」

「ギアスが!？」

「なるほど!」

「納得するのかい!？」

でも、本当にギアスがジヨゼを倒しちゃったのなら、もうマスター並の実力って事じゃない!？どこまですごいのよギアス!？

フェアリーテイル裏庭、湖のほとり

「ん?!?!?おいあれ、あれ見る!」

「????????????ん?」「」「」「」「」「」「」

マカオが気付いて、巨人から吹き飛んだ何かを見た。

「????????????ジヨゼ!?!?」「」「」「」「」「」「」

全員が驚いた。

ファントムMk-?、首部分

「ギアスが…本当にやったのかよ…」

「やったわギアス」



「漢の中の漢だぜギアス！」

「やったやったー！」

「だが、これだけの魔力を消費したギアスは無事だろうか？」

エルザの言葉で全員天井の方を向いたら、ギアスが落ちて来るのが見えた。

「まずい！？ギアス！」

だが、地面に激突する瞬間、ギアスは身を翻して着地した。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「ギ、ギアス！」

皆が心配していると、ギアスは腕を横に振った。

「は、判決・・・」

そして、縦に振った。

「死刑！！」

ドシン

何かが落下した音がした。

そこに居たのは、ジョゼだった。

「ジョゼ！？」

「ファントムのマスターを…倒しちまうとはな」

「さすがだぞギアス！」

皆が駆け寄って来た。

！?...不意に嫌な予感がした。急いで皆に覆う程の波動を展開した。すると、たくさんの魔法が飛んで来たが、波動によつてはばかれる。

「なんだ!？」

放つて来た方に向くと、そこに居たのは、目を真っ黒にしたジヨゼが居た。

「フロントムロ・ドノ...マスターデアル...私ガ...、貴様ラギルドノ兵如キニ負ケル訳ガ無イ！」

「貴様まだ!？」

「しびてえなあ!？」

「テメエはどうあつても叩きのめされてえ様だな！」

あれやるしかねえな！

「跪け、フェアリーテイルに！」

「ハア？」

ギアスは、手に光を溜めた。

「何ヲ言イ出スノカト思エバ、跪ケダア!？」

黙々と光を溜めるギアス。

「まさか!？ギアス、それが使えるのか!？」

「エルザ、ギアスが何やるうとしていいのか分かるのか?」

「ああ、成功すれば確かにギアスの勝ちが決まるが...」

「王国一ノギルドガ貴様ラニ屈シロダト、冗談ジャナイ!跪クノハ

貴様ラノ方ダ！消工口、塵トナツテ歴史上カラ消滅シロ！フェアリーテイル！！」

「（マスター、俺に力を！）」

「消工去レエ！フェアリーイテイルウウウウウウウウ！！！！」

ジヨゼは、特大の魔法をギアスにぶつけようとするが、ギアスが溜めた光を手に合わせてその瞬間、眩しい光がジヨゼの魔法を打ち消し、部屋中を覆った。

「ナアツ！！！？」

フェアリー  
妖精の法律…発動！！」

ギアスがいる部屋を中心に、眩しい光が巨人を覆った。

「何だ？この光！？」

「フェアリーロウだ！」

「フェアリー…ロウ？」

「聖なる光で闇を討つ。術者が敵と認識した者だけを討つ。もはや、伝説の一つに数えられる…超魔法だ！マスター以外で使える者が居るとはな」

「ギアスだからだろう？」

「ギアスだしな」

色々言われてはいるが、さて、ジヨゼはどうなったかな？

光が収まると、ジヨゼはすっかり怯えていた。

うわ〜老化してんじゃん。それに全体的に薄くなってるし、まあ悪党だから気にしないけどね。

「二度とフェアリーテイルに近寄んじゃねえぞ！」

そう言って皆の所に戻るギアス。

「ギアス！やったn…ああ!？」

エルザのやつ、どうs…てそうだ!？確かこの後って、アリアが…

「（悲しいなあ、今ならフェアリージャツジメントの魔力を奪える。貰ったあ!）」

ギアスは慌てて振り返るが、既にアリアは空域・滅を使う寸前だった。  
やべっ！

「……ギアス!?!？」

その時、

「グアツ!?!…ブフォツ!?!？」

誰かがアリアを殴り付けた後、瓦礫にぶつかった。皆がその方向に向くと、そこに居たのは、

「もう終わったんじゃ、ギルド同士のケジメは付けた。これ以上を望むなら、それは掃滅、跡形も無く消すぞ！ジヨゼを連れて帰れ！今すぐに!！」

マスターだった。

皆はマスターが復帰して喜んで来た。来るのが遅いよマスター。

「（あ…れ…？）」

体が、動か…ない…？

ギアスはその場で意識を失った。

雨の中に咲く花々 フェアリーロウ（後書き）

初登場の能力

せんこうにじりゆづけん

閃光虹竜拳

覚えた魔法

エレメント4・ソル、ジュビア、アリアの魔法

マスター・ジヨゼの魔法

やっとファントム編終了です。

次回ギアスがとんでもない称号を得ます。

あたしの決意〜NEXT GENERATION(前書き)

ファントム戦後のルーシィの気持ち編です。  
と芝居編です。

## あたしの決意〜NEXT GENERATION

ファントムMk-?、腹部分、ナツサイド

「おい、聞こえてつかガジル?」

「何も聞こえねえよ」

「なあお前、滅竜魔法、何処で覚えた?」

「聞こえねえつつつてんだろ!」

なんかムカついて来たな。

「俺は、同じ魔法使える奴はギアス以外で初めて会ったんだぞ!そんなくれえ教えてくれても…」

「うるせえ」

又アー、やっぱりムカつく!

「……メタリカーナ…」

「ん?」

「鋼鉄のドラゴン、メタリカーナだ!」

「何い!?あつ…だはー!?!」

ナツは滑り落ちた。

「やっぱり、ドラゴンに教えてもらったのか!?!」

「お前もか?」

「ついでにギアスもな!そいつ今どうしてる?」

「…さあな…」



「……………そいつ今どーしてるー!!」  
「知らねつつつてんだろー!!」

ナツとガジルは頭突きをした。  
当然二人とも痛がつてる。

「…ったくよ…テメエなんかと話てつと、脳みそが灰になつちま  
いそつだ」

「…っ…んだ〜!」

「……………消えたんだよ……………メタリカーナは…ある日突然、俺の前から  
消えた…何も言い残さずにな…ったく、勝手な野郎だぜ…」

どこか哀愁の漂うガジル。  
それを聞いて驚くナツ。

「お、おい、それって7年前の7月7日じゃねーだろーな?」

「何!? お前、メタリカーナの居場所知ってんのか!?」

「バカ言え、俺が探してんのはイグニール、炎のドラゴンだ。ちな  
みにギアスのは虹のドラゴン、プリズレイヤーだ。イグニールもプ  
リズレイヤーも7年前の7月7日に消えたんだ」

「!?!? 7年前…777年…7月7日…三頭のドラゴンが消えた?」

「何で7ばっかり並んだよ!?」

「知るか!」

また頭突きをするナツとガジル。

また二人とも痛がつてる。

「…まあ、俺にはどうでもいい事だ」

「……………行くなら早く行けよ」

「此処は俺たちのギルドじゃねーか!出てくのはテメーの方だろお

！」

「ケチ臭い奴だなあ」

「さっさと出てけ！」

歩き始めるナツ。

「……イグニールとプリズレイヤーの事、何か分かったら教えてくれよー」

「何で俺がテメーらに親切しなきゃなんねーんだよ!？」

「同じドラゴンスレイヤーじゃねえか」

「ざけんな！次に会ったらぶっ潰す！絶対にな！首を洗って待ってな！」

「物騒な奴だなあ、これでお相子だから仲直りしてやろうと思ったのに」

「物騒はどつちだ！俺たちのギルドをこんなにしやがって！」

「オメーらだって、俺たちのギルドメチャメチャにしたじゃねーか！あーあ、やっぱ仲直りやーめた！」

結局ケンカ別れするナツとガジルだった。

サイドエンド

四日後、ルーンナイト評議員軍の駐屯地、医務室

「ん？ふあゝあゝあゝあゝ、良く寝た…あれ？此処、どこだ？つか、何でここで寝てんだ？」

たしかファントムが襲って来て、ジヨゼと戦って、そうだフェアリ

「ロウを使ったんだっけ？それで魔力ほとんど使っちゃったから、ぶっ倒れたのか。」  
すると、誰か来た。

「！？ギアス、目が覚めたのか！？」

「エルザ…か？」

エルザがやって来た。

そしてすぐ後ろから、いつものメンツが来た。

「おっ、やっと目が覚めたか！」

「あい、ギアス起きてる？」

「お前すげーじゃねーか！」

「ギアス、もう大丈夫なの？」

「ギアスー！大丈夫ー？」

「ああ、なんとかかな。まだだるく感じるけど…」

「あれから四日経ってたんだよギアス」

「四日！？俺そんなに寝てたのか！？」

道理でだるいと思った。

「フェアリーロウを使ったんじゃ、そうなるじゃろって」

マスターも来たよ。

それから色々あって、三日間取り調べを受けたギアス達は、ギルドを建て直す作業を行っていた。

えっ？時のアークで直さないのかって？最初はそう思ったが、マスターがこの際新しくするって言い出したので、原作通り新しいギルドを建てるのであった。余談だが、ドサクサでエルフマンのビーストソウルを覚えた。

でもなんか腑に落ちない。何故俺だけ後日マスターと一緒に評議員に行かなくちゃいけないんだらうか？

フェアリーテイル、建設工事現場

ギルドの建て直しの中で、ナツがまた無理な事をしていた。

「うおらぁー！！………がつ！？」

角材を十本程持って行こうとしたら、バランスを崩して埋もれてしまった。

「一度にそんなに持つからだ。バクカ」

「んだコラーー！」

「やんのかコラー！」

「チマチマ運んでんじゃねえよ！」

相変わらずケンカしてるなああの二人。  
ん？あそこにいるのは……

「（あゝグレイ様、ジュビアも運んで〜！）」

ジュビアが居たよ……よく誰にも見つけれないもんだな。  
するとミラが、

「あらギアス……よく持てるわねそれ……」

そう、今俺はパワーの能力で、角材二十本を軽々と持っています。

しかも片手で。

それを見ていたナツとグレイは、

「さすがに…あんなには…持てないな…」

「やっぱギアスは規格外だな…」

その時、

「そこお！」

「グゲツ！？」

ナツとグレイは、エルザの振り下ろした角材によって地面にめり込んだ。

「口よりも体を動かせ！一刻も早く、フェアリーテイルを再建するんだ！」

「あゝい…」

工事現場にいる格好で二人に説教をしているエルザ、変わらないなこのやりとり。

「エルザ…気合入ってんなあ…」

「あの服も換装か？」

ドロイとジェットは突っ込んだ。

「マスターも気合入りまくりだよ」

「ノリノリじゃねーか！？」

レビィの一言に突っ込む二人。

つか巨大化して、角材を楽に積み重ねてるな。

「監督！この角材はどちらに？」

「おう、あっちじゃ！」

「何だよ監督って！？」「」

エルザとマスターに突っ込む二人。

つか今回の突っ込みキャラはこの二人か？やっぱりキレのある突っ込みが出せるルーシイが居ないとなあ。

「つかよ……」

「なんか…でか過ぎねえか？」

「折角だから、改築するのよ。で、これが完成予想図！」

「マジか！？」

「どれどれ？」

ミラが持ってた設計図を見た。

その画は、子供のラクガキにしか見えなかった。

「よ、良く解かんね？」

「にしてもヘツタクソだなあ。どこのバカが描いたんだよ」

すると、

「え〜ん……」

「あっ！？ミラちゃんだったんだ！？」

「」「」また泣かした「」「」

「それがグレイです」「」

以前は、「ナツVSエルザ」であったんですが、この作品だとカッ

トされてるので、泣かせた発言はこれが初めてになります。by作者  
メタな事は置いて、ん？

「（そう、グレイ様はジュビアだけに優しいの！）」

ジュビーンと笑っているジュビアを見て、引くギアス。

昼頃、腹を空かしたグレイの所に、突然水が噴き出して、いつの間にかグレイの膝の上に弁当が置かれていた。

グレイが弁当の中を見たら、グレイの顔がある弁当（いわゆるキヤラ弁）だった。

当然グレイは気味悪かった。

「こんな意味不明なもん食えつか…なんか汁出てるし…」

「（ジュビア悲しい…三日間徹夜して作ったのに…）」

…例え気味悪がっても、少くらはいは食べてあげるよグレイ。

この後エルザが来て摘み食いしたら、好評だったのでグレイも食べたら絶賛した。

「（ジュビア感激〜！）」

その時、誰か来た。

「これ…ルーシィに渡しといてくれないか？」

精霊の鍵を探してくれたロキだった。

「お前！？しばらく見ねえと思ったら！？」

「ずっと鍵探してたのか！？」

よく見るとロキの顔はものすごくやつれている。  
一週間水しか飲んでいませんと言われたら信じちまいそうだ。  
その後ルーシィのお見舞いに行く事になった。

## ルーシィの家

ナツとハッピーは窓から、グレイは煙突から、エルザは堂々とドアから入ってった。

俺はドアドアの実の能力で、壁をドアにして不法侵入した。

「ん？あれ〜？」

「いつもなら…」

「あたしの部屋〜！？」となる筈なんだが？

「トイレじゃね？」

「まさか…風呂か!？」

グレイは風呂場に向かった。

「お約束の展開が待ってる様で〜、申し訳ねえg」いねっ「チエツク早えよ!？つか入ってんじゃねえ!？」

なんか最近ムツツリになってねえかグレイ。

「出かけている様だな」

「お前も何しに来たんだよ!？」

風呂に入ろうとタオル姿になってるエルザに突っ込むグレイ。



「なんかグレイだと…」

「イマイチ物足りない様な…」

「うむ、どうも突っ込みが半端だな」

「ルーシイが居ないとテンポ悪いね」

「なんのダメ出しだよ…つか半端で悪かったなおい…」

ちよつとブルーになるグレイ。

しばらく探していると、ハッピーが何かをぶちまけた。

「なんだこれは？」

「手紙だな」

「こんなたくさんあるな、誰宛だ？」

「ママ、あたし遂に憧れのフェアリーテイルに入る事が出来ました。

「おいおい！？勝手に読むんじゃないぞー？」今日は、エルザさんとギアセルシアさんと人に会ったの、エルザさんはカッコ良くて綺麗で、ギアセルシアさんは見た目怖いけど優しい人で、あのナツとグレイがね…」

「る、ルーシイ…照れるな」

「俺は…そんなに見た目が…怖かったのか！？」

ちよつとショックだぞルーシイ。

「これ全部…ママへの手紙か？」

「みただね」

「何で送ってねえんだろ？」

「あの親父さんが居たから出しにくかったんじゃないかねえのか？」

理由は故人だからね。

するとエルザは、机の上にあつた書き置きを見つけた。

「書き置きだ！？」「……ん？」「……これはルーシイの書き置きだ…家に帰る…だそうだ…」

「……な、何で……！！？」「……」

一応知っている俺はノリで言った。

ハートフィリア領、レイラの墓

俺達はルーシイを探しに来た。

途中ルーシイの事を訪ねて、墓地の方にいると言われ、そこに向かい、ルーシイを発見した。

「……ルーシイ！！」「……」

「何でえ〜！？」

その後、なんで妖精の尻尾を出て行くんだみたいな事言ってた。いやいや出て行かないよとルーシイが説明、みんな目を丸くしていた（ギアス以外）。

そしてフェアリーテイルに帰ろうとした時、

「ホント、心配かけてごめん」

「気にするな、早合点した私達にも非はある」

「取り越し苦労だった訳か」

「ハッピーなんかずっと泣いてたぞ」

「ナツだつてオロオロしてたじゃないか」

「し、してねって……」

「な、何か、ホントごめんね……」

「しかしま、無駄に広い町だなあ」

「のどかで良いではないか」

「金で解決出来ると思ってるオッサンの領にしては平和だな」

「らう、空気もおいしいし」

「あっ、違うの。ここはうちの庭だよ。あの山の向こうまでがあたしん家」

ルーシイとギアス以外真っ白になった皆。

知ってるとはいえ、やっぱりスケールが違うな。

「あれ？どうしたの皆？」

すると、

「才嬢様キターーーー!?!」

「サリ気自慢キターーーー!?!」

「山マデ持ッテル人キターーーー!?!」

「ナツとグレイとルシアがやられました!?!エルザ隊長、ギアス副隊長、一言お願いします!?!」

「アア、空ガ…青イナア」

「衛生兵!?!エルザ隊長が故障したぞー!?!」

「ウパーーーー」

「やっぱり金持ちのスケールデカイなあ。後エルザ、今は夕方だから空は赤いぞ」

「衛生兵!?!ギアス副隊長も故障したぞー!?!」

「おいコラハッピー、誰が壊れたって?」

「あっ直ってる」

予想以上に壊れてるな。ルーシイも啞然としてるな。

数日後、評議員ファイオーレ支部

何の用で呼ばれたんだろう？マスターは裁判の方に行っちゃったし、俺は別の会場の前で待つ様に言われ、ポツンとしていた。まだ誰も来てないからだ。

「うぬがフェアリージャツジメントか？」  
「ん？」

声をかけられたので振り向いたら、そこにいたのは、ラミア スケイル蛇姫の鱗の聖十大魔導、岩鉄のジユラだった。

「そうだけど、そうゆう貴方はラミアスケイルの…」  
「ジユラ・ネエキスと申す」

そう言つて頭を下げるジユラ。

「あつ、別に畏まらないで下さい。それよりも、何故俺はここに呼ばれたんだ？」

「！？知っていたから来たのではないのか！？」  
「そいつにはまだ話してないからな。事情を知らないのも無理はない」

また誰か来た。！？こいつは、

「ジークレイン殿！」  
「ジーク…レイン…」

こいつは…思念体か、そしてもうしばらくしたら、対決する相手か。

「なあ、俺は何の用で呼ばれたんだ？」  
「全員揃うまでのお楽しみだ」

そう言っただけで去るジークレイン。

「？ジユラさん、全員とは？」

「君のマスター、マカロフ殿以外の聖十大魔導達の事だ」

「聖十！？何で！？」

「それは貴方が、マカロフ殿と同等の魔力の持ち主であり、ファン  
トムロードのマスター、ジヨゼ・ポーラを倒したからです」

どうやらジヨゼを倒した所為で、他の聖十大魔導士達に目を付けられた様だ。

「げっ！？俺、かなりまずい事しちゃったみたいな状況！？」

「？いえ、ジヨゼの事は自業自得としか言いようがありません。今

回の事は別にありますから」

「別の事？」

意味が分からねえ。

そして、聖十大魔導達が集まった。

つか、何でジユラさんとジークレイン以外の人達、皆マンガみたい  
に上半身が黒ずんで顔が見えないんだけど、まあこの二人とマス  
ター以外の六人はまだ紹介されてないから、こうゆう扱いな訳ね。

てゆうか、ジユラさん以外皆思念体ってどーゆー訳！？ジユラさん  
以外まともな奴居ないの！？

それから、集まって何をしたらかと言つと…

なんと、

称号、

貰っちゃいました。

聖十の称号を。

驚きました。まさか俺が選ばれるとはな。考えてみたら、聖十の一人であるジョゼを倒しちまったから貰えた様なもんだしな。今俺は、聖十の称号の証であるバッジを持って評議員の廊下を歩いています。

ん？あそこに居るのはマスターと、評議員のヤジマさんか？

「マスター！」

「ん？おおギアスカ、そっちは何の様じゃった？」

「えっと…これ…貰っちゃいました」

そう言つて聖十のバッジを見せた。

「ぬあああああ！？ギアスカ、それは…！？」

「聖十のバッジです」

「こりゃあ驚いたの〜」

「マー坊、身近に適任のモンがいるでね〜か？」

「う〜む…」

「？」

どうやら、引退の話をしてた所をしてた時に来ちゃったみたいだな。取り合えずギアスは、フェアリーテイルへと帰った。

フェアリーテイル、仮設酒場

帰って来ました。と同時に修羅場になってました。

ラクサスが弱い奴はギルドに必要な無い発言でエルザはマジギレ寸前になっている。

「まっ、俺がいたらこんな無様な目には遭わなかったがな」

「貴様！」

ドタマに来たぞラクサス。

「だったら何で戦闘に参加しなかったんだ？」

「……ギアス！」

「……………」

「フェアリーテイルの為に、皆必死で戦ったんだ！ミストガンでさえ、ファントムの支部を一人で潰して来たんだ！お前だけじゃねえか、何もしてねえのは！」

ギアスは正論を言った。

「俺が手を出す相手じゃねえって事さ。この際だ、俺がギルドを継いだら弱<sup>もん</sup>え者は全て削除する！そして齒向かう奴も全てだ！最強のギルドを作る！誰にも舐められねえ史上最強のギルドだ！はははははっ……！」

そう言つてラクサスは消えた。  
皆、苦い思いを抱いていた。

「あんの野郎お！」

「もういい、あいつに関わると疲れる。それよりギアス、お前今朝から何処に行つてたんだ？」

「ああ、評議員の所だ。んで、これ貰つて来た」

そう言つてエルザにバッジを見せた。

「!?!ギアス、これは…聖十大魔導士の証ではないか!?!」

「……………ええっ!?!?」「……………」

皆、すつげえ驚いてるよ。

「ギアス、おめえいつの間に!?!」

「まあファントムのマスターをやつつけたから当然かもしれないけど…」

「とんでもねえなギアスは」

「ギアスの方がよっぽどマスターに相応しいな」

「確かに」

「おめえだつたら、喜んで付いて行くぜ！」

等と色々言われて、なんか恥ずかしいな。

「盛り上がった所でどうだろう、仕事でも行かないか？」

「?」

エルザがギアスに勧誘した。



「もちろん、ナツとグレイとルーシイも一緒だ」

「えっ!?!」

「はいつ!?!」

「アイゼンヴァルトの件から、常に一緒にいる気がするしな」

「いや、一緒だったろうが…」

取り合えず突っ込んだ。

「今頃かい…」

「誰がどう見たってそうだったろうが、ちゃんと自覚して無かったのか?」

「さすがエルザ…」

ワカバ、マカオ、カナの順で苦笑した。

「この際チームを組まないか? 私達5人で。あつ、ハッピーとルシアを入れて7人か」

「わあつ、でも…あたしなんかでいいのかな…」

「なんかじゃねえ!」

「!?!」

そう言っつてナツはルーシイに近づいた。

「ルーシイだからこそ良いんだ!」

「あい!」

「お前が居ないと、何となく締めまりが無えからな」

「……えへっ」

ルーシイは笑顔になった。

「フェアリーテイル最強チーム、正式結成だね！」

「こりゃ良いや」

「つか、ルーシー最強か？」

「僕はアクエリアスを出されたら、勝てる気がしないよ」

「突っ込みもすごいしな」

「色んな意味で最強」

確かに、ただでさえポケキャラが多いなか、ツッコミキャラは貴重だからね。

「さっそくだが仕事だ！ルビナスの城下町で暗躍している、魔法教団をたたく！行くぞ！」

「……おおー！」「……」

「あい！」

「らっ！」

こうして俺達は仕事に向かった。そしてまた大暴れで、町半分やつちまっただぜ。壊した建物は全部時のアークで直しました。

夜、フェアリーテイル工事現場、マカロフサイド

「んぐっ、んぐっ、ぷはあっ、………引退か……」

マカロフは工事現場を見渡した。

「…ギルドも新しくなる。ならばマスターも次の世代へ…。…ラク

サス…あやつは心に大きな問題がある。…ミストガンは、デイスコ  
コミュニケーションの見本みたいな奴じゃ。…だとすると、まだ若い  
がエルザか、もしくはギアス…あやつは聖十の称号を得た。人望も  
あるし、うゝむ……」

次のマスターは誰にするか悩むマカロフ。

「マスター！こんな所にいらしたんですか？」

「ん？」

「またやつちやつたみたいです」

「はあ！？」

嫌な予感がしたマカロフ。

「エルザ達が、仕事先で町を半壊させちゃったみたいです。でもギ  
アスが直しましたけど」

笑顔で言うミラ。

「……………！！！？（声にな  
らない程叫んでいます）」

町を半壊の所で絶望状態になった。

「評議員から、早々に始末書の提出を求められていますよ。あれっ？  
マスターどうしました？」

「引退なんかしてられるかあああああああああああああああ  
あ！！！」

闇夜に響くマカロフの叫びだった。

サイドエンド

翌日、オニバスの町、劇場前

ミラがルーシイ向けの仕事を紹介してくれた。不評の劇場を俺達で盛り上げるとゆう裏方仕事を任せられました。

「行くうー！」

ルーシイが張り切っちゃってます。  
すると、

「あの〜、フェアリーテイルの皆さんですか？」

座長さんらしき人物が出て来た。

「はい！」

「引き受けて下さり、誠にありがとうございます」

「はい！演出ならあたし達n」それがですねえ…」ん？」

「ちょっと…困った事になってしまいました…」

劇場内、役者控室

なんと、役者が逃げたらしい。

「はい…ありがとうございます…」  
「…なにが…」

何で礼をいうんだろう？思わずハッピーとルシアとで突っ込んだじゃったよ。

「公演する舞台が不評につく不評、やがては…役者達も私の劇に出る事を恥に思う始末…夢を追う私に妻は愛想を吐かし出て行きました…私に残された道は…もうこれしか無いと言つのに…本当にありがとうございます！」

「…礼を言つとこ間違つてるよそれ」

グレイが突っ込んだ。

「そうゆう訳で、舞台は中止なのです！ありがとうございます！」

だから、礼を言つとこ違うだろ。

「何かと思えばそんな事か」

「…ん？」

「役者なら、ここに居るではないか！」

エルザは高々と言った。

「ええっ!?!」

「輝いてる!?!」

そうだった!?!エルザはこつゆつのに出たがる奴だった。

「あ・え・い・う・え・お・あ・お・か・け・き・く・け・こ・か・

「……」  
「発声練習だ!？」

止めた方が良いのか? エルザは本番に弱いタイプなのに…

「なんか面白そうかも」

「そうなのか？」

「あい」

「らっ」

「皆出る気だな、まあいいか」

「あなたの夢は、こんな所じゃ終わらせねえよ!」

「えっ、皆さん!?! …… まあ、やらせてやってもいいかな…ちっ、

素人め(「まあ」から小声で言った)「

「………そこは…ありがとうって…言わないんだ…」

何かムカつくな、あなたの為にやろうとしてるのに。

それから、劇の為に演技したり、背景作ったり、ビラを撒いたりで大忙し。

すると、

「応援団の方がいらしてますよ。ありがとうございます」

「………応援団?」「………」

外に出て見ると、

「よっ」

マカロフとミラにヤジマさん、ゴールドマインとボブ、ガルナの村長とグレイファンの子にエルザファンの海賊、偽サラマンダーのボラにアイゼンヴァルトの「オニク」って言ってる鶏っぽい奴にファ

ントムのナツファンのみなり喋りの男女に少女部隊もいた。

「突っ込みどころ多過ぎー!?」

その気持ち、分かる。

「そろそろ本番ね、頑張つて!」

「芝居なんざあ久しぶりじゃの」

「招待感謝するよマー坊」

「お久々元気してた」

「冷やかしに来てやったぜ」

「オニク」

言いたいだけ言う応援団。

「てか何であんたがいんのよ、偽サラマンダー」

「久しぶりだなマイケル」

「ボラっすよ。兄貴の熱い拳に心打たれて、もう強引なグラビアアイドルのスカウトはやめたんすよ」

俺には関わって無い事だから飛ばしてっと。

「御姐様、応援してます!」

あの海賊こんな所に居ていいのか?

「君はガルナ島の…」

「ルルです。その節はお世話になりました」

「ぶが」

あの子ルルっていつのか。

「って、あんたら確かファントムの……」

モブキャラは放っておいて「ひどっ!?!」「ひどっ!?!」「、ファン  
トムのメインディッシュである、

「おにーちゃん、応援に来たよ」

「…来てあげたわよ」

『よす〜』

ミオたん達キターーーーーー!!!!!!

「ああミオたん、僕の為に来てくれたんだね!」

「うん!皆とだよ!」

歓喜のあまり、鼻血を出しながらミオに抱き着こうとするギアス。

「やめんかーーーー!!」

『んかー!』

そしてセツナとクチナシによってしばかれる。

そして公演の日が来た。

ちなみに役者は、

エルザ：フレデリック

ルーシイ：ヤンデリカ

リラ：演奏

グレイ：ジュリオス



ナツ：ドラゴン

ギアス：裏方

ハッピー&ルシア：黒子

そして劇が始まった。

劇の内容をダイジェストに言うと、

リラによる演奏は好評価、

でも本番に弱くてガチガチになってるエルザで台無し、

熱暴走を起こして換装した剣を客席に出した、

もはやアドリブでやるしかなかった皆、

吊り下げられてるルーシイを出した、

ルーシイも慌ててるのか誰を指しているのか意味不明な事を言った、

グレイが出て来て勝手にエルザに勝負を挑んだ、

エルザは緊張のあまり気絶寸前になった、

ルーシイはホロロギウムを出して中に入れた、

エルザの緊張が解けたのか復帰した、

グレイを追い出してルーシイを救ったエルザ、

戻って来たグレイはナツを呼び出した、

ギアスはフレグランズ（無害のやつ）で煙を出し、

ドラゴンの格好をしたナツが辺りを燃やした、

何故か共闘するエルザとグレイ、

何故かルーシイが二人を庇う、

重さに耐えきれなかったハッピーとルシアはナツを落としたり、

服が燃えて慌てるルーシイ、

燃えてる服を切ってマントを差し出すエルザ、

落とされた痛みで観客に炎を撒き散らすナツ、

何故かタウロスが出て来た、

ついでに出て来た悪魔風の格好をしたギアス、

暴れまわる一同、

そして劇場は倒壊した。

「あ〜らら」

「何でこうなるんじゃ!?!」

「マー坊。はよ引退せーよ…」

「あらあら」

「月の呪いですじゃ〜」

そして何故か拍手喝采をする客達。  
グダグダなのになぜ?

一週間後、劇場内控室

「まさかこんなに大ヒットするとはよ、大根役者の癖してやるじゃねーか!」

満足気味な座長さん。

そしてぶっ倒れてる一同。

「おい…いい加減…報酬…寄こせよ…」

「一日…三公演は…キツ過ぎんぞ…」

さすがのナツとグレイもダウンしています。

「グズが!とつとと準備せんかー!」

「キャラ…変わってる…し…」

「早く…早く帰りた〜い…」

皆疲れ果てていた。

ちなみに俺は喋る気も起きないくらいダウンしてます。

えっ？役者じゃないのに何で疲れてるんだって？公演の度に壊しまくるから俺が直してるんだよ。

それに、エルザは何であんなに元気に発声練習してんだよ。

あたしの決意〜NEXT GENERATION（後書き）

勝手に聖十にしちゃいました。

演劇は手抜きでした。

覚えた魔法

エルフマンの接収・ビーストソウル

今回はロキの事です。

エルフマンの魔法を入れ忘れてましたので、ここに入れました。

空に戻れない星々星霊王(前書き)

ロキの秘密が明らかに…

## 空に戻れない星々星霊王

### 盗賊団のアジト

俺達はギルドの仕事で盗賊退治をしています。

「モオoooooooooooo!!!」

「グハツ!?!」

「やったね、一丁上がり!」

「モ、素敵ですルーシイさん!」

タウロスの活躍に喜ぶルーシイ。

「があっ!?!」

「歯応えのねえ奴らだなあ」

「弱えくせに盗賊なんかやってんじゃねーよ」

ナツは盗賊Aを壁にめり込ませて、グレイは盗賊Bを踏み付けていた。

「俺らに…こんな事して…ただで済むと思っつなよ…!」

「デボン様が、黙ってねーぞ!」

「そいつとつくに潰れてるよ」

「「ええっ!?!」」

盗賊CとDが親分の事を言ったのだからうけど、ハッピーの一言で愕然としてしまった。

「こつちも片付いた」

「雑魚ばっかだけだな…ん！」

逃げようとした盗賊Eをぶっ飛ばすギアス。  
それを踏み付けにするエルザ。

「まだ仕置きが足りない様だな…」

こつちの時のエルザってホント怖いな。

牛がなんか騒いでるな。つかタウロスって意外とMか？あつ強制閉  
門された。

こつちであつと言う間に片付いた。

盗賊団のアジト、その周辺の街道

「思ったより、早く仕事が片付いたな」

「ウオー！暴れ足りねえ！」

「充分暴れたじゃねえかてめえ…」

ナツがもつと暴れたかった様子に呆れるグレイ。

「確かに雑魚過ぎてつまんなかったな」

「ギアスじゃ大抵が雑魚だよ」

周りもうつんと頷いていた。

「ルーシイ見てーこの宝石ー」

「だーッ！？勝手に持ってきちゃ駄目でしょ！？」

盗品持つてくんなよハッピー。

「ん？あそこにいるのロキじゃない？」

「ん？」

遠くに見えたのはロキだった。

そっぴいや星霊イベントがあつたんだっけ？

「あれ？偶然だな」

「お前もこの辺で仕事か？」

「ああ、皆も？…ああっルーシー！？」

「丁度良かった。この前h「じゃあ、仕事の途中だからあー！ー！ー！ー！？」

そう言つてロキはピュ〜な感じで去つて行つた。

一同啞然としていた。

「な、なによあれ…」

「お前あいつに何したんだ？」

「相当避けられてんぞ？」

「何かトラウマな事させたんじゃない？」

グレイ、ナツ、ギアスの順で言つた。

「何もしてない！」

そして俺達は、盗賊のアジトが見える位置に立つた。

「さ〜て、帰るか」



「ねえねえ、折角早く仕事終わったんだしさあ、偶に温泉にでも行つてのんびりしない？」

「ルーシィ……」

「あっ…は、はい!？」

ルーシィの提案にエルザは何か言いたそうだ。

ナツとグレイ、青くなるなよ。

「…良いアイデアだ！」

「は〜」

「「ほっ」「」

安心してるとよこいつら。

しかし温泉か。風呂で一杯、してみて〜な〜。

鳳仙花村、とある宿

さっそく風呂で一杯やろうとしたが、従業員の人に止められた。残念。

ひとつぷる浴びた後、部屋に戻り、寝ようとしたが、

「始めんぞコラー!」

「うばー!」

ナツとハッピーが来た。

つかジュビア、盗賊のアジトから尾けてくんよ。

「なんだよやかましいなあ」

「俺あ眠いんだよ…」

寝かかったギアスとグレイは不機嫌そうに言った。

「おい見るよ！旅館だぞ旅館！旅館の夜つつたら、枕殴りだろーが！」

「枕投げだよ…」

枕投げに来たナツ。

テンション高いよお前ら。修学旅行に来た学生かよ。懐かしいけど、するとそこに、

「質の良い枕は私が全て抑えた！」

「質って…」

エルザとルーシイが来た。

やる気満々だよエルザ。

しょうがねえ、こつなつたらやるか！

「俺はエルザとギアスに勝つっ！」

「やれやれ…」

呆れるグレイだが、ナツの投げた枕はエルザに当たる事無くグレイに当たった。

「ナツテメー！…うお！？いつの間にか枕が！」

グレイの側に大量の枕があった。

「（ああ。グレイ様のお役に立てて、ジュビア幸せ）」

ジュビア…本当にいつの間…。

「ウオラアアアアッ!!」

「セエリヤアアアアッ!!」

その後、宿を半壊するまで枕投げは続いた。  
もちろん宿は時のアークで直しました。

後日、マグノリア、フェアリーテイル

ナツとグレイはまた険悪ムードになっている。

「ギアス…なんだありゃ…」

エルフマンが訪ねて来た。

「ああ、仕事先で枕投げしたらああなつた」

「どうやったなら枕投げであんな大怪我を？」

こっちが聞きたいよ。

「「ギアス！勝ったのは俺だよな!!」」

どっちが勝ったか聞いて来た様だ。

「お前ら俺に負けてただろうが」

「「…ルーシイ！勝ったのは俺だよな!!」」

今度はルーシイか、でも今は聞かない方が良いでしょう？

「……ウルサイ！」

「「ヒイ~~~~~!?ゴ、ゴメンナサイ!?!」」

低い声で言ったルーシイ。

黒いオーラが出てるぞルーシイ。

「すごおい!?エルザとギアス以外である二人を止められるなんて

!?!」

「漢だ……」

「俺でも一瞬ビクッてしたもんな」

ミラもエルフマンも、今のルーシイに驚いた。

そしてさすが帰って行った二人。

まあ、ルーシイの機嫌が悪いのはロキの事だからなあ。

……今日の所は、帰ろつと。

マグノリア銭湯

風呂上がりは、デロドロンドリンク一気飲みつと。でも不味い……。ん？ルーシイとロキ？あつロキが帰った様だ。

「ルーシイ」

「!?!あつギアスカ」

「どうしたんだルーシイ?こんな所で?」

「うん、ちよつとね……」

理由知ってるけどね。

「ふうん、これ飲む？」

そう言って差し出したのが、デロドロンドリンク。

「それ、不味い奴でしょ……」

拒否られた。

カルディア大聖堂、ギアスの部屋

「さて、寝るか」

「らっ」

俺達は寝ようとしたその時、

「おいギアス！大変だ！」

「うわっ！？」

「ぬあー！？」

ナツが突然やって来た。

てカルシア、初めて聞いたぞその驚き方。

「ロキの奴、フェアリーテイルから出てっちまったんだ！」

「なんだってー！？」

「ロキが！？」

そういや今夜だっけ？

「分かった！すぐ探しに行くぞ！」  
「らう！」

その後、カレン・リリカの墓を探そうとしたが、ギアスはある事に  
気付いた。

墓の場所何処だ？

一晩中探しまわったが、見つからなかった。

畜生、星霊イベント見たかったのによ。

仕方ないから、マグノリアに戻った。

翌日、マグノリア、フェアリーテイル

「星霊だあ！？」

「ロキがあ！？」

「うん。まあそう言う事」

驚いてるナツ達とあっけらかんと答えるロキ。

「俺はまったく気付かなかったなあ」

「見た目は俺らと変わらねえからな」

「でもよ、お前牛でも馬でもねーじゃねーか？」

「ナツの知ってるバルゴだって、人の姿だろ？」

「バルゴ？」

俺はキャンサーとタウロスしか会ってないけどね。

取り合えずグレイに質問した。

「そついやギアスは知らないんだっけか？メイドの星霊だよ」

「メイドか…幼女か！」

「いや…契約者の好みに合わせて姿が変わるからな、ルーシイのは正統派メイドだったからな…」

「つまり俺だったら幼女になるって事か！」

「そ…そーなるな…」

引くなグレイ。

「ロキは獅子宮の星霊よ」

「獅子!？」

「獅子つてアレ!?大人になつた猫!」

「そうだね」

「違つー!？」

羨ましがるハッピーとルシア。  
つかルシアもかよ。

「でもお前、体の方は良いのか？」

「まだ完全じゃないけど、皆に挨拶したくてね。それに、ルーシイの顔を早く見たかったし」

「／／／」

「でえきてえるう（巻き舌風）」

「巻き舌風に言うな」

からかってハッピーと一緒に言ったギアス。  
するといつの間にかルーシイをお姫様だっこで去ろうとするロキ。

「そういう訳で、二人の今後について話合おうよ」  
「コラコラ」

やれやれ…  
するとロキは、

「はいこれ、リゾートホテルのチケットさ。君達には色々世話になったしね」

「……………すげー……………」

考えてみれば、俺は前世でも高級ホテルなんて縁の無かった暮らしをしてたけど、まさか来世で体験出来るとは…て原作知ってるから喜び半減だけどね

「エルザにもさつき渡しておいたから、楽しんでおいで」

皆はしゃいじゃって、俺もはしゃぎたいぜ。

「貴様ら、何をもたもたしている！」

「……………?……………」

そこに居たのは、既に準備万端でバカンスに行く格好をしているエルザだった。

「……………早い早あー!?……………」

グレイとルーシィに便乗して突っ込んだ。  
水着は向こうでなんとかすりゃいいか。

「ほれほれ、早く行こー！」



「あいさー!!」

「一日二日じゃ遊び尽くせねーぞ!」

「久しぶりの骨休みだ。海水浴だー!!」

「らーうー!!」

「よし、折角のロキの好意だ。思いつきり楽しむぞ!」

「「あいさー!!」!」

この時は、エルザの忌まわしき過去の出来事が幕を開けた事は、ギアス以外知る由も無かった。

空に戻れない星々星霊王（後書き）

実際、墓の場所が何処か解らなかった。  
次回は楽園の塔編です。

## 楽園の塔〜楽園ゲーム（前書き）

楽園の塔編です。

ジユビアと一緒に少女部隊もついて来て、ギアス暴走します。他にもニードレスキャラも出ます。

## 楽園の塔と楽園ゲーム

アカネリゾート、浜辺

俺達は今、リゾート地でバカンスに来ています。

今の恰好は麦わら帽子にサングラスに、アロハシャツに海パン（シヨートボクサータイプ）にした。

「いや、海って良いね」

親子連れとか友達同士とか、ワンピースを着た少女幼女とか、ピキニを着たおませな少女幼女を見て、鼻の下をのばすギアス。

「…ギアス、さすがに…ここでは控えた方が良いよ…」

さすがの俺も自重しますから。あつあの子可愛い！

皆でビーチボールしたり、水上スキーをしたりで楽しんだ。

アカネリゾート、カジノ

夜になり、俺達はカジノに居た。服装はいつもの黒コート。つかカジノ内にジェットコースターがあるのってどうよ？

エルザとルーシィはポーカー、グレイはジュビアと対談、ナツはビンゴゲームでクレームを出している。

俺はルーレットに夢中になっていた。

「いよっしゃー！また当たった！」

俺は7戦中5勝2敗で勝っていた。

その時、後ろから聞き覚えのある声がした

「あつ、おに〜ちゃ〜ん」

「!?!」

俺は耳を大きくし、今聞こえた方に向くと、愛しのミオたんがいた。

「ミオた〜〜ん！」

ギアスはミオ目掛けてルパンダイブをした。が、

「やめんか！」

ドカッ

「ブべバアツ!?!」

セツナが食い止めた。

「自業自得だねギアス…」

切ない言葉を残さないでくれルシア。

その後、何故ここに居るかと質問したら、

「ジユビア先輩に誘われたんです」

「ジユビアお姉ちゃんがグレイおにーちゃんの所に行くって」

『ジユビア様と一緒に来ました』

セツナ、ミオ、クチナシの順で返答した。  
彼女達の話によると、フェアリーテイルに入りたいそうだ。  
俺はカモンだけどね。  
するとそこに、

「ウラアー！！！」

「『きゃああつ！？』『』」  
「『なつ！？』『』」

白い特攻服を着た男がセツナ達をぶっ飛ばした。  
つかこいつは…、

「よう、お前がフェアリージャツジメントか？俺の名は、テルヤマ  
だ！」

やっぱり照山<sup>てるやま</sup>最次<sup>もみじ</sup> かよ。て事はこいつ、楽園の塔の関係者か？

「で、そのテルヤマさんが俺に何の様だ？」

「エルザは何処に居る！」

「何！？」

やっぱりエルザが目的か！と言う事は、エルザの昔の仲間という可能性大だな。

「言うと思うか？」

「だったら、喋りたくなる様n…ん？」

テルヤマは額に指を付けた。

あの様子だと、もう見つかった様だな。

「じゃあ始末するか！」

テルヤマは、手に炎を出した。

「させるか！」

「リトルボーイ！」

「ウラアツ！」

「フゲツ！？」

テルヤマのリトルボーイを避け、テルヤマの額に頭突きした。  
炎、ゲットだぜ！

「ちい、やってくれたな」

「まだまだこれからだぜ！」

その時、辺りが真っ暗になった。

「あ、あれ？」

「隙あり、リトルボーイ！」

「しまつ、グアアツ！？」

取り合えず吹っ飛ばされてやられたフリをしてつと、

「ギアスー！？しっかりしてギアスー！」

「喋る猫か、こりゃ良い。ミリアーナのお土産にするか。いや、ウ  
オーリーに渡しとくか？あいつミリアーナに気があるからな」

「えっ！？あつこら！？何するんだ！？離せー！？」

テルヤマは、ルシアを連れてつた。

さて起きるか。

「おい三人とも、起きてくれ」

「『うん』『うん』」

「あの四角ヤロー！逃がすかコラー！」

すぐそこを通り過ぎたナツ。

後ろからグレイ達 came。

そして、攫われたエルザとハッピーとルシアを救出するべく楽園の塔へと向かった。

翌日、楽園の塔沖、フィオーレ海軍残骸跡

ギアス、グレイ、ルーシィ、ジュビア、少女部隊、そしてダウンしてるナツが向かった先で奇妙な建物を発見した。

「おい、アレ…」

不気味な塔だな。

「あ…あれが…楽園の塔…」

ジュビアのウォータードームで、海にカモフラージュして塔に近づいた。

「見張りが多いな」

「突っ込むか！」

「駄目よ！エルザとハッピーとルシアが捕まってる。下手な事した



ら、三人が危険になるのよ！」

「そりゃ分が悪いな」

『私の匂いで眠らせるのは？』

「クチナシの魔法は屋内じゃ有効だけど、屋外に対しては効果は薄いわよ！」

「どうしよう」

「だが此処で二の足を踏んでもしょうがねえ、やっぱり突っ込むしか…」

「水中から地下への入り口を見つけました」

ジュビアナイス。

「マジか！でかした！」

「褒められました！ルーシーさん貴女ではなくジュビアナイスです！」

「はいはい…」

そこまでルーシーに対抗心出さなくても…

「水中を10分ほど進みますか？」

「なんともねえよそんなくらい」

「だな」

「海水は好物だし」

とナツ、グレイ、ギアスの順で言うと、

「『無理に決まってるでしょ！』」

とルーシー達の突っ込みが入る。

するとジュビアナイスが、酸素が入った水球を皆に渡した。

するとミオは、

「ミオ…泳げないよ〜」

「ミオたん！僕が連れてってあげようさ！」「アベシッ!?!」

結局ミオはセツナが連れてった。

楽園の塔、地下

「ここがあの塔の地下か？」

「エルザ達はどこだ？」

「便利ねこれ。マヌケだけど」

「ルーシイさんだけちよつと小さめに作ったのに、よく息が続きましたね」

「おいおい…」

ホントルーシイに対して、扱いが悪いね。  
その時、

「侵入者だー！」

「やば!?!」

そしてぞろぞろ出て来る兵達。

「何だ貴様ら！」

「こつなつたら、やるしかねえだろ！」

「はい！」

「さて、暴れるか!?!」

「クチナシ、ミオ、行くよ!?!」

「ういつ！」

『まかー』

「何だ貴様らはだと…上等くれた相手も知らねえのかよ！」

ナツは地面を殴り、爆煙が舞った。

「フェアリーテイルだバカヤロー！」

ギアス達はそれぞれ攻撃した。

ナツは炎を吐き、グレイは氷を出し、ルーシイはバルゴを呼び出し、ジユビアが水を噴き出し、セツナは一瞬で叩きのめし、クチナシは匂いで兵達自身で攻撃する様にしたり、ミオは力任せに攻撃したり、ギアスは風で敵を吹き飛ばしたりで、あっと言う間に片付けた。すると、上の階への登り口が現れた。

「ん、何だ？」

「上へ来いつてか？」

ギアス達は登って行った。

楽園の塔、食堂

「四角ー！ー！」

「大声出さないの！」

「下であれだけ派手にやってんだ。今更こそそしても仕方ねえだろ」

食べ物食べながら言うグレイ。

「何食べてんの!?!」

「食堂の様ですので、姫もどうぞ」

「あのね〜…」

ちなみにルーシィ以外皆食べてます。

さっきの登り口は魔法で開けられたって事は、とっくにジェラールに気付かれてるって事だ。

するとバルゴは、

「ところで姫、食堂でそのような格好ははしたないかと」

「は、はしたない…」

「お召し換えを!」

怪しい手付きでルーシィに近づくバルゴ。

俺はルーシィの着替えに興味が無かったから見てない。

「星霊界のお召し物でございます」

「ふふん。どう、似合ってるのは分かってんのよ〜」

「わあ〜、お姉ちゃん綺麗〜」

「な、なかなか綺麗ね…」

『美しい…』

「へえ〜結構可愛いじゃねえか!」

「ジュビア悔しい!」

「どうえきてるう」

「…巻き舌風に言わないの…てかギアスも言わないで…」

ナツ、ギアス、ミオ以外唾然とした。

「何処でハッピーの真似なんか覚えたんだ?」

そこはどうでもいいよ。

その後、少女部隊にも星霊の服を着させて貰った。星霊の服を着替えるミオたんを見ようとしたら、全員に目隠しされた。

「姫、ご検討を」

「ありがとうバルゴ」

バルゴは星霊界へと帰った。

「ところであなた達、よく濡れたままの服来てられるわね？」

「こっすりゃすぐ乾く」

ナツとギアスが全身炎を出して、グレイがそれにあてている。

「人間乾燥機!？」

その時、

「居たぞー! 侵入者だー!」

兵達が来たが、エルザが切り捨てた。

「「「エルザ!」」」

「無事だったんだね!」

「『…かつこいい…』」

「!?! お前達が、何故此処に!？」

ギアス達がいる事に驚いてるエルザ。

エルザは皆に帰れと言って来た。  
ハッピーとルシアが捕まった事を言った。

「「よーし分かった!」」

「何が分かったんだよ…つかギアスまで…」

「「(ハッピー・ルシア)が待ってるって事だぁー!」」

そう言っただけで俺とナツは、ハッピーとルシアを探しに行った。  
後ろから呼び止めようとする声があったが、スルーした。

楽園の塔、回廊

「ハッピー!ルシアー!何処だー!」

ナツが叫んだ。

その時、上から誰か降りてきた。

「「!」」

「いよお、サラマンダーにフェアリージャックメント!」

テルヤマが来た。

「お前は!」」

「?知ってるやつか?」

「ああ」

「まさかここまで来るとはなあ」

「ナツ、お前はハッピーとルシアを探してくれ!こいつは、俺がやる!」

「なに言っただよ!?」

「お前が四角い奴をぶちのめしたい様に、俺はこいつを個人的にぶちのめしてえんだよ!」

「…分かった。ハッピーとルシアは任せろ!」

ナツはその場を去った。

「いいのか? わざわざ一対一にして? まあサラマンダーがいたら、俺の勝ち目は無かったから丁度よかったけどよお」

「…炎を扱えるお前じゃナツとの相性は悪そうだしな」

「だから、テメーから先に叩きのめす!」

「上等だ!」

テルヤマは手に炎を纏った。

ギアスも手に炎を纏った。

「何い!?!」

「リトルボーイつつたか?」

「何故俺の技を!?!」

「お前の技を覚えただよ!」

「覚える魔法!?! んなのありかよ!?!」

「これで同じ技を繰り出しても余裕でいられるかな?」

「ぬかせ! 同じ能力なら、本家本元の俺の技の方が強えーに決まっただよ!」

「つくづくバカだな貴様、同じ技同士でぶつかり合ったら…!」

二人は炎を纏った拳で…、

「リトルボーイ!?!」





テルヤマは勢い良く吹っ飛んだ。

「さあ泣き叫べ、判決の時だ！」

その時、壁画から声が聞こえた。

『ようこそ皆さん、楽園の塔へ』

「ジェラルルだ！」

「ジェラルル？」

テルヤマが嬉しそうな声を上げた。

どうやら塔全体的に放送してる様だ。

『俺はジェラルル、この塔の支配者だ！互いの駒は揃った。そろそろ始めようじゃないか、楽園ゲームを！』

「楽園ゲームだと!？」

「ジェラルル、何を!？」

『ルールは簡単だ。俺はエルザを生贄として、ゼレフ復活の儀を行いたい。即ち、楽園への扉が開けば、俺の勝ち。もしそれをお前達が阻止出来れば、そちらの勝ち。ただ、それだけでは面白くないのでな、こちらは三人の戦士を配置する』

「三人の戦士!？ちよつと待てジェラルル!？戦える奴は俺とウォーリーとシモンだろ!？他にいんのかよ!？」

どうやらテルヤマは知らない様だ。

次の相手は暗殺ギルド、鬪トリニティレイブン會会の三羽鳥の様だ。

フクロウは俺のZEROと被るから要らない、ヴィダルダスは……  
要らないな、やっぱ斑鳩いかるがの剣術を覚えたいな。

『そこを突破出来なければ俺には、辿り着けん。つまり三対九のバ

トルロワイヤル!…最後にもう一つ、評議員がサテライトスクウェアで、此処を攻撃してくる可能性がある。全てを消滅させる究極の破壊魔法、超絶時空破壊魔法だ!」  
「エーテリオンだと!?!聞いてねえぞジエラル!?!」

テルヤマが慌てた。

『残り時間は不明。しかしエーテリオンが落ちる時、それは消滅…勝者無きゲームオーバーを意味する。さあ、楽しもう』

「何考えてんだよジエラル!?!」

「おいテルヤマ、これはどういう事だ!」

「俺が知るかよ!?!俺達は真の自由を手に入れる為に…何が真の自由だ!?!」

「自由の意味が何を指すか知ったこつちや無えが、それで誰かを泣かせたら、それは自由じゃなく、略奪だ!」

「!?!」

「俺はこれからジエラルを倒す!お前は此処から非難しろ!」

ギアスは駆け出した。

途中、ミリアーナの部屋に着いた。

気絶しているミリアーナ、ミリアーナの魔法を覚えました。

エルザのわずかな匂いを頼りに駆け出すギアス。

楽園の塔〜楽園ゲーム（後書き）

初登場の能力

風<sup>ウィンド</sup>

覚えたフラグメント

炎

覚えた魔法

ミリアーナの魔法

次回は三羽鳥が出ます。

## テルヤマ設定（前書き）

テルヤマって、この辺りが似合うかなと思って入れました。

## テルヤマ設定

名前

テルヤマ

魔法

炎

フロキストン  
空気中の燃素を自在に操り炎を起こすことができる。口から火を吹くことはできない。炎系統の能力の中では最下級に位置するが、戦闘用能力としてはかなり強力。

設定

原作ニードレスの照山 てるやま 最次 もみじ

エルザの昔の仲間の一人

炎を使う所為はかなり暑苦しい

フェアリーテイル、楽園の塔編、エルザの昔の仲間の一人です。炎を使います。炎だけしか能がありません。ナツが相手じゃかなり不利だし、ギアスでも不利、相手が悪かったね。

すみません。ただの文字稼ぎです。

## テルヤマ設定（後書き）

そんなに出番は無い方だけだね。

運命（デステイニー）〜聖なる光に祈りを（前書き）

心の鎧では出番が無いので、<sup>デステイニー</sup>運命から始めてみました。

## 運命（デステイニー）〜聖なる光に祈りを

楽園の塔、庭園回廊

やっとエルザ達に追い付いた。

既に倒れてるシヨウとカードの中で斑鳩の剣激を防いでるエルザがいた。

ちなみに俺は、アリアの能力で気配を消して、シヨウのすぐ上の鳥居に立った。

つか斑鳩って、なんであーゆう厚底の履物を履いて歩けるんだろ？あつ、エルザが出て来た。

「貴様のおかげで、空間に歪が出来た。そこを斬り開かして貰った」

さっすがエルザ。

「斑鳩とか言ったな…貴様に用は無い、消えろ！」

「…挨拶代わりどす」

すると、エルザの鎧が砕けた。

早っ！？

「いや〜もしかして見えてあらしまへんでした？」

「…！？」

「ふふっ『見つめるは〜、霧の向こうの〜、物の怪か〜』…ジエ  
ラールはんを探すあまり、今自分が見えへん剣閃の中にある事に気が  
付いてあらへん」



エルザの殺気が増した。

つか五七五の俳句を言う所を聞くと、京都を思い出すな。

「そうそう、その目。うちは路傍の人ちやいます境に」

「そのようだな」

さてどう出る？

「ところで、上で覗き見してる無粋な人はエルザはんの知り合いどすか？」

「？」

あれ、気付いてた！？

「！？ギアス！？」

「いつの間に！？」

「ちっすエルザ」

「お前いつからそこに！？」

「エルザはんがカードから出て来る少し前辺りからおりましたえ」

完全に気付いてたのね。

「良く気付いたな」

ギアスは鳥居から降りた。

「ギアス……」

「エルザ、お前はジェラルドと戦うんだろ？」

「！？……ああ！」

「んじゃあ、こいつの相手は俺が引き受けても良いか？」

「…任せる！」

ギアスは斑鳩の方向に向き、換装した。

頭は黒バンドナ、服は白い上着に黒ズボンに緑の腹巻、極め付けは腰にある、和道一文字、三代鬼徹、秋水の三本の刀（っぽく作つた）  
。まるつきりゾロのコスチュームで挑みます。

「おやおや、うちと斬り合いたいと？」

「そういつこつた！」

剣を抜いたギアス。

「ギルド・フェアリーテイルのフェアリージャッジメント、ギアセルシア・ニードレス！」

「これはご丁寧どすなあ。ほなうちも、暗殺ギルド・髑髏会、トリニティレイヴンの隊長、斑鳩と申します。よしなに」

三刀流の構えを取るギアス。

「？何で口に刀を加えるんだろ？」

シヨーーーーーウ！？今まで誰も突っ込まれてなかった事を突っ込むなよ！？

ワンピースですら、ゾロの三刀流の事で誰も突っ込んでなかったのにーーーーー！？

しばらく時間が過ぎ、二人とも駆け出した。

「ハアアアアアッ！」

「……………（無言）！」

どちらも譲らない剣激。

そしてギアスは距離を取る。

「一世三十六煩惱、二世七十二煩惱、三世百八煩惱、三刀流！百八、  
煩惱鳳ボンド！！！」

ギアスは飛ぶ斬撃を繰り出した。

「無月流…夜叉閃空やしやせんくう！！！」

見事に散らせちゃったよおい！？

「やるねえ」

「ほなら、これはどうどすえ！！」

斑鳩の周りに炎が出た。

「無月流…迦桜羅炎かるらえん！！！」

炎の斬撃が飛んで来た。

「なんの！龍卷たつまき！！！」

炎の斬撃をかき消した。

「あんさんもやりますなあ」

「お互いにな！」

「す、す、す！！！」

「ギアスと渡り合うとはな…」

さて、斑鳩の剣術も覚えた事だし、決着付けるか。

「いい加減、そろそろ終わりにしようか？」

「そうどすな、ほな」

互いが構えを取り、

互いが駈け出し、

「……（無言）！！」

「鬼斬り！！」

互いに斬り付けて交差した。

ちなみに今の鬼斬りは、映画ワンピース・ねじまき島の冒険で、ゾロがビンジョーカーを倒すシーンと同じ感じですよ。

そして、

ブシュッ

ギアスの右肩辺りが斬られた。

「ギアス！？」

「ふふっ 勝負あり…」

すると、斑鳩の刀が碎け散った。

「…お見事…どす…」

そう言って倒れる斑鳩。

「判決・・・死刑!!」

そしていつものポーズを取るギアス。

「ギアスの勝ちだ!」

「す、すごい!これが、フェアリージャッジメントの力!」

「ふふっ…うちが負けるなんて…ギルドに入ってから…初めてどす…。せやけど…あんたらもジェラールはんも負けどすえ…」

「どうゆう意味だよ!」

「15分…『落ちてゆく』、正義の光は、皆殺し…』……ふふっ…ひどい歌…」

そう言って斑鳩は気絶した。

「エーテリオンの事か!? ショウ、ギアス、今すぐシモン達やフェアリーテイルの者達を連れて、この塔から離れるんだ!」

「えっ!? でも…」

「お前はどうすんだ?」

俺はエルザに質問した。

「私はジェラールと決着を付けてくる!」

「お前一人で勝てるか?」

「勝たなきゃならない、ジェラールを救うには…」

「なら、その鎧は脱いでいった方がいい」

「何故だ?」

エルザが俺に問う。

「亡霊に縛られた奴を鎧に閉じこもった奴が救えるわけない。今のお前なら鎧がなくても大丈夫だろ？」

「……………」

「鎧なんて無くったってお前は十分強いだろ」

「……………そうだな」

エルザが鎧から装束に換装する。

「決着を付けてくる！」

「行って来い。奴との決着を付けて来い」

「ああ！」

エルザはそう言って駆け出した。

俺はシヨウを連れて船の所に向かった。

再び塔の中に戻った。

てかシモンが居なかったな、まずい！？このままじゃシモン死亡ルートじゃねえか！早く最上階に行かないと。

そして、

楽園の塔に、

光が、

エーテリオンが、

落ちた。

だが、

楽園の塔は、

消えなかった。

ラクリマ  
魔水晶化楽園の塔

「ひゃく、びびった」

無事だと分かってても、心臓に悪いなこれ。

…そういうばエーテリオンって、どんな味かな？

パクッ

……… スツツツツゲー……ウメ………!!!??

エーテリオンてこんなに美味しい物だったなんて、大好物になっちまったな。

折角だ。以前ストックに入れた鉄柱に、タメタメの実の力でエーテリオンを溜めておこう。

ってんな事してる場合じゃなかった!? 急がなきゃ!

運命（デステイニー）〜聖なる光に祈りを（後書き）

いつもより短い感じですが。

初登場の悪魔の実

タメタメの実

覚えた魔法

斑鳩の剣術

今回はエルザ視点です。



妖精審判者（フェアリージャッジメント）、散る、エルザサイド、（前書き）

本来、「妖精女王<sup>フェアリーニャ</sup>、散る」何ですが、サブタイトル通りの展開にしました。

エルザ視点で始めます。

妖精審判者（フェアリージャッジメント）、散るゝエルザサイドゝ

ラクリマ化樂園の塔

「う……はっ、ナツ！」

そっだ、私はナツに気絶させられていたんだ。

「ダアッ！！！」

「！？」

「へへっどうしたよう？そんなモンか？塔が壊れんのビビって本気が出せねえのか？全然効かねえな！！！」

「いつまでも調子に乗ってんじゃねえぞ！ガキがつ！！！」

吹っ飛ばされるナツ。

「火竜の煌炎！！！」

ナツは床に炎球をぶつけた。

「！？」

「あいつ……塔を……」

塔を攻撃したのか？

「……オレが……オレが8年もかけて築き上げた物を……キサマア……」

「へへっ……そりゃあ……お気の毒さま……言っただろ、壊すのは……得意だっつてなあ……」

「（ナツ…お前…立っているのもやつとじゃないか…）」  
「許さんぞお！」

ジェラルルは、腕を交差させて上げた。

すると、ジェラルルの周りにとてつもない魔力が集まった。

「くっ……はっ!？」

「何だこの魔力!? 気持ち悪い……」

「影が光源と逆に伸びている!? まずい、この魔法は…!？」

「無限の闇に落ちろオオ! ドラゴンの魔導士イ!！」

ジェラルルの真上に、巨大な闇の塊が出来ていた。

ナツ!？」

私はナツの前に立った。

「ジェラルル! 貴様に私が殺せるか!?!？」

私が前に出ればアレは撃てない筈。

「ゼレフ復活に必要な肉体なんだから?」

「ああ…おおよその条件は、聖十大魔導にも匹敵する魔導士の体が必要だ。しかし今となつては、別にお前でなくてもよい」

なん…だと…!？」

「二人揃って碎け散れ!」

「エルザどけっ!」

「お前は何も心配するな。私が守ってやる!」

「やめろおー!ー!ー!」

「天体魔法、アルテ暗黒の楽園!ー!ー!」

闇の球体が迫って来た。

「エルザーーーーーー!!!」

私にぶつかってくる…すると、私の前に誰かが遮った。

「エルザっ!!」

「!? シモン!?」

「エルザは、俺が守る!!」

「やめるーーーーー!!」

アルテアリスがシモンにぶつかる瞬間、また誰かが来て、アルテアリスを飲み込んだ。

あれだけの魔力を飲み込める奴は一人しか知らない。

そう、

ギアスだ!

「バカな!? アルテアリスが!？」

「ギアス、お前まで…」

「助かったのか!？」

「ところでお前、何食ってたんだ？」

全員がギアスの手に持ち、食してる物を見た。

「!? それは、エーテルナノ!？」

「バカな！？いくらドラゴンスレイヤーでも、多種類の魔力が融合したエーテルナノを食って無事でいられるわk…しまった!？」  
「そうか！ギアスは虹のドラゴンスレイヤー、全部で八種類の魔力を持つギアスにとっては…最高の餌だ!」

周りから、エーテリオン魔力があふれ出し、ギアスに取り込まれていった。

そしてギアスは、一瞬で消えた。

「グハアアツ!？」

ジェラルルの方を向くと、いつの間にかジェラルルをぶっ飛ばしたギアス。

「くそつ、流星!」  
ミューティア

ジェラルルの速度が上がった!

「この速さにはついて来れm「ハアアツ!」なつ、ガハアツ!？」

ジェラルルよりも速く移動したギアス。

「バカなつ!？」

ジェラルルは驚愕した。

「ハアアアアアア…」

またギアスが、エーテリオンを取り込んでいた。  
だが、ギアスの体が少し膨張していた。

「!? 待てギアス、それ以上エーテリオンを取り込むな! いくらお前の身体でも、膨大な魔力であるエーテリオンを取り込み続けてたら、お前の身体が弾け飛ぶぞ!」

「何だつて!? おいギアスやめろー!」

それでも取り込み続けるギアス。

このまま膨張し続けると思ったが、ギアスの身体が一回り大きくなっている様に見えた。

「ハアアアアアア…」

!? やつぱり見間違いない! ギアスの体が全体的に大きくなっているんだ!

「あっあれ? 気のせいかな… ギアスの体が大きく見えるんだけど?」

「気が合うなサラマンダー、俺もそう思っていたところだ」

二人もそう見えるらしい。

「バカな!? あれだけエーテリオンを取り込んでおいて、まだ取り込む気か!？」

「ハアアアアアア…」

少しずつ大きくなるギアス。

しばらくすると、ギアスの身体に変化が起きた。

バサッ

「……?!?」

なんと、翼が生えてきた。

ジャキッ

今度は爪が伸び、肘から角が出てきた。

「な、なんだ！？ギアスから翼が出て、それにその腕！？」

「エーテリオンの影響で、ギアセルシアの身体の構造を変化させたのか！？」

ドサッ

ジャキッ

尻尾と角が生えてきた。

このままじゃ、ギアスが別の存在になってしまう！？

「もういいギアス、それ以上はだめだ！お前がお前じゃ無くなるぞ！」

バキバキバキッ

足の構造が動物みたいに、つま先が長くて下腿の部分が短くなっていった。

身体が大きくなり、皮膚も人のものでなく、鱗の付いた身体になっていき、

「グオオオオオオオオ！」

ギアスの顔が変形していき、姿が大きく変わっていった。

「ギ…ギア…ス…！？」

「なっ！？」

「こ、これは！？」





「オレは…負けられ…ない！オレが…創るんだ…自由の国を！」

グランシャリオ  
七星剣で反撃するジェラルル。

「痛みと恐怖の中で、ゼレフはオレに囁いたんだ！真の自由が欲しいかと呟いた！」

尚もグランシャリオで追い打ちをするジェラルル。

「そうさ…ゼレフはオレにしか感じる事が出来ない！オレは選ばれし者だ！オレがゼレフと共に、真の自由国家を創るのだ！」

ナツが叫んだ。

「ふざけんなアー！それは…人の自由を奪って創るモノなのかアア  
—————！」

ジェラルルは私達の方を見た。

「世界を変えようとする意思だけが、歴史を動かす事が出来る！貴様等には、何故それが解らんのだアア——！」

ジェラルルは魔法陣を描きだした。

あっ！？あれは…

「アビスブレイク！？貴様、塔ごと消滅させるつもりか！？」

しかし、ジェラルルは…、

「また8年、いや…今度は5年でさせてみせる！ゼレフ、待ってい

「…!?!? (うつ、しまった!?!? さっきエルザに斬られた所が…)」

!?!? ジェラルが急に苦しみ出した。魔法陣が消えた。  
その時、目の前にギアスが現れた。

「ガハツ!?!?」

今のは…頭突きか?

『才前八自由ニナンカナラナイ!』

「!?!?」

これは!?!? ギアスが言ったのか!?!?

『亡霊如キニ縛ラレテイル者ニ、自由ニナドナレナイ! 決シテナ!

!』

「!?!?!?」

『己ヲ解放シロ! ジエラアアアアアアアル!』

ギアスがジェラルに滅竜魔法をぶつけた。

「グアアアアアアアツ!?!?!?」

弾き飛ばされるジェラル。

そしてジェラルに近づくギアス。

「…!?!? バ…バ…バ…バケモノ…!?!?」

若干怯えているジェラル。

そして足を上げるギアス。

「!?!もついい、やめるギアス!?!」

「ギアスやり過ぎだ!」

「まずい!?!このままじゃジェラールが…」

そして、

「ウワアアアアアアアアア!?!?!」

「やめるおおおおお!?!?!」

ドシーン

ジェラールを踏み潰した。

「ジェラアアアアルウウウ!?!?!」

そして、踏み潰した衝撃で床が崩れてしまい、ギアスは落ちた。

私は無我夢中で、ギアスが落ちた場所へと走った。

落ちた場所には、

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!?!』

『!』

ギアスの叫び声でした。

すると、周りのラクリマが膨張してきた。

「まずい!?!エーテリオンが暴走を始めた!?!」

「暴走!?!」

「元々、あれだけの大魔法を此処に留めておく事自体不安定なんだ!」

シモンが状況の説明した。

「行き場を無くした魔力の渦が…弾けて…大爆発を…起こす…」  
「おい、まずいじゃねえーかそりゃ!?!早く逃げねえーと!?!」  
「それどころではない!俺達と、外にいるシヨウ達を含めて…全滅だ!」

「諦めんな!何か方法がある筈だ!」  
「しかしナツ、エーテリオンが暴発したら、どんなに急いで脱出しても、その被害は免れない!」  
「……くそ……!」

ナツが叫んだ。

その時、私達の周りに、水の膜が出来た。

「何だこりゃ!?!」  
「これは一体…」  
「何が起きたんだ?」

すると、いつの間にかギアスは近くに居た。

「おいギアス!この膜はお前がやったのか!?!」  
『……皆、助ケル…』  
「ギアス…何を…」  
『俺ガエーテリオンヲ吸イ尽クシテ、空ニ放ツ』  
「!?!何をバカな事を言うんだギアス!?!そんな事したら、お前の身体がもたない!」  
『コレシカナインダ!行ケ!』

私達を包んだ水の膜はそのまま外に出た。



空へと流れた。

「ギアスが…やったのか？」

「助かったのか…俺達…」

私は、ギアスが命を賭けてまで守ってくれた事に、泣けなかった右目の涙を流した。

「……ギアスの…バカヤロオオオオオオオオオオ！！！」

ナツが悲痛に叫んだ。

妖精審判者（フェアリージャッジメント）、散るゝエルザサイドゝ（後書き）

勘違いしないで下さいね。最終回じゃないからね。

それっぽい終わり方だけど、まだまだ続くよ。

ほとんどの小説はここで終わって、ラクサス編を飛ばしてニルヴァーナ編に進んでいます。自分は敢えてラクサス編を入れようとしています。

次回は妖精審判者、散るゝギアス視点です。

妖精審判者（フェアリージャッジメント）、散るゝギアスサイドゝ（前書き）

ギアス視点です。



妖精審判者（フェアリージャッジメント）、散るゝギアスサイドゝ

ラクリマ化樂園の塔

「はっ…はっ…はっ…はっ…はっ…はっ…」

急げ、急げ、ん？

アリアの魔法で気配を無くしてっつと。

「ジエラール！貴様に私が殺せるか！！？」

何とか間に合った。

「ゼレフ復活に必要な肉体なんだろ？」

「ああ…おおよその条件は、聖十大魔導にも匹敵する魔導士の体が必要だ。しかし今となつては、別にお前でなくてもよい」

シモンが防ぐ前に出ないと。

「二人揃って碎け散れ！」

「エルザどけっ！」

「お前は何も心配するな。私が守ってやる！」

「やめろおー！！！！！！」

「天体魔法、アルテアリス！！！！」

さて、そろそろ出るかな。

おっと、エーテルナノを持ってっつと。

「エルザーーーーー!!!」

エルザの前にシモンが立ち塞がった。

「エルザっ!」

「!?シモン!?!」

「エルザは、俺が守る!」

「やめるーーーーー!」

アルテアリスがシモンにぶつかる瞬間、前に出て、アルテアリスを吸い込んだ。

不味いな、この魔法。

「バカな!?アルテアリスが!?!」

「ギアス、お前まで…!」

「助かったのか!?!」

「ところでお前、何食ってたんだ?」

全員がギアスの手に持ち、食してる物を見た。

「!?それは、エーテルナノ!?!」

「バカな!?!いくらドラゴンスレイヤーでも、多種類の魔力が融合したエーテルナノを食って無事でいられるわk…しまった!?!」

「そうか!ギアスは虹のドラゴンスレイヤー、全部で八種類の魔力を持つギアスにとっては…最高の餌だ!」

周りから、エーテルオン魔力があふれ出し、ギアスに取り込まれていった。

そしてギアスは、一瞬で消えた。

「ゲハアアツ!？」

俺はスピードで移動して、ジェラールをぶっ飛ばした。

「くそっ、ミーティア!」

ジェラルルの速度が上がった!

だが、スピードはこの程度ではない!

「この速さにはついて来れm「ハアアツ!」なっガハアツ!？」

ジェラルルよりも速く移動したギアス。

「バカなっ!？」

ジェラールは驚愕した。

「ハアアアアアアア…」

また俺はエーテリオンを吸い込んだ。

俺の体の許容量を越えて、体が膨れた。まあゴムの体だからな。

「!？待てギアス、それ以上エーテリオンを取り込むな!いくらお前の身体でも、膨大な魔力であるエーテリオンを取り込み続けてたら、お前の身体が弾け飛ぶぞ!」

「何だつて!？おいギアスやめろー!」

大丈夫だよエルザ。

でもこのまま心配されると罪悪感が出て来るな。

俺は、マスターの巨人化で少しずつ身体を大きくした。

「ハアアアアアア…」

よし、身体を大きくする事で、許容量が増した。

「あつあれ？気のせいかな…ギアスの体が大きく見えるんだけど？」

「気が合うなサラマンダー、俺もそう思っていたところだ」

まだまだだ！もっと吸い込んで！

「バカな！？あれだけイーテリオンを取り込んでおいて、まだ取り込む気か！？」

「ハアアアアアア…」

少しずつ大きくなるギアス。

そうだ！面白い事考えた。

そう考えた俺は、ドツペルゲンガーで身体を変化した。

バサッ

「……！！？」

翼を生やしてみました。

ジャキッ

次は爪を伸ばし、肘から角を出した。

「な、なんだ！？ギアスから翼が出て、それにその腕！？」

「イーテリオンの影響で、ギアセルシアの身体の構造を変化させたのか！？」

ドサッ



「！」

ドラゴンの叫び声を上げてみました。

「…そんな事で、俺は怯まん！」

ジェラルルはギアスに向かって行った。

「ミーティア！」

ジェラルルは速度を上げた。

無駄だ！スピード！

シュンツ

「何！？」

ギアスは一瞬でジェラルルの後ろを取り、殴り付けた。

「グハアツ！？」

起き上がろうとするジェラルル。

「オレは…負けられ…ない！オレが…創るんだ…自由の国を！」

グランシャリオで反撃するジェラルル。

「痛みと恐怖の中で、ゼレフはオレに囁いたんだ！真の自由が欲しいかと呟いた！」

尚もグランシャリオで追い打ちをするジェラルル。

全然痛くも痒くも感じないな。

「そうさ…ゼレフはオレにしか感じる事が出来ない！オレは選ばれし者だ！オレがゼレフと共に、真の自由国家を創るのだ！」

どうでもいい事をよく喋るな。

ナツが叫んだ。

「ふざけんなアー！それは…人の自由を奪って創るモノなのかアア  
……！」

ジエラールはエルザ達の方を見た。

「世界を変えようとする意思だけが、歴史を動かす事が出来る！貴様等には、何故それが解らんのだアー……！」

ジエラールは魔法陣を描きだした。

あれって確か…アビスブレイクだっけ？

「アビスブレイク！？貴様、塔ごと消滅させるつもりか！？」

しかし、ジエラールは…、

「また8年、いや…今度は5年でさせてみせる！ゼレフ、待っていろ…！？（うっ、しまった！？さっきエルザに斬られた所が…）」

アビスブレイクって、まともに発動してないよな。

取り合えず、今の内にジエラールの魔法を覚えなとな。スピード  
！……そして頭突き！

「ガハツ!?!」

ジエラルルの魔法・・・覚えた。

「才前八自由ニナンカナラナイ!」

「!?!」

カタコトで喋ってみた。

「亡靈如キニ縛ラレテイル者ニ、自由ニナドナレナイ!決シテナ!

!」

「!?!?!」

「己ヲ解放シロ!ジエラアアアアアアアル!」

虹竜の聖拳!

「グアアアアアアアツ!?!?!」

弾き飛ばされるジエラルル。

そしてジエラルルに近づくギアス。

「:?!?!?!バ...バ...バケモノ...?!?!」

おうおう怖がつちゃってまあ、もっと恐怖しな!

足を上げるギアス。

「!?!?!もういい、やめるギアス!?!」

「ギアスやり過ぎだ!」

「まずい!?!?!このままじゃジエラルルが...」



そう見える様にしてっと、

「ウワアアアアアアアアアア！！？」

「やめろおおおおおおお！！？」

ドシーン

足に穴を空けてジェラルルを踏み潰さずに済んだ。

「ジェラアアアアルウウウ！！？」

踏んだ衝撃で床が崩れちまったぜ。

落ちて着地し、ジェラルルをラクリマの中に入れた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ（判決・・・死刑）！！！！』

すると、周りのラクリマが膨張してきた。

「まずい！？エーテリオンが暴走を始めた！？」

「暴走！？」

「元々、あれだけの大魔法を此処に留めておく事自体不安定なんだ！！」

シモンが状況の説明していた。

「行き場を無くした魔力の渦が…弾けて…大爆発を…起こす…」

「おい、まずいじゃねえーかそりゃ！？早く逃げねえーと！？」

「それどころではない！俺達と、外にいるシヨウ達を含めて…全滅だ！！」

「諦めんな！何か方法がある筈だ！」

「しかしナツ、エーテリオンが暴発したら、どんなに急いで脱出しても、その被害は免れない！」  
「……………くそ……………!!」

皆には脱出させてつと。

ギアスはエルザ達にウォータードームを展開させた。

「何だこりゃ!?!」

「これは一体…!」

「何が起きたんだ?」

エルザ達の下に近づいた。

「おいギアス!この膜はお前がやったのか!?!」

『……………皆、助ケル……………』

「ギアス…何を…!」

『俺ガエーテリオンヲ吸イ尽クシテ、空ニ放ツ』

「!?!何をバカな事を言うんだギアス!?!そんな事したら、お前の身体がもたない!」

『コレシカナインダ!行ケ!』

エルザ達を包んだ水の膜をそのまま外に出した。

「……………ギアス……………!!」

「……………ギアセルシア……………!!」

悪いな皆。

ギアスは一階まで降りていった。

ギアスはエーテリオンを吸いだした。

吸い込んだエーテリオンは、ギアスの身体を膨らませた。



妖精審判者（フェアリージャッジメント）、散るゝギアスサイドゝ（後書き）

忘れてたけど、少女部隊の出番が無かった事に気付いた。

覚えた魔法

ジェラールの天体魔法

今回はシヨウ達の見送りと新しいギルドです。

## HOME (前書き)

楽園の塔エピソードです。

## HOME

三日後、アカネリゾート、海岸、エルザサイド

ギアスのおかげで助かった私達は、重い空気でした。ギアスが居ない事に…

ジュビアや少女部隊達は、フェアリーテイルに一刻も早く入りたいからとマグノリアに向かった。

シヨウ達はこれからの事で悩んでいた。

「行く当てが無いなら、フェアリーテイルに来れば良い」

「…「ええっ!?!」」

「みやあ、あたし達が!?!」

「フェアリーテイルに!?!」

「お前達の求めていた自由とは、違つかもしれんがな」

エルザはシヨウ達を勧誘した。

「そついや…サラマンダーもそんな事言ってたぜ!」

「元気最強のギルドみゃあー!」

「ギルドかあ、強え連中がいつぱいいるのか!」

「しかしエルザ、良いのか?」

「それにお前達とも、ずっと一緒にいたいしな」

私なりの、精一杯の勧誘だ。

シヨウは少し悩んでいた。

「さあ戻ろう。ナツにもお前達をきちんと紹介せねばな」

すると、風と共に、

強くなったな…エルザ…

「!?（ジェラルル!?）」

エルザは後ろを振り向いた。

「（そんな訳…ないか…）」

「どうした、エルザ？」

「いや…なんでもない…」

シモンが気にかかったようだ。

するとシモンは、

「ん？なんだあれ？」

海岸に何かが流れ着いたみたいだ。

エルザは近くに寄ってみた。

「!?こ、こいつは!?!」

そう、楽園の塔で散った筈のギアスが（ドラゴンのままだが）流れ着いていたのだ。

サイドエンド

アカネリゾート、沖の海中

正直、どんな顔して会いに行けばいいんだよ。

あんな別れ方じゃ、俺は死に行く様な感じだったしな。

このまま行方不明になった方が伝説になるんじゃないや…いや、それじゃあ皆が納得しないだろうし…困ったなあ。

エルザ達が海岸にいるしな。ええい！こうなったら成るがまだ！

ギアスはドラゴンの状態（姿は人型）で流れ着いた感じにした。

ん？カロリーは大丈夫かって、俺の腹の中にはまだエーテリオンが3/5程残ってるから余裕です。

つか三日も何も食わずでドラゴンの姿でいたけど、それでも2/5しか消費してないから驚きです。

「ギアス！？おい、しっかりしろ！」

エルザが必死で介抱してくれてた。

その後必死で気絶したフリで過ごして夕方頃に目を覚まそう。

アカネリゾート、一室

取り合えず起きた。

「ギアス！？起きたの！？」

ルーシイが騒いだ。

「ギアス！コンチクショー！」

いきなり殴りかかったナツ。



「うわっ！？なんだよナツ！」

「うるせー！殴らせる！」

「だから何だよ！？」

「ギアス、皆を心配させたんだ。それぐらい受け入れてやれ」

どうやらグレイもルーシイも同じ気持ちらしい。

しばらく「ちやちや」した後、

「ところでギアス、いつまでドラゴンになってるの？」

ルーシイが当然の疑問を言った。

「そうは言っても、何とか元に戻ろうとしてはいるんだけど…」

取り合えず誤魔化した。

「エーテリオンを取り込んだ副作用で、身体の構造が変化したままになっているのだな」

「いーじゃねえかよこのままで、カツコイイし」

ナツが羨ましそうにギアスを見た。

「そういうわけにもいかねえだろ！さすがにいつまでもこのままじゃまずいだろ！」

グレイが注意した。

「だが、こればかりはどうする事も…」

「だったらさあ…」

ハッピーが何か思い付いた様だ。

「ギアスの元の姿に変身したら？」

「それだ！」

ハッピーの提案に乗るフリをするギアス。

そして変身（元に戻る）するギアス。

「よし、これでOKだな」

「いや尻尾出てるよ!？」

「あつ悪い」

ワザと尻尾を出させてみました。

「つか…それでいいのか？」

「現状どうする事も出来ないんだ、見た目が戻っただけでもマシと思わなければな」

「そうだな」

「（じ〜〜〜〜〜）」

「ん？なんだナツ？」

ナツがじ〜つと見つめてきた。

「いや、オレもエーテリオンを食ったらドラゴンになれるかなって」

「いや、無理でしょ!？」

ルーシィが突っ込んだ。

「それ以前に、エーテリオンは炎以外の属性が含まれているんだ。

多種類の属性を持つギアスだからこそ出来る事であって、ナツにと

つてはただの毒だぞ」

「ちえ〜、良いな〜ギアスは〜」

心底羨ましそうだなナツ。

しばらくして、シヨウ達とメシ食って騒いだ。

日暮れ頃、ルーシイが花火の用意しろと言つて来た。

シヨウ達とお別れイベントだな。派手に壮行会と参りますか！

夜、アカネリゾート、海岸、エルザサイド

シヨウ達が、自分達の意味で本当の自由を探す事を選んだ様だ。

「…その強い意志があれば、お前達は何でも出来る。安心したよ」

私は、式典用の鎧に換装した。

「だが、フェアリーテイルを抜ける者には、三つの掟を伝えなければならぬ！心して聞け！」

「…えっ!?!」

「エルザ!?!」

「みやつ!?!」

「ちよっ、抜けるって入ってもねえのに…」

皆が驚き、ウォーリーが抗議したが、これから彼らに言わなければならぬ事がある。

「一つ、フェアリーテイルの不利になる情報は…一切他言してはならない！二つ、過去の依頼者に濫りに接触し…個人的な利益を

生んではならない！三つ、例え道は違えど…強く力の限り生きなければならぬ！決して…自らの命を…小さなものとして見てはならない！」

エルザやシヨウ達は涙ぐんでいた。

「愛した友の事を…生涯忘れてはならない！」

私は旗を掲げた。

「フェアリーテイル式壮行会、始めえ！！」

「くくくおう！！」「くくく」

花火の準備をするナツ、グレイ、ルーシィ、ギアス。

ナツは口から炎の花火を打ち上げた。

「心に咲け…光の華！」

グレイが氷の花火を上げ、ルーシィは星の花火を上げ、ギアスは虹の花火を上げた。

シヨウ達はその光景に感激していた。

「私だつて本当は、お前達とずっといたいと思っている。だが…それがお前達の足枷になるのなら、この旅立ちを祝福したい」

「逆だよ〜エルちゃん…」

「俺達がいたら、エルザは辛い事ばかり思い出しちゃう…」

「だから俺達は…離れなきゃいけないんだ！」

ミリアーナとウォーリーとテルヤマは泣きながら言った。



「『すごい』」

「『完成したんだ!?!』」

「『『『『『新しいフェアリーテイル!?!』』』』』」

中に入ってみると、最初に目に着いたのが、オープンカフェにグッズショップだった。

ちなみにグッズショップには、砂の魔導士マックス・アローゼが売り子をしていた。

おまけにグッズには、ルーシイのフィギュアがあった。しかも、着脱可能トオフで下着姿になった。

「キヤアアアアアアッ!?!?」

当人はかなり恥ずかしがっていた。

「なあマックス…!」

「なんだギアス?」

「…ミニサイズのやつあるか?」

「悪い、そういうのは…」

「何だ無いのか」

「『ギアス…!』」

ルーシイとエルザにしばかれるギアス。

酒場は某使い魔の食堂みたいな景色だった

「『『『きれえ』』』」

ルーシイ、ハッピー、ルシアは賛美した。

でもナツがどこか不満そうだ。

しかも酒場の奥にはプールがあったり、地下には遊技場があったり

と、至れり尽くせりな環境だな。

中でも変わったのが、誰でも二階に行ける様になった事。もちろんS級の仕事は、S級魔導士同伴が決まりの様だ。

「帰って来たかバカたれ共」

マスター…とジユビアと少女部隊が来た。

つかジユビア…イメチェンした？

「新メンバーのジユビアとセツナとクチナシとミオちゃんじゃ。かわええじゃろお」

「『』『』よろしくお願いします！』『』『』」

「ははっ本当に入っちゃまうとはな！」

「毎日が楽しくなりそうだなあ、ミオた〜ん！」

「お前はそれしかねえのか…」

「アカネでは世話になったな」

「皆さんのおかげです！ジユビアは頑張ります！…」

ま、眩しい笑顔だ！これでもう少し背が低けりゃ…

「よろしくね！」

「…恋敵…」

「違っけど！？」

…前言撤回、やっぱりジユビアだ。  
するとマスターが、

「そしてもう一人の新メンバーじゃ。ホレ挨拶せんか」

「他にもいるの？」

「誰〜？」

皆が新入りの方に向けた。  
そこには、

「ええっ!？」

「おいつ、嘘だろ!？」

ファントムロードのエース、鉄竜のガジルだった。

「あゝん!」

「ガジル!？」

「何でコイツが!？」

「待って、ジュビアが紹介したんです…」

「…ジュビア達はともかく、コイツはギルドを破壊した張本人だ!」

「…フン」

マスターも一応その辺の事は理解した上で仲間にしたそうだ。

「…わ…私も…全然気にしてないよ…」

そんなテーブルの下に蹲りながら言ってもどうかと思うよレビィ。

つかドロイとジェットがガジルを睨んでるな。まあ当たり前か、ガジルの最初の犠牲者だからな。

ナツがガジルの事で反発してる様だ。

その姿は犬の張り合いに見えた。

「なんか居心地が悪いなあ…「パツ」んっ!？」

突然明りが消えて真っ暗になった。

そして、ステージに明りが付いた。



ステージにはミラが居た。

「お、ただいまミラっ」

『おかえり。それでは、ナツ達が無事に帰って来たのと、新築祝いを兼ねて歌いま〜す』

ミラがマイク越しで言い、歌いだした。

ミラが歌い終わると、喝采を浴びた。

「良いぞ〜！次は誰だ〜？」

マカオは叫んだ。

そして、次にステージに上がったのは、なんと、白スーツに着替えたガジルだった。

「コッコッコッコッコええっ！？」

「なっ、何だ！？」

当然皆は啞然としていた。

『オレが作った曲だ。』  
ベストフレンド  
「BEST FRIEND」聴いてくれ』

観客は野次を飛ばして来た。

ガジルは気にせず歌いだした。

つかあの歪な形をしたギターは自家製か？

最強チームの面々は真っ白状態にヒビが入ったかのように啞然とした。

「ああ…」

レビイは呆然としていた。

「やるじゃねーか！」

「がんばれガジル君！」

「素敵ですガジル先輩！」

「ガジルおに〜ちゃん、がんばれ〜」

『良いのこれ？』

「『『良いぞー！』『『

一部のメンバーは好評でした。

つかセツナ、「素敵です」って、ガジルに気があんのかよ!?

他の観客は物を投げてきた。

ガジルはそれでも気にせず歌い続けた。

が、

「こんなヒデー歌初めて聴いたぞ!?!」

ナツが言ったと同時に、ガジルはギターを投げ付け、ナツに当てた。

『プエープエツプエツ!』

ハーモニカ啜えながら言うなよ、分かんねえ。

「やんのかコラー！」

「シュビドウバー！」

「何すんだテメー！」

「シュビドウバーだこのヤロー！」

案の定、ナツとガジルは乱闘を始めた。

つかさつきからガジルの奴、シユビドウバーって言ってるけど、気に入ったのかその言葉…  
そして、誰かが投げた物がナツに当たった。

「物投げたの誰だコラー！」

「ナツ、テメー暴れんじゃねー！」

「あっ!？」

グレイが立ち上がった時にエルザにぶつかり、食べていた苺ケーキを落としてしまった。

「わ…私の…苺ケーキ…「グシャツ」ああっ!？」

嘆いてるエルザにタイミング悪く来たエルフマンが苺ケーキを踏んでしまった。

エルフマン…死んだな。

「テメー等、漢ならギャーギャー騒ぐんじゃな」「ヤカマシイ!!」「グアー!？」

エルフマンを蹴っ飛ばすエルザ。

暴れまくるナツとガジル。

暴走するエルザ。

乱闘騒ぎなギルド。

泣き叫ぶマスター。

ルーシィとハッピーとルシアと少女部隊はカウンターに避難していた。

「ははっ、やっぱこーゆう方がフェアリーテイルらしいよ」「ドカツ」「フゲッ!？」

いつもの後景に和んでいたギアスだったが、ナツが避けたガジルの鉄竜棍を喰らった。

『何すんだコラー！』

「ってギアス、顔がドラゴンに戻ってるぞ！？」

頭に来たから、頭をドラゴン化した所を偶々目撃した 그레이 が突っ込んだ。

そしてこの乱闘騒ぎは、一日中続いた。

## HOME (後書き)

セツナはガジルの気がある様にしちゃいました。

次回はラクサス編。

雷神衆に二人ニードレスキャラ入れます。

歌詞の無断転載が来てしまったので、8/5にミラとガジルの歌を消しました。

## バトル・オブ・フェアリーテイル（前書き）

あの二人を雷神衆に入れました。

てかマガジン読んで知っただけで、ギルダーツがアニメに出る事を知りました。

漫画版ではチラホラ名前が出てたのに、アニメ版では一切名前が出て来なかったから、アニメでは出ないのかと心配しました。

## バトル・オブ・フェアリーテイル

マグノリア

食欲が無い…あつ別に調子が悪い訳じゃないよ。

腹の中にあるエーテリオンの残りがまだ消化しきってないので、常に腹は満たされている状態です。

さうと、バトル・オブ・フェアリーテイル…どくしよかな…  
そついや雷神衆の中で驚いたのが、ニードレスキャラのあの二人が兄弟設定で登場した時はビビったもんな。弟の方はともかく、兄の方はへたすりゃラクサス並…いやそれ以上だぞ!?!  
ちなみに俺は今買い出しの帰りだった。

あつルーシイだ。そついや収穫祭にはミスコンがあつたな……これだ!予定が決まったぞ。

「ルーシイ!」

「あつギアス!」

「ぷー」

微妙星霊のプルーまでいるな。

「ルーシイは今帰り?」

「そつゆうギアスは?」

「買い出しだよ。そついや店でルーシイの噂を聞いて来たよ」

「噂って…なんか嫌な予感…」

本編じゃビッグスローが言つてたやつを言つた。

「コスプレ大好きツンデレ肉食系女王様って噂してたぜ」  
「どんだけ尾ひれ付いてんのよー！ー！！？」

コスプレ大好き〓色んな格好でいた事があるから。  
ツンデレ〓ナツやロキ等に対してそうだから。

肉食系〓誘惑してる事が多いから（主に値切る時）。

女王様〓武器が鞭だから。

作者の勝手な判断です。

ルーシイとは、きりの良い所で別れた。

明日に備えて寝た。

数日後、マグノリア、収穫祭、ルーシイサイド

今日は収穫祭！

ファンタジア

うちのギルドが行う幻想曲という大パレードを見る為に他の町から  
来た人達が町中にごった返しているほどだと言っ。

「おおー……祭りだあ……」

「ナツう…大丈夫？」

さつきナツが、デロドロンドリンクを一气飲みした所為で気分が悪  
くなったらしい。

ってそうだ、もうすぐミスコンが始まっちゃう！？

今月の家賃危ないからなんと少しでも優勝して、50万Jゲットし  
ないかね！

フェアリーテイル、ミスコン会場、ルーシイサイド











マカオとリーダーダスが言った。

「ちよつと何アレ！？何気にスタイル良いし！？」

「た、確かに…」

さすがのルーシィとエルザも、女ギアスに驚愕していた。

サイドエンド

ふふっ私は女になったギアスよ。

えっ？何で女になってるのって？

簡単よ。ホルホルの実の能力で女になっただけだから。それにしても女になると口調も変わるのね。

今の私の設定は、ワンピースのナミのようなスタイルにロビンのようなクール系よ。

格好は、ロビンがミス・オールサンデーとして初登場した時の胸元露出で臍出しよ。

さて、アピールをするわね。

「私の変身を見てね」

妖艶っぽく言った女ギアス。

そして巨大ドラゴンに変身した。

『おおつと！？ドラゴンに変身したー！』

観客は驚いたが、すぐに賛辞した。

「つか良いのか？その姿を見せて…」

グレイが気になったが、スルーした。

そして控室に戻ったら、雷神衆の一人、エバーグリーンと既に石化しているカナとジユビアとミラ。

「なっ!？」

「あら、こんにちわ」

エバが眼鏡を外そうとした。

さて、手筈通りに。

- 1、眼鏡を外す前に、自分の目の前にミラミラの実の能力、マジックミラー（女ギアスからは鏡しかないけど、エバから見れば女ギアスしか見えない）で鏡を出した。
- 2、タイミング良くドツペルゲンガーで身体を石化させた。
- 3、これでエバが行った意思無き石化とは違い、意思のある状態のまま石化に成功した。

「あらあら、女になったギアスって、雅に妖精ね。悔しいけど」

そういえばエバって、妖精になる事が夢だったわね。

「それにひきかえ、何が妖精女王ティターニアよエルザ！私が一番その名とギアスの隣に相応しいのよ!」

何故私の隣!？

「ほんとムカツク、いつもギアスと一緒にいて、私こそが妖精に相応しいんだから!」

ああ、私が妖精審判者だから隣が良い訳ね。  
エバの気持ちに気付かないギアスだった。

ルーシーサイド

思わぬ伏兵だったわ、また家賃が遠ざかった…

『エントリーNo.5、説明不要のティターニア！』  
「っ！出番だな！」

エルザはジャンプして会場に着地した。

『エルザ・スカーレット！』  
「……………わあああ—————！！」  
「……………」  
「すごい人気！？」

やっぱりエルザって人気あるんだ。

「ふっ私のおきのおきの換装を見せてやるっ。はあああっ！とっ  
—————！」

換装するエルザ。

出て来たのは、ゴスロリ服を着たエルザだった。

「っ、ゴスロリっ！？」  
「ふっ決まったな！」

まさかエルザがその服をチョイスするなんて…

「あいつもだいがキャラ変わったな…」

「ウイ！」

マカオとリーダーダスが言った。

『エントリーNo.6、小さな妖精！キューティー&インテリジェンス！レビィ・マクガーデン！』

「レ〜ビィ〜！！」

あっレビィちゃんだ。

「ソリッドスクリフト立体文字！えーい！」

SNOW⇨雪状の文字

BUTTERFLY⇨アゲハ蝶の羽みたいな模様の文字

METAL⇨鉄板とネジで出来た文字

FLOWER⇨花が飾ってある文字  
を出した。

「レ〜ビィ〜！！」

レビィは魔法でアピールし、それを見て喜ぶジェットとドロイ。

『エントリーNo.7、セクシースナイパー！ビスカ・ムーラン！』

水着姿のビスカが、4枚のコインを上空に投げた。



「換装！ザァー・ガンナァー！！」

狙撃用の銃で投げ上げたコインを、一発で全部中心に打ち抜いた。

「イヤッホー！」

「か、可愛い！」

落ちて来たコインを受け止め、皆に見せるビスカ。  
そんなビスカにメロメロなアルザック。

「皆すごい！」

『エントリーN.O.8、我らがスーパールーキー！』

「あたしだ！」

とうとう出番が来た！

『その輝きは星霊の導きか！ルーシィ・ハーセ「だー！？ラストネームは言っちゃ駄目ー！」』

ルーシィのフルネームを言うマックスを遮るルーシィ。

「（パパの事がバレたら、50万取れなくなっちゃう…）」

金持ちの娘が賞金目当てで出場したら舐めてるのかと思われないと  
思ったルーシィ。

「えーと…あたし、星霊達とチアダンスしまーす！」

さて、50万を得る為にも！

その時、

『エントリーN o . 9』

「えっ、ちよつと!?!? まだあたしのアピールタイムが!?!?」

誰よ!あたしの生活が掛ってるのに乱入して来るのって、

「妖精とは私の事、美とは私の事、そう…全ては私の事、優勝はこの私!エバーグリーンで決定!ハクイくだらないコンテストは終了です」

「えー!?!?」

ちよつと!?!? なんなのよ勝手に出て来て勝手に優勝宣言!?!? 冗談じゃないわよ!

「ちよつと、邪魔しないでよね!あたし生活が掛ってるんだからね!」

「ルーシィ!そいつの目を見るな!」

「えっ?」

グレイが何か言ってきた。

「なに?このガキ」

エバは眼鏡を外し、ルーシィを見た。

「!?!?」

ルーシィは石化した

サイドエンド



「ウテン、サテン!?!」

「爆裂兄弟も!?!」

そう、雷神衆に右天と左天がいた時は驚いたわ。

なんせ二ードレスの敵の幹部の内二人が雷神衆にいる訳なのよね。

しかも二人は兄弟設定よ。

ちなみにサテンが兄で、ウテンが弟。

「雷神衆!?!」

「ラクサス親衛隊だ!」

マカオとワカバが言った。

「遊ぼうぜ…ジジイ」

「バカな事はよさんかあ!今すぐ元に戻せえ!」

「ファンタジアまでに何人生き残れるかねえ…!」

ルーシイの頭上に雷が出現し、落ちた。

「よせえ!?!」

しかし、当たる直前にそれた。

「この女達は人質に頂く。ルールを碎けば一人ずつ碎いていくぞ。言ったる、余興だと」

「冗談では済まんぞラクサス!」

「オレは本気だよ」

雷神衆が舞台に降りた。

「フェアリーテイル最強は誰なのかを、ハッキリさせようじゃないか」

「つう、遊びだよ」（遊び遊び）x5）

「ルールは簡単だよ」

「最後に残ったモンが勝者だ」

「バトル・オブ・フェアリーテイル！」

フリード、ビッグスロー、ウテン、サテン、ラクサスの順に言った。その時、ナツが気合の入る声を上げた。

「良いんじゃないの？分かりやすくて、燃えてきたぞ！」

その後お約束で、ラクサスにより気絶させられたナツ。

「この子達を元に戻したければ、私達を倒してごらんなさい」

「オレ達は6人、そっちは百人近くだろ？はっはぁ」（ハハハッx5）

「うわーこつちが不利だねえ（棒読み）」

「まっ問題ねえけどよ」

「制限時間は3時間ね。それを越したらこの子達、砂になっちゃうから」

私は砂にならないけどね。

「バトルフィールドはマグノリア全体、オレ達を見つけたらバトル開始だ」

「ラクサス…フザケオツテエエエエー！！」

巨大化するマスター。

「だから慌てんなって、祭りの余興さ。へへっ楽しもうぜ！」

ラクサスは雷光で目眩ました。

「バトル・オブ・フェアリーテイル…開始だアー！」

光が収まると、ラクサス達は姿を消した。

フェアリーテイルのメンバーは、ラクサス達を探しに出て行った。アルザックは目の前まで来て、

「ビスカ、僕が…必ず助けてあげるからね…」

そう言って出てくアルザック。

「…あんのバカタレが…ワシが、ワシが止めてやるウウウ…！」

マスターが駆け出した。

が、

ゴン！

「！！！！？」

「ん！？じーさん！？」

マスターの異常にグレイが気付いた。

どうやらフリードによる術式が発動したらしい。

内容は、

<80歳を超える者と石像の出入りを禁止する>

というものらしい。

ほんと、言ったもの勝ちみたいな魔法ね。

私は覚えそこなったから術式は使えないのよねえ。

そうこうしてる内にグレイが出てっみたい。

「（ラクサスに勝てる者などおるのか：ギアスなら雷を扱えるから倒せるじゃろうし、エルザももしかしたら：しかし、二人がこの状態では…）ん！？誰じゃ！」

「ウイ！？」

「リーダーか」

「お、オレ…ラクサス怖くて…」

「よいよい、それより東の森のポーリユシカを訪ねてくれ」

「ウイ？」

「石化を治す薬があるかもしれん」

「ウイ！」

その時、ナツが目覚めた。

「じゅあーーーーー！！」

「起きたあ」

「あれ、ラクサスは？つか誰もいねえ！？」

「！？（ナツが本気ならあるいは…）」

「じつちゃん、皆どこ行っただ？」

「（こやつは潜在能力に賭けてみるか…）ナツよ、祭りは始まった！ラクサスはマグノリアの中におる、倒してこんかあああいい！！

「おっしやあああああ！！待ってるラクサス「ゴン！」ガッ！？」

「…「ええーーーーー！！？」」「」」

「な、何でだ！？」

ほんと何でなのかしら？

原作でもまだ解らないし、何でかしら？  
その間にリーダスは出てった。

「どーなつとるんじゃあナツ、お前石像か！？80歳か！？」  
「知るか！」

すると、術式に文字が出て来た。  
内容は、

<途中経過速報、ジェットVSドロイVSアルザック>

フリードの術式により、戦わざるえない状況を作っていた。  
この三人が戦いを始めたそうね。  
しばらくすると、

<勝者、アルザック>

これが、仲間同士で潰し合い、勝者を決めるバトル・オブ・フェア  
リーテイルの幕開けだった。



## バトル・オブ・フェアリーテイル（後書き）

遂に性転換しちゃいました。そしてエバーグリーンはギア스에 氣がある様にしました。当然ギアスはロリコンだから眼中に無いけどね。ちなみに女ギアスのミスコンの順位は何位くらいがいいですか？一応順位は決めてるんですが、皆さんの意見も聞きたいです。次回は断片的です。ギアスは石化の為少ししか出番がありません（ギアス視点は多くあるけど）。

## ウテン・サテン設定(前書き)

雷神衆のお二人の紹介です。

## ウテン・サテン設定

所属  
フェアリー  
妖精の尻尾 テイル

チーム名

雷神衆

リーダー

フリード

メンバー

名前

ウテン

魔法

ハミューダアスポート

透明

生命体以外の物体を透明にする能力。基本的にはそれだけだが、武器を思いもよらぬ場所から出現させたり（実際には単に予め服や周囲に仕込んであるだけ）、周囲の地形を一変させたり、「無から有を生み出す」という神の如き所業に見せかけることが出来る。

設定

原作ニードレスの右天

最初は特に決めてなかったんですが、この二人を雷神衆に入れてみました。

サテンとは兄弟

ラクサスの事を尊敬している

名前

サテン

魔法

第四波動

周囲の熱エネルギーを吸収し、増幅して放出する能力。仕組みは単純ながら、サテンはこの能力を操る事に非常に長けており、あたたかも火・冷気・風など複数の魔法を行使しているかのように見せられる上、そのどれもが非常に強力な威力を持つ。その特性故に、吸収できる熱が減る冷気など分子運動低下現象に非常に弱い。

設定

原作ニードレスの左天

最初は特に決めてなかったんですが、この二人を雷神衆に入れてみました。

ウテンとは兄弟

ぶっきらぼうだが、ラクサスの事を信頼している

## ウテン・サテン設定(後書き)

今でもこの二人を雷神衆に入れて良かったのかな？って思っています。

友の為に友を討て、サタン降臨（一部）（前書き）

名前が分からない人はその他扱いです。

## 友の為に友を討て〜サタン降臨（一部）

フェアリーテイル

また表示されたわね。

内容は、

<アルザックVSその他2名、戦闘開始>

<ビジターVSナブ、戦闘開始>

<マックスVSウオーレン、戦闘開始>

<ワカバVSマカオ、戦闘開始>

<セツナVSクチナシVSミオ、戦闘開始>

<ラキVSその他4名、戦闘開始>

<勝者、アルザック>

<勝者、ウオーレン>

<勝者、ナブ>

<勝者、ラキ、4人抜き>

<勝者、セツナ>

になってるわね。

つてセツナ！？あんた何ミオちゃんいじめてるのよー！？

「なんでだよ、意味解んねえ！？くう…」

「ナツ…」

珍しくナツが俯いてる。

「オレもまざりてえ！…」

「「「そつちかい!?!?」「」」

前言撤回、やっぱりナツね。

「何なんだよ、この見えねえ壁よお!?!?」

「まざつてどうする気じゃバカタレ!」

わざわざ腕を伸ばして突っ込まなくても…

「最強決定トーナメントだろこれ!」

「どこがトーナメントじゃ!…ラクサスに乗せられて仲間同士で潰し合っただけじゃ、制限時間以内に雷神衆を倒さねば、エルザ達は砂になってしまふ。そうはさせまいと、皆必死なんじゃ! 正常な思考で、事態を把握出来ておらん! このままでは石にされた者達が砂になってしまい、二度と元には戻らん!」

「いくらラクサスでも、そんな事はしねーよ! ムカツク奴だけど、同じギルドの仲間だ! ハツタリに決まってるだろ?」

「ナツ…」

「これはただのケンカ祭り…? っか何で出られねえんだ!?!?」

懲りずに出ようとするナツ。

「この結界は、80歳以上は通れない…って事はオレ80超えてたのかー!?!?」

「「そんな訳ないと思うけど」「」

ハッピーとルシアは突っ込んだ。

そして、また文字が出てきた。

内容は、



<残り時間、2時間18分、残り人数、43人>

「43人！？仲間同士の潰し合いで、もう人数が半分以下に！？」

セツナがいる分、原作より一人分多いわね。

そしてまた文字が表示された。

<リーダーVSフリード、戦闘開始>

<グレイVSビッグスロー、戦闘開始>

<エルフマンVSエバーグリーン、戦闘開始>

<ウテン乱入、ワカバVSマカオVSウテン、戦闘開始>

<セツナVSサテン、戦闘開始>

<勝者、ウテン>

<勝者、サテン>

<勝者、エバーグリーン>

セツナじゃサテンの相手にはならなかったって事ね。

とうとう雷神衆が動き出したわね。

それにしても、暇ねえ。

少し寝ましょ。

しばらくして、

ん？あれ、ガジルかしら？

「もしや…行ってくるのか？」

「あの野郎には借りがあるからな。まあ…任せな」

そして、

ゴン！







「ギヒヤツ!？」

ナツを殴った。後ろにいたガジルを巻き込んで。

「「エルザが復活したー!」「

「良かったあ。しかし何故?」

どうやらエルザの右目の義眼のおかげで、石化の効果を半減したおかげらしい。

ところで私の方は?

「ん?ちよつと待て、じゃあギアスの方は……」

「「「「ん?」「」「」

そしてヒビを広げた。

「…もしかして……」

「…ギアスの方は……」

「…本当に……」

ピキピキッ

「だぁー!ー!ー!ー!?!こっちはマジで割れ掛ってるのかぁー!ー!ー!ー!  
?ノリだノリだ!ハッピー、ルシア、ノリだぁー!ー!ー!」

「あいさー!ー!？」

「らー!ー!ー!？」

「だからそんなんでくっ付くか!?!さっさとオレの鉄をテメエの炎で溶かして、溶接するんだ!ー!」

「「貴様らぁー!ー!ー!?!」「」

いい加減、そろそろ復活しよ。  
パリーン  
と同時に、

「やっつと解けたわあ！」

と言って復活してみました。

「くくくくくくおおっ!?」「くくくくくく」

「ところで…さっきからすごく熱かったんだけど、ナツうゝ貴方が  
しら?」「

「はっ!?!」

「何すんのよー!?!」

「グハアツ!?!」

取り合えず、殴りました。

「ギアスも復活したー!」

「良かったよーギアスゝ!」

そう言っつてルシアは、私の胸の中に入った。

「ちよつとルシア、くすぐつたいわよ」

「エルザは義眼のおかげで効果は半減したが、お前さんは一体どう  
やって?」

どっい訳しようかしら…

「それが…お腹の中から魔力が溜まっている事に気付いて意識を取  
り戻したの。そして、解除魔法を内側から少しずつ解いていったの」

「そうか、エーテリオンの魔力がまだ残っていたのか！」

「そういう事になるわね」

「つかいい加減、男に戻れよ」

「あら、それもそうね」

「ワシはどちらかと言うとこのままの方g「マスター！！」…何でもない！？」

エルザの一言で黙らせちゃったわね。

そして女ギアスは、男性ホルモンを打って、男に戻った。  
んじゃ、おっぱい始めるか！

「反撃の時じゃ！」

そして、表示されてる残り人数に変化があった。

<残り、04人>

「私とギアスが復活した事で、残り人数も律儀に変わったか。凝った事を…」

「この4人は、ナツとガジルとエルザとギアスの事だね」

その時、表示されてる残り人数に変化があった。

<残り、05人>

「！？」

「増えた！？」

「誰だ！？」

皆は石化した娘達の方を見た。

皆石像のままだった。

「皆石のままじゃ…一体…」

その時、エルザは気付いた様だ。

「ふっ、もう一人残っていたらどう？街の外にいた者が」

「「「「「？……！」「」「まさか、あいつか！？」」

「「嘘おー！？」」

「なるほど、確かにあいつは街の外にいたな」

「あいつが、帰って来おつたのか！？」

「とうとう参戦を決めたか。面白い事になって来たな！」

「さつきから誰の事だよ？」

「そっぴやガジルは知らないんだっただな？」

「フェアリーテイル、もう一人の最強候補、ミストガン！」

ミストガンが来た事に驚く一同。

そして、エルザ、ギアス、ラクサス、ミストガンのフェアリーテイルのトップ4が揃った。

それじゃ俺も行動開始と参りますか！

「ミストガンも来てくれた。風向きは俺達の方に向いて来たな。エルザ、俺達もバトル参戦だ！」

「ああ！行くぞ！」

そう言って駆け出すエルザとギアス。

「あれっちょっと待って…」

ルシアがなんか言ってる様な…







「ラクサス！」

髑髏からラクサスの声が聞こえた。

『ルールが一つ消えちまったからな…今から新しいルールを追加する。バトル・オブ・フェアリーテイルを続行する為に、オレは『なりてん神鳴殿』を起動させた』

「神鳴殿じゃと!?!」

『残り1時間10分、さあ、オレ達に勝てるかな?それともリタイアするか?マスター…ふははははははっ!』

浮かび上がった髑髏が消えた。

「何を考えておるラクサス!!関係の無い者達まで巻き込むつもりkっ!!?!?んぐおっ!?!」

マスターが急に苦しみ出した。

マスターを介抱する女子達。

薬を取りに行ったミラが外を見てと言って来た。

外に出た俺達は、空に無数のラクリマが浮かんでいるのを確認した。

「何だアレ…!」

「いかすち雷の…ラクリマ…?」

「あんなものが…」

「街中に浮かんでる…」

カナ達の話によると、あのラクリマはマゲノリアに無数の落雷を落とすモノだと言う。

「そんな事はさせないわ!スナイパーライフル換装!」

狙撃銃を換装したビスカ。

「よし、俺も！アイスメイク……」

氷の魔法を使うギアス。

「ターゲット・ロックオン……」

狙いを定めるビスカ。

「ステインガーシユート……」

「ランス……」

ビスカは一つ、ギアスは五つラクリマを破壊した。

「やった！」

「おお！」

「やるじゃないかビスカ、ギアス！」

「まあな」

「こんなの全部私達g」「バチバチッ」「！？」

「何だ！？」

ビスカとギアスに電撃が走った。

「あああああああああ……！？」

「ぐおおおおおおお……！？」

「ビスカ！？ギアス！？」

ちなみに俺はゴム人間の為電撃は効かないが、一応喰らってる様に

振る舞わないと。

あれっ？今思ってたんだが、俺ならダメージ負う事無く全部壊せるんじゃない？いや駄目だ、全員が壊さないと意味無いんだから壊さない。そしてビスカは倒れ、俺はしゃがんだ。

「ビスカ！？しっかり!？」

「ギアス！？大丈夫か!？」

「少し…大丈夫…なのか…?」

「いやこっちが聞きてえぐらいだよ!？」

ナツが突っ込むとはな。

「何コレ、どうなってんの!？」

「生体リンク魔法…」

「生体リンク魔法?」

生体リンク魔法

簡単に言えば、攻撃したら自分にダメージが返って来る魔法らしい。簡潔過ぎって思われても別に構いません。

「ラクサスをやるしかない、行くよ!」

「あたし…出来るだけ街の人避難させてみる!」

「おいらも行く!」

「僕も!」

ルーシィとハッピーとルシアが行った。

「雷神衆はまだ4人いる、気を付けるんだよ!」

そう言ってカナは、ジュビアと一緒に出た。

「何考えてんだ、あの野郎！」

「ナツ！？」

「おい！？」

「待て！？」

ゴン！

「ガッ！？フン！やり過ぎだろ！そんなにマスターになりたきゃ、じつちゃんと戦ってみるよ！いい加減にしるよ、ラクサス！！グオオオオオ！！」

「ナツ、落ち着いて！」

「落ち着いてられっか！」

「いいから聞いて……」

「クソツ！こんなところにも見えねー壁がっ！」

術式の壁を蹴りまくるナツ。

「術式でしょ？」

「んな事は分かってる」

「文字魔法の一種だから、私なんとかできるかもしれない！」

「何！？」

「本当かレビイ！？」

「……頼めるか」

「うん！私……貴方達なら、ラクサスを止められるって信じてるから！」

そう言っつて術式の解説に専念するレビイ。

えっ？お前は一緒にやらないのかって？言っちゃなんだが、文字魔法は理解力が無いと出来ないから、俺じゃ解説は無理なんです。

よくこれが理解出来るレビイはすごいと思いました。  
ガジル…今のレビイの近くにいて頭痛くならないか？

「うん・・・ローグ文字の配列情報を文字マテリアルに分解して・・・ルール構築に使う単語をピックアップ、L・O・S・U・・・更にそれをギール文法に変換・・・」  
「すげえなお前…何言ってるかまったく解らねえ」  
「違う！」「うお！？」「LとSはブラフだわ！アルスがキーコードよ！！」  
「そ…そうか…」

さすがのガジルも、今のレビイに圧倒されてるな。

「大丈夫。私があんた達をここから出してあげる！」  
「…俺は別に…」  
「お願い…ラクサスを止めて！」  
「……………」

近くに寄ったギアス。

「ああ！」

そして術式の壁に挑み続けてるナツも、

「ヨユー！」

しばらくして、

<ビッグスローVSルーシィ、戦闘開始>

「ルーシイがビッグスローと戦ってるのか!？」

「ルーちゃんが!？」

「おい!？チアの女大丈夫か!？」

「ルーシイはああ見えて、結構強えーからな。信じるしかねえ!」

「だな!」

「ルーちゃん、頑張つて!」

「大丈夫か?」

しばらくして、

<勝者、ルーシイ>

ルーシイが勝つた様だ。

まあロキが頑張つたみたいだし。

「おっルーシイが勝つたあ!」

「マジか!？あのチアガール戦えたのかよ!？」

「ルーシイはああ見えてやる時はやる子だからね」

「さすがルーちゃん!私も負けてられない!」

「ウソだろ!？だつてチアだぞ!？」

「チアは強えーぞ」

「んな話聞いた事ねえよ!」

確かに…

「お前、チアと亀の競争の話知らねーのか?」

「ナツ、チアじゃなくて兎だろ」「あとは…ここさえ解ければ…」

「しかもそれ兎負けてんだろーが!」

二人とも、その亀と兎の人形どっから出したんだ?



「最初の一回はな。その後何百回競争しても、兎の連勝だ!」「術式を…書き換えて…」

「(勝手に物語作るなよナツ…)」「ただど…ここが最難関…」

「む!?!なるほど、教訓を活かして…」「はっ!?!」

納得するんかガジル!?

すると、

「それだ!」

「…うわっ!?!」

レビイは何か閃いた様だ。

「そうだよ!二つの文法を違う速度で解読していくんだ!一周して同期した文字の整数を…ギール文法に変換して…更にローグ言語化…」

三人はレビイの解読に啞然とした。

そして結果は、

「…解けたあー!」

「…おおーっ!」

「待ってて、術式を書き換えて来る!」

「…おう!」

「ナツ、ガジル、ギアス、準備は良い?バトル・オブ・フェアリーテイル、参戦だよ!」

ナツは手に炎を溜め、ガジルは首を鳴らし、ギアスは虹のオーラを纏った。

「燃えてきたぞ!!」

「ひと暴れしてやんよ!!」

「判決を降してやるぜ!!」

ナツ、ガジル、ギアスの三人は、気合を入れて戦いに挑んだ。

友の為に友を討て、サタン降臨（一部）（後書き）

次回はガジル視点でウテンとバトルをします。

## サタン降臨〜鉄竜（ガジル）VS手品師（ウテン）（前書き）

オリジナルの展開です。

時期的には、サタン降臨〜中編辺りです。

ガジル視点で行います。

ウテンとサテンのセカンド魔法に悩みました。

そして総合評価ポイント：500pt を超えました。 皆さんありがとございます。これからも見てって下さい。

## サタン降臨（鉄竜）（ガジル）（VS手品師）（ウテン）

マグノリア、ガジルサイド

「へっサラマンダーにもいずれ雪辱を果たさなきゃならねえが、まずはあの増長した雷兄さんを潰す。随分とやってくれたからなあ…問題無えよな？マスターイワン」

『ガアージル：今は信頼を得る事が重要だ。気付かれるな、あくまでフェアリーテイルの一員として行動しろ』

「んなもん、とつくにやってるぜ！」

『フェアリーテイルに罰を与えるのはまだ先だ！』

「ギヒツ了解！」

闇ギルド、大鴉レイヴンの尻尾テイルのマスターであり、マスターマカロフの息子…ラクサスの父親のイワン・ドレーアと密告しているのは、ガジルだった。

いや、正確には、マカロフの依頼でレイヴンテイルに二重スパイをしていたのだ。

イワンとの会話が終わると、ガジルは駆け出した。

さて、ラクサスは何処だ？

…のど乾いたな…水でも買つか。

この行動がガジルの命を救う結果になるとは思いつかなかっただろう。

しばらく走っていたら、術式に嵌った。

「やべっ！？」

出てきた文字は、

<この術式にかかった者は、指定の建物に入るべし>

なんだこりゃ？

あつ矢印が出た。

その先を行くと、ある一軒家に着いた。

「ここに入れてか？」

そうやって入っていくガジル。

マグノリア、ある一軒家

「ここに一体何があんだあ？」

「It's Magic、ファントムのお兄さん！」

「!？」

ガジルは咄嗟に上を向いた。

そこにいたのは、宙に浮いてたウテンの姿があった。

<ウテンVSガジル、戦闘開始>

「ギヒッ、丁度良い、ラクサスがどこにいるのか白状させてやる！」

「出来るかな？」

そう言ったウテンは、行動を起こした。

「イリユージョン！」

「!？」

ガジルは咄嗟に後ろにさがった。  
そして、ガジルがいた所には、ナイフが突き刺さった。

「(なっ!？いつの間にナイフなんか投げやがったんだ!?)」

ガジルは驚いていた。

「ふふっ 僕の魔法に驚いたかい？」

「何したか知らねーが、上等だ！」

ガジルは腕を鉄竜棍にして殴りかかったが、ウテンに当たる直前で  
何かに当たった。

「(と、届いてねえ!?)」

こいつバリアかなんか張ってんのか!？

「だったら、鉄竜槍・鬼薪！」

ガジルの手を槍に変えて連続で突きを繰り出した。  
だが、先程と同じ様に防がれた。

「(何だよこのバリアは!?)」

「無駄だよ。そんな攻撃、雑魚には通用しても僕には届きはしない  
!」

「!？」

「バミューダアスポート!!」

ガジルは咄嗟に鉄竜の鱗を展開させ、飛んで来た何かを防いだ。

「くそつ、また攻撃が見えなかった…」

「どう？僕達雷神衆に勝てる奴は…いないんだよ！」

次の攻撃に備えて身構えるガジル。

「ぶー」

ウテンがはずれと言わんばかりの発言と共に、ガジルの頭上には、巨大な鉄球が現れた。

「なっ！？どわあー！？」

間一髪避けたガジル。

「おいおい！？こんなモンどっから出しやがった！？」

「ふふっなんなら、鳩も出そうか？」

ポン

ウテンは手を出した後、シルクハットを出した。

「そうだ。次は胴体を真つ二つにしてあげようか？勿論、タネ無しでね」

「（遊んでやがるなコイツ…つかこいつ、宙に浮いてるから風の魔導士かと思ったら、バリアを張ったり、ナイフを換装したり、無え場所からモノを出させたり等…コイツの攻撃よく見えないぜ…）」

「じゃあ少し早いけど、ファイナーレだよ！閃光眼！」

ウテンのセカンドの魔法、フラッシュユアイズにより、眼から強烈な



光を発した。

「ぐっ!?!」

ガジルは思わず目を瞑った。

そして光が収まると、そこには、

「な、なんだこりゃ!?!」

ガジルがいる足場以外全部消滅し、その下には、針の筵になっていた。

「マジかよ!?!」

「ふふっ、僕は物を構成させ、創り出す魔導士さ」

「こんな事出来る奴がいたのか!?!これが雷神衆……」

「名残惜しいけど、最後のゲームを始めようか?ルールは簡単さ、君は二つの道を選ぶだけだよ。その場で髑り殺しにされるか?下に落ちて串刺しになるか?」

「(おいおい、こりゃ少し厳しいな…だからこそ戦りがいがある!)」

ガジルはどこか楽しんでいた。

「シンキングタイム」

ウテンの投げて来たナイフを避けながらナイフを食うガジル。

「(すっかり、コイツの魔法が解らねえとどうしようもねえしなあ…)」

その時、次の攻撃を避けた時に、  
バシャーン  
と音がした。

ガジルが給水用に買った水に当たった様だ。

「うをつ!？」

「ちつ外したか」

「たくつ、ん?(なつ、これは!?)」

ガジルは何か気付いた様だ。

「(ギヒツ、そーゆー事か、まんまと騙されたぜ!)」

「?何を考えてるかは知らないけど、大人しくやられちゃい」な  
んだ」つな、何!？」

ガジルの反応は雅に、手品を知った観客のリアクションだった。

「お前の魔法のタネ、解つたぜ。ギヒツ!」

「なつ!？僕の魔法のタネが解けただど!？だつたら証明してみろ  
!」

「ギヒツ、せーのっ!」

ガジルは、残つてた足場から勢い良く前に飛び出した。

「はっ!？や、止めるお、串刺しになるぞ!？」

普通足場の下に針の筵があると分かっているのに、飛び出す事は自殺  
行為でしかない。

だがしかし、ガジルは、

スタツ

と何も無い所で着地した。

「ああ…あ…あ…」

「やっぱな、お前は床を消したんじゃないねえ、見えなくしたただけだ！  
テメーの魔法は、物を透明にする魔法だ！」

「ぐう！？」

凶星を突かれたウテン。

つまり、ウテンの攻撃は、

ナイフや帽子や鉄球を創り出す 見えなくした物を見える様にした  
だけ

空中にいる 二階を見えなくしただけ

高速の攻撃 途中で見える様にしたから早く見えただけ

「や、やるね… けど何故それに気付いたの？」

「さっき水筒を壊しただろ？それで状況が変わったんだよ！オレの  
後ろ、お前から死角に飛んだ水の飛沫、消し忘れてたな！」

ガジルが水飛沫を指差した。

「し、しまったっ！？でも…それが何だと言うんだ！僕の魔法が解  
った所で、僕の勝ち揺るがないんだ！お前からの攻撃は効かない  
んだからな！」

「ギヒツ、そいつはどうかな？鉄竜剣！」

ガジルは右手を剣に換え、チェーンソーの様に刃を回転させた。

「喰らえ！」

「む、無駄だ、僕には鉄壁のバリアg…」

ズバン

ガジルが何かを斬り裂いた。

「ああ…あ…あ…」

ウテンがビビったのか、透明になってた部分が解けた。

「なるほど、それが鉄壁のバリアの正体って訳か」

ウテンのバリアは文字通りただの鉄の壁（窓付き）だった。

「ああ…あ…あ…」

ウテンはもう青くなっていた。

完全にガジルにビビっていた。

「意外とちゃっちい魔法だったな、三流魔導士君よう」

ガジルは鉄竜剣の刃を回転させながらウテンに近づいた。

「く、来るなあっ！？ぼ、僕は…僕は…ラクサス兄イの親衛隊の…  
雷神衆だあああ！？」

「残念、お前はここで終わりだ！」

「ウワアアアアアアアアアアアツ！！？」

ウテンは泣きながら命乞いをして、ガジルが斬りかかった。

ドゴン

いや、斬りかかったんじゃ無く、鉄竜棍で殴り、外へとぶっ飛ばした。

「ギヒツ、安心しな、殺しやしねーよ！…あっラクサスの居場所聞  
くの忘れてた！？」

<勝者、ガジル>

そしてガジルは、ラクサスを探しに行った。

サタン降臨(鉄竜)(ガジル)VS手品師(ウテン)(後書き)

セカンドの魔法の事忘れて書いてたものだから、書き直ししまくってました。

今回はギアスVSサテンの対決です。

サタン降臨↪妖精審判者（ギアセルシア）VS雷神衆最強（サテン）（前書き）

こちらもオリジナルです。サテンを雷神衆最強のポジションにしちやいました。

時期的には、サタン降臨後編↪激突！カルディア大聖堂辺りです。最初フリード、後からギアス視点です。

## サタン降臨！妖精審判者（ギアセルシア）VS雷神衆最強（サテン）

マグノリアのはずれ、フリードサイド

私は、ラクサスの命により、カナとファントムの女のジュビアの抹殺を行った。

しかし、ジュビアは自分が生き残るより仲間を生かす事を選んだ事に驚いた。

残ったカナが私に挑んで来たが、返り討ちした。

偶々近くにいたエルフマンとミラジェーンがそれを目撃し、エルフマンが挑んで来たが、ゲームに敗れた者が参戦する事は許されない！

だからエルフマンを、闇の文字・痛み・恐怖・苦しみ等を与え、最後に闇のエクリテュール・死滅を与えようとしたその時、巨大な魔力を感知したところ、ミラジェーンが叫んだ。

ミラジェーンを見たら、いつもの街娘の姿ではなく、悪魔の姿になっていた。

悪魔となったミラジェーン殴りかかり、私は咄嗟に闇のエクリテュール・翼を展開して避けたが、ミラジェーンも翼を出して飛翔し、攻撃を二度程避けたが三度目に蹴り付けられて橋に落ちた。

私は距離を取る事にしたが、いつの間にかミラジェーンは私の背後にいた。

「…………消す……」

「（こ…これが魔人ミラジェーンのテイクオーバー…サタンソウル！）」

<フリードVSミラジェーン、戦闘開始>

「ダークネス・ストリーム！」



ミラジェーンの放った闇の腕らしきモノをかわし続けたフリード。

「闇の……」

フリードがレイピアを振るおうとしたが、ミラに破壊された。

「くっ、禁じ手だが仕方あるまい……魔には魔を持って制す！闇のエクリテュール……」

私は自分の胸に、

「あんこく暗黒！」

と刻み、怪物化させた。  
しばらく攻防が続いた。

「イービルスパーク！」

「ゴアツ！？」

フリードはミラの電撃により洞窟へ落ちた。

「な、なんて魔力だ……噂には聞いていたが……これが本当に……あのミラジェーンなのか？」

「フン」

「だが、オレは負ける訳にはいかんだ！ウオオオオオオツ！暗黒の息吹いぶき……！」

フリードは、黒い竜巻を起こした。

怯んでるミラに追い打ちをかけるフリード。

「あんこくこうだん暗黒光弾！！」

ミラは川に落ちた。

「やったか？」

しかし、

「何だ、あれは！？」

ミラは川の水を操っていた。

「川の水を纏って…どれだけの魔力何だ！？」

「イビルエクスポーション！！」

川の水をそのままフリードにぶつけ、近づいて頭突きをし、魔力を溜めた。

「ソウル…イクステイクター！！」

「グアアアアアアツ！！？」

ミラの放つ闇の波動が、フリードを飲み込んだ。

この時、一瞬だが空が黒紫色に染まった。

そして地面に叩き付けられたフリード（暗黒から元に戻ってる）に近づくミラ。

フリードは今のミラに恐怖を抱いていた。

「フリードオオオ！」

「（か…勝てる訳が無い！？これが魔人の真の力！？）」

フリードを押さえ、トドメを指そうとしていたミラだが、寸止めをしていた。

「!？」

そして元に戻るミラ。

「な…なんのつもりだ!？」

「…こんな戦い…虚しいわね…」

「…勝者の驕りかミラジェーン…トドメを刺せ!」

カナと気絶したジュビアを抱えたエルフマンが来た。

「私達は仲間よ、同じギルドの仲間。一緒に笑って…一緒に騒いで…一緒に歩いて…」

「うるさい!オレの仲間はラクサス一人だ!」

「一人じゃないでしょ?フリード…貴方はとづくに気付いてるわ。一人の人物に依存する事の全てを…悪とは思わないけど…貴方の周りには、たくさんの方がいる。人と人は…いつでも繋がっている」

「!？」

ミラはフリードの手を握った。

「ほら…手を伸ばせば…こんなに近くに…一人が寂しいと気付いた時、人はやさしくなれるの。貴方はそれに気付いてる」

フリードは、ミラの言葉に涙を流した。

そうだ…最初から分かっていた…

「…こんな事…したく…なかった…」

「分かつてるよ。来年こそは…一緒に収穫祭を楽しもっ」

涙を流しながら微笑むミラ。

それを見ていたカナ達は、

「姉ちゃん…」

「敵わないねえ…」

ちよっぴり涙ぐんでいた二人だった。

<フリードVSミラジェーン、共に戦意喪失>

その空気を壊す一言が聞こえた。

「情けねえなあフリード」

「……!?!?!?!」

その場にいた者全員が声の聞こえた方に向くと、

「現役を退いたミラに負けるなんてよう」

「サテン!?!」

なんて事だ!?!雷神衆最強の男が来ているとは!?!

「けどまあ、後腐れねえ様にオレが相撃ちつて事に…」

サテンが拳を地面に殴り付けた。

「…しといてやるよ…」

その瞬間、地面が凍っていった。  
その場にいた全員は凍り付く前に避難した。

「ちよつとサテン、何してんだい!？」

「だってこつゆうゲームだろ?敗者はとつと消えろつてな!」

サテンは全員がいる方に構えた。  
まずい、あの態勢は!？」

「これで消えな!」

「まずい…皆!?!第四波動が来るぞ!?!」

「第四波動だつて!?!それじゃ逃げ場ないじゃないか!?!」

広範囲殲滅熱線魔法、第四波動!

それを喰らった者は良くて重症火傷、悪くて消し炭になる程の魔法、  
本気かサテン!？」

「第四…!」

この時ばかりは死を覚悟し、目を瞑った。

「波動—————!!」

サテンの熱線が放たれた。

いくら経つても痛みが来ない?

不審に思ったフリードは目を開けた。

そこにいたのは、

サテンの腕を上に向けて第四波動を反らせたギアスの姿だった。

サイドエンド

ギアスサイド

出られる様になった後真つ直ぐ俺の家（つか大聖堂ってギルドとは目と鼻の先じゃん）に行こうとしたが、紫の閃光が見えたのでミラとフリードとの決着が付いたみたいだな。

そっぴやフリードの術式覚えて無かったから覚えてから向かう事にした。

そして、そこで見つけたのは、サテンが第四波動を撃とうとしてる所だった。

やべえっ！？スピード！

スピードで加速したギアスは、第四波動を撃つ前に腕をアッパーで反らせ、第四波動は上空へと放たれた。

危ねえ、間に合った。

「ギアスか…」

「随分と危ねえ事してんじやねえか？サテン！」

サテンを蹴り付けるギアス。

「へへっ、やっぱオレの相手が務まる相手はお前くらいだなあ、ギアス！」

<サテンVSギアセルシア、戦闘開始>

「行くぞ！」

ギアスが先に動いた。  
ギアスはいきなり、

「ヴァルカンショック・イグニション！」

俺の想像通りなら、サテンはこれを吸収するはず。  
案の定吸収された。

「そんなものか？」

「なっ、炎が!？」

やっぱり吸収されたか。

「お返しだ、喰らえ!第四波動!!」

「うわっ危ねっ!？」

放たれた第四波動の跡は焼き焦げていた。

「うわっシャレになってねえ〜(棒読み)」

「さあ…最高のサビを聞かせてくれよ、お前の絶命の叫びでなあ!  
!」

怖えなそーゆうところは、

「ならこれでどうだ!メイデンリストラクション!」

これも読み通りなら、吹き飛ばす筈。

「フン、ストリームディスプレイオン！」

やっぱ吹き飛ばした。ん？

「身体が…痺れて…」

「動けない…」

あつ余波で周りに影響が…

「それにしてもお前、その魔法どーなってるんだ？」

「フン、教えてやんね」

「だったら…」

スピードでサテンに近づき、頭突きをかました。

第四波動…覚えた。

確かこの能力は、熱を奪ってから放つ能力だったな。

取り合えず最初は知らないフリして後から気付いたって事にしよう。

「つてーなあ」

「へっ、第四波動…覚えたぞ！」

「へえ」

外野にいる人達は、

「ギアスの奴、サテンの魔法を覚えたみたいね！」

「いけるわ！いくらあいつが強くて、ギアスのコピー魔法にかかれば！」

カナとミラが言っていたので期待感が出てますが、最初は空回りに



しますのでごめんね。

「行くぜ！因果応報、第四波動！！」

しかし、不発に終わった。

「えっ？」

「なっ！？」

「何い！？」

「バカな！？ギアスの魔法は、例え所有系ホルダーの魔法でも発動するのに！？」

「確かに覚えた筈！？」

「クツクツク：オレの魔法がどんなものか解らずに覚えても無駄だつて事さ。この魔法はオレにしか扱えねえ、諦めるんだな」

「くっ」

取り合えず悔しがる素振りを見せて、サテンにカンダタストリングを掛けて突進した。

「行くぜ！」

「フン、熱気眼ヒートアイズ！」

サテンのセカンドの魔法、ヒートアイズを発動し、サテンに纏わり付いている斬糸を見つめた。

やべっ、カンダタストリングが燃えちまう。

簡単に言うとはートアイズは、虫めがねで紙を燃やす事と同じ原理。そして燃えて千切れる糸。

「このっ、右手にリトルボーイ！左手に虹竜の聖拳！」

攻撃するギアスだが、受け止めるサテン。

「灼熱の爆撃も…炎をもぎ取られれば、ただの拳だな。それに…」

右手の炎は吸収され、徐々に凍りついていくギアスの左腕。

一応ドツベルゲンガーで表面だけ凍りつかせた。

「必要以上に近づくと、危険だぜ？」

「ぐあっ！？」

表面だけ凍りついてるとは言え、寒い。

「喰らえ！二重第四波動！！」

両腕から放たれる熱線がギアスを襲う。

取り合えず第四波動の熱エネルギー吸収で軽傷に済ませた。

「へえ、さすがギアス。ドラゴンスレイヤーは違うねえ」

さて、そろそろ疑問を答えよっと。

「どうかかな？」

「？」

「さっきお前に掴まれた時、光を纏った方は凍りつき、炎を纏った方は炎を吸収した」

「…それが何か？」

「解らねえか？何で光の方は凍って炎の方は炎だけ吸収したんだ？」

「……？」「……」

「！？」

「その気になりゃ両腕を凍らせる事だって出来た筈だ！何故炎は吸

収したんだ！」

核心突くギアス。

「つまり、お前の魔法は…熱を吸収して、それを攻撃エネルギーに変える変換魔法！それが…第四波動の正体だ！」

「！？」

「そうか、エネルギー変換魔法！そう考えれば納得がいく！」

フリードが納得した様だ。

「じゃあ何か、さっき凍らせたのは熱を吸収してたって事か？」

「でも、さっき引き起こした風は一体？」

「多分だけど、熱で小型の上昇気流を起こしたんだと思うわ」

エルフマン、カナ、ミラの順で解説していた。

「…よく解ったなギアス」

「理屈が解ればこつちのもんだ！さあ、判決の時だ！」

「ぬかせ！」

しばらく攻防が続いた。

「虹竜の聖拳（遠距離用）！」

「…それを待ってたぜ！」

サテンは虹竜の聖拳を受け止めた。

「なっ！？」

「ギアス、お前の光は7種類の魔法を混ぜていたんだっとな」

「まさか!?!」

驚いた!?! 虹竜の聖拳の中の火属性を吸収しやがった。てか吸収できたのかよ!?!?

そして、1種類分が抜けた所為か、弱くなった虹竜の聖拳は簡単にほっぽり捨てられた。これは素直に驚いた。

「いくらお前でも、至近距離でこれを喰らえばひとたまりもないだろっ?」

「くっ!?!」

そう言って近づいて来るサテン。

「俺は負けられないんだ!」

この時、俺の身体に変化があった。

目元と腕に鱗が出来た(ドツペルゲンガーを使った訳じゃない)。

この感覚、エーテリオンを食って力を使った時に似ている。

恐らくこれは、

ドラゴンフォース!

「消えな! 第四波動!」

熱線を放つサテン。

しかし、ドラゴンフォースになったギアスは、まだ諦めていなかった。

「負けられねえんだ! ウオオオオオオツ!」

ギアスの身体から、虹色のオーラが出た。  
そして身体から顔と腕が生えた（ゾロの鬼気九刀流、まきぎゆうとうりゅう阿修羅風）  
剣は虹竜剣。

ギアスはその状態で第四波動に挑み、

切り裂いた！

「バカな！？第四波動が、切り裂かれた！？」

「これでも喰らいやがれ！滅竜奥義…閃光玫天剣！！」  
せんこうぎゅうてんけん

ズバッ x 9

スピードを使つて、虹竜剣で9回切り付けた。

はたから見れば、超高速で切り付けたと思うほどに。

「グアアアアアアアアアツ！！？」

倒れるサテン。

「判決……死刑！！」

そう言つて腕を十字に切つた。

なんか久しぶりに決め台詞を言つた様な気が…

外野からは、

「「ギアスが勝つたあ！！」」

「やっぱりギアスは漢の中の漢だぜ！」

「サテンを倒すなんて…やはりギアスはすごい！」

ミラとカナ、エルフマン、フリードの順で感想を言った。

<勝者、ギアセルシア>

マグノリア、ナツ&ガジルサイド

「へっバトル・オブ・フェアリーテイル…」

とガジルが言い、

「残るはラクサス…ただ一人！」

とナツが言った。

## サタン降臨／妖精審判者（ギアセルシア）VS雷神衆最強（サテン）（後書き）

すみません：前半のフリードの方がマシな分、後半のギアスのバトルが微妙になってしまいました。

覚えた魔法

サテンの熱気眼ヒートアイズ

初登場の滅竜魔法

ドラゴンフォース滅竜奥義

閃光玖天剣せんこうきゅうてんけん

覚えたフラグメント

第四波動

今回は神鳴殿破壊イベントです。

## クワドルプルドラゴン（前書き）

本来はトリプルドラゴンですが、ギアスがいる事で3から4になり、クワドルプルを入れました。

しかし、トリプル以降の数の数え方って、案外知らないもんだなと思いました。



## クワドルブルドラゴン

マグノリア

雷神衆を全滅させたフェアリーテイル。

サテンとのバトルで思いつきり時間くっちゃまった。つか結局覚えそこなっちまたな術式。

今俺はミラ達を置いてカルディア大聖堂に向かっていた。

途中、ウテンが倒れてたのを見て都合が良かったので、覚えた。てかウテンで誰が倒したんだ？

ん？あそこにいるのは、エルザだ！しかも天輪の鎧を着て空に向けて剣を50本程出していた。

もう神鳴殿破壊イベントか！？急いで俺はエルザの所に向かった。

「エルザ！」

「むっ、ギアスカ！丁度良かった。スマンが手伝ってくれ、神鳴殿を破壊するぞ！」

「了解！」

私は直ぐにエルザに変身し、同じく天輪の鎧を着て瞬時に剣を100本近く出した。

エルザも丁度100本ほど出したその時、

『おい！皆聞こえるか？一大事だ、空を見る！』

「ウォーレン！？」

「これは…テレパシー念話か！？」

ウォーレンのテレパシーが聞こえた。

『くたばってる奴は、さつさと起きろ！まだケンカしてる奴は、とりあえず中止だ！よく聞けお前ら、街の上に浮かんでる物をありつたけの魔力で破壊するんだ！あれは、この街を襲うラクサスの魔法だ！時間が無え、全員でやるんだ！』  
「ウォーレン…お前、何故神鳴殿の事を？」

エルザは疑問に思った。

『その声はエルザか？無事だったか！』

「グレイ!？」

「そうか、お前が…」

知らせたのはグレイだった。

『エルザだって!？』

『石から戻ったのか!？』

『おいっ…エルザが無事って事は…』

『他の子達は…レビイは!？』

『皆無事よ、安心しなさい』

『ジユビアも大丈夫だ』

『ビスカも無事よ、アルザック』

『そ…そうか。よかった…本当に…』

他の子達が無事だった事に安堵する一同。

『済まねえ、オレのテレパシーはギルドまでは届かねえ、とにかく聞こえてる奴だけでいい！あの空に浮かんでいる物w』ウォーレン  
『ためえ!』なっ!？』

空気の読まない奴<sup>マックス</sup>が言い出した。

『オレに何したか忘れたのかよ?』

『マ、マックス!? あっあの時は済まなかったよ…だってエルザ達を助ける為に必死で…』

これを皮きりに、皆が不満をぶちまけた。

『ドロイドだ! 聞こえるかアルザック!』

『き、聞いてるよ…さっきはごめん…』

『ごめんで済むか! 不意打ちなんか喰らわしやがって!』

『テメエもだワカバ!』

『さすがにラキは許さないわよ!』

ケンカをおっぱじめた一同。

そこに 그레이が、

『ケンカなら後でやれえー!』

と言ったが、

『お前が言うなあー!』

『』

と返された。つかウオーレンの耳元で言うなよ、鼓膜破れっぞ。

『今は時間が無え! 空に浮いてんの壊せえー!』

그레이が叫んでもケンカは止まらなかった。

ギアスは注意をしようとしたが、



「北の200個は私とエルザがやる！」  
「皆は南を中心に、全部撃破を！」  
「一個も残すなよ！アイスメイク…ランス…！」  
『デモンブラスト…！』  
『ウオオオツ…！』  
『ハアツ…！』  
「行け、剣達…！」

それぞれがラクリマに向けて攻撃した。

そして、

マグノリアの空に、

円形の爆発が起こった。

街の人達は花火か何かだと思っただけらしい。

「やったか…」  
「だな」

ギアスは元に戻った。  
そして、





「よおギアス、今度はお前か？」

「ラクサス……」

「目障りだな……お前らも……エルザもミストガンも、ジジイもギルドの奴らも……マグノリアの住人も……全テ消工去レエエエー……！！」

ラクサスがそう叫んだ瞬間、辺りが光に満ちた。

「な、何だ！？このバカげた魔力は……！？」

「この感じ……ギアスの……！？」

「おいおいラクサス、それはマズイだろ……」

ラクサスが今やろうとしてるのは、

前にギアスが、

マスター・ジヨゼに浴びせた、

超絶審判魔法。

そう、

フェアリーロウ。



「そうだ！フェアリーロウだ！！」

そう言つて手に光を溜めるラクサス。

「マスター・ジョゼを、一撃で倒した…あの…！？」

「止せ…ラクサス！？」

尚も溜め続けるラクサス。

するとギアスは、

「…テメエはやり過ぎだ！」

そう言つてギアスも、手に光を溜める。

「ギアス！？お前も…」

「二つの…フェアリーロウ！？」

ギアスもフェアリーロウをやるうとしていた。

「ふはははっ！丁度良い！オレのフェアリーロウか？お前のフェアリーロウか？最強を決めるには最高のシチュエーションだ！」

二人は光を溜め続けてたその時、

「止めてえー、ラクサスー！」

レビイが来た。

「レビイ！？」

「バカが！？何しに来た！？」

レイビィはこの後、衝撃の言葉を発した。

「ラクサス、マスターが…マスターが…あなたのおじいちゃんは…  
危篤なの！」

「……?!?!?」「……」

ギアスは思わず、光を溜めるのをやめた。

「だからお願い、もう止めて！マスターに会ってあげてえ！！」

「き…危篤?…じっちゃんが…死ぬ?…」

「ラクサスう！」

しかしラクサスは無常にも、

「…丁度良いじゃねえか、これでオレがマスターになれる可能性が、  
再び浮上した訳だ！」

「……?!?!?」「……」

「ヤロウっ!?!?」

「ふははははっ消えるフェアリーテイルウ!!オレが一から築きあ  
げる!誰にも負けない、皆が恐れ戦く最強のギルドをなアアアッ!  
!」

「そんな…」

「お前は!?!…何で、そんなに…」

「フェアリーロウ、発動!!」

この時、

大聖堂を中心に、

マグノリアが、

光に包まれた。

## クワドルブルドラゴン（後書き）

覚えた魔法

フラッシュユアイズ

ウテンの閃光眼

覚えたフラグメント

バミューダアスポート

今回は決着とパレードです。

幻想曲（ファンタジア）（前書き）

ラクサス編決着、パレードもあるよ。

## 幻想曲（ファンタジア）

マグノリア、カルディア大聖堂

「オレは…ジジイを…超えた！」

ラクサスは歓喜に満ちていた。  
だが、

「……ゲホゲホツ」「……」

「なっ！？そっ、そんな、何故だ！？何故誰もやられてねえ！！？」

一撃必殺のフェアリーロウが効いてなかった事に驚愕したラクサス。

501

「あれだけの魔力を喰らって…！？」

「ギルドのメンバーも…街の人も、皆無事だ」

そこに現れたのは、フリードだった。

「フリード…」

「誰一人として、やられてはいない」

「そんな筈は無え！フェアリーロウは完璧だった！」

「それがお前の心だ！ラクサス」

「なっ！？」

フリードの言葉に驚愕するラクサス。

「お前がマスターから受け継いでいる物は、力や魔力だけじゃない！仲間を想うその心！フェアリーロウは、術者が敵と認識した者にしか効果が無い。言ってる意味が解るよなラクサス」

「心の内側を…魔法に見抜かれた…」

レヴィイが気付いた様に言った。

「魔法に嘘は付けないな、ラクサス。これがお前の本音と言う事だ」

「ち…違う…オレの邪魔をする奴は…全て敵だ…敵なんだ！」

まるで子供の我儘だなラクサス。

「もうやめるんだラクサス！マスターの所にいつてやれ」

「…じ…ジジイなんか…どうなつてもいいんだよ！」

ラクサスはまた力を溜めた。

「オレはオレだ！ジジイの孫じゃねえ！ラクサスだアアアアツ！」

ラクサスの悲痛な叫びを上げた。

「…皆知ってる」

ナツが言った。

「思い上がるなバカヤロウ…じっちゃんの孫がそんなに偉えのか？そんなに違うのか？そんな事如きで吠えてんじゃねえ！ギルドこそが、オレ達の家族だろうが…！」

「…テメエに…何が解ル！」

「何でも解つてなきや仲間じゃねえのか？知らねえから、互いに手を伸ばすんだろ！ラクサスー！ー！！」

「黙レナツウウウウツ！！」

ナツとラクサスが激突した。

えっ？お前が止めないのかって？確かに俺なら、今のラクサスを簡単に倒せる（俺の属性には雷があるうえに、ゴムだから効かない）けど、それじゃあアイツの心が納得しないだろうからな。だから原作通りにナツが止めないと。

ナツとラクサスは勢い余って、天井から外に出た。俺とレビィとガジルとフリードは急いで外に出た。

マグノリア、カルディア大聖堂前

二人は大聖堂の屋根に立った。

「オレノ前カラ消エローー！」

「お前はオレが止める！ギルドは死んでも渡さねえ！オレ達の、帰る場所だからー！！」

しばらく二人の猛攻が続き、ナツが吹き飛ばされた。

てか、ナツが吹き飛んだ所って俺の部屋じゃねえか！？後で時のアークで直そう。

「コノ死ニ損ナイガアアツ！」

更にラクサスはナツを踏み付けて蹴飛ばした。



「テメエ如キガオレニ勝テル訳…」

二人が戦ってるのを見ていたレビィ達、

「ナツ…」

レビィがナツの身を案じた。

「ギルドは…お前のモンじゃねえ…よおく考えろ…ラクサス…」  
「黙レツ！」

ラクサスは、手に雷を溜めた。

「雷竜の…ほろひげん暴拳…！」

それは、ゲーム版エネルの神の怒りの様な一撃だった。  
エル  
ヴァジュラ

「雑魚ガオレニ説教タア…100年早エヨ、ナア」

倒れるナツ。

しかし、

ナツは立った。

「ナツ!？」

それを見ていたレビィ達は、

「まだ…立つのか!？」

「もつやめて…ナツ…」

「ナツ…」

「ねえギアス、二人を止めて！」

やっぱ言われた。

でもなレビィ…

「ナツを信じるんだ！」

「でもお…」

そして二人の方は、

「ガキガア…跡形も無く消シテアルアアアアツ！」

「止せつ、ラクサス！今のナツにそんな魔法を使ったら…!?」

フリードが叫んだ。

「ハハハツ！雷竜方天戟らいりゅうほうてんげき！！」

ラクサスは、方天戟の形をした雷をナツに投げつけた。

「イヤアアアアアアアアツ！」

「やめろおおおおおおおつ！」

「ナツっ！」

レビィとフリードは叫んだ。

俺は後の展開が分かっているとはいえ、あの状況だとい声上げてしまっていた。

そして、ラクサスの投げた雷竜方天戟はナツに当たる直前で、直角に反れた。

反れた先は、腕を鉄に変えたガジルがいた。

「グオオオオオツ、ガハツ!？」

「ガジル!？」

「鉄?...まさか!?!自ら避雷針に...」

ナツを庇ったガジルは、

「...行けえ...」

そう言つて屋根から落ちた。

ナツは炎を纏った。

「ウオオオオツ!」

「オノレ...」

「火竜の...」

「オノレエエエツ!」

二人はまた激突したが、

「鉄拳! 鉤爪! 翼撃! 劍角! 炎肘!」

ナツが押して行つた。

その光景をみてたレヴィ達は、

「その魔法... 竜の鱗を砕き... 竜の肝を潰し... 竜の魂を狩り取る...」

「滅竜奥義...」

「それが...」

レヴィ、フリード、ギアスの順に言つた。

「紅蓮、爆炎刃!...!」

「グアアアアアアッ!!??」

ナツは、炎を纏った両腕を螺旋状に振るい、爆炎を伴った強烈な斬撃を放った。

「……」

「へっ……」

ラクサスが吹き飛んだ光景を見てた三人は声が出せない状態に、ガジルはどこか喜んでいた。

そして吹き飛ばされたラクサスは、屋根に落ちた。

「（ラクサスが…負けた…）」

フリードは心の中で思った。  
そして、

「ウウウウ、ウオオオオオオオッ!!!」

何を思ったのか、ナツは叫びまくった。

翌日、フェアリーテイル

色々ドタバタはあったけど、なんとか落ち着いてきたフェアリーテイル。

「ポーリュシカさんのおかげで、一命は取り留めたそうだ。安心してくれ…マスターは無事だ!」

エルザの一言で周りが安堵し、騒いだ。

「よかつた、一時はどうなるかと思っただけど」

「あのじーさんが、そう簡単にくたばる訳ねえんだ！」

「しかしマスターもお歳だ。これ以上心労を重ねれば、またお体を悪くする。皆もその事を忘れるな」

「……………あいさー！」「……………」

エルザの注意に皆は了承した。  
つてか何故返事がハッピー？

「でもこんな状況で、本当にファンタジアをやるつもりなの？」

「まあ、マスターの意向だしなあ……」

「こんな状況だからこそつて考え方もあるわよ」

ルーシイの疑問にギアスが答え、ミラが補足事項を言った。

「ジユビアも、ファンタジア観るの楽しみです！」

「フェアリーテイル自慢の大パレードって言うぐらいだしね」

「ミオも観てみたい！」

『楽しみ』

「アンタ等は参加する側よ」

「……………ええっ！？」「……………」

「……………そーゆー事！」「……………」

ジユビアと少女部隊は参加するとは思っていなかった様だ。

「でも……………だって……………ジユビア入ったばかりだし……………」

『さすがに私達は……………』

「ミオ出て良いの〜？」  
「その…私達なんかで大丈夫…でしょうか？」  
「困ってんのか喜んでるのか？」  
「どっちだありゃ？」  
「か〜わいい」

若干もじもじしてる四人とちやかすワカバとマカオとカナ。

「ま〜怪我人多いからね。まともに動ける人は全員参加だつて」  
「て事は、やっぱりあたしも…」  
「困ってんだか喜んでんのか…」

ルーシイの発言にグレイがちょっと呆れてた。

「まあ何だ、あんなの参加出来ねえからなあ」  
「…だね…」

ギアスが指差した方を向いて納得するルーシイ。  
指差した所には、重症患者を連想させる状態のナツとガジルの姿だった。

「…あんなのどこ言っつなよ」  
「ふおれふあふあふお（俺はやるぞ）！」

口まで包帯で覆われてるから、常人では何言ってるか解らないらしい。

「（あれ？ナツが何言ってるか解った様な？）」  
「何言ってるか解らないし」

ルーシイが突っ込んだ。  
でも何で解ったんだ？

「無理だね、参加出来る訳ねえだろクズが！」  
「ふおがふおがもごもごおご（お前もシユビドゥバだろーが）！」  
「それは関係ねえだろ！？鬼かお前は！？」  
「何で通じてるのかしら…？」

ルーシイは呆れてた。  
つか何で解るんだ俺？

「（でもまあ、これで…ギルド内のゴタゴタも、いったん片付いた訳だ）」

エルザは心の中で思った。  
その時、誰かが入って来た。  
ラクサスだった。

「ラクサス！」

「お前…！」

「ジジイは？」

「テメエ！」

「どの面さげてマスターに会いに来やがった！」

「……そーだそーだ！」「……」

ラクサスの前を遮るメンバー達。

「止さないか！」

エルザが止めた。

「奥の医務室だ」

「おっおい!？」

そう言われ奥に行くラクサス。

「ふぁぐぁぐー（ラクサスー）！」

ラクサスの前に出るナツ。

「ナツ…」

そしてナツは、

「ふふおんふふぐあふあんふぁぐあふあふあふぐあふあぐ、ふぐ  
ふおふおふえつふえふふふえ！ふふあふおふふふあふあぐあぐ  
（二対一でこんなじゃ話にならねえ、次こそはぜってえ負けねえ！  
いつか勝負しろラクサス）！」

何言ってるか解らずポカーンとして真っ白になる一応。  
つか何で解るんだ俺？

「フウー…フウー…フウー…」

ガジルが近くに寄った。

「通訳よろしく」

「二対一でこんなじゃ話にならねえ、次こそはぜってえ負けねえ！  
いつか勝負しろラクサス！つたとよ」

「って、勝ったんでしょ一応？」



「オレもあれを勝ちとは言いたくねえ」

「えっ？」

「あいつはギアセルシアと同じバケモンだ！ファントム戦に参加してたらと思うと、ゾツとするぜ……」

おいガジル、お前もかブルータス。

ラクサスはナツを素通りした。

「ふあぐあぐー（ラクサスー）！」

ナツの問いにラクサスはそっと手を上げた。  
それを見たナツは、どこか嬉しそだった。  
そしてエルザは、

「さあ皆、ファンタジアの準備をするぞ！」

「……………らーうー！……………」

今度はルシアの返事！？

そして俺達は、ファンタジアの準備に取り込んだ。

夕方頃、マグノリア、南口公園、ラクサスサイド

ジジイからフェアリーテイルから破門にすると宣言され、マグノリアを出て行く前に、雷神衆あいつらに挨拶に行かねえとな。  
そして雷神衆に事情を説明した後、

「冗談じゃないわよっ！？何で貴方だけ破門なの！？」

「そっだよ、ラクサス兄イだけなんて！？」

「オレ達だつて罪は同じじゃねーのかよ!？」（ネーノカヨネーノカヨ×5）

「…ジジイが決めた事だ」

エバーグリーン、ウテン、ビッグスローの順で不満を言った。やっぱりこいつら止めに来たな。でも、もう決めたんだ。

「だったら、私だつて辞めてやるわよ!」

「僕だつて!」

「オレだつて、お前がいなきゃよう…」

「…じゃあな…ラクサス」

「「サテン!？」」「「兄さん!？」」

サテン…お前くらいだよ、その一言が言えるのは…

「めんどくせえ奴等だな、サテンくらいだぞ、じゃあなの一言ぐらい言えねーのか?」

さつきから黙っていたフリードが、

「何で…一人で全ての責任を取ろうとする…」

「そんなんじゃないよ。お前らと違って、オレはこのギルドに何の未練もねえからな」

すると、

「私達が、マスターに頼んでみるわ!」

「きつと…ナツやグレイだつて反対してくれるって!」

「そつだよ、あいつら何だかんだ言つてラクサス兄イの事…」

オレはそつと後ろを向き、歩いた。

「ラクサス…」

「元気でな」

「ラクサス!？」

「ふざけんなよ!？雷神衆はどうなんだよ!？」

「ラクサス兄イのバカー!」

「ちきしょうつ…」

黙っていたフリードとサテンは、

「（また会えるよな?…ラクサス…）」

「（またな…大将…）」

ラクサスは、雷神衆と別れた。

サイドエンド

夜、マグノリア、ファンタジア当日

遂に待ちに待ったフェアリーテイル自慢の大パレード、ファンタジアが始まった。

やっぱ各地から色んな人達が来ているな。

ギルドの依頼で世話になった方や敵対してた連中等も観に来てくれた。

よく見たら屋根の上には、ガルナ島の人達がいた。

まず最初のパレードの行進の際、ミオたんがデカイ指揮棒を持って行進していた。

マカオとワカバがハート型の的を作り、カナがそれを射抜くアクションをした。

観客側には、ワカバの奥さんとマカオの息子のロメオが観ていた。芋虫のきぐるみを着たジエット、野菜のコスチュームを着たドロイ、その後ろにマックスとアルザック。

ルーシイとレビイとビスカとセツナとクチナシは、旗を使ったパフォーマンスを披露していた。

観客側には、エバルーの件で知り合った（俺は会った事は無いけど）カービイ・メロン夫妻と、アカネビーチにいたきぐるみのオッサンに、アイゼンヴァルトのカゲヤマとカラツカ（この二人は改心したからここにいいのか？スーツ着てるし）。

エルフマンがビーストソウルで迫力ある演出をし、後ろにあった花で出来た塔の中からミラが出てきた。これを分かりやすく例えると、雅に美女と野獣の様な感じだった。

が、ミラの天然が災いしてしまった。変身するから蝶の様な羽を生やすのかと思つたら、巨大なトカゲに変身して、エルフマンが仰天した。

観客も啞然としていた。

王子様のコスチュームを着た 그레이が氷の城を創り、お姫様のコスチュームを着たジユビアが水の演出を行い、そこに 그레이が FAIRY TAIL という氷の文字を出した。

観客側にいる リオン、シエリー、ユウカ、ドギーがいた。

エルザは、パレード用の鎧で剣のパフォーマンスを行っていた。そして踊り子の衣装に換装した。

観客側で観ていた ショウ、ミリアーナ、ウォーリー、シモン、テルヤマがいた。

ナツは黙々と行進していき、炎を吐いて FAIRY TAIL を出すようにしていたが、 FAIRY... の所でむせた。

観客側は、酒飲んで出来あがってるボラとアイゼンヴァルトのオニクって言うてる奴、ファントムの子と坊主頭の奴

(つかこいついつまで割れたサングラスしてんだ?)。

いよいよ俺はというと、女になって神時代のガン・フォールの格好にエーラで宙を舞い、そして何も無い所に着地した。

すると、着地した所から実体化し始めた(バミューダスポーツで隠していた)、竜の形をした台座が現れたと同時に男に戻り、姿は竜人モード(顔は元のまま)になり、それぞれの属性でFAIRY TAIL×8を作った。

最後はマスターが出て来た。つか腕をチャカチャカ振るのって妙だと思っるのは自分だけか？

そして、皆が右手を上げて、握り拳の状態で親指と人差し指だけ伸ばしたポーズを取った。

そのポーズの意味は、昔ラクサスがマスターの場所が見えなくても、自分はいつもマスターを観てるという証のポーズ。

今回のこのポーズは、「例え姿が見えなくとも、例え遠く離れていようとも、ワシはいつでもお前を見てる、お前をずっと見守っている」というメッセージでもある。

一瞬だが、涙を流していたラクサスを見つけた(都合良く)。

俺はヘルズイヤーで聞いてみたら、

「じーじ…ああ、ありがとな…」

そして誰かが叫んだ。

「オレ等は、フェアリーテイルの魔導士だー！」

ああ、俺達はフェアリーテイルだ！

## 幻想曲（ファンタジア）（後書き）

アニメオリジナルのラクサスの技である雷竜の暴拳は、どこ探しても資料になりそうなのが見つからなかった。

ラクサスの雷竜の暴拳についての感想が、これしか思い付かなかった。

ナツの意味不明な台詞は、勝手に考えちゃいました。

次回は日常編です。記者と惚れ薬騒動です。

運命の出会いの日々特別依頼。気になる彼に注意せよ！（前書き）

久しぶりです。

やっぱり三作品同時に書くのって時間かかりまくりだね？

運命の出会いの日々特別依頼。気になる彼に注意せよ！

フェアリーテイル

ファンタジアは大好評に終わった。

でも、ラクサスをクビにした事にナツが不満をぶつけた。

マスターはラクサスの事で引退しようと思っていたが、坊主頭になったフリードの説得で考え直したらしい。

雷神衆の方も皆と打ち解けて来たみたいだ。

エルザはミストガンの事で悩むようになった。

あれから一週間、ルーシイの方は…、

「家賃ゲットならず……ああ……！！？」

どうやらミスコンで優勝出来なかったようだ。

そつえば俺の順位は？

1位、ギアセルシア

2位、エルザ

3位、ルーシイ

………えっ、1位！？マジかよ！？

ギアスは、50万Jをゲットした。

ちなみに使い道は、チームの皆に10万ずつ配った。

ルーシイが泣きながら礼を言った。

更に困った事に、最近街中で男達に囲まれて、





「うふふ。知らなかったの？」

ミラが来た。

「今日、週刊ソーサラーの記者さんがうちに取材に来るのよ」

「えっ、ええー！ー！ーっ！！？」

そういえば今日は記者が来るとかどうとか言ってたな。

でもグラビアって少女幼女が出ていないからどうでもいいんだけどな。

「なんとお、週サラ（週刊ソーサラーの略）！？」

「フェアリーテイルを特集するですって」

その後、ルーシイが黒い笑顔をしていた。

さすがのミラも引いていたしな。

ナツ達もなんかルーシイをイタイ子を見る様な目で見てるしな。

「ごうしちやいられない！！」

ルーシイは全速力で出て行った。

「なんだありゃ？」

「何か…気合入ってたねルーシイ…」

「別に無理して着飾なくても、普段通りにしてりゃ楽になのにな」

「ギアスは週サラには興味ないの？」

「別にそこまでじゃないけど、無理に良い所だけ見せてもそのうちボロが出るんだし、どうせ恥かくなら自分らしくしてた方がずっと良いしな」

「へっ、ギアスは自然体なのね」

「まあな」

とか言ってる内に時間が過ぎ、ルーシイが戻って来た。整えて来るつもりが普段通りな感じで来ちゃったようだ。

「オウーーーーー！ティターニア！！」

「ん？」

「やっべ、本物だ！クール、COOL、クウール！！本物のエルザじゃあん！！クウウール！！」

今来たのは週サラの記者のジェイソン。

つか暑苦しくてテンションマジ高っ！？

その後、エルザはいつもの鎧姿になっていた。

「これでは普段のままではないか…折角のドレスアップが…」

「ノープロブレム！こーゆー自然体を期待してたんですよ！」

「なっミラ、言った通りだろ。自分らしくしてた方が良いつて」

「そうだね」

その後ルーシイは、自分を見てほしいアピールをし続けるが、スルーされっぱなしだな。

つかエルザ、バニーって何だバニーって！？何でそれが一番のお気に入りに入り！？

その後、ハッピーを取材してて、ルーシイは嘆いてた。哀れ。

そしてグレイ、ジュビアに取材しに行き、ナツが出てきて、記者を殴った。

でも殴られた記者はものともせず記録を続けた。すごいプロ根性だ。

次にエルフマンに取材、返答はもちろん漢の一言。

シャドウ・ギアは三角関係を質問にドロイとジェットがノーコメント

トの一言を言っただけだ。  
カナはグラビアの催促だが、それよりも酒らしい。  
すると、俺の所に来た。

「フェアリージャッジメントのギアセルシア！貴方にとって、少女とは？」

「愛する者だ！」

と即答したら、COOLと返された。

そしてマスターの所に行った記者。

緊張の為か、かなり嘘っぽい事を言う。

その後雷神衆、ラキ、少女部隊、マカオとワカバの所に行っていた。  
若干涙目になってたルーシイは、突然バニーの格好で出てきた。

「皆あー、注もーく！あたし歌いまー」歌なら俺だ！シユビドウ  
バー！「！？」

「ガジルーーーーッ！！？」

「またお前かーーーー！！？」

折角のルーシイの出番が遮られた。  
当然記者はガジルに夢中になった。

『ふう〜、正しいモンが馬鹿を見るこの世界で、お前はいつも…馬鹿をみていたよな。それってつまり、バカは正しいって事だろ？おい相棒、聞こえるかい？俺の魂の歌が！』

最初のふう〜はハーモニカです。

「うっせーガジル！」

ガジルが歌い始める前にナツがぶっ飛ばした。

「て…メエ…」

「下手な歌唄ってんじゃねえ！俺はこいつに用があるんだよ！」

ここから先はいつもの通り、ナツとガジルのケンカが始まった。

何が気にいったのか、取材をし続ける記者。

そしてナツとガジルにぶっ飛ばされる記者。

「と…突撃レポ…ダゼ…くう…」

「プロだね…」

ハッピーとルシアが突っ込んだ。

数日後、雨の日のマグノリア、ある魔法薬の店、ジュビアサイド

「しんしんと…」

ジュビアは待ってるだけじゃダメだと思って、呪いに頼ってみますわ。

ジュビアは店に入り、店主に事情を話した。

「ほう…何とかして振り向かせたいか。そんな都合の良い代物あったかねえ？」

「ただ、ジュビアを見つめてくれるだけで良いのです。しんしんと

…」

「まあ、呪い程度なら無いとも言えん」

店主は、怪しげな瓶を差し出した。

「ほれ、これを使ってみなさい」

「これは？」

ジユビアがその瓶を手を取った。

「熱い視線で見つめてもらえる呪いの薬だよ。6万」

「お高いのね」

「おっと、値切るんなら売らないよ。効き目は完璧なんだからね」

「完璧…熱い視線…どんなお呪いなのでしょう？」

「うむ、瓶の中身をふうと飛ばして、意中の相手に飲ませるんじや。すると相手にアンタの熱い想いが届くかも…という呪いよ」

「お支払いしますわ！」

「まいど…」

ジユビアは店を出た。

「しんしんと…」

これで 그레이様はジユビアと…。

これが、フェアリーテイル崩壊の危機を招く事になるうとは、まだ、誰も知る由も無い（ギアスを除く）。

フェアリーテイル、ジユビアサイド

그레이様…ジユビアだけに熱い視線を…ああ…緊張しますわ。手が震えてしまいますわ。ああ…ダメ…。

結局この日は何も出来ずに一日が終わってしまったという。

マグノリア、ルーシイの家の近くの土手、ルーシイサイド

「まったくミラさん、変な事言わないで欲しいな」  
「ぶぶ…」

何故ルーシイが不機嫌かと言うと、先程ギルドにいた時に、ミラに言われた事だという。

『ルーシイとナツって、お似合いだと思っただけだな』

との事だという。

ルーシイの家、ルーシイサイド

色々考えてるうちに付いた。

「ただいま…って!?!」

「よう」

「また勝手に人ん家ー!?!」

またナツがあたしの家に来てるし!?!

「実はちょっと、大事な話があつてさ」

「ホント、アンタあたしん家「好き」ね…なっ!?!」

ふとミラの言った事を思いだすルーシィ。

『ナツはルーシィの事、好きなのかもね』

ルーシィはそれで意識してしまった。

「か…帰って…」

「ん？っーか話…」

だ…大事な話って…。

「帰ってー!?!」

「うおっ!?!何だよ、機嫌悪いなあ…」

「ドアから出てっー!」

窓から出て行くナツ。

「…ヤダ…何よこれ…」

一人になって急に恥ずかしさが出てきたルーシィだった。

翌日、フェアリーテイル、ジュビアサイド

最近仕事してないナツに怒るグレイにより、二人はケンカを始めた。

「（グレイ様…昨日はドキドキしてしまっただめだったけど、ジュビア…今日こそ決行します!）」



ジュビアはギュッと瓶を握りしめた。

「（ああ…グレイ様、相手にされなければされないほど、燃え上がるのが恋！近づけば近づくほど、ジュビアじれったい！）」

回想シーンに突入しながらトリップするジュビア。

「（でも、それも遂に今日で終わる！今日からは、ジュビアとグレイ様は、相思相愛の完全な恋人同士に！いや〜んですわ）」

悶える様に体を震わせるジュビアだった。

ルーシイサイド

「あ〜！こんな事してる場合じゃねえ！」

「どういふ意味だコラ！」

この二人はいつまでケンカしてるのかしら。

ふとルーシイは、ウォーレン達がいる所に目が入った。

「ナツの奴、最近好きな女が出来たらしいぜ」

「えっ、あのナツが？」

「まさか〜」

「冗談、そうゆう話なら一番遠い所にいる奴だろうよ」

ウォーレン、マックス、マカオ、ワカバの順で言った。

ワカバの言ってる事は、死んだとされてるリサーナの事だという。

「本当だって、二つと二何時も、会いてえ会いてえって言うててさ」

「誰に？」

「さあ？」

「どつしどつしどつしよ、あたしだー！ー！ー！？」

ルーシィはドキドキしながらぎこちない足取りで歩いていた。

「べ、別に嫌いじゃないけどね…好きとかお付き合いするとかそうゆうのはちょっと…あつても、あたし男の子と付き合った事無いし…」

すると、

『会いたい！』

ルーシィの妄想の中で、かなり美化したナツが言った。

しかも、自分とかなり美化したナツが抱き付きながら歩いてる妄想をした。

「（勝手に妄想するんじゃないわよあたしってば~~~~~!!?）」

すると、ナツがルーシィを呼んだ。

「なあルーシィ」

「!?!?は…はい…?」

「今日の夜、大事な話があるんだけど」

ルーシイは心の中で叫んだ。

「南口公園のソラの木まで来てくんねーかな？」

「な…な…何で？」

するとナツが、

「大事な話なんだ！一人で来てくれよ」

照れながら言った。

「（赤…赤く…ナツが赤くなった！？）」

「じゃー！」

ナツは走りながら出て行った。

「（これって…もしかして…告白！？）」

ルーシイは一気に赤くなった。

「み…ミラさん…あ…あたし…今日はもう…帰る…」

「？」

ルーシイは煙が出るほど照れながら出て行った。

ギアスサイド

照れてやがんなルーシイは。

ルーシイの行動を見ていたギアスは、にやけていた。

「まっ、どうせ空回りな展開に…ん？」

なんか口に入った様な…はっこれって!?

その時ギアスは正気を失い、怒りに満ちていた。

ジュビアサイド

「（この呪いの魔法薬でグレイ様に飲ませようと狙いを定めていましたけど、グレイ様が動き回るから周りの人達が飲んでしまわれていますわ。グレイ様、お願いだから動かないで下さい。このままではジュビア、皆から熱い視線を…そんな修羅場いららないのに!）」  
そしてジュビアは、更に気合を入れてグレイに狙いを定めた。

「（グレイ様アアアアツ!!!）」

「ふあ…ん？」

「（やったあ!!!）」

遂にグレイの口に入った。

「お??」

グレイは、ある人物に集中して見てた。

「何だ?この気持ち…」

「（遂に…遂に、ああ〜グレイ様の、熱い視線が…）…って、え

っ？」

グレイはジュビアを通り過ぎた。

そして、グレイの行き先は、ハッピーがいた。

「いつつも…いつつも自由気ままに空を飛びやがってえ！」

「あい！？」

「俺は強えが空は飛べねえ！お前は弱えが空は飛べる！だから実力は同じ！！ハッピー、お前は俺のライバルだあーっ！！」

「うえー！！！？」

フェアリーテイル崩壊の時が来てしまった。

三人称（主にウォーレンとマックス）サイド

「俺は強えが空は飛べねえ！お前は弱えが空は飛べる！だから実力は同じ！！ハッピー、お前は俺のライバルだあーっ！！」

「うえー！！！？」

グレイは意味不明な事を言い始めた。

「何言ってるんだグレイ？」

尚もハッピーにケンカを売り続けるグレイ。

「どうなってんだこりゃ？」

「さあ？」

すると、あちこちでいざこざが出来ていた。

「ワカバ…先月いくら稼いだ？」

「へっ、お前よりは多いと思うぜ！」

「俺がテメエに負ける訳が無え！」

「お前にだけは絶対負けねえ！」

「俺達つて、どうゆう関係だっけ？」

「そりゃあライバルに決まってんだろうが！」

「へっへっへっへっ…！」

マカオとワカバがいがみ合っていた。

「酒は飲んでも飲まれるな！おい酒！ワシは貴様にだけは負けんぞ！貴様こそワシのライバルじゃ！」

「酒がライバルつて、どうゆう事っすか？マスター…！」

「酒つて人じゃないし、ライバルとかありえねえだろ…！」

「飲まれはせん、飲まれはせんぞ！勝負じゃ！んごごごごっ！」

酒をライバル視してがぶ飲み（思いつきりこぼれてる）するマスター。

するとそこに、

「マスター、飲み比べだよ！一度アンタに挑もうと思ってたんだ！」

「ワシのライバルはお前などでは無い！まさに酒そのもの！」

「負けないよ！あががががっ！」

カナはマスターをライバル視してたが、マスターに一蹴された。

一方マカオとワカバは、

「数え終わったかライバル？」

「当然！しかもライバルのお前より、早くな！フツ、相変わらず詰  
めが甘いな」

「こ…この野郎…俺としたことがっ！？」

「せーので行くぜ」

「来やがれ！先月稼いだ金額は…」

「せーの…占めて15万J！！」

引き分け。

「…同じだと！？先々月で勝負じゃあつ！！」

また計算し直す二人だった。

「3人と3人、例え人数が同じでも、実力まで同じと思わないでよ  
！」

「フェアリーテイルで3人組って言ったら、あたし達だけなんだか  
らね！勝負する？」

「私たち少女部隊と貴方達シャドウ・ギア、どちらがフェアリーテ  
イル最強の3人組か、決着を付けましょう！」

「あたし達の実力を見て驚かないでよ！」

「なんの！」

「ほわちゃ〜！」

「（ポーズ対決かよ…）」

セツナたち少女部隊と、レヴィたちシャドウ・ギアの妙なポージン  
グに突っ込むウォーレンとマックスだった。

「うおおおお、ロキイイイイツ！テメエは俺が倒す！俺のライバ  
ルはお前なんだ！出て来おおおい！！」

「どうしたのギアス！？さっきから変だよ！？」

「つーかギアス、何でロキをライバルに？」

「てつきりラクサスかエルザ辺りかと…」

「奴は俺好みの美女たちをいつも掻っ攫って行ったんだ！少女たちにモテるのはこの俺だ！だから俺のライバルはロキなんだあ！！」

「（ひがみかよ…）」

「ひがみだね…」

ギアスは一時期、ロキが少女幼女までモテてる事にムカついた時期があつたかららしい。

ルシアは突っ込んだ。

すると、

「漢の中の漢、俺のライバルであるギアス！今こそ俺と真の漢をかけて勝負だ！」

「俺のライバルはテメエじゃねえ、ロキだ！引っ込んでろ！」

「そうはいかん！俺の漢とお前の漢は戦いたがっているんだ！勝負しろ！」

エルフマンがギアスをライバル視していた。

しかし、ギアスはロキをライバル視してた為に見事に堂々巡り状態になっていた。

「その柱！何故いつも私の行く手を阻む？私はいつもここをすんなり通りたいたいと思っているのに、何故だ！？何故この私に勝負を挑む？私のライバルだとでも言うつもりか！」

「いやいや、柱がライバルって無いから、さすがにそれは無いから…」

「まだ酒は何となく分かるが、柱は無い柱は…」

「人柱なら分かるけどね」

「いや、それも違うから」



ハッピーの意見に突っ込むマックス。

「エルザ！久しぶりに昔みたいに勝負よ！絶対に負けないんだから！エルザこそ、私の生涯をかけたライバルよ！」

「待てミラジーン！お前のライバルはこの俺、サテンだろうがよ！」

「兄さん、どうしちゃったの！？様子がおかしいよ！？」

エルザは柱、ミラはエルザ、そしてサテンはミラにライバル視していた。

必死でサテンを止めようとするウテンもいた。

「どうなっているんだ？」

「何だあこの状況は？」

「皆変ねえ」

雷神衆はサテン以外無事みただった。

「換装…天輪の鎧！ハアツ！セリヤアツ！」

「エルザ止めろって！？」

「折角新しくなったのに、壊すんじゃねえよ！？」

「黙れっ！こいつは常に私の前に立ちはだかるのだ！直ぐに奥に行きたい時など特に腹が立つ！こいつを迂回しなければ、奥にいけななのだ！私の目の前に常に立ちはだかるこの柱こそ、即ち私のライバル！」

「いや、ちょっと避ければいだけだから…」

「どんだけ真っ直ぐ好きなんだよ…」

「エルザって、あんまり前見て歩いていないからね」

「違うだろ」

柱に対して猛烈にライバル視するエルザ。  
またハッピーの意見に突っ込むマックス。  
するとミラが、3人を邪魔だと言わんばかりにぶっ飛ばした。

「エルザ！私と勝負しなさい！貴女のライバルはここよ！」

「違う！お前のライバルはこの俺だ！」

「今私は、生涯のライバルと向かい合っているのだ！」

「いや、ただの柱だから…ね」

「くくく、信じらんない！サタンソウル！」

「止めるって！！？」

「換装、煉獄の鎧！」

「だから止めるって！！？」

「やま〜ね〜こ〜ポ〜ン、パンチ！！」

「何でー！ー！！！！？」

「第四：「それだけは止めてえええっ！？」」

魔人化したミラにぶっ飛ばされるウォーレンとマックス。

サテンが第四波動を撃とうしていたが、ウテンが必死で止めようとしていた。

「ウオオオオツ！ロキどこだあああああっ！ドラゴンソウル（勝手に命名）！！」

「真の、漢おおおおっ！！」

「邪魔だあああああっ！！」

ギアスは人型の竜に変身し、エルフマンはビーストソウルで変身したが、ギアスにぶっ飛ばされた。

「だ…だめだ…」

「ギルドが…また…壊れちまう…」

カオス混沌になってるフェアリーテイルだった。

ジユビアサイド

グレイ様がハッピーに飛ぶ対決を行おうとしていた。それにしても…ジユビアじれったい！もっまじなと呪いを！ジユビアはもう一度グレイに呪いまじなを飲ませた。するとグレイは、ものすごい勢いで湖の淵へと進んで行った。

「（飛べ…俺…！）」

その後、みつともなく湖に落ちたグレイだった。

南口公園、ソラの木、ルーシイサイド

「（平常心…そう平常心、落ち着いてルーシイ…）」

たつぷりとめかし込んだルーシイは、ナツが待っているソラの木まで来た。

「おーいルーシイ！」

「はっ…はいつ…!?」

呼ばれてびっくりするルーシイ。

「(どじりむじりむじりしよう、あたしって…押しに弱いのも…)」  
むっく…むっく…

「(へっ?)」

告白って時に妙な音が聞こえてきた。

「遅えーぞ！早くメイド出してくれや」

「へっ？」

「なんつったつけ？ホラ…ああバルゴだ」

ナツは地面を掘りながら言った。

「この土、固えのなんのって、あの星霊メイドじゃねえと掘れねえよ」

ルーシイは啞然としていた。

「あ…あの…大事な話…って…」

ナツは周りをキョロキョロした。

周りに誰もいない事確認したナツは小声で言った。

「ここにお宝が眠ってるらしいんだよ。何でもフェアリーテイルの皆の恥ずかしい写真を集めたアルバム何だってよ。昔じっちゃんが隠したんだって、なっ楽しみだろう」

笑顔で言うナツ。

「あ…あの…最近好きな女の子が出来たって…」

「はあ？」

「会いたい会いたいって言ってたって…」

「？別に好きでも嫌いでもねーけどバルゴの事かな？だから、あいつに穴掘ってもらおうと思って」

「穴って…穴って…穴って…」

ルーシイの中で何かが崩壊した。  
そして、

バチイーンツ！！

「ぬおわあああああぁあぁっ！！！？」

ルーシイは思いっきりナツにビンタした。

「お…おお…??」

ナツにビンタした後、走り去るルーシイ。

「（あたしってば…バカ過ぎるーーーー！！！！）」

以上、残念なルーシイでした。

三人称（主にウォーレンとマックス）サイド

ようやく正気に戻ったギルドの皆。

「一体：何があつたんだ？」

周りも訳が解らずにいた。

「（良かった…）」

ウォーレンとマックスは、心の底から安堵した。

フェアリーテイル、裏の湖、ジユビアサイド

湖に落ちたグレイを助けたジユビア。

「ん？俺、どうなつたんだ？」

「良かった。ご無事で…」

「どうえきてえるう」

「何か冷てえと思つたら、俺を水浸しにすんじゃねえよ。いつも言つてんだろ」

ガンとショックを受けるジユビア。

「ん？どうしたよ？」

「やっぱり、もどかしい…もどかしいから、ジユビア…」

するとジユビアは、

「呪まじないに走りますう！！」

魔法薬を無理矢理直接グレイに飲ませた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」  
「ジュビアはここです!」

しかし、

「その水平線!」

「えっ!?!」

「テメエが俺のライバルだあああああああつ!!!」

水平線の彼方まで走って行くグレイ。

「グレイ様…待って…」

「やっぱり飛べないものは飛べないんだね…」

ルーシイに続いて、残念なジュビアだった。

数日後、フェアリーテイル、ルーシイサイド

ルーシイはだれていた。

「あゝ暇〜」

「ねえルーシイ」

「はい?」

「私…思っただけど、グレイってルーシイの事、好きなんじゃない?」

「もっ…勘弁して下さい…」

「?」

ミラは分からずにいた。

別の魔法薬店、ジユビアサイド

ジユビアは懲りずに別の魔法薬の店に来ていた。

「なあに？両想いになる呪文？無いよそんなモン」

魔法薬の店主はあさんに一蹴された。

ガルナ島、グレイサイド

一方、グレイは、

「つかよう…何で俺はこんな所にいんだよう…」

「月の呪いですじゃ！」

ガルナ島まで走って来てしまっていた。

余談だが、島中の女の子にモテたという。



**運命の出会いの日々特別依頼。 気になる彼に注意せよ！（後書き）**

ギアスはロキをライバル視させました。

ギアスのドラゴンソウルはテイクオーバーじゃなく変身です。

最近また新しいのを書こうと思うのだけど、皆さんはどれがいいでしょうか？

候補1 ブレイブフェンサーオ人伝（武蔵伝）

内容 ゼロの使い魔のサイトが、ヤクイニツク王国に召喚されて、ル・コアール帝国と戦う事になる。ムサシの替わりにサイトが出ます。

候補2 ブレイドマスターオ人伝（武蔵伝？）

内容 ゼロの使い魔のサイトが、ミスティックの姫に召喚されて、ガンドレイク社と戦う事になる。ムサシの替わりにサイトが出ます。

候補3 番長と1/2と音楽の御使い（真・恋姫無双）

内容 三人の転生者が恋姫の世界で戦います。蜀に金剛番長の能力を持った者、魏に乱馬の技と体質を持った者、呉に楽神アルモーニカを連れてる者が出ます。

（作者がサンデーの中で好きな作品を選びました）

候補4 ラウルとアデルとギアスが真・恋姫無双の世界に！？（真・恋姫無双）

内容 作者権限で恋姫の世界に飛ばされたオリ主達の戦いが始まる。誰が何処に行くかはまだ決めてません。

候補5 バカとテストと天元突破（バカとテストと召喚獣）

内容 バカテストとグレンラガン（紅蓮学園）のコラボでやりまし

た。

候補6 バカと女装と特殊メイク（バカとテストと召喚獣）

内容 特殊メイクが得意で、親の環境で女装趣味に目覚めた転生者が、バカテスの世界でどうなるか？

候補7 ゼロのロストマジック使い（ゼロの使い魔）

内容 フェアリーテイルの煉獄の七巻属が使うロストマジックが使える転生者が、ルイズの使い魔になる話。

候補8 失われし魔法使い（魔法先生ネギま）

内容 フェアリーテイルのロストマジックが使える転生者が、ネギまの世界で活躍する話。

と考えています。

今回は、ラブ&ラッキーの事です。

LOVE & a m p · L U C K Y (前書き)

短いです。

今の所新作候補は、

ゼロのロストマジック使い 3票

ブレイブフェンサー才人伝 1票

失われし魔法使い 1票

となっています。

# LOVE & amp · LUCKY

フェアリーテイル

静かな日々が続いています。

偶に一人（ルシア抜き）で仕事行ってる時もありします。  
で帰って来た時にちょっとしたイタズラ心で、トシトシの実の能力  
を使って、女の子達の年齢を10歳近くに下げた。

「きゃあーーーーっ!!!?」「」「」  
「何コレーーーーっ!!!?」「」「」  
「なんじゃこりゃーーーーーーーーっ!!?  
?」「」「」「」「」

ギルド内が騒然としていた。

おおーーーーー!! 美女達がテンコ盛りだ! 楽園だ! 真の楽園がこ  
こにあるー!!

「あれ? 何これ!?!」  
「れ、レビイが…子供に…」  
「か、可愛い…」

ジェット、ドロイ、ようやく分かったか少女の魅力が。

「び、ビスカが…」  
「アル…どうなってんだいこれ?」  
「解らないけど…可愛いな」

アルザックも分かって来たか。

「あらあら」

「み、ミラちゃんが…子供に…」

「不思議ね」

子供になってもいつも通りだなミラは、ワカバはすごく残念がってるみたいだが、どこが嫌なんだ？

「エバ…どうした…」

「ガキになってんじゃねえかエバ？」

「知らないよ！でも、妖精になってると思えばいい気分ね」

「「おいおい…」」

エバーグリーンはどこか嬉しそうだな。

「ジュビアも…子供に…」

「私達も…」

「皆ミオみたいになってるね」

『何故ミオだけ変わらない？』

「元々子供だから変わらなかつただけでしょ」

ああ…美女達が戯れてるう。

「よ…鎧が…」

「酒がまずくなってる…」

「エルザが…鎧で埋まってる…」

「つかガキになっても飲むなよカナ」

うんうん、そんな二人も良い！

「ちょっと、どうなってるのよ〜!?!」

「ちっせえな〜ルーシィ」

「ってナツ!何かしてよ!」

「いや、何すりゃいいんだよ?」

ルーシィも可愛くなっちゃって。さて、そろそろ登場するか。  
ギアスが入口に立った。

「ふふふ、ははははは!俺は神の力を手に入れた!」

「「「「「「「「「「「ギアス!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

やべ俺、中二病的な発言をしちゃったな。

「つかお前の仕業か!」

「ああ俺だ」

「何だよ!?!」

ちよつとしたイタズラ心でなんて言えないしな。

「仕事先で年齢を操る魔導士がいたんで、覚えてみた」

「では何故我々に使う?」

「決まってるだろ?」

全員が?を浮かべていた。

「ハーレムを作る為に!!!」

そう言った瞬間、美女達（ミラとミオ以外）と一部の男達（エルフマンやアルザック等）によって叩きのめされ、美女達は元の年齢に

戻しました。

その後、朝になるまで気絶してました。

余談、マスターに若返らせてと言われて、20歳代まで若返らせた  
ら、全員に誰？と言われ、元に戻させた。

翌日、フェアリーテイル

ようやく仕事する気になったナツ。

仕事内容は、脱獄囚ベルベノの捕獲。

「ベルベノって、あのギルド狩りのベルベノ!？」

「居場所見つかつたんだ」

「うおおおっ！スツゲエ魔法使うって奴だ！燃えるぞお!!」

「どんな魔法か、覚えてみたいぜ！」

まあ、覚えられないけどね。

「報酬は一人30万か。家賃が払えるなルーシィ」

「うん。約四ヶ月分！がんばるよ」

さて、ヘルズイヤー展開つと。

「おい、アカリファの話聞いたか？」

「商業ギルドが武装集団に占拠されたって話だろ？おっかないね」

「…アカリファ!？」

ルーシィが気付いた様だ。

「いや…その武装集団って、裸ネイの包帯男キッドマミ、闇ギルドだつてよ」  
「マジかよ!?じゃあ軍隊じゃ手に負えねーじゃねーか」  
「最近、また闇ギルド絡みの事件が増えてるらしいわね」  
「物騒だなあ」

これで、あの金の亡者を救う場面に突入つてか。  
ルーシイは、噂をしていたマカオ達に駆け寄った。

「アカリファって何処!」

んじゃ皆に言っておくか。

夕方、アカリファの街

一応皆に事情を話した後、急いでアカリファに来た。

「ルーシイ、無事かー!?!」

「どうした一体!?!」

「ルーシイ!」

「えー!?!?!?!」

やっぱもう片が付いてたか。

「まさか…これをお前一人で解決したのか?」

「やるなルーシイ」

「いや…その…」

ルーシイはちらっと父親の方を見た。



そして、別れの挨拶（手を振っただけ）をした。

「どうしたんだよ急に！」

「何でもないの」

「何でもねえ訳ねーだろ！」

「仕事キャンセルしちゃったんだよ」

「ごめんねー」

「まったく…」

「で、どうすんだルーシィ、折角の家賃がパアになっちまったんだぞ？」

「うっ…」

「自業自得だね」

そして俺達は、俺達のギルドに帰った。

とある闇ギルド、?????????サイド

体に支障が出てるな。いよいよこの身体も長くないか…。  
メイド服を着た諜報員のプリマリアがやってきた。

「……………様、例のフェアリージャッジメントについて調べて来ました」

「それで、奴は？」

「はい、……………様のおっしゃった通り、……………様の身体に最適との結果が出ました」

「そうか、良くやった」

プリマリアは去って行った。

「……様、やはりあの者は……」

「ああ……ようやく見つけたぞ。我が兄弟よ！」

そして、貴様の身体は私が頂く！

## LOVE & LUCKY (後書き)

結構グダグダになりました。

最後の部分は8/7に付け加えました。これからの伏線の為に。

初登場の悪魔の実

トシトシの実、オリジナル、年齢人間(勝手に命名)、自分、敵味方問わず、年齢を操れる。(ジュエリー・ボニーの様な能力)

次回は、いよいよ六魔将軍編です。とうとうウェンディ登場により、ギアスが暴走して壊れます。

**連合軍、集結！〜六魔將軍（オラシオンセイス）現る！（前書き）**

いよいよフェアリーテイルのヒロイン（ギアス主観）が登場します。  
あとついでに、イヴとクルス（転生者）が出ます。

今の所新作候補は、

ゼロのロストマジック使い 3票

ブレイブフェンサー才人伝 1票

失われし魔法使い 1票

バカとテストと天元突破 1票

となっています。

連合軍、集結！〜六魔將軍（オラシオンセイス）現る！

ハルジオン、エイトアイランド、ルーシイサイド

私たちはある人の依頼でハルジオンに来ていた。

「いらつしゃいませ〜。ご注文はお決まりですか？」

「え〜つと、蒼天ミートソースとホーリーソーダが欲しいポヨ」

「オレは獣人カレー」

「は〜い、ありがとうございます〜す。デザートも一緒にいかがですか？」

「じゃあ…このルビーパフェを貰うポヨ」

「同じので」

「かしこまりました〜」

「こつちも注文頼むよ〜」

「はいは〜い」

注文続いで大忙しね〜…って!？

「何やってんのよあたしはっ!？」

これ全然魔導士の仕事じゃないでしょ!？

ナツやハッピーの話によると、ここのシェフが魔導士で、魔法料理を作ってるらしい。それにこのコス、恥ずかしいんだけど…まあ、我ながら似合ってるからいいんだけど。

ってナツ!？お客さんに出す料理を食うな!

「偶には、ウェイターの格好もいいもんだぜ」

「服着てから言つて!?!」

相変わらず半裸でいるわねグレイって…。

「おいおい、誰の家賃の為にやってんだ?」

「あつ…ごめんなさい…」

そうでした…あたしが文句を言える立場じゃないんです…。

「それに、見てみる」

「!?!」

思わず絶句しちゃった。

あたしが見たのは、二人のウェイトレスだった。

「注文を聞こうか?」

「何が食べたいのかな?」

「さあ、言ってみる?」

「え、え〜つと…」

「ほ、欲しい…」

「そりゃもつ…」

「料理全部下さあーい!?!」

「そうか、それは助かる」

「全品ですね。ありがとうございます」

「礼を言わせて貰うぞ」

「!?!」

妖艶な雰囲気を漂わせてるエルザと女ギアスに興奮したお客さんは全品を注文してしまった。

「あんな…ノリノリの奴らもいる…」  
「あ…あたしも頑張ります…」

エルザはともかく、ギアスには負けたくないしね！

サイドエンド

エイトアイランド、店の裏

俺は男に戻って、店の裏に集まった。

「いやーお疲れ様。すつかし最近の子は、働きモンだねえ。またいつでも来なさいよ」

「はい。今日は勉強になりました」

つかエルザ、まだウェイトレスの格好になってる…気に入ったのそれ？

「ミラちゃんの気持ち少しは分かったよ」

「ふう〜食った食った」

「あんだ店のモン食べ過ぎ！」

「いいじゃん別に」

「何その態度！」

ナツ、元とはいえ、評議員のヤジマさんの前で堂々とルフィ並の摘み食いしてんじゃねえよ。

ちよっくら意地悪してやる。

「んでヤジマさんよお、あれから評議会の方はどうなったんだ？」  
「ん〜、ワスはもう引退したからねえ」  
「「評議会！！？？」」

めっちゃビビってるな二人とも、特にナツの方が。

「あんた達知らなかったの？ヤジマさんは元評議員の一人よ」  
「それに、ヤジマさんの中でも9人しか選ばれない最高幹部の一人でもある訳だし」  
「「ええー！？！？」」

むっちゃ汗だくになってるな二人とも、特にナツが。

「ズーク…いや、ズラールだったかの？」  
「ジェラールです…」  
「そうそう！そのズラールとウルティアの裏切りで大変な失態スッタイでしたからねえ。今は、新生魔法評議会を立ち上げるべく、各方面に根回すとるみたいよ。君たちにも本当に迷惑をかけたね。申す訳ないよ」  
「いえ…ヤジマさんは最後までエーテリオン投下に反対されたと聞きました。行動を恥じて引退など…」

その辺の部分はそう思うな。

「ワスは政治せいすは向かんよ。やはり…」

ヤジマさんはアクロバティックな振る舞いをしながら、

「料理人の方が楽しいわい！」



そう言った。結構なハイテンションだったなヤジマさん…。

「ところで、ナツ君…」

「「!!!???」「」

ヤジマさんがナツとグレイに近づいた。

「これから評議員は新スくなる。ワスはもういない、フェアリーテイルを弁護する者はいなくなる。その事を、よく考えて行動スなさい!」

「「行動スます!?!?」「」

ナツ…グレイ…喋り方が移ってるぞ…。

まあヤジマさんて、目開いた時が怖く見えるから不思議だよな。

「マー坊によるスくな〜」

「今日は、ありがとうございました〜」

俺達はフェアリーテイルに帰った。

数日後、フェアリーテイル

リーダーが闇ギルドの組織図を書いていた。

そっぴゃ、もう六魔将軍編オラシオンセイブスに入っていたんだっつたな。

「何ですかコレ?」

「闇ギルドの組織図を書いてみたの」

「あっ…書いたの、オレ…!」

分かってるよリーダーだス…。

「改めてみると、すごい数だな」

「どうしてまた？」

「近頃…動きが活性化してるみたいだからね」

「？」

「ギルド同士の連携を強固にしないといけないのよ！」

「はあ…」

そついや、闇ギルドの数が原作より多く見えるんだけど…ん？な！？

「この大きい括りは何だよ？」

「ジユビア知ってます。闇ギルドのバラム同盟。バラム同盟は、オ  
ラシオンセイス、冥府の門タルタ、邪神の断片ロス、悪魔の心臓シメの4（・）つ  
のギルドから構成されている、闇の最大勢力！」

シメオンが…この世界に存在してるなんて…って事はやっぱり、あ  
いつがマスターをやっているのか！？正直勝てる自信が無え…。  
前に潰したスパイダーズネット等が傘下に入ってるところを見ると、  
やっぱニードレスに出てる連中が出るのかな？

「それぞれが直属のギルドを持ち、闇の世界を動かしている。そし  
て、それとは別に独立しているのが、レイヴンテイル」

イワンの事だな。

するとルーシイが組織図を見て気付いた。

「あれっ！？アイゼンヴァルトって…」

「そうだ、あのエリゴールがいたギルドだ」

「あれは、オラシオンセイスってギルドの傘下だったのか」

「覚えのある名前も多いな」

「正規ギルドだったのもあんじゃねーか」

「雷神衆が潰した、屍人の魂もそうね」

「ジュービアもガジル君も少女部隊の子達も、ファントム時代に幾つか潰したギルドが、全部オラシオンセイスの傘下でした」

「笑顔で言うな…笑顔で…」

逆に怖いってジュービア…。

「うわ〜どうしよう…怒ってなきゃいいけど…」

「大丈夫だって、気にする事あねーさ。こいつら噂じゃたった6人いないらしいぜ」

「どんだけ小せえギルドだったの」

ワカバとマカオの言い分で笑顔になるルーシィ。

「それでも、たった6人で最大勢力の一つを担ってるのよ」

そこに、

「そのオラシオンセイスじゃがな…」

マスターが定例会から帰って来た。

「ワシらが、討つ事になった!」

「……………ええっ!?!」「……………」

「お帰りなさい、マスター」

ズデー

シリアスな雰囲気だったが、ミラの天然な一言でブチ壊された。もちろん俺を含む、ミラとマスター以外全員ずっこけた。

「定例会、いかがでした？」

「…あゝもう、違うでしょ！」

ルーシイが突っ込むが、ミラはきよとんとしていた。

「マスター！一体どうゆう事ですか？」

「先日の定例会で、何やらオラシオンセイスが、動きを見せている事が議題に上がった。無視はできないという事になり、何処かのギルドが、奴らを叩く事になったのじゃ」

「また貧乏くじ引いたな、じーさん」

「フェアリーテイルがその役目を？」

「いや、今回は敵が強すぎる！ワシらだけで戦をしては、後々バラム同盟に、ココだけが狙われる事になる…そこでじゃ、我々は連合を組み事になった！」

「……………連合！？……………」

やはりな。

「フェアリーテイル、ブルーペガサス、ラミアス蛇姫の鱗、ケイル化猫の宿。ケットシエ4つ

のギルドが各々メンバーを選出し、力を合わせて奴らを討つ！」

「俺達だけで充分だろ！ってか、俺一人で充分だ！」

「バカ者！マスターは後々の事を考えてだな！」

「ってか…ちよつと待ってよ…相手は、たった6人なんですよ？何者なのよ、そいつら…」

さてさて、オラシオンセイス、今度の相手は一味違ってみてえだから、

腕が鳴るぜ！

この時ギアスは思いもしなかっただろう。この先原作通り進むと思っていたギアスに、思わぬ敵が現れる事に。

数日後、集合場所に向かう道、猪車の中

まだ着かねえかな集合場所。

ちなみにメンバーはいつもの最強チームだ。

「何だか、とても大変な事が起きようとしてる気が…てゆーか、何でこんな作戦に、あたしが参加する事になったのー！！？」

諦めが悪いぞルーシィ。

「俺だつてめんどくせーんだ、ぶーぶー言つな」

「「ぶー」」

「うゝ…」

例によってナツは気持ち悪がってた。

「マスターの人選だ！私たちは、その期待に応えるべきじゃないのか？」

「それもそうだな」

「…でも、バトルならガジルやジユビア達だっているじゃない…」

「二人とも別の仕事が入っちゃったからね」

「雷神衆や少女部隊も仕事入っちゃってたしね」

「…てか…まだ…着かねえ…のか……うっ…」

相変わらずだなナツ…。

「結局いつものメンバーなのよね」

「確かにそうだな。まっ、俺達なら別に問題ねーだろ？」

「そうだな。今日は他のギルドとの初の合同作戦。まずは、同じギルド内の連携が取れている事が大切だ」

「見えてきたよ」

「集合場所だ！」

やっとなつて来たか。

マスターボブの別荘

「趣味悪い所ね」

「ブルーペガサスの、マスターボブの別荘だ」

「あいつか…に、苦手だな…」

「まあそう言うな…あれでも…うちのマスターが手を焼いた程の実力者だからな…」

「そうなんだ…」

「あの人がねえ…」

「人は見かけによらないって言うし」

「ま…まだ着かねえのか…」

「着いてるよナツ」

すると、

「はい到着！」

「到着！」

「はいはいはい、ようこそ」「ようこそ」「フェアリー」「フェアリー」「テイルの」「テイルの」「皆さ〜ん!」「」「」「お待ちしておりました〜!」「」

来たか、ウザいイケメン達が…。

「我ら…」

「ブルーペガサスより…」

「選出されし…」

「トライメンズ!」「」

「白夜のヒビキ!」

「聖夜のイヴ」

「空夜の…レン…」

ウザっ…。

「ブルーペガサスのトライメンズ!?!か、カツコイイ!それにあのヒビキって人、週サラの彼氏にしたい魔導士ランキングで、いっつも上位にいる、あのヒビキ・レイティス!?!」

「しまったあ!?!服着るの忘れたあ!?!」

「うぷっ…」

「何だ、男ばっかりか…幼女とかいねえのか?」

「はあ…こっちはダメだあ」

何がダメなんだルーシイ?

その後、ルーシイとエルザはホスト達に連れて行かれた。

つかあのソファアールやらテーブルとか、いつの間に用意したんだ?

それにあのトライメンズ、やってる事がまんまホストだな。

「さあ、長旅でお疲れでしょう。今夜は僕たちと……」

「……フォーエバー……」

「……」

ルーシィもエルザも、三人のウザさに引いてるようだな。

そこに、

「君達、その辺にしておきたまえ」

「な、何……この甘い声……」

「一夜様！」

「い……一夜!?!」

とうとう出たか!?!ブルーペガサスのキモメン(キモイイケメンの略)が!

「久しぶりだね、エルザさん」

「ま……まさか、お前が参加しているとは……」

「会いたかったよ、マイハニー。貴女の為の……一夜でえす!」

「……マイハニー!?!」

さすがのエルザも気持ち悪くて震えているな。

「まさかの……まさかの……再開……再開……、ワッショ

イ「ワッショイ(ヒビキ)」「ワッショイ「ワッショイ(イヴ)」「ワ

ッショイ「ワッショイ(レン)……」

「……一夜様の彼女さんでしたが、それは大変失礼を……」

「全力で否定する!?!」

思いっきり否定したい気持ちはものすごく分かる。



つか一夜が加わったホスト達は凄まじくウザくなったな。

「片付ける！遊びに来たんじゃないぞっ！」

「へいアニキ！へいアニキ！」

「さつき、一夜様って言っただけだった？」

「一貫してないんだね」

「君達の事は、聞いてるよ。エルザさんにルーシィさん、その他」

その他扱いかよ。

すると一夜は、ルーシィの匂いを嗅いでいた。

「いい香りだ」  
バルファム

「キモいんですけど…」

ウザメンとごたつく中、色々あって、エルザがキモメンを殴り付けた。

すると、殴り飛ばされた先に誰かいた。

キモメンを受け止めると、凍らせた。

「こりゃあ随分ご丁寧な挨拶だな。貴様らはラミアスケイル、上等か？」

リオン登場だ。

「リオン！？」

「グレイ！？」

「お前、ギルドに入ったのか」

リオンはキモメンを放り投げた。

「何しやがる！」

「先にやったのはそっちだろ？」

そしてイタい女、シエリーも来た。

つか太眉毛とバカ犬はどうしたんだ？

そして一触即発な空気になったが、

「止めい！ワシらは連合を組み、オラシオンセイスを倒すのだ！仲間内で争ってる場合か！」

ジユラさんだ。俺が聖十に選ばれた時以来だな。

「ジユラさん」

「ジユラ！？」

「こいつがあなの……」

「ラミアスケイルのエース……岩鉄のジユラ……」

「誰？」

「聖十大魔道の一人だよ」

「懐かしいなジユラさん」

「そつえばギアスも聖十の一人だったね」

「あたしでも聞いた事ある名前だ」

「妖精は5人、ペガサスは4人でしたね。私たちは3人で充分ですわ」

「むうう……」

何か、ルシアとハッピーが嘆いてるような？

「これで、3つのギルドが揃った。残るはケット・シエルターの連中のみだ」

残るはウエンディちゃんか！

「連中というか、子供だけと聞いてまあす」

「子供だと！？」

えっ、子供だけ？一人じゃないの？

「こんな危ねー作戦に、子供に任せようつてのか！？」

「ちょ…ちよつと、どんだけヤバイ子供が来るのよ！？」

その時、

ずてっ

「きゃあっ！？」

「……………？……………」

誰かがこけた音がした。

「いったあ……」

その子は、身に付いた埃を払い、名乗り出た。

「あ…あの…遅れてごめんなさい。ケット・シェルターから来ました、ウエンディ・マーベルです。よろしくお願いします」

その美女を見た途端、全てのモノが見えなくなり、その子だけしか見えなかった。

やっと…やっと…やっと会えた…フェアリーテイルのヒロインが…。

ルーシーサイド

ウエンディと名乗った女の子は、ちょっとおどおどしていた。可愛い。

はっ!？ちょっと待って、女の子はまずいんじゃない??

ルーシーはふとギアスの方を見たが、さっきまでいた筈のギアスの姿が無かった。

「ウエンディちゃん!好きです!付き合ってください!」

「ふえっ!」

ズデー

あたしたちフェアリーテイルはずっこけて、他の皆さんは啞然としていた。

つてかギアス、その薔薇の花束どこから出したの!?

「え…えつと…その…あの…」

「……………(真顔でキラリとしている)」

ほらウエンディも動揺してるじゃない!

すると何かが急速でギアスに飛び蹴りして来た。

「不可に決まってるでしょー!」

「ブヘバハアツ!?!」

そのままギアスは壁に激突するまで転がり続けた。

「ハアハア…やっぱりついてきて良かったわ…あんな変態がウエンデイに寄って来るんだから…ハアハア」  
「じゃ…シャルル、ついて来てたんだ…」

ギアスに飛び蹴りしたのは、ハッピーヤルシアと同じ、喋る白い猫だった。

サイドエンド

迂闊だった…シャルルがいた事を忘れていた。  
ウエンデイちゃんをオトすには、シャルルが邪魔だな。何とかしてルシアとくっ付けないと。  
そんな事を考えていたギアスだった。  
するとそこに、

「どもー！」

誰か来たみたいだ…ってあれは!?

「え〜、ぼくはケット・シエルターのイヴ・ノイシュヴァンシュタインです。名前が長いので、イヴ・ノイシュヴァンシュタイン様って呼んでね」

「イヴさん、増えてますよ〜!？」

「あり?そうだったけ宮田？」

「ウエンデイです!?!何でいつも名前を間違えるんですか!?!」

このやり取り、間違い無い、ニードレスのイヴだ。  
すると、また声が入口から聞こえた。

「ウエンディさん、イヴさん、待って下さいよ…」

あの少年は…

「クルス君ごめんね、荷物を持たせちゃって」

「別にいいじゃん、山田なんだし」

「クルスです！」

やっぱりクルス・シルトか。

「えっと、すみません。同じくケット・シエルターのクルス・シルトです。よろしくお願ひします」

皆がこれらのやり取りに啞然としてたところ、

「これで全てのギルドが揃った」

「話進めるのかよ!？」

ジユラさんが無理矢理話を進めた。  
すると、ルシアとハッピーは、

「「キュピーン」」

としていた。

「ねえルーシイ、あの子にオイラの魚上げてきて」

「ねえギアス、あの子に僕の野菜上げてきて」

「えっ!？もしかして一目惚れ!？」

「だがナルシア、俺の様に積極的にアプローチするもんだぞ!」

「積極的過ぎるのもどうかと思うけど」

ルシアとハッピーはモジモジしていた。

「…どうるえきとうえるうううう」

「オイラのパクリだ!？」

「しかもハッピーより3倍巻き舌だ!？」

俺とルーシィは巻き舌で言った。

「あ…あの…私…戦闘は全然出来ませんけど…皆さんの役に立つサポートの魔法は、いっぱい使えます。だから…だから仲間外れにしないで下さいー!」

ドビューツ

ギアスは、某試験のムツツリの様に鼻血をたくさん出した。

ああウエンディちゃん…萌過ぎるよ。

一同はギアスから引いた。

そんな事してる内にエルザがウエンディちゃんを慰めてる様だ。すると、何やらエルザに憧れ視線を入れてた。

しまった!?!呆けてる場合じゃなかった!俺が慰めてあげれば良かった!?!

ギアスは本気で残念がってた。

「ぼくのは換装だよ。ケット・シエルターの中じゃ、ぼくが一番強いよ」

「僕の魔法は情報解析です。僕も戦闘はからつきですけど…」

いつの間にかウエンディちゃん達に魔法を紹介していたようだ。

すると、ウエンディちゃんが、俺とナツに微笑んでくれた。感激だ!

またギアスは鼻血を噴き出ししていた。  
すると、いつの間にかクルスが近寄って来た。

「あの…ギアセルシアさんですよね？」

「ああそうだが？」

「良かった。実は話しておきたい事があるんです」

「俺に？」

「はい」

クルスが俺に何の用だ？

するとクルスは周りをキョロキョロしていた。

そしてクルスは、信じられない事を言ってきた。

「僕は貴方と同じ、転生者です」

何！？

思わず声を上げそうになったギアス。

ここから先は小声で会話します。

「転生者だ！？どうゆう事だクルス！」

「僕も死んでこの世界に来たんです。天使様の導きによって」

「何！？あの美女にあつたのか！？」

「そついえば貴方はウェンデイさんを見て興奮しましたね…」

「悪いか？」

「いえ…むしろ隠そうとしないんですね」

「当たり前だ！何故美女を前にして自分の気持ちを隠そうとするんだ？」

「堂々としてますね…」

「まあな」



そもそも何故好きな相手を告る事に何の迷いがある？

「それです、天使様から伝言があるんです」

「何！？俺へのプロポーズか！」

「違いますよ！？何でそうなるんですか！？」

「何だ、違うのか…」

ギアスは落ち込んだ。

「なぜそこまで落ち込むかは敢えて追求しませんが、伝言を言っておきますね」

「ああ」

「墮天使が犯罪者をそちらの世界に転生させたから、退治してくれとの事です」

「悪の転生者か…ちなみに墮天使って大人な体を女性だっけってましたけど」じゃあその転生者を倒せばいいんだな

「無理矢理話題を反らせましたね」

そろそろ話を戻しておかないと。

「さて、全員揃ったようなので、私の方から作戦の説明をしよう。

まずはオラシオンセイスが集結してる場所だが…と、その前にトイレのパルファムを」

そそくさと出て行く一夜。

「おい！そこはパルファムって付けるな！」

「「さすが先生！」」

「また呼び方変わった！？」

さて、これで一夜からジェミニに入れ替わったな。  
ジェミニが戻って来たな。

「ここから北に行くと、ワース樹海が広がっている。古代人たちはその樹海に、ある強大な魔法を封印した。その名は、ニルヴァーナ！」

「……………ニルヴァーナ？」

「聞かぬ魔法だ」

「ジユラ様は？」

「ニルヴァーナって知ってる？てか魚いる？」

「いや野菜いる？」

「結構」

二人のアプローチを一蹴するシャルル。

「古代人たちが封印する程の破壊魔法、という事だけは解っているが……」

「どんな魔法かは解ってないんだ」

「破壊魔法……」

「何か…嫌な予感が……」

「オラシオンセイスが樹海に集結したのはきつと、ニルヴァーナを手に入れる為なんだ」

「我々はそれを阻止する為……」

「…………オラシオンセイスを討つ！！」「……」

いちいちポーズを取りながら言うな。

「こっちは15人、敵は6人」

「だけど侮っちゃいけない」

「この6人がとんでもなく強いんだ」

ヒビキは古文書を展開した。  
何かパソコン操作みたいだな。  
オラシオンセイスの情報が出てきた。

「これは、最近になって手に入れた奴等の映像だ。毒蛇を使う魔導士、コブラ」

「悪そうな顔してんなー。この釣り目野郎!」  
「お前も似た様なモンじゃねーか!」

ナツの言い分にグレイとリオンが突っ込む。

「その名からして、スピード系の魔法を使うと思われる、レーザー」  
「ほお、何だっついていいが、気にくわねえツラだ」  
「同感だ」

グレイの言い分に同意のリオン。

「大金を積みめば、一人でも軍の一部隊を全滅させられる魔導士、天眼のホットアイ」

「お金の為?」  
「下劣な…」

ジユラさんが怒りに満ちていた。

「心を覗けるといふ女、エンジェル」  
「何か、本能的に苦手かも…こつゆうタイプ…」

ルーシィは嫌そうにしていた。

「この男は情報が少ないのだが、ミッドナイトと呼ばれてる」

「真夜中？<sup>ミッドナイト</sup>妙な名前だな」

エルザが不審がってた。

「そして、奴等の司令塔、ブレイン。それぞれが、たった一人でギルドの一つくらいは潰せる程の魔力を持つ」

ヒビキはアーカイクを閉じた。

「我々は、数的有利を利用するんだ」

「あの〜…あたしは頭数に入れないで欲しいんだけど…」

「ぼ…僕も…」

「私も戦うのは苦手です…」

「大丈夫！君の事は僕が守ってあげよう！結構よ！」グケブツ！？」

またシャルルに飛び蹴りされた。つつか何で避ける事が出来ないんだろ？これがギャグ補正という奴か？

「安心したまえ、我々の作戦は戦闘だけにあらず、奴等の拠点を見つけてくれれば良い」

「拠点？」

「ああそうだ。今はまだ奴等を補足していないが…」

「樹海には、奴等の仮設拠点があると推測されるんだ」

またヒビキはアーカイクを展開させた。

「もし可能なら、奴等全員をその拠点に集めてほしい」

「どうやって？」

「殴ってに決まってるんだろ！」

「結局戦うんじゃない…」  
「集めてどうするのだ？」

「<sup>シヘミ</sup>一夜は上に指差した。」

「我がギルドが大陸に誇る天馬、その名もクリスティーナで、拠点  
諸共葬り去る！！」

「おおっ！」

「それって、魔導爆撃艇の事ですか？」

「てか…人間相手にそこまでやる？」

「そういう相手なのだ！」

「うあっはい！？」

ジユラにビクつくルーシィ。

「良いか！戦闘になっても、決して一人で戦ってはいかん！敵一人  
に対して、必ず二人以上でやるんだ！」

ジユラさんの意見に皆が頷く。

「ふえ〜…そんな物騒な〜…」

「無茶苦茶な…」

「うっ…困ります…」

「情けない声出さないの！」

「ウエンディちゃん、何があっても君の事は僕がま m 「しっこい！  
アベシッ！？」

うっ…シャルル…手厳しいなあ…。

「おしっ、燃えてきたぞ！6人纏めて、俺が相手してやるああああ

あああああー！ー！ー！ー！！！！」

ナツ…全然話聞いてなかっただろ…ホントルフィ見たいに作戦なんか全然解ってないからな。  
ほら皆も呆れてるだろ。

「おいおい…」

「酷いや…」

「扉、開けてけよ…」

トライメンズも呆れてた。

「仕方ない、行くぞ！」

「つたく、あのバカ…」

「ふえ〜」

ルーシィ、いい加減覚悟を決めろっての。

エルザ、グレイ、ルーシィはナツの後を追いかけた。

「フェアリーテイルには負けられんな。行くぞシエリー！」

「はい！」

「リオン！シエリー！」

フェアリーテイルに対抗心を持つリオンとシエリーも後を追いかけた。

「俺達も行くぞ！」

「うん！」

「エンジェルか〜」

ヒビキはエンジェル狙いだった。

「そんじゃー行くよ山田！」

「クルスですって、ちよつと何で引つ張ってくんですかー！？」

「あわわわ……」

「コラ、しつかり！」

「大丈夫！（オイラ・僕）がついてるよ！」

「ウエンデイ、行くわよ！」

「わっ！？」

「………待つてよー！？置いてかないでよー！……！？」

正直言つてウエンデイちゃんに付いて行きたかったが、ジユラさんを放つておけなかつたし。

「やれやれ……」

「つたく、あいつら……」

「メエーン」

「すみませんねジユラさん、身内が先走っちゃって」

「よい、どの道向かわねばならなかつたのだ、気に病む必要は無い」

「そう言つてくれて安心しました」

「まあ、なにはともあれ作戦開始だ。我々も行くとしよう」

「ですね」

「その前にジユラさんに、ギアセルシアさん」

「？」

来るか！

「あなた方は、かの聖十大魔道と聞いていますが……」

「いかにも」

「俺はつい最近なつたばかりだしな」

「その実力はマスターマカロフにも匹敵するのでは？」

「いやあ滅相もない。聖十の称号は評議会が決めるもの、ワシなど末席。同じ称号を持つていも、マスターマカロフやギアセルシア殿に比べられたら、天と地程の差があるよ」

「ほう」

「俺もですか？」

「うぬはマスターマカロフに匹敵するファントムのマスターのジョゼを打ち倒したのだから、ワシより強い事は明白だよ」

「そういうもんですかね」

「そういうものだ」

何かジユラさんと世間話をしてるみたいだな。

「それを聞いては、フェアリージャッジメントを片付けるには無理がありますね」

「？」

「だったらどうすんだ？偽者さん、よ！！」

ギアスは偽一夜を蹴り飛ばした。

「なっ、ギアセルシア殿！？一体何を！？」

「ジユラさん、あいつは一夜じゃない」

「何！？」

偽一夜から煙が出た後、二体の星霊が出た。

「「ピーリピーリ」」

「「こ、これは一体！？」」

「多分星霊だ。恐らくさつきトイレに言った時に入れ替わったんだ」

「まさか、オラシオンセイスの手の者か！？」



「まったく、何でバレちゃったんだろ？」  
「不思議だよね〜」

改めて見ると、手抜きで出来た星霊だなこれ。

「やっぱりフェアリージャッジメントは一筋縄じゃいかないゾ」  
「「！？」」

俺とジユラさんは声がした方を見た。

そこにいたのは、白い羽毛だらけの服を纏った女、エンジェルがいた。

「オラシオンセイスのエンジェルか？」

「そうだゾ」

「こやつが…」

「でもここは分が悪いゾ、引かせてもらおうゾ」

「「ピーリピーリ」」

「逃がさん！」

エンジェルは金色の鍵を取り出した。

「待ったジユラさん！？」

「開け、天蠍宮てんかつきゆうの扉、スコープオン！」

エンジェルは、スコープオンを開門した。

「何！？」

「サンドバスター！！」

スコープオンの尻尾から砂嵐を吹き出した。

「ぐうっ!?!」

「うわっ、砂嵐かよ!?!」

砂嵐が止むと、エンジェル達はいなかった。

「くっ、逃げられたか」

「ジュラさん、こっちの作戦はもうオラシオンセイスイにバレている。急いで皆の所に行きましょう!」

「うむ!」

俺達は直ぐに皆の所に向かった。

あっ、一夜を忘れたから拾いに戻った。

**連合軍、集結！〜六魔將軍（オラシオンセイス）現る！（後書き）**

一夜の声をしてる速水奨さんて、自分が知る限りでは美形キャラの  
声をしてるのに、何故一夜の声をやるうと思っただらうと感じた  
のは自分だけでしょうか？

天使の助言の事は当分先になります。

新作については今の所、ゼロのロストマジック使いが一番高いので、  
オリ主はガンダールヴにした方がいいですか？それともリーヴスラ  
シルですか？

次回はさらわれたウエンディを救出する為にサンジ化して暴走し続  
けます。

天空の巫女く少女と亡霊（前書き）

今の所新作候補は、ゼロのロストマジック使いが一番だけど、他に評価があるのは、

ブレイブフェンサー才人伝

失われし魔法使い

バカとテストと天元突破

の三つで、他の

ブレイドマスター才人伝

番長と1/2と音楽の御使い

ラウルとアデルとギアスが真・恋姫無双の世界に!?

バカと女装と特殊メイク

失われし魔法使い

があります。

まだまだ締め切りじゃないので、どんどん投票して下さい。

## 天空の巫女と少女と亡霊

ワース樹海

俺とジユラさん、ついでに一夜は急いで皆の所に駆け出していた。すると遠くで、ブレインが常闇ダークロンド回旋曲を放っていた。するとジユラさんが、

「岩鉄壁!!」

ジユラさんの岩鉄壁により、とれていた仲間を守った。

「間一髪」

「やっと追い付いた。さあウエンディちゃん、俺が守…ってあれ？ウエンディちゃんは？」

「ギアス…ウエンディなら…」

ルシアが事情を説明してくれた。

「ぬああにいいいいいいいっ!!ウエンディちゃんを拉致監禁にして、にゃんにゃんペロペロした後、売り飛ばすだとおおおおおおおおっ!!」

「そこまで言っていないよギアス!!?」

「許さんぞオラシオンセイスイ!!よくも俺のウエンディちゃんを攫いやがったなああああっ!!」

「いつアンタのものになったのよ!」

「ウエンディちゃんに手を出してみる!その瞬間俺はこの世の魔王と化すぞ!!ぬおおおおおおおっ!!ウエンディちゅわああああ

ああああん！！！！」

「……………」

あん？原作知ってるだろ？知った事か！！ウエンディちゃんを攫った、それだけで奴等を血祭りするには充分な理由だろ？

ギアスはウエンディが攫われた事で、原作の事を忘れさせてしまった様だ（ロリコン脳内暴走的に）。

「話を戻すが、我々はオラシオンセイスの奇襲に遭ったが、ギアセルシア殿のおかげで大事には至らなかった。一夜殿はご自身の身体に痛み止めのパルファムで、一時的に抑えているようだ」

「オラシオンセイスめ…我々が到着した途端に逃げ出すとは、さては恐れをなしたな」

「あんたボロボロじゃねーか！」

しまらねえぞ一夜。

「これしきの怪我何でもない。皆さんにm「皆、怪我の治療してやるぞ、エゴイックロータス気功方士！」私の…つてええ！？」

ギアスの身体から華が咲いた。

「まあ、綺麗…」

「花…よね？」

「あれ？痛みが無くなっていく？」

「応急処置程度だが、大丈夫だろ」

「わ、私のアイデンティティが…」

何か一夜が落ち込んでるみたいだが、気にしない気にしない。

「あいつら…よくもウエンディとハッピーを…何処だ！どこ行っ  
たコラー！」

「ナツ、どこ行く気！？」

その時、シャルルがナツのマフラーを引っ張って止めた。

「まったくもう、少しは落ち着きなさいよ」

「羽！？」

「羽ですわ！？」

「猫が飛んでる…」

「すごいや！」

「これはエーラっていう魔法。ま、始めて見たなら驚くのも無理な  
いですけど」

「（ハッピー・ルシア）とかぶってる」「」

「僕とお揃いだね」

「何ですって！」

俺とナツが言った事に驚くシャルル（かぶってる発言にムカついた  
？）。

「とにかく、ウエンディと青オスネコの事は心配ですけど、闇雲に  
突っ込んで勝てる相手じゃないって分かったでしょう？」

「シャルル殿の言う通りだ。敵は予想以上に強い！」

「メェーン…」

「それに…」

シャルルは、毒に侵されているエルザの方を見た。

つか、右腕が紫色の毒に浸食されているな。

「エルザ！？」

「しっかりして！」

「うづ…うわっ…うづ…」

「蛇に噛まれた所から、毒が廻ってるのね」

この毒は、オラシオンセイスのコブラのペットのキュベリオス…だったかな？そいつに噛まれたようだ。

毒ならあれをやってみるか。

「今度こそ、マイハニーの為に、痛みd「治癒ホルモン！」のパール…つてええ！？」

俺はエルザに、治癒ホルモンを注入した。

エルザの寿命を減らす代わりに、毒に対して免疫力を付けさせた。

「ちょっとギアス、何したの！？」

「エルザの毒を治療しただけだ」

「ええっ！？ギアス、そんな事も出来たの！？」

「まあな。今やったのは、毒の進行を抑えるだけじゃなく、エルザ自身の自己回復組織と免疫力を過剰に引き出して毒を対抗出来る様な体になるという訳だ」

「すごい効果ねそれ！」

「またしても…私のアイデンティティが…」

喜んでる皆と何故か落ち込んでる一夜。

でもこれってものすごい副作用があるからな…。

「ただしその副作用として、寿命が5〜10年分減るがな」

「って何ソレ！？デメリット高過ぎ！？」

「毒に侵されて死ぬのと、寿命が減って毒が治療出来るのとどっちが良い？」



「うっ…」

ルーシイは黙ってしまった。

「本当に…これで毒が…直るのか…?」

「それはエルザが、生きたいと願ってるなら、エルザ自身が頑張るしかない」

「…分かった」

「ただ、毒と免疫力が戦ってる間はかなり激痛が伴うから覚悟しておけ」

「それで…毒が治るのなら…我慢するしかない…な…」

エルザは気を失った。

「エルザ!?!」

「エルザさんの毒は、いつ頃治るんですか?」

「個人差はあるが、だいたい5〜6時間以上はかかる」

「そんなに!?!」

「それじゃあエルザは、すぐには戦えないのか!?!」

「さすがにこればかりは…」

するとシャルルが、

「ウエンディならもつと早く助けられるわ」

「……………!!?!」「……………」

と言ってきた。

「今は仲間同士で争ってる場合じゃないでしょ?力を合わせてウエンディを救うの!?!ついでに青オスネコも」

「ウエンディ？あの娘が解毒の魔法を使えるの！？」

「すごいなあ……」

「解毒だけじゃない、解熱や痛み止め、傷の治癒も出来るの」

「な、何だか先程から……私のアイデンティティが脅かされている様な……」

「一夜さつきからづるさいな。」

「でも、治癒の魔法ってロストマジックじゃなくて？」

「まさか、あいつらが言ってた天空の巫女ってのに関係があるの！？」

そしてシャルルは、

「あの娘は天空のドラゴンスレイヤー、天竜のウエンディ……」

「……………！！？」

「ドラゴンスレイヤー！？」

「ウエンディちゃんが、俺とナツと同じドラゴンスレイヤー！？」

「詳しい話は後、ってゆうか、これ以上話す事は無いけどね。今私達が必要なのは、ウエンディよ。そして、目的は解らないけど、あいつ等もウエンディを必要としている」

「となれば……」

「やる事は一つ……」

「ウエンディちゃんを助けるんだ！」

「エルザの為にも……」

「ハッピーもね！」

「ついでにオニオンスライスもブツ倒すぞ！」

「……オラシオンセイスです……イヴさん……」

「おっし！行くぞお……！！」

「……………オオッ……！！……………」

俺達は、別々に分かれてウエンディちゃんの捜索に向かった。  
向かうのは、ナツとグレイとシャルル、ラミアスケイルの三人、ヒ  
ビキを除くブルーペガサスの三人、そして俺とルシアとイヴ。

エルザと一緒に残ったのは、ルーシイとクルスとヒビキ。

俺は念の為にカベカベの能力で、心の壁を張った。ハートフィールドコブラ対策とし  
て。

そして一行は、闇ギルドと遭遇した。

「ヒヤッハー！俺達あ闇ギルド、道楽の道化だあ！フェアリージャ  
ツジメント、テメエの首を獲れあ俺達の名が上がるな」

サーカスの一団の中から、赤っ鼻をした奴が言っ「誰が赤っ鼻だ  
コラー！！」地の文読むなよ…。

「フェーフエフェエ、俺様は銀狐の酒場だ。身包み剥いでやるぜ  
！」

黒いマスクをした一団の中から、割れ頭をした奴が言っ「…割れ  
頭…」落ち込むなよ…。

「聞こえているわよ、アンタ達の場所が…」

「見えてたぜ、お前達の行動が…」

「我らアカラス諜報部隊が始末してやる！」

やっぱニードレスの地獄耳女と覗き男が出てk「誰が地獄耳女よ！  
「誰が覗き男だ！」さつきから心読まれてる様な…心の壁張ってる  
よな？」

「アンタ達、私が溺れさしてあげるわ」

「アンタ達、私が埋めてあげるわ」  
「私たち、コーラルフェルゼンがね！」

こっちはニードレスの濡れ女と土女か。厄介だなこれd「誰が濡れ女よ！」「誰が土女よ！」俺…読まれやすいのかな？  
でもこっちだつてウエンデイちゃんが待っているんだ！こんな雑魚共に構ってられるか！

「邪魔だから片付けるぞ！」  
「おっしやー！」

俺は虹のオーラを纏い、

「換装、ザ・ファイター闘士！」

イヴは鉄状の籠手を出した。

「行くぞ！」

そしてあつと言つ間に片付いた。「……」早過ぎたる！？」「」  
「……何か言ってるみたいだが、スルーした。」

「客人…後は…頼…む…」

「客人？」

「いよおクソ神父、久しぶりだな！」

「……？」

ギアス達は声が出した方向に向いた。

「いつぞやの時は随分と世話になつたな。ハエが！」

「あの時の借りを返しに来たぜ！フェアリージャッジメント！」  
「て、テメー等は……」

こいつらは確か……

「誰だ？」

ズテイン

その場にいた者（イヴ以外）全員ずつこけた。  
マジで誰だこいつ等？

「元アイゼンヴァルトのエリゴール様だ！」

「元スパイダーズネットのカフカ様だ！」

「ギアス……前に潰した闇ギルドのエースだよ……」

「いたつけこいつ等？」

「いたよ！エリゴールはマスター達を呪殺しようとした奴で、皆と一緒に倒したじゃない。カフカはエリゴールの前にギアスが一人で倒したけど」

「ん………ああつ、蜘蛛男と死神野郎か！」

「「今頃思い出したんかい！」」

「すごい溜めだったね」

お前ら印象薄いから忘れてたぜ。えっ、エリゴールは？一度簡単に倒した相手の事なんかいちいち覚えてらんないし。

「俺達はギルド亡き後、オラシオンセイスイ傘下のギルドで用心棒として渡り歩き、この日を待っていた」

「俺はオラシオンセイスイ傘下じゃねえが、境遇が似ていたエリゴールとコンビを組み、貴様に復讐する日を待っていた」

「死神と…」

「斬糸の…」

「復活の日をな！」

「ご苦労なこつて…。」

「よつするに…あんたら永田にリボンを結びに来たの？」

「…は？」

「イヴ…俺の名はギアセルシアだからな。後、リボンを結ぶじゃなく、リベンジマツチな」

相変わらずイヴはバカな子だな。つか、俺は永田かよ…。  
エリゴールとカフカとの戦闘が始まった。

「行くぞ！」

「かかって来いや！」

しばらく戦闘が続いた。

「くそつ…こいつ、以前よりレベルが違い過ぎる！？」

「ばかな！？傷一つ付けられないだ！？」

「こちらお前らと遊んでる場合じゃねえんだよ！ウエンディちゃん  
が俺の助けを待っているんだ！とつととどけよ！！」

「余裕がましてんじゃねー！これで細切れになれ！合体魔法！！」

「ユニゾンレイドだつて！？」

へへ、少しは楽しめそうだな。

「喰らえ！サウザンド・スレッド！！」

カフカの大量の糸をエリゴールのエメラ・バラムに乗せて放たれた。だが、イヴとルシアを風で飛ばした後、ルシアはイヴを掴んで飛んだ。

そして、二人のサウザンド・スレッドがギアスを襲った。

「どうだクソ神父！俺達だって遊んでたわけじゃねえ！」

「貴様に復讐する為にずっと魔力を高める修行をしてきたからな！」

煙が晴れると、そこには、

「下らねえなー」

「何い！？」

無傷のギアスがいた。

ジュビアの魔法で、身体が水になっていたの、受け流しました。ちよっとした自然系ロキアじゃねこれ。

「散々べちゃくちや言っておきながら、こんなモンかよ。折角ユニゾンレイドだって言うから期待したのに、時間の無駄だったな」

「なっ！？」

「これでぶっ飛べ！ゴムゴムの、銃乱打ガトリング！！」

「グガババババババババツ！！！？」

エリゴールとカフカはぶっ飛んだ。

「（か…敵わねえ…）」

よし、片付いた。ってそうだ！

「おいコラ！ウエンディちゃんの居場所をとつと吐きやがれ！寝てんじゃねーぞコラ！」

「鬼だね…」

「ボクも尋問するー」

イヴと二人で尋問をしたら、西の廃村にあると言われ、すぐに向かった。

着いた途端にナツ達と合流した。

「あつ、お前ら！」

「ヤツホー」

「そつちもここに辿り着いたのか？」

「そうだよ。シャルル、無事だった？」

「こつちのオス共は好戦的だったわよ」

「それよりも、ハツピー！」

「ウエンディちゅわああん！！」

「わっ！？ちよつと、敵がいるかもしれないのよ！？」

すると、何かがものすごい速さでこつちに来た。

俺はスピードで間一髪避けたが、他の皆が喰らった。

オラシオンセイスの一人、レーザーだった。

「またあいつだ！」

「ナツ！ここは俺達が足止めをする！」

「お前は早く下に行け！」

「おしっ！」

「フン、行かせるかよ！」

「させるか！」

俺はセツナのスピードとジェットハイスピードの神速で何とか奴の遅延魔法に付



いてくれたので、

「何！？グアツ！？」

すかさず頭突きをかまし、レーザーの魔法を覚えた。

「よし」

「奴も早いけど、お前も早いな」

「セツナとジエットのおかげさ」

そしてナツはこれを好機と見て、シャルルとルシアに運んで貰おうとしたら、二人とも気を失っていた。

「しゃーねえ、これで行って来い！」

グレイは氷の道を造り、ナツはシャルルとルシアを抱えて滑って行った。

ルシアは連れていく必要無かったんじゃないか？

「てめえら…この俺の走りを止めたな」

「頭突きを避けりゃ良かったんじゃないかねえか」

「こっから先は行かせねえぞ！」

俺とグレイは、レーザーの足止めをする為に戦闘を開始した。

「くっ！？」

「このっ！」

瞬間移動の如く移動するレーザーに苦戦するグレイ（ギアスは紙一重でかわしている）。

「何て速さだ…野郎！」

「ああも早く移動されつと、目が追い付かねえ」

「俺のコードネームはレーサー！誰よりも早く、何よりも早く、ただ走る。ん？」

レーサーは頭上を見た。

空には、ハッピーとナツとルシア、シャルルとウエンディちゃんがいた。

「助け出したか！」

「ウエンディちゅわああん！」

「バカナ！？中にはブレインがいた筈だろ！？どうやって!？」

「ぶちのめしたに決まってるんだろ！」

「クソツ、行かせるか！」

「ナツ、避けるお！」

レーサーは、ナツ達を蹴り落とした。

「ウエンディちゃん!？」

俺は急いでウエンディちゃんをキャッチした。危ない所だった。

ナツも起き上がり、ハッピーとルシアを抱えて去ろうとしたので、一緒に去った。

「行かせねえって言ってんだろ！」

「アイスメイク…ランパート城壁!!」

「グホツ!？」

グレイが氷の壁を造り、レーサーが激突した。

その氷の壁は広範囲まで広がった。

「グレイ……」

「行けよ……ハア……こいつぁ、俺がやるって言つたる……ハア……ハア……」

「けどお前、今のでかなり魔力使っただろ!?」

「いいから行きやがれ!ここは死んでも通さねえ!行け、エルザの所に……!」

「グレイ……」

「……うおおお〜!必ずエルザを助けるからな……!」

俺達は、エルザの下に向かった。

## 天空の巫女と少女と亡霊（後書き）

覚えた魔法

レーザーの体感時間低下魔法

覚えたフラグメント

エゴイックロータス  
気功方士

サンジ化したギアスはとてつもなく変態に見えてしまいました。  
次回はオリジナルな展開にします。ナツがジェラルルの事を言った  
ので、ジェラルルの後を追っていると、コブラと遭遇する。

## カフカ設定（前書き）

最初の噛ませ犬です。  
後にオラシオンセイス編でリベンジします。

## カフカ設定

所属

スパイダース ネット  
蜘蛛達の網 オラシオンセイイス  
六魔將軍傘下の闇ギルドの用心棒

リーダー

カフカ

名前

カフカ

二つ名

斬系のカフカ

魔法

カンダタストリング  
鋼鉄斬系

糸を自由に操ることができ、その糸を切れるのは神だけだと自称する。用途に応じて太さ、硬さなどを調節できるが「味濃い目」など意味不明な微調整も可能。

設定

原作ニードレスのカフカ

ニードレス最初のやられキャラだから、成長したギアスの最初の相手として登場

アイゼンヴァルト  
後に鉄の森の死神エリゴールとコンビを組んで、ギアスに復讐しようとした。

## カフ力設定（後書き）

と言っても、あっけなくやられますけどね（笑）。

## デッドグランプリ〜追憶のジエラール（前書き）

ここからはオリジナルな展開です。

ギアスがコブラとバトルして、意外な結末に！？



## デッドグランプリ〜追憶のジェラール

ワース樹海

俺とナツとイヴは、ウエンディちゃんとハッピーとルシアとシャルルを抱えて、エルザの所に走っていた。  
ちなみに俺はウエンディちゃんをお姫様だっこしています。後ドサクサに紛れてウエンディちゃんの魔法を覚えました。

「ん…あきゆ…」

「大丈夫かハッピー」

「ナツ…ここどこ？」

「喋るな、しばらくそのまま休んでろ」

「でも、ジェラールが…」

「ジェラール…あの野郎、何でこんな所にいやがるんだ！」

「！？ジェラールだと！？」

「ああ」

「誰の事？そのジユラルミンってのは？」

「ジユラルミンじゃなくて、ジェラールな」

良かった。原作通りな展開になってるな。

「何故ジェラールが？あいつは確か、俺が踏み潰した筈だけど」

「よく解らねえけど、ピンピンしてたぜ」

「…なあナツ」

「何だ？」

「ウエンディちゃんを頼めるか？」

「あ？何でだよ？」

「ジェラールを探す」

「！？ギアス、お前…」

「エルザの事もある、あいつが何でいるかも含めて聞いたですつもりだ」

あいつの今の状態が気になるしな。

「…分かった。ウエンディは任せろ！」

「ああ。ルシア、辛いだろっが、行くぞ」

「らっ！」

俺はナツ達と別れた後、ジェラールを探しに向かった。すると、

ドカーン

激しい爆音が聞こえた。

「何、この爆音は！？」

多分、グレイとリオンがレーザーを倒した後、レーザーが自爆した音だろう。

早くジェラールを探さないと、えっつと…ジェラルルの匂いはつと…よし、こっちだ！

ギアスは匂いを頼りに走って行った。

ワース樹海最深部、コブラサイド

俺はジェラルルの足音を聴いて追いかけてきたが、それにしてもこいつ…心の声が聴こえねえ。心の声さえ聴こえれば、後をつける必要もねえのn…ん？何だ？誰かが近づいて来る足音が聴こえる！？コブラは直ぐに足音が聴こえる方に向いた。

「（誰だ、誰が近づいてやがる！？心の声が聴こえねえ、一体誰が！？ジェラルルの後をつけなきゃならねえって時によ！）」

コブラは警戒した。

すると、誰かが近づいて来るのが見えた。

「（あいつは！？）」

フェアリーテイル最強の男、フェアリージャツジメントが来やがった！？

サイドエンド

ジェラルルの匂いを辿って来たけど、途中変な匂いが邪魔してるな。すると、誰かが道を妨げた。

「お前は！？」

毒蛇を連れた魔導士、コブラが現れた。

「テメエ、何でここにいやがる？」

「ジェラルルの匂いを辿って来たんだ」

「なるほど。だが、ジェラルルには近づけさせねえぞ！」

「邪魔する気か！」

「ニルヴァーナを手に入れる為だ！」

お互いが臨戦態勢を取った。

「ルシア、お前は少し離れてろ」

「うん、分かった」

そう言っただけでルシアは離れた。

「行くぞ、コブラ！」

俺とコブラの戦闘が始まった。

ある程度の攻防戦だったが、隙をついて頭突きをかまし、コブラの魔法を覚えた。

すると、コブラの声が聴こえてきた。

「（くそ、フェアリーテイル最強だけあって、中々強え…それに、段々押され始めてきたか…）」

相当焦ってる様だなコブラ。

「中々強えじゃねえか、聖十の称号は伊達じゃねえみてえだな」

「（それにさっきから奴の声が全然聴こえねえ、こんな奴初めてだ…）」

コブラって、心の声が聴こえなくなると呆気ないのかな？

「（こっぴごうなったら奥の手だ！）」

コブラは突っ込んで来た。

ギアスは咄嗟に受け止めたが、

「（今だ！）」

コブラの手が変わっていき、赤黒い瘴気が吹き出していた。

コブラの魔法を覚えてるからそんなには効かないけど、一応喰らったフリをしないと、

「ぐあつ、熱い〜！？（やや棒読み）」

コブラの両腕が変わり、ドラゴンの腕になった。

「毒竜のコブラ、本気で行くぜ！」

「お前まさか…」

「ドラゴンスレイヤー！？」「」

ルシアと一緒に叫んだ。

「かーーーーーっ！！！」

コブラの猛攻に怯むギアス。

毒の事を一応言った方が良いかな？

「何だこりゃ？喰らう度に痺れが…」

「毒竜の一撃は、全てを腐敗させ、滅ぼす」

「だったら、その毒ごと吹き飛ばしてやるよ！」

「腐れ落ちろ！毒竜、突牙！！！」

コブラの魔法陣から毒蛇のごとく形をしたエネルギー波を飛ばしてきた。



「な、早い!?!」

「ライフル回転銃!?!」

「ブフアアアツ!?!」

ギアスの姿を捕え切れず、攻撃を喰らって吹き飛んだコブラ。すると、キュベリオスがコブラに近づいた。

「おお…キュベリオス…毒を吐いてくれ…」

キュベリオスは毒の霧を吐いた。

「毒の霧?やばい!?!」

するとコブラは、毒の霧を吸い込み、食べた。やっぱ体に悪そうだな…。

「ふう〜、食ったら力が湧いて来た!」

「真似すんな!」

つい言っちゃまった…。

「これで朽ち果てる!毒竜の…」

「しまった、ブレスか!?!」

「まずいよ!?!」

「咆哮!?!」

赤黒い毒のブレスがギアスとルシアを襲った。ギアスはコブラの魔法を覚えてるからたいして効かないが、ルシアは毒を受けた。

「何だ、たいして効いてん…あれ？」

ギアスは片膝を付くフリをした。

「ギアス…僕…体が…うまく…動かなくて…」

「どうなっついていやがる…」

「ハツハツハツハツ、毒竜のブレスは、ウイルスを体に染み込ませる。そして徐々に体の自由とその命を奪う！」

「くそっ、せめてルシアだけでも…」

ギアスは、ルシアに天空魔法を掛けて毒を治療した。

「！？天空魔法だと！？」

「言つとくが、自分自身に天空魔法は掛けられねえ。テメエの毒をテメエで食べねえのと同じだ」

「なるほど、その猫だけでも毒を治したかったって訳か。随分と甘い奴だな」

「お前だつて自分の相棒が怪我したら治してえだろ？」

「……………まあ、そうだな…」

コブラはキュベリオスを撫でながら言った。

「だが、俺のブレスを喰らった瞬間、テメエの敗北は決まって「ウラアアー！」どわっ！？」

「毒なんかいちいち気にしてられっか！」

「（人の話聞いてんのかこいつは！？）」

本当に毒は効いてないからな。

「テリヤー！」



「グアツ!？」

「ちっ、しぶてえな」

「そりゃテメエだろ!しかし、俺の毒を喰らってまだこれほど動けるとはな、旧世代のドラゴンスレイヤーにしてはやるじゃねーか」

「あん?旧世代だあ?」

あの台詞が来るのか?

「俺は自らの体内に、竜のラクリマを埋め込む事によって、竜殺しの力を手に入れた、新世代のドラゴンスレイヤー!」

「マスターの言ってた、滅竜魔法のラクリマの事か?」

「ラクサスと同じだ!あいつ…本物のドラゴンスレイヤーじゃないよ!」

「本物?元々ドラゴンのみが習得しているという滅竜魔法を、人間が習得する術は無え!俺から言わせれば、テメエの方が怪しいぜ!この世界にドラゴンなんていねえんだからな!」

ブチッ

こいつ、今なんて言いやがった?

俺の記憶は確かにプリズレイヤーと過ごした記憶はあるんだ!それをこいつは…否定しやがった!

「テメエ…それ以上言ってみろ…ブチのめしてやるぞコラア!」

ギアスは怒りでハートフィールドを解いてしまった。

「(プリズレイヤーは…母さんはいるんだ!!)」

「(やっと奴の声が聴こえてきたな)いねえよ!ドラゴンは絶滅したんだあ!」

「勝手に殺してんじゃねー！」

「聴こえるぞ、テメエの動きが！毒竜、そつが双牙！！」

「グハアツ！？」

ギアスは毒の二閃を喰らった。

「（くそっ、何かあいつ、急に動きが良くなった様な…あっ！？ハートフィールドが解かれてる！？）」

「（ハートフィールド！？そうか、それで奴の声が聴こえなかったのか）」

ギアスは再びハートフィールドを張った。

「（ちっ、また奴の声が聴こえなくなっただな。だが、あれだけの毒を喰らったんだ、もうじき奴の身体は朽ち果てる！）」

だから毒はもう大丈夫だったの。

「ギアス、早くあいつを倒さないと、ギアスの身体がもたないよ！？」

「分かってる」

「無駄だ！天空魔法も自分に効かないんじゃないやどうしようもないな！」  
「だったら…！」

ギアスは一瞬でコブラを掴んだ。

「何！？」

「テメエの毒竜の力、覚えさせて貰うぜ！」

ギアスはもう一回頭突きをした。

「ガハツ!?!」

「覚えた!」

「やったあ!」

とつくに覚えてるけどね。

「よし、毒は俺の栄養になつたな」

「バカな!?!」

「さあて、判決の時だ!」

「くっ!?!」

コブラは距離を取った。

「毒竜の咆哮!」

コブラは再び毒のブレスを吐いた。

「ギアス!?!」

「毒は…もう効かねえ!」

ギアスは毒竜の咆哮を吸い込んで、食った。

「なっ!?!俺のブレスが!?!」

「ぷは〜、食ったら力が湧いて来た。テメエの毒の滅竜魔法を覚え  
たから、毒も好物には言っちゃまったからな」

「バ、バケモノかお前は!?!」

失礼だな。

「隙あり、ネ拘束チューブ！」

ギアスの放ったチューブがコブラの身体に纏わり付いた。

「何だこりゃ！？こんな物、俺の毒で腐らせてやる！………ってあれ？魔法が使えねえ！？」

「ネ拘束チューブに絡まれた物は、そいつの魔法を封じる事が出来るんだよ」

「何！？」

「さあ泣き叫べ！判決の時だ！」

ギアスがコブラに仕掛けようとしたら、ギアスの左腕に何かか噛み付いてきた。

「ん？」

キュベリオスだった。

「キュベリオス！？」

「なかなか主人思いの蛇だな。もう少し前だったら終わってたが、毒竜の力を持つてる今の俺に、毒は効かねえよ！」

ギアスは右手に炎を溜めた。

「キュベリオス！？止めるおおおおー！………っ！………？」

コブラは泣き叫んだ。

攻撃しようとした瞬間、ギアスはある事を思い出した。

そっぴやこの蛇って、呪われてこうなってるんじゃないっけ？取り合えず確認をとる為にコブラの方に向いた。

「なあコブラ」

「な、何だ!？」

「この蛇、呪われてるぞ」

「何い!？（キュベリオスが呪われてるだと!？）」

驚いた様子のコブラ。

「取り合えず呪いを解いてみるか」

「えっ!？」

ギアスはキュベリオスの掛けた呪いを解いた。

すると、紫の毒蛇はみるみる人間の女性に変わっていった。

女性は気を失ったようだ。

「えっ、女の子!？」

「キュベリオスが…女に…!？」

「あれま」

蛇から元に戻った女性は…全裸だった。

全裸の女性なのに何落ち着いているのかって？愚問だな、少女幼女以外の裸見たって面白くもなんともないからな。

「どわっ!？と、取り合えず、これ着させねーと!？」

コブラは咄嗟に、自分の着てたコートを女性に着させた。

「どゆ事コレ？」

「いやこっちが聞きたいよ!？」

「キュベリオスが…人間の女に…なったなんて…」

「どちらかと言うと、元々人間だったが、呪われて蛇になったんじゃないのかな？」

「ん…」

女性が起きた。

「……きゃあああああー！ー！ー！ー！？あなた達、誰キナ！？」

「えっと…どこから話せばいいかな？」

啞然としているコブラはスルーして、自己紹介をした。

「俺はギアセルシア。こっちは相棒のルシア」

「よろしく」

「よ、よろしくキナ」

「んで君は？」

「私は…キナナですキナ」

「キナナ…」

コブラがキナナの名前を呟いていた。

「でキナナ、何で蛇の姿になってたんだ？」

「えっ、蛇に！？嫌ですキナ！蛇は嫌ですキナ！」

何か、コブラがショックを受けてる様な…。

「えっと、覚えてる範囲で良い、何か思い出せるか？」

「えっと…キナナは楽園の塔で奴隷にされてたキナ」

「「楽園の塔！？」」

「キナナも…楽園の塔に…」

「そこから逃げようとしたら見つかって、魔導士達に呪いを掛けられた後、気が付いたらあなた達がいたキナナ」  
「!?!?なあ、俺は…覚えてないのか!?!?」

コブラはキナナに詰め寄った。

「えっと…すみません、どなたですかキナナ？」

「!?!?……………そうか……………」

何か…コブラからものすごい哀愁感が漂って来てる様な…。

「(まさかキュベリオスが…いやキナナが、俺を覚えていないなんてな…だが…キュベリ…キナナの声が聴けただけでも良いか…)」

何か…泣けてくるんだけど…。

「とにかく、ここにいたら被害に遭うな。ルシア、キナナを安全な所に」

「ら〜ら〜!」

ルシアはキナナを連れて飛んで行った。

「さてと…コブラ、お前はどつする?まだやるか?」

「……………」

「コブラ?」

「いや、もう戦う気はしない。それに…」

コブラはキナナの方を見ながら、

「俺の祈りは…達成されたからな」

「何が達成されたんだ？」

「オラシオンセイスは二つの目的があつて行動していたんだ」

「二つの目的？」

「一つはオラシオンセイスとして、二つ目は…自分にとって叶えたい何かの為に行動してたんだ」

「叶えたい何か？」

「俺の祈り、それは…たった一人の友の声を聴く事だった。それが叶えられた今、俺はどうしたらいいか分からないんだ」

こいつ…悩んでるのか。

「正直お前がこれからどうしようが知った事じゃないが、俺はニルヴァーナを止める為にジェラルルを追う」

「……………」

「俺を倒してジェラルルを追うか、あのキナナって子の側にいたいのか。決めるのはお前だからな」

「……俺は……………」

コブラは何かを決めた様だ。

「俺はキュベリオスを…いや、キナナが平和に暮らせるようにする為に、ニルヴァーナを止める！」

おいおい、いいのかよ!？

「いいのか？それじゃお前はオラシオンセイスを裏切る事になるぞ？」

「構わねえさ。それでキナナの笑顔が見れるのなら、俺はそれで良い！」



マジかよ!?

「惚れたのか?」

「なっ!?(今まで友だと思ってたのが、実は人間の女だった思ったら、ドキドキしまってたな)」

「なるほど。お前の本音、聞いたぜ」

「げっ!?!今聞いた事全部忘れる!?!すぐ忘れる!?!今忘れる!?!」

むっっちゃ焦ってるなコブラ。

「ったく、テメエと話しているとバカバカしくなるな」

「ほっとけ、それよりも、早くジェラールを探さねーとな。行くぞ

コブラ」

「…アレックスだ」

「はっ?」

「俺の本当の名だ。それより急ぐぞ!」

「……俺の事はギアスって呼んでくれよな」

ギアスはハートフィールドを解いた。

よろしくな、アレックス。

「!?!?ああ!」

俺とアレックスは、ジェラールを追いかける為に、樹海の奥へと進んだ。

ワース樹海最深部、ニルヴァーナ封印場所

ギアス達は小声で話してると思っして下さい。

「やっと追い付いたなアレックス」

「あいつの心の声がまったく聴こえねえから、探すのに苦労しちまったがな」

「俺の嗅覚とお前の聴覚のおかげで何とか辿り着いたな」

そう、ようやくジェラルルの所に辿り着いたのだ。

そしてジェラルルは、鎖で繋がれた光る大樹の前で立ち止まった。

「止まったな」

「ああ」

「まさか、ここがニルヴァーナが封印してある場所か？」

「多分な」

そしてジェラルルは大樹に手を付けた瞬間、大樹から強烈な黒い光が飛び出た。

「う……うあああ……ああ……」

「！？アレックス！？」

まさか、ニルヴァーナの影響で……アレックスが！？この場合、善と悪、どっちに傾くんだ！？

幸いジェラルルの方は、ニルヴァーナが復活してる音でアレックスの呻き声は聴こえてないみたいだ。

するとアレックスは、

「……俺は愛の為に生きる！」

「……………はあっ！？」

「正直、俺は今の今まで迷っていた。だが、何が一番大事かと考え

たら、キナナへの愛が一番大事だと気が付いたんだ！  
「はあ……」

どうやら善の方に向いたみたいだね。目がとても澄んだ目をしてるし。

その時、エルザが現れた。

「エルザ！？いつの間に!？」

「この俺が接近に気付かないなんて!？」

とにかく、様子を見るか。

「ジエラール……」

「エルザ……」

「お……お前……どうして……」

「分からない……」

しばらく沈黙が進んだ。

「エルザ……エル……ザ……」

「……?」

「その言葉しか……覚えていないんだ……」

「え?」

「……!？」

「教えてくれないか？俺は誰なんだ？君は俺を知っているのか？エルザとは誰なんだ？何も……思い出せないんだ……」

「ジエラール……」

それを聞いてたギアス達は、

「ジェラルルの奴…」

「記憶が無えのか!？」

するとエルザは、ジェラルルに近づいた。

「ジェラルル」

「く、来るな!？」

ジェラルルはエルザに光弾を放った。

「く…来る…な…」

「ならばお前が来い!私がエルザだ!ここまで来い!」

エルザ…記憶が無い相手にそんな強く言ったら怯えるぞ普通。

「同感だな」

アレックス…今は空気を呼んでくれ…。

「スマン…」

エルザの方は、

「お前の名はジェラルル、私のかつての仲間だ」

「…仲間?」

「だが、乱心したお前は、死者を冒瀆し、仲間を傷付け、評議員さえも破壊した」

涙を流すジェラルル。

「それを…それを忘れたと言うつもりなら、心に剣を突き立てて、刻み込んでやる！ここに来て！私の前に来て！！」

「俺が…仲間を…そんな…俺は…何という事を…俺は…俺はどうしたら…」

泣き崩れるジエラル。

「（これが…あのジエラル…）」

エルザはそう感じていた。

でも、記憶が無くなったからって、同情は出来ない。あいつの仕出かした事は、とても重いからな。

「それは…俺にも言える事だな」

アレックス…。

すると、ニルヴァーナの光が白くなった。

「だが腑に落ちないな…」

「どうしたアレックス？」

「奴は記憶が無いんだろ？どうやってここが分かったんだ？それに、何故ニルヴァーナの封印を解いたんだろうか？」

「そっぴやそっぴやだ。んじゃ聞いてみるか」

俺とアレックスはエルザの近くに寄った。

「エルザ！」

「ん？その声はギアス…とオラシオンセイス！？」

剣を取り出すエルザ。

「待ったエルザ！？アレックスはもう敵じゃない！」

「！？どう言う事だ？」

「かくかくしかじかという訳だ」

「全然解らないが？」

やっぱそう都合良くいかないか…。

「こいつはさつき、ニルヴァーナの影響で良い奴になっちまってよ  
「ますます解らんが？」

「言ってみりゃ、良い奴と悪い奴の性格を入れ替える魔法なんだよ、  
そのニルヴァーナは」

「何！？そうか、そうゆう事か」

一応理解したみたいだな。

「それでジェラルド、お前は何でニルヴァーナの封印を解いたんだ  
？」

「眠っている時に、誰かの声が聞こえた。「ニルヴァーナを手に入  
れる」と、微かにその魔法と、隠し場所は覚えていた。これは危険  
な魔法だ。誰の手にも渡してはいけない。だから、完全に破壊する  
為に、封印を解いた」

「何！？」「」

「ニルヴァーナを破壊する…だと？」

「自律崩壊魔法陣じりつほうかいまほうじんを既に組み込んだ。ニルヴァーナは間もなく、自  
ら消滅するだろう」

自律崩壊魔法陣、組み込まれたモノを自壊させる魔法。

「すげー高度な魔法陣だな」

「これで…ニルヴァーナが破壊できる」

その時、ジェラールは倒れそうになった。

「……!?」「」

「エルザ…その名前からは、優しさを感じる。…優しくて、明るくて、温かさを感じる…」

「……」「」

「きつと君は俺を憎み続ける、それは仕方ない、当然の事だ。しかし憎しみは、心の自由を奪い、君自身を蝕む…ゴホツゴホツ…」

「お前…はっ!?!」

エルザはジェラルルの胸に刻まれてるモノを見た。

「俺はそこまで行けない…君の前には、いけない…」

「ジェラール、お前!?!」

「ジェラールから、解放…され…るんだ…君の憎しみも…悲しみも…俺が…連れて行く…」

ジェラールは倒れかかる。

「自らの身体にも、自律崩壊魔法陣を!?!」

「ジェラール…お前という奴は…」

そして、

「君は…自由だ…」

ジェラールは倒れた。

「ジエラー……ル……!!」

エルザの悲痛な叫びを上げた。



## デッドグランプリ〜追憶のジェラール（後書き）

コブラとの戦いは手短にするつもりだったが、つい長く書いてしまいました。

コブラの本名を勝手に決めました。

新作の投票もお願いします。

覚えた魔法

ウエンデイの天の滅竜魔法

コブラの毒の滅竜魔法と心を聴く魔法

初登場の滅竜魔法

虹竜の鉤爪

かぎづめ

今回はオリジナルの展開、最強の奴らがギアスを襲う。

**破滅の行進、邪神の断片、強襲（前書き）**

途中までが原作通りですが、ニルヴァーナが復活した後からオリジナルストーリーです。

破滅の行進、邪神の断片、強襲

ワース樹海最深部、ニルヴァーナ封印場所、エルザサイド

ジエラールは、エルザの悲しみと憎しみから解放する為に、自律崩壊魔法陣でニルヴァーナと自分自身を消えようとしていた。

「ジエラール!？」

私はジエラールの下に駆け寄った。

「許さん!このまま死ぬ事は私が許さん!お前には罪がある!思い出せ!何も知らぬまま楽になれると思うな!」

ジエラールは反応を見せなかった。

「生きて足掻けっ!！」

ジエラールの目が開いた。

「ジエラール!！」

「…エルザ…何故…君が涙を…」

言われて気付いた、私は涙を流していた事に。

「優しいんだな…」

「!?!ジエラール!?!すっかりしないか!」

その時、背後から誰かが近づいてきた。

「これは一体何事か？」

「ブレイン!？」

「オラシオンセイスのボスか!」

ギアスとコブラはそう言っていた。

オラシオンセイスの司令塔、ブレインが現れた。

「自律崩壊魔法陣……」

ブレインは、ジェラルルが組み上げた自律崩壊魔法陣を見上げていた。

「コブラ、何故貴様がそいつらと共にいる？」

「俺は愛に目覚めたんだ!もうオラシオンセイスとは協力しねえ!悪いがブレイン、アンタとは縁を切らせて貰う!」

「アレックス……」

オラシオンセイスのメンバーである筈のコブラがここまで言うなんて、先程言っていたニルヴァーナの影響だろうか？

「何があつたか知らないが、ニルヴァーナの影響か」

「アンタの欲しがつてたニルヴァーナも、ジェラルルが組み込んだ自律崩壊魔法陣で消滅する!アンタの計画は、これで終わりだ!」

「ふふふ……ふははははは!」

「?何が……おかしいんだ?」

どういう事だ?解除コードはジェラルルしか知らない筈、なのに何だこの余裕は?

「愚かだなジェラールよ。私が何故、<sup>ブレイン</sup>脳というコードネームで呼ばれているか知っておろう？私がかつて魔法開発局にいた。その間に我が知識を持って造り出した魔法は、数百にもものぼる。その一つがこの、自律崩壊魔法陣。私がつめに教えたのだ、忘れたのか？ジェラール」

ブレインが…ジェラールに魔法を教えた！？ではこいつは、ジェラールの魔法の師なのか！？

「自らの身体にも、自律崩壊魔法陣だと？解除コードと共に死ぬ気だったということか？待てよ…ふっ、そうか、エーテルナノの影響で記憶が不安定なのか。ふはははは、なんと…滑稽だなジェラール！」

ジェラールは命を賭けてニルヴァーナを止めようとしたんだ！それを滑稽だと！

「解除コードなど無くとも…」

ブレインは、自律崩壊魔法陣に手を付けた。

「魔法陣そのものを無効化出来るのだよ。私は」

自律崩壊魔法陣が徐々に崩壊していった。

そんな！？自律崩壊魔法陣が！？

「そんな！？」

「マジかよ！？」

「いくら自分の造ったモノだからって、こんなのアリかよ！？」

「ふははははっ！！哀れだなジェラール！ニルヴァーナは私が頂いたあ！！」

「「「させるかあ！！」「」」

私とギアスとコブラがブレインに仕掛けた。

「目覚めよ、ニルヴァーナ！！」

足場が徐々に盛り上がって来た。

「！？ぐあっ！？」

「エルザ！？」

「ニルヴァーナが、復活する！？」

「聴こえてくる…破滅の足音が…光が崩れる音が！？」

「姿を現せえ！！」

足場が無くなって来た。

ジェラールが落ちかかった。

「ジェラール！」

「エルザ！」

エルザとジェラールは、互いに手を掴もうとしていた。

サイドエンド

ワース樹海最深部、ニルヴァーナ封印跡

あつつ…何とか…生きてるな。

「そつだ！アレックスは!？」

「ここだ、何とか生きてるぜ」

「そつか」

俺は上を見上げた。

そこには、円形の黒い物があった。

「あれがニルヴァーナか…」

「ああ、光を崩し、闇へと染め上げる超反転魔法、ニルヴァーナだ」

「…皆、あそこを目指していると思う、俺達も行くぞ！」

「ああ」

その時、

「永田~~~~~！」

「ギアスさ~~~~ん！」

「この声は、イヴとクルスか？」

イヴとクルスが駆け寄った。

「あついた。ギアスさん…とオラシオンセイス!？」

またかい。

「待て待てクルス、アレックスはもう敵じゃない」

「えっ?」

「?」

クルス達に事情を話した。

「そうだったんですか」

「んで島田は良い奴になったの？」

「島田!？」

今度は島田かい…。

「まあ、平たく言えばな…。」

「ニルヴァーナにそんな効果があったなんて」

その時、

「!?!皆伏せろー!?!?!」

アレックスが叫んだ。

何かが襲ってきたのだ。

「何が起きたんだ!？」

「聞こえる…:いくつかもの足音が!」

「えっ!?!」

この時、ギアスは咄嗟にハートフィールドを張った。

「クハハ、あいつがフェアリージャックジメントか」

「ヤッハハハ、楽しみだ」

「これより、任務を遂行する」

おいおい、今度はワンピースの砂ワニと雷神と豹男かよ!?!?



「まだ闇ギルドがいたのか!？」

「いや待て、あいつらは、オラシオンセイス傘下のギルドじゃねえぞ!？」

「えっ!？」

「そうだ、我々はシメオン傘下のギルドだ」

「シメオンだと!？」

「シ…シメオン…!？」

「……シメジ？」

ズーン

イヴ以外全員ずっこけた。

「シメオンです…イヴさん…」

イヴのポケは置いとくとして、シメオン傘下のギルドが来たって事は、シメオンも近くに居るって事か!？

「クハハハ、テメエ等、たたんじまえ!」

砂ワニの一言で大勢押し寄せてきた。

「……我々は、パロック・ワークス秘密犯罪会社、貴様の首を獲る!」

「……我々は、スカイ エンペラー天空の支配者、裁きを与える!」

「……我々は、ダークネス ジャステイス暗黒の正義、大人しく消えて貰おう!」

ほとんどがワンピースで見た事ある敵ばかりだが、

「俺達の敵じゃねー!」

バロック・ワークスは、ロビンを除くMr・1ペア、Mr・5ペアがいたが、ゾロの技で返り討ちにした。スカイ・エンペラーは、ヤギの格好をした雑魚と神官がいたが、こっちはアレックスとイヴで蹴散らした。

ダークネス・ジャステイスは、スーツを着た連中だったが、ギアスの滅竜魔法で一掃した。残ったのは砂ワニと雷神と豹男のみ。

「クハハハ、中々やる様だな」

「ヤツハハハ、余興はこうでなくてはな」

「雑魚共では話にならんか」

三人はギアス目掛けて駆け出した。

「ウォーターロック  
水流拘束！」

「ゴボボボボツ！？」

砂ワニを水で閉じ込めて、

「ウォーターライザー  
水流斬破！！」

「グアアアアツ！？」

水で斬り付けた。

「ゴムゴムの、ツイン回転銃ライフル！！」

「ボアアアアツ！？」

体が帯電してる雷神に強力なゴムの二撃を喰らわした。

「ハアアアアツ！！」

「ガアアアアッ!？」

レーサーの魔法とスピードで、豹男をタコ殴りにしました。

「久々の、判決・・・死刑!！」

マジで久しぶりだな、この名台詞。

えっ、覚えなくて良いのか？雑魚に覚える魔法は無い!

「何とか片付いたな」

「だね」

「そっぴゃクルス、お前さっきから黙ってるようだけど、どうしたんだ？」

まさかとは思うけど、原作ニードレスと同じ内容だったりして…。

「僕の前いたギルドの皆と姉さんを殺したのが、シメオンなんだ…」

「何!？」

「そっぴゃっけ？」

「イヴさん…前にギドさんと一緒に話しましたよね？」

「あり？」

イヴのボケは相変わらずとして、ギドまでいるのか。

「シメオンの襲撃に遭い、姉さんと一緒に逃げてただけで、シメオンの追手が来て、姉さんが僕を庇って…」

「その後、この女とジジイと出逢ったって訳か？」

アレックス…勝手に聴くなよ。

「はい…それでギドさんに拾われた僕は、近くにあったギルド、ケ  
ット・シエルターに身を置く事になりました」

「それにしてもシメジの奴ら、何でこんな所に来たんだ？」

「まさか、奴らもニルヴァーナを手に入れようと…」

その時、

「そんな物に興味は無い」

「『『『『!?!?!?』』』』」

俺達は、声のする方へと向いた。

そこにいたのは、

「まさか…俺が気付かないなんて…」

「ニルヴァーナよりもっと興味がある事があるからな」

「まさか…あれが…」

原作ニードレス最強の敵、

「久しぶりだな、兄弟」

「シメオン！」

アダム・アークライトがそこにいた。

破滅の行進、邪神の断片、強襲（後書き）

クロコダイルファンとエネルギーファンとルッチファンの皆さま、雑魚つばい扱いをして申し訳ありませんでした。

次回はシメオン四天王と戦います。四天王はある意味ファントムのエレメント4つばい感じにしちゃいました。

## シメオン四天王（前書き）

原作ではナツVSコブラだったが、コブラが味方になった為、ナツを止めたのはブレインという事にしました。

という流れはダメでしょうか？

話は変わりますが、アークライトって、キング・オブ・ファイターズの八神庵に似てると思うのは自分だけでしょうか？

## シメオン四天王

ワース樹海、ニルヴァーナ封印跡

おいおいおいおいおい…よりもよって、ニードレス最強のバグキ  
ヤラが出てきたよおい…。  
しかも、四天王みたいなのもいるし…。案の定一人だけ仮面付けて  
るし。

「私は、アダム・アークライト、シメオンのマスターだ」

やっぱりマスターやってたのが、アークライト…。

「シメオンが何故ここに!？」

クルスがそう言った。

「ギアセルシア・ニードレス…」

「あん？」

「久しぶりだな」

いきなり何言っただこいつ？

「おいギアセルシア、アークライトと知り合いなのか!？」

ギアスは一時的にハートフィールドを解いた。

「いや全然知らん」

「どうやら本当に知らないみたいだな」

再びハートフィールドを張った。

「まあ、知らないのも無理は無い。何せ貴様とこうして顔を合わせるのはこれが始めてなのだからな」

「はあ、何だそりゃ？」

まさかとは思うが、原作ニードレスと同じ出生って事なんじゃ？

「簡単に言えば、私と貴様は、同じ場所で生まれたのだよ」

「……?!?」「……」

「つまり、私と貴様は…兄弟だ！」

「何い!？」

「ギアスさんとアークライトが…兄弟!？」

「…の割に、全然似てないよね？」

イヴ…いい加減ボケはやめろ。

「俺の…兄弟だと?」

「厳密に言えば、ある実験で生まれた産物同士だ」

「ある実験で生まれた産物同士?」

「まさか、人体実験とかで生まれたとか!？」

クルスがそう言った。

「そう、私たちは神を造り出す為に生まれた神のクローンなのだ！」

「……?!?」「……」

おいおい…まさかそこまで同じとはな…。



「神を造り出す実験だと？一体何の為に？」

「知る必要は無い、ギアセルシア以外は必要無いのだからな」

「！？皆来るぞ！」

俺達は戦闘態勢に入った。

「行け、凜」

「はい、アークライト様」

手前にいた眼鏡をかけた女性が突っ込んで来た。

「どんな相手が来ようと、元オラシオンセイスの俺に攻撃は当たらねえ！」

「それはどうかしら？」

凜が何かをやるうとしていた。

「！？何だ！？体が…重い…それに耳鳴りが…！？」

「ふふふ…」

「このー！」

イヴがドリルの腕を換装した。

「行けー！」

「ふっ…はっ…！」

凜がイヴに向けて手をかざした瞬間、イヴは吹き飛んだ。

「グアッ…！？」

「イヴさん!？」

「くそっ…どうなつてやがる!？体が…言う事をきかねえ、それに  
すごく耳が痛え!？」

「あんた耳良いんだっけ？残念ねえ、お馬鹿さん」

「ギャハアー!?!？」

アレックスも見えない何かに吹き飛ばされた。

「私の魔法はそこらの魔導士と違うわよ」

「みてえだな」

「あいつ、何か見えない爆弾でも使つてんの？」

「それに、何だこの気分の悪さは？」

「まるで、高い所にいる気分だな…」

さり気なくヒントを言ってみました。

つか凜の魔法は解つてるからな。

するとクルスが、魔法で出来たボードで何かを整理してる仕草をして  
いた。

「謎の頭痛…見えない爆弾…高い所にいる気分……そうか!」

「何か分かったのかクルス!」

「あの人は、空気を圧力に変える魔導士なんです!」

「何!？」

「圧力!？」

「へへ、良く分かったわね」

やっぱ原作通りか。

「て事は、空気魔導士か!」

「私をそこらの空気魔導士と一緒にしないでくれる!私のは空気魔

法の上位に位置する圧力魔法よ！」

「空気魔導士改め、圧力魔導士って訳か」

「じゃあ、この気分の悪さは一体何なの？」

「多分あの人は、僕らの周りの空気を一気圧程上げた所為でこうなっているんです」

「それも正解。言ってみれば高山病や潜水病みたいに、人体に変調を引き起こす！」

「くっ、そうゆう事か」

コイツの魔法、覚えようかな？

「さあ、お遊びはそこまでよ。フェアリージャックメント！アంతを仕留めてやる、このバイオニック・コンプレッサーでね！」

「出来るかな？」

「強がりをして喰らいなさい！」

空気を圧縮した弾を放つ凧。

「効くかあ！」

ギアスはストームメールを展開して、圧縮した弾を弾いた。

「なっ！？」

「テメエの圧縮弾なんざ、それ以上の風力で吹き飛ばしちまえば何て事は無え」

「くっ！？」

「今度はこっちの番だ！」

すぐに凧に駆け寄った。

「くっ、来るなあ!？」

凧の圧縮弾をたくさん撃つてくるが、ストームメールによって弾が  
れ続けた。

そして凧の目の前まで着いた後、ストームメールを解除して、頭突  
きをした。

「ヘッドバツティンツ!!」

「ぎゃっ!？」

「!」

アークライトの目が一瞬大きく開いた。

「…覚えた!」

「なっ!？」

「ウオリヤツ!」

「キヤツ!？」

凧を殴り飛ばした。

「このっ!」

凧が高くジャンプした。

「潰れるっ!インパルスプレス!!」

上からの空気の圧力で相手を押し潰しす技を繰り返す凧。  
だがギアスは、

「吹き飛ば!エメラ・パラム!!」



何か苦手だな…こつゆつ会話…。

「では、お互い名乗ったところで…始めますよ！」

「お…おうよ！」

すると、急に天気が崩れ始めた。

「何だ？急に雨が…？」

そうだ！ハットフィールドは雨使いだった！

ってか、お前はジュビアかよ！？

「気付いた様ですね。私の魔力に…」

一層雨が強くなった。

「私の雨乞いの力、見せてあげましょう。レインレーザー！」

ハットフィールドの雨がレーザーの様に鋭くなり、ギアス目掛けて撃ち出した。

「どわっ！？危ねっ！？うわっ！？」

ギアスは避け続けるのに必死だった。くそっ、このままじゃ防戦一方だ。

「このっ！調子に乗んじゃねー！」

何とか避けながら殴りかかるが、

「アクアコーラル！」  
「!?!」

ギアスのパンチの威力が殺された。

「この雨の中は私の空間です。当然、私の射程に入っているんです！」  
「何!?!」

ギアスの足元からレインレーザーが繰り出されて怯んだ。

「くっ!?!」  
「どうです?私の雨の力は?」  
「くそっ」  
「次行きますよ」

ハットフィールドの手の平から、円盤状の水が集まった。

「レイングラインダー!!」  
「!?!ポイントフィールド!」

ギアスは咄嗟に壁を張ったが、その壁が見事に切断された。

「なっ、うそおっ!?!」

ギアスはマトリックス並の避け方をして難を逃れた。  
今のはヤバかった!?!

「くそっ、何でもありかよ!?!」  
「水はどんな形にも変化する…オールマイティーな最強の武器って

訳ですよ」

これじゃあ、迂闊に近寄れないな。  
その時、

「おっしやあ！」

「！？しまった！？」

いつの間にかイヴが、ハットフィールドの背後を獲って、抱き付いた。

「良ーし、このままサバ読みにしてやる！このパワーアームでね！」  
「…サバ折りだぞ？」

金色の籠手を換装したイヴが、ハットフィールドの背骨を折ろうと  
していた。

「マドモアゼル、気持ちは嬉しいが…濡れている私に抱き着くのは  
危険ですよ？」

「！？イヴ、今すぐ離れ！」「レインニードル！！」「！？」

ハットフィールドの背中から、まるでハリネズミみたいに水の針を  
出した。

「なっ…かつ…！？」

「イヴ！？」

「イヴさん！？」

「まず一人…」

腕と脇を刺されたイヴは倒れた。



イヴは少し痙攣しているが、生きているようだ。

「次行きますよ！レインハンマー！！」

「どわっ！？」

特大の水状のハンマーで攻撃されて、慌てながら避けるギアス。

「どうしました？貴方は先程から避けてばかりで、反撃しないのですか？」

「こつもやりにくい相手は始めてだからな。正直、どう対応しているか分んねえしよ！」

「それはそうです。雨は万能です。屋外戦闘で私に勝てる魔導士はアークライト様以外そうそういませんよ」

くそう余裕がましやがって、この雨さえどうにかすりゃ良いのによ…雨？……………つてそうじゃん！雨って事は水、いわば水分じゃん！こんな簡単な事に気付かないとはな。

「さあ、諦めて…シメオンに屈しなさい」

「へっ、冗談じゃねえぞ雨男！俺がそう簡単に頭下げる訳無えだろ  
うが！」

「ほっ、ではどうなさるおつもりで？」

「こつするんだよ！」

「！？」

ギアスはあるだけだけの炎をハットフィールドの周りに展開させた。

「なかなか熱いですな。しかしこれだけでは私を倒す事は出来ませんよ？」

「どつかな？」

ハットフィールドがレインレーザーを繰り出してきたが、ギアスに当たった瞬間、ただ濡れただけに終わった。

「なっ！？私のレインレーザーが！？」

「なんだそりゃ？水鉄砲か？」

「一体何をしましたか！？私のレインレーザーをどうやって！？」

「おっさん、アンタの周りをよく見てみな」

「？…はっ、これは！？」

ハットフィールドの周りには、雨で濡れていた筈の地面が乾いていた。

「なるほど、炎で私の水のある程度蒸発させて鋭さを無くさせたのですね。しかし、これぐらいの炎なぞ、私の雨で消してくれる！」

「そうかい、だったら…ヴァルカンシヨック・イグニション！！」

「なっ！？」

ハットフィールドの上空に大火球を置き、雨で鎮火するのを防いだ。

「なっ！？」

今のハットフィールドの状況は、上と前後左右が炎だらけになっていた。

「さあ、これでお前の魔法も威力は半減したな」

「なんとという手を！？」

「今度はこっちの番だ！」

「くっ！？レインレーザー！！！」

「虹竜の咆哮（炎だけ）！！！」



「貴方…少女が弱点だそうですね？」

「「「！？」」」

こいつ、まさか！？」

「来い、アンドロイド部隊！」

ハットフィールドがそう呼ぶと、二人の少女が現れた。

「こ、これは！？」

「ご紹介します。我々が開発した最新型魔導人形、通称アンドロイドの…イングリット&モングリットです」

その少女は、上着（胸元部分だけ）、前張り、靴下を履いたほぼ全裸の状態だった。

「なんじゃそりゃー！？」

「まずいです！？ギアさんはロリコンだから、あれに夢中になってしまいます！？」

「何だと！？」

クルスとアレックスが驚愕していた。

「機能上…多少の問題はありましたが、どうです？お気に召しましたか？」

「ほ…ほぼ全裸に靴下…」

「そう、貴方の好みは少女幼女の全裸に靴下が好みとの事で、アーマーも貴方の嗜好に合わせておきましたよ」

「「マジで変態じゃ（ないですか・ねーか）！？」」





「そついやそつだな」

「じゃあ、全裸に手袋＋靴下だったらどうなるんでしょうか？」

ギアスは想像してみた。

ミオさんとウエンディちゃんの全裸に手袋＋靴下姿を。

『おにいちゃん』

『ギアスさん』

……………結果。

「それ最高……………!!!」

「全然克服出来て（ないね・ないぞ）……」

ギアスは鼻血を出しながら、コートを半脱ぎした。

## シメオン四天王（後書き）

シメオン四天王は、左天と右天を除けば、ハットフィールドを入れて、もう一人は凜に決めちゃいました。

前半の凜はシリアスと考えるなら、後半のハットフィールドは半分シリアスと半分ギャグになりました。

覚えたフラグメント

バイオニック・コンプレッサー

圧力、空気に圧力を加え、操る能力。空気を圧縮して放つことで相手を吹き飛ばしたり、空気の壁を作ることができる。最大まで空気を圧縮すれば、爆弾レベルの風圧を生み出すことができる。周囲に異常気圧を加えることで、周囲の人間に高山病や潜水病のような症状を引き起こさせることも可能。

レインメイカー

雨乞い、周辺の気象を雨にするほか、大気中の水分を集めて好きな形に固形化させて攻撃、防御、身体の洗浄などの用途に使用できる能力を持つ。水分を粘性にしての相手の束縛や、足元に練成した水の上を滑走することによる高速移動も可能。

次回は仮面の女とバトルします。そして久しぶりにギアスがマジギレします。



## 怒りのギアス（前書き）

ブレインがナツと戦ってる内に気に入りに、廃墟の方へと叩き落してしまつた為に、ブレインが直接拾いに向かい、ナツを持って行こうとしたところ、ジュラ達に見つかり、戦闘を開始した。

ゼロのロストマジック使用について質問。

煉獄の七巻属が使うロストマジックの他にも、ウエンディが使う治癒魔法や、オリジナルとして蘇生魔法を加えた方がよろしいですか？

## 怒りのギアス

アークライトサイド

ギアセルシアが何か叫びながらハットフィールドを倒した様だな。

「アークライト様、先程から思っていました。凜の時といい先程  
といい、あれはまるで……」

「分かっている。ZEROゼロの能力だ！」

「やはり、あの男もアークライト様と同じ……」

「だが、私のとは少し違うな……ただ相手のをそのまま覚えるだけか  
……という事は、奴はまだ不完全という事か」

奴のZEROと私のZERO、能力の上では私の方が優れているな。

「それ最高……！！！！！！！！！！」

「全然克服出来て（ないね・ないぞ）……」

「……………何だアレは？」

「さあ？」

よく解らん奴だな貴様は。

「アークライト様」

仮面の女がアークライトに話しかけてきた。

「彼奴等の始末を私に……」

「……任せよう」

「はっ」

さて、次の相手は手加減を知らんぞ。そして、私の新たな身体ボデーに相応しいか否か、貴様の価値がこれで決まる。

サイドエンド

いかんいかん、幸せな妄想にトリップしていたな。  
ん！？次が来るか！

現れたのは仮面の女だった。

「次はお前か仮面女」

「アークライト様の為に死ね！」

「死ぬか！」

仮面の女が攻撃を仕掛けてきたが、それを防ぐギアス。

「このー！」

「！？」

いつの間にか復活してるイヴ。  
つか腕と脇はどうしたんだ？

「メタルナツクル！イヴキャノン！！」

イヴが仮面の女の顔面目掛けて殴り、ぶっ飛ばした。  
すると、仮面が割れて、素顔を現した。

「ああ！？そんな…！？」

「クルス？」

「山田？」

「やっぱりな…。」

「ねっ…姉さん…!？」

「「「!?!?」「」」

仮面が割れ、素顔を現したシメオン四天王の女は、死んだ筈のクルスの姉、アルカ・シルトだった。

「おい山田…本当に…山田の姉ちゃんなのか？」

「シメオン四天王の一人が…クルスの姉だと!？」

ここまで原作と同じなのかよ。

「ま…間違い無い…間違っ筈がない…!?!? 本当に…アルカ姉さんだ…」

クルスは震えていた。

「でもどうして!?!? 姉さんはあの時、ギルドを襲ったシメオンの襲撃者に襲われて、僕を庇って殺された筈!?!？」

「そのギルドを襲った襲撃者は、本当は私だとしたら?？」

「!?!?!?」

「あの時、お前の側に私がいたか？」

「で、でも姉さんは、僕がギルドから脱出した時に合流して…」

「そう、あの後ギルドの中にいた連中を皆殺しにした後、お前と合流した」

「う…嘘だ…だってあの時、必死で助けしてくれたじゃないか!?!? 襲

撃者から僕を庇って…」

「お前と合流したのはなクルス…」

アルカの目が鋭くなつてクルスを睨みつけた。

「お前を殺す為だよ！」

「そつ…そんな…！？」

原作でもそうだったが、何故血を分けた本当の姉弟を何の迷いも無く平気で殺せるのだろうか…。

「だが唯一の誤算は、お前を殺そうとした時に現れたマスターが、お前を守るうとした事だ」

「えつ、マスターが！？」

「あの時、お前と合流する為に、ギルドで私が捨てた仮面を着けて現れたんだ。クルス、お前を守る為にな」

「そんな…あの時のあれは、マスターが僕を守る為の変装…だったのか…！？」

「さすがはギルドマスターだったよ、この私に手傷を負わせたのだからな。奴のおかげで貴様は生き延びる事が出来たのだからな」

「マスター…」

色々知つて落ち込むクルス。

「クルス、悪いが奴の言ってる事は本当だ。俺には聴こえる、奴の本音がな！」

そう言われて益々落ち込むクルス。  
だから空気読めよアレックス。

「結果…その誤算という私の、たった一度の過ちの所為でお前は生き残り、私の前に現れてしまった。もう迷いは無い！今ここで貴様を殺し…汚点を拭い去る！！」

アルカがクルスの方へと駆け出した。

「ひっ！？」

「まずい！？クルスを守れ！」

ギアス、イヴ、アレックスは、アルカを阻止する為に向かった。

「邪魔だ！炎神アグニッシュワッタスの息吹！！」

アルカの攻撃で、三人は吹き飛んだ。

アグニッシュワッタスを展開したアルカは、クルスを殺そうと近づいていた。

「ぐあああつ！？」

「があああつ！？」

「ぶはあつ！？」

「神にひれ伏せ！！」

アルカが決め台詞を言った。

「皆！？」

「さあクルス…仲間の下へ逝け！」

「姉S…」

ドスッ

鈍い音が辺りに響いた。  
アルカの攻撃で、人体を貫いた音だった。  
そう、アルカは貫いたのだ、

アレックスの腹を。

「ブアツハアアアツ！！？」

「あ…アレックスさん！？」

「アレックス！？」

「島田！？」

「ちっ、邪魔が入ったか！？」

アレックスから手を引き抜くアルカ。

「今度こそ死n…！」

ドガアツ

もう一度クルスを殺そうとしたアルカを殴り飛ばすギアス。

「イヴ、時間を稼いでくれ！」

「えっ！？うん、分かった！」

「アレックス、死なせはしない！ドツペルゲンガー！！」

アレックスの体に手を付けた後、ギアスの手がアレックスの体に溶け込むように入っていた。

「ギアスさん、何を？」

「体の細胞を繋ぎ止める！そのまま治癒をしても意味が無いからな！」

「…アレックスさん…」

「ハア…ハア…」

すると、アレックスの心の声が聞こえてきた。

「（俺の新たな祈り…それは…キナナ…俺は…お前を…愛し…）」

アレックスの心臓が…止まった。

「アレックス！？クツソオオツ！死なせねえ、死なせねえぞ！！」

ギアスはアレックスの体を治しながら、心臓マッサージと電気ショックを使って、アレックスを蘇生させようとしていた。

「何をしているか知らんが、隙だらけだ！」

「させるか！フレイムナックル！」

イヴは炎を帯びた籠手で応戦した。

「フンツ！フンツ！フンツ！フンツ！フンツ！フンツ！！」

「ギアスさん…」



ギアスは必至で蘇生作業をし続けた。  
そして、

トクン

「し、心音が聞こえた！」

「よし、後は体を治すだけだ！」

アレックス、もう少しだぞ！生きてキナナを大事にしてやがれ！  
しばらく作業が進み…アレックスの峠は越えた。

「ふう、何とかアレックスは生きているな」

「良かった…」

「お〜い…」

すると、ルシアが戻って来た。

「ルシア、丁度良かった」

「ギアス、あいつらは一体？」

「シメオンだ」

「うえっ！？シメオンって、オラシオンセイスと同格のギルドじゃないか！？」

ギアスはルシアに事情を話した。

「つー訳で、クルスをナツ達の所に連れて行ってくれ！」

「えっ、僕をですか！？」

「言っちゃ悪いが、お前がここにいると足手纏いになる。だから頼む！」

「……………分かりました…でも約束して下さい！」  
「？」

「必ず、生きて帰って来て下さい！」

「ああ、分かった」

「行くよクルス！」

ルシアはクルスを持って、ナツ達の所へと飛んで行った。

「うわあっ!？」

「!？」

イヴが吹き飛ばされてきた。

「ちっ、逃がしたか…まあいい、後で始末すればいいだけの事」

「させねえよ！」

アルカの前に立ちはだかるギアス。

こっちは頭キテナだ！容赦しねえぞ！

「邪魔をするな」

「テメエ、実の弟じゃねえのかよ！」

「私はクルスの姉である前に、シメオン四天王だ。ただそれだけだ」

「そうかい、なら…」

ギアスが殴りかかるが、アルカはそれを避けた。

「アルカ！テメエは今ここで、俺がブチのめしてやるよ！」

「出来ればな！」

アルカは掌低の構えを取った。

「ヒート・エクスプロージョン！」

ギアスは咄嗟に腕で防いだ。

「うぐおっ!？」

少し距離を取った。

「おいおい、腕が沸騰してやがるぜ……」

「私に触れた物は全て破壊される……」

「うおっと!？」

後ろにあった木の真ん中が一瞬で溶けた。

「だったら……」

近くにあった尖った岩を持ち上げて、アルカの方へと投げた。

「触れなきゃ良いんだろうが!」

「甘いな」

アルカは、尖った岩をモノともせず突っ込んだ。

そしたら、岩の方があつと言つ間に溶けだした。

「うおっ、何だよそりゃっ!？」

人間二人分の長さがあった岩があつと言つ間に手の平サイズになった。

「マジかよ…まるで鉛筆削りみてえに物体を一瞬で燃やし尽くすなんて…」

「フツ、私が操るのはただの炎ではない、分子レベルの振動を送り込む事で…細胞の中心から破壊し、燃やし尽くす！それがこの、炎系魔法最高位に君臨する、アグニツシュワッタス！そこのクス魔導士と一緒にされては困る」

原作でもそうだったが、相変わらずの自信家だな。

「貴様がどこへ逃げようと、逃さん！」

アルカがヒート・エクスプロージョンを繰り出すが、間一髪避けた。

「危ねえ、だが…当たらなきゃどんな攻撃だろうって」当てるさ「ん？」

ギアスの足元から、何かが溶けてる音がした。

「やべっ！？」

「もう遅い！伝道・アグニツシュワッタス！」

「ぐばあああつ！！！？」

ギアスの足元から炎が噴き出した。

「振動は物に伝わって届く、私の能力をただの炎と思うな！」

「くそっ、さっきの紳士といいお前といい、何でもありな事が出来るなシメオンは」

「そろそろトドメと行こう」

ギアスの周りから炎が吹き出てきた。

「しまった、囲まれた!？」

「アグニツシユワツタス!!!」

先程よりも範囲が広い炎がギアスを飲み込んだ。

「グオオオオオオオツ!？」

「ふふっ、この強大な炎の前で、人間など無力!」

炎に飲み込まれたギアスだが、

「安心したぜ、クルスが今はいなくてな…」

と呟いた。

「ほう…どうやら、自分の無残な姿をクルスに見られたくないらしいな」

するとギアスは、

「フフフ…」

「？」

「フハハハハハハハハハハ!」

「!？」

ギアスの高笑いに不審がるアルカ。

「ハッ!何を勘違いしている?俺が安心したのは、きさま姉の惨殺シーンを、クルス弟に見せずに済んだ事だ!」

「何い!？」

「貴様の負けだ、性悪女！」

ギアスは勝利宣言をした。

「…貴様の身体はアークライト様への捧げ物ホディと思つて手加減してやれば、この状況で何を言っている！貴様は後数秒で死ぬのだからな！」

アルカは更に火力を上げた。  
だが、

「なっ、何だこれは！？アグニツシュワツタスを受けて…体が焼けていないだど！？貴様一体、何をしたああああっ！！？」

アルカは動揺していた。

「何故だ、何故燃え尽きない！？」

「俺の魔法は、数多くの魔導士の魔法を覚えてきた。その中にはな、こんな魔法があるんだよ！」

「！？？」

ギアスが炎の中でも無事でいられる魔法、それは、

「熱エネルギー吸収魔法！！」

「何イイイイ！！？」

そう、サテンの魔法、第四波動の熱エネルギー吸収魔法によって、アグニツシュワツタスを吸収したからだ。

「そ、そんな…そんなバカな事が！？」

「おまけに…」

ギアスが地面に手を付けた。

「!?!」

アルカは咄嗟に避けた。

すると、アルカがいた場所から炎が噴き出した。

「バカな!?!これは私の…」

「そう、アグニツシユワツタスだ!」

「貴様!?!何故私の魔法が!?!」

「テメエの魔法を何回喰らったと思ってるんだ?覚えたんだよ、テメエの魔法をな!」

ギアスは、アグニツシユワツタスを覚えた。

「まさか…そんな事が…」

「貴様から貰ったこのエネルギーを喰らいやがれ!」

「!?!?!」

「まずは、ヴァルカンシヨック・イグニション!」

さつき作った大火球よりも更に大きめの特大火球を作り出した。

「まだまだ!」

特大火球を背負ったギアス。

「まさか!?!」

「そつだ!こいつを纏ったまま、テメエに喰らわすのさ!」





驚いたな、まさかアルカまで倒すとはな。

それに、先程使ったのはまさしくドツペルゲンガー。  
ZEROにドツペルゲンガー、まさに私と同じ存在。  
楽しみだ。久しぶりに楽しめそうだな。

「アークライト様。四天王の内、三人が倒されてしまった以上、私が責任を持って」

「いや離溜じり溜」

「はい？」

「私が出よう」

「！？お待ち下さいアークライト様、わざわざアークライト様が出なくても私が！」

「いや、お前はこれから起こる事を見届けて貰おう。出来るな？」

「……………はい、それがアークライト様の意思ならば」

さあ兄弟よ、私の新たな身体となれ！

## 怒りのギアス（後書き）

アレックスが貫かれてる光景は、サカズキ赤犬の攻撃からルフィを庇ったエースの様な光景だと思って下さい。

特攻・第四・ヴァルカンシヨック・リトルボーイは、特攻・ヴァルカンシヨック・リトルボーイに第四波動を付け加えたと思って下さい。そのまま出すよりも、少しアレンジが必要かなと思ってこの技にしました。

覚えたフラグメント

アグニッシュワックス  
炎神の息吹

今回はアークライトからギアスの本名と、二人の過去を話します。

## アダム・ブレイド（前書き）

ジユラがブレインを倒した直後だと思って下さい。

書いてて思った事があります。

ガルナ島編はグレイ編、ファントム編はルーシィ編、楽園の塔編はエルザ編、バトル・オブ・フェアリーテイル編はラクサス編と思うなら、オラシオンセイブ編はギアス編になりますか？

## アダム・ブレイド

ニルヴァーナ、ニルビット族の廃墟、ルーシイサイド

オラシオンセイスの司令塔、ブレインをジュラさんが倒した。ジュラさんすっごく強お〜い！  
ハッピーとウエンディとシャルルも合流したし、ナツは乗り物酔いでダウンしてるけどね。

それはそうと、早くニルヴァーナを止めないと。

「みんなー！」

「……………」

今の声って、ルシア！？

ルーシイが空を見上げると、クルス君を抱えたルシアが飛んでいた。ルシア達があたし達の近くに降りた。

「ルシアにクルス君…あれ？ギアスとイヴちゃんは？」

「実は…」

ルシアの話の聞くと、ギアスの方も色々あったらしい。

蛇使いの六魔が仲間になって、蛇は女の子が呪われてあんなったとか、オラシオンセイスに次ぐバラム同盟の一角が攻めて来たとか！？向こうも色々あり過ぎ！？

「って事は、今ギアスとイヴは、シメオンと戦ってるって事なのか！？」

「……………」

「うぬぬ…オラシオンセイイスやらニルヴァーナとかで忙しい時に、更に強力な闇ギルドが襲ってくるとは!？」

「ギアスさんとイヴさんが…」

ギアス…無事でいて。…てあれ?そう言えばクルス君、さっきから俯いてるけど、どうしたんだらう?

「ねエルシア、クルス君がさっきから黙ったままだけど?」

「そういえばクルス君、どうしたんでしょう?」

あの落ち込み具合、ただ事じゃないわね。

「ウエンデイ、クルスの前のギルドやお姉さんの事は聞いてるよね?」

「うん、前にクルス君がいたギルドが闇ギルドの四天王の一人に襲われて、ギルド全員とクルス君のたった一人の家族のお姉さんが殺されたの…」

「なんと!？」

「もしかして、その襲ってきた闇ギルドって!？」

「うん、シメオンだよ」

そっか…言ってみればシメオンは、ギルドと家族の仇だものね。

「なるほど、それであんな風になっちまってんのな」

「ううん、クルスが落ち込んでる理由はそこじゃないよ」

「……えっ?」「」「」「」

あたし達は、信じられない事を耳にした。

「クルスが落ち込んでる理由は…シメオンの四天王の一人が、その

時殺された筈の…クルスのお姉さんだったの」

「……………ええっ!?!」「……………」

シメオンの四天王の一人が、クルス君のお姉さん!?!

「どーゆう事だよそりゃ!?!」

「クルス君のお姉さんが…敵!?!」

「しかも、そのギルドを潰したのも、お姉さんなんだ」

「……………ええっ!?!」「……………」

お世話になったギルドを襲ったのもクルスのお姉さんの仕業だなんて…。

「世話になったギルドの仇が、実の姉だなんてな…そりゃあ苦しむだろうな」

「外道な…」

「残ったギアスはクルスの姉、アルカと決闘を始めてて、僕はクルスを皆の所に連れて行くよう頼まれたんだ」

「そうだったのか…」

「だが、そのアルカって女、終わったな」

「えっ、どうして?」

確かにやっちゃいけない事をしたからだけど、

「ギアスは家族をないがしろにする外道が一番嫌いだからな、多分ギアスは…そいつを殺すと思うぜ」

「えっ!?!?殺す!?!」

どうゆう事!?!?

「昔あいつは、フェアリーテイルに入る前に、似た様な事があったからな」

グレイの話によると、プリズレイヤーがいなくなって途方に暮れていたところ、旅の神父に拾われて教会で過ごしたらしい。

でもある時、ギアスが外出中に孤児達と神父が全員野党に殺された時に、外道の如く振る舞ってた野党に激怒したギアスが、その野党を皆殺しにしたらしい。

「ギアセルシア殿の過去にその様な事が…」

「ただでさえあいつは、家族を傷付ける奴は容赦しないからな。ジヨゼの時の良い例だ」

「そういえば…」

あの時はあたしと、ギルドの事があったから…。

「ギアス…」

ギアス、無事でいて。

サイドエンド

ワース樹海、ニルヴァーナ封印跡

アルカをぶっ飛ばしたギアスは、少し疲労していた。

次は璃瑠か…戦えるのかな俺？

やや自信が無くなって来た様子。

すると、

「なるほど」

「!?!」

とうとう出やがったか!?!アークライト!

「やはり雑魚ではないか。四天王を三人も退けたのだ、素直に認めよう、貴様の力を」

「いよいよお出ましか!もう一人四天王がいるみたいだが、そいつはいいのか?」

「構わぬ。彼女には、これから起こる事をしっかりと記憶しておかなければならんからな」

「へえ、もう勝った気でいるのかテメエは!」

絶対的な強者だしな、ある意味。

「私は少し楽しみでもある。今まで本気で殺し合いが出来る相手がいなかったからな」

「そうかい、そうゆう想いで話はアルバムにでも仕舞っとけ」

正直不安でならねえ、こいつとは戦っていいものなのか?

「そういえば貴様、チョーカーはどうした?」

「チョーカー?」

「私の首にある物と同じ物だ」

「ああ、それならプリズレイヤーが壊した」

「壊した...だと...」

「それが何だ?」

やっぱあのチョーカーは製造した時に付けられた物か。



「まあいい、何か書いてあったか？」

「確か…えーと…数字は覚えていないが、A Bって書かれてたのは覚えている」

「ふふふつ、そうか」

「何だよその意味深な含み笑いは!？」

あれ?何か世間話になってねコレ?

「私のフルネーム、アダム・アークライトはもう知っているな？」

「やり始めた時にな」

「私のチヨーカーには、A Aと書かれてある。これは、私のイニシヤルでもある」

「……何が言いてえ……」

「つまり貴様のA Bとは、貴様の本名を示すイニシヤルだ。名は、アダム・ブレイドだ!」

「!?!それが…俺の本名か!?!」

おいおいおいおい…本名がアダム・ブレイドって、出来過ぎだろ!?!

「だとしても、俺の本名はギアセルシア・ニードレスただ一つだ!」

「ふつ、それもいいだろう」

何が「それもいいだろう」だ!俺が自分で決めた名にケチ付けるな!

「しかし疑問に思った事は無いか？」

「何がだ？」

「何故私と貴様が同じ実験の過程で生まれた存在でありながら、お前はドラゴンに育てられたのか？」

「!?!」

そついやそつだ。何でなんだ？

「私は、ある研究者のレポートを読み、ある事実を知った」  
「ある事実？」

何か非常に気になる内容だ。

「それは、我々が生まれたと同時に…施設が虹色に輝くドラゴンに襲われたからだ」

「虹色に輝くドラゴン!?!」

プリズレイヤーの事か!?!

「そのドラゴンは、ある実験体の一体を攫い、どこかに飛んで行った。これが、私が見つけたある研究者のレポートの内容だ」

「まさか…それが…」

「そう、貴様の事だ!?!虹のドラゴンスレイヤー!?!」

驚いた!?!まさかプリズレイヤーにそんな裏事情があったなんて…。

「当然研究者は魔導士でもあるので迎撃しようとしたが、ドラゴンの圧倒的な力によって蹂躪され、研究対象だった実験体、アダマシレイドABはドラゴンに攫われてしまったという訳だ」

「俺は、プリズレイヤーに助けられたのか…」

プリズレイヤーに感謝しないとな。

「だが、解らない事があった」

「解らない事だと？」

「そうだ、我々には…魔力を溜める器が無かった。それ故に、私は人を食す事で魔力を溜める器を形成したいたが、時間が経つにつれ、その器は脆くなっていた。その度に人を食べ、私は生き永らえてきた」

「人を食つただと！？どんだけ外道なんだテムエは！」

かなり残虐なシーンを思い浮かべたじゃないか！？

「だが！」

「！？」

「貴様は人を食す事無く魔力を溜める器がある！」

「俺の器？」

そついやそつだな…何でだろ？

「これは私の推測だが、貴様は滅竜魔法を覚えた事によって、魔力を溜める事が出来る器を作り出したのではないかと」

「滅竜魔法で？」

「そつだ、お前は自然にある物、そして魔法を食す事で魔力を溜める事が出来る様になった」

ますますプリズレイヤーのおかげだな。

「そう考えた私は、滅竜魔導士を探した。そして片手で数えるぐらいしか見つからなかったが、そいつと戦い、倒し、そしてその肉体を食った。だが、私に魔力を溜める事は出来なかった…」

さらっと惨い事をしゃがったなコイツ。

「それどころか、滅竜魔法を覚える事が出来なかったのだからな…」  
「ちよつと待て！？覚える！？お前も魔法をコピーする魔法を使えるのか！？」

一応驚いとこ。でも、アークライトから良い事聴いたな。

「その通りだ。我々は生まれた時から備わっている魔法がある。それは、額の白毫びやくごうから相手の魔法を覚えるZEROの魔法と、自身の体を万物の姿に変える変身トッヘルゲンガーの魔法、それが我々の魔法だ！」

「なつ、何い！？」

やっぱZEROとドツペルゲンガーは元々備わっていたのか。

「じゃあ、頭突きした時が一番覚えやすかったのは、コレがあったからなのか！？」

「そうだ。この白毫から相手の額に付ける事で、相手の脳から直接魔法を覚える事が出来る」

「なんて事だ…」

改めて言われると、なるほどと思ってしまつ自分がいます。

「今までの魔法はコレのおかげだったという訳か」

「そうゆう事だな」

全部分かっているとはいえ、ショックだな。

「そついや、テメエは何で俺に用があつたんだ？」

何となく分かるが、一応聞いてみるか。

「知れた事、私は貴様の体を奪い、私の新たな体にする為だ！」

「つまりは、俺を食うって訳か？」

「そうだ！そして、今度こそ私は神としてこの世に君臨する！」

凄まじく妄言に近い台詞だな。

「さて、お話はこれで終わりだ。そろそろ始めるとしよう」

「俺はデメエに勝って、皆の所に帰る！」

「私が勝利し、貴様の体を奪い、完全なる神となる！」

「黙れクソ野郎！尻の穴に奥歯突っ込んで、手えガタガタいわすぞ  
！」

「くっくっくっ、一体どこを経由するつもりだ？」

俺達の戦闘が始まった。

「は、始めて聞いたわ…アークライト様が冗談を言うなんて…でも、  
そこも良い…」

離瑠が何か半分驚愕？で半分惚気を言っていたのを聞いてしまった  
為か、やる気が無くなった様な…。

## アダム・ブレイド（後書き）

微妙な話になってしまいました。

次回はいよいよギアスVSアークライトのバトルが繰り広げます。

神（ギアス）VS神（アークライト）（前書き）

時期的には、「君の言葉こそ」辺りです。

神（ギアス）VS神（アークライト）

ケット・シエルター、ギドサイド

ワシはケット・シエルターでイヴとウエンディ君とクルス君の帰りを待つておるのじゃが、何やら外が騒がしいの。

「皆、大変だ！ニルヴァーナが、ニルヴァーナがここに向かってるぞ！」

ギルド内が騒然とした。

「何！？」

「連合軍の作戦は、失敗か！？」

「あのジユラやエルザやギアセルシアもいたというのに！？」

まさか、イヴ達に何かあったのか！？

「マスター！？」

「なぶら…」

このケット・シエルターのギルドマスター、ローバウル殿が酒を注いでいた…が、

「じぎゅっ、じぎゅっ…」

「……………え……………!?」

注いでいたモノを飲まずにラツパ飲みをするローバウル殿…。



「ラツパ飲みすんなら注ぐなよ……」

「なぐぶら〜」

「つてか、ニルヴァーナが向かって……」

「何、誠……ブアー……」

「飲み干してから喋ってくれ……!?!?」

ちゃんと飲み干して下さい!?!?

「ニルヴァーナがここに向かって……これは、運命が偶然かなぶら……」

「ウエンディ達、無事だといいいんだが……」

「ああ……いざつて時は、俺らじゃ役に立てねえし……」

「イヴ……クルス君……ウエンディ君……」

するとローバウルは、

「ブアー……」

「……………飲めつてちゃんと!?!?」「……………」

吐き出していた。

「光の魔力は生きておる。なぶら、大きく輝いておる……」

「……………おおっ!」「……………」

そうじゃ、今はあの子達を信じるしかないのう。

「けど、これは偶然じゃないよな……」

「俺達の正体を知ってる奴がいたんだ!」

「だからここを狙って……」

正体？一体何の事じゃ？

「なぶら」

「長え付き合いだが、未だに「なぶら」の意味が解らん…」

本当に「なぶら」って、どうゆう意味なんじゃ？  
ギルド内でまた騒ぎだした。

「マスター、避難しようぜ！？」

「ニルヴァーナは、結界じゃ防ぎきれねえ！？」

するとローバウルは、

「バアタレがあー！！」

酒を吐き出しながら叫んだ。

「アレを止めようとなぶらあ、戦ってる者たちがいる。勝利を信じる者は、動く必要などない！」

ギルド内が静まりかえった。

「なんてな…」

「？」

「時が来たのかも知れん、ワシらの罪を、清算する時がな…」

精算？一体何の事じゃ！？

「ローバウル殿！」

「ギド…」

「お主達は一体何を隠しているのじゃ！ニルヴァーナの事を知っておる様じゃし、このギルドは一体何の秘密があるのじゃ！」

「…確かに、ギドには話さなければならん事じゃからな。ワシらは…」

ワシは、ケット・シエルターの真実を知った。

サイドエンド

ワース樹海、ニルヴァーナ封印跡

「うおおおつ、テンペストスレッド！」

俺は大量の斬糸を使ってアークライトを縛り付けた。

「この魔法を使った奴が言っていた、この糸を斬れるのは神だけだど！」

「ふっ」

だが、アークライトは意図も簡単に引き千切った。

「!？」

「私が神という事を、忘れていないか？」

「だったら、俺が化けの皮を剥がしてやるぜ！ヴァルカンショック・イグニション！！」

アークライト目掛けて放った大火球は、簡単に受け止められた。

「それはもう覚えている」

「!?!」

「ヴァルカンショック・イグニション!!」

アークライトは、ギアスが放った大火球よりも更に大きめの特大火球を放ってきた。

「やべっ!?!」

何とかギアスは、特大火球を平らげた。

「食ったら力が湧いてきた…って言ってる場合じゃねえ!?! やっぱあいつも覚える魔法があるか!?!」

思ってた通り、威力が数倍になって返してきやがった。

「ポテンシャルが違う」

「!?!」

「バイオニック・コンプレッサー!!」

「ブフォオっ!?!」

やべっ、潰れる!?!

「ストームブリンガー!!」

間一髪潰れる事は避けた。

「!?!」

怯む事無く向かって行くギアス。

「カングダストリング！」

ギアスは斬糸を繰り出した。

「無駄だ！」

アークライトは、弧を描く様な素振りをした。

「エターナル・ディストーション！！！」

「ぼああああああつ！！？」

アークライトは離溜の魔法、サイコキネシス念動力による攻撃で吹き飛ばすギアス。

「このヤロ！虹竜の、聖拳！！！」

「！？ごふおつ！！？」

ん？効いた？

「続けて行くぞ！リトルボーイ！！！」

「それも覚えている」

「なっ！？」

「リトルボーイ！！！」

「ごはっ！？」

ギアスの撃ち出した炎拳よりも、アークライトの撃ち出した炎拳の方が威力が大きかった。

「私が神である事を忘れてないか？」

「いちいちムカつく野郎だ！」

やっぱり四天王の時に使った技が覚えられてるな。こりゃしんどいぜ。だけど、やっぱりアレだけは使ってきてないみたいだったしな。

「つーか、魔力タンク欲しさに俺の体を狙うんだお前は？」

「私が欲しがっているのは魔力タンクだけではない」

「はっ？」

「見るがいい」

アークライトは服を半脱ぎした。

その左胸には、機械が埋め込まれていた。

「心臓が！？」

「この心臓と右目は、如何なる医療技術や魔法をもつてしても癒える事は無かった……」

「なるほど、寿命が短いつて訳か」

「だが、貴様の体を私が手に入れば、神のクローンを産み出す計画、アダム・プロジェクトは完成する！」

「アダム…プロジェクト……」

どこまでニードレスが関わっているんだよ！？俺の所為か？俺の所為なのか！？

「んなの、テメエの勝手じゃねえか！ようはテメエは長生きがしたいだけじゃねえか！そんなモンは、俺がぶっ潰す！」

ギアスはスピードで攻撃した。

「なるほど、速さの魔法か？」

「しまっ！？」

「遅い！」  
「はっ!?!」

スピードを覚えられたアークライトは、一瞬で背後に回った。

「ヒート・エクスプロージョン!!」

「がああああっ!?!」

「バイオニック・コンプレッサー!!」

「バツ、ブツ、ボツ!?!」

至近距離でヒート・エクスプロージョンを喰らい、怯んだ隙にバイオニック・コンプレッサー（遠距離攻撃用）で攻撃され続けて吹き飛んだ。

「ぼふおああっ!?!」

「どうした兄弟?」

こ…攻撃する暇が無え…強い何てモンじゃねえ…。

「私は、今まで出会った全ての魔導士を喰らい、又は下僕や傘下にしてきた。彼らの魔法は今…全て私の中にある!つまり…貴様は今、私を知る魔導士全員をも同時に敵に回しているのだ!」  
「ぐっ…」

俺が言うのもなんだが、反則じゃねーかそれ!?

「どうした?もう終わりか?」

「…ま…まだまだ…」

「頑張るものだな。だが、努力は報われるとか、可能性はゼロじゃないとか…」

「うらあああああつ！」

ギアスの猛攻が続いたが、アークライトは傷一つ付いてなかった。

「そういう勘違いは…弱者の自己暗示に過ぎない」

「!？」

「努力や祈りは、奇跡の発生率に何の影響も与えない」

ギアスが驚いてる隙に反撃するアークライト。

「蟻が一匹騒いだところで、星の軌道は変えられない。それどころか…」

「!？」

吹っ飛ばされてるギアスに思い切り踏み付けるアークライト。

「星は、蟻の存在すら気付かない！」

つ…強え…でもな…。

「確かに…」

「？」

「お前の言う通り…努力や祈りは…奇跡の発生率に何の影響も与えない…それについては同感だ…」

「何が言いたい？」

「フンッ！」

「!？」

どんなに絶望的な状況でもな…いつだって奇跡は起こしてみせたんだ！



「怒れば勝てるとか、仲間が死ねば勝てるとか、そんな都合の良い奇跡など存在しない！」

「!?!」

「そして、奇跡はいつも、自分自身が諦めない事にあるんだあああ  
あつ!?!」

ギアスは虹竜の聖拳で攻撃したら、アークライトは吹っ飛んだ。

「ハア…ハア…」

そしてゆっくりと立ち上がるアークライト。

「貴様の言ってる事は…雅に弱者の言い訳だ」

「だろうが、秘策を見つけたぜ」

「秘策?そんな物、ある筈が…」

「じゃあ何でテメエは滅竜魔法を覚えられねんだ?」

「!?!」

「それ以外の魔法なら、喰らったら倍にして返すのに、何故滅竜魔法だけは喰らい続けてるんだ?」

「……………」

「テメエはさっきの会話で言い事を聞いたからな。滅竜魔法は覚える事は出来なかったって」

「……………」

「つまりは、俺の勝利の鍵は滅竜魔法にあるって事だ!」

せめてハッターリでも何でも、奴に何かしらのリアクションが出れば…。

「確かに私は滅竜魔法を覚える事は出来ない。だが、そんなモノは

別に障害でも何でもない」

ちっ、やっぱりこうなるか。

「ギアセルシア、どうやら貴様は、我々がどんな人体実験によって  
生み出されたか…記憶が無い様だな」

「あんっ!?!」

「アダムシリーズに本来備わっている筈の力が、貴様に欠けている  
!」

「何だと!?!」

「教えてやるっ…真のアダムの、その魔法を!!」

アークライトがいよいよ本気になった様だ。

神（ギアス）VS神（アークライト）（後書き）

アークライトのZEROはチート過ぎるので、滅竜魔法だけ覚えられない様にしました。

今回はアークライトの魔法が明らかに、果たしてギアスの運命は！  
？そして、遂に決着の時！

## ギアセルシア(前書き)

時期的には、「ゼロ」辺りです。

## ギアセルシア

ワース樹海、ニルヴァーナ封印跡

「まずは、リトルボーイ!!」

大砲でも撃つたかのような凄まじい炎の一撃がギアスに直撃した。

「があああああっ!!?」

「どうだ?これが私のZERO、PFボジライサドバツク・ZEROだ!」

「ポジティブフィードバツク?」

「簡単に言つと、些細な言い合いが徐々にエスカレートして大喧嘩になるという事だ」

ああ、ナツと 그레이 が良い例だな。あいつら些細な言い合いがいつの間にか大喧嘩してる事があつたしな。

「て事は…自分が受けた事を増幅して返す、それがポジティブフィードバツク!?!」

「その通り、昆虫メタモルフォーゼの変態、排卵、磁場の形成、自然界にはあらゆるPF現象が存在している。PFは、究極的にはビッグバンへと向かつて行く力!それこそが、アダムシリーズに授けられた最強の魔法、ZEROなのだ!」

「!!!?!」

俺のはただそのまま返すだけ、だがアークライトはそれを上回る力で返す事が出来る。

「アイスメイク…ランス！」

「私は天だ」

「？」

ギアスの造形魔法をモノともせずにいるアークライト。

「天に唾をすれば、己に返ってくる。アイスメイク…ランス！」

更に強力な造形魔法を繰り出すアークライト。

「ぶあつ！？」

「私に向けた拳は、ことごとくその身に返ってくるのだ！第四波動  
！！」

強力な熱線がギアスを襲った。

くそっ…このままじゃ…勝てない…こうなったら…少しでも良い、  
奴の能力をコピー出来れば…。

「うおおおおつ！」

「まだ光が見えるのか？」

「だあらっしやああああああつ！！」

「それなら…」

二つの影が重なった。

そして、

「じばあつ！！？」

「絶望を…認識しろ」

ギアスの胸元が、アークライトに貫かれていた。

「貴様は今まで、ZEROの本当の力を知らずに生きて来たのだ。これが失敗作と神の違いだ」

「…ふっ…」

「？」

「やっぱり…急所を外したな！」

ギアスは、貫いてるアークライトの左腕を掴んだ。

「貴様、どうするつもりだ？」

「気付いてねえのか？俺がわざとテメエに貫かれた事に！」

「！？まさか！？」

「ようやく…懐に潜り込んだぜ！」

「！？」

かなり痛い賭けでもあったからな！でもこれで！

「俺の狙いは、最初っからこれだあああっ！！」

ギアスは思いつきり頭突きをした。

「グウツ！？」

すると、額を中心に光が飛び出た。

「貴様正気か！？一歩間違えれば、心臓を貫かれていただろ！？」

「いや、テメエは必ず急所を外すって、分かってたからな！」

「！？」

「テメエが欲しいのは俺の魔力タンク、右目、そして心臓だ！それを自分で潰そうなんてバカな真似は、絶対にしないとと思ってたぜ！」

「ぐっ!?!」

これでも充分キツイんだけどな!

「テメエの能力を全て奪い取る為には、この白毫をテメエの額に接触し、尚且つ固定させなければならねえ!だが、近づくだけでも難しい状況で一定時間、懐に入る事などまず不可能!だから、こうゆう方法で来てやったぜ!」

ギアスは、貫いてるアークライトの左腕を強く握り絞めた。

「さあ奪ってやる!テメエの全てをなア!!!」

このセリフだと、ギアスの方が悪役の様に聞こえるのは気のせいと思っして下さい

「...!貴様!」

アークライトが残った右腕の方で攻撃しようとしたが、

「させるか!グラビトン!!」

「!?!」

ギアスは重力を使って、アークライトを押し潰す様に押し倒した。

「ぬっっ!?!」

「逃がさねえよっ!」

これが最初で最後のチャンス!奴の持つてる魔法を覚えさえすれば、勝機はある!



「ならば…」

「？」

「貴様の首から上を吹き飛ばしてやる！」

「何！？」

「覚えた！」

アークライトはギアスのグラビトンを覚え、重圧を相殺されたところか、アークライトが立ち上がるほど重力を軽くしてしまった。

「まずい！？」

「残念だったな」

アークライトがギアスの頭目掛けて攻撃しようとした瞬間、

「うおおおおおおおっ！！！？？」

白毫から荒々しい光が飛び散った。

ギアスとアークライトの額が繋がってしまった。

すると、ギアスの頭の中に、何かの研究所が見えた。

「何だこれは！？」

頭が割れそうになるほどの強烈な痛みが、ギアスとアークライトに出ている。

離瑠サイド

アークライト様に額を付けたフェアリージャツジメントが、アークライト様に押し倒した。

「アークライト様!?!」

しかしアークライトは、

「ならば…」

「?」

「貴様の首から上を吹き飛ばしてやる!」

「何!?!」

「覚えた!」

フェアリージャツジメントがかけた重圧を押し上げたアークライト様。

「アークライト様!」

「まづい!?!」

「残念だったな」

アークライトがギアスの頭目掛けて攻撃しようとした瞬間、

「うおおおおおおおっ!?!?!?!」

白毫から荒々しい光が飛び散った。

「キャアツ!?!?こ、これは…まさか!?!」

空間が歪みだした。

「まさかこれは、逆拒絶反応!？」

ギアスとアークライトから出てる光が、辺りをなぎ払っていた。

「アークライト様とフェアリージャッジメント、二人の境界線の崩壊が始まったわ!？二人のアダムシリーズが、お互いを取り込もうとしている!？」

ギアスとアークライトの額が太く繋がった。

「人間同士なら何人いようと問題は無い…でも、この世に神は二人存在してはならない…神と同じ遺伝子を持つ二人が…同じ時空で…出会ってしまった…」

離瑠は震えていた。

「存在する筈の無い自分自身との接触で…二人の体が…自己の境界を認識出来なくなってしまう!?それはまさに…対消滅!？」

離瑠は思わず二人の下に駆け出したが、光によってはばかれる。

「二人は遺伝子レベルで互いを否定し合っている…この時空が…二人の神の存在に耐えられなくなっている!？」

離瑠の頭の中に、何かが生じている光景が見えた。

「今のは…アークライト様の…」

そして、ギアスの体を貫いているアークライトの腕から、ポコポコと肉塊が吹き出てきた。

「!?!?いけない!?!?肉体までが、境界を失い始めている!?!?このままでは…!」

その時、眩しい光が辺りを包んだ。

サイドエンド

今…俺が見てる光景…それは…俺がこの世界で生まれた姿だった。

俺が入ってるカプセルと、隣にあるもう一つのカプセル。

それが、アダム・Aと、アダム・Bだった。

おれはその、アダム・B、アダム・ブレイドだった。

隣にいるのはアークライトで間違いないみたいだな。

すると、アークライトの体が膨張していた。いや、正確には右目の部分と心臓の部分だった。

それを見ていた研究者達は落胆していたが、俺の方を見ると、即座に盛り上がった。

彼らにとっては、ようやくの成功した物なのだから。だが、それをブチ壊した者がいた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!』

俺が見た光景は…虹色に輝くドラゴンが現れた光景だった。

そしてドラゴンは、成功したばかりの俺を持ち出し、去って行った。俺はふと、アークライトの方を見た。

体がポロポロになったアークライトは、今にも死にそうな状態になっていたが、生きようとする意志は何よりも強いとは良く言ったものだと思った。

アークライトはドッペルゲンガーを駆使して、近くにいた人間を食

っていた。

そしてアークライトは、何かに引かれるように地下へと進んだ。

そこでアークライトがカプセルの中にあるモノを見た、俺達のオリジナルとも言うべき存在。

神の聖骸がそこにあった。

そしてアークライトは、その神の聖骸を取り込み、逆拒絶反応を起こし、大爆発を起こした。

俺の方はドラゴンに攫われた後、そのドラゴンをまるで母親の様に見た。

これが、俺とアークライトが逆拒絶反応を起こした時に見た光景だった。

「今のは…一体…それに、アークライトが神の聖骸を取り込んでいたなんて…まさか！？それが奴の強さの秘密か！」

「そう…私は既にクローンでは無い…」

アークライトの背後から逆光が出てる様に見えた。

「オリジナルだ…！」

アークライトはギアスに近づいて来た。

「そして、貴様の体を喰らえば、私は完全なる神となる。終わりだ！」

アークライトはゆっくりと手を上げた。

「カンドタストリング！」

アークライトはギアスの首を刎ねようと、手を振り下ろしたが、

「何!？」

魔法が発動しなかった。

そしてギアスは、アークライトの振り下ろした手を掴んだ。

「貴様!？」

「テメエと融合しかかったおかげで、傷も治ったぜ！」

いつの間にか胸の傷が無かったからな。

「喰らえ！虹竜の聖拳！」

しかし、魔法が発動せず、ただのパンチを繰り出したギアス。

あっ、そうか、原作じゃ一時的に能力が使えなくなる様に、魔法が使えなくなったみたいだ。これこそ勝機だ。

しかし、ギアスは忘れていた。もう一つの能力ちからの事を。

「お互い魔法が使えないんじゃ、後は肉弾戦だけだ！」

「その様だな」

肉弾戦に切り替えた二人は勝負に出た。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ギアスは猛烈な飛び蹴りをかました。

「ぬっっ！？」

「又ウアアアアア！」

すかさず殴りかかるギアス。

「ゴフッ！？」

クリーンヒットされたアークライト。

「ふんっ！」

「クアッ、セイッ！！！」

ボキッ

アークライトが左手で攻撃しようとしたが、ギアスはその腕を掴んでへし折った。

「ぐおおおっ！？」

「ウラアアアアアッ！！！」

良し、こっちの方が断然押してる！このまま一気に攻め込むぞ！  
しかしアークライトは、

「…教えてやるっ…」

へし折った筈の腕が徐々に治っていった。

「貴様と私の最も大きな差は、保有魔法数などではない…」

「!？」

「クローンとしての完成度だ！」

アークライトの左腕が完全に治った。

「ちっ、再生はまだ残っていたか!？」

そうだった、ドッペルゲンガーだけはそのままでっけ!？

「ギアセルシア! 貴様は…何を完成させる為に生れて来たのか!！」

アークライトの魔力が増した!？

「ハアッ!」

「ヴアアッ!？」

アークライトの一撃を喰らったギアス。

この時ギアスは気付いた。ギアスには滅竜魔法やZEROで覚えた魔法だけじゃない事に。

あれ? あんまり痛くない様な… そうだ! アレは魔力とかは関係無かった! アレはどちらかというと体力的な方だった。

俺の勝ちが… 見えた!

「ウオオオオオオオオオ!!!」



そしてギアスとアークライトは、防御を捨てた殴り合いを始めた。

「私は憎む！神である私から魔法を奪っていった全ての魔導士を！」

「あん？神様は分け隔てなく自分の力を与えたんじゃないのか？」

「貴様は…本当にそう思うのか？」

「ん？」

「神とまで言われた男が、こんな災いの種をばら撒くとても？」

何だ！？急に奴の攻撃が！？

「ある男が…宝石箱を持っていた…その宝石で…人々を幸せにする為に…だが男は悪人に襲われ…宝石をばら撒いてしまった。偶然近くにいたたくさんの者が…その宝石を盗んでいった…一人…一つずつ…」

「……………」  
「やがて悪人から逃れたその男は…自分がばら撒いてしまった宝石を集める旅を始めたのだ。死して尚、クローンとして蘇って！」

アークライトの攻撃は激しさを増して行った。

「何だ？神様が乗り移ったのか？教祖様よお！」

「これはゲームなのだ…全ての魔法を回収する…な」

「フツ…そういう事かよ…」

何か下らなくなってきたな。

「何だと？」

「過去の些細な万引きを、未だに心の支えにしてんのか！この…雑魚がアツー！」

ギアスは両膝を押さえた後、脚に何か溜まっていき、ポンプの様に体の方に戻った。

するとギアスの体から、湯気のようなモノが吹き出てきた。

「何だ!？」

「テメエはもう…俺には追い付けねえよ!」

これこそワンピースのルフィの戦闘力強化術、

「ギア、2（セカンド）!」

新陳代謝により、身体能力がパワーアップしたギアス。

「そんなモノ、直ぐに…!?!? 覚えられないだど!?!?」

そりゃそうだ!これは悪魔の実の能力であつて、魔法じゃない!だから、アークライトが覚えられる事は無い!

「行くぜ、ゴムゴムの…」

「!?!?」

アークライトは咄嗟に防御しようとしたが、

「シレットピストル J E T 銃!?!」

「!?!?!?」

一瞬という言葉が似合うくらいの攻撃を繰り返したギアス。

「まったく見えなかった!?!それに何故…何故覚えられない!?!?」

「お前には一生解んねえよ! シレット J E T スタンプ!?!」

また一瞬で蹴りを繰り出したギアス。

「何だこの魔法は!?!」

「ウラアアアアアアアツ!」ジェットガトリング銃乱打!」

今度は全体的にラッシュを一瞬で繰り出すギアス。

「バフアアアアアツ!?!」

倒れるアークライト。

奴が神なら、この悪魔の実の能力を使う俺は雅に悪魔だな。

「グアツ!?!ハア…ハア…ツ!?!」

起き上がったアークライトは、何かに覆われた。  
ギアスのコートだった。

「ハアアアツ!」

アークライトはコートに気を取られてる隙に、

「な…に…!?!?!」

ギアスの致命的な一撃が入っていた。

「ヴァハツ!?!きつ…貴様…!」

「貴様が神と名乗るなら、俺は悪魔だ!神を打ち破る魔王だ!」

同じ戦闘力でも、俺の第三の力に勝てるわけがねえ!

「これで終わりだ、アークライトオオオツ!!!」

これでトドメだ!

「こうなれば…」

「ん?」

「ギアセルシア…貴様の体が…いや、肉片の一つでも残る事を祈っている…」

「何のはなs…なっ!?!」

アークライトの頭上…正確には額から強大な光が集まっていた。

「テメエ、何をした!?!」

「簡単な話だよ。魔力が封印されている今の私の魔法は二つしかない、一つはドツペルゲンガー。残りのもう一つは…」

「!?!」

そうだった!?!奴にはまだ、これがあった!?!

ボジティブファイセッドバック

「PF・ZERO!?!」

「そうだ。私のPF・ZEROは、最終的にはビッグバンへと向かう力だ。そして…私の中で魔力を増幅させたZEROを放てば…」

「小規模な…ビッグバンを引き起こす…」

野郎、奥の手を出してきやがった!?!

ビッグバン…さすがに…どうしようもねえのか!?!

「私と遭遇したこの時まで、私より強く進化していなかった自分を恥じる!」

だがギアスはこの時、自分が生き残る手を思い付いた。

「エデンスシード、開放！！」

今この瞬間、辺り一面が、白く輝いた。

「何イツ!!??」

「俺の…勝ちだ!」

何故ビックバンが起こったにもかかわらず、ギアスが生き残ってる理由。

それは、

「テメエの破壊力抜群のビクバン、俺の右腕に溜めておいたぜ！」

そう、タメタメの実の力で、自分に向かってくる爆発を自分の右腕に溜める事に成功したからだ。

ビクバンを溜めた右腕が白く光ってるが、すごく痛い…が、今はそれどころじゃない！

「バカな…こんな事が…！？」

「今度こそ終わりだあ！」

ギアスは虹色のオーラを纏った。

「右手のビクバンと、左手の虹、二つの魔力を合わせてえ！」

滅竜魔法を右腕に移した途端、虹色に光る白い腕が出来た。

「全魔力解放！滅竜奥義、“極光型”！」

張り裂けそうになる右腕の痛みを我慢しながら、アークライトを振り上げた。

「閃光、零虹爆！！！」

ドカアアアッ

凄まじい音を立てながらアークライトは、空高く飛ばされた。

「ウゴアアアアッ！！！」





うるせーやい…。

ギアスはアークライトの隣に座った。

「貴様は神になりたいとは思わないのか？」

「思わないね」

「…そうか…」

「お前が神になるって理由は、ただ単に生きる目的が欲しかっただけだろ？」

「何を言って…」

「クローンとして生き、それ以外の道が解らず、ただ神になるという選択を強いられたただけだろ？」

「……………」

言ってみりゃ、こいつも被害者みたいなモノだしな。

「貴様という男は、何故そうも自分の存在に疑問を持たない？」

「俺のする事は俺自身が決める事だからな。それ以外の理由は無い」

俺がそう言つと、アークライトは、

「私は…もう長くない。この体が朽ちる前に…お前を手に入れたかったが…それももう無理だな…」

アークライトの体が腐り始めてきた。

「アークライト様！？」

「来るな離溜！」

離溜は駆け寄ろうとしたが、アークライトに止められた。

「ギアセルシアよ…私はこのまま消えるつもりは無い…私が生きた証を…貴様にくれてやる！」

アークライトは額の白毫を手を添えた。

「！？アークライト！？お前何を！？」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！」

アークライトは自分の白毫を引き抜き、ギアスの額に持って行かせた。

「ドッペルゲンガー！」

ギアスの頭にドッペルゲンガーを使い、ギアスの白毫とアークライトの白毫を融合させた。

「なっ！？アークライト、お前一体何をしたんだ！？」

「これでお前は神の力を得た。私のPF・ZEROだ。受け取れ」

「ええっ！？」

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい…。

俺のZEROが、PF・ZEROになっただと！？

良いのか！？俺にそんなの付けちゃっても！？

「アークライト様…」

「気にするな離瑠。私は神になれなかった…だから、ギアセルシアを神に導かせよう…」

「っておい！？」

その為か！？俺のをP F・ZEROにしたのは！？

「テメエ、自分がくたばりそうだからって、代わりに俺を神にしよ  
うってのか！？」

「そうだ。我々はその為に生れて来たのだからな」

もう何を言っても平行線を辿りそうだな。

「ったく、神様なんて俺には興味ないが、家族を守る為にこの力を  
使わせて貰うぜ、アークライト！」

俺はそう言っで、遠くに倒れてたイヴとアレックスを抱えて、ニル  
ヴァーナの所まで飛んで行った。

アークライトサイド

私は負けた…神として不完全な弟ギアセルシアに負けてしまった。  
ギアセルシアがどこかに飛んで行った様だ。恐らくニルヴァーナに  
向かったのだらうな。

「アークライト様…本当に宜しかったですか？」

「構わぬ。このザマでは、シメオンを率いるのは無理だな。離瑠、  
お前に返すよ。元々シメオンは、お前のモノでもある訳だからな」

そう、私がシメオンのマスターになる前は、離瑠がマスターをして  
いたのだからな。

「いえ、私にはもう無用の物、全てはアークライト様に捧げた身、

もはや未練はありません」

「離瑠……」

困った女だな。

「ならば離瑠、私の最後の命令を聞いてくれるか？」

「喜んで……」

私が出す最後の命令、それは……。

## ギアセルシア（後書き）

ようやくシメオンと決着を着けたギアス。

閃光零虹爆の名前については、閃光〓滅竜奥義を使う時はこれをつける、零〓ZERO、虹〓滅竜魔法、爆〓ビツクバンを現しているからです。

PF・ZERO、とうとうギアスに付けちゃいました。

覚えたフラグメント

ボジティブフェイス面バック

PF・ZERO

初登場の滅竜魔法

滅竜奥義

“きょっこうがた極光型”せんこうれいこうばく閃光零虹爆

今回はニルヴァーナ破壊イベントです。

## 邪神の断片設定(前書き)

ニードレス最強のメンバーです。

## 邪神の断片設定

所属

邪神の断片<sup>シメオン</sup>

ギルドマスター

アダム・アークライト

名前

アダム・アークライト

魔法

ボジティブフェイスバック

P F ・ Z E R O

アダムシリーズの真の能力。自分の受けた技や能力を増幅して返すことが可能でギアスのZEROを遥かに上回る威力を発揮する。

設定

原作ニードレスのアダム・アークライト

ニードレス最強のバグキャラを出しました。

ギアスの宿敵にしてみました。

チーム名

シメオン四天王

リーダー

離瑠

メンバー

名前  
離瑠りる

魔法  
サイコキネシス  
念動力

自分より何十倍もの大きさもある物を持ち上げたりできる。睡眠中に寝ぼけて使うこともある。

設定

原作ニードレスの離瑠

巨乳のグラマー

後にギアスの部下になる

名前

アルカ・シルト

魔法  
アグニッシュワックス  
炎神の息吹

超分子振動を発生させる能力。ナツのように炎を起こすことも可能だが、それはアルカの能力のほんの一端に過ぎない。

設定

原作ニードレスのアルカ

クルスの姉だが、実はシメオンの幹部

ギアスにボコボコにされる

名前

ハットフィールド



魔法  
レインメイカー  
雨乞い

元々雨乞いを生業とするシャーマンの家系の末裔である彼が身に着けた能力で、水系能力の最高クラスに位置する。周辺の気象を雨にするほか、大気中の水分を集めて好きな形に固形化させて攻撃、防御、身体の洗浄などの用途に使用できる能力を持つ。また、水分を粘性にしたの相手の束縛や、足元に練成した水の上を滑走することによる高速移動も可能。

設定

原作ニードレスのハットフィールド

シメオンの幹部の一人

紳士的にしてる

ギアスにボコボコにされる

名前  
凛りん

魔法  
バイオニック・コンプレッサー  
圧力

空気に圧力を加え、操る能力。空気を圧縮して放つことで相手を吹き飛ばしたり、空気の壁を作ることができる。最大まで空気を圧縮すれば、爆弾レベルの風圧を生み出すことができる。周囲に異常気圧を加えることで、周囲の人間に高山病や潜水病のような症状を引き起こさせることも可能。

設定

原作ニードレスの凛

シメオンの幹部の一人だが、アークライトにとっては使い捨ての存在  
ギアスにボコボコにされる

## 邪神の断片設定（後書き）

良くギアスが勝てたなと思いますよ。

## 天馬から妖精たちへ（前書き）

ようやくシメオンとの決着を着けたギアスは、ニルヴァーナを止めに向かった。

ニルヴァーナの足は原作より多めの8本にしました。

ちなみにエルザと一緒にいるのは、ジエラルド、ウエンディ、シャルル、クルス、ルシアです。

## 天馬から妖精たちへ

ニルヴァーナ、ニルビット族の廃墟の端、エルザサイド

ニルヴァーナがケット・シエルターに放たれた時はもうだめだと思っってしまったが、ヒビキ達がクリスティーナに乗って防いでくれた様だ。

ヒビキ達は魔力を振り絞っている為、もうクリスティーナを維持するだけの魔力はなさそうだな。

そしてヒビキは、ニルヴァーナを止める方法を見つけた様だ。

『ニルヴァーナに…足の様な物が、8本あるだろうか？その足、実は大地から魔力を吸収する、パイプの様になっているんだ。その魔力供給を制御するラクリマが、8本の足の付け根付近にある。その別々の所にある8つのラクリマを、同時に破壊する事で、ニルヴァーナの全機能が停止する。1つずつではダメだ、他のラクリマが破損部分を修復してしまう』

「8ヶ所のラクリマを同時にだど…どうやって!？」

『僕がタイミングを計っておきたいけど、それまで…念話がもちそうにない』

すると、頭上に何かが現れた。

『君達の頭に、タイミングを…アップロードした』

「20分!？」

『ニルヴァーナが、次に装填完了する直前だよ』

「8つのラクリマを…」

「同時に…」

『メエーン…』

『君達ならきつと出来る…信じているよ!』

私たちの目的が決まった、後はラクリマを破壊しに…。

『無駄な事を』

「……………」

『誰だ!?!』

「この声…」

「ブレインって奴だ!」

『僕の念話をジャックしたのか!?!』

くそ、今の作戦を聴かれてたか!?!

『俺はゼロ。オラシオンセイスのマスター、ゼロだ!』

『オラシオンセイスのマスターだと!?!』

まさかオラシオンセイスに、マスターがいたのか!?!

『まずは褒めてやろう。まさか、ブレインと同じアーカイブを使える奴がいたとはな』

ヒビキと同じ魔法を使える奴がいたのか!?!

『聞くがいい、光の魔導士よ!俺はこれより、全てのモノを破壊する!手始めに、仲間を三人破壊した。ドラゴンスレイヤーに、氷の造形魔導士、星霊魔導士、たっはっはっそれと猫もか』

『ナツくん達が!?!』

「そんなの嘘よ!?!」

ゼロ…ナツ達を…。

『テメエらは、ラクリマを同時に破壊すると言ったなあ？俺は今、その8つのラクリマのどれか1つにいる！フハハハハ！俺がいる限り、8つ同時に壊す事は、不可能だ！』

ゼロとの念話が途絶えた。

「8つのラクリマを、同時に破壊するとなれば、我々全員で手分けして、8ヶ所に向かうしかないか…」

ジェラルルの言う通りだが、状況は最悪だな…ナツ達が倒れ、ギアスもない今、ゼロと戦えるのは私だけしか…。

「ちょっと待って、何言ってるのよ！？8人もいない、ラクリマを壊せる魔導士が、8人もいないわ！？」

はっ、そうだった！？今ここにいるのは、私とジェラルルとウエンディとクルス、それにシャルルとルシアだけだ…確かに8人もいない…。

「わ、私…破壊の…魔法は…使えません！ごめんなさい！」

「僕も…情報収集が主なので、破壊の魔法は…使えません…」

ウエンディとクルスがダメとなると、こっちはジェラルルを入れてたったの二人…。

「他に動ける者はいないか！？」

『マイハニー…』

「？」

『私がいるではないか…縛られているが…』

『一夜さん…これで…三人…うっ！？まずい…もう…僕の魔力が…  
念話が…切れる…』

後五人…。

「誰か、返事をしろ！誰かいないのか！」

「見て、クリステイーナが！？」

「高度が下がってる！？」

クリステイーナが限界となると、ヒビキ達は無理そうだな…。

誰でも良い、誰か！

『グレイ…立ち上がれ…お前は…誇り高き…ウルの弟子だ…こんな  
奴等に負けるんじゃない！』

リオンがグレイに呼び掛ける。

『私…ルーシイなんて…大嫌い…ちょっと…可愛いからって…調子  
に乗っちゃって…バカでドジで…弱っちい癖に…死んだら…嫌いに  
なれませんか…後味悪いから、返事しなさいな！』

シエリーがルーシイに呼び掛ける。

「ナツさん…」

「青オスネコ…」

「ナツ…」

『聞こえるかい…僕たちの声が…』

そして、



『聞こえてる!...!』

ナツが力強く言った。

『ハア…ハア…8個の…ラクリマを…同時に…壊す…!』

グレイが言い、

『運が良い奴は…ついでにゼロも殴れる…でしょ?』

ルーシイも言い、

『後18分…急がなきゃ…シャルルとウェンディ達のギルドを守るんだ!...!』

ハッピーも言った。

『後…二人だ…誰か…!』

そうだ!?! ナツ達が復活しても、後二人いない!?! このままじゃ、ニルヴァーナを破壊できない!?!

誰もが人数の足りなさに絶望してたその時、希望という名の奇跡が聞こえてきた。

『残り…俺達がやるぜえー!』

『その声は!?!』

『ギアスカ!?!』

『ボク達も今そっちに向かってるから、待っててね』

『この声、イヴさんですよ!』

「ギアスさん…イヴさん…」

ギアスとイヴの声が聞こえてきた。

「ギアス！お前…シメオンはどうした？」

『へっ、心配すんな。シメオンなら、全員ぶっ飛ばしてきたぜ！』

「何だと！？」

シメオンは、オラシオンセイスと同格の闇ギルドを、たった二人で壊滅させたのか！？あいつ…やはり侮れないな。

「あの…ギアスさん…姉さんは…」

『今は聞くな…』

「！？分かりました…」

やはり、姉を殺したのかギアス…。

『今ニルヴァーナが見えてきたから、後15分くらいでそっちに着く』

「時間ギリギリだな」

『そこはしょうがねえよ…魔力もほとんど無えし、二人抱えてるか  
らな』

ギアスも苦労したみたいだな。

『も、もうすぐ…念話が切れる…頭の中に…僕が送った地図がある。  
各ラクリマに…番号を付けた。全員がバラける様に…決めて…』

そして、

『1だ!』

『2!』

『3に行く!ゼロがいません様に…』

ナツ達は行く場所を決めた様だ。

『私は4に行こう!ここから一番近いとパルファムが教えている』

『教えているのは地図だ』

『そんな…マジで突っ込まなくても…』

『私は5に行く』

『エルザ!?元気になったのか!?』

『ああ、おかげさまでな』

ウエンデイの力でな。

『では俺h「お前は6だ」!?!』

『他に誰かいんのか!?今の誰だ!?!』

「(ナツはまだお前の事情を知らん。敵だと思っている。声を出すな)」

私は小声でジエラルと話した。

『じゃあボクは7だね!』

『俺は残り物で8だ!』

『ってかエルザ!さっきのだ!』

どうやら念話が切れた様だな。

「これで8人、急がないと!」

シャルルが言った。  
ただ気になるのは…

「恐らくゼロは1にいる」

「ナツさんのところだ!？」

「!？」

「あいつは鼻が良い、分かっけて1を選んだ筈だ」

「でしたら尚更加勢に行った方が良いでしょう!」

「そうですね!？皆で戦えb「ナツを甘く見るな!」!？」

「あいつになら、全てを任せて大丈夫だ」

私は5に向かう為動く。

「私達も持ち場に行くぞ！私は5、ジェラールは6だ!」

ジェラルルの返事が無いな？

「ジェラール？」

「いや…何でもない…」

ジェラルルの様子がおかしいな？

サイドエンド

ニルヴァーナへ向かう空中

早くニルヴァーナに着かねえとマズイな。つか、6本じゃなく8本  
かよ!？俺がいる分多くないかニルヴァーナ!？

「ね、まだ着かないの？」

「早く着けられるならとっくにやってるっつーの！ただでさえシメオンとの戦いで魔力をかなり使っちゃまったんだし……」

「たく、暇」

状況解つてんのかこいつ……。

とにかく、早くニルヴァーナに着かねえとな！

ギアスは急いでニルヴァーナに向かうのだった。

## 天馬から妖精たちへ（後書き）

もうすぐ新作締め切りです。他に候補があるのでしたら、「運命の出会いの日」特別依頼。気になる彼に注意せよ！」の後書きを見て選んで下さい。8/31までですよ。

次回はニルヴァーナが崩壊します。

想いの力〜私がついている（前書き）

新作については

1位 ゼロのロストマジック使い

2位 矢われし魔法使い

3位 ブレイブフェンサーオ人伝

矢われし魔法使い

バカとテストと天元突破

バカと女装と特殊メイク

です。

想いの力、私がついている

ニルヴァーナ、2番ラクリマ、グレイサイド

俺はニルヴァーナを止める為に、2番ラクリマの所に向かった。

「くそ、たく長え廊下だぜ…」

マジで無駄に長えな…。

そして目的地に辿り着いたグレイ。

「ようやくご対面か…これが、2番ラクリマ。こいつを破壊すればいい訳か…」

グレイは辺りを見渡した。

「マスターゼロは…ここにはいねえ様だな。ってことは…誰か他の奴が戦ってるって訳か…」

マスターゼロと戦ってる奴、死ぬんじゃないぞ！

ニルヴァーナ、3番ラクリマへの通路、ルーシィサイド

あたしは…ハッピーと一緒に…3番ラクリマに…向かってる途中…よ。

壁に寄り添いながら歩いている為、ほとんど満身創痍なルーシィだっ



た。

「少し休もうよルーシィ……」

「ダメ……間に合わなくなっちゃう……」

「でも……ちゃんと歩いてないじゃん……大丈夫？」

「何言ってるの！ち、ちゃんと歩いてるわよ！でも、例え……大丈夫じゃなくても……さあ、そんな事……言ってもらえないよ！」

今のあたしは……何も出来ないけど……でも、あたしにだって……意地はあるんだから！

ニルヴァーナ、4番ラクリマへの通路、一夜サイド

私は縛られながらも……4番ラクリマに向かっている。

「メン……メン……メン……」

時間まであと少しだ、急がねば！

「急がねば！この体がどうなるうとも、私は、ブルーペガサスの一夜！自分の責務は、必ず果たす！」

もう少しだ、頑張れ私！

ニルヴァーナ、5番ラクリマ、エルザサイド

よし、着いた。

エルザは辺りを見渡していた。

「マスターゼロはいない…やはり、ナツの向かった1番ラクリマか。ナツ…」

頼むぞ…。

ニルヴァーナ、6番ラクリマへの通路、ウエンディサイド

私はジェラールに頼まれて6番ラクリマに向かっています。

「くう…」

「ありがとうシャルル…ジェラール大丈夫かな？」

「他人の事より自分の事よ。ホントに出来るの、ウエンディ？」

「うん！これは、私がやらなきゃいけない事なんだ！」

さつきジェラールは、ナツさんの魔力を回復させに向かったから、私がラクリマを壊さないといけないの！

ジェラールが言っていた。本来滅竜魔法は、ドラゴンと戦う為の破壊魔法だって、だから…私がやらないと！

「ウエンディさん、頑張つてね！」

クルス君とルシアも一緒に来てくれます。

そしてウエンディ達は、6番ラクリマに着いた。

「ドラゴンの力、私の中の…自分のギルドを守る為なんだ！お願い、

グランディーネ！力を貸してっ！」

「ウエンディ……」

「ウエンディさん……」

「ウエンディ……」

私は空気を…空を…天を食べる為に集中した。

サイドエンド

ニルヴァーナに向かう途中

「ちょっと、まだ着かないの？」

「今向かってんだろーが！」

「ま〜だ〜」

「グダグダ言うなっつての！」

相変わらずイヴは口うるさいな…。クルス…お前も苦労したんだな…。

ニルヴァーナ、1番ラクリマ、ナツサイド

ジェラールから咎の炎を食って、魔力を回復した。

「確かに受け取ったぞ、ジェラール」

俺はゼロの方へと向いた。

「咎の炎か、それを食っちゃったら、貴様は同じ罪を得る訳だが？」  
「罪には慣れてんだ…フェアリーテイルの魔導士は。本当の罪は…  
眼を逸らす事、そして誰も、信じられなくなる事だあ…！」  
「ウオアツ!？」

ナツが突進した。

ゼロを掴んで投げ飛ばした後、ゼロは常闇ダイククカブリチオ奇想曲を撃ってきたが、  
ナツは弾いた。

「ウアアアアツ！」

ナツとゼロの激しい殴り合いをした後、ゼロは蹴り上げたが、ナツ  
は火竜の咆哮でゼロを吹き飛ばした。

ナツは金色の炎を纏っていた。  
そう、ナツはドラゴンフォースを展開していた。

ニルヴァーナ、各ラクリマ、それぞれの者たち

「デカイうえに固そうなラクリマだぜ、たく…」

グレイはぼやいていた。

「すごい魔力を感じる!？」

「ラクリマが近いんだよ！」

ルーシィとハッピーは3番ラクリマがある部屋に着きそうだった。

「この危ない感じのパルファム…近いな。メン」

「一夜も4番ラクリマのある部屋に着きそうだった。」

「時が近いな…ナツ、信じているぞ…」

エルザは仲間を信じて時が来るのを待っていた。

「ウエンディ、集中よ！」

「うん、分かってる」

「ウエンディさん…」

「ウエンディ…」

ウエンディは力を溜めていた。

それを見守るシャルル、クルス、ルシア。

「よし、もうすぐだ！」

「後少しだ！行けー！」

ギアスはもう少しでニルヴァーナに到着しようとしていた。

ニルヴァーナ、1番ラクリマ、ナツサイド

「この魔力、前にギアスが使ってたのと似てる…すげえ、自分の力が2倍にも3倍にもなったみてえだ」

「ドラゴンフォース、滅竜魔法の最終形態。その魔力は、ドラゴンにも等しいと言われる、全てを破壊する力…」

ギアスも、こんな感じだったんだな。

「破壊…面白い！」

「これなら勝てる！」

「来い、ドラゴンの力よ！」

「行くぞおー！」

ナツとゼロは再びぶつかり合った。

ニルヴァーナ、3番ラクリマ、ルーシィサイド

あたし達は…何とか…、

「ハア…ハア…着いた…3番ラクリマ…」

「ルーシィ、しつかりして!？」

「見栄とか張ってる場合じゃないのに…出来ないって言えなかった…」

「ルーシィ？」

「もう…魔力が全く無いの…それでも…ウエンディのギルドを守りたい!俯いていたくない!だから、あたしは最後まで諦めない!」

あたしは何とか立とうとしたが、

「ルーシィ!？」

「こんなところで、倒れてられない!」

例え魔力が無くたって、あたしに出来る事はある筈なんだ!

ニルヴァーナ、6番ラクリマ、ウエンディサイド

「ウエンディ…」

「頑張らなくちゃ…ケット・シエルターの為に…私を信じてくれた  
ジエラルルの為に…そして、ナツさん達の為に…」

私は…私の出来る事をするだけ！

サイドエンド

ニルヴァーナ、ニルビット族の廃墟の端

な…何とか辿り着いた…。

「7番ラクリマはこの先だね。じゃあボク行くね、永田！」

「ああ…」

イヴは目的地へと走っていった。

「ハア…ハア…くそっ、時間が無えって時に…ハア…ハア…8番ラ  
クリマは…ここから少し遠いな…」

思っていた以上に魔力が減っていたな…後少しなのにな…。

「とにかく、歩いてでも目的地に着かねえと…」

俺はアレックスを背負って、8番ラクリマへと向かった。

ニルヴァーナ、4番ラクリマ、一夜サイド

ようやく目的の4番ラクリマに到達したか。  
一夜は、坂になってるところから転げ落ちた。

「ま、まだまだ！まだ気を失ってはならん！」

ここで気を失っては、折角の苦勞が水泡に帰してしまう…。

「ヒビキ…レン…イヴ…私に力を与えてくれ…」

ニルヴァーナ、各ラクリマ、それぞれの者たち

「後3分…」

グレイは残り時間を言った。

「ナツ…」

エルザはナツの身を案じていた。

「ど、どうするの、ルーシィ？」

「分かんない…分かんないけど、体当たりでも何でもして、アレを破壊しなくちゃ！諦めない！あたしは、絶対に諦めない！」



ルーシイはそう言つと、

「時にはその思いが力になるんだよ」「」

「えっ!?!」

ルーシイは後ろを振り向いたら、そこにいたのは、

「「コピーコピー」」

「あの時に聞いたからね」

「君の思いを聞いたからね」

「ジェミニ!?!どうしてあんた達がここに!?!」

ジェミニは、ルーシイに変身した。

「あっ!?!」

「えっ!?!」

「僕たちは、君の姿と能力をコピーできる。僕たちが、君の意思になる!」

「…っ!?!」

「ワイワイ!」

ハッピーは泣いて喜び、ルーシイは感謝でいっぱいだった。

「3分後にこれを壊せばいいんだね?」

「ありがとう!」

ジェミニルーシイは、ラクリマの前に立った。

「メン…見せてやるぞ!我が力のパルファムを!」

一夜が香水の瓶を開けると、一夜の体が筋肉の肉体へと変質していった。

「力を…もつと、天の力を…」

ウエンディは力を溜め続けていた。

「ここだ！ここが7番ラクリマ！よおーし…」

7番ラクリマに到着したイヴは、両手を掴んで換装した。

「ビッグドリルアーム！」

イヴの両腕が、巨大なドリルとなった。

「ハア…ハア…くそ、このままじゃ間に合わない！？俺が足引っ張ってどうするんだよ！」

ギアスは未だにラクリマの所に辿り着いていなかった。

「時間が無いってのによお…」

すると、辺りが毒の霧に満ちていた。

「これは…毒か？」

「早く…それを食べ…」

「！？アレックス！？」

そう、この毒の霧は、アレックスが吹き出していた。

「時間が無いんだろ？だったら、俺の残り少ない魔力を食って、魔力を回復すりゃ良いだけだろ……」

「アレックス…分かった！お前の意思是、無駄にはしない！」

ギアスは毒の霧を吸い込み、平らげた。

「食ったら力が湧いて来た！ありがとよアレックス！」

「へっ、良いって事よ……」

また気絶するアレックス。

「いよおーし！スピードで一気に8番ラクリマへ直行だあ！」

ギアスは全速力で8番ラクリマに向かった。

ニルヴァーナ、最下層、ナツサイド

「俺はオラシオンセイスのマスターゼロ、どこかの一ギルドのたかが兵隊とは格が違う！」

「ハア…ハア……」

「テメーごときゴミが、一人で相手出来る訳ねーだろうが！」

知った風な口言ってるじゃねえよ…俺には分かるんだよ。

「一人じゃねえ…伝わってくるんだ……」

「ん？」

「伝わってくるんだ…皆の声…皆の気持ち…俺一人の力じゃねえ…」

皆の想いが…俺を支えて…俺を今、ここに立たせている！」

仲間の力は俺の力だ。

ニルヴァーナ、各ラクリマ、それぞれの者たち

「そろそろ時間だな…」

グレイは造形魔法の準備を始めた。

「よし、行くよ！金牛宮で良いね？」

「うん、お願い！」

ジエミニル―シィがタウロスを開門する準備をしていた。

「ブルーペガサスの意地を、真の力を…今こそ見せるううう！」

筋肉ムキムキとなった一夜が気合を入れた。

「換装！」

黒羽の鎧に換装したエルザ。

「力が…力が私の中にみなぎってくる！」

「ウエンディ…」

力を溜め、放つ態勢のウエンディ。

「行つくよー！」

イヴは、ドリルと化した両手をを回転し始めた。

「良し着いた！間に合えー！」

ギリギリ間に合ったギアスは、自身の拳に虹色のオーラを纏わせた。

ニルヴァーナ、最下層、ナツサイド

「仲間の…仲間の力が、俺の体中を廻っているんだ！」

「ドラゴンフォース…粉々にするには惜しい男だが、もうよい。楽しかったよ…貴様に最高の無をくれてやろう。我が最大魔法をな」  
「滅竜奥義…」

これで…決めてやる！

「紅蓮、爆炎刃！！！」

ニルヴァーナ、各ラクリマ、それぞれの者たち

「時間だ！皆、頼むぜ！」

グレイが言い、

「開け、金牛宮の扉、タウロス！」

「よし！」

「んもおー！」

「頼んだからね、タウロス！」

「もー！お任せあれ、二人のナイスバデー！」

二人のルーシイがタウロスに頼み込み、

「くおー！力のパルファム、全開！メエーン！」

一夜は更に筋肉が膨張し、

「行くぞ！」

エルザは気合を入れ、

「グランディーネ…力を貸して…」

「ウエンディ…集中して…アンタなら出来る！」

「ウエンディさん…頑張つて！」

「ウエンディ…頑張れ！」

ウエンディの周りに風が纏い、

「派手にブツ壊すぞー！」

イヴは意気揚々とし、

「残りの魔力、使わせて貰うぞ！」

「行け…ギアス…」

ギアスは手に虹を溜め続けた。

ニルヴァーナ、最下層、ナツサイド

「ウオオオオオオオオッ!!」

「我が前にて歴史は終わり、無の創世記が幕を開ける。ジェネシス・ゼロ!!」

ゼロの手からおびただしい程の怨霊が吹き出てきた。

「開け、鬼哭の門!」

ア

ア

ア

怨霊達が泣き叫んでいた。

「無の旅人よ、その者の魂を、記憶を、存在を喰い尽せ!」

それはまるで、怨霊の津波の様にナツへと押し寄せる。

「消える!ゼロの名の下に!!」

「グアアアアアアアアッ!!?」

怨霊達に巻き込まれ、無の空間に閉じ込められたナツ。

「何だ…くそ、何も見えねえ…力も出ねえ…ち、ちくしょう…」

『ナツ!どうした、これしきの事で倒れるのか?』

「!?!?」

イグニールの声が…!?

『ナツ、それでもイグニールの子か?』

『いや、あんなデカイ山、どうやってブツ壊すんだよ!?!』

『気持ちから負けてどうする、お前が自分の力を信じずにどうする。ナツ、お前はドラゴンスレイヤーだ!その誇りを忘れるな!』

へっ…分かってるよ…。

『お前にはこのイグニールが…この私がついている!』

『お、おう!でも…さっぱり意味解んねえ…』

この時、ナツの体から吹き出た炎が、無の空間を包み込んだ。

ニルヴァーナ、各ラクリマ、それぞれの者たち

「アイスキャノン  
氷雪砲!!!」

グレイは造形魔法で大砲を造って放った。

「『行っけー!』」

「もー烈!!!」

二人のルーシィとハッピーが叫んだ後、タウロスが斬りかかった。

「キラメキ、無限ダーイツ!!!」



意味不明な事を言いながら殴り付ける一夜。

「この一撃に、残された魔力を、全て込める！ハアアアアッ！！」

エルザは飛翔し、斬りかかった。

「天竜の、咆哮ー！！」

ウエンディが巨大な風の渦を放った。

「デッドリー、メイルストロム！！」

イヴはドリルで突進した。

「虹竜の、聖拳ー！！」

巨大な虹色に光る球を放ったギアス。

ニルヴァーナ、最下層、ナツサイド

ゼロの無の空間を突き破ったナツ。

「金色の炎が…」

怨霊達を燃やしながら突き進むナツ。

「俺の魔法を、燃やしているだー！？」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

今のナツは、雅にドラゴンそのもの。

「ドラゴンを倒す為に…ドラゴンと同じ力を身に付けた魔導士…これが…本物の…ドラゴンスレイヤー…!!?」

「ウオオオオオツ!!」

「ブオツ!?!」

ナツは一気にゼロの近くまで行き、ブン殴った。

「全魔力解放!滅竜奥義、“しじゆいがた不知火型”!!」

金色の炎を纏いながら、ゼロへと突進するナツ。

「紅蓮、ほうおうけん鳳凰剣!!!!」

その一撃は、炎の弾丸の如く、ゼロにぶちかました。

「ぐおおおおおおおおつ!!!?!」

「ああああああああつ!!!!」

何層もぶち抜きながらも、突進が止まる事を知らなかった。

そして、1番ラクリマへとぶちかました。

この瞬間、ニルヴァーナの8つの付け根部分から、爆発が起きた。

ニルヴァーナの破壊に成功した瞬間でもあった。

ニルヴァーナ、各ラクリマ、それぞれの者たち

8つのラクリマを同時に破壊した者達は、

「やったのか？皆同時に……」

グレイが言い、

「「やったー！」」

「「オーレイ！」」

ルーシィ達は歓喜し合い、

「エルザさん、皆、グッジョブ！」

一夜はキモイながらも喜び、

「ナツ……やったか」

エルザはナツを信じ、

「止まった……ウエンディ、止まったわよ！」

「やったー！」

「ニルヴァーナが止まったー！」

「うん！ニルヴァーナが、止まった！」

ウエンディ達は涙を流し、

「いえ〜い！」

イヴはVサインをし、

「間に合って良かったあ……」

「さすがだな、ギアス……」

ギアス達も安心した。

ニルヴァーナ、一番ラクリマ、ナツサイド

「まったく、固えラクリマだったな。これで良いんだろ？イグニール」

ナツはゼロを倒して微笑んでいた。

その時、ニルヴァーナが揺れ始めた。

「うおっ！？力が入らねえ！？あーーーーっ！？」

足場が崩れて落ちるナツ。

だが、ジェラールがナツを掴んだ。

「ジェラール！？」

「離すな！」

「バカ野郎！オメエも危ねえだろーが！」

そして二人は、瓦礫に飲み込まれた。

ニルヴァーナのはずれの森、グレイサイド

崩壊するニルヴァーナから何とか脱出出来た俺は、皆が脱出して来るのを待った。

「おいおい、皆無事か？」

「グレイ！」

エルザがやって来た。

「エルザ！…と？」

「エルザさん、無事で良かったー！」

「「げーーーーー！！！」」

何だこのキモイ筋肉は！？

エルザは咄嗟に槍を出して警戒した。つかエルザじゃなくても警戒するぞ。

「何者だ！？」

「敵か！？…そしてキモイ…」

「落ち着いて下さい二人とも、今は力のパルファムにて、姿形は違えども、中身は、いつもと寸分違わぬこの私…貴女の為の一夜でえーす！」

何か…エルザにすごく同情して来た。

「…おめーもえらいモンに好かれたもんだなあ…」

「ああ…頼もしい奴ではあるのだが…」

その時、柱時計らしき物が降って来た。

「むっ、新手か！」

「待て、あれは…」

「ルーシイの星霊じゃねーか！」

て事は、あれホロロギウムか。

案の定中からルーシイとハッピーが出てきた。

「ありがとうホロロギウム。てかあたし、いつの間に？」

「いえ、私が勝手にゲートを通ってまいりました」

「ロキもバルゴもよくやるよねそれ」

「ルーシイ様の魔力が、以前より高くなっているので可能になったのです。ついでに酸欠や虫刺され、お肌の荒れ、痒みやシミも治まります」

「何と！？シミまで！？」

「便利なのかしらね…」

「ま、また私のアイデンティティーが…」

どうでもいいだろ、そうゆうのは…。

「皆、無事だったか！」

「皆ー！」

「ついでに青オスネコも」

「ナツさんは？ジエラルは？」

「ギアスさんやイヴさんは？」

「見当たらん…」

「まさか、まだ中に！？」

ギユイイイイイン

何だこの音は？

すると、足元から何かが盛り上がってきた。

「うわっ!?!」

「何だこれは!?!ドリルか!?!」

「ドリル!?!て事は…!」

ドリルが消えた瞬間中から、

「ぷはー。やっと外に出られたー」

「イヴさん!」

「つかイヴ、早く出てくれ!」

「この声、ギアスカ!」

イヴが出て来たらギアスと、オラシオンセイスの毒使いが出てきた。

「オラシオンセイス!?!」

「待あーったグレイ!アレックスは敵じゃねえ!」

「!?!」

ギアスの話じゃリチャードと同じで、良い奴になったらしい。

「んでナツは?」

「見かけなかったのか!?!」

「そんな!?!」

「ナツ…!」

「あのクソ炎、何してやがんだ!」

「ナツさーん!」

「ナツ…:ジェラルル…:何をしている…!」

すると、足元が急に盛り上がった。

「んあ？」

「「「ああつ!?!」」」

「愛は仲間を救う。デスヨ」

リチャードがナツともう一人を抱えて現れた。

「つたく、ヒヤヒヤさせやがる」

「ナツさん……」

「コブラにホットアイ……オラシオンセイスが何で!?!」

「いろいろあつてな。大丈夫、味方だ。コブラの方もそうであろう  
ギアセルシア殿」

「まあね」

ウエンディはナツに飛び付いた。

「ナツさん！本当に……約束、守ってくれた」

「へへっ」

「ありがとう、ギルドを助けてくれて……」

「皆の力があつたから……だろ？」

「皆の？」

「ウエンディの力もな」

「私の？」

「今度は、元気良くハイタッチだ」

「はい！」

ナツとウエンディはハイタッチを交わした。

微笑ましい光景だ。

「チグジョーダツ、ぐらやばじい……（ちくしょーナツ、ぐらやまし  
い……）」



ギアス…血の涙流しながら悔しがるなよ…。

サイドエンド

エルザとジェラルルが二人っきりで話をしてるみたいだな。

「あの…ギアスさん…」

「ん？何だクルス？」

「その…姉さんは…どうなりましたか…」

「………炎で吹き飛ばした」

「！？そうですか…」

「怒りに身を任せてやっちまったからな。生きてる保障は無えと思  
うぜ」

「………そう…ですか…」

そう言っつてクルスは去っていった。

その時、

「イケメー…ン!?!」

一夜が何かにぶつかった様だ。

そうだ!?! 確か…

「どうしたオッサン!?!」

「トイレのパルファムをと思ったら、何かにぶつかった!?!」

「何か、地面に文字が…」

「これは…」

「『術式!?!』」

「メエーーン、トイレがあー！？」

うるせえよキモメン。

「いつの間に！？」

「どうなってるのさー！？」

「一体誰が！？」

シャルル、ハッピー、ルシアが言った。

「フリードのあれと同じか。同等…いや、それ以上の魔力かも知れねえ！？」

「閉じ込められちゃった！？」

「誰だコラー！」

すると、前後から大人数の人が現れた。

「な、何なの！？」

「漏れるう！？」

「手荒な事をするつもりはありません。しばらくの間、そこを動かないで頂きたいのです」

「誰なのー！」

「私は新生評議院、第四強行検束部隊隊長、ラハールと申します」

「なっ！？」

「新生評議院！？」

「もう発足してたの！？」

来やがったな、頭の固い融通聞かず達が。  
つかナツ、お前ビビり過ぎだ。

「我々は法と正義を守る為に生まれ変わった。如何なる悪も、決して許さない!」

「どうゆう事?」

「オイラ達、何も悪い事してないよ……」

「そうだよ……」

「おおおおっ……」

「そこははっきり否定しようよ……」

ナツ……いや、敢えて言うまい。

「存じております。我々の目的は、オラシオンセイスの捕縛、そこにいるコードネームコブラとホットアイを、こちらに渡して下さい」

「「なっ!?!」」

「「……………」」

「ま、待ってくれ!?!」

「そうだが、アレックス達は!?!」

「良いのデスヨ、ジユラ」

「ああ、ギアスも下がってくれ」

「リチャード殿……」

「アレックス……」

やっばこうなるか……。

「例え善意に目覚めても、過去の悪行は消えませんが。私は一からやり直したい、その方が弟を見つけた時に、堂々と会える!デスヨ」

「俺もリチャードと同じ意見だぜ。あいつに、キナナに釣り合える様に、一からやり直そうと思ってる」

「アレックス……」

「リチャード殿……」

そしてジュラは、

「ならば、ワシが代わりに、弟殿を探そう」

「！？本当デスカ！？」

「弟殿の、名を教えてください」

「名前はウォーリー、ウォーリー・ブキャナン」

「……！？」「……」

「ウォーリー！？」

そして、

「……四角ー！？」「……」

リチャードは思い出話に浸っていた。

「その男なら知っている」

「！？」

「何と！？」

「私の友だ。今は元気に大陸中を旅している。ギアス、今のウォーリーの姿を変身してくれ」

「ん？ああ、分かった」

俺はウォーリーに変身した。

「これが、今のウォーリーの姿ダゼ」

変身した俺の姿を見て涙を流しているリチャード…ダゼ。

「…これが…光を信じる者だけに与えられた…奇跡というもののデス

か…ありがとう…ありがとう…ありがとう…」

リチャードはふっ切った顔をして出頭した。  
俺は元に戻りました。

「アレックス、元気だな」

「ああ、キナナの事、頼むぜ」

「ああ、罪を償い終えたら、フェアリーテイルに來い。お前なら歓迎するぞ」

そう言つて俺は手を出した。

「あ、ああ!」

アレックスと握手した。

この時ギアスは、一瞬だけだがハートフィールドを解いた。

「(またな、アレックス)」

「!?ああ、またな!」

アレックスも出頭した。

「何か可哀相だね…」

「あい…」

「仕方ねえさ…」

「私たちに出来る事は何も無いもの」

ルーシイ達は二人に同情していた。

「も、もういいだろ…術式を解いてくれ…漏らすぞ!」

「やーめーてー!?!」

いいのか?一応イケメンキャラがそんな事言ってる?

「いえ、私たちの本当の目的は、オラシオンセイブス如きではありません  
せん」

「……………ええっ!?!」

この石頭共が…。

「評議院への潜入、破壊、エーテリオンの投下、もつとんでもない大悪党が、そこにいるでしょう?」

ラハールはある人物を指差した。

「貴様だ、ジエラル!来い!抵抗する場合は、抹殺の許可も下りている!」

エルザは驚愕していた。

「そんな!?!」

「ちよつと待てよ!?!」

「その男は危険だ、二度とこの世界に放つてはいけない!絶対に!」

ジエラルは、どこか観念した顔をしていた。

想いの力〜私がついている（後書き）

この作品でオラシオンセイスが出ていないのはミッドナイトだけです。ミッドナイトファンの皆さんすみません。

次回はジェラルル、そしてケット・シエルターとの別れです。

たった一人の為のギルド（前書き）

すみません、外道性悪女は作者権限で生きてる事にしました。



## たった一人の為のギルド

ケット・シエルターはずれの森

ジェラルルが新生評議院に拘束された。

「ジェラルル・フェルナンデス、連邦反逆罪で、貴様を逮捕する！」  
皆が声を押し殺していた。

「待って下さい！ジェラルルは、記憶を失っているんです！何も覚えて無いんですよ！」

「刑法第13条により、それは認められません…もう術式を解いて良いぞ」

「はっ」

「でも…」

「良いんだ…抵抗する気は無い」

ウエンデイが泣きそうになっていた。

「君の事は…最後まで思い出せなかった。本当にすまない、ウエンデイ」

「この子は昔、アンタに助けられたんだって」

「そうか…俺は君たちにどれだけ迷惑をかけたのか知らないが、誰かを助けた事があったのは、嬉しい事だ」

そしてジェラルルはエルザの方に向いた。

「エルザ…色々、ありがとう」

ジエラールは出頭しようとしていた。  
その時、

「行かせるかああっ！」

「…!?」

ナツが暴れ出した。

「ナツ!?!」

「相手は評議院よ!?!」

「あいつ…!」

「貴様!?!」

「どけえっ!そいつは仲間だあ!連れて帰るんだあ!」

ナツが叫ぶ。

「ナツさん…!」

「よ、止せ…!」

「取り押さえなさい!」

多数の評議院の兵が押し寄せて来たが、

「行けナツ!」

그레이が加勢した。

「こうなったら、ナツは止まんねえからな!気に入らねえんだよ!  
ニルヴァーナを防いだ奴に…一言も、労いの言葉も無えのかよ!」

「それには一理ある、その者を逮捕するのは不当だ！」

「くやしいけど、その人がいなくなると、エルザさんが悲しむ！」

「いつまでもウジウジと過去を引きずってんじゃねーよ評議院があ  
！」

ジユラ、一夜、ギアスが参戦し始めた。

「もー、どうなっても知らないわよ！」

「あいさー！」

「らーうー！」

ルーシィ達もヤケクソで参戦した。

「お願い、ジェラルルを連れて行かないで！」

ウエンデイが叫ぶ。

「来い、ジェラルル！お前は、エルザから離れちゃいけねえっ！ず  
つと側にいるんだ！エルザの為に！！だから来い！俺達がついてる  
！仲間だろ！！！」

ナツの勧誘にジェラルルは歯痒い気持ちでいっぱいだった。

「全員捕えるおおお！公務執行妨害及び逃亡幫助だー！！！」

「ジェラルル！」

その時、

「もついいい！そこまでだ！」

エルザの一言で全員固まった。

「騒がせてすまない…責任は、全て私がとる…」

エルザの沈痛な言葉が出てきている。

「ジェラルルを……………連れて行け…」

「エルザ!?’

「座つてろ!’

「はいっ!?’

納得がいかないナツがエルザに突っかかるうとしたが、エルザの一言で正座した。

さっきまでの勇ましさはどうしたんだナツ…。

するとジェラルルは、何か思い出した様だ。

「っ!?’そうだ!’

「!’

「お前の髪の色だった」

「!?’

「さよなら…エルザ…」

「……………ああ…」

ジェラルルは出頭した後、評議院は帰っていった。  
今の空気は、完全に重かった。

「エルザ…どこ行ったんだろ…」

「あの後…走ってつちやったしね…」

「しばらく…一人にしてあげよ…」

「あい…」

「らっ…」

しばらくすると、遠くの方で泣き声が聞こえてきた。

ニルヴァーナ封印場所のはずれ、アルカサイド

「ハア…ハア…私と…した事が…ハア…ハア…」

危うく死にかかった…とてつもない力だった…まさかアグニツシュワッタスを覚えるなんて…あれではまるで…。

「あの炎の攻撃を喰らって生きていられたとはさすがですね  
「!?!」

私は声のした方向に向くと、そこにいたのは離瑠だった。

「離瑠か…奴はどうなった？」

「……………」  
「?どうした離瑠？」

何故黙ったままだ？

「彼は…神を越えてしまいました…」  
「!?!」

神を…超えただと?!まさか、アークライト様が!?

「離瑠!アークライト様はどうなったんだ!答える離瑠!」

「…アークライト様は…お亡くなりになりました…」  
「な、何だと!？」

そんなバカな…あのお方は神なのだぞ!？たかが竜殺しが神を殺すなど…ありえん!？

「離瑠!そんな事ありえんぞ!あの方は神だぞ!たかがドラゴンの力を持つてるだけの男にアークライト様が!？」

「しかし、現実にはアークライト様は彼に敗北してしまいました」

「あ…ありえん…あの方は…神なんだ…でなければ…私は何の為に全てを捨てて来たんだ…」

あの方が創る理想郷を、強者だけが住む世界を創ると約束したアークライト様が…。

「あの方がいないシメオンにもはや意味がありませんね」

「!？ちよつと待て、お前がアークライト様の意思を継げなければ

…」

「私は…シメオンから脱退します」

「な、何だと!？何故だ!？何故お前が去らなければならぬ!」

「私はあの方が全てでした。そして…ギ…セ…ア…え…  
…て…」

「ん?最後の方、何て言ったんだ?」

「とにかく、私はもうシメオンには手を貸しません」

「待て離」…」

アルカは地面に叩き付けられた。

「!？」

「さようなら、アルカ・シルト」

そう言つて離瑠は飛び去つて行つた。

「何故なんだ離瑠…こうなれば、私がシメオンを立ち上げなければ  
！」

こうなつたのも貴様の所為だ！ギアセルシア・ニードレス！いつか  
必ず貴様を殺し、アークライト様の無念を晴らせてみせる！

サイドエンド

ケット・シエルター

ただ今俺は、ウエンディちゃんの着替えシーンを覗こうと思つたら、  
ルーシイに見つかつてしまい、わざわざバルゴを使つてお仕置きさ  
れた。

そして、村の中央に集められた。

つか、ギドじいさんもいるのか。ちなみにキナナは昨日ルシアに頼  
んで連れて来て貰つた。女子達は珍しそうに見てた。

「フェアリーテイル、ブルーペガサス、ラミアスケイル、そしてウ  
エンディにシャルルにイヴにクルス。よくぞオラシオンセイスを倒  
し、ニルヴァーナを止めてくれた。地方ギルド連盟を代表として、  
このローバウルが礼を言う。ありがとう、なぶら、ありがとう」

「どう致しまして、マスターローバウル！オラシオンセイスとの、  
激闘に次ぐ激闘！楽な戦いでは…ありませんでしたが、仲間との絆  
が我々を、勝利に導いたのでえす…！」

「…さすが先生！」「」

「ちやつかり美味しいとこ持って行きやがって…」

「あいつ、誰かと戦ってたっけ？」

「俺が一番激闘をしたと思うけどな……」

「そりゃお前：シメオンをほとんど一人で潰したからな」

「どんだんギアスが超人を更に上行ってる気がする……」

まあルーシイの意見は、あながち間違ってるわけではないけどね。

そして皆で踊った。

その時、ウエンディ達も一緒に踊ってた。

元気良く踊ろうとしたウエンディちゃんも良い！

しかし、

ヒュウウウウウウ

ケット・シエルターの人達は踊らずにそのままだった為、空気がすごく重く感じていた。

「皆さん：ニルビット族の事を隠していて、本当に申し訳ない……」

「そんな事で空気壊すの？」

「全然気にしてねーのに、な？」

「あい」

「らっっ」

ナツの言い分に同意のハッピーとルシア。

「マスター、私達も気にしてませんよ」

「そうですねよマスター」

「そうそう気にしない気にしない」

ウエンディ達がローバウルにそう言った。



「皆さん、ワシがこれからする話をよく聞いて下され」

ローバウルが重要な話をし始めた。

「まず初めに、ワシらはニルビット族の末裔などではない」

「えっ？」

「？」

「……………」

ウエンディとクルスは不思議がっていた。

イヴは頭の上に？が出てた。

ギドは辛そうな顔をしていた。

「ニルビット族そのもの。400年前、ニルヴァーナを造ったのは

…このワシじゃー！」

「何っ!？」

「嘘!？」

「400年前？」

「はぁ…(ぽか〜ん)」

「……………」

ローバウルの話では、世界中の争いを止める為に、善悪反転魔法ニルヴァーナを造った。

ニルヴァーナのおかげで確かに戦争は無くなり、平和となった。

しかし、その副作用として、世界中を光に変えた分ニルヴァーナが闇に染まり、果てはニルヴァーナに住んでいたニルビット族まで影響を受け、殺し合いとなった。

唯一生き残ったローバウルは、霊体と化した今でも、ニルヴァーナを止める者が現れるまで居続けた。

「ワシはその罪を償う為…また、力無き亡霊である。ワシの代わりにニルヴァーナを破壊できる者が現れるまで、400年…見守ってきた。今…ようやく役目が終わった」

「そ…そんな話…」

「マスター…それは一体…」

ローバウルの体が一瞬消えかけた途端、ケット・シエルターの人達が一人ずつ消えていった。

「何これ…皆!?!」

「アంత達!?!」

「マグナさん!?!ペペルさん!?!」

「豊田!?!金田!?!何で!?!」

「これが…幻の住民…!?!」

ウエンディ達はギルドのメンバーが消えていく事に驚愕していた。

「どうなってるんだ!?!人が消えていく!?!」

「イヤよ…皆…消えちゃイヤ!?!」

「騙していてすまなかったな、ギルドのメンバーは皆…ワシが作り出した幻じゃ」

「…!?!?!」

「何だと!?!」

「人格を持つ幻だと!?!」

「何という魔力なのだ!?!」

ナツ達も驚愕した。

ローバウルの話によると、この村は元々廃村だったという。

そこで一人でニルヴァーナを見守っていたが、幼き頃のジエラールに尋ねられて、ウエンディを引き取る事になった。

ウエンディが寂しがってる中、ローバウルは咄嗟にこう言ってしまった。「ここはギルドじゃ」と。そう、このギルド、ケット・シエルターは、ウエンディの為に作られた幻のギルドだった。

「そんな話聞きたくない！パスクもナオキも消えないで！」

「ウエンディ、シャルル、クルス、イヴ、そしてギド、もうお前達に偽りの仲間はいらない」

ローバウルはウエンディ達の後ろの方へと指を指した。

「本当の仲間がいるではないか」

ローバウルがそう言い放った後、笑顔にして徐々に体が消え始めていた。

『お前達の未来は、始まったばかりだ』

「マスター！」

ウエンディとクルスが消えゆくローバウルの下に寄った。

『皆さん、本当にありがとう。この子達を頼みます』

その時、ウエンディ達の体にあつたケット・シエルターのマークが消えていった。

「マスターー！！」

泣き叫ぶウエンディ。

「……」  
「ローバウル殿……達者でな……」

クルスとイヴは何とも言えないでいた。

真実を知っていたギドはローバウルにさよならを言った。

そして、エルザがそつとウエンデイの肩に手を付けた。

「愛する者との……別れの辛さは、仲間が埋めてくれる……」

ウエンデイはそつと、エルザの方を見た。

「来い、フェアリーテイルへ……」

ウエンデイ達を勧誘した。

これで、オラシオンセイブ編は……終わった。

そっぴや離瑠はどうするんだろっぴな？シメオンを率いるのかな？だが、そっぴなっぴたら蹴散らすまでだ！

## たった一人の為のギルド（後書き）

投票の結果、ゼロのロストマジック使いに決定しました。投票してくれた皆さん、ありがとうございます。

下書きを書き始めるので、更新はしばらく先になります。

この先アルカの出番は無さそうですので、あんまり気にしないで下さい。

またしばらく休載します。他の作品を疎かにしてましたので、そっちの方を優先と新作を更新させます。

次回は意外な人が仲間になるとドラゴンマニアです。ギアスの変態がまた一つ増えます。

竜の誘い〜フェアリーテイルの魔導士（前書き）

あの意外なキャラが仲間になります。

ギアスのロリコン+もう一つ属性が付きます。

## 竜の誘い〜フェアリーテイルの魔導士

港へ続く街道

俺達はマグノリアに帰る為に船に乗りに行きます。

ナツの奴が「早く乗ろーぜー！」ってワクワクしていた。乗り物酔いしなくなったら乗る気満々じゃねーか!?

そうそう、ブルーペガサスとラミアスケイルの皆は途中で別れました。

一夜とヒビキとイヴはいつも通りホストな感じで挨拶していた。

ジユラさんとは握手を交わして挨拶をした。

リオンはグレイを注意をしていたが、お前も半裸になってるぞ!?! お前も脱ぎ癖が出たのか!?! ウルさん、貴女の修行は変態を生み出すよ!?!

それとは別に、シエリーとレンが良い雰囲気になってるな。でえきてるう。

ルーシイの方も、エンジェルが捕まって契約が解約された星霊、ジエミニ、スコープオン、アリエスの三人は、新たにルーシイと契約したのだった。

そしてウエンディちゃんとシャルルにイヴにクルスにギドじいさんは、ウチらフェアリーテイルに加わる事になった。

一同は港に向けて歩いていたが、

「!?!」

「ああつ!?!」

道の真ん中で立っている一人の女性がいた。

な、何であいつがここにいるんだよ!?!

そう、その女性は、

「離瑠！？」

バラム同盟、邪神<sup>シメ</sup>の断片<sup>オン</sup>の最高幹部、四天王の長、離瑠がそこにいたのだった。

「誰だ、あの女？」

「シメオン四天王の一人、離瑠だ」

「……………シメオン！？……………」

「何であいつが！？」

全員は戦闘態勢を取った。

しかし離瑠は、

「お待ちなさい、私はあなた方と戦いに来た訳ではありません」

「……………！？……………」

てつきりアークライトの仇打ちに来たのかと？

「私がある方の前に現れたのは、アークライト様の弟君であるブレイド様、いえ、ギアセルシア様に用があつて来ました」

「俺に？」

「ギアスに何の用だ！」

エルザが言った。

「私は、アークライト様の遺言に従い、弟君であるギアセルシア様に仕える為に参りました」

「……………はあっ！？……………」



「俺に…?」

「おいおい…よりもよって俺に仕えるだつて!?  
すると離瑠はギアスの方に向き、跪いた。」

「今宵、私の命は、ギアセルシア様に捧げます」

「……………ええ……………!?」  
「……………」

ギアスを含む全員が驚いた。

何か良く分からないけど、離瑠は俺の家来になりに来たみたいだな。

「貴様、一体それはどういう事だ!」

「テイターニアですか?先程言った通り、アークライト様の遺言に従い、ギアセルシア様に仕える為に参ったと」

「では何故ギアスに仕えようとする?」

「私は神に仕える為に生れたのです。そして、その神がアークライト様と、ギアセルシア様だからです」

「ギアスが神?」

エルザは、ギアスが神という言葉に疑問を持った。

「まさか、あの事を言ってるのか?」

「あの事とは?」

ギアスは全員に、自分が神のクローンだと言う事を話した。

「な、なんと!?!」

「ギアスが!?!」

「クローン人間だったのか!?!」

「しかも…神のだなんて…」

皆どうしたらいいか悩んでるみたいだな。  
するとグレイが、

「ちょっと待て、いくらギアスが規格外のとんでもない奴だからって、その神のクローンだからじゃねーだろ！」

お前もかよ…俺に対しての評価は…。

「そもそも、ギアスのオリジナルが神という保証は無えんじゃねーか？」

もつともな意見だなグレイ。  
すると離瑠が答えた。

「いいえ、ギアセルシア様は間違いなく神のクローンです。何せその神は、400年前、かつて黒魔導士ゼレフを倒した存在…」

離瑠は一呼吸入れた。

「アダム・キリストなのです」

「何!？」

「アダム・キリストだと!？」

「ええーっ!？」

「ギアスが!？」

おいおいおいおい…アダム・キリストって…いいのかよここに  
出して!？」

しかもゼレフを倒したって、そんな設定なの!？」

確かに今の俺の姿はニードレスのブレイドだけだよお…。

「アダム・キリストは、全ての魔法操り、空を、大地を、世界を統べる存在となった。当時の魔導士達は彼の事を、神と呼んだ。彼の遺体を研究し、新たな彼を創ろうとした。第二の神、ザ・キリスト  
「セカンドを」

もういいだろおおおおおおおおおつ！！！？？？そこまで似なくていいだろうがよおおおおおおおおおおつ！！！？？  
若干壊れ気味なギアスだった。

「アダム・キリスト…確かに神と呼べる奴だな」

「なるほど、お前達が神と呼ぶのも頷ける」

「そりゃそうだもの、なんてったっつて神の魔導士とも言われてるしね」

グレイもエルザもルーシイも納得してるよおい！？

「アークライトからある程度聞いていたが、まさかアダム・キリストだったとはな…」

「ギアス…」

「一つだけ聞かせてくれ…」

「何なりと」

一同はギアスの言葉を待った。

「アダム・キリストって何？」

その瞬間、一同は爆弾が爆発したかの如く吹き飛んだ。

「あつ、俺も気になってたところだ」  
「あつ、ボクも」

訂正、ナツとイヴ以外の一同は爆発した。

「つておい！？お前教会に住んでるくせにキリストの事を知らねえのかよ！？」

「歴史的超有名人だよ！？」

「キリストはゼレフを倒した魔導士の名だぞ…知らないで聞いていたのか…」

「もう少し早く突っ込んでよね」

「ギアス、それでも神父なの…」

皆好きかって言いやがって…つかルシア、俺は偶に神父をしてるだけだぞ？

「それはともかく、早い話が、俺に仕えたいって訳か？」

「はい」

「……………無理矢理話を戻した！？」「……………」

話進まねーからな。

「つつても、お前シメオンの幹部だろ？そう簡単んシメオンなら先程脱退しました」つておいおい…」

「私の事はどんな風に扱っても構いません。雑用にするなり、ここで殺すなり、好きにして下さいませ」

おいおいおい…本気かよ…まさかここまでとはな…。  
ギアスは皆の方に向いた。

「なあ、どうするよ？」

「そうは言っても、あの女は闇ギルドの幹部にいた女だ、信用は出らんぞ」

「ギアスに仕えるって言ってもな……」

「それに、シメオンの幹部がウチのギルドにいる事を評議院に知られたら、確実に潰されちゃうわよ!？」

その時、ギアスは思い付いた。

「なあ、こうすればいいんじゃないか？」

「……………?」「……………」

ギアスはこれからする事を皆に話した。

皆は悩んだが、ギアスに任せる事にした。

ギアスは離溜に近寄った。

「なあ離溜」

「はい」

「これから俺がする事を受け入れて貰うぞ」

「分かりました」

離溜はあっさり受け入れた。

「行くぞ。はあっ!」

ギアスが気合を入れた。

すると、離溜の体が縮んでいった。

「こゝ、これは？」

そう、ギアスのトシトシの实の能力で、離瑠の豊満な体型から少女体型へと変わっていった。

ギアスは、子供離瑠ならフェアリーテイルを受け入れて貰えるんじゃないかと考えていた。

なにより、可愛いし。

「子供体型ですか？」

「ああ、なんて素敵なお美女になったんだろつか（その姿なら、シメオンの幹部に見えないからな）」

「ギアス、本音と建前が逆だぞ……」

しまった！？つい本音を！？

「美女ですか？」

「まあな」

「そうですか」

ん？何か離瑠、ホツとした感じだな？

「これならば夜のご奉仕も出来ますね」

「なっ！？」

な、なんちゅー事を言い出すんだこの人はー！？

「い、いや待て離瑠！？そこまでして自分の身を売らなくても！？」

「ギアスに全てを喰い尽されるぞ！止めとけ！」

「ちよつとギアス！？まさか始めからこれが目当てで！？」

「コラコラコラー！ちよつと待てお前ら！？」

何か皆、俺は少女が好物みたいな事言わないでくれ！？



何だかんだで船に乗る事が出来ました。

「ああ…船って潮風が気持ちいいんだな」

「良かったねナツ」

そしてそこらを駆け回るナツ。

乗り物酔いしてて味わえなかった普通の船旅が出来た事に感激して  
るんだなナツ。

あれ？何か忘れてる様な？

「あつ、そろそろトロイアが切れますよ」

ウエンデイちゃんが言った途端に崩れるナツ。

そうだった、乗り物酔いしなくなるトロイアの魔法が切れるんだっ  
たな。

乗り物酔いが再発して船酔いしたナツ。

「も…もう一回掛けて…おぶ…」

「連続すると、効果が薄れちゃうんですよ」

それはナツにとっては死の宣告みたいなものだった。

「ほつとけよ、そんな奴」

「あつははは」

「辛そうですね、ナツさん」

「どうでもいいんじゃない？」

「ワシが後で船酔いに効く薬を調合しておこう」

「た…たの…む…」

ギドじいさんがナツの為に薬を調合しに船内へと下りた。



「本当にシャルル達もフェアリーテイルに来るんだね」

「私は、ウエンディが行くって言うからついてくだけよ」

「それでも嬉しいよシャルル」

ルシア達も話はずんでるな。

「楽しみです、フェアリーテイル！」

ああウエンディちゃん、君の笑顔が太陽より眩しく輝いてるよ。

「フェアリーテイルって、どんなところかなキナ」

「実力的に言えばフィオーレ王国最強のギルドとも呼ばれてるわね」

キナナと離瑠は一応馴染んでるな。

そしてナツはハルジオンに着くまで気持ち悪がってた。

フェアリーテイル

あつと言う間に着いたな。

エルザはウエンディ達の事をギルドの皆に紹介していた。

「…という訳で、彼女たちをフェアリーテイルに招待した」

「よろしく願います！」

ウエンディが元気良く言った。

すると、

「か〜わいい〜!」

「ハッピーカルシアのメスがいるぞ!」

「お嬢ちゃんいくつ?」

その瞬間、

「うおりゃああああー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

「!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

寄って来たギルドの面子は、ギアスがぶっ飛ばした。

「俺のウエンディちゃんに手え出すとは良い度胸だなあ……」

「だからいつウエンディがアンタのモノになったのよ!」

ロリコン魂が燃えてるギアスに突っ込むシャルル。

「えっと、よろしくお願いします!」

「どもー、お世話になります」

「よろしくじゃ」

「よろしくキナ」

「よろしく……」

他の人達も挨拶をしていた。

エルザはマスターの所に行き、事の事情を話していた。

ルーシィとレビィは抱き合い、ジェットとドロイはルーシィを遠い目で見ていた。

ジュビアはグレイを心配してか、涙が滝の様に出て、ギルドを水で埋め尽くしてしまった。

するとミラがウエンディ達の所に行った。

「初めまして、ミラジェーンよ」

「わあ、すごいよシャルル！本物のミラジェーンさんだよ！」

ウエンディちゃんはミラに出会って感激してるな。

「シャルルは、多分ハッピーとルシアと同じだろうけど、ウエンディ達はどんな魔法を使うの？」

「ちよつと！？オスネコ共と同じ扱い！？」

シャルルはハッピーとルシアの同列に見られた事に腹が立っていた。

「ボクのは換装だよ」

「そうなの、エルザと同じね」

のほほんとした感じで返すミラ。

「僕のは主に情報分析です」

「そう、頭が良いのねクルス君」

イヴと同じ返しをするミラ。

「ワシのは混合ブレンドじゃよ」

「まあ、薬士なの？」

「そ、そうなるのう…」

ミラにドギマギしてるギドじいさん。

「私はまだ魔法は使えないから、今は勉強中だキナ」

「それじゃあ、私と一緒にウェイトレスをやらない？良ければ魔法も教えてあげるね」



「(な、何故だ…同じドラゴンスレイヤーなのに…何故俺だけネコがいねえ…)」

ああ…ガジルか…。

見てみると、かなり汗だくで焦ってる姿が見えた。

「今日は宴じゃー！新しい仲間の歓迎会じゃー！！」

マスターがそう叫び、宴会が始まった。

余談だが、離瑠を紹介した際に、離瑠が「ギアス様の世話をしました」と言ったら、皆が「ギアス、お前とうとう…。」という目で見られた。

だから俺はロリであって、ペドじゃないって！

一週間後、フェアリーテイル、ウエンディサイド

仕事、何かないかな？

「何か惹かれる依頼はあった？」

あつ、ミラさんだ。

「色々あり過ぎちゃって…」

「そうね。初めの内は一人でやっていくのも難しいと思うし、誰かの仕事のアシスタントに就くのが良いと思うわ。報酬はその分少なくなるけどね」

ウエンディは一度シャルルの方を見た。

「アシスタントですか！」

「と言っても、この連中とじゃね…」

誰と行こうかな。

すると、ルーシィとレビィとセツナが来た。

「ウエンディ、仕事決めたの？」

「ううん、最初は誰かと一緒にやってみたらって言うてみたところなの」

「そーいえば、ルーちゃんも初仕事はナツと始めたんだよね？」

「おかげで命がいくつあっても足りない目に何度遭った事か…」

「まあ、あのサラマンドーと一緒にじゃあねえ…」

「でも楽しそうだよ？」

ルーシィさん、涙が出る程苦労したんですね…。

するとウエンディは、

「あの…私、フェアリーテイルに来てもう一週間になるし、そろそろ初仕事をと…思ってるんですけど…」

「じゃ、シャドウ・ギアと一緒にやる？」

「いや、私の所の少女部隊に！」

「って、イヴちゃんとクルス君がいるじゃない！やるなら、あたし達とどう？」

ルーシィさんとレビィさんとセツナさんからの勧誘を受けています。どうしましょう。

ちなみにイヴさんとクルスさんはセツナさんの少女部隊に入っています。

するとミラさんが、

「じゃあ順番でどっ？」

「うん、決まり！」

「それで、どこが先に？」

「うん……」

私が悩んでいると、レヴィさんが何か言い出しました。

「あれ？　そういえばギアスはどうしたの？　こつゆう話だったら真っ先に来てそうなの？」

「そういえばそうね？　どうしたんだろ？」

ギアスさんですか？　そういえば今日は会ってませんね。するとセツナは、後ろめたい態度を取っていた。

「え、え〜と……その〜……」

「どうしたのセツナ？」

「ギアスならあそこにいるわよ」

ミラさんが酒場のカウンターの方に指を刺した。

そこにいたのは、体が真っ白になってて、黒いオーラを漂わせているギアスさんの姿でした。

すぐ側には、必死でギアスさんを慰めようとしているルシアと離瑠さんがいました。

「うわっ、ギアス！？　どうしたの！？」

「白いのに黒いよギアス、どうなってるの！？」

あそこまで真っ白で暗い雰囲気の人って初めて見ました！？

「どうしたんでしょうかギアスさん…」  
「私もよく分からなくて」

ミラさんも分からないみたいですね。  
すると、先程から挙動不審になっていたセツナが、

「実は…ギアスがああなったのって…私たちの所為なの…」  
「…えっ!?!?!」

話は数十分前に戻ります。

数十分前、フェアリーテイル、セツナサイド

私たちは、新たに加わった新人をチームに勧誘する為に行動していた。

目の前にいるのはイヴとクルスね。

「ねえあなた達、仕事は決まった?」

「あつ、セツナさん…ですか?まだイヴさんと見始めたばかりです  
ので」

「そんで、清田はボク達に用?」

「清田って…」

そつえばクルス君から聞いたけど、イヴちゃんて適当な名前を付けたがる癖があるって、いくらなんでも清田って…。

「話を戻すわ。仕事が決まって無いなら、私たちと一緒に仕事してみない?」



「一緒にですか？そうですね、イヴさんどうぞでしょうか？」  
「うん…良いんじゃない」  
「決まりね」

「よし、まずはミオとクチナシに紹介しなくちゃね。  
ミオとクチナシと相談中。」

「ミオは良いよ」

『私もおけ』

「よろしくお願いします」

「よろこ」

「私たち、チーム少女部隊にようこそ」

「えっ、少女…部隊？」

「クルス君が何か疑問を持ったみたい。」

「あの…少女部隊って…女性だけですよね？」

「そうだよ」

「えっ！？じゃあ僕はダメですよ？僕は男ですし…」

「あっ、そうだった…。」

『大丈夫』

「クチナシ？」

「クチナシが何か思い付いたみたいね。」

『こうすれば良いだけ』

「クチナシがスケッチブックに何かを描いて、私たちに見せた。」

それは、私たちの制服をクルス君に着せてる絵だった。

『イケル』

「嫌ですよ！？それって女装じゃないですか！？」

確かに女装だけど…何とかかなりそうよね。

「じゃあすぐに二人分の制服を取って来るわね」

「ってセツナさん！？何ですか！？」

私はすぐに制服を取りに寮に戻り、持って帰ってきた（この間、約30秒）。

イヴちゃん用は私ので、クルス君のはミオのを持ってきた。

「早過ぎですよセツナさん！？」

「それが制服？」

「そうよ」

「ミオ達とお揃いだよ」

『さあ、めくるめくユリの世界へ』

クチナシがクルス君を掴んで更衣室へと向かった。

「えっ、ちよつと待って下さい！？僕はそんなの…あつ、止めて下さい！？ズボン脱がさないで下さい…」

クチナシって…結構腐女子な所があるよね…今更だけど…。そして、着替えが終わったみたいね。

『自信作！』

クチナシが何かやり遂げたって顔してるわね…。  
すると、更衣室から可愛い子が出てきた。

「うっ…恥ずかしいです…」

驚いたわね…女装してここまで変わるなんてね。

「これなら私たちのチームに居ても違和感が無いわね」

「クルス君かわいいよ」

「…誰？お前？」

「…クルスですよ…イヴさん…」

今にも泣きそうな顔をするクルス君…泣いてる仕草も私から見てもわいく見えるわね。

『髪は肩程の長さのエクステ、大きめのリボンでツインテ風、胸は詰め物ナシで、下着は無理矢理シマパンを穿かせた。本当は私のレースにしようと思ったけど考慮した』

クチナシが良い仕事をしたって顔で言った。

「ばっちりよクチナシ！これで少女部隊として名を出せるわね！」

「出したくありません…」

「そう？ミオはかわいいと思うけど？」

「かわいくなって良いですよ…」

「となると、女装時のクルス君の名前をどうするか考えないと…」

「考えなくて良いですよ…」

「山田で良いじゃん」

「それよー！」

「何がですか!?!」

イヴちゃんの山田を名前にすると………決めたわ!

「クルス君、今から貴女の名前は山田やまだなつし撫子ちゃんよ!」

「嫌ですよ!??つてか、「あなた」の部分が違つてる様に聞こえたんだけど!??」

その時、ギアスがやって来た。

「よおセツナ」

「あらギアス」

するとギアスは、クルス君改め、撫子ちゃんの方を見た。

そして、目がハートになり、翼を生やし、何故か後ろにスロットマシンの幻覚が見えた。

「好きです!付き合つて下さい!!!」

「エスカレートしてるーっ!??」

うわぁ…撫子ちゃんにときめいてるよギアス…。てかいつの間に花束を?

「セツナア!!!」

「はっ、はい!??」

「この激萌少女は誰だ!新入りか?紹介してくれえ!!!」

「ええっ!??」

何と言うか…改めて思ったわ…ギアスつて度を越えたロリコンね…  
しかも相手は男の娘だし…。

「えつと〜…」

「おに〜ちゃ〜ん」

「ミオた〜ん」

「やめい！」

「ブフアツ!？」

取り合えずミオに飛びこもつとしたギアスを黙らせたわ。  
一応言っておこうかな。

「あ〜ギアス、聞いてる？」

「それでセツナ!この子は！」

「そ、そうだったわね…紹介するわ。この子は新しく少女部隊に入  
った…」

今のギアス…お預け状態の犬みたいね。

「女装クルス君の山田撫子ちゃんよ」

「そっか!や〜これはどうもクルス…」

この瞬間、時が止まった様に静かになった。  
するとギアスは足に来たのか膝から崩れ落ち、腰を浮かせたまま頭  
を地面にめり込ませた。

「…ママあ…」

「ギアスさあー!ー!ーん!ー!ー?」

「うわあ…一番言わなそう言葉を吐いたわね…」

そこまでショックだったの?何か真っ白になってるし…。  
するとギアスはゆっくりと立ち上がり、バーのカウンターの方へフ  
ラフラと歩いた。

「あらギアス…どうしたのギアス？この世の終わりみたいな顔をして？」

「ミラ…一番強い酒をくれ…飲んで忘れたい…」

そこまでなの！？

後から来たルシアと離瑠にギアスの事を聞かれて、バーで落ち込んでるって言ったらギアスの所に向かった。

話を戻してフェアリーテイル、ウエンディサイド

女装したクルス君に告白しちゃったんですね…それで落ち込んでるんですね。

「男と女の区別が付かないなんて、ある意味良い気味よね」

「ダメだよシャルル、そんな事言っちゃ…」

「でも…ギアスにとって美女だと思ってた子が実は男の子だったなんて…」

「さすがに、何とも言えないわね…」

「私も…少し罪悪感が…」

ルーシイさんもレビイさんもセツナさんもギアスさんに同情してました。

すると 그레이さんがやって来て、ナツさんに話しかけてきました。

「ドラゴンを見た事があるって言う奴が、この街の近くに来てる」

「っ…？」

「…！」

私はグレイさんの話に耳を傾けました。

「すごい情報だねナツ」

「なあ、ドラゴンで…イグニールか？」

「そこまでは解らねえ」

「お前…ドラゴンを見たって奴に会ったのか？」

「いや、街で噂を聞いたんだ。ダフネって奴が、ドラゴンの事を得意気に話してるんだと。ただ見ただけじゃなく、最近…会ったとも言ってるらしい…」

「ホントか！本当なんだな！」

「確かめる価値は…あるだろ？」

ドラゴンに会った事がある人…ダフネさんか…。

「どこにいるって？」

「西の荒地地にある、ライズって宿だ」

「よっしゃー！行くぞハッピー！」

「あいさー！」

ドラゴンで、グランディーネの事かな？私もナツさんと一緒に行こう。

「私も行きます！そのドラゴン、グランディーネかもしれないから」「じゃあ行ってみるか。お前も来るか？」

ナツさんはガジルさんも誘いました。するとガジルさんは、

「行かねーよ。どーせガセネタだろ」

「そんなの分かんねーだろ？」

「そう言って飛び出して、今まで何度ガセネタに踊らされてきた！ドラゴンの話ってのはな、人を引き付ける！だから利用される！ちったあ学習しろ」

「お前だつて会いたいだろ！メタリカーナに！」

「会ってどうしようってんだ、突然消えちまう様な勝手な奴なんざ…俺はどうでもいいね！」

「ガジルさん…」

ガジルさんは会いたくないのかな？

「そうかよ…じゃあギアス、お前は…」

ナツさんはガジルさんの事は放っておいて、ギアスさんに尋ねてみただけど、ギアスさん…まだ立ち直って無いみたいですね。

「おーいギアス…お前だつて会いたいよな？プリズレイヤーに…」

ギアスさんは無反応でした。

「…ウエンデイ、行くぞ」

「はい！グランデイーネだと良いね、シャルル」

「あんまり、期待しない方が良いと思うけどね」

「お前にしちやまともなネタじゃねーか」

「まあな」

私たちは、ダフネさんって人に会う為に、町はずれのライズって宿に向かいました。

サイドエンド



フェアリーテイル、ギアスの思考の中

…どっかで見た様になって思ってたら、女装クルスだったのかよ…。  
あ…もう何もやる気がしね…。  
すると、どこからか声が聞こえた。

『そんなの簡単だよ』

『愛でりゃ良いんだよ』

「えっ？」

そこにいたのは、小さくて天使の羽を生やした白いギアスと、小さくて悪魔の羽を生やした黒いギアスがいた。

「俺!？」

『白ギアスだよ』

『黒ギアスだぜ』

「俺の白と黒？」

何でここで俺の善悪的な存在が出てくんだよ!？

「そこで、お前らは一体何しに来たんだ？」

『君が悩んでいたのは、クルス君の事だね?』

『あいつの女装姿の事だろ?』

「うっ…まあそうなんだが…」

『最初にあの子の姿を見た時はどう思ったの?』

「えっ?可愛い子になって…」

『だったらそれで良いじゃねーかよ』

「えっ!?!」

言ってる意味が良く解らなかった。

『君が好きだという気持ちは、あの時の感じた筈だよな?』

『相手が美女に見えたのなら、それを堂々としてれば良いんじゃない?』

「し…しかしだな…」

『別に良いじゃねえか?可愛けりゃ男だろうと女だろうと』

『そうですね、全くその通りです。可愛けりゃもう何でも良いじゃないですか』

「そ…それはそうだが…」

『それに、あの時のクルス君は男じゃありませんでしたよ』

「えっ!?!」

『そうだな。あれは男でもなく、女装でもない…』

『あれは…』

白と黒の俺が同時に言い放った。

『『男の娘!?!』』

「はっ!?!」

ギアスの全身に電撃が走った。

「お、男の娘…」

『そう、男の娘です』

『これなら女達も引けを取らねえだろ?』

俺は、自分が恥ずかしくなった。

そっだよ!美女が出来るのは女だけじゃなかったんだ!

男だからと頭から否定して、美女を見ようとしなかった！  
だが、俺は今ここに生まれ変わろう！  
俺が愛するのは、少女と、幼女と、そして男の娘だと！

『ようやく気付いたんですね』

『やっと目が覚めたみてえだな』

「ああ、オメエらのおかげで目が覚めたぜ！そうと決まったら、こんな所でグズグズしてらんねえ！目を覚まさないと！」

俺は閉鎖的になってた心を解き放ち、目覚めた。

フェアリーテイル

目が覚めた俺は、何やらギルド内が騒然としていた。

よく見ると、ギルドに街の人達が避難して来てるみたいだな。

「ギアスー！」

「ギアス様ー！」

「ん？」

振り返ると、ルシアと離瑠がいた。

「ギアス、やっと立ち直ったんだね！」

「おう、でもこの騒ぎは一体？」

「ダフネという人物がサラマンダーの魔力を利用してドラゴノイドという物を操り、マグノリアに攻撃を仕掛けています」

ダフネ…ああ、あのドラゴンマニアね。

昔ドラゴンを見たのに、音無しの町の連中がそれを全否定したのを切っ掛けに、人工ドラゴンのドラゴノイドを製造、音無しの町の住人達を襲い、隠匿魔法で透明人間化させた人物で、ナツの魔力を使つてドラゴンの存在を全世界に肯定させようとしてるんだつたよな？

「ドラゴノイドか、倒しがいがありそうな相手だな！」

「ギヒッ、サラマンダーめ、またメンドクサイ事をしてやがるな」

振り返ると、そこにいたのは、

「……ガジル!?」「」

「ギヒッ」

取り合えず俺達は、騒ぎが起こつてる場所に向かった。

マグノリア

あれが例のドラゴノイドか。

てか、全身から炎が吹き出てるなあれ。

『どいつもこいつも、好き勝手こいてんじゃねー!!』

どうやら怒ってるみたいだなナツ。

「ったく、イカしてるぜ。折角忠告してやったつてゆうのによ……」

暑苦しい奴が、余計に暑苦しい姿になりやがって」

「まったくだな、人が気落ちしてたつつののに、滅茶苦茶騒ぎやがって」



『がはっ！？』

「隙あり！カンドタストリング！！」

ギアスは、ドラゴノイドの体に斬糸を絡めさせた。

『どわー、動けねえ！？』

「今だガジル！」

「おうよ！」

ガジルは俺の背を駆け上がり、頭の所で思いっきりジャンプした。

「手間あ掛けてんじゃねえ！」

ガジルの下半身が変化した。

「滅竜奥義！業魔・鉄螺旋！！！」

ガジルの足が巨大なドリルに変化し、ドラゴノイドの胸の部分にある赤いコア目掛けて突進した。

コアに直撃し、爆発した。

中からガジルとナツが見えた。どうやら無事みたいだったな。

「ルーシィー！あの馬みたいなヤローを呼べ！ありったけの火を矢に集めて。ここにぶち込めー！！」

「ナイスガジル！後は任せて！」

ルーシィはサジタリウスを開門した。

「であるからして、もしもし」

「皆聞こえた？炎を使える人は、力を貸して！」

「良しきた！」

「ウイ！」

「ナツに火を届ければいいのね！」

「行くよアル！」

「うん！」

「俺もやれるぜ！」

「食いきれん程、その腹に放り込んでやる！」

「んじゃー、とつととブチかますか！」

「ナツ！しつかり食えよ！」

火の魔法を使える魔導士は構えた。

「頼んだわよ、サジタリウス！」

「もしもし！」

するとダフネが、

『ちよつ、タンマタンマ！？これ以上魔力は吸収出来ないってー！』

すつごく慌ててるみたいだが、止めるかポケが！

「今よ、放つて！」

「乾坤一擲、もしもし！」

サジタリウスの矢が放たれた。

「ソリッドスクリプト、ヒートスペル＋換装、ブラストシュート＋ガンズマジック、ブラストショット＋ビクトマジ





被うぞーい！」

ドラゴノイドの方のナツは。

「このドラゴンマニア女ア！アツタマ来てんだよー！」

「はっ！？」

「何でも隠しちまう技あ、使ってみるよあ、ドンドン力が湧いて来てんだよあ！テメエの魔法じゃ隠しきれねえ程になあー！！」

ナツの背後には、気迫でドラゴンの幻影が出ていた。

「イグニールに謝りやがれ！ドラゴンモドキがあー！！」

ナツの一撃により、ドラゴノイドは爆発した。

これで、音無しの町の住人達は元に戻ったな。

そして、いつも通りナツとグレイはケンカし始めた。ガジルも一緒になってケンカしてたけど。

「そっいえばギアス」

「ん？」

「元気になって良かったね」

「ああ、新たな境地に目覚めたからな」

「新たな境地？」

俺は高々と言った。

「それは、男の娘属性だ！」

俺がそう言ったら、皆が固まった。

「……………は??？」  
「見た目が美女に見えればそれが男だろうが女だろうが気にしない  
事にしたんだ。それに、男の娘が加わったら、世界が広く見えたぜ」  
「……………（それは…別の意味で広がったんじゃない？）」  
「……………」

フェアリーテイルの皆の心が一つになった瞬間でもあった。

「これって…私の所為…？」

セツナは、自分のした事に後悔していた。

竜の誘い〜フェアリーテイルの魔導士（後書き）

ギアスに男の娘属性が追加されました。

ガジルの業魔・鉄螺旋って、ある天元突破のギドリ・ブク  
みたいだなと思ったのは自分だけですかね？

ダフネって、通販とかで見かける商売人みたいな奴だったな…。

覚えたフラグメント

サイコキネシス  
念動力

次回は虹の桜でお花見会です。ルーシイも出るよ。

## 元化け猫の宿設定（前書き）

二ドレス設定なのか？

## 元化け猫の宿設定

所属

ケツト：シエルタカエアリー  
テイル  
化け猫の宿 妖精の尻尾

チーム名

少女部隊

リーダー

セツナ

メンバー

名前

クルス・シルト

魔法

情報分析

簡単に言っていると推理力がアップする魔法。

設定

原作ニードレスのクルス・シルト

ギアスと同じく転生者だが、特に何の力も与えられずに、ただ伝言人として遣わされた

後に女装されて、ギアスの新たな新境地を開かせた

名前

イヴ・ノイシユヴァンシユタイン

魔法

換装・闘士

ザ・ファイター

エルザと同じく換装使いたが、扱う物は籠手等の拳用の武器を換装出来る

設定

原作ニードレスのイヴ・ノイシュヴァンシュタイン

ギドと一緒に旅をしていて、途中クルスを拾った後、ケット・シエルターに身を置く事になった

人の名前を覚えずに、勝手に決めた名を付けて読んでる

名前

ギド

魔法

ブレンド  
混合

色んな薬草や薬品を混ぜ合わせる事で、色んな効果の薬を調合する。

設定

原作ニードレスのギド

ギドと一緒に旅をしていて、途中クルスを拾った後、ケット・シエルターに身を置く事になった

ギルドの中でマカロフを除けば最年長

## 元化け猫の宿設定（後書き）

最初は良しと思ってたんですが、後からこいつら入れて大丈夫か？  
って思うようになりました。

## 番外編1 ようこそフェアリーヒルズ！（前書き）

この番外編は、時期的には「竜の誘い」で、一週間の間起きた事だと思って下さい。

ギアスのポジションは二通りありますので見てして下さい。尚、ギアスはこの内容は知らないという設定にしました。



番外編1 ようこそフェアリーヒルズ！

男ギアスの場合

フェアリーテイル、プール

俺達男子は、プール掃除を行っていた。

「さあ、張り切って掃除すんぞー！」

ワカバが張り切っていた。

「ちえ〜、めんどくせえな〜。こんなデカイプール造りやがって！」

ナツが愚痴を言った。

「まあそう言うな。こいつのおかげでフェアリーテイル女子一同の水着姿が拝めるんだからな！」

「言ってる事がオヤジ臭いぞワカバ」

「お前だってミオちゃんやウエンディちゃんの水着姿を拝めたいだろ？」

俺は想像した。

ミオちゃんとウエンディちゃんの水着姿を…、  
どば〜〜〜

ギアスは大量の鼻血を噴いた。

「ってギアスさん！？鼻血が出ていますよ！？」

「ぶがつ…す…スマン…」

不覚、妄想して鼻血を噴くとは…、

「折角だから楽しもうぜ！」

「まっ、清潔しておく訳だからな。悪くない」

「掃除は大変だけどね…」

「つたく、メンドイなあ…」

雷神衆も掃除に来てた様だ。

つかビッグスロー、お前目え隠せよ！危ないだろお前のフィギュア  
アイズは！

「よし、やるか！」

「つーか、テメーは何か履いて来いつての！」

「漢だ！」

「うおっ！？だぁー！ー！ー！？」

「グレイさん…慌てるぐらいなら何で全裸になるんですか？」

同感だなクルス。

「？おい、マカオはどうした？」

「ハッピーとルシアも居ないな？」

「あいつら逃げたな！」

ルシアもかよ…ん？上から声が…鐘の所か？

「便利なものだな」

「便利なものじゃの」

鐘の所には、アルザック、ギド、ガジルがいた。

ガジルは腕を鉄鎚に変えて釘を打っていた。

「新築してたいして日が経ってねえのに、何で雨漏りすんだよ！」

「誰の所為で、新築するはめになったのかな？」

「テメエ！脳天に釘打ち付けんぞコラア！」

釘を食いながら文句を言うガジル。

「釘を食うな釘を！？」

ははっ…ん？売店の方に、マカオの声がしたな。

「今日も客は来ねえし、暇だな」

売店の店員であるマックスが呟いた。

つか暇なら掃除手伝ってくれ。

「よう。最近フィギュアの売れ行きはどーだ？」

「ん？」

マカオが訪ねた様だ。

「ルーシイとかミラとかエルザとかのは良く売れてるけどねえ…男子の方はイマイチだな」

「ほっ」

そりゃあフィギュアは大抵女子のが売れやすいからな。

「そっぴやこの前いかにも怪しい客が来てな、ウェンディとミオのフィギュアを全部買い占めちまってな」

「…誰が買い占めたか想像がつかない…」  
「だよな…」

「当たり前だ！フィギュアとはいえ、ウエンディちゃんやミオたんを撫でまわそうとする奴が来る前に俺が買い占めてつか…鑑賞する為にだよ…」

「何か用か？」

「（気になる！オレのフィギュアがどっただけ売れてるっかいように気になる〜！）」

そこにワカバが登場。

「おい！今日はプール掃除の日だぞ！海パン履いてとっととプールに来い！」

「うっせえなー、今大事な話が…」

「はあ？どうせお前のフィギュアなんか一個も売れやしねーよ」

マカオの心に凶星という攻撃を喰らった様だ。

「早く来いや！」

「てか、製造してねーんだけど…ね」

「うわぁ……………」

マックスの一言で轟沈したマカオだった。

「つかマカオ、お前売れてると思ってたのか？」

「あらあら」

「ミラもその様子を見て同情したらしい。」

しばらくして、

「燃えて来たろ？今まで味わった事の無いプールだろ？」

ナツの熱で温泉と化したプールだった。

つかこれはもうプールとは言わないぞ？ただの温泉だぞ？

「ナイスアイデアだな」

「漢はやっぱり温泉だ！」

それに対抗してか…グレイは、

「まったく、暑苦しい奴め…プールといえばこうだろ？」

グレイの氷で氷海と化したプールだった。

「こんな所か？」

つかサテン手伝うなよ！？

「冷たっ！？」

ほらウテンが凍っちゃってるよ…。

「プールというより…氷そのものだな…」

「だっひゃひゃ〜、こりゃ〜良〜や」

何でビッグスローは好評なんだ？

「あいつら…好き勝手だなあ…」

「それより…プール掃除はどうなったんだ？」  
「イカしてるぜ…」

さすがにアルザックもガジルも呆れてるみたいだな。

「良いんじゃない？少しくらい息抜きもしないとね」

何でミラはここでくつろいでるんだ？  
するとナツが何かに気付いた。

「ん？何だこの穴？」

「ガラスはめ込んであんぞ？」

「の、覗き穴！？漢にあるまじき行為！」

「下に部屋まであんぞ！」

「覗くって何をだよ？」

「そりやお前、女子一同の水着姿だろうがよ！」

ナツの問いに嬉々として答えるワカバ。

「そんなの何が楽しんだ？」

「イカしてるぜ…」

そっぴやこんな展開…原作には無かったな。どんな展開があるんだ  
る？

つか、これを使ってウェンディちゃんとミオたんの水着姿を覗いて  
た奴がいるって事か！？

プールの地下、覗き部屋

俺達は、覗き部屋に到達した。

てかフェアリーテイルの地下を通ってここに着くとは、建て直す時に誰も気付かなかつたのかこの部屋？

「これが覗き部屋というものか？」

「がー！許せん！」

「んで、犯人は誰なんだよ？」

「少なくとも、今ここにいる人達じゃ無い事は確かです」

「ん？クルス君は犯人の目星が付いたのか？」

さすが推理力抜群の名探偵コn…クルス。

「もしこの中にいたとしたら、普通は隠そうとしますが、皆さんはそれをする素振りすらしませんでした」

「すげーな、色んな角度で拝めるぜえ！」

「…この中で一番怪しいワカバさんだってあの様に堂々と覗いてます。つまり、ここにいる以外の誰かって事になります！」

「おいクルス！誰が一番怪しいって！」

「ひっ！？」

「ワカバ…覗きながら言っても説得力無いぞ…」

ギドが突っ込んだ。

「くっだんねーなあ、そろそろ本気で掃除すつか」

「下らねえって事はねーよな…」

「そっ、そっだよね…」

マカオとアルザック…鼻の下伸びてるぞ。

つかアルザック、お前鼻血出てるぞ。

「おっ！？誰かプールに入ったぞ！」

すると、ナツが割り込んで来た。

「興味がねえなら覗くなつて……」

グレイが呆れ、

「お、オレにも見せるよ〜」

ビッグスローは見たがっつたり、

「イカレてるぜ……」

ガジルも呆れていた。

「ん〜？」

「オレにも見せるよ〜」

「オイっ！誰が見えんだ？」

「泡ばっかでよくわかんねえぞ。おっ！？」「退けよ！」「ダハアツ！」

グレイが割り込んだ。

「誰だ？」

そう言われても解んねえって。  
するとグレイは、





そして、

「グアアアアアツ!? 眼がああああつ!!??」

口から炎を吹き出しながら目を瞑るナツ。

「やめるナツ!?!」

「こんな所で火い吹くなつ!?!」

するとナツは、

「み、見ちゃいけねえモンを見たあ!?!」

「だから何がだよ!」

ナツを殴り飛ばすグレイ。

「ったく…ブツ!!??」

さっきのナツみたいに震え、氷を出すグレイ。

「グアアアアアツ!?! 眼がああああつ!!??」

周りにいた連中を凍らせた。

「だから何だつてんだよ?」

そう言って覗くガジル。

すると、

「グオオオオオツ!!??」

ガジルの目蓋からシャッターが降りた。何故にシャッター？

「お前ら一体何を見たんだ!？」

さすがに気になったから覗いてみた。

そこには、

『いや~~~~~ん!？』

マスターが (自主規制) 丸出しで恥ずかしがってる姿だった。

「ギヤアアアアアツ!？眼がああああつ!?!?？」

ギアスは全身から色んな属性の魔法を吹き出した。

ナツ・グレイ・ギアスによる暴走でプールは爆発した。

「「「さ…最低だ…」」」

ナツ、グレイ、ギアスの三人は同時に言った。

「もう、ダメでしょマスター、怒りますよ!」

「しゅみましえくん…」

ミラ…出来れば…もっときつく…怒ってくれ…。

結局その後、ギアスの時のアークで直したあと、覗き部屋は封鎖される事になった。

自業自得だね。

女ギアスの場合

フェアリーテイル、ルーシィサイド

あたしは良い仕事があるかどうかリクエストボードに来ていた。

「うーん、何の仕事にしようかな？」

すると、気になった依頼書を見つけた。

「ん？」

読んでみると、

「女子限定、探し物を手伝いなさい。報酬なんか出さないよ！  
って何コレ!？」

あたしは近くにいたナブに訊いてみた。

「イタズラじゃねーのか？偶にあるんだ。近所のガキが勝手によお、  
ホレ…他のより飾りっ気が無えだろ？」

そう言われてみれば、確かに他のと比べて絵が書いてあったり、模様があつたりしてるのに、これだけただ内容が書いてあるだけだし。

「でも、イタズラだったら、バカげた報酬額書いた方が効果的じゃない？」

「ぬか喜びさせて…その顔見て笑おうってか!？エグイなルーシィ

…  
「一般論だと思っけど…」

何か失礼ねそれ。

「そっね…」

するとミラさんが来た。

「確かに、受注された記録の無い依頼書だけど…ちょっと気になるわね」

「ミラさん」

「依頼主の名前は無いけど、住んでる所が書いてあるでしょ？」

「ん？ここって…」

「ウチの女子寮、フェアリーヒルズよ。ちょっと確認の為に行って来てくれる？ルーシィ」

「分かりました！」

ミラさんに頼まれて、女子寮に行く事になりました。

マグノリア、フェアリーヒルズへの丘

「フェアリーテイルに女子寮なんてあったんだあ。あっ、だから女子限定だったのね。しかもギルドのこんな近くに…」

灯台もと暗しとはよく言ったものね…。

「うっ…知ってれば家賃7万のアパートなんか借りなかったのに…」

「ププーン」

「ここは月10万」だよ」

「えっ？」

そこにいたのは、

「10万」、まける気は無いよ」

「はい？」

「ププーン？」

お婆さんが立っていた。

「ストップ！」「ひいっ！？」「止まらんかい！」

するとお婆さんは飛び掛かって来た。

「ひいひいひいっ！？」

そしてお婆さんは、あたしの体を舐め回しながら体を這いずり回った。

「きっ、気持ち悪い！？」

這いずり終わったお婆さんは、

「どうやら女子の様だね」

「見た目で判断してくれないかしら！？」

どうやら確認をしてただけの様だ。

「アンタが仕事やるのかい？」

「はあ？」

「アタシが仕事の依頼人ヒルダだよ。この寮の寮母してんだ」

「寮母…さん？」

「うむ」

この人が依頼人…って、

「てか仕事とかやる気無いし、そもそも報酬無しって、仕事になつてないじゃん！」

「冷やかしかい？」

「冷やかしてんのはそっちでしょ…！」

なんなのこのお婆さん！？

「だいたい探し物なんて、寮の子達に頼めばいいじゃない。勝手に

ギルドのリクエストボード使って…ダメでしょ！」

「それが出来んから、寮の娘以外に頼んどるんじゃ！」

「!?!」

寮の子以外って、何か手伝えない理由があるの？

「今回の仕事は、寮の娘達には絶対に知られてはならん！」

「どういう事？」

「やってくれるのかい？」

「話くらいは聞いてあげるって言うてんの」

「冷やかしなら帰っとくれ！」

「分かったわよ！手伝ってやります！」

「フェアリーテイルの魔導士に、二言は無いね？」

「探し物の手伝いでしょ？良いわよそれくらい！」

するとヒルダさんは、

「じゃあまずはこれに着替えて貰おうかい」

「何よソレー!!!??」

何処から出したのか知らないけど、何で猫の格好!?!しかも露出度高過ぎるしコレ!??

「いいから着替えんかい!」

「こ、ここではいやー!?!?!?!?!」

「誰も見とらんわい」

「わー!?!?!?!?!」

ヒルダさんに無理矢理着せかえられた…。

「あ、あの…:す、すごい…:恥ずかしいんですけど…:」

「語尾に「にゃー」を付けんかい!」

付ける必要あるの!??

「何か…:意味…:あるのか…:にゃあ…:」

するとヒルダさんは、

「やっぱり気持ち悪いのう」

「帰って良いかしら!??」

あーもうやだ、何この羞恥プレイは…:。



「おう帰れ帰れ。一度引き受けた仕事もまともになせん様じゃ使えんわい」

「くっ…」

「魔導士なんて辞めちまえ」

「くう…」

そこまで言われて、引き下がれるもんですか！

「やります！やりますにゃー！！」

「にゃーはもうええわ」

取り合えず落ち着いてっと。

「なーに仕事は簡単だよ。どこに置いたか忘れちまった光る宝を探して欲しいんだよ」

「光る宝？」

「この寮の何処かにある筈なんじゃがなあ…」

光る宝ねえ。

「それとさっきも言ったが、光る宝の事は寮の娘達には絶対秘密にしとくれよ」

「ちょっと待って、光る宝って具体的に何なの？」

ルーシィがヒルダに質問しようとしたその時、

「あの、ルーシィさん？」

「ん？あつ、ウェンディ！とシャルルも！てかギアスに離瑠まで！？」

てゆうかギアス、また女になってるし。

「いつもの感じと違う服だから、ルーシイさんじゃないのかと思いました」

「よりによつて、私の前でその格好？いい度胸ね」

「好きで着てんじゃないから……」

「結構キワドイわよその格好」

「私が以前着てた服より露出してますね」

どんなのよ離瑠！？

「でどうしたのウエンディ？」

「私たち、今日からこの寮にお世話になる事になったんです！」

「（オイラ・僕）たちは、シャルルの引越しのお手伝いだよ！」

「私達も、ウエンディちゃんの手伝いよ」

「ほとんど私一人ですが」

「別にあんた達には頼んでないわよ」

「へ〜そうなんだ」

そういえば、離瑠の魔法のサイコネシスで、ウエンディ達の荷物を浮かせてるわね。

「ってかギアスにハッピーにルシア、アンタ達男子でしょ？ここ女子寮だから入れないわよ？」

「（オイラ・僕）たちは男子じゃありません、ネコです」

「今は女よ。それに、この姿で何度もミオちゃんに会いに来てるからね」

何度も来てるんかい！？てかミオちゃんに会いに行く為にそこまで

する普通!?

すると寮の窓から聞きなれた声が聞こえた。

「ルーシイか?」あつ!「こんな所に来るなんて、珍しいな」

「エルザ!?!」

エルザが窓から話しかけてきた。

「もしかして、エルザってこの寮に住んでるの!?!」

「ああ、他に何人もいる。おお、ウエンディとシャルルが、今日からだったな」

「よろしくお願いします!」

ウエンディは、元気良く返事した。

「ねえお婆ちゃん…って消えてるし!?!」

いつの間にかいなくなってるし!?!

「どうしたのルーシイ?」

「いやあ、ちよつと…」

ルーシイは絶句していた。

ギアスがネコの格好(ビキニ風)をしていた事に。

「って何やってんの!?!」

「あ…いや、空気を読んで同じ服をt」いらん気をまわすな!」「」

何故かしら…妙に似合ってたのがムカつくわね…。

「何をしているんだ？」

「ううん、ちよつと見学に」

「だったら、私が案内しよう」

「本当？」

「入れ。ギアスと離瑠とハッピーとルシアは、ウエンディとシャルルを部屋に案内してくれ。二階の角部屋だ」

「あいさー！」

「らーうー！」

「了解！」

「分かったわ」

「よろしくお願いします」

「まっ、頼んだわよ」

「てかあんた達、ちよいちよい来てる訳？」

「そうよ、ミオちゃんに会いに」

「（あい・うん）、ネコですから」

「私はギアス様についていください」

「」「」.....「」「」

何よそれ…とにかく探さなくちゃ！光る宝！

フェアリーヒルズ、ロビー

「ここがロビーだ」

「キレイだねー」

フェアリーヒルズに入ってみたけど、ほんとキレイなところね。するとエルザは、ルーシィを見ていた。

「…にゃん…あのさ、あたしの格好、突っ込んでもいいんだけど…」  
「ん？似合ってるぞ」  
「そ、そう…」

それはそれで微妙だけど…それにしても光る宝があ、目に見えてたら探すのに苦労しないか…。  
すると、いつの間にかエルザは、猫の格好（レオタード風、名札付き）に着替えてた。

「って何やってんの!？」  
「い、いや…流行りなのかと思って…さっきもギアスが着てたし…」  
「違っーーーーー!!」

その後、エルザの案内で各部屋に訪問していった。  
ってか、いつまでその格好なのエルザ。

サイドエンド

フェアリーヒルズ、二階の廊下

私たちはウエンディちゃんの部屋に来て、荷物を軽く整理した後、寮の中を案内する事にしました。

「私たちの部屋、とっても日当たりが良くて良い部屋だったね」  
「で、アンタ達は何してんのよ？」  
「…」（私・オイラ・僕）たちが寮の中を案内してあげる（ね・よ）  
「…」

私たちが向かったのは、

フェアリーヒルズ、大浴場

まずはお風呂場からね。

「ここは大浴場。各部屋にもシャワーはあるけど…」

「湯船に浸かりたい時はここだよ」

「広い！」

「中々良いじゃない」

「私も偶にここを利用してるからね」

「えっ!？」

「アンタ、男の癖にここに入ってる訳!？」

「今は私は女よ。それにミオちゃんが入ってる時以外なら私も利用してるのよ」

「ミオが入ってる時は立ち入り禁止にされてるけどね」

実際、エルザとかレヴィイ達が入っても何とも思わないしね。

ロリコンのギアスだからこそ、同年代系の女子の裸体を見ても、面白くも何ともないと感じるから、入浴を許可しているのであった（ミオが入ってる時のみ不可）。

フェアリーヒルズ、資料部屋

次に来たのが地下の資料部屋。

「地下資料部屋だよ。ギルド程じゃないけど…」

「寮生たちの仕事の記録なんかがあるんだ」

「住んでないのにやけに詳しいのね」

「…よく来てるからね」「」

シャルルが呆れた顔して見てくるわね。

フェアリーヒルズ、レビイの部屋、ルーシィサイド

エルザの案内で、各部屋の住人達に挨拶して回っていた。

「ここはレビイの部屋だ」

「あっ、ルーちゃん！遊びに来たの？」

ここがレビイちゃんの部屋ね。ってか、

「すごい本の数！？」

本が部屋を覆い尽くしてるわね。

「これ全部読んだの！？」

「うん！これでも半分くらいは処分したんだよ」

これで半分！？前はもっと多かったの！？さすがレビイちゃん…。

「私も、偶に不要な本を貰っているんだ」

「へ」

するとレビイちゃんは小声で話してきた。

「エルザは、ちょっとHな本が好きみたい」

「ドキンッ!？」

エルザの意外な趣味発覚!?

しかし、レビイに悲劇が起こった。

「ギャアアアアアアアアッ!?!?...フゲッ!？」

「さ...次に行こうか...」

「レビイちゃん!？」

さっきの会話をエルザに聞かれた為に、どつかれたレビイは壁に激突し、崩れた。

「いだい...」

フェアリーヒルズ、ビスカの部屋

次に来たのはビスカの部屋だった。ってか、何故に動物!?  
ビスカはペットを飼っていた。

「エルザさん、ルーシイも一緒？」

「あ、あの...」

ペットと言っても、犬や猫をイメージしたけど、最初に見たのがな  
んと、



「馬…だよね」

馬がいたのだった。しかも、

「ラクダもいるのよ。牛も羊も」

「動物園!？」

部屋で飼って良い動物じゃないでしょ…。

「本来はペット禁止なのだがな…まつ、これくらいは大目に見よう」

「いつもすみません」

「ちよっ!?!?大目に見るレベルじゃないでしょー!?!?」

てか、何であたし肉食獣と戯れてんの!?!?あ、あたし今ネコの恰好してるからか…って、そこはダメ…よ!?!?

フェアリーヒルズ、ジュビアの部屋

次の部屋はジュビアの部屋ね。

「で、ジュビアに何の用?」

「ルーシイが見学に来たんだ」

「へへ、綺麗にしてるのね」

もっところ、ジメジメした感じで、グレイだらけの部屋をイメージしてたんだけど、案外綺麗な部屋ね。やっぱグレイだらけだったわね。

そう、グレイのぬいぐるみに、グレイの肖像画に、グレイのフィギ



「あつ、ルーシイ？珍しいね、女子寮に謀略を仕掛けに来たの？」  
「ラキ…ただの見学だから…」

何でラキっていつも変な言い回しをするんだろ？  
すると、近くの木造品に脛をぶつけた。

「アイタツ！？脛ぶつけた！？つて、これも木で出来てんの？」

「そつ。部屋の装飾とアート、それに防犯も兼ねてね。足の骨砕け散った？」

「そ、それほどじゃないわ…」

物騒な言い回ししないでねラキ…。

てかよく見たらこの木造品…何で拷問器具の方が多し？あつ、エルザが鎖を持って赤くなってるし！？

フェアリーヒルズ、セツナとミオとクチナシの部屋

次は少女部隊の子たちね。

「あつ、お姉ちゃん達だ！」

「ルーシイさん、エルザさんも？」

「『こんちわー』」

「おお、イヴも来ていたのか」

イヴちゃんがセツナ達の部屋に遊びに来てたみたいね。

「三人とも同じ部屋に住んでるの？」

「そつですよ」

「ミオ達はいつも一緒だよ」

そう言えばこの三人はファントムの頃から一緒よね。

『私たちはユリの関係』

「えっ!？」

「ちょっとクチナシ!？いい加減な事言わないでよ!？」

『でも私たちはいつも裸で抱き合いながら一緒にネタから』

「ええっ!？」

この子達ってそうゆう関係!？

って、エルザ顔真っ赤!？

「字が違つてしょクチナシ!？」

『でも事実』

「煽るな!」

「あのねお姉ちゃん、ミオ達は服を脱いで寝てるんだよ。抱き合ってるのはベッドが一つしかないからだよ」

あっ、そうゆう事ね。

「ボクも暑い日は裸で寝てるよ」

クルス君達の苦勞が解るわ…。

フェアリーヒルズ、エバーグリーンの部屋

部屋に入った途端に恐怖した。



「うわぁ…すごい武器と鎧の数」

「魔法空間に入れて、私が持ち運べる武具数にも、限界がある。入りきらない物は全てここにあるんだ」

エルザの換装も完璧じゃないって事ね。

するとエルザは脱ぎ始めた。

「例えばこれは…」

「まっ！？まさかの…普通に着替える？」

普通に鎧を着始めたエルザ。

「やはり普通に着替えるのは面倒だな…換装！」

着替えにめんどくさくなったのか、換装をし始めたエルザ。

すると、巨大な鎧が出てきた。

その重みで徐々に沈んで行った。

「床抜けますから！？」

「ああ…攻撃力、防御力共にピカイチなのだが、重た過ぎるのが難点でな…」

ふとルーシィはある衣装に目が行った。

「こ、これとか…使い道あるの？」

アヒル付きのチュチュだった。

「無いな。いらんというのに、ナツから昔貰った物だ。欲しければ

やるぞ?」

「要りません」

するとエルザは、

「ところで、ウェンディの歓迎会を兼ねて、これから皆で湖に泳ぎに行くのだが、ルーシィも一緒にどうだ?」

「あゝ…水着持ってきてないし、もう少し寮の中見て回るから」「そうか?残念だな」

エルザと別れたルーシィは、寮の中を散策した。

フェアリーヒルズ、ロビー

光る宝か…どこにあるんだろ?

「まだ見つからないのかい?」

いつの間にかお婆ちゃんがいた。

「アンタも探せば?ってか光る宝って何なの?」

「それは見つけてからの楽しみ」

「憎ったらしい…」

お婆ちゃんがお茶ら気ながら答えた事に軽い怒気を感じた。

「せめて、どの辺で無くしたか思い出せないの?」

「うゝん、何か暗い所だった様な…」

「暗い所ねえ…」

星霊に手伝って貰おうかな？

フェアリーヒルズ、裏庭

暗い所を求めてバルゴを開門してみた。

「にゃん、にゃん」

何故かネコ耳とネコの尻尾を付けたバルゴが出てきた。

「ネココスで、お仕置きですか？」

「違う！」

いくらネコの格好をしてるからって、そっちもなの！？  
バルゴに事情を話して、手伝う事にした。

「…と言う訳なの。とにかく手伝って、暗い所を片っ端から探して欲しいの。そうゆう所得意でしょ？」

「で姫」

「なに？」

「光る宝を見つけれなかったら…お仕置きですにゃん？」

「そこは忘れていいから！」

ともかく、バルゴに任せましょ。

サイドエンド



フェアリーヒルズ、湖畔

今私たちは、ウエンディちゃんの歓迎会の為に湖に来ています。

「「「あはははは」「」」

砂浜を元気に駆け回るレビィとビスカとラキ。

「気持ち良いわね」

私は湖に浮かんでいます。

近くにはウエンディちゃんとエバークリーンがいます。

「いつも言ってますけど…水泳はジュビアにはつまらないですわ」

水になるジュビアは面白くないみたいね。

「まあそう言うな。気持ち良いじゃないか」

湖畔に上がってビーチバレーを行った。

「行つくよ、それ！」

「つとと！？」

私も含めて楽しんでた。

「おにーちゃん、いっくよー！剛速Qー！」

「えっ！？ちよつまっ……」

私はすごい勢いで湖の真ん中辺りまで吹き飛んだ。  
以降、ミオちゃんは審判を強制された。

フェアリーヒルズ、湖畔、ウェンディサイド

ギアスさんが吹き飛ばされた時はびっくりしました。

「それにしても、楽しいですね」

「ああ、フェアリーテイルもフェアリーヒルズも、どっちも楽しいぞ」

エルザさんとお話ししました。

少し離れた所にシャルルがくつろいでいた。

「ふん、皆ガキね」

「お待たせ致しました」

「お風をどうぞ」

ハッピーは飲み物、ルシアは大きな葉っぱでシャルルを扇いでいた。

「あら？オスネコ共の癖に気が利くのね」

「女子寮の皆さんにそう言われます」

するとハッピーとルシアが、

「皆さん！」「あっ！？」「それでは例のやつ行きますよ！」「」

「？」



「他の人！」

「え〜…その〜…」

ビスカさんはモジモジしてますね。

「花が似合って、石像の様な感じの…」

「それって人間ですか？」

エバーグリーンさんて、変な好みですね…。

「エルザは？」

「いないな」

エルザさんは即答ですね。

「他の人！」

「ちょっとお題に無理があります！だってそんな人いる？」

ラキさんがお題に意見してきましたね。

「レビイはどうなの？」

「私!？」

「例えばジェットとか、ドロイとか…」

「三角関係の噂もあるしね」

「冗談！チーム内での恋愛はご法度よ！仕事にも差し支えるもん！」

ばっさりしてますねレビイさん。

すると何処かで、神速の男と植物の男が立ち直れないくらい落ち込んでいたとか？

「トライアングル、グツと来るフレーズね」

「三角関係…恋敵…」

「その真ん中に立つと、全ての毛穴から鮮血が…とか？」

「はい！そこ脱線し過ぎ！」

エバーグリーンさんは何故か楽しそうな顔をして、ジュビアさんは湯気が出るほど不機嫌になって、ラキさんは妙な事を考えていましたね…。

「チームの恋愛って言えば、私前から疑ってる事があって…」

「なにになに？」

「実は、ナツとエルザが怪しいんじゃないかと思うの！だって昔、一緒にお風呂とかに入ってたって言うし！」

「そう言えば！」

「ん？グレイとギアスとも入ったぞ？」

「えっ!?!」

「それは即ち、好きと言う事になるのか？」

「少なくとも私には無いわね」

エルザさんの話でギアスさん以外皆湯気が出てますね。

「グレイ様と…お風呂」  
「ピコッ！」  
「バシッ！」  
「!?!」

「はいそこ！想像しなあい！」

ハッピーとルシアが、持ってたピコハンとハリセンでジュビアさんを叩きました!?!

「ビスカこそ、アルザックとは相変わらずうまくいってるのか？」

「エルザさん!?!それ内緒です…」

「え？皆知ってるよ？」

「と言つより、知らないのアルザックだけだし」

「「「「「「「「「「「「「「」

「ポ……」

ビスカさんの恋心が既に皆さんに知れ渡つてゐる事に落ち込んでますね。

「すまん……うっかりしていた。仲間だと言つのに……私の所為だ……取り合えず、殴つてくれないか？」

「え……」

すごい責任の取り方ですねエルザさん！？

「ミオはどうなの？」

「ミオはおにーちゃんだよ」

「ミオちゃん……」

ミオさんて純粹な人ですね。

「セツナは？」

「わ、私ですか！？私はその……が、ガジル先輩が……」

「えっ、ガジルなの！？」

「よりもよつてガジルとはな……」

「だって、あの人ほどワイルドで、渋い人は他にいないもの」

セツナさんはガジルさんですか、あの怖い人がいいんですねセツナさん……。

「クチナシはどうなの？」

『セツナとミオとジューピア様、最近ではエルザ様とミラ様にルーシイ

さん、後女ギアスに女装クルス」

「い、意外と多いわねクチナシ…」

「というより、全部女性じゃない？」

『私は男よりも女が好みです。それに女装が似合う男の子ならオツケー！』

「…アンタの趣味、時々解らないわ…」

クチナシさんて、男性よりも女性なんだ…好きなのって…。

「じゃあルーシイはどう？」

「ナツじゃない？」

「意外にグレイかも？」

「ジユビアはロキだと！」

「あつ、でも、ルーちゃん言ってたよ。ブルーペガサスのヒビキって人に優しくして貰ったって」

ヒビキさんですか。あの時はお世話になりました。

「うーん、意表を突いてリーダーとか！」

「……」「無い無い無い……」「……」

「分かった！きつとミラさんだ！」

「それもどうかと……」

ルーシイさんの相手が段々変な方向に行ってますね…。それにしても楽しそうだな。

「いつもこんな事してるんだ」

「そうとうバカっぽいけど、魔導士の仕事はストレスかかるみたいだから、息抜きしてんでしょ」

これがギルドの皆との触れ合いなんだね。

「てか、あんたも次からあれに参加するんでしょ？」

「えっ!？」

それは…さすがに恥ずかしいよ…。

フェアリーヒルズ、裏庭、ルーシイサイド

バルゴに頼んで探させてるけど、何で掘ってるのよ!？」

「ちよつとー!？暗い所〓土の中って限らないでしょ!？しかも掘り過ぎだから!？」

裏庭が穴ぼこだらけじゃないの!？」

「光る宝は見つかりません、お仕置きですね?」

すると、フェアリーヒルズは少し沈んだ。

「どんだけ掘ったのよ!？」

「あと3回くらい掘ったら、建物が倒壊します。お仕置きですね?」

その後、ギアスが戻って来たみたいなので、土下座する勢いで頼んで元に戻して貰いました。

フェアリーヒルズ、ロビー



光る宝について悩んでたら、

「まだなのかい？ノロマだね！」

「の、ノロマ!？」

お婆ちゃんにどやされた。

「暗い所と言った筈じゃ、こんな所をうろつると」

「うっん…」

私はふと上を見上げて天井をみた。

「!？屋根裏部屋…とか？」

「おお！そこかも！」

「行きましょ！」

「あゝれゝ腰が…」

「うぎ…分かったわよ！行ってくる！」

「頼んだぞ〜！」

光る宝があるかもしれない屋根裏部屋に向かった。

フェアリーヒルズ、屋根裏部屋

結構暗いわね。それに狭いし…きっとここにある筈よ。  
ほふく前進しなければ進めないほど狭さだった。

「ん？あの扉かしら？」

ルーシィは扉を開けると、そこには光の柱が立っていた。

「光る…宝…あった！これだわ！間違いない！すごい輝き！」

私は光が出てる穴を覗き込んだ。

しかし、そこで見たものは、

「ん…ん！？」

そこは、

「やはり、水遊びの後はこれに限るな」

「気持ち良いわね」

大浴場だった。

「ジュビアどうかした？」

「ジュビアはお部屋で入りたい…恥ずかしいから…」

「女同士で何言ってるのよ」

「（女同士だからこそ出来る事もありますよジュビア様）」 防水性

「つてちよつとクチナシ！？変な所触らないでよ！？」

「おにーちゃんも一緒に入ればいいのに…」

「永田ギアスは宮田ウエンディや早田ミミオが一緒じゃ入れないんだっけ？」

「シャルル、気持ち良い？」

「…自分で洗えるわよ…」

「ルーちゃんも、来れば良かったのに」

「一応誘ったんだがな…」

…お宝つて…確かに…男子にとってはそうかも知れないけど…サイ  
テー！

「あ、あのばーさん…中々いいギャグセンスしてるわね…許すまじ  
！…ん？」

一発殴ろうかと起き上がったら、天井に何かあった。  
それは、地図だった。

「これは…地図？ううん、寮の見取り図だわ！」

すると、覗き穴から光が出て、見取り図に光が指していた。  
いや、正確には見取り図の裏庭の所の木の部分に指していた。

「まさか、この光の当たってる場所に、本当の宝g「ゴンツ！」が  
っ！？イタツ、痛い痛い痛い…」

勢い余って立ち上がったら、天井にぶつけて痛みだすルーシイ。

フェアリーヒルズ、裏庭

寮の裏庭、大きな木があつて、一日中影が出来てる暗い場所。  
庭に出たルーシイは、先程屋根裏部屋で見た見取り図の木の部分が  
あつた場所を見た。

ルーシイはその木を見上げると、そこには小さな穴があつた。  
きつとあそこにあるんだわ！

ルーシイは脚立を持ってその穴を調べると、そこには小さな箱があ  
つた。



「え？」

6年前に亡くなってるって？えっ!？

エルザは険しい顔で俯いていた。

「う、うそ?...だってあたし...」

「6年前...シロツメに買い物に行った帰りだ...馬車が崖から転落してな...」

「え?え?」

お婆ちゃんが...本当に...死んだの?

エルザはルーシイが抱えてる箱に気付いた。

「その箱は?」

「あ、あたし...お婆ちゃんに会ったの!それで、これを探してほし  
いって...」

「何だと!?!中身は!?!」

「う、うん!開けてみるね!」

ルーシイが箱を開けてみた。

中には、光り輝く宝石でいっぱいだった。

「わあ、宝石!キレイ!」

するとエルザは、口に手を当て始めた。

「本物の...宝石...」

「エルザ?」

どうしたんだろう?

エルザは、お婆ちゃんの事を話し始めた。

「ヒルダお婆ちゃんはな…頑固で口うるさくて、憎まれ口ばかりたくお婆ちゃんだった。しかし誰よりも寮生を気遣い、私たちが危険な仕事に行くのを辛そうにしていた…」

『魔導士なんて辞めちまえ!』

「それが、お婆ちゃんの口癖だった。本心がどうかは、今となっては分からぬが…」

「……………」

それからエルザは話し続けた。

「そんなある日の事だった」

『一人一個ずつ、宝石のプレゼントだ。オモチャだけどね』

『うわあ、キレイ!』

『ヒルダお婆ちゃんがこんなくれるなんて、初めてね』

「だが、全員に配るには、オモチャの宝石は一人分足りなかったんだ。あの時のお婆ちゃんは、珍しくオロオロしてな…周りの子たちも、変な空気になってしまった…」

『私には似合わない、遠慮する。皆で分けてくれ』

「場を鎮めたかったんだろうな…つい心にもない事を言ってしまったが、本当はすごく欲しかった。大好きなお婆ちゃんからの、初めてのプレゼントの筈だった…」

何だか、聞いてて不憫になってきたわね。

「その夜、お婆ちゃんが私の部屋に来てな…」

『エルザ、お前は将来良い女になるよ。きっと宝石の似合う美人になる』

「初めて見るお婆ちゃんの笑顔に、ドキドキしたんだ」

「大人になつたらアタシの宝石をあげるよ。オモチャじゃない、本物の宝石だよ。全部あげる」

「わ、私はもう大人だ！」

「まだまだ、もう少し背が伸びて胸も大きくなって、そしたらきつと、猫のお姫様がたくさんの宝石を運んで来てくれるよ」

「ふふ、猫のお姫様なんていないよ。子供扱いし過ぎ」

「あはははは」

「…お婆ちゃんが亡くなったのは…その次の日だった…」

エルザは涙を流し始めた。

「あれから6年…あなたはずっと私たちを、見守ってくれていたんだな…」

ルーシイは貰い鳴きしていた。

「この宝石は皆で分けよう」

「そうだね、それが良いと思う」

するとエルザは、宝石の一つを私の手に乗せた。

「これは、お前の分だ」

「え！？い、いらないうて！？貰えないよあたし…」

「何を言っている…宝石を運ぶ、猫のお姫様じゃないか」

「あっ！？」

そうか、だからお婆ちゃん、あたしにこの格好を。

すると、持っていた依頼書から、光となって消え始めていた。

「あっ！？見て！依頼書が消えてく！」

「天国からの手紙だったのかな？」

光が空に向かって消えていく光景は、幻想的に見えた。  
あれ？何かスースーするようなの？

「る、ルーシー！？」

「ん？」

「お前の服も…消えてるんだが…」

「ん？…きゃああああああああつ！！？」

何で消えてるの！？

「天国からの服だったのか…」

「ちよつと…今のあたし、間抜け過ぎ！！？」

人の想いは繋がる、時を越えて、愛する人の下へ、それを感じる事が出来たんだ。あたしの報酬は、それだけで充分よ。

翌日、フェアリーテイル

あたしは良い仕事があるかどうかリクエストボードに来ていた。

「良い仕事ないかな？」

すると、気になった依頼書を見つけた。

「ん、何コレ？」



読んでみると、

「ウサ耳管理人募集、女子寮にての管理業務をバーニーちゃんに報酬は出さないよ!」って!?!」

まさかこれって!?!?

「まーよろしくってか。魔導士なんて辞めちまえ!」  
「帰れ!?!?!」

何故かヒルダがそばにいた。  
お婆ちゃん!? 成仏したんじゃないやなかったんかい!?!?!

**番外編 1 ようこそフェアリーヒルズ！（後書き）**

番外編でした。

宝石のエピソードで感動しました。

ちなみにイヴは、クルスとギドの三人でアパート暮しです。

ギアスは離瑠とハッピーとルシアを連れて銭湯に行きました。

**募集&お知らせ&ネタ晴れ(前書き)**

皆悪魔の実の能力とメイビスとIF作品にしか目が行ってるので、  
少し変えてみました。

## 募集&お知らせ&ネタ晴れ

この作品を見てくださる皆様、ニードレスとワンピースのネタが天狼島編で終わろうとしています。

その為には、皆さんに募集します。

### 1・ギアスの新たな新要素

上記の様に、7年後のネタがありません。

それを回避する為にも、7年後のギアスに新要素を加えたいと思いますが、何も浮かばないので、皆さんに募集をかけたいと思います。

どんな作品でも構いません、参考になるものを募集しています。

### 2・メイビスについて

メイビスを見た時、初めてギアスをロリコン設定にした自分を褒めてやりたいと思いました。

当然ギアスはメイビスにベタ惚れにする予定ですが、メイビスは天狼島に残るか、ギアスがメイビスの肉体を造ってギアス達と共に行動するか、どちらにしようか迷っています。

### 3・IF作品

天狼島編を終えたら、IF作品を書こうとしています。

どのIF作品が良いか、募集します。

#### 1・テイルズオブシリーズ

- 1) テイルズオブヴェスペリア〜虹の力を持つ不要者〜
- 2) テイルズオブグレイセス〜光を纏いし神父〜
- 3) テイルズオブエクシリア〜ザ・マクスウェル・セカンド〜

## 2・真・恋姫無双〜天（虹竜）の御使い〜

### 1）蜀編

#### 2）魏編

#### 3）呉編

## 3・バカと虹竜と召喚獣

と考えています。もしかしたらこれら以外にも追加する予定もあります。

締め切りは天狼島編に突入する前までです。

皆さん、募集お願いしますね。

ここで少しネタ晴れしちゃいます。

エドラス編は、

エドラスギアス（女装者）とその弟を出すつもりです。

弟は元々フェアリーテイルにいたのだが、兄の事で王国軍に寝返ったとゆう風にします。

ギアスVS弟という展開にします。

ちなみに弟の武器は、空島編のワイパーが使ってた大砲を使用します。

当然、ニードレスキャラも出します。アースランドに出なかったデイスクとセトとソルヴァも出す予定です。

天狼島編は、

セツナ、ミオ、イヴ、サテンを候補に入れる予定です。

サテンの相棒はウテン、セツナはクチナシ、ミオは新キャラの胡桃クルミ、イヴはクルスにする予定です。

セツナは誰も合わないルート、ミオはジュビアと一緒にエルザとバトル、そしてサテンとイヴはギアスとバトルの展開にします。

試験の途中で、シャルルとリリーの他に、ルシアと離瑠も同行します。  
悪魔の心臓グリモアの煉獄の七眷属に、悪の転生者を入れて、煉獄の八眷属にする予定です。

墮天使による犯罪者を転生させて、自然系ロギアの能力に似せた魔法、自然のアークを持たせたという設定を考えてます。

覚える魔法は今のところメストの瞬間移動魔法と、ラストイローズの具現のアークです。

以上です。

尚、このページは天狼島編に突入と同時に削除させて頂きますので御了承を。

## 虹の桜（前書き）

原作とは違い、ルーシィは風邪を引いてません。

## 虹の桜

ハコベ山

俺達は、煎じて飲むと魔力が一時的に高まると言われてる薬草を取りに来ていた。

何故その薬草を採ってくるって？明日は年に一度の花見があるので、薬草は花見で行われるビンゴの景品にするつもりらしい。

本当は依頼だけでもめに手に入れたら景品にしようと考えたからだ。まあ、ウエンディちゃんが一緒に来てくれるのはありがたいからね。風邪引いちゃうといけないから、毛皮の毛布(ヒートタイアル)とか毛皮のコート(ヒートダイアル)とかたくさん用意してきました。

「はあ〜、暖まる〜」

「ホント、暖かいですね〜」

ウエンディちゃん、ついでにルーシイが「ついで！？」絶賛してた。つか、心読むな。

ちなみに二人はいつの間にか開門したホロロギウムの中でヌクヌクしてた。

「あたしってまたここで薄着で来ちゃったからどうしようと思っただけど、ギアスが温かくなる毛布とかコートとか用意してくれて助かったわ〜」「温かいです〜」と申しております」

いちいち代弁するのも大変だなホロロギウム。

途中バルカン達の邪魔が入ったけど、俺達は問題無かった。



「「すごい綺麗なんだよ、マグノリアの桜ってね。しかも夜になると、花弁が虹色になるの！そりゃもう、ちょく綺麗で〜！」「虹色の桜！？わぁ想像しただけで綺麗！」「でしよでしよ！」と申ししております」

「そうそう、何てつたて虹色の桜は摘みに最高なんだよ！揚げても美味しい、酒に入れてもまた格別な味わいが…」

「それはお前だけだろ！」

「うおっ！？エルザに突っ込まれた！？」

「虹竜だから虹の桜は大好物ってか？」

「良いな〜ギアスは。どっかに炎の桜とかねえかな？」

「あるかそんなモン！」

グレイとナツは毎度お馴染になつてる漫才をした。

「止めんか！」

エルザが二人を制した事もまたお馴染。すると、

「時間です。ではごきげんよう」

ホロロギウムのいる時間が終了した為、閉門した。  
その結果、

「「さむ〜！！？？」」

「おいおい…」

「お前達もちゃんと探さないか！」

ルーシィとウエンディは当然強制的に外に出てしまい、寒がった為か二人で抱き合った。羨ましい。するとナツが、

「お！匂うぞ、これぜってえ薬草の匂いだ！」

「相変わらずすごい鼻だね…」

「ってか、あんたその薬草の匂い嗅いだ事ある訳？」

「ギアスはどうなの？」

「確かに山頂付近から嗅いだ事の無い草の匂いが漂って来るな」

「よし、行くぞハッピー！」

「あいさー！」

ナツは山頂へ一気に走り出した。

ハッピーもナツの後を追って行った。

残った連中も呆れながらナツの後を追った。

「あつた〜！」

「早っ！？」

「はえ事は良い事だ…」

ナツの叫びでルーシィは呆れてた。

つかグレイ、その台詞はレーサーのдарる？

「さすがだな」

「ナツさんすごい！」

「やっぱり獣ね」

「何か腹立ってきたな…」

「ギアス、ナツに嫉妬しないで…」

ウエンディちゃんに褒められてるナツに嫉妬しているギアスだった。

「おーし、さっさと積んで帰るぞ」  
「あいさー」

その時、

「「？」」

『ガアアアアアアアツ！！』

ブリザード・バーン、通称白ワイバーンが襲ってきた。  
しかも意外と草食で、好物が目的の薬草だという。

「何いー！？」

「一人占めする気だ！？」

「確かこうゆうのを一石二鳥とか棚ボタつつうんだよな？白ワイバーンの鱗は、結構高く売れるって知ってっか？」

「おーし、薬草ついでにコイツの鱗全部剥ぎ取ってやんぞ！」

ナツとグレイが戦闘態勢に入った。

ナツの言い分で白ワイバーンが怯んだ。

「んじゃあ軽く捻って、鱗を取るかな」

「ここは私たちに任せて、ルーシィ達は下がってる！」

ついでに俺とエルザも戦闘態勢に入った。

今日のエルザの鎧は雷帝らいていの鎧か。

「私たちはアレの注意を引き付ける。その隙を窺って、ルーシィ達は薬草を採取するんだ！」

「はいっ！」

「仕方ないわね」

「え〜…何か一番危険なポジションではないかと…」

「頼んだ!!!」

「はっ、はい!?!? やります喜んで!?!?」

相変わらずエルザの頼み込みは凄まじいな。

「行くぞ! ナツ、グレイ、ギアス!」

「「「応よ!」」」

四人は白ワイバーンに仕掛けた。

「火竜の、煌炎!」

ナツが火竜の煌炎を放ったが、白ワイバーンの翼の風圧で跳ね返された。

「「「きゃああー!」」」つ!?!?!?」

跳ね返した先には、薬草を採取中だったルーシィとウェンディがいた。

もちろんハッピーとルシアとシャルルが間一髪二人を助けた。

「はっ!?! ウェンディちゃんが!?!? 「あたしはっ!?!?」コンノオ、ウェンディちゃんニ怪我させたらドウスル気ダコノハネトカゲガアツ!?!?!」

ギアスは人外化しようとしていた。

「「うわ怖え!?!?」

「ギアスの逆鱗に触れたみてえだな…」

「これから起こる事を想像すると、白ワイバーンが哀れに思えるな…」

ナツ、グレイ、エルザも白ワイバーンに同情していた。

「滅竜奥義イ…」

「「いきなり滅竜奥義!?!?!」」

「閃光…」

人外化したギアスは白ワイバーンよりも高くジャンプした。

「（ギア、？（サード）！骨風船！）」

ギアスは親指を口に付け、思いつきり空気を入れると、腕が巨大化した。

「きょじんけん巨人拳!!!」

ドッゴオオオン

巨大化した虹竜の聖拳で白ワイバーンを押し潰した。

「判決・・・死刑!!!」

いつもの様に腕を十字に振り、決めポーズを取った。

「「「「「白ワイバーン…哀れ…」」」」」」

ギアス以外のメンバーがそう呟いた。

そして、

コトコトコトコトコトコトコト...

「何この音？」

ルーシイが振り向くと、そこには...

「雪崩えええええっ！！？」

そう、先程のギアスの一撃で山が揺れ響いた為、雪崩を引き起こしたのだった。

「てへっ」

「コトコトコトコトコトコトコトてへっじゃねー！！」「」「」「」「」

そして雪崩に巻き込まれていった一同。

「うわー...」

いや、ウエンディとルーシイはハッピー達によって上空に逃げたから助かったようだ。

薬草もどうやら無事に採取出来た様だった。

「皆無事か？」

「いやあびつくりしたな」

「お前の所為だろギアス！」

「つつぷ...」

俺達は白ワイバーンに乗っていたから平気だった。

つかナツ、今ので酔ったのかよ…。  
無事薬草と白ワイバーンの鱗をゲットした俺達は、ギルドへと帰っていった。

### 翌日、虹の桜園

待ちに待った花見の日がやってきた。

「良い天気だな」

「絶好の花見日和だね」

「クッキー焼いてきたけど食べる？」

「食べる食べる！」

「相変わらず騒がしいな」

「こつゆう日は無礼講だ。私も貰って良いか？」

「俺もパイを焼いて来たんだが、食つか？」

「えっ！？ギアスさんで料理で来たんですか？」

「ギアスの料理は美味しいよ」

「意外！？」

「驚く事か？」

「ギアス様、お注ぎします」

「あつ、わりい離溜」

始まって早々騒ぎ始めたいつものメンバー達。  
他の所は、

「これは私のだからね！」

「樽（酒入り）ごと持ってきたんか！？」

「誰も取りやしねえっての」

カナとワカバとマカオの所は相変わらずだな。

「花見は、漢だー！」

「意味解んないよ…」

「レビイ、何食べる？」

「レビイ、何飲む？」

エルフマンも相変わらず漢と言ってるし、そんなエルフマンに突っ込むレビイ。

ドロイもジェットもレビイに何か勧めてるし。

「グレイ様、お注ぎしますわ」

「あつ、わりいなジユビア」

結構良い雰囲気だなジユビアとグレイ。

「あたし楽しみだったのよね花見！」

「私も楽しみです！」

「僕も皆で花見なんて初めてです！」

「花見か、久しぶりじゃのう」

「ギド、爺臭いよ？」

「ほつとけ！」

ルーシイと元ケット・シエルター組も楽しんでいるな。

『セツナ、ガジル様にワカメ酒を勧めたら？』

「ぶつ！？クチナシ、何言ってるのよ！？」

「ふみゆ？クチナシちゃん、ワカメ酒って何？」

「ミオは知らなくて良いわよ！」



「…イカしてるぜ」

…元ファントム組も、花見らしく盛り上がって…るのかな？  
しばらく騒いでると、ビンゴマシーンが出てきた。

「それではこれより、お花見恒例のビンゴ大会を始めます！」  
「……………ビンゴ〜！！」「……………」

ビンゴ大会が始まった。

前は全然来なかったからな。今年は狙うぜ！

「よっほっほっほ、今年も豪華な景品が盛りだくさんじゃ！皆気合  
を入れてかかって来〜い！」

「……………おお〜！！」「……………」

「皆、用意は良い？」

「……………あいさ〜！！」「……………」

だから何故返事がハッピー？

「それじゃあ、真ん中の穴を開けて下さ〜い」

良し来い！

「レッツビンゴ〜！」

「まずは一発目じゃ〜！」

マスターが魔力を込めると、ビンゴマシーンが回転を始めた。  
出た目は…。

「24番」

24…24…無いか…。

「やった！いきなり来たよ！」

「すごい強運」

「レビイ頑張れ！」

カナがいきなり来たみたいだ。  
その後4回くらい続いた。

「続いて…5番」

おっ、あつた！

「うお、開いた！漢だっ！」

「漢は関係無えだろ」

「…全然来ないな」

エルフマンが叫び、ガジルが突っ込み、ナブはぼやいた。  
続いて11回目、

「68番」

「ビンゴだあああつ！！」

もう来たのかよエルザ！？

「ノリノリだな…」

「 그레이様、私リーチが三つもありますわ」

「そりやすげえなジユビア」

ジユビア…結構当たってたのかよ…。

「初ビンゴはエルザね」

「運も修練の賜物だ。で、景品は何だ？」

そわそわしてるなエルザは。

「はあ〜い、これ。一時的に魔力がアップされると噂の、薬草です」

「何いつ!？」

それって、確か昨日…、

「これは昨日私たちが取って来た物だろ!?!しかも既に枯れている…」

あの薬草が茶色くドヨドヨした感じになっていた。

「急に温かい所に持ってきたかのう」

「私の…ビンゴがあ…」

「あらあら」

エルザ…哀れだ…。

「なるほど、最初の方の景品は大した事無い物って訳ね」

シャルルが的を得た事を言った。

「ギアスウー!頼む、せめてこれを元の状態にしてくれええつ!」

「どわあっ！？エルザ！？急にしがみ付くな！？」

エルザが泣きながら薬草を持ってギアスにしがみ付いてきた。さすがにかわいそうだったから、時のアークで変える前の状態にしたら、エルザは少し機嫌が治ったようだ。

その後も何人かビンゴしていった。

俺もダブルリーチしてるのにまだ来ねえよ…。

「63番」

「ビンゴー！！」

「マジか！？俺一個も来ねえ！？」

「おめえは爪が甘いんだよ」

「父ちゃん頑張れ！」

次はカナか。

つかマカオ、今まで一個も来ないなんて、ある意味才能だぞ？

「絶対当たらない気がする…」

「シャルルの予感は良く当たるけどね…」

まあシャルルは未来予知が無意識に使えるからそう思うだろうけどさ。

「うっ、景品がそろそろ無くなっちゃっよ…」

「僕もう自信無くなってきたよ…」

ハッピーとルシアはちょっぴり気落ちしてきた。

「来い来い来い来い！」

ナツも気合を入れていた。  
すると、

「115番」

115…115…115…115…おっ！

「「「「ビンゴォー！」「」「」

やっと来たぜビンゴ！って！？

「「「「あれっ？？」「」「」

げっ！？よりもよってエルフマンとジュビアとレヴィイがかぶった  
よ！？

「あらあら？」

「四人同時か？じゃあ一発芸で一番面白い奴に景品をやるっかの」  
「「「「一発芸！？」「」「」

一発芸ね…。

「景品はなんと、アカネリゾートの高級ホテル、二泊三日のペアチ  
ケット！」

「ぬうわああぬいいいいいいいっつっ！！？ペアチケットだと  
！？」

「「「「「叫び過ぎだギアス！！？」「」「」

だってだって、ペアだぞ！二人でだぞ！興奮しない訳が無い！！

「すごい！」

「「ペアで旅行！！」」

ドロイもジェットも、今の俺と同じ心境だろうな。

「アカネリゾートか、姉ちゃんにプレゼントしてやる！」

姉孝行だねエルフマン。

「グレイ様と二人つきり…二泊三日…ジュビア、まだ心の準備が…」

ジュビア…お前新婚旅行と勘違いしてねえか？まあ無理も無いけど。

「よーし！絶対ゲットして、ミオたんかウエンデイちゃんか離瑠か山田たんに誘って行くぞおっ！！」

「ちよっ、ええっ！？さり気に僕も入っていませんでしたか！？」

「「「「「「ドンマイ……」」」」」」

何故皆クルスに同情してんだ？  
すると、

ポローン

いつの間にかまた白スーツを着たガジルがスタンバっていた。

『一発芸…それは、一度きりギリギリの戦い！つまり俺の出番て事さ、相棒……』

「「「「「またお前かあっ！！？」「」「」」」」

「頑張つてガジル先輩！」

「引つ込めー！っーか、リーチもしてねえだろお前は！」

ガジルは放っておいて、全員が一発芸をした結果、

「漢だぁー!!」

「ペアチケットはエルフマンに決定ね」

エルフマンが優勝してしまった…。

「グレイ様との…旅行が…」

「残念だったなあ…」

「くっそう…」

ジユビアとレヴィ（つかドロイとジェット）は残念そうだったが、

「ぐおおおおおお…ペアチケットオオオ…」

ギアスが一番悔しがっていた（某割れ頭風に落ち込んでいた）。

しかしほとんどの連中は「ギアスに当たなくて良かったな」と思っていた。

折角のチャンスをモノに出来なかったあゝ…。

しばらく落ち込んでいたら、いつの間にかビンゴ大会が終わっていた。

そして夜になるまで騒ぐ一行。

「そろそろ時間だな」

「時間？」

「虹の桜が咲く時間だよ」

「えっ、そろそろなんですか!」

すると、桜の花びらが虹色に染まっていった。

「「「「うわあ〜！」「」「」

「今年も綺麗だな」

「「「綺麗」」「」

「こんな桜もあるのじゃな」

「ホントに虹色だ〜！」

さてと、用意するかな？

ギアスは、酒と油と鍋を用意した。

「さ〜て、摘みでも作るか」

「ギアス…風情が無いよ…」

「ギアスの場合、花より団子だな」

良いだろ美味いんだから！

そうしている内に、花見の時間が終わった。

今年もよろしくな、フェアリーテイル。



## 虹の桜（後書き）

意外と料理が出来るギアスでした。天狼島編を終えたら、一度完結にして、新たな題名で投稿しようと思っ  
てます。

題名はもう決めています（マガジンでこれからのストーリー次第で  
変えるかも知れません）。

新たなオリ主を追加して、ギアスと二人で主役をやらせようと思  
います（もちろん滅竜魔導士です）。

ちなみに今回考えたオリ主は、ギアスと違う性格にします。

初登場の滅竜魔法

滅竜奥義、閃光巨人拳せんこうきょじんけん

次回はウェンディの初仕事、ギアスの出番はあるのか！？

ウェンデイ、始めての大仕事！？（前書き）

今回ギアスは出ません。

誰かがそう言った程度にしか出しません。

ウェンデイ、始めての大仕事！？

フェアリーテイル、ウェンデイサイド

マグノリア内での簡単な仕事をこなしてきましたけど、そろそろ大きな仕事にもチャレンジして、皆さんのお役に立てる様にしたいかなーとね。

するとミラさんから、「心を癒してくれる魔導士を探してる」って内容の依頼を私に勧めてくれました。

私にピッタリの依頼ですね！  
依頼内容を読んでみると、

『ありがとうございます。劇団の役者に逃げられ、舞台の公演は失敗続き、心も体もスタスタです。私を元気付けて下さい。ありがとうございます。シェアザード劇団団長ラビアン』

という内容です。

でも、何でいきなりお礼何ですか？

ナツさん達が前に依頼を受けた事がありましたので訊いてみると。

「ウェンデイ、悪い事は言わねえから止めとけ！」

「とんくでもなく人使い荒いからよお……」

「低賃金重労働……しかも中々返して貰えなかったのよ……」

何だか……すごく大変だった感じですね……。

でも、心を癒して欲しい程落ち込んでいるなら、私が何とかしてあげたいですし……。

それにシャルル、私が余所の場所での仕事なんてまだ無理って言う

のなんて、私だってちゃんと依頼を果たしてみせるんだから！  
それで私一人で行こうと思いましたが、マスターに呼び止められて、  
一人で行くにはまだダメと言われ、マスターの人選でハッピーと、  
それにフリードさんと行く事になりました。

フリードさんとは話した事があまりなかったので、これを期に親睦  
が深めると良いですね。

ちなみにギアスさんは一緒に行きたがっていましたが、フリード  
さんが術式で、「ウエンデイが依頼をこなすまでの間、ギアセルシ  
ア・ニードレスはギルド内から出る事を禁ずる」という内容の術式  
を張ったから、行きたくても行かなかったといえます。

それでは、初めての私の仕事、頑張ります！

マグノリア駅

『オニバス行の列車は、線路の破損事故の為に運休です！繰り返し  
ます、オニバス行は運休です！』

あれ？列車が出ませんね？

「さっそく試練だな。どうするウエンデイ？」

フリードさんが尋ねてきました。

「おいら、飛べるからさあ、一気に空飛んで連れてってあげようか  
？」

ハッピーがそう言ってますけど、止めます！

「うっん、今回の仕事は、出来るだけ自分の力だけでやり遂げたいの！だから…オニバスまで、歩いて行こうと思っの！」

「ええー！？めちゃくちゃ時間がかるよ！？フリードも止めてよ！」

「確かに、その通りだな」

やっぱり無茶ですか？

「ほら、フリードもこう言って」「俺も歩こう」「ええっ！！？？」

フリードさん、賛成してくれるんですか！

「この仕事は、ウエンデイの意思を尊重する。マスターに言われた。

それが、云わばルールだ！ルールは、守らねばならん」

「ありがとうございます、フリードさん！」

「頭固過ぎ…」

そして私たちは、徒歩で向かう事になりました。

## 山岳地帯

「この距離を歩くの…」

「正確に言えば、お前は歩くのではなく、飛んでいる訳だが？」

「どっちもあんまり変わんないよ！」

「言葉は正確に使うべきだ！術式を使う俺には、言葉の大切さが良く解る」

「そんな話今されても…」

「行きましよ。急がないと日が暮れちゃいます」

フリードさんて、言葉には気を付けてるんですね。でも、二人は私の我儘に付き合ってる訳だし…。

「すみません、私の為にお二人まで…」

「仲間の為だ、気にするな」

「ねえ、少し休もうよ〜」

あ、雨降りそう。

「でも、雨が降りそうだから、急ぎましょう。私、空気が読めるんです」

「まさか〜、こんなお天気なの!?」

その直後、激しい豪雨になった。

「何だこの天気!?!」

「早く雨宿りしないと!?!」

どこかに雨宿り出来る所は…あつ、洞穴だ!

「良かった〜、一休み出来る所があつて」

「ホントですね。あれ?フリードさんは?」

振り向くと、空に向かって何か叫んでいますねフリードさん?

「フリードさん!」ん?「こっちです〜!」

「ああ…」

フリードさん、どうしたんでしょう?!

「良かった、やはり手を貸さなくて正解だった…」

「ん？何ブツブツ言ってるの？」

「ふっ、解らなくて良い事だ」

「フリードの頭の中ってどうなってるんだろ…」

とにかく、これで雨宿り出来ますね。

しばらくすると、雨があがった。

「雨があがって良かったね」

「でも、暗くなるわ…今夜は野宿するしかないみたい…」

「寝る場所は、さっきの洞穴で良いとして、問題は食糧だな」

そうですね、ご飯どうしましょう？

「食べ物集めぐらい手伝ってよ。でないとお腹減って倒れちゃう

…」

「案ずるな。俺も、己の成すべき事、成さざるべき事は弁えている男だ」

「いちいち言い回し固過ぎ…」

「俺に食料の心当たりがある。既に準備も終えている」

「本当ですか！」

「さすが雷神衆！いざという時は頼りになるね！」

「うん！」

さすがフリードさん、用意が良いですね。

フリードは剣を抜き、術式を展開した。

「この術式に入った…羽魚は落下する！」

空から大量の羽魚が落ちてきた。

「何で羽魚!?!」

「この辺りは、羽魚の回遊ルートだ。今は卵を産む為、羽魚の群れが登って来る季節なんだ」

不思議な魚ですね？

「これ食べられるんですか？」

「ううん…めちゃくちゃまずいんだよ…」  
「えっ!?!」  
「おいら達、前に酷い目にあつたんだから…」

「と思うのが、素人の浅はかさ。大方、焼き魚にでもしたんだろ？  
羽魚の調理には、コツがあるんだ」

フリードは羽魚を浮かし、三枚下ろしにし始めた。

「フリードさんて、お料理がお得意なんですか？」

「それ程でもないが、ラクサスや雷神衆と行動するととなると、たまにな」

フリードがいつの間にか用意したテーブルに料理を置いた。

「美味しそ〜!」

豪華ですね!

「味も見た目に負けないぞ。さ、遠慮せずに食べてくれ」

「いただきます!」

パクッ



…お…美味しくない…。  
やはり不味かった様だ。

「やっぱ…調理法の問題じゃなかった…」

「確かあつちに木の実があったから…それを食べましょう…」

「あい…」

「好き嫌いは感心しないな。魔導士は体が資本だと言うのに…」

何でフリードさんは…あんなに黙々と食べられるんでしょう…？

## 砂漠地帯

翌日、私たちは森が多い山道を抜けると、今度は砂漠地帯を歩いています。

それにしてもフリードさん、暑いの大丈夫なんですか？

「山道の次は砂漠かあ…」

「フリードさん、暑さに強いんですね」

「こっそり魔法で涼しくしてるんじゃないの？」

「仲間を差し置いて、自分だけ楽をしようとは思わん。単に鍛え方の問題だ」

フリードさんすごいです。

するとハッピーが倒れた。

「ああ…もうダメ…」

「ハッピー！？待ってて、私が元気にしてあげる！」

ウェンディは治癒魔法をハッピーに掛けた。  
すると、

「君が、魔力を使う事は無い。俺が何とかしてみよう」  
「どうするんですか?」

フリードさんは近くの岩場にハッピーを置きました。

「まずこうして寝かせる」

そして術式を張りました。

「続いて、呪文を書く。この術式の中にいる者は、暑さを感じない」

あっ、岩が熱で温まっています!?

「岩が熱くて焦げちゃうよ…」

「術式を設定するには、時間がかかるのだ」

あれ?良く考えると…。

「てゆうか、術式から出てら意味無いんじゃない?」

「あい…」

結局歩く事になりました。

「暑…」

「もう一息だ、我慢しろ」

「あっ!?!」

空気の流れが変わった!?

「…嵐が来る!」

「嵐つて、砂嵐!?!」

「この地方特有の、呪いの砂嵐か!?!」

「ええー!?!」

呪いですか!?!

「どっかに隠れなきゃ!?!」

「この砂漠に、隠れる場所など無い!逃げるんだ!」

私たちは来た道に戻りました。

あれ?あそこにいるのって…ルーシイさん!?

「ルーシイさん!あれ、シャルルと離瑠さんも!?!」

「ぷい」

「ギアス様から一緒に行くようにと」

「心配でついて来ちゃったの。そっちは三人とも無事みたいね」

「エルザ!?!どうしたのさ!?!」

「それがね…!」

シャルル、やつぱり来てくれたんだね。

つてエルザさんが流砂に吞まれかかってます!?!

「まずいな、ここはもうすぐ、呪いの砂嵐に飲み込まれる!」

「ええー!?!」

良く見ればあの砂嵐、顔があります!?!

「私に構わず、お前達は行け！」

「何言ってるのよ!？」

「不思議ですこの重さ、まるで鉄の塊の様な？」

バルゴさんが重く感じるなんて、という事はエルザさん…。

「エルザさん、もしかして何か重い物を身に付けてるとか？」

「…芝居の道具をずっと握ってる」

「ええっ!？」

「そりゃ重いでしょ!？」

そんなに重いんですか？

エルザの芝居道具を知らないから言えるウエンディだった。

「しかし、これが無ければ舞台が出来ん！」

「今回の仕事は、舞台の助っ人じゃないから!？」

「うっ………すまない…私の思い出……」

エルザは芝居道具を手放した。

そしてやっと流砂から脱出した。

「ああ私の心の拠り所があ……」

「お仕置きですね？」

「良ければ取り出しましょうか？」

「……えっ?」「」

離瑠さんはサイコネシスで芝居道具を流砂から取り出した。

「私の思い出達よっ!」

「良かったですね」

「てゆうか、最初から離瑠に頼めば良かったわね……」

「そう言えばそうですね……」。

そんな事してる内に、呪いの砂嵐が迫っていた。

「もう逃げる暇が無いわね!?!」

「アレに飲み込まれたら、二度と出る事は不可能だ!」

「ええっ!?!」

こうなったら、

「私が、何とかしてみせます!」

「ウエンデイ!?!」

「天竜の、咆哮!?!」

ウエンデイは、天竜の咆哮を吐き、砂嵐を追い返そうとした。

すると、呪いの砂嵐の顔の部分が、徐々に癒されていき、消滅した。

「呪いの砂嵐が…消えた!?!」

「やったー!」

「ウエンデイ、すごい!」

「えへへ……」

何だか恥ずかしいです。

オニバス、劇場前

何とか着きましたね。

「どうも、ありがとうございます」

あれ？人がたくさん来ていますね？

「何で元気なの？」

「役者達と仲直りして、舞台が出来る様になったんです。お客も大入り、ありがとうございます！」

「そんな…何の為に苦労して辿り着いたのよ…」

「折角離瑠が掘り出してくれたのに…」

「もうダメ…」

ルーシィ、エルザ、ハッピーは倒れた。

「うっ！？」

「ん？」

フリードさん、口を押さえてどうしたんですか？

「羽魚を食べ過ぎた所為で…今になって、気分が悪くなってきた…」

今頃ですか！？

「うっ…立ってられない…」

フリードも倒れた。

「わわわわわ…！？」

「おーい…」

「ナツさん!？」

ナツさんがフラフラになって来ました!？」

「あ… やつと線路が直って… 辿り着いたんだ… でも… ずっとマグノリアとオニバスを行ったり来たりして… もう…」

ナツも倒れた。

「ちっ!」

「態度変わった!？」

ラビアンさん、すごく不機嫌になってます!？」

「こんな場所で寝られちゃ営業妨害だ! 君!」「はいっ!？」」「こいつ等を全部片付けてくれ! 大仕事だが、報酬はちゃんと払う」

「ふえ〜!？」

すごく嫌な顔してますよラビアンさん!？」

そして、唯一無事だった離瑠さんと一緒に皆さんを運びました。

「はあ… これが初めての大事ななんて…」

「良いんじゃない? 皆あなたを心配してたけど、むしろあなたが皆の役に立ってるわ。これも立派な仕事よ! 胸を張って良いと思うわ」

「そうかな?」

「ええ、私はそう思う!」

「…うん、そうね!」

初めての大事な仕事はこんな形で終わったけど、何とかなったよ。グレインディーネ!

## フェアリーテイル

それからギルドに帰ると、ギアスさんが術式を解こうとして、レビイさんと一緒に勉強していました。

レビイさんぐったりしてましたね？ドロイさんとジエットさんに訊いてみると、昨日から徹夜してたんですって！？

そこまでして術式を理解しようと思ったんですか！？



ウェンディ、始めての大仕事！？（後書き）

ラビアンで、ワンピース空島のパガヤさんと気が会うんじゃないかな？「ありがとうございます」と「はい、すみません」というお礼と謝罪に。

次回からはちゃんとギアスが出ます。最後の悪魔の実も公開します。次回は走って走って走りまわります！レーサーが好きそうなイベントだよねコレ？

## 24時間耐久ロードレース(前書き)

ギアス「折角のウエンディちゃんとのイベントだったのに！何で出番出さないようにしたんだコラー！」

作者「最近の小説は、主役は出てない話もある訳だが？」  
ギアス「知るかそんなモン！」

## 24時間耐久ロードレース

マグノリア、南口公園

『COOL！今年もこのイベントがやってきたー！フェアリーティル兼、全魔導士強制参加の、24時間耐久ロードレース！実況は私週刊ソーサリーでお馴染、ジェイソンであります！この一大イベント、COOLでHOTにお伝えしてまいりますっ！』

相変わらずの熱いテンションだな週サラの記者。

今年も始まった24時間耐久ロードレース。

特に俺とジェットが万年1位2位争いをし続けてきた（他の連中とはかなり差が開いており、いつも独走状態）。

ちなみに不参加は、マスター、ミラ達ウェイトレスやウェイター、高年齢のギドだ。

『あつ、出ました！当レースの優勝候補のギアセルシアとジェット』

俺はジェットハイスピードの神速を覚えてたからいつも優勝争いをしてた方だな。

『聖十となり、フェアリーテイル最強の座にいるギアセルシア！今大会で優勝狙えるか！』

今年は色んな速さを持つ連中の魔法を覚えてきたからな。優勝は貰った！

『クエストはイマイチな活躍も、これでチャラとの噂のあるジェット！』

「おいっ!?!」

『あくまで噂ですよ噂』

まあ、確かにそんな噂を聞いた事があるからな。

『そして、当レースのダークホースのセツナ!』

「はあ〜い」

『今までギアセルシアとジェットが優勝争いをし続けたが、セツナが加わった事で当レースの結果は分からなくなってきたー!』

唯一の脅威はセツナとジェットだからな。

「ギアスとジェット、今年も余裕だな。おまけにセツナも」

「はっ、そいつはどうだかな〜?優勝は俺が貰ったあ!」

グレイはぼやき、ナツは自信満々だった。

「貰ったって言う奴に限って、貰ったためしが無えんだよ」

ガジルが突っ込む。

「すっげ〜秘密兵器があるんだよ!」

「なあにが秘密兵器だよ、ガキ臭えな」

三人が睨み合った。

「セツナちゃん、あつと言う間に行っちゃいそうだしね」

『スピード勝負はセツナの土俵』

「そうだね」

ミオさんとクチナシがセツナについて話してた。

「んっんっ…プハア、さあ…やるか！」

「飲んだの！？今から走るのに！？」

「燃料入れなきゃ、走れないだろ？」

「カナらしいね…」

酒飲んで気合入れるカナに突っ込むルーシィ。

「でも、皆気合入ってるなあ？」

「皆罰ゲーム喰らいたくないからね。去年は酷かったからね…」

「はあ！？罰ゲームって何よ！？」

ハッピーの罰ゲームが気になったルーシィ。

そして、マスターからルール説明が始まった。

『フェアリーテイルの諸君！知力・体力共に強くあつてこそその魔導士だあ！今日は存分にそのパワーを競い合つて欲しい！』

「知力なんかいるかあ？」

「どう考えても体力だけだよなあ？」

いや、畏とかそうゆうのを駆使する為に必要な事かも知れないぞ？

『ルールは簡単、南口公園（ここ）をスタートした後に決められたコースを激走し、イポール山を目指せ！今年はイポール山の頂上に、ワイバーンの鱗を置いておいた』

ワイバーンの鱗って、前にハコベ山で取ってきたアレか？

『この鱗を取って、24時間以内に折り返してここまで来るのじゃ！脱落は認めんぞ、フェアリーテイルの魔導士たる者、完走してこそ明日の仕事に繋がるというものじゃ！更に、多くの魔導士の要望を受けて、新たなレギュレーションを設けた。それが、飛行魔法の禁止じゃ！』

「……げっ!?」「」

ハッピー、ルシア、エバーグリーンは顔を歪めた。

特にハッピーとルシアは露骨過ぎるって…。

『それ以外の魔法は使用無制限じゃ!』

『そいつが曲者なのに…』

『毎年無茶苦茶だからなあ…』

リーダーとワカバはぼやいてた。

『例によって、最下位になった者には…世にも恐ろしい罰ゲームが、待つとるぞ〜!』

マスターの罰ゲーム宣言により、参加者は皆青ざめた。

『結局、マスターは罰ゲームが楽しみだけじゃねえか?』

『去年は最悪だったよ…』

マカオが突っ込み、アルザックは青ざめてた。

「つつても、喰らうのは一人だけなんだろ?要は最下位にさえならなきゃ良いんだよ」

的を得た言い分だなガジル。

「随分と合理的な考え方だが、しかし後ろ向き過ぎる」

「何だと！」

「やるからには優勝あるのみだ！」

エルザは、ランニングする人が着てそうなスポーツウェアに換装した。

「筋肉疲労を軽減させ、長時間の疾走を可能にした、特注品だ！」

「本気で優勝狙ってやがるな……」

さすがのガジルも引いた感じだ。

「ルシアこそ大丈夫か？ちゃんと走れるか？」

「大丈夫だよ！僕でもやれるんだ！でも……」

「新しいルールなんか嫌いだ……」

「うわっ……暗い……」

ルシアとハッピーはどんよりしていた。

『それでは、いよいよスタートだ！全員、スタートラインに着いてくれえ！』

皆がスタート地点に立った。

「レビイ、スタート見てろよ」

「見てる余裕無いよ！？」

「カッコイイとこ見せたいのよ」

「ルーちゃんは知らないだろうけど、スタートなんて絶対に見られ

ないから…」  
「？」

確かに、俺らの瞬発力はすごいからな。

「ミオたん、ウエンディちゃん、離瑠、俺のスタート、見ててくれよ」

「えっ！？うん」

「分かった」

「見届けます、ギアス様」

美女三人の熱い視線を浴びながらスタート…くうくう、燃えてきた！  
そしてマスターから開始の合図が始まった。

『よお〜い…どん！』

その瞬間、凄まじい三人の瞬発力で煙が舞った。まるで爆弾が爆発したかの如くに。

「行つくぜ〜、ハイスピード！！」

「行くわよ、速！！」  
スピード

「行くぞ、ハイスピード+スピード+体感時間低下！！」

ギアスの魔法により、ジェットとセツナよりも速く走った。

「うそっ！？」

「マジかよ！？」

「今年は、俺の独走だあああっ！！」

ぴゅ〜んと音が出るくらい、あっと言う間に二人を引き離れた。



『スタートと同時にぶっちぎったのは、ギアセルシアだー！』  
ギアスはもう独走状態だった。

### 第三者サイド

スタート地点の方は全員態勢を整えていた。

「ね、見られなかったでしょ……」  
「納得……」

ルーシイは、レヴィイの言葉に納得していた。  
すると、ナツの手が燃えて飛びだした。

「見たか俺の秘密兵器、火竜の鉄拳ブースターだ！」  
噴射を利用した走りをするナツ。

「ナツー！そうゆうのありかよ！？」  
エルザ、グレイ、エルフマンと、続々と残りのメンバー達が走り出した。

「ルーシイさん、レヴィイさん、お先失礼します！」  
「今日に限っては皆敵、気遣い無用だと思っただけど」  
ウエンディとシャルルが二人を置いて走り出した。

「まずいつ!？」

「私たちが最後だ!？」

ルーシィとレビィは慌てて走り出した。

「さ〜て、誰が罰ゲームかな?た〜の〜しみじゃ〜!」

すごく罰ゲームを楽しみにしていたマカロフであった。

『トップのギアセルシアは、既に独走状態!これに続くはジェットとセツナ!そしてその後方にはナツ、火竜の鉄拳ブースターのアイデアがCOOLだぜ〜!』

現段階の順位は、

1位ギアス

2位ジェット、セツナ

4位ナツ

5位エルザ等

となっている。

『ここで、解説のミラジェーンさんにコメントお願いします!』  
『ギアスは…速過ぎて映らないわね?それにジェットとセツナも映らないわね?』

ギアスはもう街とイボル山の間まで来て、ジェットとセツナは街を出たばかりだった。

ある場所では、もう魔法対決が勃発していた。

「ビクトマジック、落とし穴！」

「どわあっ!?!」

リーダスの魔法で落とし穴を造った。

そしてその落とし穴に落ちたウォーレンとドロイ。

「楽勝楽勝！皆落ちろ〜！」

余裕だったリーダスだが、

ドガッ

「うわあああ〜!?!?!」

自分が造った落とし穴に落ちた。

いや、正確には突き落とされたのだった。

「呑気に絵なんか描いてるからだ！」

リーダスの後ろにいたガジルによって。

またある場所では、

「アイスメイク…<sup>フロア</sup>床！」

グレイは氷の床を張った。

「「うわっ!?!」」

ツルツ

続々と滑って転んで行く魔導士達。

そして悠々とスケートの様に滑るグレイ。

「悪く思っな〜」

さすが氷の魔導士、氷の上は慣れてる様だ。

「このやるグレイ!」

滑って転んだ連中は憎し気にグレイを見た。

「ビーストアーム!黒牛!」

エルフマンはテイクオーバーで変化した腕で氷を砕いて地面に固定した後、滑ってくるグレイにリアットをかました。

「チエストツ!」

「どわあっ!?!」

そして逆方向へと滑っていくグレイ。

「グレイ様!?!」

丁度ジュビアも来て、グレイを助けようかと迷っていたが、周りが言っていた罰ゲームが怖くて先に進んでしまったジュビア。

またある場所では、

「ハア…ハア…きつついわ…」

「カナは飲み過ぎ!…」

「ワカバも似た様なモンだろ?」

「こんなに体力無いとは思わんかった…」

「あたしら…ゴール出来るかね…」

飲み過ぎのカナと年配のワカバはバテ始めていた。

「だらしねえな。これに懲りて二人とも、酒もパイプも控えとけよ」

「(ムカツ!)」

そんな二人をよそに、マカオは余裕で走っていた。またある場所では、

カチッ

「あつ!?!」

エバーグリーンが出っ張っていた石を踏んだ途端、後ろにいたビスカとマックスと一緒に術式の罠に掛ってしまった。

「何コレ!?!術式!?!」

「フリードか!?!」

「コース上に仕掛けていたんだわ!」

「その通りだ!」

「!?!?!」

いつの間にか三人の目の前に現れたフリード。

「ここから出さないつもり!?いくら飛行魔法以外何でもありって  
言っても、コレはやり過ぎよ!」

「出さないとは言っていない」

エバーグリーン達の前に現れたのは、試験問題集の山だった。

「何だコレ?魔導四輪運転免許取得試験問題集?」

「こっちは、四元素魔導三級問題集?」

「フリード何の真似よ!?!」

「この術式を抜け出すには、問題を全て解き、尚且つ正解しなければならぬ」

「何いつ!?!」

何とまあ、忙しい時にメンドクサイ内容の嫌な術式だった。

「このレース、知力体力共に試される物ならば、こんなゲームが余  
興になっても、おかしくはあるまい?怨むならば、嵌り込んだ我が  
身を怨め」

そう言っただけで消えるフリード。

「待ちなさいフリード!」

「我が身って言うか」

「術式起動したのアンタだし「うっ!?!」、あたしら巻き添え喰っ  
ただけだし」

「うっ、ヤルしかない!全問正解!」

「お前一人でヤレ!」

「あゝん意地悪!?!」

術式の中は色んな意味で大変そうだった。

「許せ…友よ。ん？」

フリードを通り過ぎたのはエルザだった。

「魔法も使わず健気なモノだ」

すると、エルザは何かを感じたのか、後ろに下がったその瞬間、術式が発動したが、エルザは回避に成功した。

「！？術式か！」

「テイターニア！」

「！？」

「勘の良さはさすがだな！術式のトラップに気付くとは、だが「シユシユシユシユン」え、ええ…！？」

いつの間にかフリードの周りに剣が展開され、身動きが取れなくなってしまった。

「走りのリズムを崩した罪は重いぞ！またリズムの取り直した」

「え、エルザ！？出せ、コラ！？」

フリードは虚しく叫ぶだけだった。

皆が魔法を駆使してまで周りを邪魔しようとしていた。

そう、皆罰ゲームを受けるのが怖くて仕方が無いからだった。

一方その頃、イポール山頂上では、もうワイバーンの鱗を手に入れたギアスが折り返しを始めた。

「余裕余裕。さあて皆今頃、俺が仕掛けた罠に掛ってる頃だろうな」

イボール山、イボール山に続く道や付近の森の中には、ギアスの最後の悪魔の実、カエカエの実の効果により、道の至る所に（某不思議のダンジョン風の）罠に変えて来たのだった。そしてほとんどの魔導士達がそれに引つかかっていた。

「さすがに三つも魔法を同時に使ってるから、魔力の減りも激しいな。ここからは普通に走って魔力を温存しようかね？」

そう言っただけ普通に走り出すギアス。  
別の場所では、

「あゝ疲れた〜…もうダメ、ちょっと休憩…」

「ルーちゃん、頑張らないと！」

ルーシイはバテて休憩して、レビイはまだ大丈夫そうだった。

「だって足動かないよ〜…レビイちゃん先に行って、すぐ追い付くから」

「じゃあ…私、行くからね」

レビイは走り出した。

「足痛い…何か良い手は無いかな？こんな時頼りになるのはっ…」

ルーシイはバルゴを開門した。

「お呼びでしょうか、姫？」

「抱っこして！私を頂上まで運んで！超特急でね！」

「かしこまりました」



バルゴはルーシィを（お姫様）抱っこした。

「わ〜楽ちゃん！全速前進！」

「参ります！」

すると、確かに全速力で走った。新幹線並み（およそ）の速さで走るバルゴの為、ルーシィは、

「きゃああああああああああつ！！！！？」

あまりの速さに叫ぶルーシィ。

「えっ？ルーちゃん？」

一瞬で追い抜かれて唖然とするレビィ。

「きゃあああつ！！？落ちる！！？落ちる！！？降ろして怖いよおおつ！！！！？」

あまりの速さに泣き叫ぶルーシィであった。  
また別の場所では、

「心地よい水……」

河原手を入れて休憩するジユビアがいた。

「疲れが癒されていく。ああ 그레이様：先程はごめんなさい……ジユビアも噂の罰ゲームが怖くて、그레이様をお助けせずに先行してしまいました……」

ジユビアは先程、グレイを見捨てて先に行ってしまった事に嘆いていた。

「でも今、ジユビアはそんな自分を責めています！せめてグレイ様がここまで来た時には、冷たい水で癒してあげたい…こんな風に…」

ジユビアは川に手を入れてグレイを待ちながら癒していると、

『あら！？あ、あらら～！？』

いつの間にか川と同化していたジユビアは、川に流されていった。その近くには、ウエンデイ、シャルル、クルスが来ていた。

「今の、ジユビアさん？」

「でも今、川の中から聞こえた様な？」

「さすが水の使い手…水に自分を浸して癒されてる内に、自分自身が水と同化してしまったのね…」

「ええっ！？」

三人のすぐ後ろには、グレイが追い付いてきた。

「ジユビアここにいなかったか？」

シャルルは無言で川の方に指を差した。

「えっ、マジ？」

グレイも驚いていた様だ。

『グレイ様〜!?!』

ジユビアは川に流されていった。  
また別の場所では、

「ウオオオオオツ！行け行け行け行けー！！」

ナツは火竜の鉄拳ブースターでぶっ飛びながら走行していたが、

プスプス…

ナツの火が徐々に消え始めていた。

「おいおい！？止まるな!?!」

完全に火が消えた。

「ああ…燃料切れか…」

ナツはもう一度火を出そうとするが、出なかった。

「ここまで全力だったからな…」

その後ろには、ガジルが来ていた。

「ガジル!?!」

「邪魔なんだよ!」

ガジルが殴りかかり、ナツはブツ飛ばされた。

「うがああああ〜!?!」

そのまま崖を転がり落ちていった。

「が…ガジルのヤロ〜…ん?」

偶々近くにキャンプをしていた人がいた。  
当然、火を焚いていた。

「この火、食っても良いか?」

ナツにとっては、良い燃料補給にもなった。

ようやくほとんどの魔導士が山頂に着き、ワイバーンの鱗を取っていった。

「やっと着いたね」

「ワイバーンの鱗はどこかな?」

ハッピーとルシアが鱗を探していると、

「うえっ!?!」

ハッピーとルシアは、三つある鱗の場所を見て気落ちしそうになった。

鱗がある場所は、人間なら少し登れば手が届く位置だが、ハッピーとルシアにとってはものすごい高さに見えた。

何とか二人は取ろうジャンプしたり、肩車したり、よじ登ったり、監視の目を盗んで飛ばうと思ったが、直ぐに監視が来て思いとどまった。

すると、

「おっ、ハッピーにルシア」

「「ナツ!?!」」

「ん?」

ナツは登って鱗を三つ持ち、ハッピーとルシアに渡した。

「「ありがとうナツ!」」

「へへ、先行くぞ」

「途中でバテないでよね」

「疲れたら元も子もないよ」

「分かってる、火竜の鉄拳!」

ナツは火竜の鉄拳ブースターを展開して走っていった。

その後を追おうと走り出すハッピーとルシア。  
現段階の順位は、

1位ギアス

2位ジェット、セツナ

4位エルザ

5位グレイ、ガジル、ルーシイ等

になっている。

その頃ギアスは、

「普通に走ってもまだ誰も来ねえな。こりゃ楽勝だな」

と余裕ぶっこきながら走っていると、

「ん?」

ギアスの後ろには、

「「ギアスー!!!」」

「うげっ!?! ジェットとセツナ!?!」

ジェットとセツナが追い付いてきた。

「やべっ!?! 追い付かれる!?!」

「余裕こいてるからだ!」

「悪いけど、抜けさせて貰うわ!」

「そうは行くか!」

ギアスは足を思いつきり地面を踏むと、ジェットとセツナの足元が急に崩れた。

「どわあー!?!」

「きゃああー!?!」

ギアスの力エカエの能力で地面を変化させ、坂道を作った。

簡単に言つと、落とし穴に唯一の脱出口である上り坂を造ったのだ。

「くそ、足止めのつもりか!」

「坂道くらいで私たちを振り切れると思わないですよ!」

「振り切れると思っちゃんないさ」

ギアスはまた地面を踏むと、坂道が油まみれになった(ウソップの

村の攻防戦の時に使用した作戦)。

「なっ!? 油だと!?!」

「まずいわ!?! これじゃあ登れないわ!?!」

「頑張つて登つて来いよ。んじやな〜!」

「「コラ待て、出せー!?!」」

ジェットとセツナを置いて先に行くギアス。

「ふう、危うく原作のジェットみたいに兎と亀的な失態を犯す所だったな。でもこれで…」

カチツ

「あ…」

ギアスの地面から嫌な音が聞こえた。すると、地面が光り出した。

「これって…俺が行きに仕掛けた…」

そう、序盤にカエカエの能力で至る所に罠を仕掛けていた。その中には、

ドッカーン

地雷があつた。

「どわあああああつ!?!」

ギアスはコースから離れた場所にぶっ飛んだ。  
そして夜が明けてきた。

「ハツ、ハツ、ハツ、ん？」

エルザは前方の穴を見た。

「ぬお〜！」

「はあ〜！」

穴の中には、必死で油まみれの坂を必死で登ろうとしてるジェットとセツナの姿があった。

「何をしてるんだあの二人は？」

それを素通りするエルザ。

「やべつ、エルザだ！？」

「嘘！？このままじゃどんどん抜かれちゃうよ！？」

「仕方ねえ、セツナ！ここは協力して脱出するぞ！」

「それしかないわね！」

二人は協力して脱出を図った。

その間にも、ナツ、ガジル、グレイ、ルーシイ等が続々と走ってきた。  
そしてハッピーとルシアも走っていたが、ルシアはふと気付いた。

「あれ？」

「どうしたのルシア？」

「ハッピー、アレ見て」



ルシアが指差した方を見ると、誰か倒れていた。気になった二人は近づいてみると、

「「ああっ!?!」」

ギアスが倒れていた。

「ちょっとギアス、寝てる場合じゃないよ!?!」

「ねえ、起きてつてはギアス!」

「…ん…ん…」

「起きたギアス?」

「あれ、ルシア?それにハッピーも?」

「こんなところで寝てて良いの?」

「もう皆先に行っちゃったよ?」

「……………」

ギアスは沈黙した。そして、

「だあああああああっ!?!?しまったああああっ!?!?氣い失つたあああああっ!?!?!?」

そう、ギアスは自分で仕掛けた地雷に引っかかり、吹っ飛んだ後そのまま気絶していた。

「やべえ!?!?これじゃまんま兎と亀じゃねえかよ!?!?」

ギアスは取り乱した。

「と、こうしちゃいられない!ルシア、ハッピー、起こしてくれて

ありがとな！これが終わったら好きなだけメシ奢ってやるぞ！」

ピューン

ギアスはそう言って走り出した。

「「うわ〜!?!」」

ギアスの走り出した風圧で吹き飛ばされそうになったハッピーとルシア。

現在の順位は、

1位エルザ（本人は2位と思ってる）

2位ナツ、グレイ、ガジル（本人達は3位と思ってる）等

となっている。

ただ今2位（優勝）争いをしていた。

「うおおおおおおっ!!」

「はあああああっ!!」

ようやく脱出してエルザ達に追い付いてきたジェットとセツナ。

「やべえっ!?!あいつらもう追ってきやがった!?!」

「このまま逃げ切ってやるさ!」

「優勝はギアスとなってしまうが、せめて2位だけは!」

「おっ、マグノリアが見えてきたぞ!」

一行はゴールのあるマグノリアまで来ていた。

しかし、その背後から、

「……………何だ？」「……………」

「うおおおおおおおおおつ！！！！」

ギアスが追い付いてきた。

「げっ！？何でギアスが後ろにいるんだよ！？」

「んじゃあ俺達今、優勝争いしてたって事か！？」

ギアスはそのままほとんどの魔導士達を牛蒡抜きにしていた。

「させるか！換装！」

エルザは、スポーツウェアから兎のきぐるみに換装した。

「ウサギいつ！？」

「こりゃラストスパート賭ける気だ！？」

「うおおおつ！？」

だがしかし、

「あれ？」

「来ねえぞ？」

「ウサギの割に遅過ぎ？」

「見た目で買ったな…」

「あいつ、割と形から入るタイプなんじゃねえの？」

まあ普通に考えたら、きぐるみって動きづらくなって遅くなるのもしょうがないと言える。

「待てえお前らあつ!!」

ギアスがやつと追い付いて、ナツ、グレイ、エルザ、ガジル、ジエツト、セツナ、そしてギアスが並んだ。

そしてそのままマグノリアに入っただけだった。

優勝争いは、この7人に絞られた。

「火竜の鉄拳！」

「冗談じゃねえ！」

「換装！」

「ええい！」

「ぬおお！」

「はああ！」

「ふぬう！」

ナツ、ジエツト、エルザ（やっぱ動きづらかったのか、さっきのスポートウエアになった）、グレイ、ガジル、セツナ、ギアスが追い抜いたり追い抜かれたり、の激しい接戦になってきた。  
だがここで、

「あつ!?!」

ナツのブースターが燃料切れを起こした。

徐々に優勝争いから離れて行くナツだが、

「これで終わって…堪るかああああ!!」

ナツのド根性により、自力で優勝争いへと並んだ。

「はあああつ！」  
「ぐおおおつ！」  
「うおおおつ！」  
「おりやあああつ！」  
「ふうふううつ！」  
「せりやあああつ！」  
「負けねええつ！」

エルザ、グレイ、ジェット、ガジル、セツナ、ギアス、ナツは叫びまくった。

ゴールは目前まで迫ってきた。

「……………優勝は、この（俺・私）だあつ！！！！」

ゴールまでもう少し。  
だが、ここで悲劇が起こった。

「うおつ！？」

ナツが躓いたのを切っ掛けに、

「ぐおつ！？」

ナツが転んだ拍子にガジルに当たり、

「がはっ！？」

ガジルが倒れる拍子にグレイにぶつかり、

「うげっ！？」

グレイが咄嗟にジェットを掴み、

「あれっ!?!」

ジェットがセツナの足に当たり、

「ふげっ!?!」

セツナがギアスの髪に引っかかり、

「うおっ!?!」

ギアスが倒れた時にエルザの足に絡まった為、

「~~~~~だあ~~~~~!?!?」「~~~~~」

ゴール直前で全員すっ転んでしまった。

「だあ!?!まさかの大クラッシュ!?!」

すると、後方には、

『おっと、ここでCOOLにやって来たのは!?!』

小さな青と赤の二匹。

『ハッピーとルシアでえす!ハッピーとルシアが来たあ!』

二人は必至でゴールへと走った。



「ふっ、こんな幕切れも悪くない」

「まっ、あいつらは俺を起こしてくれたんだ。仕方ねえ、今回は勝ちを譲ってやるぜ」

皆が立ち止まってる内に、後ろからウエンディ達 came。

「ウエンディ!?!」

「シャルル!?!」

「クルス!?!」

ウエンディは咄嗟にシャルルを先に行かせ、シャルルが3位となり、ウエンディとクルスは続けてゴールした。

『ああっと!?!三着シャルル、四着ウエンディ、五着クルス!トツプ3は、フェアリーテイルきってのプリティーアニマルが、独占です!』

ただいまの順位、

優勝ハッピー、ルシア

3位シャルル

4位ウエンディ

5位クルス

です。

すると、







となった。

『ゴゴゴGOAL！5人同時のゴールインだ！』

「……何い！！？」「……」

『今年は、大番狂わせ！COOLな上に、COOLな決着を迎えました！最下位は何と、ギアセルシア、ナツ、ガジル、グレイ、ジエツトの、5人です！罰ゲーム、決定！』

ガーンとする5人。

「ふふふ、覚悟は良いか？」

「嘘だろじつちゃん！？」

「じーさん！せめて、敗者復活戦とかよお！」

「いかーん！無様な事言うでない！魔導士たるもの、仕事のしくじりと同じ！やり直しは効かんだ！大人しく罰ゲームに従って貰うぞ！ニカア、5人でな！」

周りが息を飲んだ。

「分ーったよ！何でもやってやらあ！言ってくれよ罰ゲーム！」

覚悟を決めたナツが言った。

「おお、良い覚悟だ！では今年の罰ゲームを発表する！」

マカロフが取り出したのは、

「ずばりコレじゃあ！」

週サラの雑誌だった。

「「はあ？」」

「週刊ソーサリー？」

「それがどうした？」

「はっ、嫌な予感！？」

ギアスは原作を知ってるから対策を取った。

「お前達5人は、再来週発行の週刊ソーサリーにて、超恥ずかしいグラビアを飾るのじゃあ！超豪華堂々20ページ、一週間密着取材付きじゃ！」

「「「「なあああっ！！！！？？？」」」」

「しょうがないわね、やるしかないわ」

「ってギアス！？何でお前、いつの間に女になってんだよ！？」

これなら精神ダメージも半減すると考えたのだろう。

「超恥ずかしいグラビアって……」

「保存用も観賞用も買いますわ。 그레이様」

「私も、十冊くらい買おうかしら？」

「ギアス様、保存用と観賞用と布教用、他にも第二保存用と実用用を10冊ずつ買いますわ！」

「「「買わんで良い！？」」」

「それは買い過ぎじゃないの離瑠？てか、実用用って何するの？」

ジユビアとセツナと離瑠が多く買おうとしていた。

それに突っ込む 그레이とガジル。

買い過ぎと注意する女ギアス。

「ねえマスター、このままでも良いでしょうか？」

「う、うむ。構わんぞ」

「ギアスずりー!?!」

「あら、あなた達も女になれば良いじゃない?」

「……えっ!?!」「……」

女ギアスは、女ホルモンの準備をしながら4人に近づいた。

『という訳で皆さま、さっそく衣装選びと、参りましょー!』

その瞬間、4人は逃げ出した。

「逃がさないわ!カンダタストリング、太め、味濃いめ!」

「……何が!?!」「……」

リボンの様な糸が4人を縛り付けた。

「……だあゝ!?!?!」「……」

「ふふふ、皆女になっちゃえば、恥ずかしくないわよ?」

「……嫌だー!?!?!?!?!」「……」

こうして4人は、ギアスによって女にされ、超恥ずかしいグラビア撮影を行いました。

そしてハッピーとルシアはマカロフに近づいた。

「ところでマスター」

「ん?」

「僕たち優勝したよ」

「優勝したらどんな良い事があるの?」

二人は優勝賞品がなんなのか気になる様だ。

「もうあったじゃろう」

「「？」」

「優勝の喜びと皆の歓声。この上ない名誉ではないか？」

「「ええっ、まさか…そんだけー！？ホントに…そんな…」」

ハッピーとルシアはがっかりしていた。

そしてナツとグレイとガジルとジェットは、しばらくの間、表に出る事は無かったという。

最もギアスは、そんなにダメージは無かったという。

## 24時間耐久ロードレース（後書き）

それにしても皆、ワイバーンの鱗を何処に仕舞ったんだろうか？特にハッピーが一番謎だった。

最後の方、何でジェットは追い抜く事が出来なかったんだろう？でもま、ギアスもセツナもそれで接戦出来たから深くは追求しませんけど。

ほとんどの魔導士がハッピーより遅くに来たのに疑問を感じたから、ギアスの罫で妨害して、ハッピー達が無事に通ったからにしました。ちなみにシャルルを3位にしたのは、ハッピーとルシア、そこにシャルルも入れたら、トップ3は猫組になると思ったからです。

初登場の悪魔の実

カエカエの実、オリジナル、変更人間（勝手に命名）、魔力を込めれば何でも変えたり、変更したりできる能力。

次回はいよいよギルダーツ登場！カナの事も話します。

## ギルダーツ(前書き)

50話目に突入しました。

いよいよギルダーツ登場です。

ギルダーツにカナの事を話します。





「？」

「ど、どんだけやばい人なのかしら…」

実際あのオッサンに何度も挑んだけど、ボロ負けだったしな。

ギルドの皆は、ギルダーツが帰ってくる事を知って宴会を始めた。

「どうでもいいけど、この騒ぎ様何？」

「お祭りみたいだねシャルル」

「ホント騒がしいギルドね」

「皆が騒ぐのも無理ないわ。三年ぶりだもん、帰ってくるの…」

「三年も？何してたんですか？」

「S級クエストの上に、SS級クエストってのがあってのがあるんだけど…その更には、10年クエストって言われる仕事があるの」

「10年クエスト!？」

10年クエストか…昔評議院の依頼でやった事あったけど…たかさんの魔獣を倒すのはきつかった…。

「10年間、誰も達成出来た者はいない、だから10年クエスト。ギルダーツはその更の上、100年クエストに行っていた」

「100年クエスト!?!100年間、誰も達成出来なかったって事!?!」

「ああ」

「10年クエストだけでもマジで死に掛った事があったからな。俺はまだ100年クエストは無理だな」

「ギアスでも無理なの!?!」

そろそろ街が変形するな。

『マグノリアを、ギルダーツシフトへ変えます!町民の皆さん、速

やかに所定の位置へ！』

いよいよか。

「それにしても騒ぎすぎじゃないかしら？」

「何でだろう？」

「マグノリアのギルダーツシフトって何？」

「外に出てみれば分かる」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

マグノリアが徐々に変形し始めた。

「う、嘘！？」

「何なのよこれ！？」

ガチャーン

マグノリアは、フェアリーテイルまで一直線の道が出来た。

「街が、割れたぁー！ー！っ！！！？」

「ギルダーツは、「クラツシュ」という魔法を使う」

「触れた物を粉々にしちゃうから、ポーっとしてると民家も突き破って来ちゃうの」

「どんだけバカなの！？その為に街を改造したって事！？」

本人は無意識だから余計に性質が悪いからな…。

「すごいねシャルル！」

「ええ…すごいバカ…」

すると、赤茶色の髪をした男がギルドの目の前まで来ていた。

「来たあ！」

「あい！」

そしてギルダーツは、ゆっくりとギルドに入ってきた。

「……………ふう……………」

「ギルダーツ！俺と勝負しろ！」

「いきなりそれがよ！？」

まあ……………解らなくもないぞナツ。

「お帰りなさい」

「この人がギルダーツ……………」

「ん？お嬢さん、確かこの辺りにフェアリーテイルってギルドがあった筈何だが……………」

3年も間が空いちやミラの事が分からねえか。

「ここよ。それに私、ミラジェーン」

「ミラ？……………おお！？随分変わったなお前！つか、ギルド新しくなったのかよー！」

「外観じゃ気付かないんだ……………」

数ヶ月前にファントムが襲ってきて、ギルドが壊されたから改築する事になったからな。

「ギルダーツ！」

「おお、ナツか！久しぶりだな」

「へへ、俺と勝負しろって、言ってるだろー！」

ナツがギルダーツに仕掛けたが、

「また今度な」

軽く吹き飛ばされて、天井にぶつかつた。

「や…やっぱ、超強えや」

「変わってねえなオッサン」

「漢の中の漢！」

グレイとエルフマンはギルダーツを賛辞した。

「いやあ見ねえ顔もあるし、ホントに変わったなあ」

ギルダーツの方も懐かしがっていた。

とその時、

「ハアアアアアッ！！」

「！？」

ギアスがギルダーツを蹴りかかった。

ギルダーツはそれを右腕で防いだ。

「やるなギルダーツ！」

「ギアスか、お前腕上げたな」

ギアスはすかさず攻撃を繰り返すが、ギルダーツは全て受け止めて



「……………何いつ！！！？」「……………」  
「嘘だろ！？」

「あのギルダーツが！？」

「クエスト失敗！？」

「ありえねー！？」

「オッサンでもダメなのか…」

「引き際の見極めも漢！」

「1000年クエストを受けるにはまだ早い！止めておけ」

「あつれー！？ワクワクしてる様に見えましたあ！？」

ギルダーツが1000年クエストに失敗した事に皆は驚きを隠せないでいた。

「そうか、主でも無理か…」

「すまねえ、名を汚しちゃったな…」

「いや、無事に帰って来ただけで良いわ。ワシが知る限り、このクエストから帰って来たのは主が初めてじゃ」

マスターとギルダーツは互いに微笑んだ。

「俺は休みてえから帰るわ。ひく疲れた疲れた。ナツ、「ん？」後で俺ん家来い、土産だぞ〜！がっはははははは！」

「はは」

ナツは嬉しそうにしてた。

「んじゃ、失礼」

するとギルダーツは、壁に向かって歩き、粉碎した。

「……………!？」

「あらあら……」

「扉から出てけよ!？」

ルーシィは驚きのあまり声が出ずにいた。

ミラはいつもの感じで言い、ウォーレンが突っ込んだ。

「へっ、土産って何かな？楽しみだなっ！」

ナツも壁を壊した。

「お前まで真似すんな!？」

「あらあら」

マックスが突っ込み、ミラはいつも通りにしてた。

「ハッピー、早く行くぞ」

そう言って出て行くナツ。

「ねえ、ギルダーツとナツってそんなに仲が良いの？」

「あい。実力の差は天と地ほどあるけど、ギルダーツはナツの事気に入ってるみたいだね」

「へっ」

ルーシィとハッピーが雑談した後、ハッピーはナツの後を追った。さてと、少し時間経ったらギルダーツの所に行ってみるか。

マグノリアの外れ、ギルダーツの家



数時間後、ギアスはギルダーツの家に来た。

「ちいっすギルダーツ」

「ん？ギアスカ」

「邪魔するぜ」

ギアスはギルダーツのいない三年分を話した。

「…てな訳だ」

「そうか、色々あったんだな…つかお前聖十になったんだな」

「まあな」

「俺のいない三年間は、随分と長く経つちまってたんだな…」

「ギルダーツ…」

リサーナの事を聞いたからかな？

「ギアス…お前確かナツと同じ、ドラゴンを探してたんだな？」

「え？ああ…」

アクノロギアの事について言う気か？

「俺は仕事先で…黒いドラゴンにあった」

「何!？」

一応驚いておかないとな。

「お前が探してる虹色じゃねえがな…」

「そいつは…どんな奴だった…」

「…とてつもない奴だった…ほとんど一瞬でやられちゃった…」

「そうか…他には？」

「俺が肌で感じたのは、あれは人類の敵だという事だ」

「ギルダーツ…」

「ギアス、お前はナツと違って冷静だな」

「え？」

「あいつは、さっき言った黒いドラゴンの話をしただけですぐにでも飛び出して行こうとした」

「やっぱな。」

「ギアス、ハッピーにも言っておいたが、ナツを支えてやってくれ。あのドラゴンは人じゃ勝てねえが、竜なら倒せるかも知れねえからな」

「ギルダーツ…ああ！」

ギアスは強く言った。

「そつだ、あの事を言っておこう。」

「なあギルダーツ」

「何だ？まだ用か？」

「さっき言ったオラシオンセイスの件で、心を聴く魔法を覚えたんだ」

「へへ、それって相手の考えてる事が丸解りって事か？」

「まあ平たく言えばそうだな。それでギルドの皆が普段何考えてるか聞いてみたら、ある人物からすごい事を聞いたんだ」

「すごい事？」

ギルダーツが不思議がっていた。

「そいつはな、フェアリーテイルに入っている生き別れの父親を探しに内に入ったんだと」

「へえ、父親を探しにギルドに入った奴がいるのか！」

「あなたの事なんだけどな。」

「それで、見つけたは良いものの、そいつは自分と違って皆に人気があるから今まで言い出せずにいたらしいんだ」

「ふ〜ん、そいつぁ難儀だなあ」

「相手が立派な父親じゃ自分とは釣り合えないって思ったあいつは、今まで努力してきたけど、中々成果が出せずにいた」

「何か不憫に思えてきたな…」

「それで、次の昇格試験で結果が出せなかったら、フェアリーテイルを辞めようと考えているらしいんだ」

「昇格試験で…S級か！？そいつはS級を目指してるのか！？」

「ああ」

「ギルダーツが何か考えてるみたいだな。」

「そいつは不憫だな。S級は一人しか受からねえからな…んで、そいつは一体誰なんだ？」

「そろそろ言っかな？」

「ああ、そいつは…カナなんだ」

「カナ！？ああ…そういやあいつは五年前から試験を受けているが、落ちまくってたからな」

「俺もカナから聞いた時はビックリしたからな」

「そんでよう、カナの父親って…誰の事なんだ？」

顔を近づいて来るなよ…。

「そつだな、カナの生き別れの父親は…」

ギアスは遂に言ってしまった。

「アンタの事だよ。ギルダーツ」

「えっ？」

ギアスが言った事に処理落ちしてるギルダーツだった。そして、

「えーーーーーっ!!??」

ものすごく叫んだ。

今のギルダーツの顔、ルフィに雷が効かないと知った時のエネルギーみたいな顔をしていた。

「マジかよ!?カナが…俺の娘だと!?!」

「ああ、心の声は嘘を付けねえ」

「俺は…俺は…」

やっばかなり驚いてるよな。

「だっ、誰の子なんだ?」

「えっ?」

「サラ…ナオミ…クレア…フィーナ…マリー…イライザ…エマ…ラ  
イラ…ジーン…シドニー…ミシエル…ステファニー…」

「おいおい!?!?どんだけ女つ誑し何だよアンタは!?!」

そついや原作でもそつと言つてたな…。

「そつだ！コーネリアだ！俺が唯一結婚したのはコーネリアだ！」

「すぐに思い出してやれよ…」

「仕事ばつかで愛想を尽かされて出て行つちまつたからな…18年前に亡くなつたつて風の便りで聞いてはいたが…まさか娘がいたなんて…何故今まで気付かなかつたんだ…」

しばらくは悩んだ方が良いと思うな。

「なあギアス…俺はどうしたらいい…カナを…12年もほつたらかしにしちまつていたなんて…」

「ギルダーツ、次の試験が終わるまでに考えといた方が良いんじゃないの？」

「次の試験で？」

「ああ、カナは次の試験の結果次第でフェアリーテイルに残るか否かが決まる。その間に自分がカナにしてやれる事を探す事だな」

「俺が…カナにしてやれる事が…」

後は、ギルダーツ次第だな。

「今はまだ答えを出さなくて良い、試験の時に決めればいい」

「ああ…すまねえなギアス」

「良いつて」

そつしてギアスは、ギルダーツの家から出た。

さて、確か次の舞台はエドラスだったな。

ウェンディちゃんは大丈夫として、ミオちゃんと離溜はしっかり守るねーとな！

## ギルダーツ（後書き）

ブルーノートに殺されかけたカナの下に駆け付けた時のギルダーツを見た時は、まるで娘の危機に駆け付けたのかと思いました。

だからその通りになる様仕向けました。

残念な事に…PS3が壊れましたので…テイルズが書けなくなりました…。

今回はエドラス編プロローグです！

## アースランド〜エドラス（前書き）

いよいよエドラス編スタート。

学園モノはエドラス編を終えてから出す事にしました。

## アースランドとエドラス

フェアリーテイル、ウエンディサイド

私は今ルーシイさんと一緒にお喋りをしています。

「777年7月7日？」

「私やナツさんに滅竜魔法を教えて貰ったドラゴンが、同じ日にいなくなってるんです」

「そう言えば前にナツが、ギアスとガジルの竜が同じ日に姿を消したって言ってたかも？」

「どうゆう事なの？」

「…遠足の日だったのかしら？」

「ルーシイさんも、偶に変な事言いますよね…」

それだったら、すぐ帰ってくるんですけどね…。

「火竜イグニール、鉄竜メタリカーナ、虹竜プリズレイヤー、天竜グランディーン…皆、今どこにいるんだらう？」

するとハッピーとルシアが来ました。

二人の手に持っているのは、魚と大きめのニンジンにリボンを巻いていた。

「「シャルルー！」」

「ん？」

「これ、オイラが獲った魚なんだ」

「僕のはおっきいニンジンだよ」

「「シャルルにあげようと思って」「



「いらないわよ！私、魚や野菜は嫌いなの！」

「そっか、じゃあ何が好き？（オイラ・僕が）こんだ」うるさい  
「！！」っ！？」

「私に付き纏わないで」

「ちよつとシャルル!？」

今のは酷いと思うよ！

「何もあんな言い方しなくても…ねえハッピー、ルシア」

「」

「シャルル！ちよつと酷いんじゃないの！」

シャルルはギルドから出た。

「あつ、待ってシャルル！」

ハッピーとルシアがシャルルの後を追いかけた。

「何かシャルルって、ハッピーとルシアに対して妙に冷たくない？」

「どうしたんだろう…」

私は気になったからシャルルの後を追って行きました。

マグノリア

外はいつの間にか雨が降ってる！？シャルルが風邪をひかなければいいんだけど…。

「シャルル〜！シャルル〜何処なの〜！あつ！」

前から歩いて来るシャルルを目撃したウエンディ。

「シャルル！やっと見つけた」

「ウエンディ…アンタ、傘も差さずに風邪ひくわよ」

「シャルルもでしょ」

どうしてシャルルは皆と仲良くしないだろう…。

「シャルル、私たちギルドに入ってそんなに経っていないんだから、もっと皆と仲良くしなきゃダメだと思うの」

「必要無いわよ。アンタがいれば私はいいの」

「もお、またそうゆう事ばかり…ん？」

こんな雨の中、誰か来ますね？杖が…5本持った覆面の人がウエンディの前にミストガンが現れた。

「誰？」

「…ウエンディ」

「えっ？その声…」

「！？」

今の声、どこかで…？

「まさか君がこのギルドに来るとは…」

ミストガンは覆面を外し、その素顔が晒した。その顔は、ジェラルにそっくりだった。

「！？ジェラール！？」

どうして！？だってジェラールは…！？

「ど、どうゆう事！？アンタ確か捕まって！？」

「それは私とは違う人物だ」

「そんな！？」

「どう見たってアンタ、ジェラールじゃない！？」

ミストガンは語り出した。

「私は、フェアリーテイルのミストガン。7年前は、この世界の事はよく知らず、君にはジェラールと名乗ってしまった」

「えっ？」

7年前…私がジェラールに出会った…じゃあ！？

「ま、まさか…」

ミストガンはコクリと頷いた。

「あ、ああ…あなたが、7年前の…」

ウエンディは泣き始めた。

「あの時のジェラール…ずっと…ずっと会いたかったんだよ！」

「…会いに行けなくて、すまなかった」

ウエンディはミストガンに、いやジェラールに出会えた事に感涙していた。

「だが、今は再会を喜ぶ時間は無い」

「え？」

「今すぐ…今すぐこの街から離れるんだ！」

ミストガンは倒れかけた。

「ジエラール!？」

「私の任務は失敗した…」

ミストガンから驚愕の話を訊かされた。

「大きくなり過ぎたアニメは、もはや私一人の力では抑えられない

…」

そして、

「間もなく、この街は消滅する！」  
マグノリア

えっ？消滅って…？

「ど、どういう事？全然意味解んない…」

「終わるんだ…消滅は既に確定している」

何で…何で消滅するの？

「せめて…君だけでも…」

「フェアリーテイルは!?!ギルドの皆はどうなるの!?!」

「…全員…死ぬという事だ」

皆が…死ぬ…？そんなの！？

ウエンディはギルドへと駆け出した。

「ウエンディ！？」

「皆に知らせなきゃ！」

「行ってはいけない！君だけでも、街を出るんだ！」

「私だけなんてありえない！私はもう、フェアリーテイルの一員なんだから！」

ウエンディは、ギルドの皆に危険を知らせに向かった。

サイドエンド

フェアリーテイル

この大雨、いよいよか…エドラス編は。

向こうじゃ換装は使えないから、今の内にダイアル貝を服の中に取りつたけ  
詰め込んでつと。

ナツとグレイは変わらずケンカ、それを眺めるジユビア、ジエツトとグレイを叱るエルフマン、カナは相変わらず酒を飲んでるし、ミラはエルフマンを連れてリサーナの墓参りに行ったり、グレイとジユビアがイチャイチャしてたり、それを見ていたアルザックとビスカはドギマギしてて、マスターとエルザは100年クエストの事を話したり、イヴはクルスに関節技決めてたりとかで面白がつてミオたんも参加したりとかで、平凡な時間が過ぎていった。

ギアスはふと空を見ると、雲が渦巻いていた。  
やべっ！？もうすぐか！

ギアスはすぐに離溜とミオを救出するべく動き出した。

「ギアス様!？」

「いいから中に!」

ギアスは離溜を自分の体内に入れた（ジュビアが自分の中にグレイを入れた様に）。

よし、次はミオたんだ!

ギアスはミオに飛びかかったが、その間に誰かが通り過ぎた。

「あれ!？」

「ぎ、ギアスさん!？何ですか!？」

クルスだった。

うおーいクルス!？何でミオたんの前に出るんだ!？

その時、ギルドが白く染まった。

中にいる人達も粒子となつていった。

まずい!？ええい、こうなりゃクルスを入れてミオたんも!

「ちよつ、ギアスさん何w…!」

「よし、ミオたん!」

「ふみゆ？なにおn…!」

ミオは粒子となつて空に消えていった。

しまったあ、遅かったああああ!!？

そしてギアスの意識を失った。

消滅したマグノリア、ウエンディサイド

どう…なってるの…？

ウエンディは、皆にマグノリアが消滅する事を伝えようとギルドの前まで来たが、ギルドが突然歪みだした。

そして、そのまま粒子となって空に吸い込まれてしまった。

気が付くと、マグノリアは何も無い更地となっていた。

「……………嘘？」

ギルドも…街も…全部…消えた…？

「そんな…一体、何が起きたの！？」

誰か…誰かいないの！？

「誰かいないのー！誰かあー！ー！ー！」

しかし、誰も返事が無かった。

「誰か…あれ？何で…何で…私だけ…ここにいるの？」

街もギルドも全部消えちゃったのに…何で私だけ…！？

その時、近くの地面から何か盛り上がってきていた。

「ひっ！？」

地面から出て来たのは、

「ブファッ！？な、何だ！？」

ナツだった。

「な、ナツさん!?!」

「あ、ウエンディ?!?! あれ?ここどこだ?」

私以外にも…残ってた…。

「何も、覚えてないんですか?」

「寝てたからな」

すると、また近くの地面から何かが盛り上がるつとじていた。

「ひっ!?!」

「何だ?」

地面から出て来たのは、

「ブアハッ!?! ハア…ハア…いきなり地面の中かよ!?!」

ギアスだった。

ギアスさんも残ってたんだ。

「ふん!ん…!」

するとギアスは力を込めると、

バシヤアアッ

「ひっ!?!」

「うわっ!?!何だ!?!」





「？」

ナツ以外驚いていた。

「本当なんです！残ったのは私たちだけみたいなんです！」

「ナツ、お前は寝てたから訳が解らないでいるけどな、俺もこの目でギルドが消えていく様を見たんだ」

「マジかよ！？」

そういえば何で私とナツさんとギアスさんだけ残ったんだろう？ 離瑠さんとクルス君はギアスさんの中にいて助かったみたいでしたけど…まさか！？

「もしかして、ドラゴンスレイヤーだけが残された！？」

「そうよ」

「……………！？」「……………」

シャルルが皆の所に来た。

「シャルル！良かった、無事だったんだね！」

「まあね。ドラゴンスレイヤーの持つ特殊な魔力が幸いした様ね。良かったわ、あなた達だけでも無事で」

「シャルル？」

「そりゃ聞き捨てならねえな、他の皆はどうでm…って、ホントに消えちまったのか！？」

「さっきからそう言ってるだろ」

「おーい、皆ー！」

するとシャルルが口を開いた。

「消えたわ。正確に言えば、アニメに吸い込まれて消滅した」  
「アニメ!?!」

ジェラルルが言った事!?

「さっきの空の穴よ。あれは向こう側の世界、」エドラス「への門」  
「エドラス?」

エドラス: それに向こう側の世界って?

「お前、さっきから何言ってるんだよ! 皆はどこだよ!」  
「ナツさん!?!」

落ち着いてナツさん!?

「シャルル、君は何か知ってるの?」

「あなたの口ぶりから察すると、そのアニメとやらはあなたと何か関係があるみたいね」

「そういえば、何でシャルルは無事だったの?」  
するとそこに、

「(ナツ・ギアス)!」

ハッピーとルシアが来た。

「何コレー!?! 街が?!?!?!」

「ハッピー!」

「ルシアも!」

「無事だったんだね」



「もしかして、その開発した物が!？」

「そう、それが超亜空間魔法アニメ。さっきの、空に開いた穴よ」  
「あれが…アニメ…」

あれがジェラルルの言っていたアニメ…。

シャルルの話を聞いてると、6年も前からこの計画は始まってたけど、誰かがアニメを閉じていたらしい…って、もしかしてジェラルルが閉めてたって事!？

「だけど、今回のアニメは巨大過ぎた…誰にも防ぐ術など無く、ギルドは吸収された」

「何でフェアリーテイルを吸収したんだよ？」

「言ったでしょ？エドラスの魔力とする為よ」

こつちの世界の魔力をエドラスの魔力にする…魔力…魔法…魔導士…そうか!？

「フェアリーテイルには強大な魔導士がたくさんいる!だから狙われたって事!？」

「そうよ」

「…ざけんなよ!」

さっきから黙っていたギアスが言い出した。

「随分と勝手な事をほざく連中がいたもんだな!」

「皆を返せコノヤロウ!」

すると、さっきまで落ち込んでいたハッピーとルシアが顔を上げた。

「そ、それが…」

「僕とハッピーとシャルルの所為…」

「なの？」

「間接的にね」

「…間接的？」

「私たちはエドラスの王国から、ある別の使命を与えられてこの世界に送り込まれたのよ」

送り込まれてきたって…？

「そんな筈ない！あなた、卵から生まれたのよ！この世界で！」

「ルシアもだ！」

「ハッピーもだ！俺が見つけたんだ！」

「そうね…先に言っておくけど、私はエドラスには行った事が無いわ」

「…？」「…」

「ウエンディが言う通り、この世界で生まれ、この世界で育った。でも私たちには、エドラスの知識や自分の使命が刷り込まれてる、生まれた時から…全部知ってる筈なのよ！なのに、アンタ達は何で何も知らないの！」

シャルルがハッピーとルシアを指して叫んだ。

「オイラ…」

「僕は何も…」

「…とにかくそういう事、私たちがエドラスの者である以上、今回の件は私たちの所為」

「さつき、別の使命って言わなかった？シャルル」

「…それは言えない」

シャルル、何を隠しているの？

「教えてシャルル」

「僕たち、自分が何者か知りたいんだ」

「言えないって言うてんでしょ！自分で思い出しなさいよ！」

するとナツさんとギアスさんが言い出しました。

「良おーし！んじゃ、話も纏まった事だし」

「いつちよ行つてみるか？」

「「エドラスつてトコによ！」

「纏まつてないわよ！」

こつゆう所は相変わらずですね二人とも。

「てか、アンタ達まつたく理解してないでしょ」

「僕はだいたい解りましたけど、仲間の命が掛つてる事は一番に解りました！」

「私の行く道はギアス様の行く道！」

ぐうゝx2

「ナツ、オイラ不安でお腹空いて来ちゃった」

「僕も」

「はは、そりゃ元気の証だろ？」

緊張感無いですね…。

「それに、そのエドラスつてトコに皆がいるんだろ？」

「だったら、助けに行かなきゃな！」

「どうなのシャルル？」

「恐らく、いるとは思う。だけど、助けられるか分からない。そもそも私たちがエドラスから帰って来れるのかどうかさえ……」

「ま、仲間がいねえんじゃこつちの世界には未練は無えけどな。イグニールの事以外は……」

「仲間いないんじゃプリズレイヤーを探したって何も意味も無いしな」

「私も！」

「僕も！」

「ギアス様と共に！」

「皆を助けられるんだよね？オイラ達……」

「だ、大丈夫……だと……思いたいね……」

シャルルは何か決意した様だ。

「私だつて……まがりなりにフェアリーテイルの一員な訳だし……母国の責任でこうなった、疾しさもある訳だし……連れてってあげない事も無いけど……いくつか約束して」

シャルルがウエンディ達に条件を出した。

「私がエドラスに帰るといふ事は、使命を放棄する事。向こうで、王国の者に見つかる訳にはいかない……全員変装する事！」

「俺らもか？」

「シャルルはそれで良いの？」

「良いの。もう決めたから」

シャルルの意思は固そうだね。

「そしてオスネコ達、私たちの使命については詮索しない事」

「あい……」



「らっ…」

「三つ目、私も情報以外エドラスについては何も知らない…ナビゲートは出来ないわよ」

「うん！」

「了解」

「分かった」

「最後に…」

シャルルはとんでもない事を言い出しました。

「私とオスネコ達が、あなた達を裏切る様な事があつたら、躊躇わず殺しなさい！」

私たちは声が出せなかった。

「オイラ達…そんなことしないよ…」

「そうだよ…僕たちがギアス達を裏切るなんて…」

ぐう〜×2

「てか、腹づるさい！」

何だか台無しですね…。

するとシャルルはエーラを出した。

「行くわよ。オスネコ達もそいつらを掴んで」

「飛んで行くの？」

「私たちの翼は、エドラスに帰る為の翼なのよ」

「……………」

「行くうぜハッピー、ルシア！お前らの故郷だ！」

「……（あい・らっ）！」「

では行きましょう！エドラスへ！  
するとギアスが、

「なあ、エドラスに行くにはルシア達が必要なんだろ？俺らじゃ定員オーバー何じゃ？」

あつ、そういえばそうですね。

シャルルは私だし、ハッピーはナツさんだし、ルシアはギアスさんですよ？離瑠さんとクルス君が余りますね？

「だったらギアス、アンタが私たちの代わりに飛びなさい！アンタもエーラが使えるでしょ？」

「あつ、そうか！？」

そういえばギアスさんは魔法を覚えて自分の魔法にする事が出来るんですかね。

そして、シャルルはウエンディ、ハッピーはナツ、ルシアは離瑠、そしてギアスがクルスを抱えて空を飛んだ。

「出来ればウエンディちゃんか離瑠の方が良かったんだがな……」

「出来れば私もギアス様の方が……」

「つべこべ言わずに行くわよ！」

一行は空高く飛んでいった。

「ギアス、オスネコ達、魔力を解放させなさい！」

「OK！」

「あいさー！」「

「らーうー!!」

「きゃあああああっ!?!」

「うほおおおおおっ!」

「わあああああっ!?!」

「くっ…!」

「アニメの残痕から、エドラスに入れるわ!私たちの翼、エーラで突き抜けるの!」

稲光が道の様に見えてきました!

「今よ!」

「あいさー!」

「らーうー!」

「うおおおおおっ!」

そして私たちは、異世界…エドラスへと旅立った。

サイドエンド

エドラス

アニメから抜けると、そこには…まさに異世界が広がっていた。

「くくくくくくわ…!」

全員この浮島だらけの光景に目を奪われていた。  
こうゆう光景って、結構好きなんだよなあ。

「ここが…エドラス…」

「オイラ達の…ルーツ？」

「島が浮いてますね」

「これがお前らの故郷か？ハッピー」

「良い景色だなルシア」

「綺麗…」

「下の方を見ると、何だか不思議な樹や植物がたくさんありますね」

「本当に…」

「別世界…」

「すつげー！見るよハッピー！あれ！」

「うわっ！？空に川が流れてるぞ！？」

「どうなってんだ？」

すっかり観光状態になっていた。

「ちょっとあんた達、気持ちは分かるけど、観光に来たんじゃないんだから、そんなにはしゃがないの」

「あはは…そうだね」

「悪い悪い…」

その時、エーラが消えた。

「……………あれ？」「……………」

翼が消えたら当然。

「……………わあああああああ！！？？」

「きゃあああああ！！？？」

「サイコキネシス！」

離瑠はサイコネシスを発動しようとしたが、

「!?!? 浮ばない!?!?」

魔法が使えず、そのまま落ちていった。

綿みたいなの木に落ちて、クッションみたいな大きなキノコに落ちたギアス達。

「…っ、皆無事か?」

「何とか大丈夫です…」

「このキノコ、やけに柔らかいわね? おかげで助かったけど」

「ムガッ…ムゴッ…ムグ…」

「でも、何で急に落ちたんだろ?」

「あい…何でか知らないけど…」

「急に翼が消えちゃって…」

「言ったでしょ、こっちじゃ魔法は自由に使えないって」

そっぴや魔法はともかく、悪魔の実の能力はどうなるんだろ?

「あれ? ホントだ、何か変な感じがする!?!?」

すると、さっきから埋まっていたナツが出てきた。

「さっ、皆を探しに行くか!」

取り合えず、移動を始めてみた。

「ナツ、探すってどこに行けばいいのさ?」

「任せろ、んなもん匂いを嗅ぎゃ…あれ? ダメだ…嗅いだ事の無い匂いばっかしで、さっぱり解らね…」

「初めてこの世界に来たんだ、初めて嗅ぐ物ばかりなのは当たり前だろナツ…」

「…ホントだ、空気の味も少し違いますね」

「て事は、火も違う味なのか？」

「こつちの虹とかは？」

「私に訊かないでちょうだい！」

「オイラもお腹空いたよ…」

「僕も…」

「そう言えば僕も…」

「さつき見かけた爬虫類みたいの物を捕獲すれば良かったですか？」

「お弁当持ってくれば良かったね」

「緊張感無さ過ぎ!？」

このメンバーで緊張感を持つというのが難しいと思うぞ？

「それで、どこに向かって歩いてるんですか？」

「さあ？取り合えず歩いてりゃ、そのうち何とかなるだろ？」

「何の解決にもなっていないよ？」

「他に方法が無いし、仕方ないわね…」

しばらく歩き続けた。

「それにしても、誰もいませんね？」

「森ばっかだし…」

「変わった形の植物ばかりだし…」

「それでも、変装しておかないと」

「と言われなくても、この森の中じゃどうする事も…」

「おっ、コレなんか良いんじゃない？」

ナツはそこらに生えてる植物やら草やらを使って変装した。

「ちょっと…」

「ナツさん…」

「これは…」

「無いんじゃないの…」

「ごうゆうのって変装じゃなくて擬態って言うんだよナツ…」

「擬態かどうかも怪しいけどな…」

「良いじゃねえか、要は誰にも見つからなきゃ良いんだろ？気にすんなっつーの」

「何か…恥ずかしい…」

「恥ずかしさに悶えるウエンディちゃんも良い！」

「こんな時に何言ってるんですかギアスさん…」

「私も悶えた方が良いでしょうか？」

「離溜さん、段々クールなキャラが崩れてますよ？」

ギアスはいつもの様に壊れてた。

「まあセンスは悪いけど、アイデアとしては良いわね…」

「…良いんだ？」「…」

ハッピーとルシアとクルスは突っ込んだ。

またしばらく歩いてると、

「おっ！さっきの変な川だ！」

空島の川雲みたいな感じだなアレ。

「川が空に向かって流れてるなんて…」

「何かロマンチックな光景です」

「そうだ！オイラお腹空いてたんだ！」

「我慢しなさいよ！」

「あゝ、きつとあの川には美味しい魚がいるんだろうな……」

するとウエンディちゃんが何かを発見した様だ。

「あつ、あそこ！」

「エドラスの人間みたいね？」

「良かったゝ、私たちと同じみたいで」

「どんなの想像してたの？」

「あの川で釣りをしてるみたいだな？」

「良いなゝ……」

「あれ？」

クルスが何かに気付いたみたいだ。

「そついえばナツさんは？」

「彼なら釣りをしている人の所に行きました」

「……」「……ええっ!?!」「……」

こつゆう行動力はあるよなナツは……。

「ひいひいひいひいひいっ!?!?!?!?!」

むっっちゃ怖がつてるなおい……。

「ナツさん……」

「何やってんのよ!?!?」

「あれじゃビビるよね……」

「あいつは……」

「怖がらせるだけだよね……」



「せめて変装解いてから声をかけて下さいよナツさん…」

「彼に言っても今更だと思っけど…」

「「「「「「確かに…」「」「」「」

するど、

「ぎゃあああああああああ！！！！？？？？」

あまりの恐怖に逃げ出したみたいだ。

「んだよ、ちょっと話聞こうとしただけじゃねえか？」

「何考えてるの！？変なかつこしてる上に、「フェアリーテイルつてギルド」何て聞いちゃ、何の意味も無いでしょ！？」

「そんじゃ、どうやって皆の場所を調べるんだよ！」

「それは…」

「もし、今の男が王国に通報したら…」

「この擬態も意味無いよね…」

確かに…。

結局変装は解く事にしました。

「とにかく、急いで皆を探さないと！」

「てかさっきの人釣竿くらい忘れてつてくれれば良いのに…」

「ハッピー、それはいくらなんでも…」

「僕も野菜食べたい…」

「そこらのじゃダメなのか？」

「さすがにむやみやたらと食べてお腹を壊しては意味がありませんよっ。」

「なあ、俺なんかしたのか？」

「そ、それより、何か変な音しませんでしたか？」

「おお、また釣り人か！よっしゃー今度こそ！」  
「学習能力無さ過ぎよアンタ！」

すると、近くの沼から何か出てきた。

「あつ、魚だよほら！」

「おーし、あれを捕まえて飯にで「ザパーン！」も……」

沼から出てきた魚は、ギルド程の大きさのナマズみたいな魚だった。

「……でかあー!!?」「……」

「大きいわね？」

離瑠……お前段々ロビンっぽくなってるぞ？

「あわわわわ……」

「あいさー!?!」

「らーうー!?!」

「でか過ぎよ!?!」

「いくらなんでも大き過ぎますつて!?!」

「強そうな奴じゃねーか！燃えてきたぞ！」

いきなりケンカ腰だなナツ……。

「でもナツさん、早く先に行かないと!?!」

「三秒あったら充分だ！オラー！火竜の鉄拳!?!」

しかし、何も起こらなかった。

「あれ？」

そしてデカナマズに弾かれて沼に叩きつけられた。

「……ナツ!?!」

「……ナツさん!?!」

「見事に落とされたわね?」

「あれ?火が出ねえぞ?」

「だから言ってるでしょ!エドラスでは魔法は自由に使えないって  
!」

「って事はアレか?」

「逃げるのよ……!?!」

俺達は追ってくるナマズから逃げ出した。

魔法が使えないなやっぱ。

ダイアルの方はどうなんだろうな?

とにかく今は逃げるに限る!

そしてあつと言う間に崖に追い込まれた。

「マジか!?!」

「行き止まりですよ!?!」

「あのナマズみたいなデカイ魚がもうこっちに来てますよ!?!」

「サイコキネシスが使えれば……」

「ハッピー!飛んでくれええつ!?!」

「魔法使えないんだってば!?!」

すると、ナマズが襲いかかってきた。

俺達は左右に逃げると、ナマズはそのまま崖へと飛び出し、空中の川に落ちた。

「くそ……魔法使えねえだけでこれか!?!」

事の重要さに気付いたみたいだなナツ。

「皆さん大丈夫ですか？」

「何とか…」

「私も」

「俺も」

「お腹は空いてるけどまだ命はあるよ」

「僕もお腹空いてるけど生きてるよ」

「アンタ達…いい加減にしなさいよ…」

その後シャルルの怒りが爆発したのか、ナツに八つ当たる様に罵倒したら、ナツが珍しく落ち込んでいた。

その後もまた歩き始めた。

「人生いろいろだよ？ナツ（ぐうぐう）」

「ハッピー、それ慰めになってねえ。つーか、こつゆう時に腹鳴らすんじゃないか」

「……………あつ！？」

「…ん？」

木の道を歩いてる若者と老婆…ってあの二人、ガルナ島にいたりオンの手下のブラーゴの民じゃねえか！？

「また見られた…」

「あれ？あの二人、どこかで見た様な？」

そりゃそうだろ、俺と一緒に見たんだから…。

「ど、ど、どうしよう…！？」

「な、何か話さないと!?!」

「えっと…」

「僕たちは道に迷っただけだよ?」

「そうそう、ただの旅の者です…」

ハッピーとルシアが挨拶をしたら、

「ど、どうかお許し下さいませ!?!?!」

「?????????」「????????」

まあ喋る猫「エクシードって感じだから、こっとなってもしょうがないという訳か?」

「エクシード様、どうか命だけのご勘弁を!」

「エクシード?」

「誰の事だろう?」

シャルルは少し焦っていた。

そしてナツが話しかけようとした時にハッピーも近くに寄ったら、

「ひいひいひい!?!御助けをおおおお!?!?!?!」

全速力で逃げ出してしまった。

「おいおい…」

さすがにナツも啞然とした。

「さっきの人達、シャルルとハッピーとルシアを見て怯えてたよう  
な?」

「ほれ、俺の所為じゃねーじゃん！」  
「オイラそんなに怖い顔してたかな？」  
「それともあの連中は猫を見た事が無いとか？」  
「さすがにそれは無いと思うよ？」

少し歩いてると、

ボコッ

ギアスの足場が急にへこんだと思ったら、周りのキノコが盛り上がった。

「おろっ!?!」  
「今度は何よ!?!」  
「何か…」  
「すごく…」  
「嫌な…」  
「予感が…」  
「するわね」

その時、足場が急に飛び出た。

「「「「「わあああああああああ!?!?」「「「「「  
「「「「「きゃあああああああ!?!?」「「「「「

そのままキノコみたいな木に弾まれながら跳ばされていった。  
そして、カボチャみたいな建物に落ちた。

「オエッ…」  
「気持ち悪い…」

「また落ちた…」

「今日何回落ちたり弾んだりしてんだ俺ら？」

「あう…」

「どこかの建物に落ちたみたいね？」

「まったくもう…」

落ち着いて中を見ると、倉庫みただった。

「何だここ？」

「どこかの倉庫みたいだね？」

「やっと人の手が届いていそうな所に着いたのかな？」

「正確には落ちてきたが正解ね」

「細かい事はこの際良いだろ？」

「今更どれぐらい役に立つか解らないけど、とにかくここで、変装用の服を拝借しましょ」

取り合えず各々は服類を探し始めた。

「…おつ、面白え服がたくさんあんど！」

「さて、どれを着ようかな？」

「似た感じの服が良いですね」

するとウエンディと離瑠は、

「ナツさん、ギアスさん、クルス君、こっち向かないで下さいね…」

この時ギアスは耳を大きくしていた。

ウエンディちゃんの着替え！？直ぐ後ろでウエンディちゃんが生着替えをしてるだとおおおお！！

こうしてはいられん！すぐに後頭部に目を創らねば！

ギアスは後頭部に目を出し、ウエンディ達の着替えを覗こうとしたら、

「覗くな！」

シャルルがギアスの後頭部（目のある所）に蹴り出した。

「ぬぐおあああああああ！！？？」

ギアスは両目と後頭部を押さえて転がった。

その様子を皆が白い目で見ていた。

しばらくしてようやくエドラスの住民的な格好になった一行。

するとナツが家の窓から覗いて、窓の外にある何かを見つけたみたいだ。

「ん？んんん…あっ！？」

「どうかしましたか？」

「おおお…」

ナツが見つけた物は…、

「フェアリーテイルだ！」

「……………ええっ！？」

「ホントか！？」

外に出てみると、そこには確かにフェアリーテイルの紋章があった。ただ違うのは、ギルドがまるで植物みたいな形になっている事だった。

「何か形変わってるけどフェアリーテイルだ！間違いねー！」



「ナツさん!?!」

「見つかって良かった!」

「植物?」

「ナツ!?!」

「ギアス!?!」

「まったくもう!」

フェアリーテイルに到着した俺達は、そっと中には行ってみた。

「皆無事だあ!?!」

「あっけなく見つかりましたね」

「良かったあ」

「でも、どこか違和感があるわね?」

「そういえばギルドの雰囲気が随分違うね?」

「ギルドの形が変わってるのに誰も突っ込まないなんて?」

「細けえ事にすんなよ!」

「気にしませんかそこ?」

若干鼻声になってるぞナツ。

「ちょっと待って、様子がおかしいわ!?!」

テーブルの下に隠れるギアス達は、リクエストボードの方を見た。

『ジユビア、これから仕事に行くから』

『気を付けてな』

『ま、待ってよ〜ジユビアちゃん!』

「なっ!?!」

ナツは驚いていた。

そりゃそうだ、だって…、

『俺も一緒に行きてえな〜…なんて』

『…暑苦しい…何枚着てんの服?』

「んなっ!?!」

パンツ一丁の筈のグレイが、見た限り5〜6枚程着こんでて、マフラーや手袋までしてる寒がりなグレイと、グレイ命の筈のジュビアがグレイに冷たくしていたからだ。

『もつと薄着になってから声かけて』

『ひ、冷え性なんだよっ!?!』

『グレイの奴、ベタベタし過ぎなんだよ』

『恋する男つてのは、熱心なものだね〜』

「なんじゃこりゃ〜!?!?!?!」

ナツの頭が混乱したあまり、叫んだ様だ。

まあ気持ちも解らなくないけど…普段とのギャップがあるし…。

『なっさけねえなエルフマン』

『また仕事失敗かよ』

『恥ずかしいっス…!』

『おい見る、ギルド最強候補のジェットとドロイが、またエルフマンを説教してるぞ』

『ほ〜ど〜ど〜にな』

『仕事仕事〜!』

『ナブは働き過ぎだろ?』

『だよな』

こっちでは最強扱いのジェットとドロイで、漢がトレードマークだ

ったエルフマンがすっかり弱虫になってるし。  
ナブは働き者って…。

『カナさん、偶には一緒に飲みませんか？』

『こつち来て下さいよ〜』

『何度も申してるでしょう？私、アルコールは苦手です。』  
「ぶほおっ!？」

シャキツとしてるマカオに、喫煙してるワカバに…清楚な感じの力  
ナ…鳥肌立つよ…。

『ビスビス〜』

『な〜にアルアル〜』

「きやあああ…」

ウエンディちゃんが顔真っ赤にしてる…かわいい。  
つかバカッフルだなアルザックとビスカ。

『だいたいテメーはよお!』

『う…でも…だって…ぐす…』

『いちいち泣くなよ』

『俺は、ジュビアちゃんが好きなんだー!』

『うっせーぞグレイ!てか暑苦しい!』

エルフマン…泣き虫になってるよ…。  
てかりーダス細っ!？

「ど、どうなってんだこりゃ!？」

「皆、おかしくなっちゃったの!？」

「皆さんの性格が逆になってますよ!？」

「これは一体!？」  
「どうなってんだよー!？」  
「……………!？」

皆はギルドの異変に驚愕していた。

その時、目の前に誰かがしゃがみ込んで来た。

「おい!誰だテメーら?」  
「……………!？」  
「……………」

ギルドの皆が俺らの方を向いた。

「嘘!？」  
「ええっ!？」  
「まさか!？」  
「そんな!？」  
「あなたは!？」  
「おいおい……………」

目の前に話しかけてきた女は、

「ここで隠れて何コソコソしてやがる?」

やけにチンピラ風なルーシイだった。

「る、ルーシイ!？」  
「…さん!？」  
「え、え、え?」  
「これは一体、どうなってんの!？」

これがエドラスってか？  
ルーシイはまだ睨んでいた。

## アイスランド〜エドラス（後書き）

本当は離瑠とミオにするつもりが、途中でクルスにしようと思えちやいました。

今回はエドラスのギアスとクルスを出します。

## 妖精狩り（前書き）

前書きの内容が思い付かなくなってきました。  
それと、最近の仕事続きで書く時間が全然無かった。

## 妖精狩り

エドラス、フェアリーテイル

「おい！誰だテメーら？ここで隠れて何コソコソしてやがる？」

俺達は今、怖そうなルーシイに睨まれています。

「ど、どーしちゃまったんだよ皆？」

「ルーシイさんが怖い……」

「あわわわ……」

「皆さんは一体……」

「まずい状態ね」

「だな」

ルーシイはじい〜っとナツを見つめた。

「…ナツ？」

「!?!？」

全員が息を飲んだ。

するとルーシイは、

「よく見たらナツじゃねーかお前！」

「ぐもっ!?!？」

ナツに抱き着いた。



「ナツだつて？」

「何だよその服？」

「…ナツ、今まで…どこ行ってたんだよ…心配かけやがって…」  
「…ルーシイ？」

そして、

「処刑だつ！！」

「んぎゃあー！！？」

「出たー！」

「ルーシイの48の拷問技の一つ、ぐりぐりクラッシュュー！」

ナツを身動き取れない様に絡めて、こめかみをぐりぐりしてるルーシイ。

「「うええー！？」」

「「ナツさーん！？」」

「「「……………」」」

俺達はナツのされるがままを眺めてる事しかできなかつた。

「あまり虐めては可哀そうですね」

「うわ…とてもカナとは思えない…」

ハッピーがカナの事に突っ込んだ。

「うっ…ぐす…」

「こっちはもつとだ！？エルフマンとは思えない！？」

ルシアがエルフマンの事で突っ込んだ。

「いつまで泣いてんだテメーは!!」

「情けないっス!？」

「わ、訳が解らないよ…」

「確かに不思議ね？」

クルスも離瑠も訳が解らないでいた。

「とにかく無事で良かった。ねっ、ジュビアちゃん！」

「うるさい」

「これ…全部エドラスの影響なの!？」

「何から何まで全部逆になってるよ!？」

「……………」

シャルルは何か考えているようだ。

「ナツ、お帰りなさい」

「あっ、ミラだ」

「いつものミラだ」

「ある意味つままないね」

そう言うなよ、こっちのミラは最初悪女的な感じだったのが天然になつてる訳なんだからな。

…待てよ?て事はじゃあ、あのミラはいつか…あんな感じになつたりして…。

「ところで、そちらの青年とお嬢ちゃん達とお坊ちゃんとネコは誰です?」

「ネコ?」

「……………ネコ!？」

「ネコがいますよー!?!」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そついやこつちの連中はネコはエクシード扱いなんだつたな?

「どういつこつた!?!」

「こんな所に何でエクシードが!?!」

「うえええ〜!?!」

「エクシード!?!」

ギルド内が騒がしくなった。

「何だよう…!?!」

「どうなつてんだよコレ!?!」

さつきまでナツをぐりぐりしてたルーシィが手を止めてルシア達を見た。

「…つか、何でこつちの連中はエクシードで聞くとビビんだよ? エクシードって何なんだ?」

「シャルル…!?!」

ウエンディちゃんが心配そうにシャルルを見た。

するとミラが近づいてきた。

「ホントそつくり」

「えつ?」

「あなた達つてエクシードみたいね」

「いや…みたいと申しますか…!?!」

「その物じゃないか?」

「姉ちゃんの言う通りだよ。エクシードにそっくりなだけだよ」

「それもそうね」

「そうかな？」

「どう見てもネコその物だけどな？」

取り合えず、この場は何とか落ち着いたみたいだな。

「……………(じい〜)」

「ルーシイさんが怖い…」

いちいち声に出さなくても良いんだよウエンディちゃん。

「さあ言えよ！散々心配かけやがって、どこで何してたんだよ！」

「何って言われてもなあ…」

「ナツ、そこはちゃんと説明しないとダメだよ」

「あ〜ん、つまりアレだ…ほれ何だったっけ？」

「ああん？相変わらず焦れっつてえなお前は！」

「ぐぼお〜！？」

ナツの関節を決めて、肘でこめかみをぐりぐりするルーシイ。

「出た〜！」

「今度はぐりぐり肘クラツシュ！」

「……………肘が付いただけ(だよ・じゃ・だろ)？」「……………」

ハッピー、ルシア、クルス、俺が突っ込んだ。

「ビスビス〜」

「な〜にアルアル〜？」

「そろそろ、二人つきりで仕事行こっか？」

「行こう、アルアルは何の仕事が良い？」

「あ、そうだな、ビスビスの好きな仕事に行こうよ」

「い、ヤッホ、アルアルってば、や・さ・し・い」

見ててイラツと来るなこのバカップルは…。

「…も、ものすごく仲が良いですね」

「いくら逆と言っても、限度って物があると思うけどな…」

ウエンディとハッピーはアルザックとビスカを見てそう言った。

「なあジュビアちゃん、さっき仕事行ってくたってただる？俺も一緒に行ってえな」

「だから近寄らないでって言うてるでしょ暑苦しい。仕事はジュビア一人で行くのよ、アンタなんか全然役に立たないんだから」

「グレイが好きなジュビアが冷たいね…」

「みたいね」

グレイとジュビアのやりとりをルシアと離瑠がそう言った。

「グレイさん、そろそろ諦めたらいかがです？」

「リオン君もそうでしたけど、どう見ても脈無しですよ」

「あの着膨れナンパ男の名前出すなよ…ジュビアちゃん、頼むから」

「うるさいってば…」

「ぐおっ！？」

ジュビアに蹴っ飛ばされたよグレイ…つかリオンも着膨れしてるのかよ。

そして蹴っ飛ばされたグレイは転がっていき、ハッピーに向かって

いた。  
すると、細いリーダーダスに当たった。

「リーダーダス？」

「まったく、ウロチヨロしてんじゃないよ。怪我するぜ、エクシードモドキが！」

「モドキって！？オイラよく解らないけどモドキは無いよ！」

そして壁にぶつかるグレイ。

「グレイ！だらしねーぞテーマは！起きろ！」

「こつやあってうずくまってるとヌクヌクして温かいんだよね」

「だらしねーし情けねー！」

情けないグレイとかなり強気なリーダーダスだな。

「まったく、静かに本も読めないわね」

「あれって、イヴさん！？」

「何か知的そうですね！？」

眼鏡を掛けて哲学書を読んでいるイヴを見つけた。

「イヴ君、勉強は頑張ってるかね？」

「はい、ギド先生」

「もしかして、ギドさん！？」

「つか、若っ！？」

こつちのギドは髪があつて黒いし！？

簡単に言えば、ニードレスの回想編で出てきた若い頃のギドと思つて下さい。

「ねえねえ！セツナちゃんお腹空いた〜」

「またなの？セツナは相変わらず子供ね…」

「まあそう言わないでミオさん、確かに日頃から精神年齢の低いセツナさんを甘やかしていますけど、このままほっとかいたら駄々こねて騒いでしまいますから、その前によく犯しとかあげておけば大人しくなるのですから宜しいのではなくて？それにセツナさんがこのままでいるというのも結構愛くるしくて仕方ない部分もありますけども、ここは敢えて心を鬼にした方がよろしいのか迷ってしまう事も…」

「もういいわよクチアリ、というよりあなた喋り過ぎよ？」

セツナが：大人なのに子供っぽい性格になってるし、クチナシは喋り過ぎというか、何故名前がクチアリ？

そして：何故：何故ミオたんが大人の姿なんだあああああああああああつつつつつ！！！！？？？世界の損失じゃないかあああああああああああつつつつつ！！！！？？？？？

「技の三十五、えげつないぞ固め！」

「ぐぼっ！？」

「技の二十八、もう止めてロック！」

「ギブギブギブ〜！！？」

ルーシイがことごとくナツにサブミッションを喰らわし続けた。

「ルーシイさんが怖い…」

「逃げんなナツ！何処に隠れた？」

「仕事仕事〜！」

ルーシイの関節技から逃げたナツは身を潜めた。

「うゝんダメか…伝導線がアウトしてんじゃない…」

「次の仕事〜！」

「……………！うるさいよクソナブ！」

「んだとコラ！クソとはどういうこつたレビィ！」

「見りゃ解んでしょ！今微妙なメンテやってんのよ！ガタガタ騒いでつと、集中出来ないでしょうが！」

アースランド

文系のレビィと違って理系だな。つか口が悪い。

「出て来いナツ！新技かけてやつからさ〜！」

「うるさいよこのクソルーシィ！」

「何だとコラ！」

「メンテ中だつて言ってるでしょうが、この怪力ゴリラ女！」

「だったらさっさとやれよ、このひよるひよるメカニックが！」

このやりとり、こっちのナツとグレイだな…。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

「よろしく頼みますよレビィさん。貴女のその技術が無ければこのギルドは…」

「ちえ…早いとこ頼むわ…」

「分かればよろしい」

何か満足気だなレビィ。

「あれ？そういえばエルザさんやギアスさん達がいなみたいただけど？」

「冗談じゃねえ…」

「ねえねえ、こっちではエルザってどんな感じなのかな？」



「そりやおめえ…やっぱ逆だろっよ…」

「ナツさん…」

「ルーシイさんの関節技がトラウマになってしまったんですね…」

「あのルーシイはエルザみたいな感じだから…」

テーブルの下でうずくまってるナツとハッピーが呟いた。

「エルザの逆ってどんな感じさ？」

「そうだな…」

ナツは、かなり気弱なエルザを想像…というより願望をした。

「とか？」

「それただのナツの願望だよね？」

「んだと…じゃあハッピー、お前はどうかだよ？」

「オイラはこう思うよ、きつと…」

ハッピーがマスター的立場の想像…というより願望をした。

「とか？」

「いやいや、お前の願望の方が酷くねーか!？」

「うっん…私はこう思います!」

ウエンディちゃんが、エルザがパティシエになってる想像をした。

「とか？」

「…」「…」「そう来たか!？」」「…」「…」

思わず突っ込んだじゃったよ!？」

「僕はこう思います」

クルスは、笑顔を絶やさないうェイトレス（ミラ風）なエルザを想像した。

「とか？」

「……それはそれで怖い!?」「」

「あつ、私としてはそつちが良いかも!」

「賛成なんだ……」

「私はこうだと思います」

離瑠は、かなり危ない殺戮者的なエルザを想像した。

「とか？」

「……ひええ〜!?!?」「」

「怖いから!?その発想怖いから!?!」

「それじゃあギアスさんはどうなんですか?」

「俺か?俺はそうだな……」

ギアスは、大人びてるやんちゃな女の子的な子供エルザを想像……というより願望をした。

「とか？」

「ある意味予想通りでしたね……」

「……うんうん」「」

そこで頷くのかよ!?

「揃いも揃ってつまない事妄想してんじゃないわよ!」

「あはは……」

シャルルに突っ込まれました…。

「でも、逆な感じのエルザさんて…」

「実際のところどうなんだろ？」

こっちのエルザはフェアリーテイルの敵だから…。  
するとルーシイがナツを見つけた様だ。

「ナツ見〜っけ！」

「おいコラー！」

「お〜っし新技かけっぞ！」

「止めるって！いい加減にしねーと、いくらルーシイでm」へえ…」  
あっ！？」

「やるおつてのか？上等だよ！オラアツ！オラアツ！！」

抵抗しようとしたナツに容赦なく攻撃するルーシイ。

「っ、強い！？」

「ナツ〜、大丈夫？」

「大丈夫…じゃね…」

「根性足りね〜んだよお前は」

すると、ギルドの皆が驚いていたようだった。

「ナツさんがルーシイさんに口応えなさるだなんて…」

「珍しい事もあるんだな…」

「つかアホだろ…」

確かにこの世界のナツは臆病だけだよ。

「さあ言え！どこで何してやがった！あん！」  
「だから…あのそれが…ハッピー、助けて…」

ナツはハッピーに助けを求めるが、ハッピーは目を逸らした。  
するとその時、ナツに救いの手がさしかかった。

「ルーシィ！またナツを苛めて、ダメじゃない！」  
「!?!」

ナツは驚愕した。

「ちえ、分かったよ」  
「う…嘘!?!」  
「アレって!?!」  
「まさか!?!」  
「!?!?!」

「応ここで驚いておかないとな。何せ、目の前にいるのは、

「おっ、戻ったのか」  
「お帰りなさい、リサーナ」  
「ただいま、ミラ姉、エルフ兄ちゃん」

2年前に死んだ事になってるこっちのリサーナが居るんだからな。

「り…リサーナ…」

ナツとハッピーはうつすらと涙を溜めていた。

「ジェットもドロイも、エルフ兄ちゃんを苛めないの！」  
「だってよ〜……」

そして、

「見つけた……」

「?……ひっ!?!」

「リサーナあ!?!」

ナツとハッピーとルシアがリサーナに飛びつこうとした。  
つか何でルシアまで?

「クオラアー!?!」

「はぶあつ!?!」

ルーシイの回し蹴りを喰らった三人だった。

「お前、いつからそんな獣みてーになったんだ?あ?」

「だって……リサーナが生きて……そこに……」

「何言ってるんだお前?」

その気持ち解らなくもないぞナツ。

「いいから座れよ、久々に語り合おうぜ。友達だろ?」

「服脱げよグレイ……」

ナツが泣きながら言った。

「お前らホント仲良いな。いつもベタベタしてさ」

「ルーシイは、レビイとケンカし過ぎなんだよ」

そういやこっちのグレイとナツって、こっちのルーシィとレビィみたいだな。

「な、何でリサーナがいるんだ？」

「だってリサーナは2年前に死んじゃってるのに？」

「ミラさんの妹の…確か亡くなった筈だよな？」

「それだったらどうして？」

「皆が逆になってる訳じゃないって事ね」

シャルルが何か分かった様に言った。

「……！？」

「まさか！？」

「多分、クルスの思ってる事が正解だと思う」

「クルス、何を考えたんだ？」

「ここにいるギルドの皆、違ってる事です……」

「……えっ！？」

やっぱクルスってこうゆう時の頭の回転は速いな。

「ミラはあの通り、全然変わってないわ。決定的なのはアレ」

「……？」「」「」

シャルルが指差した方向に向くと、そこにいたのは、

「あの子、少しお前に似てね？ウェンディ」

「そーお？」

「雰囲気とか近いよな？」

「私っ！！？」

大人になつてるウエンディがいた。  
ギアスは四つん這いになつて倒れた。

「ぎ、ギアスさん！？どうしたんですか！？」

「な…何か…ウエンディちゃんが…すっごくつまらない存在になつてしまつたと思つて…」

「それ酷くありませんか！？」

だつてえ…ミオたんといひウエンディちゃんといひ…ここは地獄しかないのかよ！？」

「ギアスさん…そんなに落ち込まなくてm「ぐいぐい」ん？何…えっ！？」

「ん？どうしたク…なっ！？」

クルスが誰かに引つ張られたと思つて振り向くと、そこにいたのは、

「あつ、あの…」

クルスの女装版、山田撫子がいた。

！？天使が舞い降りた！地獄に仏とはこの事だあ！

「ぼ…僕？」

「山田ちゃん！」

「びっ！？」

ギアスは思わず山田（仮）に飛びかかつたその瞬間、

「私の妹に何をしているんだお前はー！」

「ぐぶあつ!!!?」

ギアスは誰かに殴られた。

「何しやg…なつ、テメエは!?!」

「貴女は!?!」

「ね、姉さん…!?!」

ギアスを殴ったのは、クルスの姉、アルカだった。

「アルカ! テメエ、何でここにいやがる!」

「何を言っている? 私は元々フェアリーテイルの一員だ!」

「何だと!?!」

「それよりもお前! よくも私の可愛いクルスを襲おうしたわね!」

「こんな魅力的な子を前にして黙ってるって言いたいのかテメエは!」

「確かにクルスは魅力的だけど、それは姉である私の特権だ!」

「なんだそりや!?!」

「それ以前に…あつちの子もクルスって名前に疑問を持ちましょうよ…」

ギアス（ロリコン）とアルカ（姉バカ）のやりとりにクルスは嘆いていた。

「こちらのアルカは家族を大事にしているみたいね」

と離瑠がそう言った。

するとその時、

「アギトー! 帰ってきてくれたのねー!」



「があっ!?!」

誰かがギアスに抱き着いた。

「いてて…誰だいきなり抱き着いて…きた…のは…」

おいおいおいおいおい…こっちではこうなのかよ!?!?  
抱き着いたのは、

「アギト…私、ずっと待ってたんだよ?」

女性化ギアスだった。

こっちの俺は女なのか!?!あつ、でも胸が無いな?

見た目はスレンダーな女ギアスだった。

つかさつきから言ってるアギトって誰だ?

「アギト…」

つーかいつまで抱きついてるんだろ?

「え?え?」

「逆じゃなくて、違うのよ…」

「そ、それって…」

「そうよ。この人達は…私たちの探してる皆じゃないわ!」

「やっぱり…」

「別人、エドラスに…最初からいる人達よ」

俺とクルス以外全員驚いてるな。

「ありえない話じゃないわ。パラレルワールドのようなものよ。エ

ドラスには独自の文化や歴史があり、フェアリーテイルが存在する可能性だって…」

「そんな!？」

「ここは、エドラスに元々あったフェアリーテイル!？」

「じゃあ…俺達の知ってる皆は、どこにいったんだよ!？」

「ごちゃごちゃ何言ってるんだあ?」

「知らないわよ!それをこれから見つけるんでしょ?」

ナツは黙ってしまった。

「これ以上ここにいるのも面倒ね、行くわよ!」

「わっ!?!」

シャルルはハッピーとルシアを連れて外に出ようとした。

「シャルル、どこへ!?!」

「王都よ!吸収されたギルドの手がかりは、王都にある筈!」

シャルルはギルドに出ようとしたその時、

「妖精狩りだあー!?!妖精狩りが来たぞあー!?!?!」

ナブがそう叫んだら、ギルドの皆がざわついた。

「そのネコ!どこへ行く気だ!外はマズイ!」

「えっ?」

「ちくしょう!」

「もうこの場所がバレたんだ!」

「王国の方達、また私たちを追って…」

「えらい事ですよ!?!」

「王国……」

「私たちを、アースランドに送り込んだ奴等よ」

「それじゃあ僕たち……」

「フェアリーテイルの敵なの？」

ルシアとハッピーは嘆いていた。

「リアクター点火準備、座標設定、誤差修正まで……5……4……3……2

……1、マーカーにコネクト！ショックアブソーバーに、魔力供給！」

「転送魔法陣はまだかレヴィ！」

「今やつてるよクソルシー！」

「遅いんだよ！妖精狩りが来るんだぞ！」

「だから分かっているって！」

「喋ってねえで早くやれよ！」

転送の準備をするレヴィ。

「転送臨界点まで、出力40%！43……46……51……」

ギルド内が慌てだす。

「早くしろレヴィ！」

「もたもたしてんじゃねー！」

「うるさい！出力61……63……転送まで後2分！」

すると、何かが近づいて来る気配がした。

「来るぞおーっ！」

エルフマンがそう叫ぶと、巨大な獣が飛んで来た。

「な、何だアレは!？」

ナツがそう叫んだ。

「妖精狩り……」

「何なの……」

「巨大過ぎる……」

「あれが妖精狩り……」

「王国がフェアリーテイルを狙ってる? 何の為に……」

「そんなの決まってるじゃない」

「えっ?」

エドウエンデイが言ってきた。

「王の命令で全ての魔導士ギルド廃止された。残ってるのは世界でただ一つ、ここだけだから」

「えっ!？」

「知らないでナツについて来たの? つまり私たちは、闇ギルドなのよ!」

「っ!?!？」

フェアリーテイルが闇ギルドだという事に驚愕するウエンデイ。

「よし、臨界点到達! ショックアブソーバー作動! 転送魔法陣……展開!」

体が浮かび上がってきた。

「今度は何だあ!？」

「体があ!?!」

「浮んでくよー!?!」

「わわわ!?!」

「ギアス様!?!」

「取り合えず、ウエンディちゃん、離溜、俺に掴まれ!」

「ドサクサに紛れて何言ってるんだよギアスう!?!」

「皆、何かに掴まれ!」

「ジュビアちゃんに、捕まりたいよー!」

「止めてよ暑苦しい!」

なんかもう色々騒がしくなってるよおい!?

「転送開始!」

「ああ…無事転送されるでしょうか?」

「カナさんは私が守ります!」

「いえ私が!」

カナを守ろうとするマカオとワカバ。

「姉ちゃん、リサーナ、俺にしっかり掴まって!」

エルフマンはミラとリサーナを守ろうとしていた。

「揺れる…揺れてる!?!…うぶっ…!」

こんな時でも酔ってしまうナツ。

そして、ギルドは別の地に転送した。

エドラス、砂漠地帯、闇ギルド・フェアリーテイル

何とか無事に転送出来たみたいだな？

「野郎ども、引っ越し完了だ！」

「助かったあ……」

「無事転送できたみたいだなあ……」

「皆無事か？」

「おお……」

「あたたた……」

ギルドの皆も無事みたいだな。

「引っ越し？」

「ギルドごと移動したの？」

「すごい……」

「こんな魔法、僕らの世界にありましたか？」

「少なくとも私は知らないわね」

瞬間移動の魔法なら評議院にいる奴が使えるけどな。

「ほらあジュビアちゃん、厚着だって役に立つだろ？」

「取り合えずお礼は言っとくわ」

「相変わらず滅茶苦茶……」

「大丈夫ですかカナさん！？」

「ええ、何とか」

「あたた……」

「リサーナ、怪我は無い？」

「大丈夫よ、エルフ兄ちゃん」

向こうの方も大丈夫みたいだな。

「テメエ！何モタモタしてんだよ！危なかっただろ！」  
「うっさい！偶には自分でやってみろ！」

またケンカしてるよルーシィとレビィ…。

「何だったんだ？さっきの奴は…」

「どうしちゃったのナツ？久しぶりで忘れちゃった？」  
「な訳ねーだろ！」

リーダーが突っ込んだ。

「あれは…王都魔戦部隊、隊長の一人…」

そしてミラは、その隊長の名を言った。

「エルザ・ナイトウォーカー、またの名を…妖精狩りのエルザ」  
「……………!?」「……………」  
「何だと!?エルザが…敵!?!」

ナツ達は、エルザが敵対している事に驚愕していた。

## 妖精狩り（後書き）

知的なイヴ、若いギド、少女クルス等にしました。

アースランドのアルカと違って、エドアルカはシスコン（アースクルスに対してはブラコン）になってる様にしました。

今回はアースルーシィが出ます。ガジルサイドは書かない予定です。



## 希望の鍵（前書き）

前書きの内容が思い付かなくなってきました。  
それと、最近の仕事続きで書く時間が全然無かった。

## 希望の鍵

エドラス、砂漠地帯、闇ギルド・フェアリーテイル

俺らの事情をエドラスのフェアリーテイルの皆に話した。

「つーと何か？お前らはアースランドとか言っても一つの世界から

…」

「仲間を救う為に、エドラスに来たってのか？」

「ああ」

「そっちの世界にもフェアリーテイルがあって…」

「そっちじゃエルザは味方だった？」

「ぎっくり言うとな」

「あい」

「らっつ」

ある程度は理解してくれたみたいだな。

「どうにも信じ難い話ですけど…」

「うーん…でも確かに、このナツは俺達の知ってるナツじゃねーしな」

「似てるのは顔だけよね？」

「言えてる」

そして皆が笑いだした。

「この子がそっちの世界の私!？」

「あ、どうも…」

「ぶっ、ちっちゃくなつたなウエンディ」

そっちのウエンディはどうでもいいしな。

「それじゃこの子がそっちの世界のクルスなの!？」

「私？」

「えっと…そう言う事になります」

「そっちの世界のクルスは男なんだな」

「か…」

「ん?どうしたアルカ？」

「かゝわいい〜!」

「うわっ!？」

アルカはクルスに抱き着いた。

「妹も可愛いけど、弟というのもかわいいわ!さすがクルスね!」

「どういう意味だよ…」

「あ、あの…」

「ああ、この子お持ち帰りして弟にしたいわ!」

何だこのブラコン全開な雰囲気は?つかクルスはもう姉はいらない  
だろ!

「止める!」

「ちょっと、あなたさっきから何すんのよ!」

「クルスは姉に酷い虐待を受けていたんだ!お前が近づくとその時  
のトラウマが出て来るんだよ!」

「ええっ!？そっちの私ってそんなに酷かったの!？」

まあ間違っていないからな。

「だったら私がこの子を引き取って、愛ある温もりを与えながら育てるわ！」

「ええっ!?!」

うわ〜お…予想よりも斜め上の行きやがったよ…。

「あなたは、そっちの世界の私なの？」

「名前がギアセルシアならな」

エドラスの俺の名前はギアセルシア・ネセサリーと言っらしい。

愛称はセルシアだとか?つか、こいつ実は男で女装しているんだと!?!

軽く死にたくなっただぞ…。

「それにしても、あなた本当にアギトそっくりね」

「そっぴやさつきから言ってるアギトって、誰の事だ？」

さつきから気になってたからな。

「アギトは、私の弟なの…」

「弟!?!」

こっちの俺には兄弟がいるのかよ!?!

しかも聞いてみると、見た目が黒髪以外俺にそっくりだとか?

おまけにフェアリーテイルを裏切って王国軍に寝返ったとか、どうしようもねえなそいつは。でも…兄が女装してるんじゃそっぴやなるかな?

「という事は、私にそっくりな者もいるとか？」

「君は？」

「離瑠です」

「り……」

「……リルだとおっ!!?!?」「……」

何で離瑠だとそんなに驚くんだ？

「リルはエルザと同じ、王国魔戦部隊の一人よ！」

「……ええっ!?!?」「……」

「私が……エルザさんと同じ……」

こっちじゃ離瑠もエルザ的立場なのかよ……。

「っー訳で、王都への行き方を教えてほしいんだ」

「……えっ!?!?」「……」

ギルドの皆は動揺していた。

「私たちの仲間が、この世界の王に吸収されちゃったんです！早く助けに行かないと、皆が魔力に……形の無いモノになっちゃう！」

「ちっちゃい私には悪いけどさあ、止めといた方が身の為よ」

「えっ!?!?」

ちよっ!?!?何で諦めんだよつままない方のウエンディ！

「エドラスの王に刃向かった者の命は無いわ。それほど、強大な王国なの……」

「この世界じゃ魔力は有限、限りあるモノ……言い換えれば、何れ無くなるモノ……」

「それを危惧したエドラス王は、魔法を独占しようとした。だよね

「?ジユビアちゃん」

「結果、全ての魔導士ギルドの解散命令が出された…」

「初めの内は皆抵抗したさ…」

「けど、王国軍魔戦部隊の前に、次々と潰されていった…」

「残るギルドはここだけ…もちろん、俺達だって無傷じゃない…」

「仲間の半分を失った…」

「マスターだって…畜生…」

ギルドの皆が泣き始めた。

「逃げるのが精一杯なんだよ…」

「だから近づかねえ方が良い、元の世界とやらに戻りな!」

こいつら…やる前から諦めてやがるな…。

「頼む、道を教えてくれ!」

「……………えっ!?!」「……………」

ナツが頼み込むと、皆が驚いていた。

「俺は仲間を助けるんだ!絶対にな!」

すると、ギルドの皆が啞然とした。

いや、何でここで啞然とするんだよ!?

ん?リサーナが部屋を出たな?俺らがリサーナの知ってる俺らだつて気付いたみたいだな。

取り合えずエドルーシイから王都への行き方を教えて貰った。

アルカはアースクルスと離れるのを嫌がってたな。

そして俺も出ようとしたところに、

「あつ、待つてギアス！」  
「ん？何だセルシア？」

お互いの呼び名も決めておいたから、俺からはセルシア、セルシアからはギアスと呼ぶようにした。

「あのね、もし王国に着いたら、アギトをギルドに連れて来てくれないかな？」

「ギルドにか？」

「止めとけよセルシア」

「あいつは裏切り者なんだ！帰って来やしないっての！」

「でも、ちゃんと話せばきつと……」

「あいつはハッキリ言いやがったんだ！魔法が使えるならギルドよりも王国軍にいた方がマシだ」ってな！」

「でも……」

「あいつの事は忘れろ！あいつはギルドの掟を破ったんだ！」

皆がそのアギトって奴を非難して、セルシアは落ち込んだ。

「セルシア」

「……何？」

「約束は出来ないが、そのアギトって奴をギルドに連れて来ればいいんだろ？」

「ホント！？」

「それに、エドラスとはいえ、フェアリーテイル家族を裏切ったんだ！ちよいと喝を入れてやらねえとよ」

「怖い……！？」

エドラスとはいえ、ウチのギルドから出て敵になる奴は、お仕置きが必要だな。

それから王都周辺には、フェアリーテイルのお得意様にもなっている情報屋があると聞いたので、そこに尋ねてみようと思った。

ついでに、こっちのマスターについて聞いてみると、何とラクサスだって!?

しかも当時の最強チームは、風神衆だって（多分雷神衆の事だと思う）。

そして俺達は、王都に向けて出発した。

別れ際にアルカがアースクルスと離れるのを嫌がってたそうだが、どうでもいい事だったから無視した。

エドラス、王都、第三者サイド

エドラスの王都では、魔戦部隊隊長達が集結していた。

「スツゲエよ！スゲエよ！見たかエルザ、あのでけえラクリマ！」

チャラチャラした男、王国軍第三魔戦部隊隊長ヒューズが、エルザにそう言った。

「来る時に見たよヒューズ。綺麗なモンだな」

王国軍第二魔戦部隊隊長エルザ、通称妖精狩りのエルザが答えた。

「あれは何万ものアースランドの人間の魔力なんだぜ！」

「ん〜正確には、魔導士百人分くらいの魔力：と、その他大勢の生命と言っべきか？」

リーゼントヘアーの男、王国軍第四魔戦部隊隊長シュガーボーイが



そう言った。

「へへっ、細けえ事はいいんだぜシュガーボーイ、俺が言いてえのは、とにかくスゲエって事さ」

「ん〜」

「良いか？俺の言うスゲエは半端なスゲエじゃねえ！超スゲエって事！」

「ん〜超スゲエ」

「エルザちゃん、フェアリーテイルはまだ殺れんのでしゅかな？」

妖怪みたいな男、王国軍幕僚長のバイロがエルザに話しかけてきた。

「バイロ…」

「ぐしゅしゅしゅ、妖精狩りの名が廃りましゅなあ。残るギルドはもはやフェアリーテイルのみ、確かに一番逃げ足の速いギルドでしゅがね、陛下はそろそろ結果を求めておいでだ」

「……………」

「オッソッソッソッソッ！」

高笑いと共に現れたのは、王国軍特殊魔戦部隊隊長リル、通称魔戦女王のリルだった。

「エルザさん？貴女のような庶民に任せてたらいつになるのやら分かりませんわ」

「お前も相変わらずだなリル…」

「まあまあそう慌てんな、女神が妖精を狩り尽くす日は近い」

「そうだよ！エルザの剣はスゲエっつーか、スゲエんだよ！」

「だと宜しいのですが？」

「ぐしゅしゅしゅ」

「その不気味な笑いは止めろ！バイロ！」



続けるだろうか？」

「その点はアギト、お前は賢い選択をしたな」  
「ふん」

アギトも去って行った。

「さっきから解つかんねーよ！？スツゲエ難しい話してるだろ！  
？全然解んね！」

この時バイロは、怪しげに微笑んでいた。

エドラス、王都、謁見の間

「陛下〜！陛下〜！陛下〜！」

謁見の間をものすごい速さ、しかも裸足で走っている少女、王国軍幕僚長補佐のココだった。

「予定通り、4日後には、あの巨大ラクリマから魔力を抽出出来る  
との事です！やりましたね！」

「…足りんな」

「ほへ？陛下、今なんと？」

「あれでは足りぬと言っておる」

「お言葉ですが陛下！あのラクリマは、アースランドの魔法都市一  
つ分の魔力なのですよー！この先10年相当の我が国の魔力として  
利用できるのですよー！」

ココはそう言いながら謁見の間を走り回っていた。

「我が偉大なるエドラス王国は、有限であってはならぬのだ」  
「？」

「寄こせ…もつと魔力を寄こせ…ワシが求めるのは永遠！永久に尽きぬ魔力！！」

そして、マグノリアをラクリマに変えた張本人、エドラス王ファウストがそう叫んだ。

サイドエンド

エドラス、砂漠地帯

俺達は王都に向けて歩きだしていた。

ナツがカエルみたいな生き物を捕まえようとしていた。

「よゝし…動くなよゝ…とらあ！」

捕まえられずに逃げられた。

「待てー！」

「何やってんのよアンタ…」

ナツの行動に呆れるシャルル。

「王都まではまだまだかかるのかな？」

「さっき出発したばかりじゃない！」

「5日は歩くって言ってたよね」

「まだまだかかるといふ事ね」

「先は長いですね…」

「何か、エーラの調子も悪いし、歩いて行くしかないわね…」

「オイラ達、本当に魔法使えなくなっちゃったの？」

「いつも飛んでたからね…」

「解らない、先が思いやられるわ…」

これからの事について悩むシャルルだった。

「つかナツ、そんな力エルを追っかけてないで先に進もうぜ」

「良いじゃねえかよ、これ見た事無い力エルだぞ！ルーシィのお土産にしようぜ！」

「（オイラ・僕）、喜ばないと思うよ」「」

ハッピーとルシアは突っ込んだ。

「んがっ!?!」

するとナツが、何か柔らかい何かにぶつかつた。

「あっ!?!」

「どわーーーーっ!?!」

「でかつ!?!」

「大き過ぎですよアレ!?!」

「大きな力エルね」

すると巨大カエルは、俺達を襲おうとした。

「ナツ、襲いかかってくるよ!?!」

「よーし!?!」

ナツは攻撃態勢に入ったが、

「火竜の…あ!?!」

魔法が使えない事を思い出したので、

「忘れてたー!?!魔法が使えねえんだー!?!」

俺達は逃げ出した。

「…うわぁあああつ!?!」「」

「やっぱり、私の魔法も使えません!?!」

「魔法が使えないってだけでこつも違うのかよ!?!」

「追い付かれるわね」

「くつ、こつなつたら…魔法なんて使えなくてもやっつてやりあー!」

ナツがカエルに殴りかかるが、柔らかい腹の所為で効果が無い上に、腹でナツを弾き飛ばした。

「どわぁー!?!」

「ナツー!?!」

飛ばされたナツを捕まえようとする巨大カエル。

「…あー!?!」「」

「ナツ!?!」

「まずいわね」

その時、

「どりゃあぁー！！！」

エドルーシイが魔法の鞭でカエルを打った。

「おお！」

「「怖いルーシイ！」」

「「怖いルーシイさん！」」

「いちいち怖いとか付けんな！」

こっちのルーシイも突っ込むんだな。

よし、折角だからダイアルを使ってみるか！

ギアスは、左手の手袋に仕掛けてあるダイアルを、起き上がろうとしているカエルに付けた。

インパクト  
「衝撃！！！」

その瞬間、カエルがものすごい勢いで吹っ飛んだ。

いつてえ！？何だこの衝撃インパクトダイアル貝！？腕が捻じれる様*い*てえ…。

「うおっ！？ギアス、何だ今のは！？いつの間に魔法が使えたんだ！？」

「違いよ、この手袋に仕掛けてある物を使っただけだ」

「何でそんなの持ってたんだよ？」

「俺が作ったやつをそのままポケットに入れたままだったからな」

ナツは何となく納得した様な顔をした。

「大した事ない奴だな」

「でも何でアンタが？」

ルーシイは照れながら顔を背けた。  
するとナツの方を見ると、

「っ！心配してる訳じゃねーからな」

顔を赤くして素っ気ない態度で言った。  
なるゝほゝどゝ、こっちのルーシイはゝ、ナツにでえきてえるゝ  
な感じか？

「何だかんだ言っても、やっぱりルーシイだなお前」

「どんな纏め方だよ!？」

「そーゆう突っ込みとか」

「（アースランドの）ルーシイにこんな怖いルーシイ見せたいね」

「どんな顔すんだろうな本物は」

「アタシはニセモンかい!」

「「ぶがつ!？」」

ナツの失言により、ルーシイの回し蹴りを喰らった。

「技の十二、ボキバキブリッジ!」

「ぎゃあああああゝゝゝゝゝ!?!？」

「やっぱり怖い……」

「これが5日も続くのかしら…先が思いやられるわ、まったくもう  
…」

取り合えずエドルーシイと一緒に王都に向けて出発しました。

「そっか、エクシードと思われて、それで通報されて奴らが嗅ぎつ



けたのか」

「エルザが敵だなんてまだ信じられないよ」

「彼女の実力が私たちの知ってるエルザと同じなら、相応の覚悟は必要みたいね」

「いや、怖いのはあっちもこっちも一緒だけだな」

「ああ？」

「あつ！？いやいやエルザの話！？」

「アタシ達からすれば、エルザと仲良くやってる話の方が信じられないよ」

「不思議ですね」

アースランドのエルザ エドラスのエルザ  
妖精女王と妖精狩りだしな。

「あいつを恐れない魔導士なんていない、顔を見た時は死ぬ時だ」

「ぜってえ会いたくねえ…ただでさえ怖えのに…」

すると、街が見えてきた。

「ほら着いたよ、見えるか？」

「おお！」

丸い建物が並ぶルーエンの街に着いた。

「街だぞハッピー！」

「何日も歩くのは大変だったね」

何日って、まだ1日しか経ってないぞ？

「何か丸いですね？」

「そう言えばそうですね」

「角の部分が全部丸くなってるわね」

「こっちの街は結構変わってるんだな」

「さ、急ぎましょ」

「あの、来てくれて助かりました！」

「！？つ、付いて来な、魔法の武器も持たずにこの先旅を続けんのは無理だからな」

さっきから思ってたんだが、エドルーシイってツンデレだよな。

「ありがとよ、怖いルーシイ！」

「怖いルーシイ！」

「ケンカ売ってんのかコラー！」

ともかく、ルーエンの街に向かった。

エドラス、ルーエンの街

「ちょっと前までは、魔法は普通に売買されてたんだ。けど、王国のギルド狩りがあつて、今は魔法の売買は禁止されている。それどころか、所持してるだけでも罪になるんだ」

エドルーシイからエドラスについて話してくれた。

「つーか、所持してるだけで罪って…」

「元から使える人はどうなるんですか？」

「えっ？どうって、魔法を手放せば良いだけだろ？つーか、魔法を元から使える人って何だよそれ？」

「……！？」

そういやこっちの連中は皆魔力が無いんだっただな。  
シャルルの話だと、魔力のこもった物を使用する者を魔導士と呼んでるらしい。

「こっちの魔導士って、魔法の道具使うだけなのか？」

「さあ？」

「要は、エドラスの魔導士は全員ホルダー系の魔導士って事じゃないのか？」

「……なるほど」「……」

「確かにそう考えれば納得しますね」

「不思議ね」

するとエドルーシィは、目的の場所に着いた。

「着いたよ。この地下に魔法の闇市がある、旅をするなら必要だからね」

「闇市……」

「なんかこっち……後ろめたい事をしようとしてる感じがしますね……」

「私は気にしてないわ」

「そりゃ離瑠は元闇ギルドだからな」

「しょうがねえ、こっちのルールに則って魔法使うか」

「あい！」

「らっ！」

「順応……早いわね……」

俺達は闇市のある地下へと降りて行った。

ルーエンの街、闇市

骨董品みたいなのが多くありそうな店に入った。

「うわー、何か怪しい物がいっぱい並んでる」

「てゆうーがこの店、何かカビ臭いわね」

「あはは、そら何てったって、歴史深い骨董品が多いですからね。カビとか傷とか臭いとか、いわゆる味と言っちゃつですよ、お客さん」

胡散臭いな…。

「味なんてどうでもいいんだよ、大事なものは使えるかどうか。結構パチモンも多いから、買う時は良く点検しな」

確かにそうだろうけどよ。

「色々ありますね」

「私に合いそうな物あるかしら？」

「よおオヤジ、炎系の魔法は？」

「ははは、それでしたら最高の物がありますよ」

そう言っただ店主は、柄と取っ手部分だけの赤い剣を取り出した。

「こちら何かいかがでしょう？」

何かオモチヤみたいだな。

「エドラス魔法、封炎剣！」  
ふうえんけん

カートリッジにラクリマを埋め込む店主。

「ここをこつやつて…ほら！すごいでしょ？」

柄から炎が出た。

てかしょぼいな…あれじゃ松明みてえだな。

「しょぼい炎だけど無いよりはマシか」

「お客様お目が高い！」

ナツは封炎剣に決めた様だ。

「私、これが良いです」

ウエンディちゃんが持ってきたのは、青い水筒みたいな物だった。

「何処が良いの？」

「小さくて可愛いじゃない？」

「あのね…そうゆう基準で選んじゃダメでしょ」

可愛いよウエンディちゃん！

「これは空裂砲くわつぱうと言いましてな。外見はただの可愛い小箱ですが、ここをこつして少し開ければ…」

店主は筒を少し開くと、辺りに風が吹いた。

「わ〜風の魔法だ！何かロマンチック〜」

「お客様お目が高い！」

風になびくウエンディちゃんも良い！店主ナイス！

「これって、銃なんですか？」

クルスが水鉄砲の様なポンプアクション式の小型銃を持ってきた。

「これは圧水銃あつすいじゆうと言いましてな、ここを何回か引いて引き金を引くと…」

壁に向けて撃つと、水の弾が発射されて、壁に小さな穴が開いた。

「この様に水の銃弾を撃つ事が出来ます」

「水系の銃ですか…じゃあそれにしようかな？」

「お客様お目が高い！」

さつきから店主それしか言っていないか？

「ねえ、この手袋は何かしら？」

「これは念土手ねんどてと言いましてな、これを付けて地面に付けると…」

念土手を付けた店主が地面に手を付けると、土が念土手に集まって、手の形になった。

「この様に手に土が付き、そして念じれば形を変える事も出来ますよ。念じ方次第では剣になったり盾になったりと、自由自在に土を操れます」

「なるほど、それにするわ」

「お客様お目が高い！」

また言ったよ…。



ナツがエドルーシイに頼むと、何故かエドルーシイが赤くなった。くそう、魔法が使えりゃエドルーシイの考えなんて解るのになあ……。まあ原作じゃエドルーシイは高圧的な奴に弱い所があったからな。

「どうかしたのか？」

「！？まあいい、ここはアタシが奢ってやるよ！」

すると店長は慌てだした。

「いえいえ！？ルーシイ様からお金を貰う訳にはいきません！」

「……………」

「以前ガサ入れされた時に、助けてもらいましたからな」

「まああれしきの事、どうって事ないさ」

「とにかく、これは私めからのプレゼントという事で」

「んじゃ、遠慮なく頂くよ」

「ありがとよ、おっちゃん」

「何か悪いな」

「ありがとございます」

ウエンディも離瑠もお辞儀をして店から出た。

ルーエンの街

「あつちのルーシイと違って、怖いルーシイは頼りになるね」

「だから怖いを付けるなって！」

「しかも、ここらじゃ結構「顔」って感じたもんな」

「ホント助かりました」



「ところでさあ……」

「……………」

「あつちのルーシイって奴の話に、興味があるんだけど……」

取り合えず休憩できる所に行つてアースルーシイの事を話した。

「あはははははっ！あーはっはっはっ！アタシが小説書いてんの？  
ひゅっ（笑）、そんで、お嬢様で、鍵の魔法使つて……あーはっはっ  
はっ！」

アースルーシイの事を話したら、大笑いし始めたエドルーシイ。

「やかましいトコはそっくりだな」

「やかましい言うな！」

さすがルーシイ、すぐに突っ込んだよ。

「そんでレビイとは大の仲良しだよ」

「うえっ……あいつと仲が良い何て……想像できねえな……」

心底嫌そうだなエドルーシイ……。

「さつき買ったコレ……どう使つんだっけ？」

「バカ！？人前で魔法を見せるな！」

「あうっ！？」

シユンとするウェンディちゃんも良いな。

「今現在、魔法は世界中で禁止されてるって言っただろ」

「ごめんなさい……」

「でも元々魔法は生活の一部だったんでしょ？」

「そうだよ。王国の奴等、アタシたちから文化を一つ奪ったんだ…」

「何の為に？」

「自分たちだけで独占する為だよ」

その独占で俺らの世界にまで迷惑がきてるってか。

「じゃあ、王国の奴等やっつければ、また世界に魔法が戻ってくるかもな」

「な、何バカな事言ってるんだよ！？王国軍となんか戦える訳ねえだろ！」

「だったら、何で付いてきたんだ？」

「それは…王都までの道を教えてやるうと…戦うつもりなんか無かつたんだ」

「そっか、ありがとな」

「っ！…？」

エドルーシイが何か悩み始めたな？

その時、

「いたぞ！」

「街の出入り口を封鎖しろ！」

王国軍の兵士が大勢現れた。

「王国軍！？」

「ええっ！？」

「フェアリーテイルの魔導士だな？」

「そこを動くな！」

「もうバレたの！？」

「そんな、早過ぎるよ!?!」

「手が早い連中ね」

「うええ!?!」

すぐに包囲されてしまった。

「良し、早速さつき手に入れた魔法で…」

「止せ!?!」

「行くぞー! ファイアー!!」

ナツは封炎剣を展開させた。

「シャルル、コレどうやって使うんだっけ!?!」

「知らないわよ!?!」

ウエンディちゃんは使い方が解ってないみたいだな。でも可愛い。

「この…「シュコシュコシュコ…」…何か、手順がめんどくさいよコレ…」

クルスは銃を装填する為にポンプを一生懸命動かしていた。

「…意外と多く集まらなもののね」

離瑠は念土手で土を集めたが、手の3倍ほどの大きさ(約50cm程)しか集まらなかった。

「ははははは…っあ?」

すると兵士は、左手の甲の部分に仕込んであったラクリマを展開し



「」「うああああ!!?」「」  
「ウエンディちゃんは意外とドジっ子だったか?」  
「言ってる場合ですかギアスさん!?!」

竜巻に巻き込まれて吹っ飛ばされた俺達は、一先ず空家で身を隠す事にした。

「何とか撒けたけど、このままじゃ街を出られないよ」

「不便だなあこっちの魔法…」

「「ですね」」

「今まで気兼ねなく使ってたアースランドが恋しくなるよ」

「うん…」

「どうしよう…」

「このままじゃ捕まっちゃうよ…」

「別の出入り口無い?」

「難しいな」

しばらく悩んでると、

『いたぞ!フェアリーテイルだ!』

ギクッ x 9

皆は見つかったと思い伏せていると、

『放してよ…!』

「あれ?」

皆は空家のドアから少し開けて覗くと、そこにいたのは、



「ワイアー！」

「コッコッココ！？」

皆はスコープオンが出てきた事に驚いてるな。

「サンドバスター！！」

スコープオンの攻撃により、王国軍が吹き飛んだ。

「魔法！？」

「何で！？」

「ルーシイさんだけ！？」

「使えてる！？」

「こ、これは！？」

ナツ達はルーシイが魔法を使った事に驚愕していた。

「ルーシイ！」

「！？皆、会いたかつた〜！」

「何がどうなってるんだ…！」

「ん？」

ルーシイはエドルーシイを見た。

「あたしーーーーっ！！！？？」

そりゃ自分にそっくりな奴がいたら驚くよな…。

## 希望の鍵（後書き）

エドラスのルーシィの一人称を「アタシ」にしました。

エド離瑠の方は、特務魔戦部隊にしました。

そしてかなりのSにしました。

一言で言うなら、恋姫の袁紹の様な性格にした感じ。

クルスの圧水銃と離瑠の念土手はオリジナルです。

次回はエドナツと情報屋とプリズレイヤー？です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2434r/>

---

フェアリーテイル～虹の滅竜魔導士～

2011年12月11日16時50分発行